静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集

富士山・愛鷹山麓の古墳群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市－４

船津Ｌ-第171号墳（第二東名No.39地点）

須津古墳群（第二東名No.45地点）

間門松沢第１号墳（第二東名No.52地点）

鵜無ヶ淵・間門Ｅ-第６号墳（第二東名No.52地点）

不動棚遺跡（第二東名No.52地点）

松坂遺跡（第二東名No.53地点）

２０１０

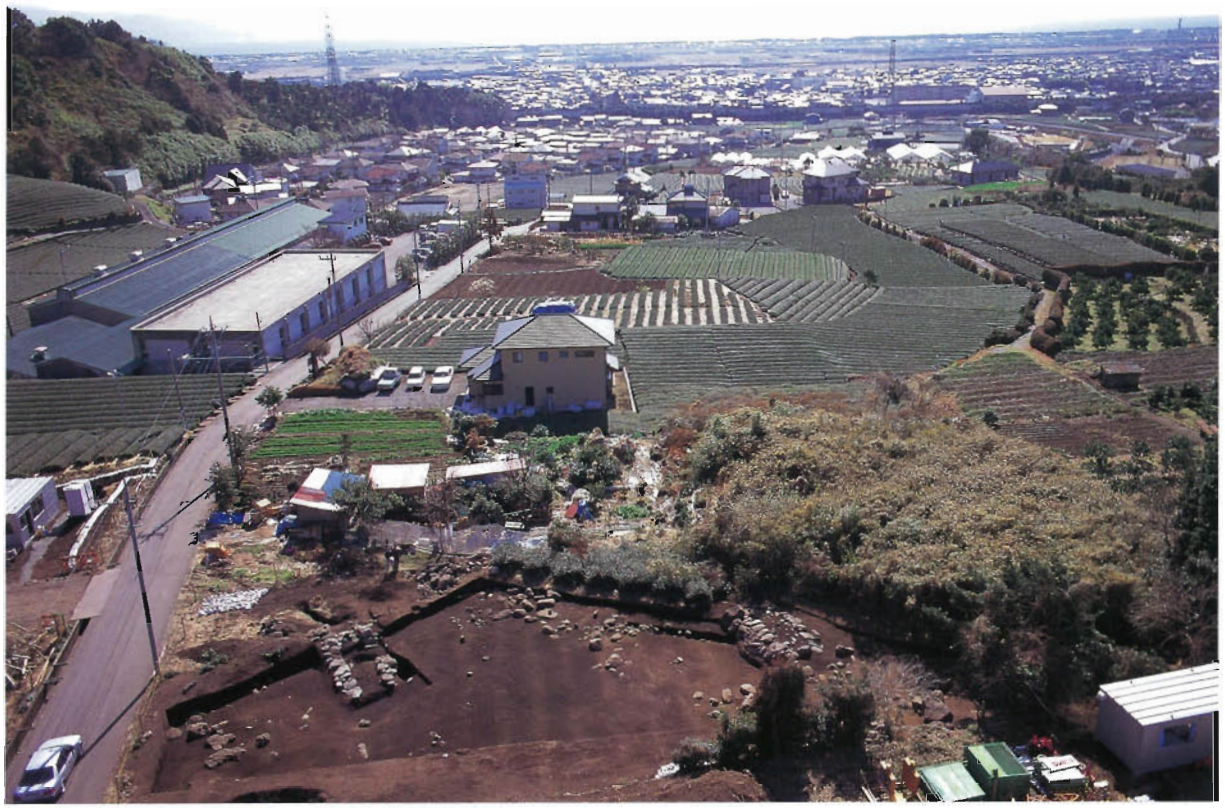
中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

1. 船津L-第171号墳全景（南から）

2. 船津L-第171号墳横穴式石室（西から）

巻頭図版２　須津古墳群



1. 須津J-第６・118号墳遠景（北から）

2. 須津J-第６・118号墳全景（北から）

1．須津J-第118号墳横穴式石室（南東から）

2．須津J-第６号墳横穴式石室（南から）

巻頭図版４　須津古墳群

須津J-第６号墳出土遺物

1．須津J-第159号墳遠景（南東から）

2．須津J-第159号墳横穴式石室（南東から）

巻頭図版６　須津古墳群

須津J-第159号墳出土遺物

1．間門松沢第１号墳全景（南西から）

2．間門松沢第１号墳第１～３埋葬施設（東から）　左から第３・第１・第２埋葬施設

巻頭図版８　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳，不動棚遺跡

1．鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳横穴式石室（南東から）

2．不動棚遺跡出土主な縄文土器

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集

富士山・愛鷹山麓の古墳群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市－４

船津Ｌ-第171号墳（第二東名No.39地点）
須津古墳群（第二東名No.45地点）
間門松沢第１号墳（第二東名No.52地点）
鵜無ヶ淵・間門Ｅ-第６号墳（第二東名No.52地点）
不動棚遺跡（第二東名No.52地点）
松坂遺跡（第二東名No.53地点）

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

富士市は船津古墳群や須津古墳群など、全県的にも非常に多くの古墳が確認される地域です。このうち第二東名の対象地となった船津古墳群、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門古墳群で、古墳時代後期から終末期の計５基の横穴式石室を埋葬施設とする古墳の調査を行いました。それぞれが小規模な円墳で、埋葬施設では駿河東部地域に特徴的な段構造の無袖形石室が確認されました。副葬品としては馬具が３基の古墳から出土したこと、全国的に見ても副葬されることが少ない針が出土した点が注目できます。

間門松沢第１号墳は、東駿河地域では古墳の築造が停滞する古墳時代中期前半の古墳であることがわかり、東駿河の古墳時代の様子を知るために非常に重要な発見となりました。また、今後さらなる検討を行わなければなりませんが、前方後円墳や前方後方墳を意識した地形改変を行っている可能性があることも注意する必要があります。さらに埋葬施設からは刃関双孔という孔が開けられた珍しい鉄剣が出土したことが注目されます。

不動棚遺跡、松坂遺跡では、遺構は少なかったのですが、縄文時代早期～晩期に亘る土器・石器が多く出土しました。特にこれまで富士市域ではほとんど遺跡が確認されず様相が不明確であった縄文時代後期の堀之内式土器や加曽利Ｂ式土器が出土した点が注目できます。

今後は、調査担当者が調査成果およびそれを基礎に分析した考察に対して批評を願うとともに、本資料を活用したさまざまな視点での議論が行われることを期待します。

なお、本書は第二東名富士工区の最後の報告書となりました。現地調査および整理作業、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社(旧日本道路公団)、静岡県教育委員会、富士市教育委員会、富士市博物館、地元自治会をはじめとする多くの関係諸機関・各位にご援助、ご理解をいただきました。この場を借りて深くお礼申しあげます。また、現地での発掘作業、地道な整理作業に従事された方々に、厚くお礼申し上げます。

平成22年11月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　石　田　　彰

例　　言

1　本書は、静岡県富士市内に所在する船津L-第171号墳、須津古墳群（須津J-第6・118・159号墳）、間門松沢第1号墳、鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳、不動棚遺跡、松坂遺跡の報告書である。

所在地は下記の通りである。

船津L-第171号墳	富士市船津字矢川上582
須津古墳群（J-第6・118・159号墳）	富士市神谷字大塚865-4・866ほか
間門松沢第1号墳	富士市間門字松沢89-2・90ほか
鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳	富士市間門字不動棚203-6・203-17
不動棚遺跡	富士市間門字不動棚95-1・9－1
松坂遺跡	富士市神戸字松坂601-1・695ほか

2　第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（旧市町村）単位にて実施している。富士地区では本書が4冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書富士市－4」とした。

3　発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課（平成21年度まで）、文化財保護課（平成22年度）の指導のもと、富士市教育委員会、富士市立博物館の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　現地調査・資料整理の期間と担当者は調査体制で記載する。

5　本書の挿図・図版の作成は主に田村隆太郎が平成20年度に編集・作成し、大谷宏治が平成22年度に一部を編集・作成した。また、報告書の執筆は、調査担当者の調査所見をもとに大谷宏治のほか、第4・5・7～9章の縄文時代の石器を柴田亮平、第10章第1節2を杉山和徳が行った。

6　現地の写真撮影は、各担当者が、遺物の写真撮影は田村隆太郎、大谷宏治のほか当研究所写真室が行った。

7　金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室（西尾太加二，大森信宏）が実施した。

8　本書の作成にあたり、須津古墳群の人骨鑑定について、京都大学名誉教授　片山一道氏の指導を受けた。また、間門松沢第1号墳出土の鉄剣について、文化庁文化財部美術工芸課　豊島直博氏に指導を受けた。

なお、人骨鑑定の報告については、片山氏の鑑定を大谷が執筆し、片山氏が加除修正を行った。

9　石器石材の同定については、静岡大学名誉教授　伊藤通玄氏の指導を受けた上で、当研究所職員との検討を経て、柴田亮平、森島富士夫が行った。

10　調査の概要については、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、本書と内容が異なる場合は本報告をもって訂正する。

11　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（担当　大谷宏治）が行った。

12　発掘調査における指導・助言および協力者は第11章末に記した。

凡　　例

1　本書で用いる国土座標は、原則として日本測地系（旧測地系）である。なお、調査地点等の緯度経度は、国土地理院ホームページにおいて世界測地系におけるおおよその緯度経度を確認し、記載している箇所もある。世界測地系の緯度経度を用いる場合にはその旨を本文中に明記した。

2　土色は小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修1999『新版標準土色帖』(22版）に基づいて分類したが、一部確認調査に引き続いて本発掘調査を実施した遺跡についてはこれに準拠していないものもある。

3　本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

SK　土坑

4　本書で用いる古墳および埋葬施設の名称については下記のとおり定義し、部位および計測位置については、第1図に示した。

（1）古墳

墳形　円墳　石室などの形状に合わせ主軸側が長い楕円形墳、やや不整形な円墳を含む。

墳丘　第一次墳丘　横穴系埋葬施設において墳丘を段階的に造成する場合、埋葬施設を覆う墳丘の中核となる盛土。

第二次墳丘　横穴系埋葬施設において第一次墳丘を覆う盛土。これをもって墳丘は完成する。

葺石　墳丘の斜面部を礫で覆った施設。

外護列石　古墳墳丘裾（墳裾）あるいは段築がある場合、各段の裾に積載された石列で、一段から数段積載されるもの。

墳丘内石列　墳丘の構築段階で積載された石列で、墳丘完成時には墳丘内に全部あるいは一部が取り込まれたもの。

周溝　墳丘を区画するために掘削された溝。

削り出し　斜面を削り出して成形することにより、古墳と周囲を区画するもの。

（2）埋葬施設

木棺直葬　古墳の内部に構築された墓壙に木棺を直接埋葬するもの。

箱形石棺　横穴式石室内に板石を用いて棺を造りつけるもの（造付箱形石棺）。

なお、沼津市長塚古墳のように箱形石棺を埋葬施設とするものについては箱形石棺直葬と表記する。

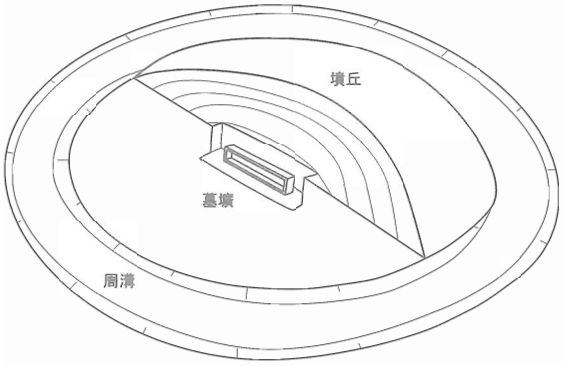
横穴式石室　古墳の内部に掘削された墓壙に、石材を用いて玄室などを構築するもの。

墓道　埋葬施設へ至る通路部分。

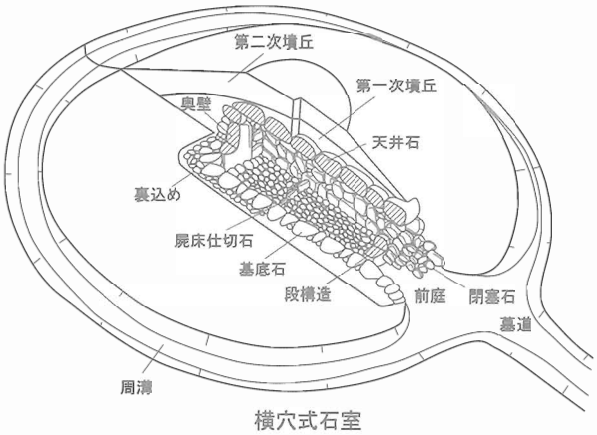
裏込め　横穴式石室を構築する際、または木棺を墓壙内に据える際、石材・木材と墓壙との間に充填された土砂。

段構造（框石）　前庭あるいは墓道から1段下がって玄室に入る横穴式石室の、この段の部分。特に石材を用いている場合は框石と呼称する。

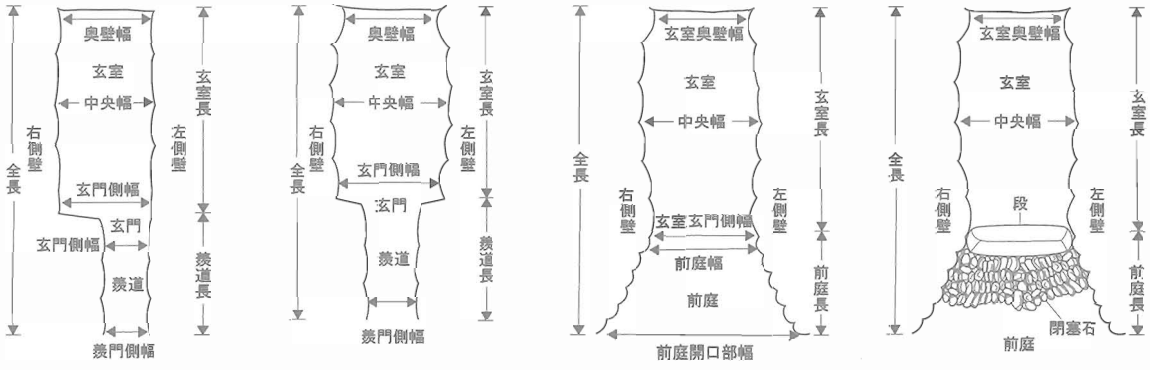
東駿河地域では「前壁」と呼称される場合があるが、横穴式石室研究で意味するところの前壁とは異なることから、本書では「前壁」は使用しない。



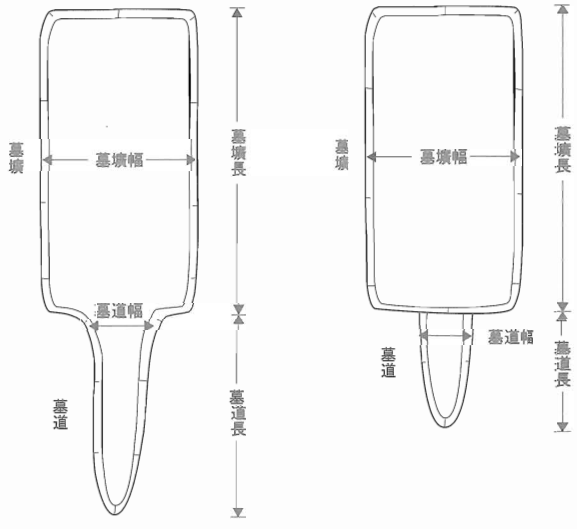
木棺直葬



横穴式石室



石室の形態



墓壙の形態

第１図　古墳および埋葬施設の部位名称および計測位置

基底石　横穴式石室を構築するにあたり最下段に据えられた石材。

無袖形石室　袖が形成されないもの。無袖形は、系譜関係の判断が難しく、「型式」として区分できないため、袖がないものを一括して「無袖形」とする。

なお、本報告では、横穴式石室の場合、奥壁側から玄門側（入口）をみて、右側を右側壁、左側を左側壁とする。

有袖形石室　羨道が形成され、玄室と羨道との間に明瞭な屈曲や石材の突出があるもの。片袖形、両袖形、疑似両袖形がある。

片袖形　袖が片側のみ内側に折れ、羨道はその幅のまま、あるいはやや広がるもの。

両袖形　袖の両側が内側に折れ、羨道はその幅のまま、あるいはやや広がるもの。

疑似両袖形　玄門を有するが、玄門が内側に突出するもの。

竪穴系横口式石室　横穴式石室の影響を受けて、竪穴系埋葬施設に横口が取り付けられたもの。

玄室の平面形　**長方形**　玄門側、中央部、奥壁側の幅がほぼ等しいもの。

胴張形　玄門側、奥壁側に比べて中央の幅が広く、側壁が弓なりを呈するもの。

5　横穴式石室の本発掘調査においては、大部分の古墳で二面の床面が確認されたため、調査時にはじめに確認された面を第1面、次に確認された面を第2面とする場合と、築造当初の面を第1面、追葬面を第2面としている場合があった。本書では混乱を避けるため、第1・2面という表記は用いず、上面・下面として区分した。

6　出土遺物については、須恵器は断面を黒塗、縄文土器・弥生土器・土師器は白抜き、陶磁器については灰色の網掛とした。

7　石器の表記については、次のとおりである。

8　参考文献は、第1～9章については第9章末（153・154頁）に記載した。第10章については、各項で記載した。

9　註は、第1～9章については各章末にまとめて掲載した。第10章については、各項で記載した。

10　遺物の番号は、各古墳（群）・遺跡ごとに1番から順に番号を付加した。

目　　次

序……i
例言……ii
凡例……iii
目次……vi
挿図目次……ix
挿表目次……xi
写真目次……xii
図版目次……xiii

第1章　調査に至る経緯……1

第2章　調査の方法と経過
1．調査の方法……2　2．確認調査および本発掘調査の体制……3
3．確認調査および本発掘調査の経過……4　4．資料整理および報告書作成の体制……5
5．資料整理の経過……6　6．保存処理の経過……6

第3章　遺跡の位置と環境
第1節　地理的環境……8
1．地理的位置……8　2．地理的環境……8　3．地質の様相……9
第2節　歴史的環境……11
1．旧石器時代……11　2．縄文時代……11　3．弥生時代……11
4．古墳時代……14　5．奈良・平安時代……15　6．中世……15
7．東駿河地域における古墳の分布について……15

第4章　船津古墳群
第1節　船津古墳群の概要……18
1．船津古墳群の概要……18　2．船津古墳群の調査歴……19
第2節　調査の体制と経過……22
1．確認調査および本発掘調査の体制……22　2．確認調査および本発掘調査の経過……22
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……22
第3節　船津L-第171号墳の調査成果……23
1．古墳の現況……23　2．墳丘の構造……23　3．埋葬施設の構造……24
4．遺物の出土状況……26　5．出土遺物……26　6．小結……29
第4節　古墳に伴わない遺物……30
1．石器……30　2．縄文土器……31　3．古代以降の土器・陶器……31

第5章　須津古墳群
第1節　須津古墳群の概要……32

1．須津古墳群の概要……32　2．須津古墳群の調査歴……34
第2節　調査の体制と経過……36
1．確認調査および本発掘調査の体制……36　2．確認調査および本発掘調査の経過……36
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……36
第3節　須津古墳群の調査成果……37
1．須津J-第6号墳……37　2．須津J-第118号墳……54
3．須津J-第159号墳……59　4．古墳に伴わない遺物……76
5．須津古墳群出土遺物観察表……77　6．人骨鑑定について……82

第6章　間門松沢第1号墳
第1節　間門松沢第1号墳の概要……85
1．間門松沢第1号墳について……85　2．間門松沢第1号墳の位置……85
第2節　調査の体制と経過……88
1．確認調査および本発掘調査の体制……88　2．確認調査および本発掘調査の経過……88
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……88
第3節　間門松沢第1号墳の調査成果……89
1．古墳の現況……89　2．墳丘の構造……90　3．埋葬施設の構造……90
4．遺物の出土状況……93　5．出土遺物……93　6．小結……94

第7章　鵜無ヶ淵・間門古墳群
第1節　鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要……96
1．鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要……96　2．鵜無ヶ淵・間門古墳群の調査歴……96
第2節　調査の体制と経過……98
1．確認調査および本発掘調査の体制……98　2．確認調査および本発掘調査の経過……98
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……98
第3節　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳の調査成果……99
1．古墳の現況……99　2．墳丘の構造……99　3．埋葬施設の構造……99
4．遺物の出土状況……101　5．出土遺物……101　6．小結……104
7．鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳出土遺物観察表……106

第8章　不動棚遺跡
第1節　不動棚遺跡の概要……107
1．不動棚遺跡の概要……107　2．不動棚遺跡の調査歴……107
第2節　調査の体制と経過……109
1．確認調査および本発掘調査の体制…109　2．確認調査および本発掘調査の経過……109
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……109
第3節　不動棚遺跡の調査成果……110
1．調査区の位置と概要…110　2．基本土層……110　3．縄文時代の遺構……110
4．縄文時代の遺物……112　5．古墳時代以降の遺物…130　6．出土遺物観察表……132
第4節　不動棚遺跡の評価……134

第9章　松坂遺跡

第1節　松坂遺跡の概要……135
1．松坂遺跡の概要……135　2．松坂遺跡の調査歴……135
第2節　調査の体制と経過……137
1．確認調査および本発掘調査の体制…137　2．確認調査および本発掘調査の経過……137
3．資料整理・報告書作成、保存処理の経過……137
第3節　松坂遺跡の調査成果……138
1．調査区の位置と概要……138　2．基本土層……138
3．縄文時代の遺構……139　4．縄文時代の遺物の出土状況……140
5．縄文時代の遺物……144　6．出土遺物観察表……151
第4節　松坂遺跡の評価……152

参考文献（第1～9章）

……153

第10章　富士山・愛鷹山麓の古墳群について

第1節　古墳時代中期の古墳について……155
1．東駿河における間門松沢第1号墳の位置……155
2．間門松沢第1号墳出土刃関双孔鉄剣について……159
第2節　古墳時代後期～終末期の古墳について……163
1．船津古墳群、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門古墳群における墓道の復原……163
2．富士山・愛鷹山麓における横穴式石室の位置づけ……168
3．須津J-第6号墳出土の鉄針について……172
4．船津古墳群、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門古墳群の馬具と武器について……177

第11章　結語

1．船津L-第171号墳……180　2．須津古墳群……180　3．間門松沢第1号墳……180
4．鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳‥181　5．不動棚遺跡……181　6．松坂遺跡……182

写真図版

抄録
奥付

挿 図 目 次

【凡例】

第 1 図　古墳および埋葬施設の部位名称および計測位置 …… iv

【第 3 章　遺跡の位置と環境】

第 2 図　富士市の位置と船津古墳群・須津古墳群ほかの位置 …… 8
第 3 図　船津古墳群・須津古墳群ほかの位置 …… 9
第 4 図　富士市の地質図 …… 10
第 5 図　富士市の主要遺跡分布図① …… 12
第 6 図　富士市の主要遺跡分布図② …… 13
第 7 図　東駿河の主要古墳分布図①（古墳時代前期～後期前半） …… 16
第 8 図　東駿河の主要古墳分布図②（古墳時代後期後半～終末期） …… 16

【第 4 章　船津古墳群】

第 9 図　船津L-第171号墳の位置① …… 20
第 10 図　船津L-第171号墳の位置② …… 21
第 11 図　船津L-第171号墳　墳丘測量図 …… 23
第 12 図　船津L-第171号墳　横穴式石室検出状況 …… 24
第 13 図　船津L-第171号墳　横穴式石室展開図 …… 25
第 14 図　船津L-第171号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図 …… 26
第 15 図　船津L-第171号墳　横穴式石室遺物出土状況図 …… 27
第 16 図　船津L-第171号墳　横穴式石室出土遺物実測図 …… 28
第 17 図　船津L-第171号墳の埋葬と副葬品の関係 …… 29
第 18 図　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない遺物実測図 …… 30

【第 5 章　須津古墳群】

第 19 図　須津古墳群の調査区の位置① …… 33
第 20 図　須津古墳群の調査区の位置② …… 35
第 21 図　須津J-第 6 号墳　墳丘測量図および周溝土層図 …… 37
第 22 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室検出状況図 …… 38
第 23 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室断面図 …… 39
第 24 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室実測図 …… 40
第 25 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図 …… 41
第 26 図　須津J-第 6 号墳　石棺実測図 …… 42
第 27 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室遺物出土状況図①（奥壁側） …… 44
第 28 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室遺物出土状況図②（玄門側） …… 45
第 29 図　須津J-第 6 号墳　出土土器実測図 …… 47
第 30 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室出土玉類および金属製品実測図① …… 49
第 31 図　須津J-第 6 号墳　横穴式石室出土金属製品実測図② …… 51
第 32 図　須津J-第 6 号墳の埋葬と副葬品の関係 …… 52
第 33 図　須津J-第118号墳　測量図 …… 54
第 34 図　須津J-第118号墳　横穴式石室検出状況図 …… 55
第 35 図　須津J-第118号墳　横穴式石室実測図 …… 56
第 36 図　須津J-第118号墳　横穴式石室段構造（框石）実測図 …… 57
第 37 図　須津J-第118号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図 …… 57
第 38 図　須津J-第118号墳　出土土器実測図 …… 58
第 39 図　須津J-第118号墳　横穴式石室出土刀子実測図 …… 58
第 40 図　須津J-第159号墳　墳丘測量図 …… 59
第 41 図　須津J-第159号墳　横穴式石室検出状況 …… 60
第 42 図　須津J-第159号墳　横穴式石室実測図① …… 61
第 43 図　須津J-第159号墳　横穴式石室実測図② …… 62
第 44 図　須津J-第159号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図 …… 63
第 45 図　須津J-第159号墳　横穴式石室遺物出土状況図① …… 64
第 46 図　須津J-第159号墳　横穴式石室遺物出土状況図② …… 65
第 47 図　須津J-第159号墳　横穴式石室人骨出土状況図 …… 66
第 48 図　須津J-第159号墳　出土土器実測図① …… 68
第 49 図　須津J-第159号墳　出土土器実測図② …… 69
第 50 図　須津J-第159号墳　横穴式石室出土玉類および金属製品実測図① …… 70
第 51 図　須津J-第159号墳　横穴式石室出土金属製品実測図② …… 71
第 52 図　須津J-第159号墳　横穴式石室出土金属製品実測図③ …… 72
第 53 図　須津J-第159号墳の埋葬と副葬品の関係 …… 75
第 54 図　須津古墳群出土の古墳に伴わない遺物実測図 …… 76

【第 6 章　間門松沢第 1 号墳】

第 55 図　鵜無ヶ淵・間門E古墳群、間門松沢第 1 号墳、不動棚遺跡の調査区の位置 …… 86
第 56 図　間門松沢第 1 号墳の位置 …… 87
第 57 図　間門松沢第 1 号墳　墳丘測量図 …… 89
第 58 図　間門松沢第 1 号墳　埋葬施設実測図 …… 91
第 59 図　間門松沢第 1 号墳　埋葬施設断面図 …… 92
第 60 図　間門松沢第 1 号墳　第 3 埋葬施設遺物出土状況図 92
第 61 図　間門松沢第 1 号墳　第 3 埋葬施設出土遺物実測図 93
第 62 図　間門松沢第 1 号墳　墳丘復原図 …… 95

【第 7 章　鵜無ヶ淵・間門古墳群】

第 63 図　鵜無ヶ淵・間門E-第 6 号墳の位置 …… 97
第 64 図　鵜無ヶ淵・間門E-第 6 号墳　周辺測量図 …… 99

第65図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室
検出状況図 …… 100
第66図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室実測図・101
第67図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室
基底石および墓壙実測図 …… 102
第68図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室
遺物出土状況図 …… 103
第69図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室出土
土器実測図 …… 104
第70図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室
出土玉類および鉄製品実測図 …… 105

【第8章　不動棚遺跡】
第71図　不動棚遺跡の調査区の位置 …… 107
第72図　不動棚遺跡で採取された縄文土器 …… 108
第73図　不動棚遺跡　基本土層図 …… 110
第74図　不動棚遺跡　調査区測量図 …… 111
第75図　不動棚遺跡　遺構実測図 …… 112
第76図　不動棚遺跡　遺物出土状況図 …… 113
第77図　不動棚遺跡　土器出土状況詳細図①(西側) …… 114
第78図　不動棚遺跡　土器出土状況詳細図②(中央・東側) 115
第79図　不動棚遺跡　石器出土状況詳細図①(西側) …… 116
第80図　不動棚遺跡　石器出土状況詳細図②(中央・東側) 117
第81図　不動棚遺跡　出土土器実測図① …… 118
第82図　不動棚遺跡　出土土器実測図② …… 119
第83図　不動棚遺跡　出土土器実測図③ …… 120
第84図　不動棚遺跡　出土土器実測図④ …… 121
第85図　不動棚遺跡　出土土器実測図⑤ …… 122
第86図　不動棚遺跡　出土石器実測図① …… 124
第87図　不動棚遺跡　出土石器実測図② …… 125
第88図　不動棚遺跡　出土石器実測図③ …… 126
第89図　不動棚遺跡　出土石器実測図④ …… 127
第90図　不動棚遺跡　出土石器実測図⑤ …… 128
第91図　不動棚遺跡　出土石器実測図⑥ …… 129
第92図　不動棚遺跡　出土土器実測図（古墳時代） …… 130
第93図　不動棚遺跡　出土遺物実測図（古代以降） …… 131

【第9章　松坂遺跡】
第94図　松坂遺跡の調査区の位置 …… 136
第95図　松坂遺跡　基本土層図 …… 138
第96図　松坂遺跡　調査区配置図および調査区全体図 …… 139
第97図　松坂遺跡　遺構実測図 …… 140
第98図　松坂遺跡　遺物出土状況図 …… 141
第99図　松坂遺跡　遺物出土状況詳細図①(2区) …… 142
第100図　松坂遺跡　遺物出土状況詳細図②(1・3・4区)・143
第101図　松坂遺跡　出土土器実測図① …… 146
第102図　松坂遺跡　出土土器実測図② …… 147
第103図　松坂遺跡　出土石器実測図① …… 148
第104図　松坂遺跡　出土石器実測図② …… 149
第105図　松坂遺跡　出土石器実測図③ …… 150

【第10章　富士山・愛鷹山麓の古墳群について】
第106図　東駿河地域における古墳の変遷 …… 156
第107図　東駿河地域における主要古墳の時期的分布 …… 158
第108図　刃関双孔鉄剣の諸例 …… 160
第109図　鵜無ヶ淵・間門古墳群における想定される
古墳へ至る道 …… 163
第110図　須津古墳群における想定される
古墳へ至る道 …… 165
第111図　船津古墳群における想定される
古墳へ至る道 …… 167
第112図　箱形石棺と屍床仕切石の分布 …… 168
第113図　今回調査した横穴式石室の比較図 …… 170
第114図　古墳出土の針 …… 173
第115図　針出土古墳分布図 …… 173
第116図　須津J-第6・159号墳副葬鉄鏃の相違 …… 177
第117図　茎が非常に細い大刀 …… 178

【第11章　結語】
第118図　船津古墳群、須津古墳群ほか今回調査した
6遺跡の時期的位置 …… 181

挿表目次

【第2章　調査の方法と経過】

第1表　確認調査および本発掘調査の体制…… 3
第2表　確認調査の経過…… 4
第3表　本発掘調査の経過…… 4
第4表　資料整理および報告書作成の体制…… 5

【第3章　遺跡の位置と環境】

第5表　地質図の凡例…… 10
第6表　富士市の主要遺跡地名表…… 14

【第4章　船津古墳群】

第7表　船津古墳群の主要古墳および調査された古墳一覧… 18
第8表　船津古墳群の調査歴…… 19
第9表　船津L-第171号墳　埋葬施設の規模…… 24
第10表　船津L-第171号墳　出土鉄製品観察表…… 28
第11表　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない石器観察表 31
第12表　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない土器観察表 31

【第5章　須津古墳群】

第13表　須津古墳群の主要古墳および調査された古墳一覧… 32
第14表　須津古墳群の調査歴…… 34
第15表　須津J-第6号墳　埋葬施設の規模…… 42
第16表　須津J-第6号墳　箱形石棺の規模…… 42
第17表　須津J-第118号墳　埋葬施設の規模…… 54
第18表　須津J-第159号墳　埋葬施設の規模…… 59
第19表　須津古墳群　出土土器観察表…… 77
第20表　須津古墳群　出土玉類観察表…… 78
第21表　須津古墳群　出土金属製品観察表…… 79
第22表　須津古墳群　出土石器観察表…… 81
第23表　須津古墳群　人骨鑑定結果…… 83

【第6章　間門松沢第1号墳】

第24表　間門松沢第1号墳　埋葬施設の規模…… 90
第25表　間門松沢第1号墳　出土玉類観察表…… 93
第26表　間門松沢第1号墳　出土鉄剣観察表…… 93

【第7章　鵜無ヶ淵・間門古墳群】

第27表　鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要…… 96
第28表　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　埋葬施設の規模…… 99
第29表　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　出土土器観察表…… 106
第30表　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　出土玉類観察表…… 106
第31表　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　出土鉄製品観察表… 106

【第8章　不動棚遺跡】

第32表　不動棚遺跡　出土土器・陶器観察表…… 132
第33表　不動棚遺跡　出土石器観察表…… 133
第34表　不動棚遺跡　出土銅銭観察表…… 133
第35表　不動棚遺跡　出土鉄砲玉観察表…… 133

【第9章　松坂遺跡】

第36表　松坂遺跡　出土土器観察表…… 151
第37表　松坂遺跡　出土石器観察表…… 151

【第10章】

第38表　東駿河地域の主要古墳の概要…… 155
第39表　刃関双孔鉄剣出土地一覧表…… 159
第40表　須津J-第6号墳とJ-第159号墳の比較…… 170
第41表　針状金属製品出土遺跡・古墳一覧表…… 172

写 真 目 次

【第２章　調査の方法と経過】

写真１　土器接合作業…… 6
写真２　土器復原作業…… 6
写真３　記録類図面整理作業…… 6
写真４　記録類版下作成作業…… 6
写真５　記録類トレース作業…… 7
写真６　出土品実測作業…… 7
写真７　出土品トレース作業…… 7
写真８　遺物写真撮影…… 7
写真９　報告書編集…… 7
写真10　保存処理作業…… 7

【第４章　船津古墳群】

写真11　重機による表土除去作業…… 22
写真12　人力による古墳周溝掘削作業…… 22
写真13　横穴式石室精査作業…… 22
写真14　横穴式石室実測作業…… 22
写真15　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない縄文土器… 31
写真16　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない
　　古代以降の土器・陶器…… 31

【第５章　須津古墳群】

写真17　横穴式石室精査作業…… 36
写真18　横穴式石室実測作業…… 37

【第６章　間門松沢第１号墳】

写真19　表土除去作業…… 88
写真20　墳丘土層実測作業…… 88

【第７章　鵜無ヶ淵・間門古墳群】

写真21　確認調査の様子…… 98
写真22　本発掘調査の石室精査作業…… 98
写真23　本発掘調査の石室解体作業…… 98

【第８章　不動棚遺跡】

写真24　確認調査の様子…… 109
写真25　本発掘調査の表土除去作業…… 109
写真26　本発掘調査の遺構検出作業…… 109
写真27　不動棚遺跡出土遺物…… 130

【第９章　松坂遺跡】

写真28　確認調査の様子…… 137
写真29　本発掘調査の包含層掘削作業…… 137

図 版 目 次

【巻頭図版】

1　1．船津L-第171号墳全景（南から）
　　2．船津L-第171号墳横穴式石室（西から）
2　1．須津J-第６・118号墳遠景（北から）
　　2．須津J-第６・118号墳全景（北から）
3　1．須津J-第118号墳横穴式石室（南東から）
　　2．須津J-第６号墳横穴式石室（南から）
4　須津J-第６号墳出土遺物
5　1．須津J-第159号墳遠景（南東から）
　　2、須津J-第159号墳横穴式石室（南東から）
6　須津J-第159号墳出土遺物
7　1．間門松沢第１号墳全景（南西から）
　　2．間門松沢第１号墳第１～３埋葬施設（東から）
8　1．鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳横穴式石室（南東から）
　　2．不動棚遺跡出土主な縄文土器

【写真図版】

【第４章　船津L-第171号墳】

図版１　1．L-第171号墳　全景（南から）
　　2．L-第171号墳　全景（西から）
図版２　1．L-第171号墳　全景（西から）
　　2．L-第171号墳　石室上面検出状況（西から）
図版３　1．L-第171号墳　石室下面検出状況（西から）
　　2．L-第171号墳　石室基底石（西から）
図版４　1．L-第171号墳　石室上面（南から）
　　2．L-第171号墳　石室上面（西から）
　　3．L-第171号墳　石室北側壁（南から）
　　4．L-第171号墳　石室南側壁（北から）
　　5．L-第171号墳　石室下面検出状況（西から）
図版５　1．L-第171号墳　石室奥壁（西から）
　　2．L-第171号墳　石室奥壁の裏側（東から）
　　3．L-第171号墳　石室奥壁の北側下部（南西から）
　　4．L-第171号墳　鉄製品出土状況（北西から）
　　5．L-第171号墳および周辺の出土遺物

【第５章　須津古墳群】

図版６　1．北からの遠景（１区：J-第６・118号墳）
　　2．北東からの遠景（２区：J-第159号墳）
図版７　1．１区全景（西から）
　　2．J-第６号墳（北から）
図版８　1．J-第６号墳　石室検出状況（南から）
　　2．J-第６号墳　石室上面検出状況（南から）
図版９　1．J-第６号墳　石室上面検出状況（南から）
　　2．J-第６号墳　石室上面検出状況（北西から）
図版10　1．J-第６号墳　石室下面検出状況（南から）
　　2．J-第６号墳　石室下面検出状況（北西から）
図版11　1．J-第６号墳　石室東側壁（南西から）
　　2．J-第６号墳　石室西側壁（東から）
　　3．J-第６号墳　石室段構造(框石)残存状況(南から)
　　4．J-第６号墳　石室段構造(框石)残存状況(東から)
図版12　1．J-第６号墳　石室基底石（南から）
　　2．J-第６号墳　石棺検出状況（東から）
　　3．J-第６号墳　石棺検出状況（南から）
　　4．J-第６号墳　石棺完掘状況（東から）
　　5．J-第６号墳　石棺完掘状況（南から）
図版13　1．J-第６号墳　石棺残存状況（北から）
　　2．J-第６号墳　石棺周囲北側上面（北から）
　　3．J-第６号墳　石棺周囲北側下面（北から）
　　4．J-第６号墳　石棺周囲北側下面（南から）
　　5．J-第６号墳　石室南半下面（東から）
　　6．J-第６号墳　石室北半下面（東から）
図版14　1．J-第６号墳　石室南半遺物出土状況（北西から）
　　2．J-第６号墳　石棺内人骨出土状況（南西から）
　　3．J-第６号墳　石室南西部勾玉出土状況（東から）
　　4．J-第６号墳　石室南東部玉類等出土状況(北から)
図版15　1．J-第６号墳　石室北東部鉄刀等出土状況(西から)
　　2．J-第６号墳　石室北西部鉄鏃出土状況（東から）
　　3．J-第６号墳　石室北東部刀子等出土状況(西から)
　　4．J-第６号墳　石室南東部轡出土状況（南東から）
　　5．J-第６号墳　石室南東部鉸具出土状況（北から）
図版16　J-第６号墳出土遺物①
図版17　J-第６号墳出土遺物②
図版18　J-第６号墳出土遺物③
図版19　J-第６号墳出土遺物④
図版20　J-第６号墳出土遺物⑤
図版21　J-第６号墳出土遺物⑥
図版22　1．J-第118号墳（南から）
　　2．J-第118号墳　石室検出状況（北から）
図版23　1．J-第118号墳　石室完掘状況（南から）
　　2．J-第118号墳　石室完掘状況（北から）
図版24　1．J-第118号墳　石室段構造（框石）除去後開口部の状況（南西から）
　　2．J-第118号墳　石室西側壁（東から）
図版25　1．J-第118号墳　石室段構造（框石）残存状況（北から）
　　2．J-第118号墳　石室段構造（框石）残存状況（北西から）
　　3．J-第118号墳　石室南半床面（東から）
　　4．J-第118号墳　石室北半床面（東から）
　　5．J-第118号墳　石室基底石（南から）
　　6．J-第118号墳出土遺物
図版26　1．２区全景（北から）
　　2．J-第159号墳（南から）
図版27　1．J-第159号墳　石室検出状況（南から）

図版27　2．J-第159号墳　石室上面検出状況（南から）
図版28　1．J-第159号墳　石室下面検出状況（南から）
2．J-第159号墳　石室下面検出状況（北から）
図版29　1．J-第159号墳　石室東側壁（南西から）
2．J-第159号墳　石室西側壁（南東から）
図版30　1．J-第159号墳　石室下面と基底石（南から）
2．J-第159号墳　石室基底石（南から）
図版31　1．J-第159号墳　石室墓壙（北から）
2．J-第159号墳　石室屍床仕切石（西から）
3．J-第159号墳　石室奥壁（南から）
4．J-第159号墳　石室奥壁の裏込め①（北から）
5．J-第159号墳　石室奥壁の裏込め②（東から）
6．J-第159号墳　石室奥壁下部（西から）
図版32　1．J-第159号墳　石室段構造(框石)と閉塞石(北から)
2．J-第159号墳　石室段構造(框石)と閉塞石(東から)
3．J-第159号墳　石室段構造（框石）の上部裏込め（東から）
4．J-第159号墳　石室段構造(框石)残存状況(北から)
5．J-第159号墳　石室段構造(框石)下部の上面と墓道（南から）
6．J-第159号墳　石室段構造（框石）の基底石・墓壙と墓道（西から）
図版33　1．J-第159号墳　石室北半人骨等出土状況（南から）
2．J-第159号墳　石室北半南西部人骨等出土状況(東から)
3．J-第159号墳　石室北半南縁部耳環出土状況(北から)
図版34　1．J-第159号墳　石室奥壁・屍床仕切石と南半人骨および遺物出土状況（南から）
2．J-第159号墳　石室北半北西部土器出土状況(北から)
3．J-第159号墳　石室南半北西部玉類・刀子出土状況（北から）
図版35　1．J-第159号墳　石室南半北西部人骨出土状況(南から)
2．J-第159号墳　石室南半東部副葬品出土状況(西から)
図版36　1．J-第159号墳　石室南半北東部土器出土状況(西から)
2．J-第159号墳　石室南半南西部土器出土状況(東から)
3．J-第159号墳　石室内副葬品出土状況（南から）
図版37　J-第159号墳出土遺物①
図版38　J-第159号墳出土遺物②
図版39　J-第159号墳出土遺物③
図版40　J-第159号墳出土遺物④
図版41　J-第159号墳出土遺物⑤
図版42　J-第159号墳出土遺物⑥
図版43　J-第159号墳出土遺物⑦
図版44　J-第159号墳出土遺物⑧
図版45　1．J-第159号墳出土遺物⑨
2．古墳以外の出土遺物

【第6章　間門松沢第1号墳】
図版46　1．調査前の古墳（北西から）
2．墳丘検出状況（調査区全景）（南東から）
図版47　1．墳丘検出状況（東から）
2．第1～3埋葬施設（北東から）
図版48　1．第1埋葬施設（南西から）
2．第1埋葬施設の断面土層（南西から）
3．第2埋葬施設（南西から）
4．第2埋葬施設（北東から）
図版49　1．第3埋葬施設（南西から）
2．第3埋葬施設（東から）
3．第3埋葬施設　鉄剣・白玉出土状況（北西から）
図版50　1．第3埋葬施設（南西から）
2．出土遺物

【第7章　鵜無ヶ淵・間門古墳群】
図版51　1．E-第6号墳　石室検出状況（南東から）
2．E-第6号墳　石室北隅の裏込め（北西から）
3．E-第6号墳　石室北隅の裏込め（上部石材除去後，北東から）
図版52　1．E-第6号墳　石室内遺物出土状況（南東から）
2．E-第6号墳　石室基底石および裏込め残存状況（南東から）
3．E-第6号墳　石室基底石（南東から）
4．E-第6号墳出土遺物①
図版53　E-第6号墳出土遺物②

【第8章　不動棚遺跡】
図版54　1．調査区東半部（南西から）
2．調査区西半部（南から）
図版55　1．調査区西部(K28・29グリッド付近)遺物集中(南から)
2．調査区東部(L31グリッド付近)遺物集中(南東から)
図版56　1．礫群01（南から）
2．SK02・03（南から）
3．調査以前の発見遺物（個人所蔵）
4．出土遺物①（縄文土器）
図版57　出土遺物②（縄文土器）
図版58　出土遺物③（縄文土器）
図版59　出土遺物④（縄文土器，古墳時代以降の遺物）
図版60　出土遺物⑤（石器）

【第9章　松坂遺跡】
図版61　1．2区北西半部（南東から）
2．2区北西部（北東から）
図版62　1．縄文土器出土状況（遺物番号1の下半）
2．縄文土器出土状況（遺物番号8）
3．SK01炭化材検出状況（北から）
4．SK01（北から）
5．SK02炭化材・焼土検出状況（南から）
6．SK03（南から）
図版63　出土遺物①（縄文土器）
図版64　出土遺物②（縄文土器，石器）

第１章　調査に至る経緯

東名高速道路は昭和44年の開通以来、日本の大動脈として大きな役割を果たしている。しかし、経済発展に伴って交通量が激増し混雑が激しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予想されるようになった。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画された。このうち静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170㎞の路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在の有無についての解答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130箇所以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下，財団法人を除いて記す）へ委託することが確認された。平成８年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれている。

上記したように富士市域においても調査が開始された。富士市域には、延長13.5㎞の路線およびその建設のための工事用道路が計画されており、本線部分22地点、工事用道路28地点の計50地点の確認調査を実施した（一部の工事用道路は本線部分と同時に実施）。調査の結果、50地点のうちで12の遺跡の存在が認められた。この結果にもとづいて、各遺跡の発掘調査を順次実施することとなった。確認調査と現地調査、整理作業、報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の指導のもと、静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお、上記の経緯の詳細や確認調査の内容については、既に報告している（静岡埋文研2010）。

富士市内では多くの遺跡の存在が想定されていたが、確認調査により、遺跡は予想以上に破壊が進んでおり、既に失われた遺跡が多いことが判明した。50地点のうち、遺跡が確認された場所は、12遺跡（矢川上Ｃ遺跡，船津古墳群，古木戸Ａ遺跡，古木戸Ｂ遺跡，天ヶ沢東遺跡，平椎遺跡・平椎古墳群，富士岡中里遺跡，須津古墳群，間門松沢第１号墳，鵜無ヶ渕・間門古墳群，不動棚遺跡，松坂遺跡）であり、矢川上遺跡（静岡埋文研2009）と古木戸Ａ遺跡、古木戸Ｂ遺跡、天ヶ沢東遺跡（静岡埋文研2010b）、平椎遺跡・平椎古墳群、富士岡中里遺跡（静岡埋文研2010c）についてはすでに報告済で、本報告が富士工区のうち富士市内の遺跡調査報告書の第４冊目であり、富士市の最終報告書である。

参考文献

参考文献については、第９章末（153・154頁）に記載した。そちらを参照願いたい。

第２章　調査の方法と経過

１．調査の方法

（１）確認調査の方法

確認調査は、これまでの分布調査により遺跡や古墳の存在が想定される箇所を中心に、50箇所を設定し、順次踏査を行った上で、遺跡が想定される箇所すべてに対し、試掘・確認調査を実施した。

調査は基本的に重機を用いて表土除去を行った上で、人力にて遺構の精査を行うが、一部の地点や古墳については人力にて表土除去から実施した。確認調査後、測量機器（トータルステーション等，以下，ＴＳ）で試掘溝や試掘坑の測量・写真撮影を行い、埋め戻した。

（２）本発掘調査の方法

本発掘調査は、確認調査の結果、遺跡の存在が確定した地点に対し、下記の方法で実施した。

古墳　古墳周囲の表土除去は基本的に重機で行い、墳丘埋葬施設や周溝については人力で掘削した。表土除去後、墳丘盛土、周溝、埋葬施設の検出を行い、順次遺構の掘削を行なった。検出状況や遺物出土状況、埋葬施設の実測・写真撮影を行い、遺構を掘削した段階で全体の写真撮影や測量を行った。この後、石室については解体調査を行い、補足の記録や写真撮影を行った。また、石室内の土砂については、篩がけを行い、玉類等の微細な遺物の取り残しのないように留意した。

遺跡　表土は基本的に重機で掘削し、包含層がある場合には人力にて掘り下げた。確認調査で把握された文化層（面）ごとに人力にて精査し、遺構検出を行った。つづいて検出できた遺構から順次遺構の重複関係を見極めながら掘削を行い、遺物出土状況図や遺構の実測図を作成するとともに、写真撮影を行った。縄文時代や旧石器時代の遺物についてはＴＳを用いて出土位置、高さを記録しながら取り上げた。

なお、遺跡全体の写真撮影は、ラジコンヘリコプターで中判カメラ（６×4.5インチ，ポジフィルム・白黒ネガフィルム）を用いて行い、個別写真については、中判カメラ（６×７インチ，白黒ネガフィルム）、小型カメラ（35㎜，ポジフィルム，カラーネガフィルム，白黒ネガフィルム）を用いて撮影した。

（３）資料整理・報告書作成の方法

基礎整理は出土した遺物の台帳作成、洗浄・注記作業を実施し、次の資料整理に備えた。資料整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した。

基礎整理　土器・玉類については取上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行い、台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

整理作業・報告書刊行作業　出土品の分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、復原が終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレース、観察表の作成を行うとともに、写真撮影を実施した。写真撮影にあたっては、中判カメラ（６×７インチ，白黒ネガ

フィルム，ポジフィルム）で撮影し、集合写真については大判カメラ（4×5インチ，白黒ネガフィルム，ポジフィルム）を用いた。

記録類は図面整理を行い、古墳・遺構ごとに版組し、トレースを行った。

これらが終了した段階で、文章の執筆、編集、構成を行い、本書を刊行した。

また、調査資料（記録類）および出土品の静岡県教育委員会への移管に向けて、収納作業を行った。

（4）保存処理の方法

出土した金属製品は、現地調査終了後断続的に当研究所保存処理室においてクリーニング・保存処理を実施した。保存処理は、処理前記録の作成後、X線写真撮影、土砂・錆を除去し、脱塩処理を行った。脱塩処理後劣化防止のための保存処理を実施した。すべてが終了した段階で処理後の記録を作成した。

2．確認調査および本発掘調査の体制

確認調査および本発掘調査の体制については、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施した（第1表）。

第1表　確認調査および本発掘調査の体制

	職名			平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
調査体制	所長			斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
	副所長				山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫
	総務部（総務課）	常務理事兼総務部長		伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸
		次長							鎌田英巳
		総務課長		杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳
		担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
			総務係長	田中雅代	田中雅代	田中雅代	山本広子	山本広子	山本広子
			会計係長	杉田　智	大石真二	大橋　薫	大橋　薫	大橋　薫	野島尚紀
			副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸		
			主事		鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博
	調査研究部（調査課）	部長		石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平
		次長		佐野五十三	佐野五十三	及川　司	栗野克己 及川　司	栗野克己 中嶋郁夫	栗野克己 中嶋郁夫
		担当課長		羽二生　保	及川　司	及川　司	及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫
		工区主任		鈴木良孝	鈴木良孝	鈴木良孝	鈴木良孝	笹原芳郎	前嶋秀張
		調査研究員（調査員）		佐野暢彦 石田　勉 望月由佳子 稲垣聖二 中川律子 蔵本俊明 濵田由美子 勝又直入 武田寛生 大谷宏治 丸杉俊一郎 富樫孝志 木崎道昭 田村隆太郎 高野徳多果 山本重典 梶葉義久	佐野暢彦 望月由美子 勝又直人 山本重典 田村隆太郎 高野徳多果 山崎宏明	佐野暢彦 高野徳多果 富田　孝	高野徳多果 三井文洋	高野徳多果	高野徳多果
		保存処理	室長				西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
			主任調査研究員		西尾太加二	西尾太加二			
実施内容				確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 資料整理
	整理作業・報告書作成			富士工区全体を対象として実施					

３．確認調査および本発掘調査の経過

本書で報告する遺跡は船津L-第171号墳、須津古墳群ほか６遺跡にわたり、No.45・52地点では、同じ地点であっても時期をあけて別々の遺跡や古墳の確認調査、本発掘調査を行っていることから、各遺跡の調査の経過については、第４章以降各遺跡の報告で詳述する。

ここでは、本書で報告する遺跡の調査年次等を記載するに留める（第２・３表）。本書で報告する遺跡については主に平成10～13年度に確認調査および本発掘調査を実施した。

なお、間門松沢第１号墳や不動棚遺跡などは確認調査段階で本発掘調査対象面積が狭小であると判明したため、静岡県教育委員会文化課（当時）、日本道路公団静岡建設局（当時）と協議の上、確認調査を継続し、本発掘調査を実施した。

第２表　確認調査の経過

地点名	遺跡名	平成10年度							平成11年度						平成12年度					平成13年度		
		6	7	8	9	10	11	12	10	11	12	1	2	3	8	9	10	11	12	9	10	11
39	船津L-第171号墳																					
45	須津Ｊ-第６・118・159号墳																					
52	鵜無ヶ淵・間門Ｅ-第６号墳																					
	間門松沢第１号墳																					
	不動棚遺跡																					
53	松坂遺跡																					

第３表　本発掘調査の経過

地点	遺跡名	調査面積	10年度		平成11年度												平成12年度								平成13年度			備考
		(㎡)／月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	9	10	11	
39	船津L-第171号墳	300																										本調査Ⅰ期
45	須津Ｊ-第６・118・159号墳	300																										本調査Ⅰ期
		600																										本調査Ⅱ期
52	鵜無ヶ淵・間門Ｅ-第６号墳	256																										本調査Ⅰ期
	間門松沢第１号墳	1,200																										確認調査その１
	不動棚遺跡	510																										確認調査その２
53	松坂遺跡	410																										確認調査

※１　備考欄に確認調査とあるものは、対象面積が狭小なため、確認調査に継続して本発掘調査を実施したものである。

4．資料整理および報告書作成の体制

資料整理および報告書作成は、下記の体制で実施した（第３表）。

第４表　資料整理および報告書作成の体制

職名＼年度				平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
調査体制	所長			斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	清水　哲	天野　忍	石田　彰
	副所長			飯田英夫						
	常務理事						清水　哲	清水　哲	天野　忍	石田　彰
	事務局長						清水　哲			
	（事務局）次長						大場正夫 佐野五十三 及川　司 稲葉保幸	大場正夫 及川　司 稲葉保幸	松村　亨 及川　司 稲葉保幸 中鉢賢治	松村　亨
	総務部（総務課）	常務理事兼総務部長		平松公夫	平松公夫	平松公夫				
		次長		鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎				
		総務課長		鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村　亨	松村　亨
		担当	専門監							稲葉保幸
			事業担当							中鉢京子
			経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸					
			総務係長	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	山内小百合	山内小百合	瀧　みやこ
			会計係長	野島尚紀	野島尚紀	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝
			副主任	中鉢京子	中鉢京子				中鉢京子	
	調査研究部（調査課）	部長		山本昇平	石川素久	石川素久				
		次長		栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	佐野五十三 及川　司 稲葉保幸				
		担当課長		中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	及川　司	及川　司	中鉢賢治
		事業係長						稲葉保幸	稲葉保幸	
		事業担当			中鉢京子	稲葉保幸	稲葉保幸 中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	
		担当係長				前嶋秀張 中鉢賢治	中鉢賢治 笹原千賀子	中鉢賢治 笹原千賀子	中鉢賢治 笹原千賀子	岩本　貴
		工区主任		前嶋秀張	前嶋秀張 笹原芳郎					
		調査研究員（調査員）		高野穂多果	高野穂多果	高野穂多果	矢島　一	田村隆太郎	岩本　貴	大谷宏治
					成田修一	矢島　一	柴田亮平	柴田亮平		
								高野穂多果		
		保存処理	室長	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
			調査員				大森信宏	大森信宏	大森信宏	大森信宏
実施内容	整理作業・報告書作成			資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理
				富士工区富士地区全体を対象として実施						

５．資料整理の経過

資料整理は、現地の本発掘調査が終了後、富士工区内の他の遺跡と並行して行ったため、ここでは本書で報告する６遺跡の資料整理の経過について記録する。

（１）基礎整理作業

基礎整理作業は富士工区の現地における確認調査・本発掘調査とともに断続的に実施した。現地で出土した遺物の台帳作成、洗浄・注記作業を行うとともに、記録類の台帳作成を行った。

（２）資料整理・報告書刊行作業

資料整理のうち、土器の接合・復原については基礎整理作業と並行して行うとともに、富士工区全体が資料整理に移行した平成15～20年度に断続的に実施した。

接合・復原以外の本格的な資料整理は平成20年度に実施した。平成20年４月１日から遺構図の編集・版下作成、トレース、遺物の実測、拓本の採取、版下作成・トレース、観察表の作成などを行った。また、No.52地点（不動棚遺跡）、No.53地点（松坂遺跡）の調査区配置図や遺物の出土状況図については株式会社シン技術コンサルに委託して作成した。資料整理の一部の作業を残して平成20年度の作業は平成21年１月31日に一旦休止した。

その後、平成22年５月１日に再開し、調査地点や周辺遺跡地図の作成、記録類・出土品の版下作成・トレースのほか報告書の執筆、編集、校正作業を行い、11月30日に報告書刊行した。

また、報告書の作成と併せて、静岡県教育委員会へ移管するための収納作業を行い、報告書刊行後、移管した。

６．保存処理の経過

保存処理は、現地の本発掘調査が終了後、富士工区内の他の遺跡と並行して行ったため、ここでは本書で報告する６遺跡の保存整理の経過について記録する。

保存処理作業は、平成19年度（平成19年９月１

写真１　土器接合作業

写真２　土器復原作業

写真３　記録類図面整理作業

写真４　記録類版下作成作業

日～平成20年１月31日)、平成20年度（平成20年４月～７月31日)、平成21年度（平成21年11月１日～12月31日)、22年度（平成22年８月１日～９月30日）に平椎古墳群（第２号墳）の金属製品とともに船津Ｌ-第171号墳、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門Ｅ-第６号墳、間門松沢第１号墳出土の金属製品について、当研究所保存処理室が実施した。

作業は処理前状況記録の作成を行った後、Ｘ線写真を撮影した。この写真を参考にしながら土砂および錆を除去し、脱塩処理を行った。脱塩処理後保存処理を実施した。それが終了した段階で、処理後の記録を作成し、保存処理を終了した。

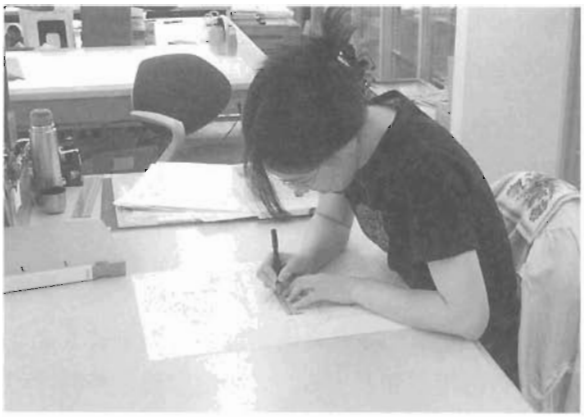


写真５　記録類トレース作業

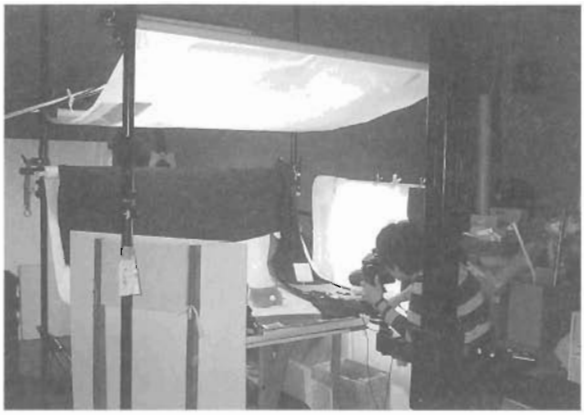


写真８　遺物写真撮影

写真６　出土品実測作業

写真９　報告書編集

写真７　出土品トレース作業

写真10　保存処理作業

第３章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１．地理的位置

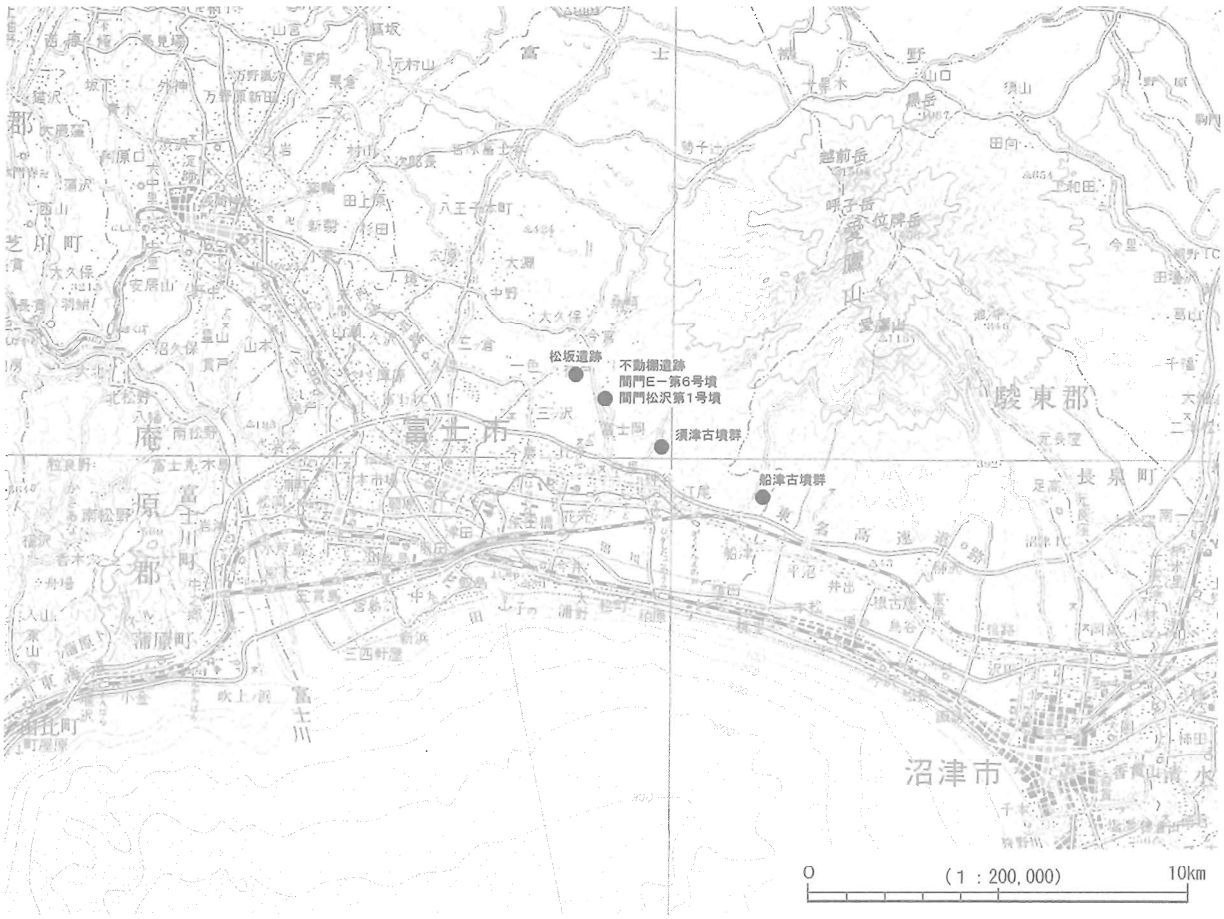
富士市は、北緯35度00分、東経138度44分付近の静岡県東部に位置する。総面積は約214.10㎢（発掘調査当時，旧富士市域）であったが、富士川町と市町村合併し、総面積は245.025㎢となり、周辺の市町の中では広い面積を有する（第２図）。北側は富士宮市、西側は静岡市、東側は沼津市と接する。

２．地理的環境

富士市は北側に富士山・愛鷹山麓（あしたかさんろく）、その南側の平地・低地をもち、南は駿河湾に面する、海と山をもつ自然豊かな場所である。

富士市は北側に国指定名勝で標高3,776mの高さ日本一を誇る雄大な富士山と、その南東側に愛鷹山がそびえたつ。その裾野は緩やかな緩斜面となり、その両火山が流出させた溶岩流の合間を縫うように潤井川（うるいがわ）、伝法沢川（でんぽうさわがわ）、赤淵川（あかぶちがわ）、須津川（すどがわ）、春山川（はるやまがわ）などいくつもの河川が開析する。この溶岩流と各河川の開析により富士山・愛鷹山麓は熊手状に尾根が伸びる地形が広がる。南の太平洋側には現在は沖積平野が広がるが、元々は浮島沼（うきしまぬま）とよばれたラグーンであり、『百人一首』にある山部赤人の短歌「田子の浦にうち出てみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」で著名な田子ノ浦（たごのうら）が形成されている。現在は富士市南東部の小さな内湾となっているが、古くは現在の倍以上の面積があったと考えられる。潤井川、伝法沢川など主要な河川は合流しながら最終的にこの田子ノ浦に流れ込んでいる。外洋である駿河湾から内湾の田子ノ浦を経て各河川を遡ればある程度内陸部まで進むことができたと考えられ、人々の生活にとって、これらの河川と田子ノ浦は交通、食糧生産にとって非常に重要な意味をもっていた。この浮島沼の南側の駿河湾沿いには田子浦砂丘（たごのうらさきゅう）が形成され、東海道線や国道１号線バイパスなど主要幹線が通過している。

第２図　富士市の位置と船津古墳群・須津古墳群ほかの位置



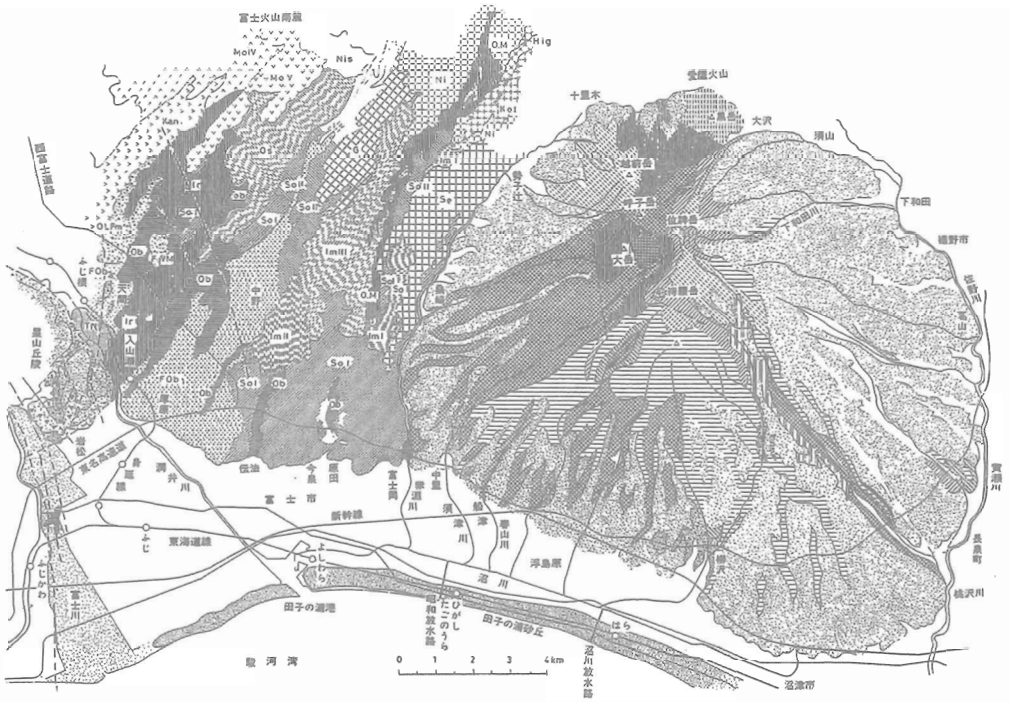
第３図　船津古墳群・須津古墳群ほかの位置（国土地理院平成10年９月１日発行１:200,000地勢図「静岡」に加筆）

３．地質の様相

富士山は富士山の土台となる小御岳火山が愛鷹山や箱根火山（箱根外輪山）とともに約40万年から火山活動を開始した。約40万年前から約17万年前の活動で北側の火口から主に玄武岩質の溶岩を流出させ、山腹に降下した噴出物は大量の凝灰角礫岩を生成した。約17万年前からは、主な火山活動の場所が南東側へ移り、噴出物は安山岩質のもので占められ、流れ下った溶岩流は沼津市方面に扇状のなだらかな丘陵地を形成した。約８万年前以前に小御岳火山の山腹に火口を開けた古富士火山はその噴出物で小御岳火山を覆い尽くし、標高は2,700mに達したとされる。その後、約１万５千年前以前に古富士火山の火口に火道を開いた新富士火山は大小の噴火活動を繰り返し、その噴出物により古富士火山を覆い尽くした。有史時代に入ってからも引き続き活動し、現在私たちが目にする標高3,776mの美しい円錐形の山体を形成した（第４図，第５表）。

新富士火山は大量の玄武岩質岩板溶岩を主とする溶岩流を連続して発生させ、現在の富士山麓を形成する。大淵溶岩流および曽比奈溶岩流は新富士火山活動初期の大規模溶岩流で裾野に広く溶岩原を形成している。この溶岩原は富士市域では、大淵溶岩流により形成されたのが赤淵川・福間川間、曽比奈溶岩流は赤淵川・伝法沢川間に形成されている。この溶岩流によって形成された溶岩原は大小規模の河川によって開析され、富士山・愛鷹山麓の丘陵地を隔てている。この中の河川の一つである富士市中央部を南流する赤淵川が富士山麓と愛鷹山麓の境界である。

約10万年前に火山活動を終えた愛鷹山は浸食にさらされるとともに、約３万５千年前～約１万１千年前の古富士火山と新富士火山の活動によって愛鷹上部ローム層が堆積した。上部ローム層は、風化の進んだ腐植質土壌とされる黒色帯と、激しい噴火で短時間に堆積したスコリア層が交互に折り重なる。こ



第４図　富士市の地質図（富士市教委2001などより引用）

第５表　地質図の凡例　　（第４図対応）

凡　例

富士火山南麓

- 沖積層
- 田子の浦砂丘
- 新期溶岩流
  - OM 大淵丸尾溶岩流
  - Hig 東臼塚溶岩流
  - Kol 小天狗溶岩流
- 中期溶岩流
  - Ni 日本ランド溶岩流
  - Nis 西臼塚溶岩流
  - G ガラン沢溶岩流
  - Se 勢子辻溶岩流
  - MoV 元村山溶岩流Ⅴ
  - MoIV 元村山溶岩流Ⅳ
  - Kan 神成溶岩流
  - Os 大坂溶岩流
- 旧期溶岩流
  - 天間化石湖堆積物層
  - Ir 入山瀬溶岩流
  - ImIII 今宮溶岩流Ⅲ
  - ImII 今宮溶岩流Ⅱ
  - Iml 今宮溶岩流Ⅰ
  - FOb_2 天間扇状地堆積物層
  - FOb_1 天間扇状地堆積物層
  - SoII 曽比奈溶岩流Ⅱ
  - SoI 曽比奈溶岩流Ⅰ
  - Ob 大淵溶岩流
- 古富士泥流
  - OLFm 古富士泥流
- 富士火山噴出溶岩流
- 高位段丘レキ層
- 低位段丘レキ層
- 貫戸レキ層
- 岩淵安山岩質集塊岩

愛鷹火山域

- 沖積層
- 田子の浦砂丘
- 愛鷹火山噴出溶岩流
  - 新期溶岩流
    - 愛鷹ローム層
    - 長窪熱雲堆積物層
    - 黒岳溶岩流
    - 袴腰岳溶岩流
    - 越前岳溶岩流
    - 位牌岳溶岩流
    - 桃沢川溶岩流
    - 愛鷹岳溶岩流
    - 大岳溶岩流
  - 旧期溶岩流
    - 柳沢扇状地堆積物層
    - 柳沢溶岩流
    - 旧期中部・下部溶岩流
    - 鷹ヶ谷中央火口内溶岩脈
- 断層・推定断層

の愛鷹ローム層で人為の痕跡が確認されており、日本でも有数の旧石器時代の遺跡が集中する地域として著名となった。

富士山・愛鷹山の噴出した溶岩の質の違いが後世の人間活動に影響を及ぼし、また、富士山・愛鷹山の溶岩流により形成された溶岩が横穴式石室に利用されるなど、富士山・愛鷹山は旧石器時代～現代まで私たちの生活に影響を与え続けている。　　（大谷）

第２節　歴史的環境

１．旧石器時代（第５・６図，第６表）

静岡県内の旧石器時代の遺跡は、県西部の磐田原台地、県東部の愛鷹・箱根周辺地域の二箇所に集中しており、愛鷹山では1964年の沼津市休場遺跡の発掘調査以降、沼津市や長泉町において数多くの遺跡が確認されるようになった。愛鷹山南西麓を市域に含むにもかかわらず、富士市内の旧石器時代の遺跡は極めて少なく、遺物の多くは表面採取によって得られていた。富士山南麓では天間沢遺跡（11）でナイフ形石器等が採取されたとの記述がみられるが詳細は不明である。また、愛鷹山南西麓ではナイフ形石器や小型石刃等が採取された峰山遺跡（86）、陣ヶ沢Ａ・Ｂ遺跡（165・166）、矢川上Ｃ遺跡（第二東名No.39-2地点，169）が知られていた。過去において旧石器時代と思われる遺物が出土した遺跡として高徳坊遺跡（16）などが挙げられる。また、第二東名建設事業に伴い、第二東名No.44地点の古木戸Ａ遺跡（136）・古木戸Ｂ遺跡（137）・天ヶ沢東遺跡（135）で石器ブロック・礫群が確認され、ナイフ形石器・細石刃等が出土している。さらに、矢川上Ｃ遺跡では、多数の石器ブロックや礫群が確認され、ナイフ形石器や角錐形石器などが確認されている。（柴田・大谷）

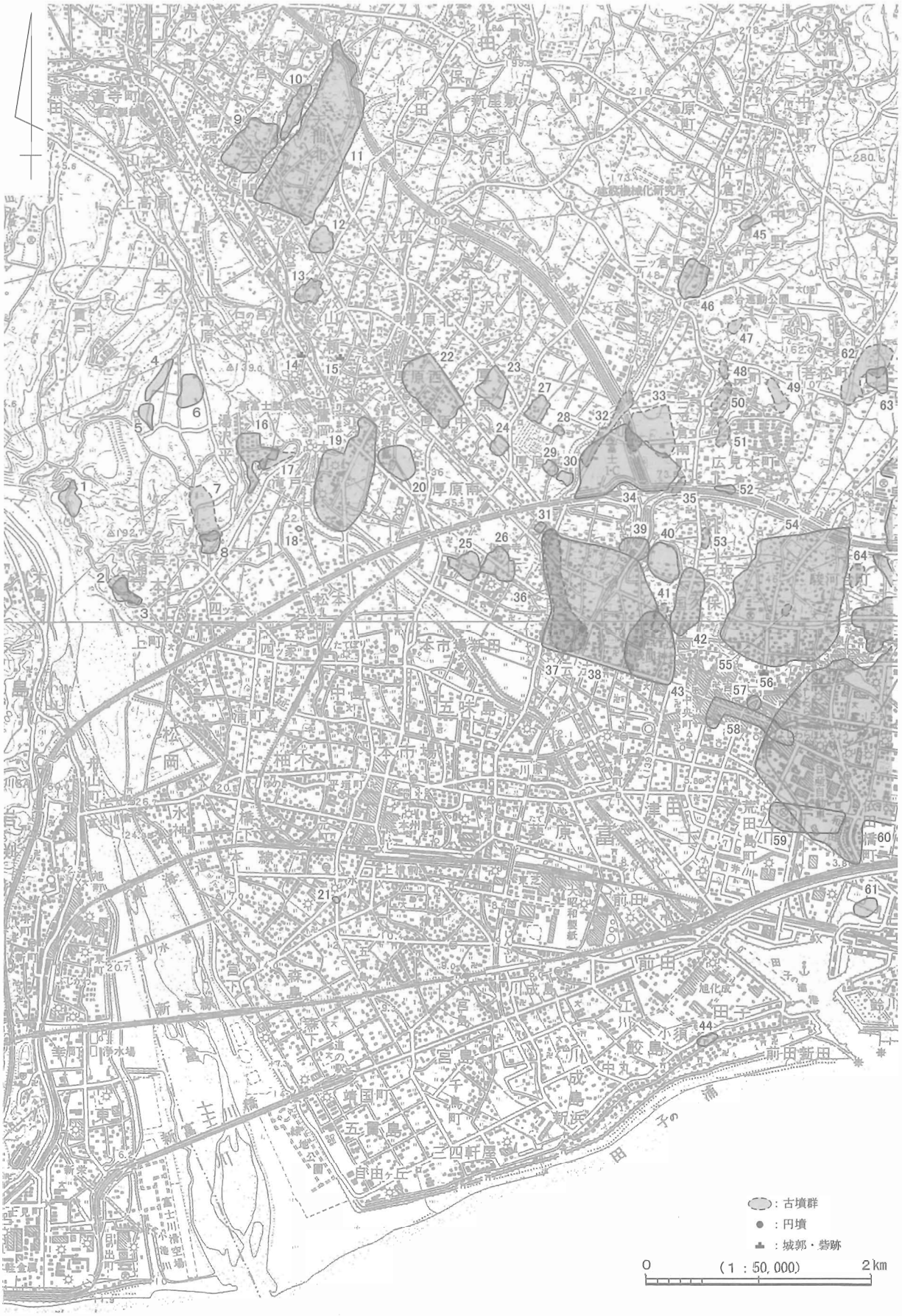
２．縄文時代（第５・６図，第６表）

縄文時代の遺跡は愛鷹山南西麓、富士山南麓、岩本山丘陵に分布している。草創期の遺跡は検出されていない。早期は、富士山南麓に押型文や茅山下層式土器が出土したジンゲン沢遺跡（10）、押型文や田戸式土器が出土した万野遺跡（１）などがある。愛鷹山南西麓には押型文土器や絡条帯圧痕文土器が出土した陣ヶ沢Ａ・Ｂ遺跡（165・166）、押型文土器が出土した矢川上Ａ・Ｂ遺跡（167・168）、峰山遺跡（86）などがある。前期は遺跡数が少ないが、花川戸遺跡（104）、天間沢遺跡（11）などでは木島式土器が確認されており、時代幅の長い複合遺跡で当該期の資料が挙げられる。中期は遺跡数が多く、規模も大きくなる。天間沢遺跡は縄文時代から律令時代まで続く複合遺跡であり、竪穴建物・配石遺構・土坑が確認され、勝坂式・曽利式・加曽利Ｅ式土器が出土した。後期は遺跡数が減少し、規模も小さくなる。宇東川遺跡（70）は柄鏡形敷石住居を含む竪穴建物・土坑が確認され、中期後半から後期の曽利Ⅳ式～堀之内１式土器が出土した。中島遺跡（69）は、配石遺構が確認され、称名寺式・堀之内式・加曽利Ｂ式土器が出土した。赫夜姫遺跡（97）では、堀之内式の注口土器が出土した。また、当研究所が第二東名関連で調査した不動棚遺跡（88）、松坂遺跡（173）では遺構はほとんど確認できないが、堀之内式土器の良好な資料が出土した。晩期は、三新田遺跡（117）で土器片が出土している。

（柴田・大谷）

３．弥生時代（第５・６図，第６表）

弥生時代の遺跡は、湿地や低湿地に面する丘陵先端部に位置する遺跡が多い。富士市内では前期の遺跡は確認されておらず、富士市域の弥生時代の遺跡は、中期の沖田遺跡（60）、後期の平椎遺跡（138）、向山遺跡（106）、花守遺跡（115）、宮添遺跡（130）、的場遺跡（152）によって代表される。沖田遺跡は、弥生時代から古墳時代に至る複合遺跡であり、中・後期の弥生土器に加えて大量の矢板や大足・杵などの木製品が出土した。宮添遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落で、多数の竪穴建物が確認された。平椎遺跡と同一の尾根の先端に形成されているが、盛行時期が異なっており、この関係を調査することで弥生時代の集団の移動や盛衰について明らかにすることができる可能性がある。的場遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期に亘る竪穴建物が確認され、弥生土器・石器が出土している。



第５図　富士市の主要遺跡分布図①

第６図　富士市の主要遺跡分布図②

第6表　富士市の主要遺跡地名表

1　万野遺跡
2　上井奈古墳群
3　上井奈遺跡
4　羽淵平遺跡
5　奥の原A遺跡
6　奥の原B遺跡
7　鎌研古墳群
8　念信園遺跡
9　川坂遺跡
10　ジンゲン沢遺跡
11　天間沢遺跡
12　天間代山遺跡
13　清水久保遺跡
14　林泉寺砦跡
15　入山瀬城跡
16　高徳坊遺跡
17　滝戸原古墳群
18　貫井遺跡
19　沢東A遺跡
20　沢東B遺跡
21　水戸島遺跡
22　厚原遺跡
23　厚原横道下遺跡・横道下古墳群
24　溝上遺跡・溝上古墳群
25　中裕遺跡
26　中ノ坪遺跡
27　大石遺跡
28　二本松遺跡
29　傘木A遺跡
30　傘木B遺跡
31　片宿遺跡
32　横沢古墳、土手内・中原古墳群（中原1古墳群）
33　土手内・中原古墳群（中原2古墳群）
34　中原遺跡
35　石坂古墳群（石坂5古墳群）
36　伝法A古墳群（伝法1古墳群）
37　伊勢塚古墳
38　東平遺跡
39　出口遺跡
40　滝下遺跡
41　伝法B古墳群（伝法3古墳群）
42　国久保遺跡
43　三日市廃寺
44　村添遺跡
45　落合遺跡
46　井倉遺跡
47　片倉古墳群（片倉3古墳群）
48　八ヶ窪古墳群
49　荻ノ原古墳群
50　石坂古墳群（石坂2古墳群）
51　石坂古墳群（石坂3古墳群）
52　桑原遺跡
53　石坂古墳群（石坂10古墳群）
54　舟久保遺跡
55　擦文字古墳群
56　善得寺城跡
57　和田町遺跡
58　新吉原宿遺跡
59　中吉原宿遺跡
60　沖田遺跡
61　田子浦港遺跡
62　一色古墳群（一色2古墳群）
63　一色遺跡
64　高山古墳群
65　木の宮遺跡
66　実円寺西第1号墳（一色7古墳群）
67　三ッ沢遺跡
68　水神堂遺跡
69　中島遺跡
70　宇東川遺跡
71　一色・飯森東古墳群（一色8古墳群）
72　元吉原宿遺跡
73　砂山遺跡
74　富士塚遺跡
75　今井中世五輪塔群
76　天の香久山砦跡
77　澤添遺跡
78　三度蒔A遺跡
79　寺下遺跡
80　三度蒔B遺跡
81　神戸古墳群（神戸4古墳群）
82　神戸古墳群（神戸3古墳群）、間門E－第3号墳
83　神戸石坂遺跡
84　鵜無ヶ淵遺跡
85　亀窪遺跡
86　峰山遺跡
87　夷城跡
88　鵜無ヶ淵・間門古墳群・間門松沢第1号墳・不動棚遺跡
89　石井遺跡
90　桑崎遺跡
91　滝川古墳群（滝川2古墳群）
92　斉藤上遺跡
93　滝川古墳群（滝川4古墳群）
94　比奈古墳群（比奈1古墳群）・東坂古墳
95　比奈古墳群（比奈2古墳群）
96　比奈古墳群（比奈3古墳群）
97　赫夜姫遺跡
98　比奈古墳群（比奈4古墳群）
99　比奈古墳群（比奈5古墳群）
100　富士岡古墳群（富士岡1古墳群）・花川戸古墳群
101　下前原遺跡
102　竹の鼻遺跡
103　祢宜ノ前遺跡
104　花川戸遺跡
105　富士岡古墳群（富士岡2古墳群）
106　向山遺跡
107　前の原遺跡
108　中尾沢遺跡
109　中里古墳群（中里1古墳群）
110　（富士岡）丸山遺跡
111　天神川城跡
112　中里古墳群（中里2古墳群）
113　天念寺遺跡
114　児森遺跡
115　花守遺跡
116　行僧遺跡
117　三新田遺跡
118　椎木平遺跡
119　中里古墳群（中里3古墳群）
120　琴平古墳
121　大塚道東遺跡
122　中里古墳群（中里4古墳群）
123　須津（神谷）古墳群
124　千人塚古墳
125　百間遺跡
126　神谷遺跡
127　地蔵畑遺跡
128　増川古墳群
129　浅間古墳
130　宮添遺跡
131　柏原遺跡
132　東田子浦砂丘1古墳群
133　庚申塚古墳
134　山ノ神古墳
135　天ヶ沢東遺跡
136　古木戸A遺跡
137　古木戸B遺跡
138　平椎遺跡・平椎古墳群
139　烏帽子形遺跡
140　中尾遺跡
141　船津古墳群（船津1古墳群）
142　久保ノ上A遺跡
143　江尾遺跡
144　久保ノ上B遺跡
145　コーカン畑遺跡
146　二ッ塚遺跡
147　船津古墳群（船津2古墳群）
148　長四郎遺跡
149　愛鷹遺跡
150　竹ヶ沢遺跡
151　船津古墳群（船津3古墳群）・船津薬師塚古墳
152　的場遺跡
153　大道上遺跡
154　上の段遺跡
155　船津遺跡
156　（境）丸山遺跡
157　野多場遺跡
158　船津古墳群（船津4古墳群）
159　船津古墳群（船津5古墳群）
160　春山遺跡
161　丸宗遺跡
162　船津古墳群（船津6古墳群）
163　船津古墳群（船津7古墳群）
164　稲荷塚古墳
165　陣ヶ沢A遺跡
166　陣ヶ沢B遺跡
167　矢川上A遺跡
168　矢川上B遺跡
169　矢川上C遺跡
170　船津古墳群（船津8古墳群）
171　寺の上遺跡
172　富士岡中尾遺跡
173　松坂遺跡

富士市周辺の遺跡は、沼津市に鳥形木製品や多量の石錘などが出土した浮島低湿地砂州上の雌鹿塚遺跡、竪穴建物が確認され中・後期の弥生土器が出土した的場遺跡（沼津市）、愛鷹山麓の標高100～180mの丘陵に群集する八兵衛屋敷遺跡、北神馬土手遺跡、植出遺跡がある。富士宮市には中期の渋沢遺跡や前方後方形墳丘墓が検出された富士宮市丸ヶ谷戸遺跡があり、富士市域の弥生時代の様相が不明確な中で、隣接地域の弥生時代の遺跡の様相と比較することで、弥生時代像が描けるであろう。　（大谷）

4．古墳時代（第5・6図，第6表）

古墳時代集落では天間沢遺跡（11）、東平遺跡（38）、沢東A・B遺跡（19・20）、祢宜ノ前遺跡（103）、宮添遺跡（130）、三新田遺跡（117）などに代表される。祢宜ノ前遺跡、宮添遺跡では、古墳時代前期と後期～平安時代までの竪穴建物が確認された。沢東A・B遺跡は古墳時代前期から奈良時代にかけての集落で竪穴建物のほか、子持勾玉など祭祀関連の遺構も確認されている。三新田遺跡は前期から平安時代に亘る集落で、竪穴建物が多数確認されている。

古墳の時期的な分布については第7項で記述する。（大谷）

5．奈良・平安時代（第5・6図，第6表）

奈良時代直前には集落が増加し始めるようで、宮添遺跡では7世紀～9世紀まで続く集落が確認され、竈付きの竪穴建物が確認されている。

東平遺跡周辺では、奈良時代～平安時代の富士郡衙と想定される東平遺跡（38）とその郡衙に伴う三日市廃寺（43）、宇東川遺跡（70）、舟久保遺跡（54）、沖田遺跡（60）、天間代山遺跡（12）、三新田遺跡（117）、沢東A遺跡（19）が代表的な遺跡である。

東平遺跡では、350軒以上の竪穴建物、72棟の掘立柱建物が確認され、駿東型甕、甲斐型坏、西駿型長胴甕、「布自」「厨」などの墨書土器、中央政府との関係を考える上で重要な銙帯金具が出土した。これらの遺構・遺物から官衙的性格の強い計画的集落の可能性が指摘されている。また、遺跡の南東部には多くの古瓦や「寺」と墨書された土師器坏が出土した「三日市廃寺」が位置しており、『日本三代実録』所載の定額寺「法照寺」と推定されている。舟久保遺跡では竪穴建物が確認され、「倉」と記載された墨書土器が出土している。宇東川遺跡では、180軒以上の竪穴建物・4棟の掘立柱建物が確認され、「布」「寺」などの墨書土器が出土した。沖田遺跡では、条里型畦畔・水田跡が検出された。また、中桁遺跡（25）では、10世紀まで続く集落が確認され、これまで様相が不明確であった平安時代の富士市域の様相について徐々に明らかになっていくだろう。（柴田・大谷）

6．中世（第5・6図，第6表）

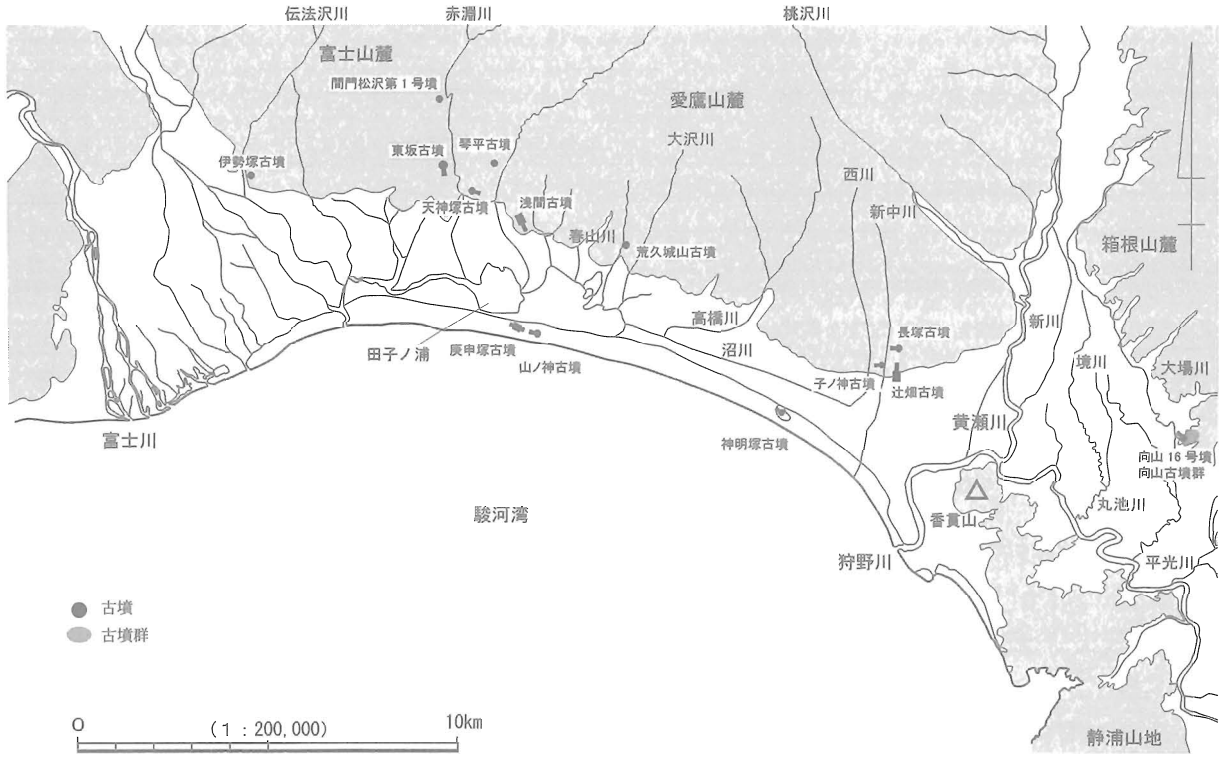
戦国期の城館跡では、後北条氏により築城された「河東十二塁」の一つあるいは武田氏に由来する大淵衆との関係が考慮される大淵城跡、後北条氏の「河東十二塁」の一つと想定される夷城跡（87）、応永24（1417）年に今川範政により河東一帯への今川支配の拠点として築城されたとされる善得寺城跡（56）、天神川城跡、入山瀬城跡、林泉寺砦跡などが所在するが、本格的な調査が行われたことはなく、詳細な様相は不明である。（大谷）

7．東駿河地域における古墳の分布について（第7・8図）

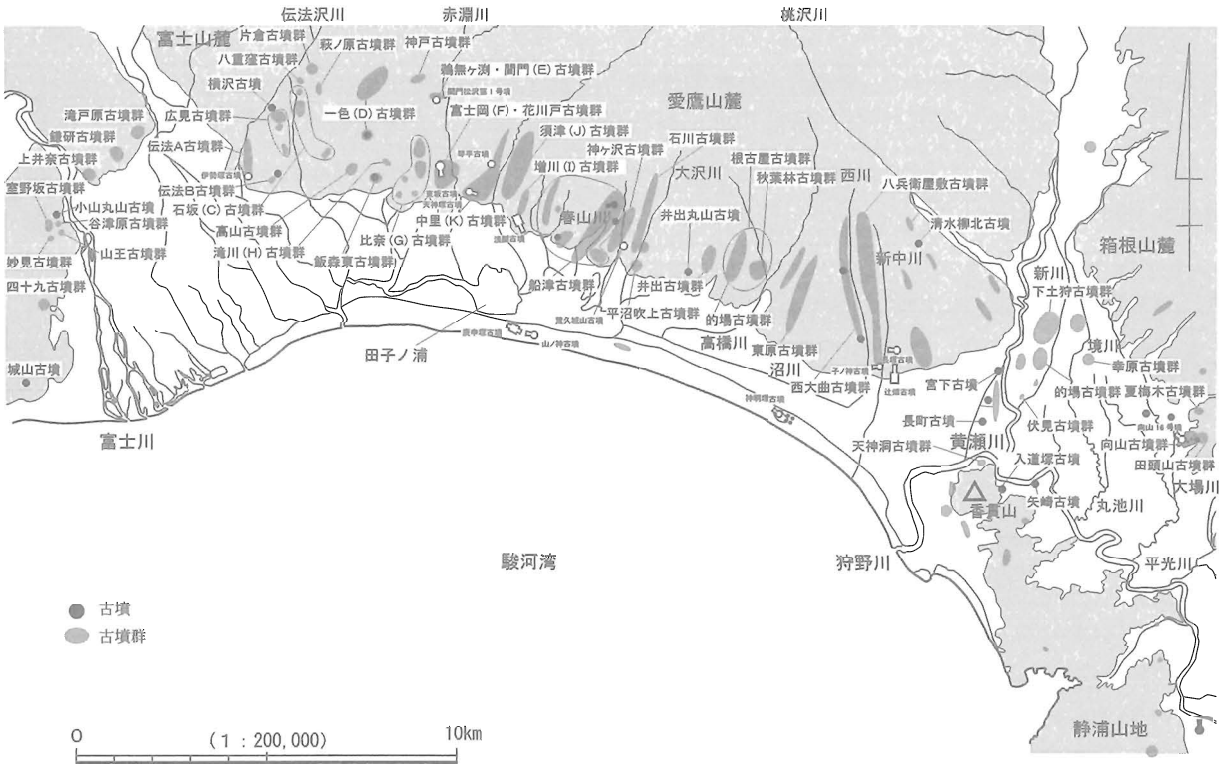
東駿河地域では近年（弥生時代末～）古墳時代初頭に遡る大型古墳が相次いで確認され、日本における古墳の発生について検討する上で重要な地域となっている。最近発掘調査された沼津市辻畑古墳は弥生時代終末期～古墳時代初頭の70mの規模をもつ「前方後方墳」であり、副葬品も鏡・鉄槍・鉄鏃などが確認されている。この時期としては東日本で最大級の古墳であることが判明し、東日本への古墳の伝播という面において日本史を語る上で重要な遺跡となるであろう。この辻畑古墳に続いて、近年の再調査により古墳時代前期初頭の土器が出土した、奈良県箸墓古墳と同時期とされる沼津市神明塚古墳が築造されている。このように全国的にみても古墳時代の初頭から大型の古墳が築造された地域として注目できる。

これ以外にも古墳時代前期では、全長70mの前方後円墳で竪穴式石槨が確認された三島市向山16号墳、全長93mの前方後方墳の富士市浅間古墳（129）がある。

古墳時代前期末～中期前半にかけては東坂古墳（94）や琴平古墳（120）、薬師塚古墳（船津L-第131号墳，151）などが築造されるが、古墳の築造は停滞したようで、この時期の大型墳は明確ではない。一方、古墳時代中期後半～後期の5世紀後半～6世紀前半には再び全長51.5mの富士市天神塚古墳（須津J-第91号墳，123）、全長41.5mの富士市山ノ神古墳（134）、全長64mと推定される沼津市子ノ神古墳、全長54mの沼津市長塚古墳などの前方後円墳が築造され、この時期に東駿河の集団が畿内王権との結び



第７図　東駿河の主要古墳分布図①（古墳時代前期～後期前半）



第８図　東駿河の主要古墳分布図②（古墳時代後期後半～終末期）

つきを強めたと考えられる。このほか富士市域では伊勢塚古墳（37）などがこの時期の築造と考えられているが、築造数はそれほど多くはない。

また、東駿河地域は現状では浅間古墳や向山16号墳など大型古墳が築造された地域といえども前期初頭～後期前半に至るまで連続的に首長系譜を追える地域がないことが特徴的であり、継続的に求心的な地域となったと考えられる地域はない。

一方、東駿河地域は、古墳時代後期後半（６世紀後半）以降、古墳が数多く築造される日本全国的に見ても特徴的な地域となる。その埋葬施設は無袖形石室のみが確認され、日本列島全域からみた場合非常に独自色の強い地域として注目できる（井鍋2003，木ノ内1998，志村1981・87，鈴木一有2003など）。また、富士市中原４号墳で鍛冶具が出土し、沼津市的場古墳群では鍛冶工人が所有したと考えられる鉄鐸が出土するなど、東駿河地域には鉄器生産を行う集団が存在し、彼らがこのような地域色の強い横穴式石室を築造したと想定されている（井鍋2003，鈴木一有2003・2010）。

この東駿河の無袖形石室は奈良県南部の葛城市寺口忍海古墳群などで確認される石室と類似している。この寺口忍海古墳群の築造者集団は鍛冶技術や馬匹生産などの技術であったと想定されており、このような技術を有する集団が東駿河に移植してきて築いた可能性も想定されている（井鍋2003，鈴木一有2003・2010）。また、非常に多くの古墳から鉄製馬具が出土しており、この地域にはのちに牧が置かれることからも、騎兵軍団（岡安光彦氏は「東国舎人騎兵」と仮称する）が存在し、畿内王権の軍事的役割を担う集団が存在したことが想定されている（岡安1986）。

東駿河地域で横穴式石室が採用されるのは遠江や西駿河・静岡清水平野よりも一段階遅れ、富士市中原４号墳や横沢古墳などが築造される後期後半である。６世紀終わりごろから古墳の数が急増し、船津（Ｌ）古墳群（162・163など，註１）、須津（神谷，Ｊ）古墳群（123）など100基を超える群集墳が築造される。この他にも富士山麓に石坂（Ｃ）古墳群（53など）、一色（Ｄ）古墳群（62など）、鵜無ヶ淵・間門（Ｅ）古墳群（88）、愛鷹山麓に富士岡（Ｆ）古墳群（100・105）、比奈（Ｇ）古墳群（94・95など）、増川（Ｉ）古墳群（128）、中里（Ｋ）古墳群（109・112など）など数多くの古墳群が奈良時代前半まで築造される。（大谷）

註

1　東駿河地域の古墳群の名称は、富士川西岸の古墳から沼津市の古墳群まで通しでアルファベット番号が付加されている。この名称が現在も使用されており、今回も踏襲する。この番号付加後に新たに発見された古墳や古墳群は別名称がつけられ、アルファベットは付加されていない。

参考文献

参考文献は、第９章末（153・154頁）に掲載した。そちらを参照願いたい。

第４章　船津古墳群

第１節　船津古墳群の概要

１．船津古墳群の概要（第７表）

船津古墳群は、愛鷹山麓の丘陵の緩斜面に位置し、春山川両岸の河岸段丘や尾根の緩斜面を中心に分布する。これまでの分布調査や発掘調査により、217基以上が存在したことが想定される。

船津古墳群は、1988年の段階で総数202基の古墳の存在が想定され、その後の調査により、217基まで増加している。後述する須津古墳群と同様、富士市内で確認される最大規模の古墳群である。これ以外にも既に失われた古墳や、墳丘が削平され、地下に埋没する古墳を含めれば250基を越える群集墳であった可能性が高い。

古墳の存在は古くから周知されており、前方後円墳の可能性のある第８号墳（ふくべ塚古墳）で鏡・大刀などが、第126号墳（丸山古墳）では大刀・刀子・鉄鏃・金環・須恵器・土師器が、陣ヶ沢古墳では鏡が出土したと伝えられている。

また、これまでに調査された古墳も十数基存在しており、富士市内では比較的調査が行われ、概要が

第７表　船津古墳群の主要古墳および調査された古墳一覧

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	規模	副葬品	文献	備考
戸夢沢古墳	不明	－	不明	－	（伝）刀身片・玉類・須恵器	富士市教委1988	
陣ヶ沢古墳	不明	－	不明	－	（伝）鏡		
鷲ヶ峰古墳	不明	－	不明	－	（伝）刀身片・須恵器・土師器		
８号墳	円墳？	30？	不明	－	鏡・勾玉・刀身		ふくべ塚古墳 前方後円墳の可能性がある。
14号墳	円墳	20	（未調査）	－	（未調査）	静岡埋文研2009	
62号墳	円墳？	－	無袖形石室	6.3	馬具・耳環・玉類・大刀・鉄鏃・刀子	富士市教委 1991c	
73号墳	円墳？	－	無袖形石室	6		富士市教委1988	稲荷塚古墳
115号墳	円墳	－	横穴式石室	－	大刀・鉄鏃・金環・須恵器		
123号墳	円墳	10	横穴式石室	－	須恵器		桜沢Ａ古墳
126号墳	円墳？	－	無袖形石室	－	大刀・刀子・鉄鏃・金環・須恵器・土師器		丸山古墳
131号墳	円墳	24	粘土床	10	剣・斧・刀子・玉類		薬師塚古墳
154号墳	円墳？	－	横穴式石室		大刀・玉類・須恵器ほか		メッコ塚古墳
171号墳	円墳	10±	無袖形石室	3.2+	鉄鏃・刀子・馬具？	本書	
186号墳	円墳？	－	（未調査）	－	（表土）砥石・須恵器	富士市教委1999	
202号墳	円墳	22.5	無袖形石室	13.8	大刀・刀子・鉄鏃・玉類・砥石・須恵器・土師器	富士市教委 1987a・1988	寺ノ上第１号墳
206号墳 207号墳	（未報告のため詳細不明）					富士市教委1999	（未報告のため詳細不明）
208号墳	円墳	８±	無袖形石室	5.2	耳環・大刀・鉄鏃・須恵器ほか	富士市教委1999	
209号墳	円墳	９±	無袖形石室	3.4	耳環・玉類・大刀・鉄鏃・刀子・須恵器ほか		
210号墳	円墳	7.9	無袖形石室	4.2	耳環・玉類・大刀・鉄鏃・刀子・須恵器		
211号墳	円墳	10±	無袖形石室	4.7+	耳環・玉類・大刀・鉄鏃・弓両頭金具・須恵器ほか		
212号墳	円墳	12.1	無袖形石室	6.0	耳環・玉類・挂甲小札（籠手）・大刀・鉄鏃・		
213号墳	不明	－	無袖形石室	1.7	なし		
214号墳	円墳	4.3	無袖形石室	2.0+	耳環・玉類・鉄鏃・刀子		
215号墳	円墳	4	無袖形石室	1.75	なし		
216号墳	不明	－	無袖形石室	1.4±	なし		
217号墳	円墳	21	竪穴系？		（埋葬施設消滅のため不明）	静岡埋文研2009	

「±」＝前後（程度）「＋」＝以上　「－」＝以下　　単位（m）
竪穴系＝竪穴系埋葬施設

知られている古墳群の一つである。それらの古墳の概要は以下のとおりである。

第131号墳（薬師塚古墳）は直径24mの円墳で、10mにも及ぶ割竹形木棺を使用した粘土床で、鉄剣や玉類などが出土している。古墳時代中期に位置づけられている。

第202号墳（寺ノ上第1号墳）は、直径22.5mの円墳で、東駿河地域で最長に近い、全長13.8mの狭長な無袖形横穴式石室である。大刀、鉄鏃、玉類、須恵器などが副葬され、墳丘内からは土師器坏、甕が出土している。築造時期は遠江Ⅲ期後葉に位置づけられる。

第62号墳は富士市指定文化財稲荷塚古墳（第73号墳）に近接する。墳形は円墳の可能性が高く、全長6.3mの無袖形横穴式石室を埋葬施設とする。床面が2面確認され、馬具、大刀、玉類などが出土している。遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期）に築造されたと考えられている。

第186・208～216号墳は、富士市指定文化財稲荷塚古墳に近接する。この稲荷塚古墳は6mの無袖形横穴式石室を埋葬施設としている。第186・208～216号墳は隣接しており、このうち第212号墳が最も大きく、直径約12mの円墳で、6mの無袖形横穴式石室を埋葬施設とする。この第212号墳から挂甲小札（籠手）が出土しており、注目される（富士市教委1999）。

第14号墳は春山川東岸の尾根上に形成された古墳で、直径約20mの円墳と考えられている。第二東名高速道路の建設に先立つ工事に伴い、周溝の一部が調査された（静岡埋文研2009）。同じく第217号墳は、丘陵上に築造された古墳で、周溝のみが確認された。周溝内側で21mの円墳である。埋葬施設は既に失われていたが、周溝の深さから考えると、通常東駿河地域の横穴式石室は半地下式に構築されることが多いことから、横穴式石室ではなく、竪穴系埋葬施設であった可能性を想定すべきであろう（静岡埋文研2009）。この2基の古墳の様相からは春山川の河岸段丘上に古墳時代後期（6世紀）後半以降の古墳が築造され、一段高い尾根上には横穴系埋葬施設を伴わない古墳時代後期前半以前の古墳が築造された可能性が高い。

2．船津古墳群の調査歴（第9・10図，第8表）

富士市内の古墳群の中では、古くから著名な古墳群であり、後藤守一氏らによる『吉原市の古墳』の際には、129基が確認されている（吉原市教委1958）。

第1次調査は昭和37（1962）年に東海道新幹線建設に伴い船津L-第131号墳（薬師塚古墳）、第2次調査は昭和60（1985）年に茶園改植に伴い船津L-第202号墳（船津寺ノ上第1号墳，富士市教委1987a・1988）、第3次調査は平成2（1990）年度に船津L-第62号墳（富士市教委1991c）、第4次調査は平成3（1991）年度に船津L-第206・207号墳が、第5次調査として平成8・9年度に工場建設に伴い、船津L-第186・208～216号墳の10基が調査された。第6次調査として平成10年度に第二東名高速道路建設に伴い、既報告のL-第217号墳、L-第14号墳と本書で詳述する船津L-第171号墳が調査されている（第9・10図）。

第8表　船津古墳群の調査歴

調査歴	調査年次	調査された古墳	調査原因	報告書等
第1次調査	1962	131号墳	東海道新幹線	静岡県教委1965
第2次調査	1985	202号墳（寺ノ上第1号墳）	茶木改植	富士市教委1987a・1988
第3次調査	1990	62号墳		富士市教委1991c
第4次調査	1991	206・207号墳		未報告
第5次調査	1996・97	186・208～216号墳	工場建設	富士市教委1999
第6次調査	1998	14・171・217号墳	第二東名	静岡埋文研2009・本書

第９図　船津L-第171号墳の位置①

第10図　船津L-第171号墳の位置②

第２節　調査の体制と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

船津L-第171号墳の発掘調査は、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝

調査研究員　中川律子・武田寛生

２．確認調査および本発掘調査の経過

確認調査　確認調査は、平成10年度に第二東名No．39地点確認調査として矢川上Ｃ遺跡と同時に実施した。調査は平成10年６月８日に資機材の搬入を行った後、試掘溝を設定し、順次重機と人力にて掘削し、古墳の確認を行った。以後、断続的に７月30日まで確認し、一旦休止した後、10月19日～27日まで試掘溝の実測や写真撮影を行い、確認調査を終了した。

当初は３～４基の古墳が所在することを想定したが、確認調査の結果、船津L-第171号墳のみが残存していることが判明した。

本発掘調査　本発掘調査は、平成10年度に第二東名No．39地点本調査その１として実施した。平成11年２月16日に資機材の搬入を行い、２月17日から表土除去を開始し、併せて古墳の検出作業を実施した。検出が終了した３月３日に古墳周辺の景観などを撮影するためラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、３月４日より石室の精査、周溝の掘削を開始した。石室内の調査が終了した３月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を行った。その撮影終了後、３月17日より遺物の取り上げを行った後、石室の解体、墓壙の確認を実施し、３月31日に調査を終了した。

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過は、第２章にて詳述しているため参照願いたい。

写真11　重機による表土除去作業

写真12　人力による古墳周溝掘削作業

写真13　横穴式石室精査作業

写真14　横穴式石室実測作業

第３節　船津L-第171号墳の調査成果

１．古墳の現況

船津L-第171号墳は、周辺に大型の石材が存在したことで古墳として登録されていた。この場所は茶畑として利用されており、確認調査前には地形の膨らみは一切確認できなかったが、確認調査の結果、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが判明した。古墳は標高73m付近に築造されている。

２．墳丘の構造（第10・11図，巻頭図版１，図版１・２）

墳丘　墳丘は茶畑の耕作が及んでおり、盛土は確認できない。

周溝　周溝は斜面の上部に当たる東側から南側に確認できる。周溝は斜面を切断するように掘削され、斜面下位に当たる西側から南西にかけては、当初から周溝は掘削されず、削り出しなどで周囲と区画していた可能性もある。周溝の残存部位から想定すると、古墳は不整形な円墳で、埋葬施設が古墳の中央に築造されたとすれば、周溝内側（周溝下場から）で東西10m、南北８m程度に復原できる。

周溝幅は斜面上位に当たる東側約3.6m、南側で約２mである。斜面上位が広いことから当初からこの部分が広く掘削された可能性と、雨水の流入で水道となり、幅が広がった可能性がある。

第11図　船津L-第171号墳　墳丘測量図

３．埋葬施設の構造（第12～14図，第９表，巻頭図版１，図版２～５）

埋葬施設は、南西に向かって開口する横穴式石室である。横穴式石室は開口部が大きく破壊されており、規模は不明確である。

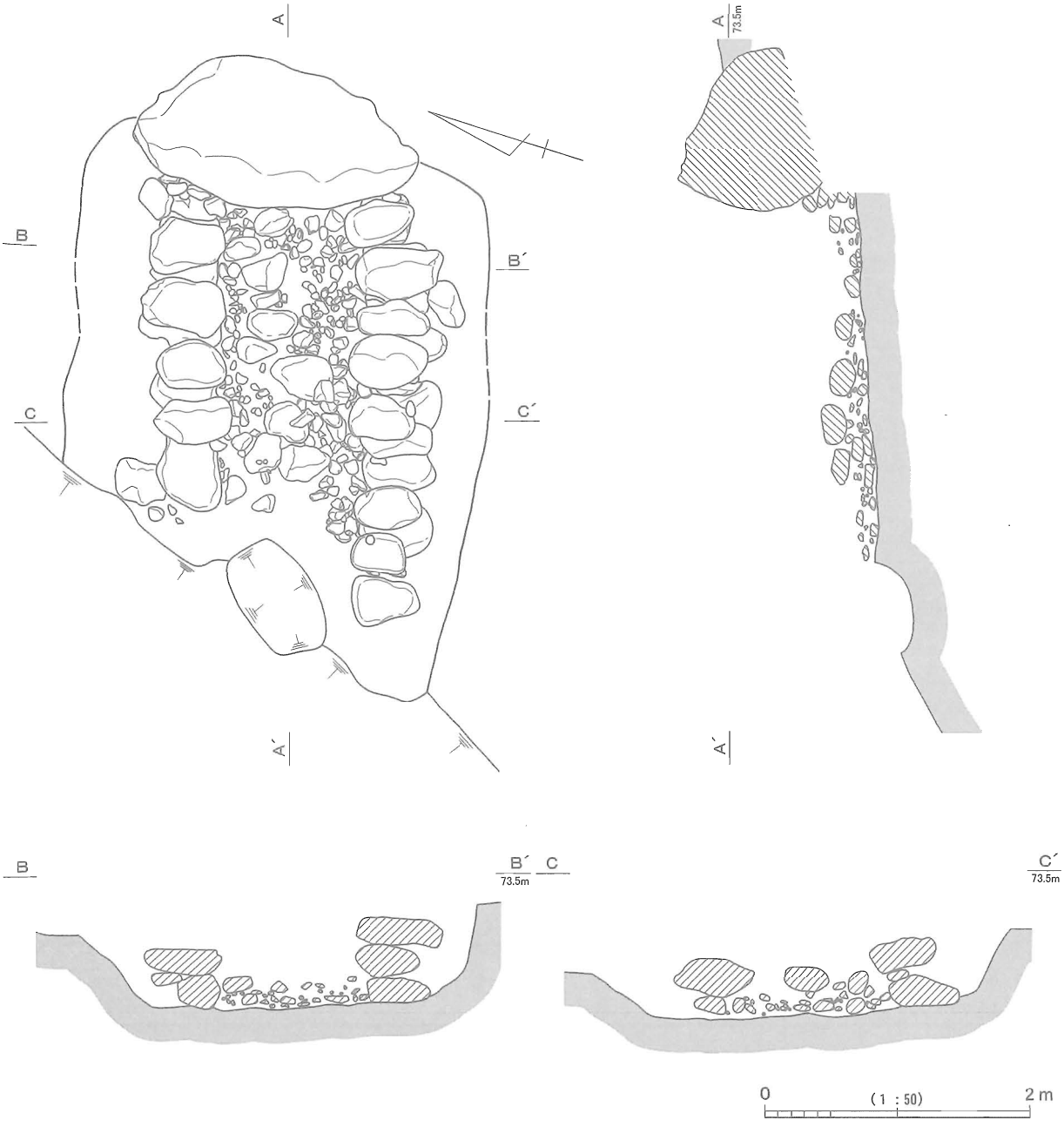
第９表　船津L-第171号墳　埋葬施設の規模

主軸方位	N-71°-E		
石室全長	3.2m以上		
玄室長	3.2m以上	玄室幅	1.1m
玄室奥壁幅	1.05m	玄室玄門側幅	1.05m
墓壙長	4.4m以上	墓壙幅	3.2m

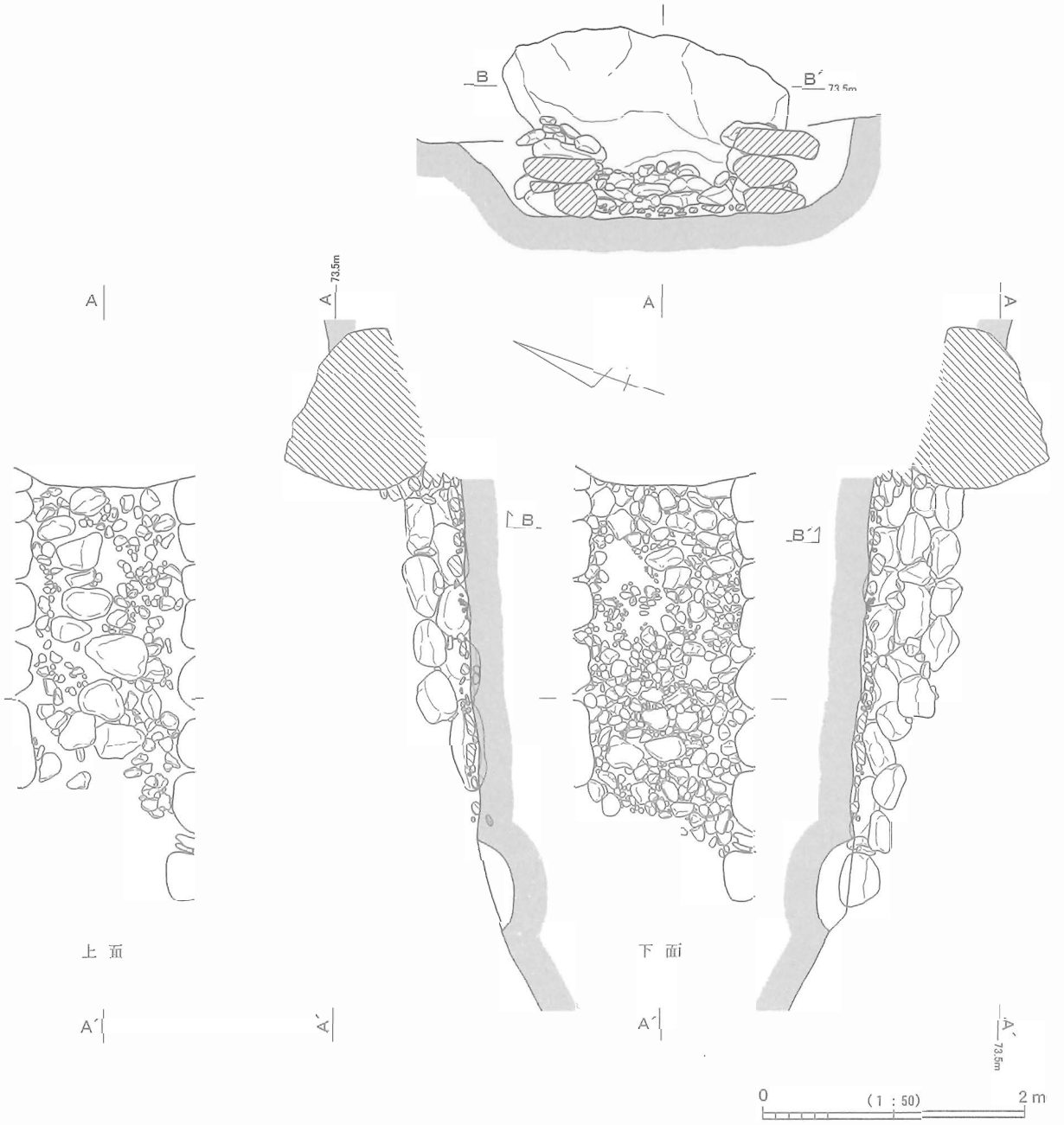
墓壙　墓壙は長方形であると想定できる。奥壁はこの墓壙内に収まらず、一部墓壙東側地山上に載せられていた可能性が高い。

墓壙底面には側壁を設置するための小土坑が確認できる。

石室　上述したとおり開口部が破壊されているため石室の形状は不明であるが、東駿河地域の横穴式石室は現状で有袖形石室は未確認であることを考慮すれば、本墳は無袖形石室であった蓋然性が極めて



第12図　船津L-第171号墳　横穴式石室検出状況

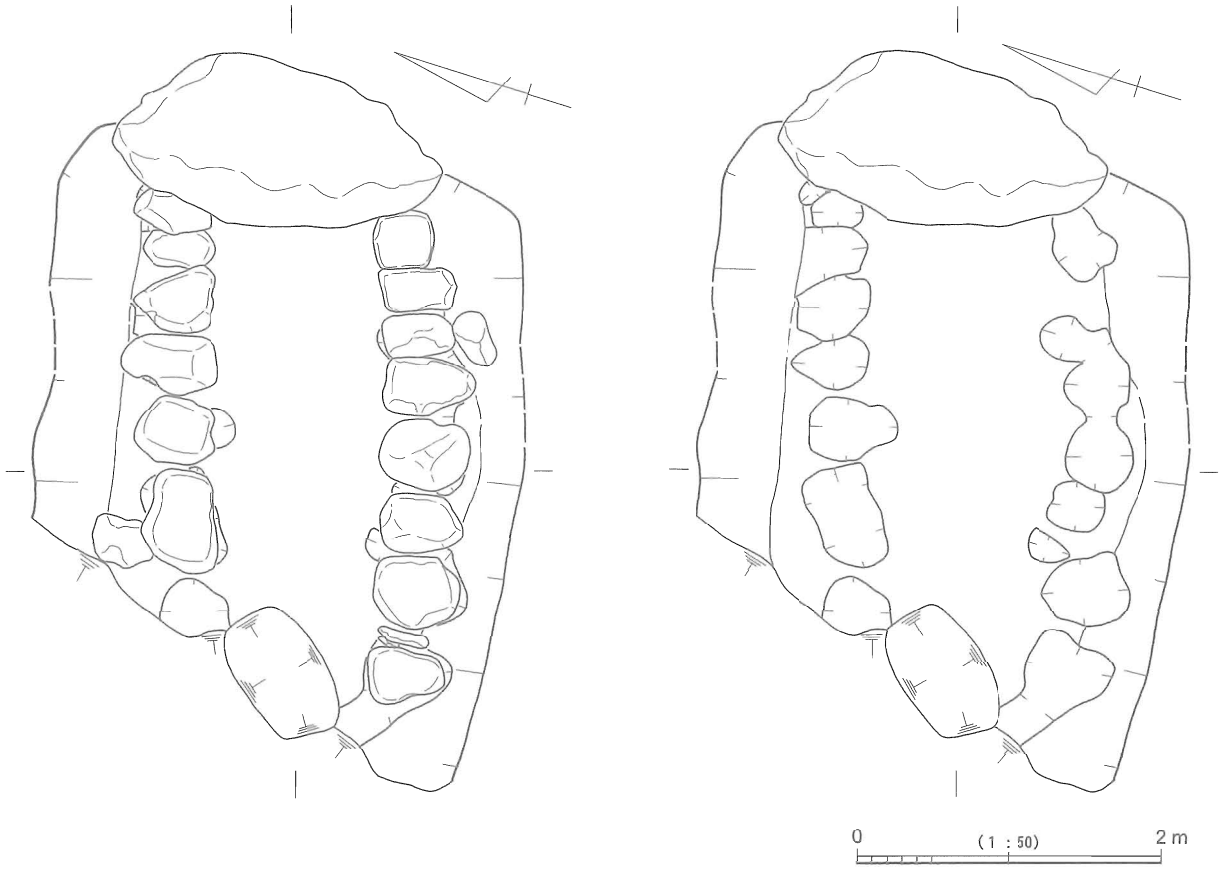


第13図　船津L-第171号墳　横穴式石室展開図

高い。石室平面は中央部がわずかに外側に向かって弧を描く（胴の張る）長方形である。

奥壁・側壁　奥壁は大型の溶岩を用いている。この石材が扁平であるためか、墓壙底面と奥壁の間には円礫を３～５段充填し倒壊しないように調整している。側壁は基底石・２段目以降ともに小口面を内側に向ける小口積みである。石材の大きさもそれほど差異はなく、基底石と２段目以上という石材の扱いの差異は確認できない。側壁は現状で３段残存しているが、奥壁の大きさからは最低６段、1.4mはあったと想定できる。

床面　敷石は２面確認できる。上面は側壁に使用された石材よりもやや小型であるが、30㎝程度の石材を奥壁まで石室中央に並べ、その石と側壁の間は拳大以下の小礫を敷き並べている。ただし、これらの石材すべてを床面として、利用したかは不明確で、奥壁側の石材と中央の石材の高さが埋葬面と想定すると奥壁と中央の石材との間の石材はこの埋葬面よりも低い位置に置かれたこととなる。この場合は奥壁側の大型の石材と中央の大型の石材を棺台のように利用した可能性が高い。



第14図　船津L-第171号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図

なお、上面の遺物の出土位置よりも想定される埋葬面が高いこと、上面出土遺物の破壊が著しいことを考慮すると、上面は埋葬面ではないことも想定できる。

下面の敷石は、人頭大の大きな石材が確認できるが、基本的に拳大以下の石材を全面的に敷き並べている。屍床仕切石は残存する床面では確認できない。

４．遺物の出土状況（第15図，図版５）

遺物は、石室内の奥壁左側壁側、下面から15cm上位の位置（上面）から鉄鏃（４～８，12・15）が出土した。一方、下面で鉄鏃（３）が出土した。この他、石室内の土砂から刀子（１・２）、鉄鏃（９・10・13・14・16・17)、馬具の可能性のある鉄片（11）が出土した。

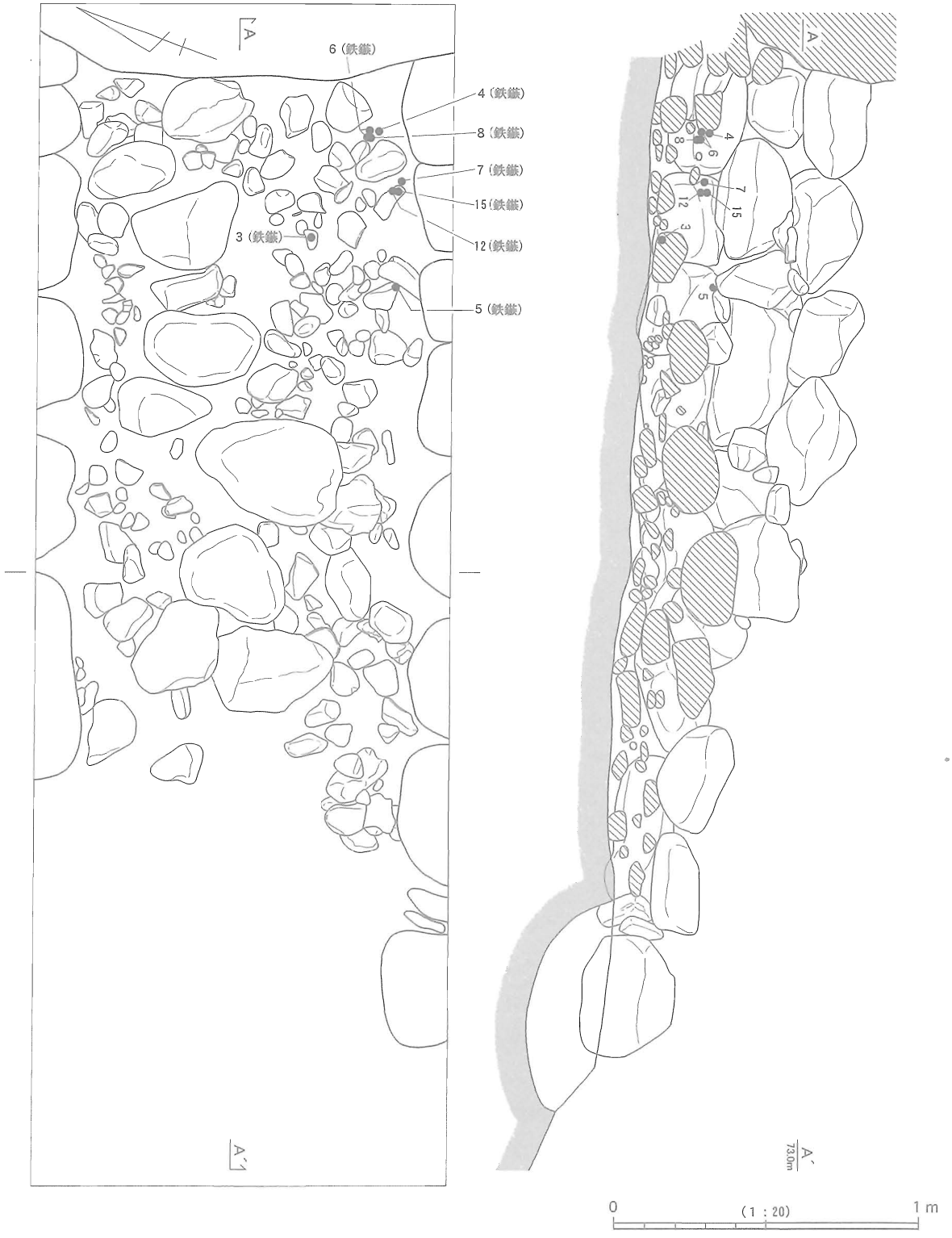
いずれも完形ではなく破壊された状態で出土していること、石室内の土砂をすべて篩掛けしてもすべての部位が揃わないことから、後世の攪乱を受けている可能性が高い。

５．出土遺物（第16図，第10表，図版５）

鉄鏃と刀子、馬具の可能性がある鉄製品が出土した。

上面では鉄鏃（４～８，12・15)、下面で鉄鏃（３)、石室内の土砂から刀子（１・２)、鉄鏃（９・10・13・14・16・17)、馬具の可能性のある鉄片（11）が出土した。

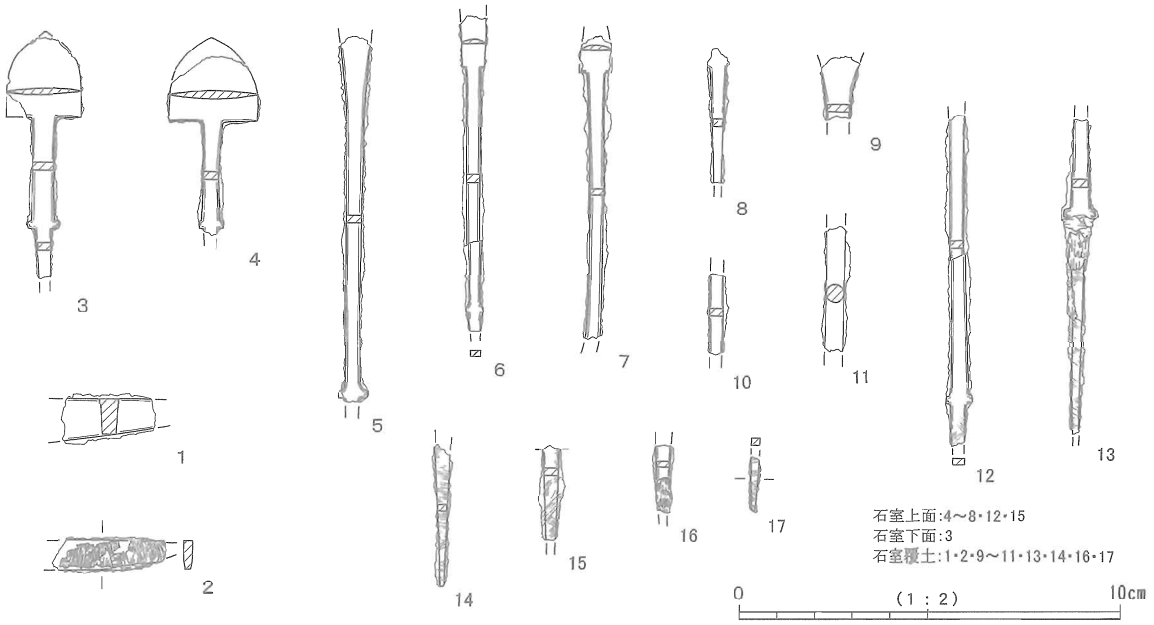
鉄器　刀子２点（１・２）はともに茎片である。１は茎尻に向かい先細る茎である。２も同じく茎尻に向かい先細る茎で、木柄が残る。この木柄は茎の棟に対して直交・斜交する木目（樹皮）と平行する木目が確認でき、直交する木目を平行する木目が覆うことから、茎に樹皮巻きした後、木柄を装着した可能性が高い。



第15図　船津L-第171号墳　横穴式石室遺物出土状況図

鉄鏃は茎数から最低８点（上面６点，下面１点，他１点）存在する。下面から出土した３はふくらの張る五角形式に近い平根三角形式である。鏃身関は直角関、鏃身は平造である。茎関は棘関である。

上面出土の４はふくらが張る平根三角形式である。鏃身関は直角関、鏃身は平造で、茎関は棘関である。３と比較して鏃身幅が広い。上面出土の５～７は長頸鏃である。５は、茎関～鏃身にかけての破片で、撫関あるいは無関の鉄鏃であり、尖根鑿箭式の可能性が高い。６・７は尖根柳葉式で、鏃身関は明



第16図　船津L-第171号墳　横穴式石室出土遺物実測図

第10表　船津L-第171号墳　出土鉄製品観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	幅(cm)	鏃身長(cm)	鏃身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	備考
L-第171号墳	石室覆土	16	5	1	刀子	茎	2.67	(2.5)	(1.1)	-	-	-	-	(2.5)	(1.1)	
				2	刀子	茎	2.70	(3.0)	(0.8)	-	-	-	-	(3.0)	(0.8)	
	石室下面			3	鉄鏃	鏃身～茎	3.88	(6.3)	1.9	(2.1)	1.9	2.9	0.5	(1.3)	0.3	平根三角形式
	石室上面			4	鉄鏃	鏃身～茎	4.08	(4.7)	2.3	(1.7)	2.3	2.8	0.5	(0.2)	0.4	平根三角形式
				5	鉄鏃	鏃身～茎	3.75	(9.6)	0.8	-	-	(9.5)	0.8	(0.1)	0.3	尖根鑿箭式？
				6	鉄鏃	鏃身～茎	3.61	(8.2)	(0.7)	(1.3)	(0.7)	6.4	0.3	(0.6)	0.3	尖根柳葉式
				7	鉄鏃	鏃身～頸部	3.36	(7.9)	(0.8)	(0.9)	(0.8)	(7.0)	0.4	-	-	尖根柳葉式
				8	鉄鏃	頸部～茎？	1.06	(3.5)	0.5	(0.4)	-	(3.1)	0.4	-	-	
	石室覆土			9	鉄鏃	頸部	0.90	(1.5)	(0.9)	-	-	(1.5)	(0.9)	-	-	
				10	鉄鏃	頸部	0.63	(2.1)	0.3	-	-	(2.1)	0.3	-	-	
				11	不明(馬具轡引手か銜？)		4.17	(3.3)	0.5	-	-	-	-	-	-	
	石室上面			12	鉄鏃	頸部～茎	3.98	(8.6)	0.4	-	-	(7.5)	0.4	(1.1)	0.4	
	石室覆土			13	鉄鏃	頸部～茎	2.97	(8.2)	0.4	-	-	(2.6)	0.4	(5.6)	0.4	
				14	鉄鏃	茎	2.97	(3.7)	0.4	-	-	-	(0.5)	(3.7)	0.4	
	石室上面			15	鉄鏃	茎	0.94	(2.5)	0.4	-	-	-		(2.5)	0.4	
	石室覆土			16	鉄鏃	茎	0.50	(1.8)	0.4	-	-	-		(1.8)	0.4	
				17	鉄鏃	茎	0.15	(1.4)	0.2	-	-	-		(1.4)	0.2	

(　)は残存値

瞭な直角関、鏃身は片丸造で、茎関は棘関である。上面出土の8は図上部から下部に向かって細くなることから茎関～茎片の可能性が高い。関は棘関であろう。12は尖根式の頸部～茎片で、茎関は棘関である。15は茎片である。12・15は矢柄装着前に施された樹皮巻きの痕跡が残る。

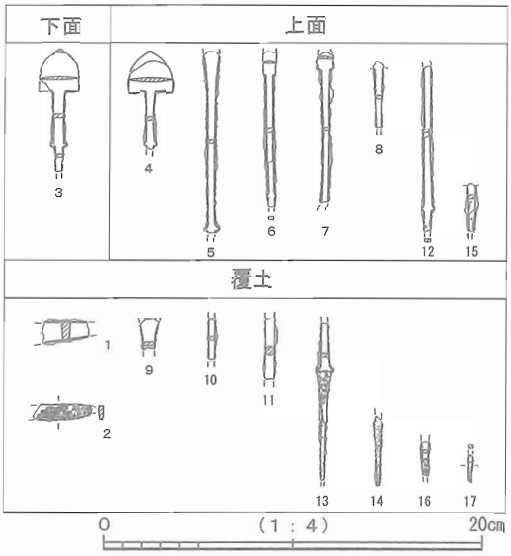
覆土出土の9は頸部の幅がやや広いことから、幅が広い鏃身をもつ長頸鏃である可能性が高い。富士市（旧富士川町）谷津原6号墳のような平根の撫関長三角形式と上述した鑿箭式の可能性があるが、平根撫関三角形式は東日本では副葬されることが少ない遺物であることから、後者の可能性が高い。覆土出土の13は尖根式鉄鏃の頸部～茎片で茎関は棘関である。13の茎には矢柄の痕跡が良好に残存している。まず茎に樹皮巻を施した後、矢柄を装着し、その矢柄を樹皮で巻きつける（口巻き）手法であることが判明する。覆土出土の10は頸部片、覆土出土の14・16・17は茎片である。これらには樹皮巻きの痕跡が残存する。

覆土出土の11は断面円形の棒状鉄製品である。鉄鏃の頸部や茎は方形あるいは長方形であることが多く、本墳から出土した鉄鏃には断面円形のものは確認できないため鉄鏃ではない。鉄鏃以外で断面円形の鉄製品には、馬具の引手・銜、鐙の兵庫鎖などがあることから馬具の可能性がある。このほか断面円形の鉄製品は紡錘車の軸棒などが想定できるが、出土数からすると馬具である可能性の方が高い。

６．小結

築造時期　石室内や周溝などから土器が出土していないことから時期を特定することは難しい。出土した鉄製品のうち五角形式に近い平根三角形式や、ふくらの張る鏃身を持つ平根三角形式は、TK209型式期（遠江Ⅲ期後葉）以降に位置づけられる可能性が高く、特に後者はTK217（飛鳥Ⅰ～Ⅱ期，遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半）に多い形状といえる。尖根柳葉式は、古墳時代終末期には減少する形態であり、鏃身関が直角関であることからTK209型式期までに収まる可能性が高いが、TK217型式期まで残存する可能性もある。したがって、築造時期はTK209型式期（遠江Ⅲ期後葉）以降の築造で、TK217型式期（遠江Ⅲ期末～Ⅳ期前半）に追葬があったと考える。

追葬　鉄鏃に時期差がある可能性があり、追葬が行われた可能性が高い。



第17図　船津L-第171号墳の埋葬と副葬品の関係

上面とした箇所が想定通り床面であれば、埋葬面が２面となり、世代を超えた追葬が行われた可能性がある。ただし、何人が埋葬されたかについては不明である。

第４節　古墳に伴わない遺物

船津古墳群の調査では、古墳に伴わない遺物として、古墳の表土中から石器、縄文土器、土師器（駿東型甕）、陶器が出土している。（大谷）

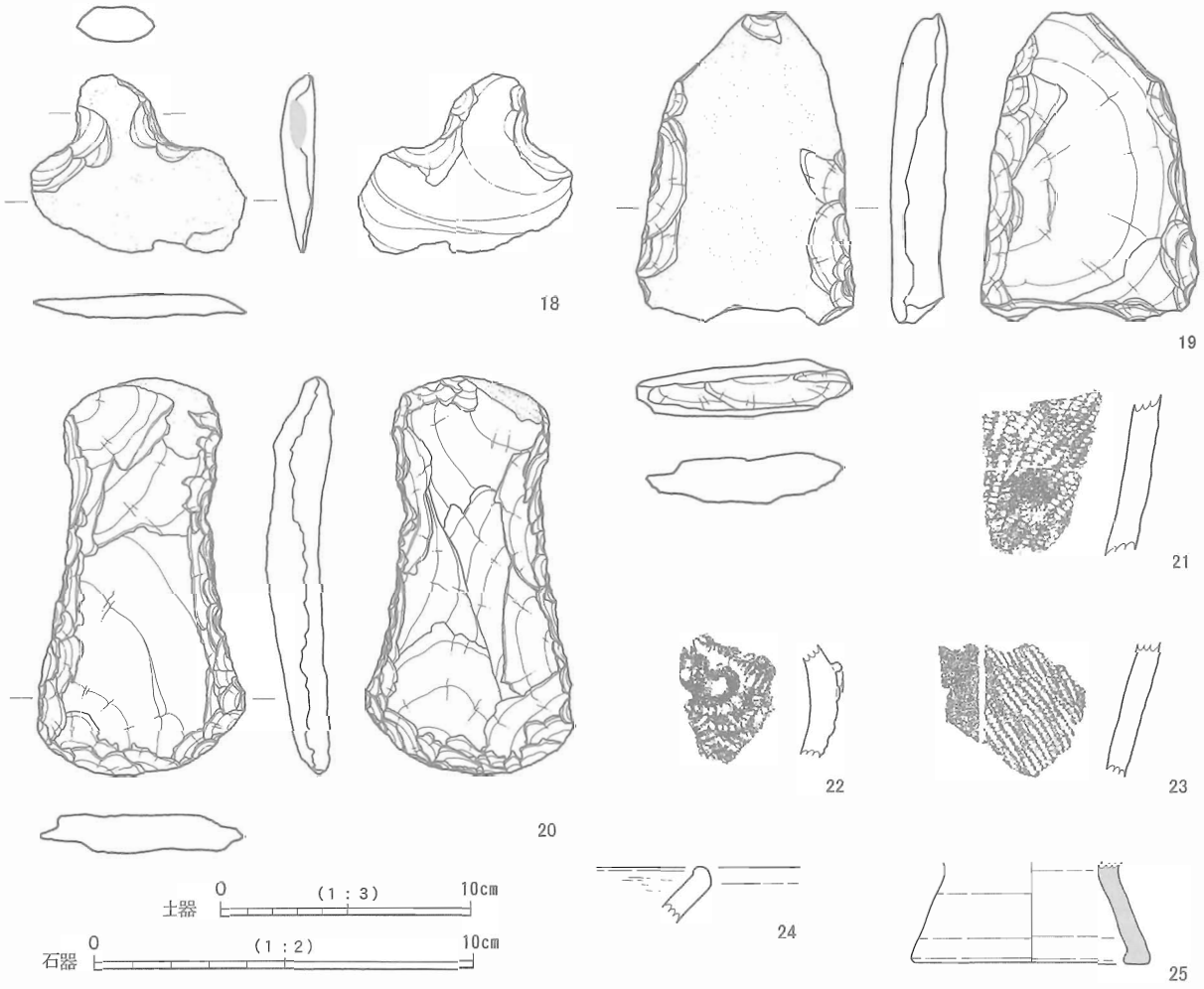
１．石器（第18図，第11表，図版５）

船津L-第171号墳の表土から石匙、打製石斧が出土した。

石匙　18は横長の石匙である。礫面を有した剥片を素材として、上部につまみ部を作出している。つまみ部は摩滅している。つまみ部以外に加工は確認できない。石材はホルンフェルスである。

打製石斧　２点（19・20）図示した。19は打製石斧の折損品である。器体の縁辺に加工を施しているが、器体中央までは及んでいない。表面は大半が礫面である。両側縁が摩耗しているが、風化がはげしいため、着柄痕であるかの判断は困難である。下半部を折損している。そのため全体の形状は不明である。石材は輝石安山岩である。

20は撥形の打製石斧である。両側縁を中心に加工を施し、整形している。加工は器体中央まで及んでいない。両側縁に着柄痕と考えられる潰れが確認できる。石材は頁岩である。（柴田）



第18図　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない遺物実測図

第11表　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない石器観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
船津L-第171号墳墓壙	18	5	18	石匙	ホルンフェルス	4.7	5.7	0.9	20.88	なし	
第１トレンチ			19	打製石斧	輝石安山岩	8.2	5.7	1.5	74.23	あり	
第４トレンチ耕作土下			20	打製石斧	頁岩	10.5	5.4	1.7	101.07	なし	

第12表　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない土器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
船津L-第171号墳	周溝内	18	(写真15)	21	縄文土器	深鉢	胴部	5	-	-	-	-	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR4/2)	諸磯式？
	表採			22	縄文土器	深鉢	胴部	5	-	-	-	-	明赤褐(5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	勝坂式？
	周溝内			23	縄文土器	深鉢	胴部	5	-	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	褐(7.5YR4/6)	加曽利E式？
	表採		(写真16)	24	土師器	甕	口縁部	5	-	-	-	-	橙(5Y6/6)	橙(5Y6/6)	駿東型甕
	表土			25	古瀬戸	瓶子？	脚部	30	-	-	-	(9.5)	明黄褐(2.5Y6/6)	明黄褐(2.5Y6/6)	

(　)復原値

2．縄文土器（第18図，第12表，写真15）

3点（21～23）図示した。

21は、外面には縄文が残る。縄文時代前期後半の諸磯式の可能性が高い。

22は、深鉢の胴部片で、貼り付けによるリボン状の文様を造り出し、その周囲に連続の刺突文を巡らせる。縄文時代中期の勝坂式土器の可能性が高い。

23は、縦位の沈線（凹線）文が確認できる。縄文時代中期の加曽利ＥⅣ式の可能性が高い。　（大谷）

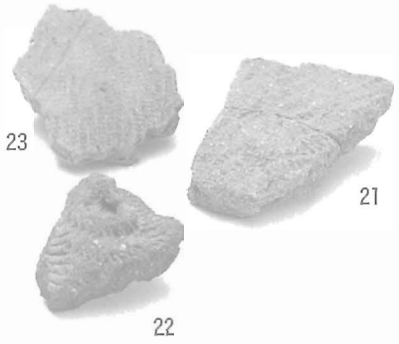


写真15　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない縄文土器

3．古代以降の土器・陶器（第18図，第12表，写真16）

土師器（駿東型甕）、陶器が出土した。

土師器　駿東型甕（24）は口縁部の小片で、外反しながら立ち上がり、口縁部内面には低い突帯が形成されている。口縁部の形状は船津L-第202号墳から出土した駿東型甕（富士市教委1988）に類似しているが、全体的な形状が不明なため、時期を特定することは難しい。古墳時代後期後半～奈良時代中頃に位置づけられようか。古墳時代に帰属する場合には、船津L-第171号墳に副葬された遺物である可能性もある。

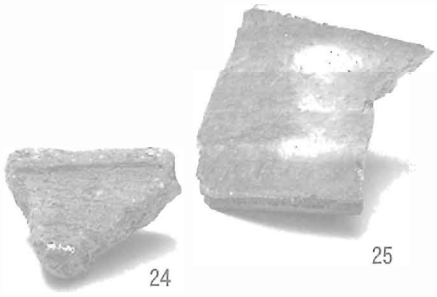


写真16　船津L-第171号墳出土の古墳に伴わない古代以降の土器・陶器

陶器　陶器は瓶子？1点（25）で、古瀬戸の可能性が高い。脚部片で、接合部からハ字形に開き、脚端部は内側に折り曲げられ、その先端は三角形に仕上げられている。内外面に釉薬が塗布されている。帰属時期は古瀬戸後期（14世紀後半～15世紀）に位置づけられる可能性が高い（藤澤2005）。

近接地では中世の遺跡は周知されておらず、単独で所在する中世墓（蔵骨器）であろうか。（大谷）

参考文献

参考文献は第９章末（153・154頁）に記載した。そちらを参照願いたい。

第５章　須津古墳群

第１節　須津古墳群の概要

１．須津古墳群の概要（第13表）

須津古墳群は富士市のほぼ中央、愛鷹山麓の丘陵上に築造された古墳群である。須津古墳群は、広義には赤淵川～江尾川に挟まれた地域の古墳群総称（吉原市教委1958）で、須津川東岸を狭義の須津（Ｊ，神谷）古墳群、西岸の古墳群を中里（Ｋ）古墳群、やや離れた位置にある浅間古墳を中心とする古墳群を増川（Ｉ）古墳群と呼称している。

分布調査により200基以上（中里古墳群80基以上，須津古墳群120基以上，増川古墳群４基以上）の古墳が存在することが想定されている。

これまでの調査等で、中里古墳群のK-第78号墳（大道東アガリット古墳）、K-79号墳（道東古墳）、K-第95号墳（中里大久保古墳）、中里K-第97～99号墳などから鏡、装飾付大刀、馬具、銅碗など豊富な遺物が出土している。これらの副葬品からみると富士市域の古墳群の中でも有力な古墳群であったことが想定できる。

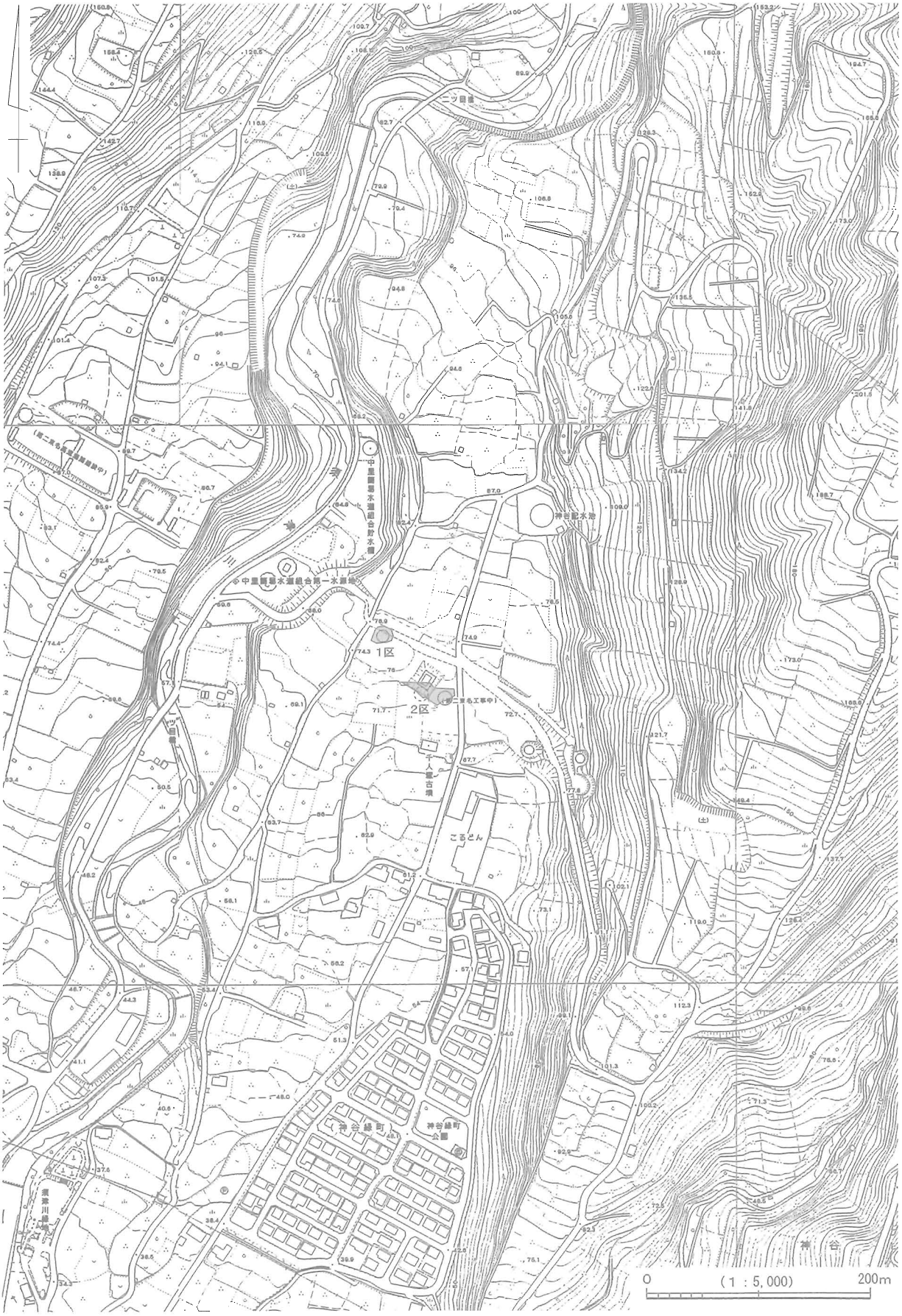
須津古墳群では様相が明確な古墳は少ない。当古墳群中に計画された大塚団地の建設に伴い２基（J-第139号墳、J-第140号墳）が調査され、無袖形石室であることが判明した。J-第139号墳からは須恵器や、刀吊金具と推測する金具、刀子などが出土した。遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期，鈴木敏2001・2004）に築造され、遠江Ⅴ期に追葬された可能性が高い。J-第140号墳からは須恵器、鉄鏃、刀子が出土した。遠江Ⅴ期前半（平城Ⅰ期）に位置づけられる（富士市教委1976）。

このほか須津古墳群からは双龍環頭大刀柄頭や須恵器、大刀などが出土している。

第13表　須津古墳群の主要古墳および調査された古墳一覧

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	規模	副葬品	文献	備考
J-第６号墳	円墳	13±	無袖形石室	6.3+	玉類・耳環・大刀・馬具・鉄鏃・刀子・針	本書	
J-第10号墳	円墳	17+	無袖形石室	10.6	須恵器	富士市教委1988	千人塚古墳 富士市指定文化財
J-第30号墳	円墳	－	横穴式石室	－	玉類・耳環・装飾付大刀・甲冑・馬具・須恵器		神谷大塚古墳
J-第118号墳	不明	－	無袖形石室	5.3+	刀子	本書	
J-第139号墳	円墳	11	無袖形石室	5.75	吊金具・刀子・玉類・須恵器	富士市教委1976 富士市教委1988	大塚団地第１号墳
J-第140号墳	円墳	－	無袖形石室	５±	鉄鏃・刀子・須恵器		大塚団地第２号墳
J-第159号墳	円墳	10	無袖形石室	4.75	玉類・耳環・大刀・馬具・刀子・鉄鏃・弓飾金具・須恵器	本書	
K-第２号墳	円墳	31	（未調査）	－	（未調査）	富士市教委1988	琴平古墳 静岡県指定文化財
K-第76号墳	不明	－	横穴式石室	－	大刀・馬具・須恵器		先陣塚古墳
K-第78号墳	不明	－	横穴式石室	－	鏡・馬具・大刀・須恵器		大道東アガリット古墳
K-第79号墳	円墳	－	横穴式石室	5.4	玉類・銅碗・砥石・大刀		道東古墳
K-第93号墳	後円墳?	－	石棺直葬?	－	大刀・剣・鉄器		寺屋敷古墳
K-第95号墳	円墳	12	無袖形石室	6+	耳環・玉類・圭頭大刀・馬具・須恵器		中里大久保古墳
K-第97号墳	不明	－	横穴式石室?	－	大刀・刀子・鉄鏃・須恵器		
K-第98号墳	不明	－	横穴式石室	－	馬具・大刀・刀子・鉄鏃・須恵器		
K-第99号墳	不明	－	無袖形石室	－	馬具・大刀・刀子・鉄鏃・玉類・耳環・須恵器		

※数値の後の「±」＝前後（程度）　　後円墳＝前方後円墳　　単位（m）



第19図　須津古墳群の調査区の位置①

2．須津古墳群の調査歴

（1）既往の調査について（第14表）

須津古墳群は千人塚古墳など大型の古墳が所在することから古くから著名な古墳群であるが、調査された古墳は少ない。

上述したように須津古墳群では、昭和50（1975）年に大塚団地の建設に伴い2基の古墳（J-第139・140号墳）が調査されたのが第1次調査であり、今回の第二東名建設に伴う、J-第6・118・159号墳の3基の古墳の調査が第2次調査となる。

第14表　須津古墳群の調査歴

調査歴	調査年次	調査された古墳	調査原因	報告書等
第1次調査	1975	139・140号墳	大塚団地造成	富士市教委1976
第2次調査	1998・99	6・118・159号墳	第二東名	本書

（2）今回の調査地点（第19・20図）

第二東名建設事業地は須津古墳群の北部にあたり、予定地のすぐ南に千人塚（せんにんづか）古墳が所在する（第20図）。建設予定地内には、分布調査により10基近くの古墳の存在が想定された。その場所は多くの溶岩礫があった場所である。確認調査の結果、古墳と断定できない箇所が多く、3基のみが本発掘調査の対象となった。しかし、通常溶岩礫が集中する場合は稀有であると考えられることから石室が存在したが既に破壊され、現在の位置に纏められたと判断できる。

今回調査した3基の古墳は須津古墳群中の標高72～77mの丘陵緩い斜面に築造された古墳で、J-第6号墳とJ-第118号墳が近接するため1区として調査し（第20図）、1区から60m北西にある須津J-第159号墳を2区として調査を実施した。

なお、分布調査によりJ-第6号墳、J-第118号墳とされた位置と今回の位置は必ずしも一致していない。

第20図　須津古墳群の調査区の位置②

第２節　調査の体制と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

須津J-第６・118・159号墳の発掘調査は、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝　　調査研究員　蔵本俊明・梶葉良久・丸杉俊一郎・大谷宏治(確認調査)
石田　勉・武田寛生（本発掘調査）

２．確認調査および本発掘調査の経過

確認調査　確認調査は、平成10年度に第二東名No. 45地点確認調査として実施した。調査は平成10年６月４日に資機材の搬入を行った後、草木の伐採を行い、６月５日に現状の写真撮影を実施した。６月８日から試掘溝を設定し、順次重機と人力にて掘削し、古墳の確認を行った。以後、８月５日まで試掘溝掘削、遺構確認を実施し、一旦休止した後、９月１日～３日に試掘溝埋め戻しを行い、確認調査を終了した。

写真17　横穴式石室精査作業

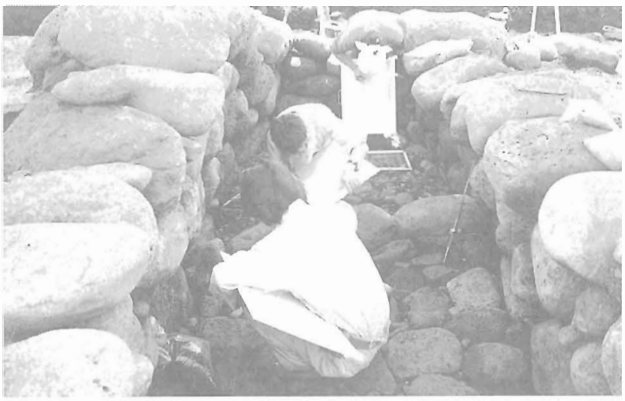


写真18　横穴式石室実測作業

当初は６基以上の古墳が所在することを想定したが、確認調査の結果、須津J-第６・118・159号墳の３基が残存していることが判明した。

本発掘調査　本発掘調査は、平成10年度に第二東名No.45地点本調査その１として１区（須津J-第６・118号墳）の本発掘調査を、平成11年度にNo.45地点本調査その２として主に２区（須津J-第159号墳）の本発掘調査を実施した。

本調査その１は平成11年２月１日に現地詰所を設営し、資機材の搬入を行い、１区の表土除去を行うとともに古墳の検出作業を開始した。検出が終了した古墳から順次石室の精査、周溝の掘削を実施し、石室内の調査が終了した２月22日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を行った。その撮影終了後、石室の実測、遺物の取り上げを行い、３月31日に調査を終了した。

本調査その２は、平成11年４月１日から本調査その１の作業を継続し、須津J-第６・118号墳の解体作業等を行った。併せて２区の表土除去を開始し、古墳の検出作業を行った。検出した須津J-第159号墳の石室精査等を行い、石室内の掘削が終了した４月27日に空中写真撮影・空中写真測量を実施した。撮影後、石室の実測、遺物等の取上げを行った後、石室を解体し、５月12日に作業を終了した。

なお、本発掘調査と併せて、出土品の洗浄・注記、遺物台帳の作成などの基礎整理作業を行った。

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過については、第２章に詳述しているので参照願いたい。

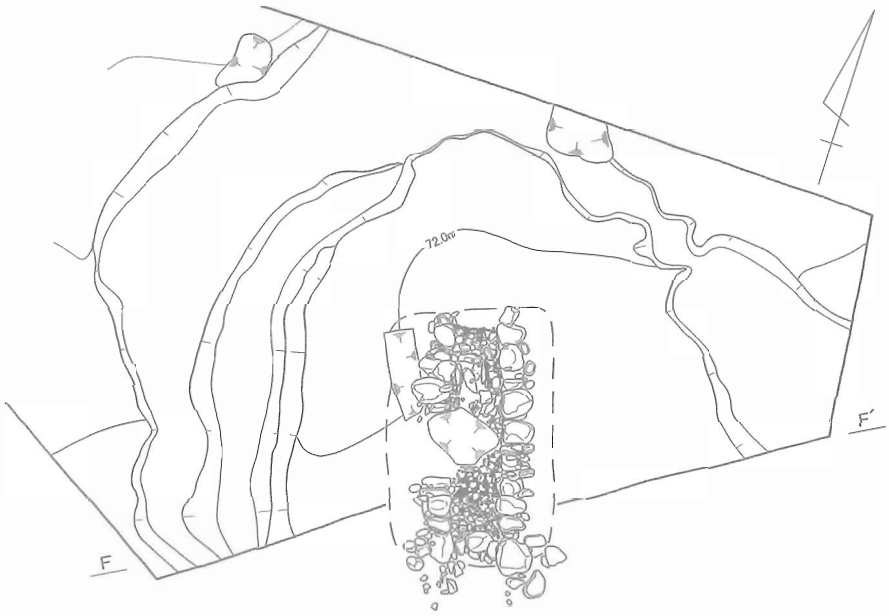
第３節　須津古墳群の調査成果

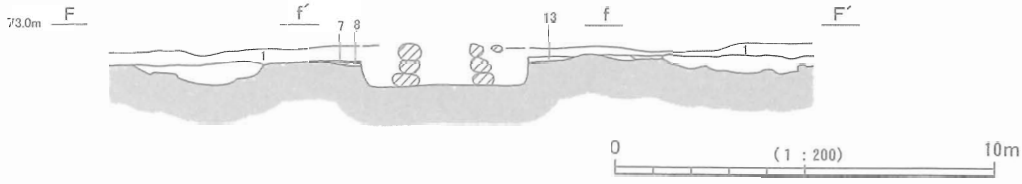
１．須津J-第６号墳

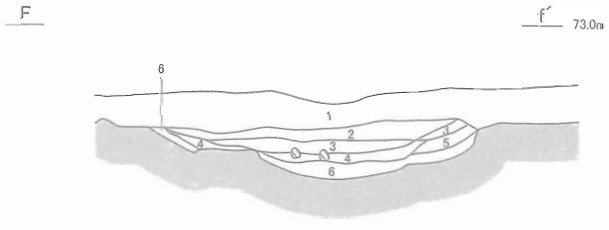
（１）古墳の現況

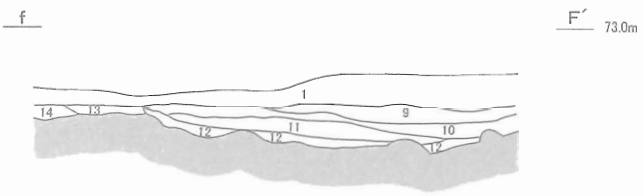
須津J-第６号墳は、当初大型の石材が露出していたため確認調査を行ったものであることから、調査前から古墳の存在は想定できた。古墳周辺は畑地として利用されていた。

古墳は愛鷹山麓の緩斜面、標高72m付近に築造される。当古墳から南側40mには、富士市指定文化財千人塚古墳（須津J-第10号墳）がある。

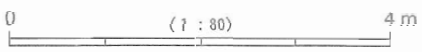








1　表土
2　黒色土　大渕スコリア含む　しまりなし
3　黒色土　大渕スコリア多く含む　固くしまる
4　黒色土　しまりなし
5　黒色土　大渕スコリア含む
6　黒褐色土　大渕スコリア含む　固くしまる
7　黒色土　大渕スコリア多量
8　黒色土　大渕スコリア多く含む
9　黒色土　大渕スコリア含む　しまりなし
10　黒色土　大渕スコリア多く含む　固くしまる
11　黒色土　大渕スコリア含む　しまりなし
12　黒褐色土　大渕スコリア含む
13　黒色土　橙色スコリア多く含む　固くしまる
14　黒褐色土　大渕スコリア含む

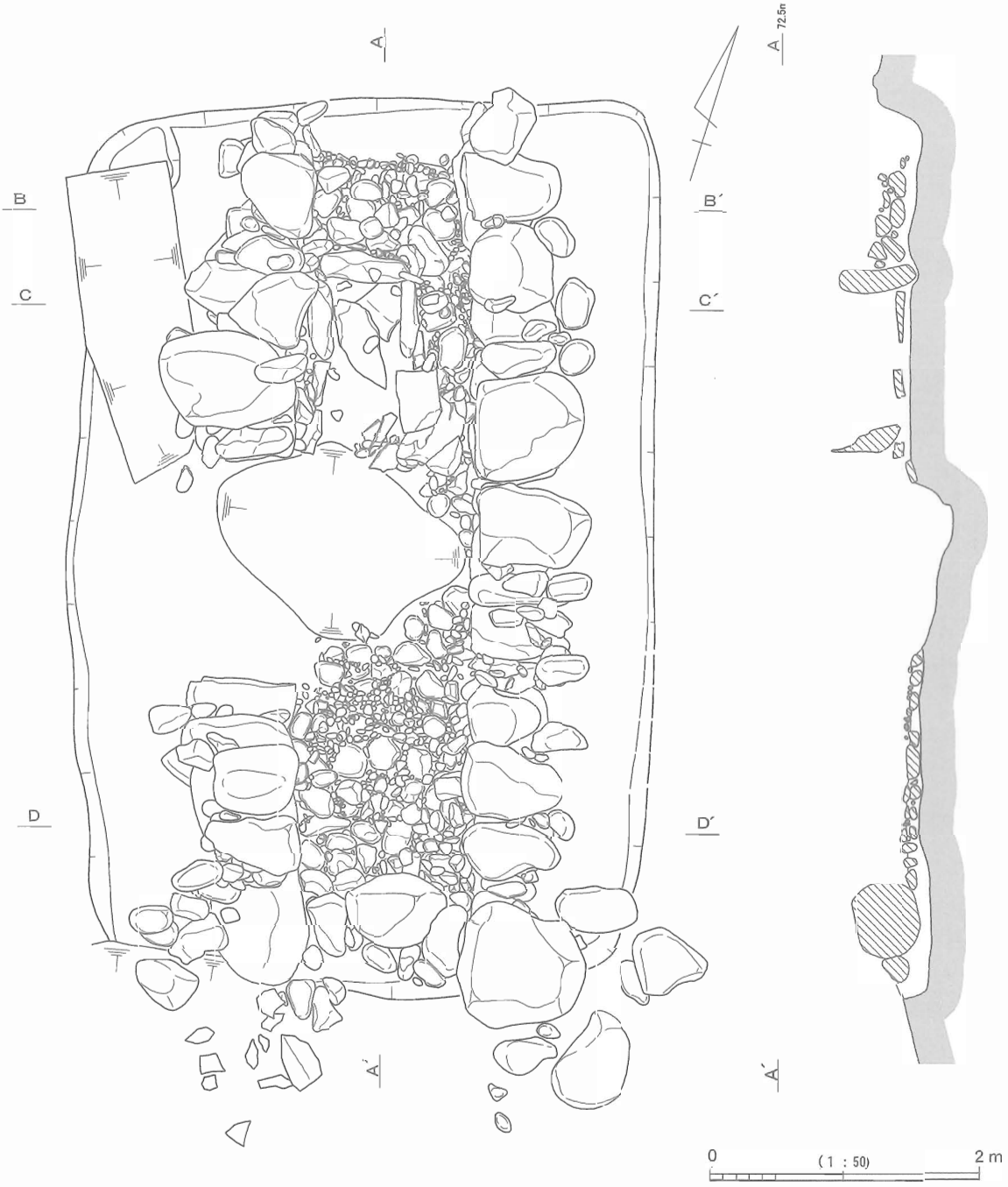


第21図　須津J-第６号墳　墳丘測量図および周溝土層図

（２）墳丘の構造（第21図，巻頭図版２，図版６～８）

墳丘　墳丘盛土は、耕作により大部分が失われており、一部横穴式石室の裏込めから続く第一次墳丘（第21図F-F′断面の７・８層と13層）と第二次墳丘の可能性がある土砂（第21図f-F′断面の14層と13層）が残存していた。東側周溝の石室側の土層は内側の土砂（第21図f-F′断面の14層）の上に外側の土砂（同13層）が乗るような状況を示しており、第二次墳丘の可能性がある。この想定が正しければ、内側の第一次墳丘を覆うように外側に向けて第二次墳丘を盛ったことになる。

周溝　周溝は二段検出されたが、当初から二段であったかどうかは不明である。二段目は幅が広く、外側の外形線が扁平であることから後世の攪乱あるいは雨水の流入による変形部分と想定できる。したがって、一段目（内側）の周溝部分が古墳築造当初の周溝と想定する。この周溝は北側・南側が失われており、東西で確認できるのみである。



第22図　須津J-第６号墳　横穴式石室検出状況図

周溝は弧状を描いており、J-第６号墳は不整形な円墳と想定できる。東西13m前後、南北は推定で13m前後である。

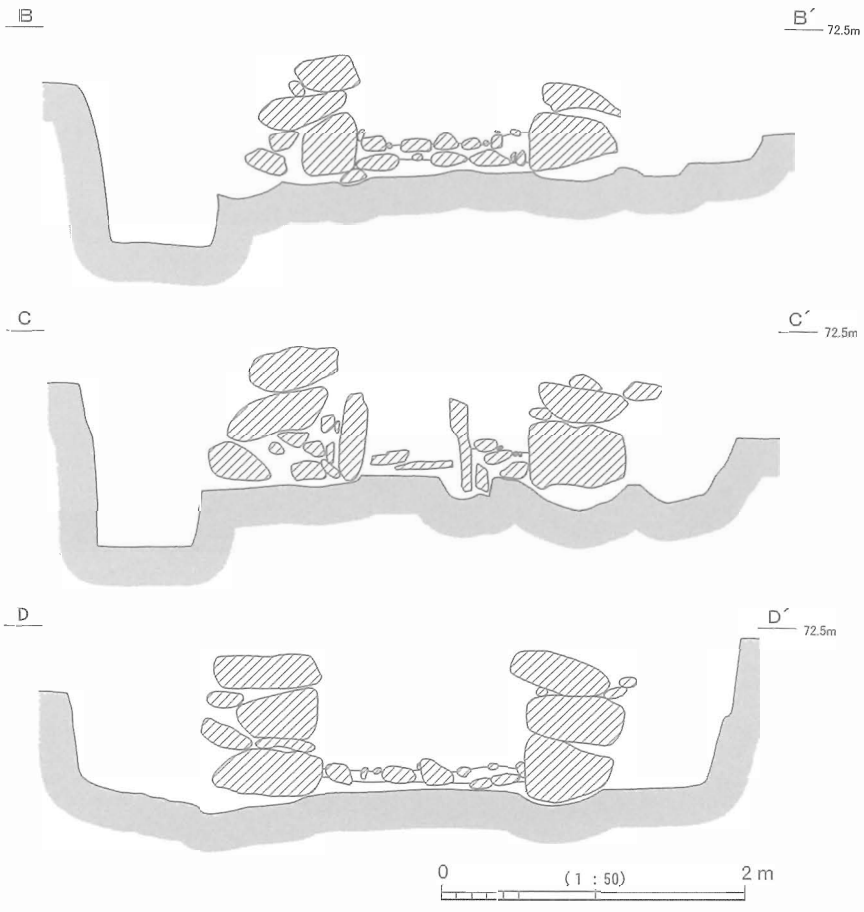
周溝は二段目までの場合は東側で最大幅４m（検出上面）、西側で最大幅5.5mである。本来の周溝である可能性が高い一段目では、東側は不明確、西側は2.5～３mである。

周溝出土遺物（第29図，第19表，巻頭図版４，図版17）　周溝からは須恵器甕片を中心として、須恵器平瓶１点、胴部片１点が出土した。

甕片（10）は外面に平行タタキを施した後、カキメ調整を行う。内面には同心円の当て具の痕跡が明瞭に残存する。11は外面に平行タタキを、方向を変えて２回行っている。内面には同心円の当て具の痕跡が明瞭に残る。14は外面に平行タタキを、方向を変えて２回行い、内面はナデ調整が行われている。頸部に近い位置の破片である可能性が高い。甕（15）は、図上でほぼ完形に復原したが、胴部片は頸部片とやや胎土の特徴が異なるようにも見えるため別個体の可能性もある。口縁部は頸部から外上方に向かって逆ハ字形に開き、口縁端部は肥厚させ、上面には平坦面を形成し、口縁部内面は内側に突出させている。口縁部外面には、ヘラで連続的に斜めの刻み目を施している。胴部外面には平行タタキを施した後、カキメ調整を行う。内面には同心円の当て具の痕跡が明瞭に残存する。

平瓶（９）は大型の平瓶で、頸部が太い。頸部から外反しながら立ち上がり、口縁端部は外形する三角形を呈する。胴部下半には平行タタキの痕跡がわずかに残存するが、丁寧にナデ消している。内面は当て具の痕跡を丁寧にヘラ削り・ナデ調整している。静岡県西部の湖西市～愛知県東部の豊橋市にある湖西窯産の可能性が高い（以下、湖西産とする。）

胴部片（８）は袋物（壺瓶類）の破片であるが、底部に近い位置の破片があるが脚部は取り付けられていないため長頸壺ではない。坩あるいは平瓶などの可能性があるが特定できない。胴部中央と下部に二重の凹線が確認でき、底部はヘラ削りされている。湖西産の可能性が高い。



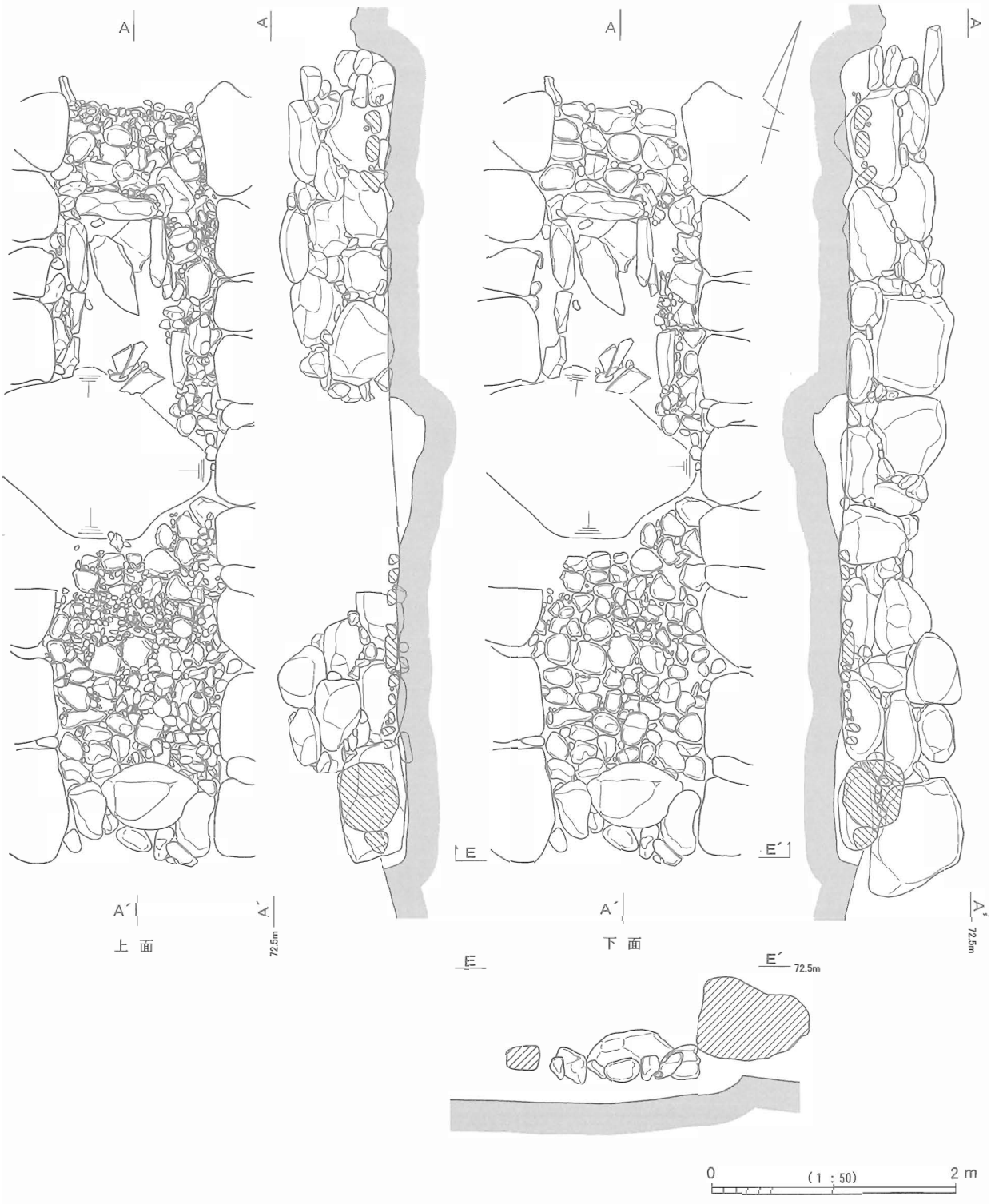
第23図　須津J-第６号墳　横穴式石室断面図

（３）埋葬施設の構造（第22～26図，第15・16表，巻頭図版３，図版８～13）

埋葬施設はほぼ南側に向かって開口する段構造（框石）を有する無袖形横穴式石室（有段無袖形石室）である。墓壙の一部と石室の中央、石室前面の墓道付近が大きく攪乱、削平されており築造当初の形状を留めていない。

墓壙　墓壙は竪穴構造の

隅丸長方形であり、第22図の開口部左側壁側（文字Ａ´の右側）の石材が前庭側壁とした場合は、玄室部分が墓壙内、前庭側壁は墓壙外に設置されたことになる。墓壙は奥壁側で深さ0.35m、玄門側で深さ0.18m掘り込んでいる。墓壙は半地下式構造であるが、第22図のＡ´の右側の石材が墓壙の肩部に載せられていることからも、墓壙の上面は削平を受けておらず築造当初の形状を保持していると想定できるため、墓壙内に収まるのは基底石のみで、石室の大部分は地上に構築されたと考えられる。



第24図　須津J-第６号墳　横穴式石室実測図

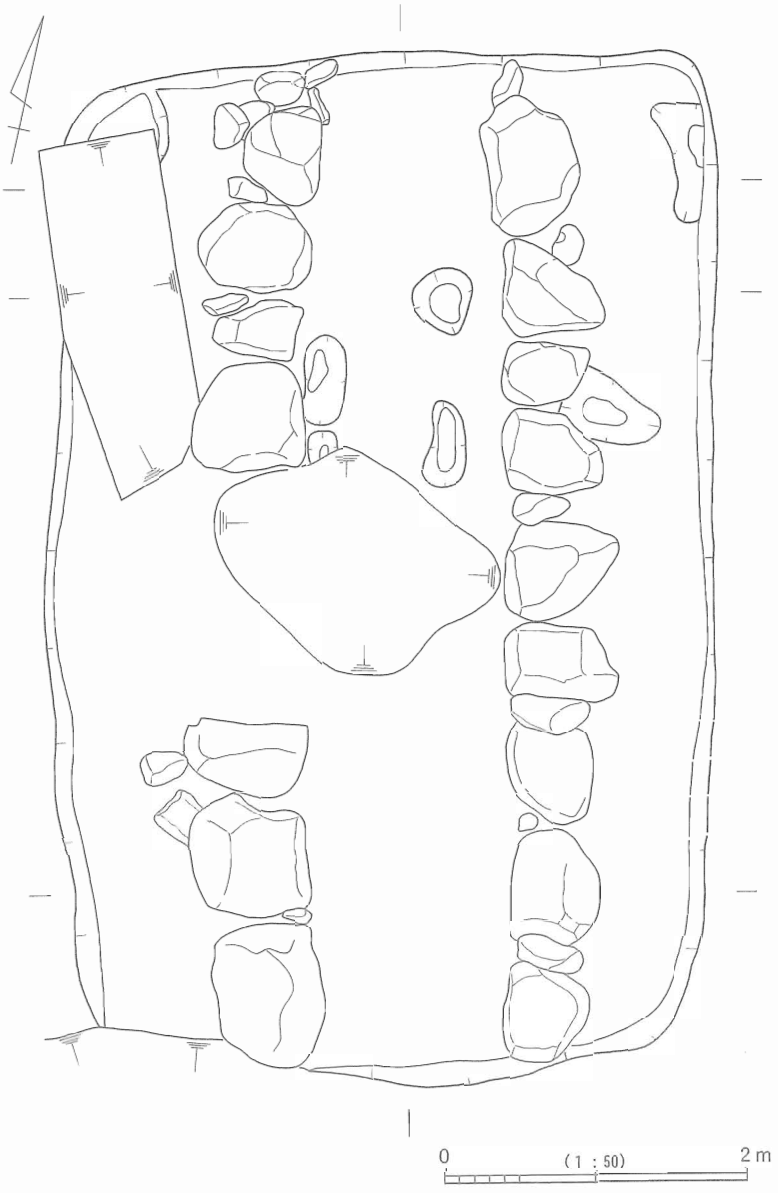
石室　玄室平面形はやや中央が外側に向かって膨らむ長方形である。

奥壁・側壁　奥壁は抜き取られ不明であるが、墓壙と床面敷石の間隔が0.4m程度しかないことから板状に近い石材か、第４章で報告した船津L-第171号墳のように先端が細く、中央が大きい石材を縦位に用いた可能性が高い。

側壁は３段残存する。一部１～２段、２～３段に亘って利用されるやや大型の石材が配置されるため、これが側壁構築に当たっての指標となる石材の可能性がある。

基底石は50～90㎝幅の大型の石材の長手面を石室内側に向ける平積みを基本とし、一部小口面を内側に向ける小口積みが確認できる。

石室の構築　右側壁側では奥壁側、奥壁から４石目、玄門側の石材がやや大きく、左側壁側では、奥壁側、右側壁側から５・６石目がやや大きい。この６石目は２段目にまで亘っており、指標となる石材である可能性が高い。２～３段目は目地が通らず、大型の石材、小型の石材を組み合わせながら積み上げている。側壁はわずかな持ち送りが確認できるが、直立に近い。右側壁では基底石の上に載る石材がやや大きく、この部分が石室構築に当たって意識されていた場所と想定できる。一方、左側壁側では基底石２石目と６石目に挟まれた場所と玄門に３段に亘る大きな石材が配置されており、この部分が意識された可能性が高い。各段ともに側壁の石材の大きさからみると玄門側と奥壁、そして中央を起点としてその間を充填したような石室構築技法を想定することができる。

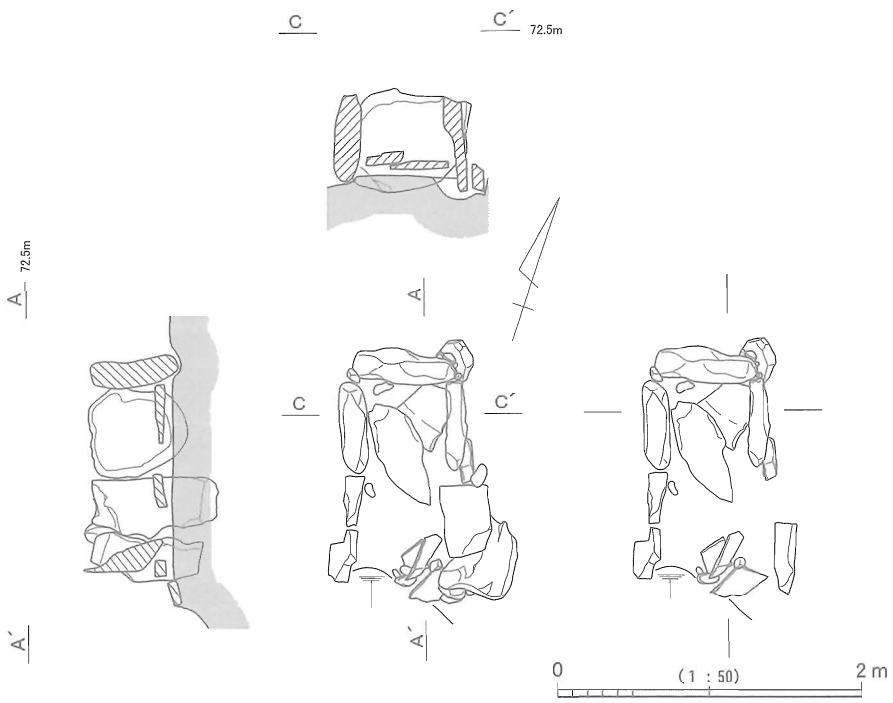


第25図　須津J-第６号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図

段構造（框石）　段構造は、墓壙の内側0.9mの所に側壁と同大の石材（75×55×50㎝）を設置し、その周囲をやや小型の石材で充填して段としている。この段を構成する石材は側壁と組み合っていないため、側壁構築後に設置した可能性が高い。

床面　床面には敷石が敷設される。敷石は石室全体に敷設されており、２面確認できる。下面は10～20㎝の石材を中心に設置し、上面には10㎝以下の小礫を中心に設置している。

石棺と奥壁側は埋葬面の標高が玄門側よりもやや高く下面が71.7m、上面が71.8m付近に位置し、玄門側は上面が71.6m、下面が71.55m付近に位置する。



第26図　須津J-第6号墳　石棺実測図

第15表　須津J-第6号墳　埋葬施設の規模

主軸方位	N-15°-W		
石室全長	6.5m以上		
玄室長	5.5m	玄室幅	1.3m
玄室奥壁幅	1.1m	玄室玄門側幅	1.3m
墓壙長	6.8m	墓壙幅	4.4m

第16表　須津J-第6号墳　箱形石棺の規模

主軸方位	石室の主軸に平行する。		
残存長	1.35m以上2.45m以下		
残存幅	0.55m	深さ	0.4m

後述する石棺と奥壁・左側壁との間では石材が遺物の上に載せられ、さらにその上に大刀などが納められていることから、上・下面ともに埋葬面として使用された可能性が高い。

石棺　石棺は、板状石材を用いた造り付けの組合式箱形石棺で、石室中央よりやや北、右側壁に沿うように主軸からずらして設置されている。蓋石は本来の状態で遺存していないが、棺内に落ち込んだ板状の石材が確認できることから、蓋石が架構されていた蓋然性が高い。つまり、「閉じられた棺」であったことが判明する。

底石は板状の石材を設置している。小口と長手の石材はⅡ字形に組み合わされ、長手の石材は重なることはなく、小口が接するように直線的に立てられている。小口の石材については墓壙床面に痕跡が確認できないが、長手側の石材を設置するために細長い土坑を掘り込んでいることから側壁を立てた後で床石を敷設していることが判明する。

残念ながら石室中央部の攪乱により南側小口が破壊されているため長さは不明であるが、内法は北側小口で0.55m、残存長1.35mである。石室の攪乱部分を考慮すると、石棺の全長は最大で2.45mである。深さは床面から0.4mである。

（4）遺物の出土状況（第27・28図，図版14・15）

遺物は石棺内と、石棺と奥壁から左側壁の間で主に出土した。

石棺内　石棺内で出土した遺物は少なく、ガラス小玉5点（19・26・29・31・32）と須恵器甕片（12・13）である。ガラス小玉は、石が抜き取られた場所から出土した。石棺を破壊した際にこの位置に移動した可能性が高い。須恵器は甕片であり、甕が棺内に納められていた可能性は低い。つまり、玉類は棺内、須恵器甕は棺外にあったものが破壊の際に紛れ込んだ可能性が高い。

また、棺内に落ち込んだ土砂内から土師器高盤（脚付盤）？の脚部が出土した。

石室内　石室内には床面が2面確認でき、それぞれの面から遺物が出土していることから、両面が埋葬面として利用されていたことがわかる。

上面の奥壁～左側壁側では大刀1点（57）が切先を奥壁側に向け、切先を茎よりも高い位置に床面に

置かれたような状態で出土した。56（鍔59を含む）は57が載せられた石材の下に食い込むような状態で出土したことから側壁に切先を下に、茎を上にした状態で立て掛けられていた可能性が高い。しかし、56は下面に伴うものか、上面に伴うものか判断が難しい。上面に伴う場合は鉄刀2点（56・57）を「×」字に交差させて側壁に立て掛けていた可能性がある。柄頭（58）は56・57の南側付近、やや浮いた状態で出土した。後述するように、その大きさから56の柄頭の可能性が高い。また、刀装具（切羽）1点（61）と刀子1点（63）が大刀（57）の茎付近から出土した。61は57に伴う切羽の可能性が高い。またその付近から刀子1点（65）が出土した。また、奥壁近くの床面直上から鉄針4点以上（99・100）が出土した。後述する石室内の覆土から出土した鉄針（98）は針先が欠損していることから100の針先と接合する可能性が高い。

石室南側では須恵器坏身・坏蓋5点（2・3，5～7）が纏められた状態で、坏蓋1点（4）が右側壁に立て掛けられるように出土した。また、上面直上で帯金具1点（51）、勾玉1点（16）、小玉2点（21・30）、鍔片（60）、刀子片1点（64）が出土した。鍔・刀子ともに破片であり、本来は攪乱された箇所の近くに副葬されていたものがこの場所に移動した可能性もある。さらに、環状鏡板付轡1点（48）が段部分で、鉸具1点（50）が石室中央で、上面から10cm上位で出土した。さらに轡の下位から鉸具1点（49）が出土した。また、左側壁側から丸玉1点（17）、小玉7点（20・22～25・27・28）、耳環1点（47）が50cm四方の範囲から纏まって出土していることからこの位置に埋葬があった可能性が高い。

下面に確実に伴うものは鉄鏃のみである

下面の石棺と奥壁との間からは上面の石材に埋め殺されるように鉄鏃（束）が出土した。右側壁に沿って単独で1点（71，南側に鏃身を向ける）、その南東30cmで1点（69，西側に鏃身を向ける）と破片1点（97）、奥壁側中央左側から鉄鏃A群（73～85，88・89・92，鏃身を南に向ける）、その右側から鉄鏃B群（66～68，91・94，鏃身を東に向ける）が出土した。鉄鏃A群は尖根片刃箭式6点（73～78）が束ねられた状態で、B群は尖根鏨箭式のみで構成された状態で出土した。一方、唯一鉄鏃1点（72）が段構造近くで、切先を西側に向けた状態で出土した。

土師器高盤？（1）、やや浮いた位置から出土した馬具（48・50）などは、上面に伴う遺物というより、石室破壊時に上に巻き上げられた遺物である可能性も考慮しておく必要がある。

この他、石室の攪乱土・覆土から、玉類（18，33～46）、刀装具か1点（62）、鉄鏃片（86・87・93・95）、馬具帯金具2点（52・53）、鉄鋌1点（54）、用途不明板状鉄製品1点（55）、鉄針1点（98）が出土した。

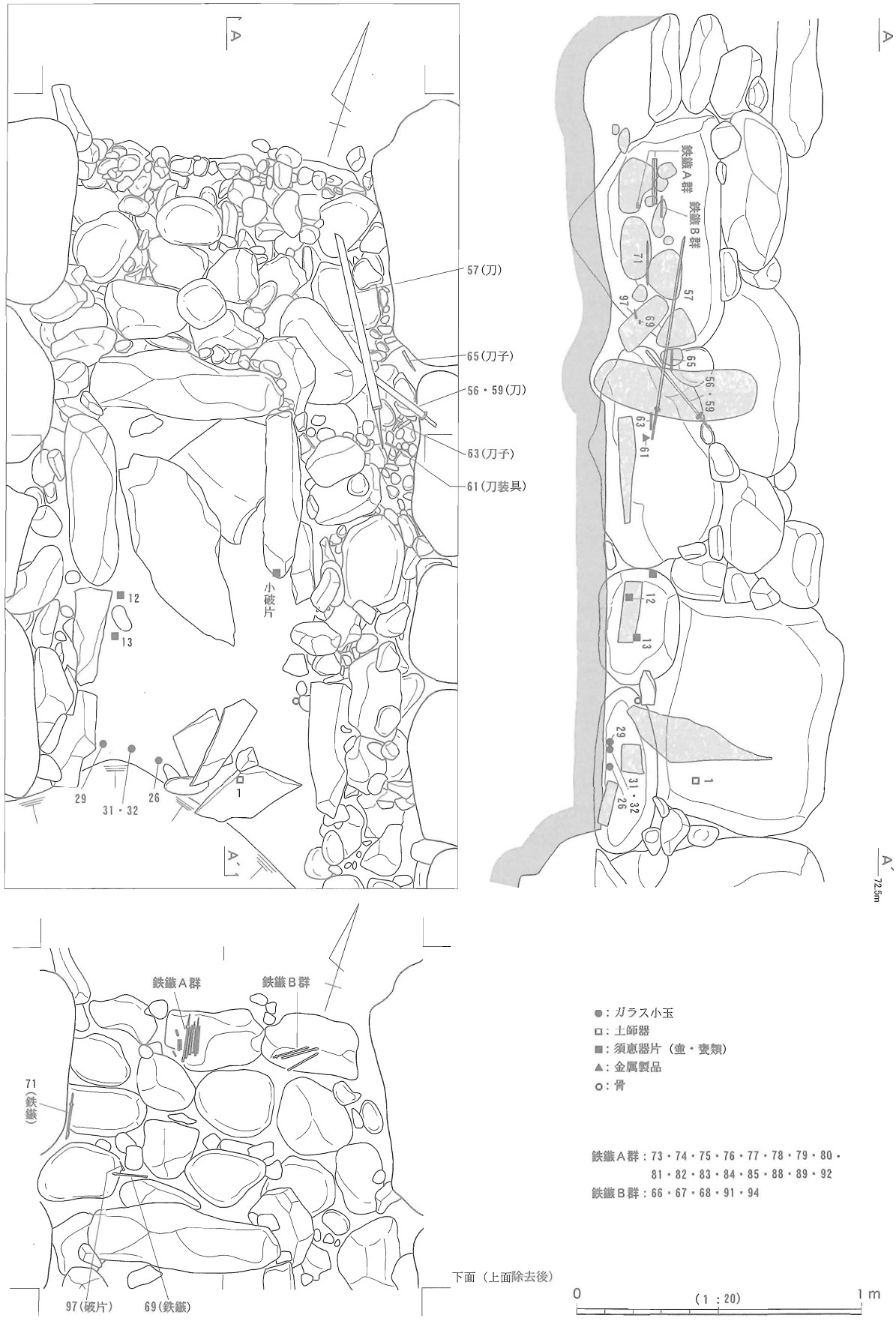
（5）人骨出土状況（第27・28図，図版14）

須津J-第6号墳では、箱形石棺内から人骨が出土した。人骨の残存状況は不良であり、部位を特定することは難しい。また、横穴式石室の覆土・攪乱土の洗浄により人の歯が6点以上出土した（本節第6項参照）。

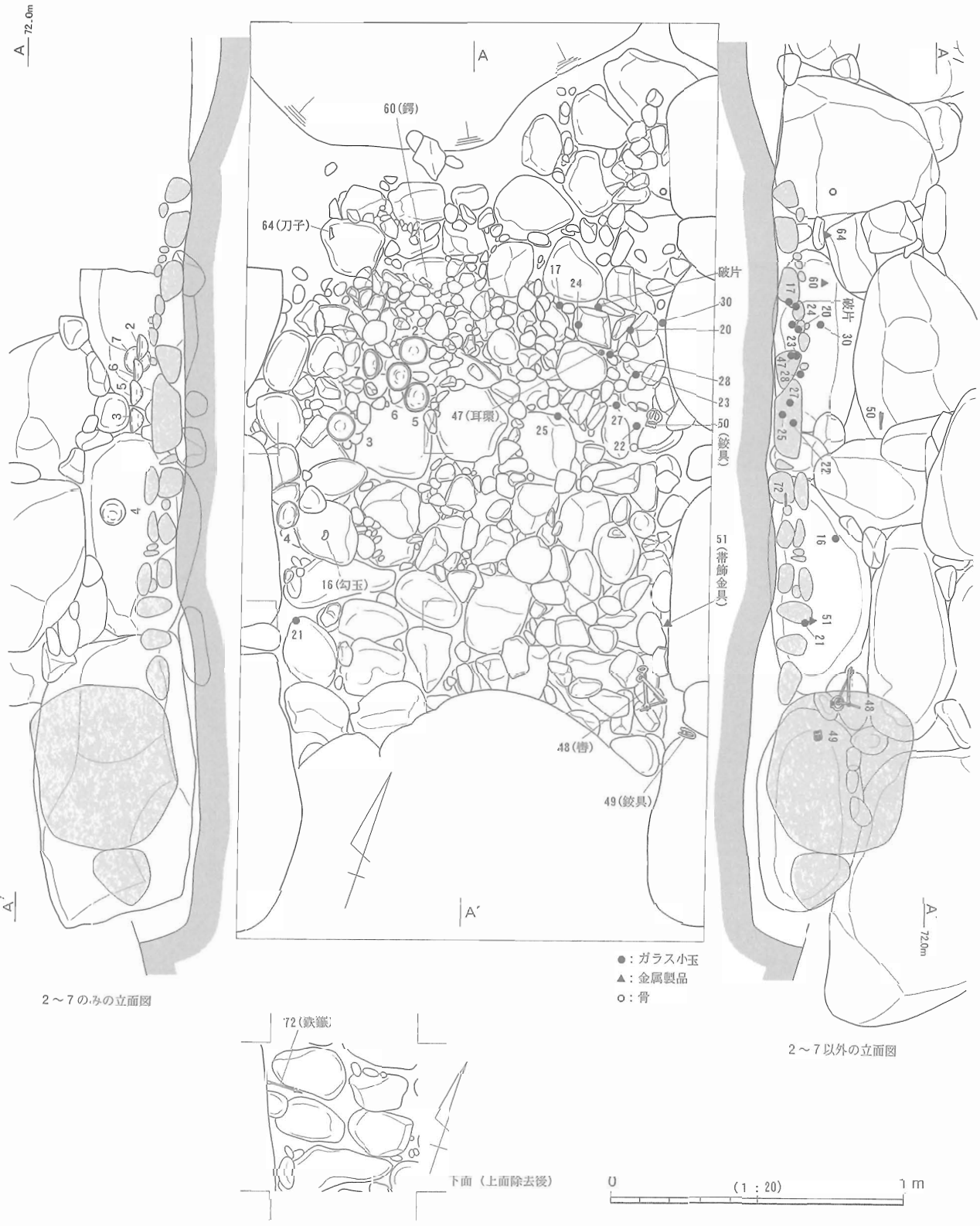
（6）出土遺物（第29～31図，第19～21表，巻頭図版4，図版16～21）

玉類（勾玉1点，丸玉2点、ガラス小玉28点以上）、耳環1点、馬具（轡1点、鉸具2点、帯金具3点）、鋌1点、用途不明鉄製品（帯金具？）1点、鉄刀2点、刀装具、刀子3点、鉄鏃13点以上、針4点以上、須恵器坏身3点、坏蓋3点、甕片、土師器高盤（脚付盤）が出土した。

遺物は上下2面の床面と、石棺内から出土しており、まず出土状況からそれぞれの埋葬に伴う遺物を記載する。ただし、石棺は大きく破壊され、石室南側は攪乱が及んでいるため、下面の遺物が上面に混在している可能性もある。



第27図　須津J-第６号墳　横穴式石室遺物出土状況図①（奥壁側）



第28図　須津J-第６号墳　横穴式石室遺物出土状況図②（玄門側）

石棺（覆土）　玉類（19・26・29・31・32）、須恵器甕片（12・13）、土師器高盤（１）

上面　勾玉（16）、丸玉（17）、小玉（20～25，27・28・30）、耳環（47）、轡（48）、鉸具（49・50）、帯金具（51）、鉄鏃（70・90）、鉄刀・刀装具（56～61）、刀子（63～65）、鉄針（99・100）

下面　鉄鏃（66～69，71～85，88・89・91・92・94・96・97）

以下に、それぞれの遺物の特徴を記載する。

土器　須恵器坏身・坏蓋は3点ずつ副葬されている。重ねられた状態で出土していないため直接的な組合関係は不明であるが、表面に残る自然釉や火襷の痕跡から、焼成時の組合関係が推測でき、坏蓋（3）と坏身（5）、坏蓋（4）と坏身（7）が組合関係となる蓋然性が高い。残りの坏蓋（2）と坏身（6）は組合関係にはない。6は後述するように3・4・5・7と同様のヘラ記号が刻まれるとともに、調整方法、色調も同質性が高いことから3～7は同一時期に同一の窯で焼成された可能性が高い。一方で2は少なくともそれらとは同時に焼成されていないことがわかる。

坏蓋は半球形で、口縁端部は内湾し、丸い。天井と口縁部の境には稜や凹線はない。口縁部内側に浅い凹線が看取できる。口径8.4～8.8cm、器高3.2～3.4cmである。3・4の天井には「二」字形のヘラ記号が刻まれている。ヘラ記号のない坏蓋（2）は法量がやや大きく、特徴も異なるため、3・4と時期差がある可能性が高い。坏蓋は、後述する坏身を含めてすべて湖西産の可能性が高い。

坏身は短く内傾するたちあがりであり、わずかに受け部よりも高い。3点ともに底部に蓋と同様の「二」字形のヘラ記号がある。口径7.2～7.4cm、器高2.8～3.1cmである。

甕は破片となって出土しているが、破片で図示した甕片はそれぞれの胎土の特徴が異なっているため別個体である。ただし、破片自体はそれほど多くはないことから、一部は周辺に所在した古墳からの流れ込みである可能性も考慮しておく必要がある。

12は外面に方向を変えて平行タタキを行い、内面には同心円の当て具の痕跡が遺存する。断面臙脂（えんじ）色である。湖西産ではない可能性が高い。13は外面に平行タタキを施し、内面はナデ調整が行われている。

土師器高盤（1，脚付盤）？は石棺の攪乱土中から出土したものである。太い脚基部で、脚外面にはケズリ調整、脚内面にはナデ調整が施される。盤部内外面、脚部外面に赤彩が施される。

玉類　玉類は勾玉1点（16）、丸玉2点（17・18）、ガラス小玉28点（19～46）以上が出土した。

勾玉は、いわゆる「碧玉」製で、濃緑色を呈する。表面は非常に良く研磨されている。図面左からの片面穿孔である。丸玉（17）はやや緑がかった黒色を呈する。材質不明であるが、琥珀や埋木製である可能性が高い。直径8㎜、全長（高さ）7㎜である。丸玉（18）はガラス製で、紺色を呈する。穿孔以外に貫通する部分が確認できる。これは気泡が動いた痕跡と想定できるため、このガラス玉は引き延ばし技法により製作された可能性が高い。

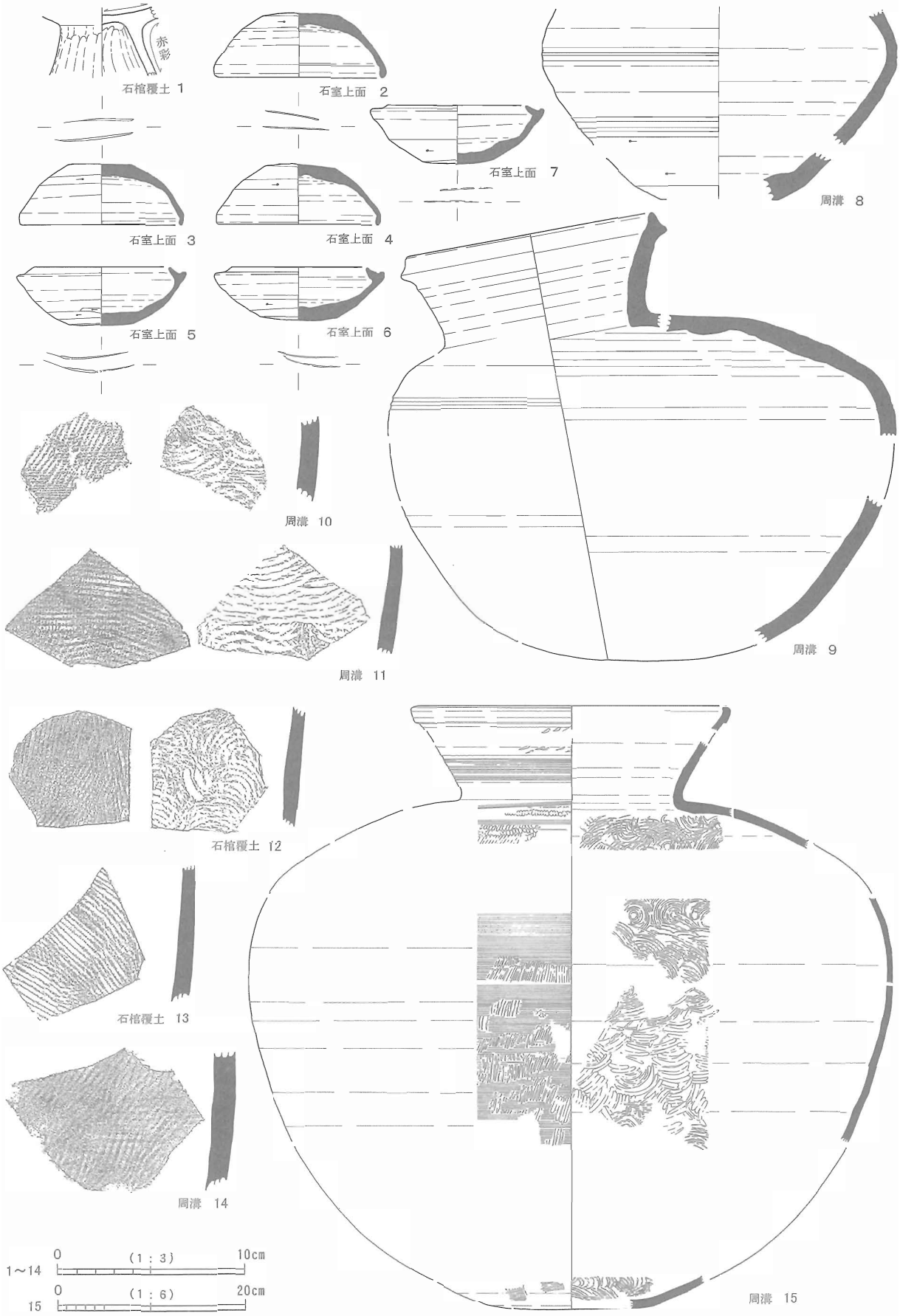
ガラス小玉は、19～29・31～46が紺色、30が黄緑色である。直径2.2～5.2㎜、全長（高さ）2～4.2㎜である。表面には気泡の痕跡が目立つ。この他図示できない程の小片があり、数点は増加する可能性がある。

耳環　耳環は銅地金張である。平面形態はやや楕円形気味の円形で、直径1.5～1.7cmである。断面長楕円形で、長軸5㎜、短軸3㎜である。C字形の小口部分には、皺が確認できることから、金箔巻き付けにより製作されたものであることがわかる。

馬具　轡は鉄製大型矩形立聞環状鏡板付轡（岡安1984，大谷2006）である。鏡板・引手・銜（はみ）の接合方法は銜先環に引手と鏡板が装着される「銜介在型」の連結である（大谷2008）。鏡板は、大型矩形（回字形）の立聞が扁平な楕円形の環に鍛接されるものである。銜は二連銜で、銜先環はC字形である。引手は一条線引手、く字形引手壺である。引手および銜には捩じりは確認できない。

法量は第30図の右側の鏡板で全高4.9cm、環高3.4cm、環幅5.6cm、立聞幅3.2cm、立聞高1.5cm、立聞孔長辺2.2cm、短辺6㎜である。環部は断面隅丸方形で、一辺5㎜、立聞は板状で厚さ3㎜である。左側の鏡板で、全高4.9cm、環高3.5cm、環幅6.0cm、立聞幅3.3cm、立聞高1.4cm、立聞孔長辺2.2cm、短辺6㎜である。環部は断面隅丸方形で、一辺5㎜、立聞は板状で厚さ3㎜である。

銜は左右で14.4cmである。右側は長さ7.5cm、銜先環の長さ2.4cm、喞金（くくみがね）部分の長さ1.8cmである。左



第29図　須津Ｊ-第６号墳　出土土器実測図

側は、長さ7.7cm、銜先環の長さ2.4cm、啣金部分の長さ1.9cmである。銜の断面は隅丸方形で一辺５㎜である。

引手は、右側で14.8cm、銜側の環2.0cm、引手壺の長さ2.0cm、幅3.0cmである。左側で15.0cm、銜側の環2.0cm、引手壺の長さ2.0cm、幅3.3cmである。断面方形である。左右ともに引手の断面は隅丸方形で、一辺５㎜である。

鋏具は２点出土しており、やや形状が異なる。49はきのこ形の外枠に、Ｔ字形の刺金と軸棒を装着するものである。Ｔ字形刺金・軸棒は外枠を貫通し外側でかしめられている。軸棒の断面は円形である。一方、50は屈曲部がきのこ形の外枠にＴ字形の刺金と軸棒が装着される点は49と同様であるが、刺金は外枠を突き抜けず、外枠の内側を窪め、その窪みに刺金の軸が差し込まれた状態である。軸棒は49と同様外枠を貫通し、その先端は抜けないように外側でかしめられている。軸棒の断面は方形である。轡は１点しか出土していないが、鋏具は特徴が異なり、同一の馬装に伴うものか検討を要する。轡に近接して出土したのは49であり、この２者が組合せ関係にあった蓋然性が高い。

帯金具は２種類あり、３鋲長方形のものと、２鋲長方形のものがある。ただし、後者については図下側が破損している可能性もある。帯金具・鋲ともに鉄製である。鋲は扁平な半球形の傘鋲である。51・52は長さ3.2cm、幅2.3cmである。53は長さ1.5cm、幅2.3cmである。

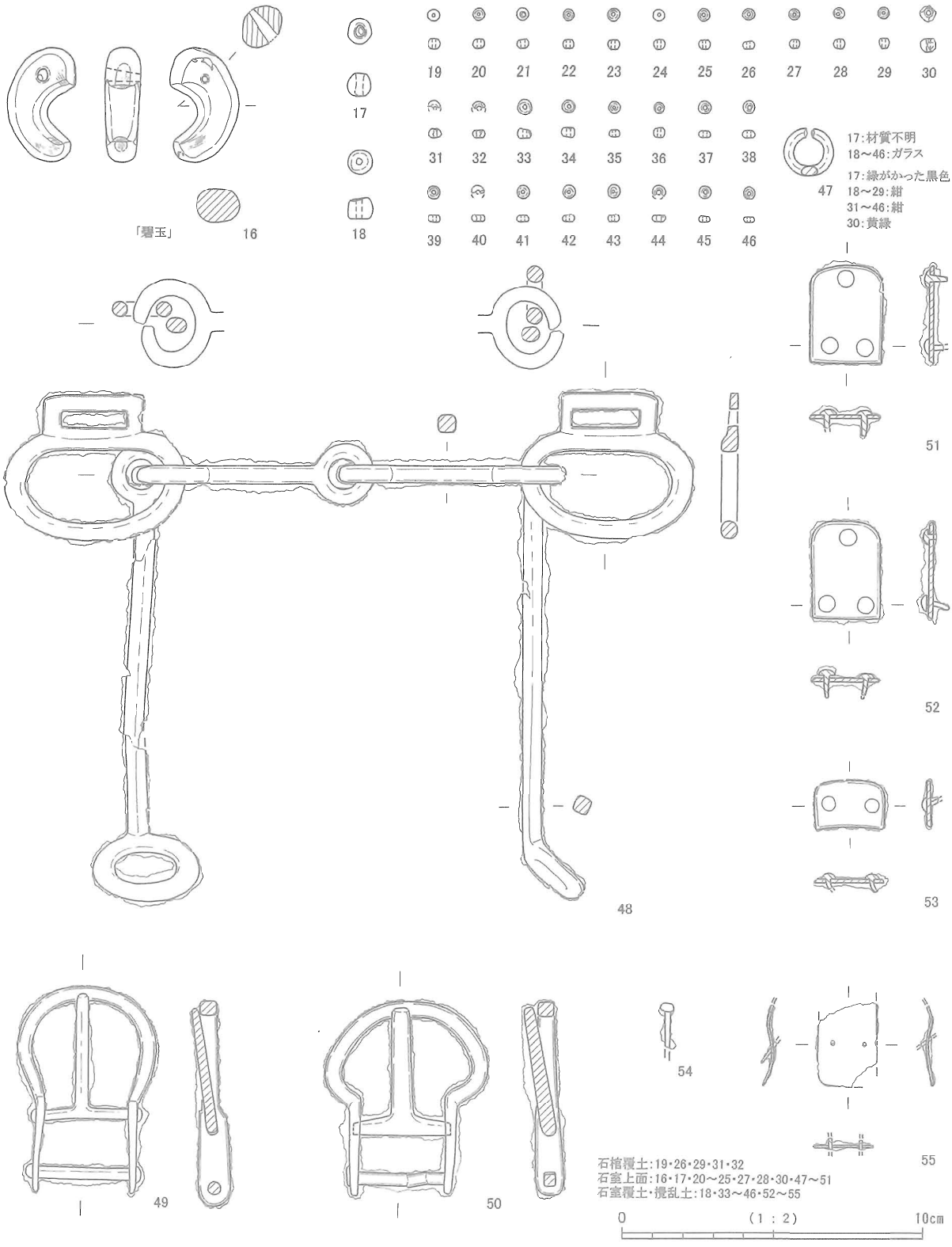
この他馬具の可能性があるものとして、鉄鋲（54）と用途不明鉄製品（55）がある。54は半球形の頭部に断面方形の脚部がつくものであり、帯金具の鋲であろうか。55は厚さ１㎜と非常に薄い長方形の鉄板に２孔穿ち、断面方形の小鋲あるいは小目釘が打ち込まれたものである。鉄板自体が波打つ。帯金具の可能性があるが上述した３点の帯金具よりも薄いことから特定はできない。

鉄器　小（短）刀（56）と鍔（59）は装着された状態で出土した。小刀（56）は鍔付大刀で、刃部に反りがない直刀で、ふくらが張る。関付近には鏃元孔が１孔穿たれている。関は直角両関で、茎は茎尻に向かい先細る形状である。関から６cmのところに目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存する。茎の断面は刃側が狭い長台形である。関には鉄製鏃が装着される。鏃は倒卵形で長さ８㎜、幅2.4cm、厚さ（復原で）2.2cmである。これにより木柄の太さが判明し、おおよそ幅2.2cm、厚さ２cmであった可能性が高い。鍔（59）は、丸みのある倒卵形で先端は尖る。内孔は楕円形である。断面は長方形である。

58は鉄製で、鞘尻金具あるいは柄頭である。頂部は平坦で、縁部分は肥厚している。断面は倒卵形である。鉄板が薄いことから鞘尻金具の可能性が高い。

大刀（57）は鏃が装着された大刀で、反りのない直刀である。ふくらの張る切先で、関は直角両関で、茎は茎尻に向かい急激に先細るもので、茎尻は尖る。一般的に確認される茎よりはかなり細い。茎尻から3.7cmの所に目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存する。全長77.4cm、刀身長62.8cm、刀身幅2.8cm、茎長14.6cm、茎幅2.0cmである。鏃は関部分に装着される。断面倒卵形で、長さ８㎜、断面の長軸3.0cm、幅2.4cmである。60は幅広の鉄製品であり、鍔の可能性がある。平面形は倒卵形と想定でき、その先端部分の破片である可能性が高い。攪乱は著しくないことから大刀は56・57の二本のみ限定されることから、60は57に伴う鍔である可能性が高い。この想定が正しければ、副葬時に鍔がはずされた状態で副葬された可能性と追葬時に破壊された可能性がある。61は鉄製切羽あるいは責金具で、57の茎付近から出土した。鍔の柄側に装着される責金具か、鞘の責金具、頭椎大刀の切羽の可能性があるが、鍔の柄側に嵌められた責金具である可能性が高い。62は鏃や鞘口金具などの可能性があるが、小片のため断定できない。

刀子は３点出土している。65は57の茎付近から出土しており、大刀と組み合わせで副葬された可能性がある。65は切先の先端が欠損するがほぼ完形である。関は直角両関で茎は茎尻に向かい先細り、茎尻は丸い。茎には木質が遺存しており、木柄に装着された状態で副葬されている。63は柄縁金具（鏃）が装着される刀子で、茎尻が欠損する。関は刃部側が直角、棟側が撫角の両関で、茎は茎尻に向かい急激



第30図　須津Ｊ-第６号墳　横穴式石室出土玉類および金属製品実測図①

に先細る。柄縁金具は断面倒卵形で、関上に装着される。柄の太さは長軸3.1cm、短軸（幅）2.2cmに復原できる。64は刀子関付近の破片で関は刃部側が撫関、棟側が浅い切り込みの直角関で、茎は茎尻に向かい急激に先細る。刃部は内湾しており、研ぎ減りによる可能性が高い。

鉄鏃（66～97）は下面から出土した鏃群Ａ、鏃群Ｂ、単独で出土したもの（69・71・72）、上面から

出土したもの（70・90）があるが、70・90は下面のものが追葬時などに上面に移動された可能性が高い。基本的に長頸鏃で尖根片刃箭式、尖根鏨箭式である。J-第6号墳からは平根式鉄鏃は一切出土していない。

鏨箭式は関の形状から2種類に区分できる。鏃群Bの3点（66～68）は鏃身から頸部へと明瞭な関がなく頸部から徐々に幅を広げ、先端に鏃身を形成するものである。刃部は片鎬（丸）造、茎関は棘関である。鏃身長は0.4～0.6cm、幅0.7～0.8cm、頸部長は66で12.0cm、幅0.4cm、67で頸部長13.1cm、幅0.4cmである。単独で出土した69と覆土から出土した70は頸部から鏃身に向かい急激に幅を広げる形態である。69は三角形式に近い刃部である。刃部は片丸造である。刃部長0.7cm、頸部は11.3cm以上である。

片刃箭式は同一形状で、長い刃部に直角関で、茎関は棘関である。鏃群Aでは鏃身6点、頸部～茎6点が出土しており、79と83は接合しないものの本来は77・78と同一個体であった可能性が高い。完形のものはなく、71で残存長16.0cmであり、これと茎が残存する80の長さを換算すると17.5cm程度であった可能性が高い。尖根片刃箭式の鏃身（71～76）は3.3～4.0cmである。頸部長は71で9.5cm、72で9.0cmである。茎は80で7.6cm、85は非常に長く9.5cmである。茎には樹皮巻と矢柄の痕跡が残るものがある。

針は最少4点、最多で6点出土した（98～100）。99は完形のようにも見えるが、若干折損している可能性もあり、100の2点の破片と98・99が接合して4点がまとめて副葬された可能性がある。静岡県内では針の出土は非常に珍しく、全国的に見ても稀有な遺物であり、注目できる。

針頭は丸く、断面は円形で、先端は尖る。針頭には糸を通すための針孔が確認できる。完形品2点（100の2点）は全長2.9cm、断面直径1㎜である。針孔は長さ1㎜、幅0.2㎜程度である。

（7）出土人骨（第23表）

後述する人骨鑑定報告（本節第6項）で詳述するため、ここでは要点のみ記載する。

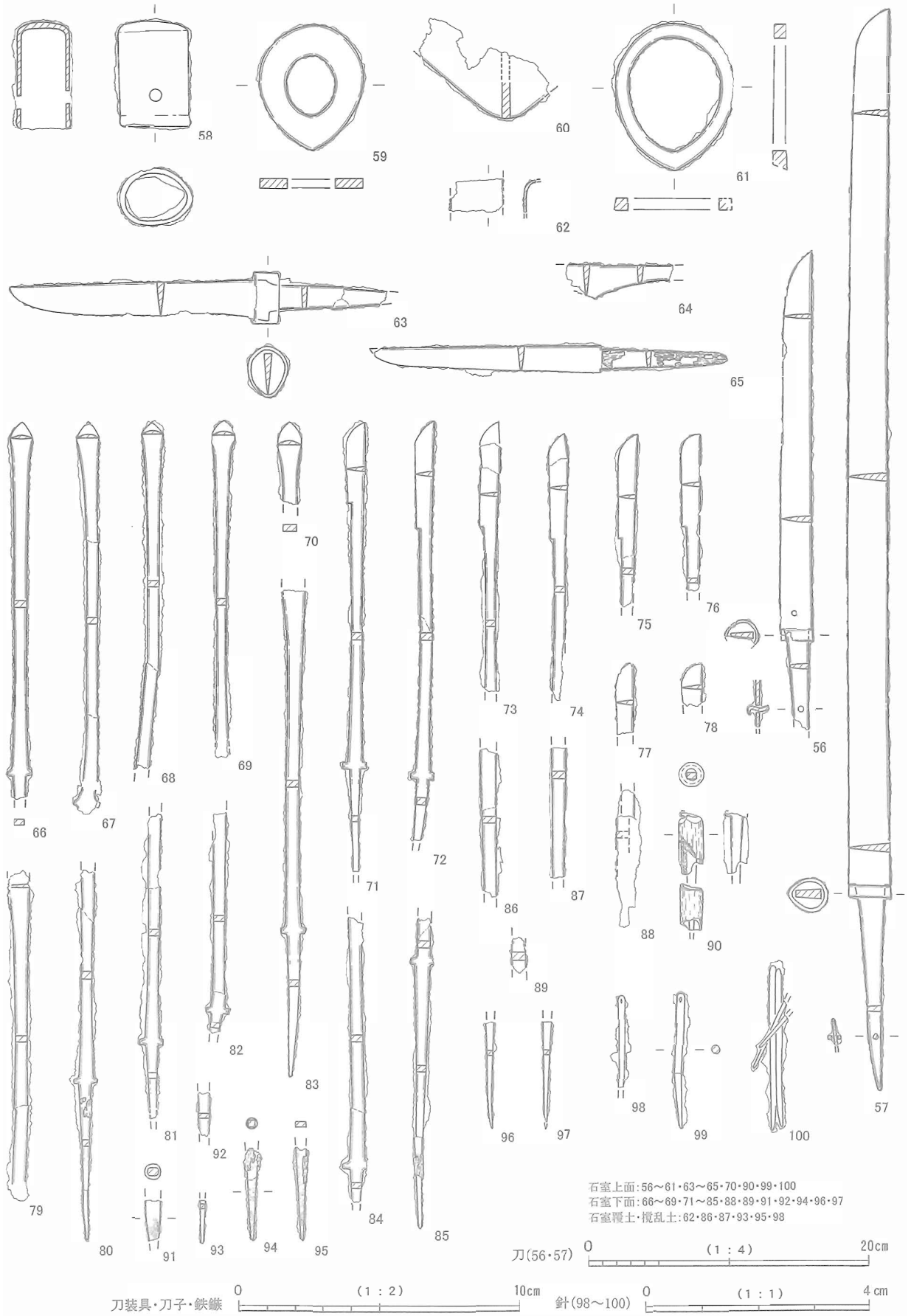
出土した歯は二人分の可能性も捨てきれないが、歯の同質性が高いことから一人分の可能性が高い。二人分の場合は、若年（10～20歳）1人、壮年（20～40歳）1人、後者の場合は壮年1人となる可能性が高い。性別については不明である。

また、すべての人骨（歯を含む）が、被熱を受けていない。

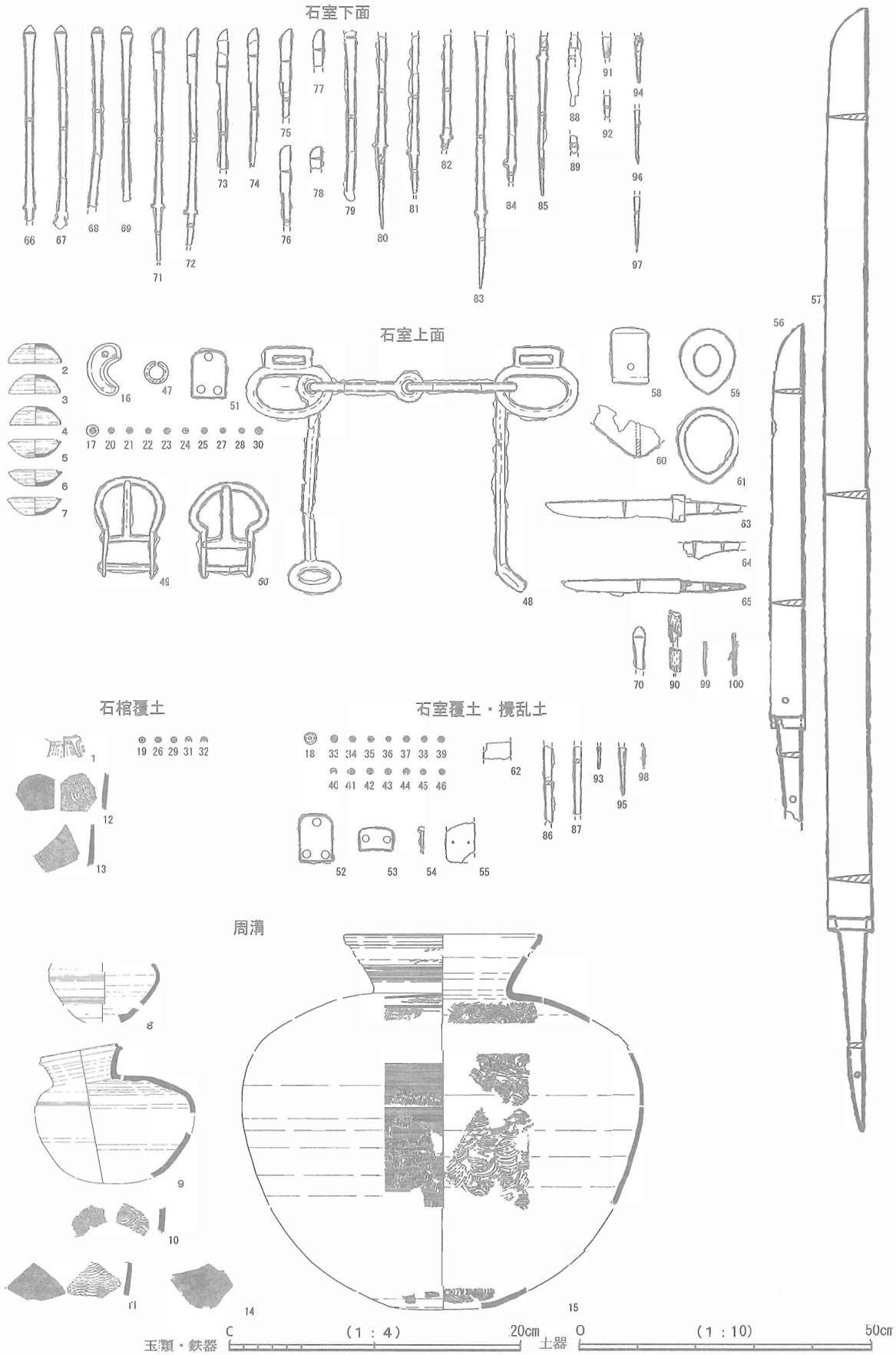
（8）小結（第32図）

築造時期　築造当初の床面である下面からは、鉄鏃しか出土しておらず、時期を特定することは難しい。鉄鏃のうち片刃箭式は直角関で刃部が長いことから遠江Ⅳ期前半以前に製作された可能性が高く（大谷2003）、遠江Ⅲ期中葉～後葉に位置づけられる可能性がある。東駿河地域で遠江Ⅲ期中葉まで遡る古墳は少ないことから、須津J-第6号墳の築造時期は、遠江Ⅲ期後半～遠江Ⅳ期前半でも古い時期の可能性を想定しておきたい。

追葬　石室内上面から出土した須恵器坏身・坏蓋はその形態的特徴と法量から遠江Ⅳ期前半に位置づけることができよう。坏身は口径が小さく、より遠江Ⅳ期後半に近い。7世紀中頃～後半にかけての時期と想定できる。また、わずかであるが、須恵器坏蓋（2）とそれ以外の坏身・坏蓋（3～7）は特徴が異なることから、2が若干古い可能性もあり、上面でも2回の埋葬が行われた可能性がある。



第31図　須津Ｊ-第６号墳　横穴式石室出土金属製品実測図②



第32図　須津Ｊ-第６号墳の埋葬と副葬品の関係

各時期の副葬遺物　須津J-第６号墳の副葬遺物は、床面が２面存在し、それぞれの面から遺物が出土しており、明らかに時期差が存在することが想定できる。第32図には、上面・下面から出土した遺物を区分して表示した。ただし、下面から出土した遺物は鉄鏃のみであり、大刀や土器などの副葬品は上面の敷石を敷設する際に、一旦持ち出し、上面を設置した後に戻した可能性もあるため、上面出土遺物がすべて上面設置後に副葬された遺物かどうか検討を要する。

時期を特定できる遺物は少ないが、上面から出土した須恵器坏身・坏蓋には遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期）に位置づけられるが、若干の時期差が確認でき、遠江Ⅳ期前半の中で２時期存在する可能性が高い。

馬具（轡）は、高さが５㎝前後、環幅が６㎝前後と、岡安光彦氏による環状鏡板付轡の編年（岡安1984・85）では、TK217型式期（遠江Ⅳ期前半）に特徴的な大きさを下回ることから、この轡は遠江Ⅳ期前半を遡らない可能性が高く、須恵器の年代観と一致している。

大刀・刀装具は破片となった刀装具（60・61）や刀子（64）が上面でも古い時期か、あるいは下面に副葬された遺物であった可能性がある。60に伴う大刀は57の可能性が高いが、鍔が破壊されていることを考慮すれば、上面の遺物の中では古い段階に位置づけられるだろう。

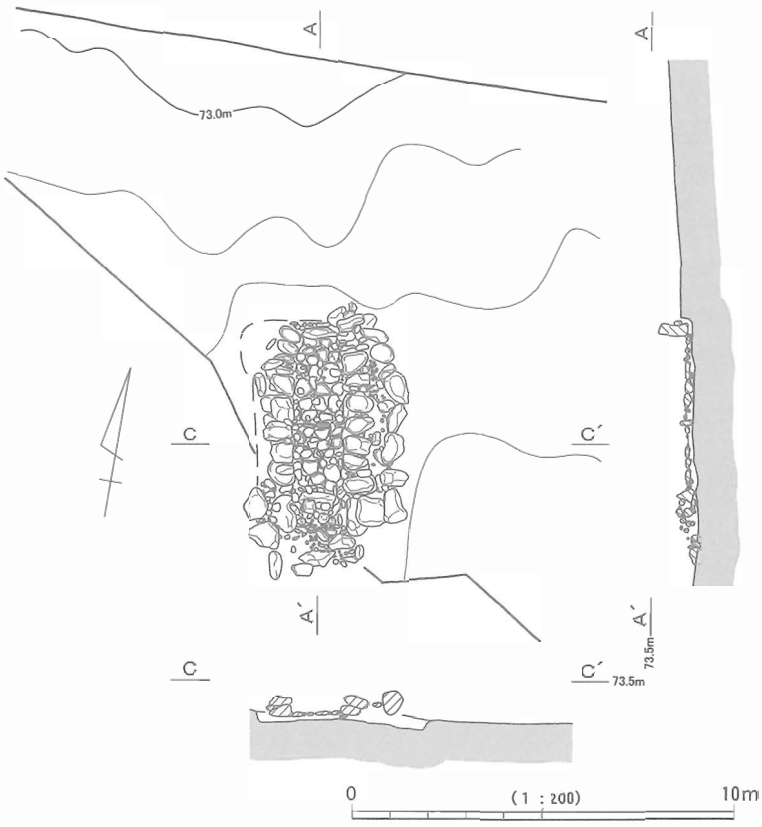
したがって、上面では、須恵器の若干の違いを重視すれば、２回の埋葬が行われた可能性があり、大刀（57）とそれに関連する刀装具（60・61）、須恵器坏蓋（２）が古い段階に位置づけられよう。一方で新しい段階は須恵器坏身・坏蓋（３～７）、馬具（48～55）、大刀（56・59）が位置づけられ、それ以外の玉類、耳環、刀子などについては、どの埋葬段階に伴うのか明確ではない。

2．須津J-第118号墳

（1）古墳の現況

須津J-第118号墳は果樹園の部分にあり、当初から大型の石材が露出していたため、古墳と想定されていた箇所であった。

古墳は標高73m付近、J-第6号墳の西側10mの位置にある。



第33図　須津J-第118号墳　測量図

（2）墳丘の構造（第33図，巻頭図版2，図版6・7・22）

墳丘・周溝　耕作により大きく削平され、墳丘盛土および周溝はともに確認できない。したがって、古墳の墳形や規模については不明である。

（3）埋葬施設の構造（第34～37図，第17表，巻頭図版3，図版6・22～25）

埋葬施設はほぼ南側に向かって開口する無袖形横穴式石室である。

墓壙　墓壙は長方形であるが、南側部分が攪乱されているため、竪穴のように掘り込まれていたのか、南側が開放していたのか不明確であるが、後述するように横穴式石室が段構造である蓋然性が高いことから、長方形の竪穴構造であった可能性が高い。石室で原位置を保持する石材はすべて墓壙内に収まる。また、石室の裏込めとして側壁や奥壁の安定のために一部石材が用いられている。

第17表　須津J-第118号墳　埋葬施設の規模

主軸方位	N-13°-W		
石室全長	5.3m以上		
玄室長	4.05m	玄室幅	1.25m
玄室奥壁幅	0.85m	玄室玄門側幅	1.35m
墓壙長	6.0m以上	墓壙幅	3.25m

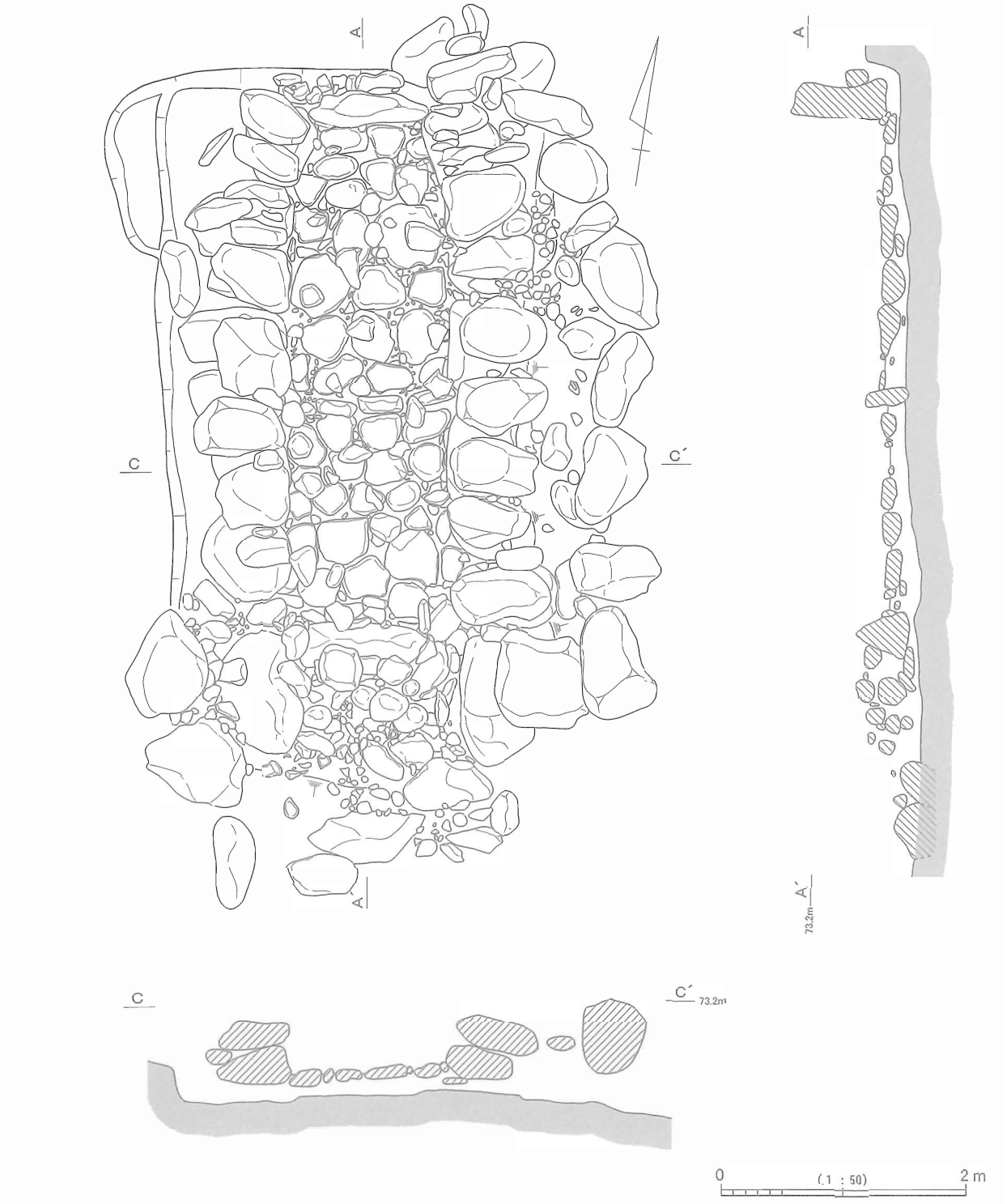
石室　石室は段構造の無袖形石室（有段無袖形石室）である可能性が高い。その根拠は、第35図D-D´断面すぐ北側の断面三角形の石材に敷石が載ること、この石材は床石を設置するための整地の土砂に埋め込まれること、屍床仕切石は石室中央付近に確認できることからこの三角形の石材は屍床仕切石の可能性が低いことである。この三角形の石材より南側は段構造を構成する裏込めであった可能性が高い。

玄室平面形は、奥壁側が急激に窄まる奥窄まり形である。

奥壁・側壁　奥壁は1段のみ確認でき、大型の平板な石材を立てて、鏡石としている。側壁の基底石は長手積するものもあるが、小口積が多い。側壁玄門側には大型の石材が据えられており、この石が玄室最南端の石材である可能性が高い。この想定が正しければ、玄室基底石はすべて残存していることになる。

側壁2段目以上は一部長手積もあるが基本的に小口積である。

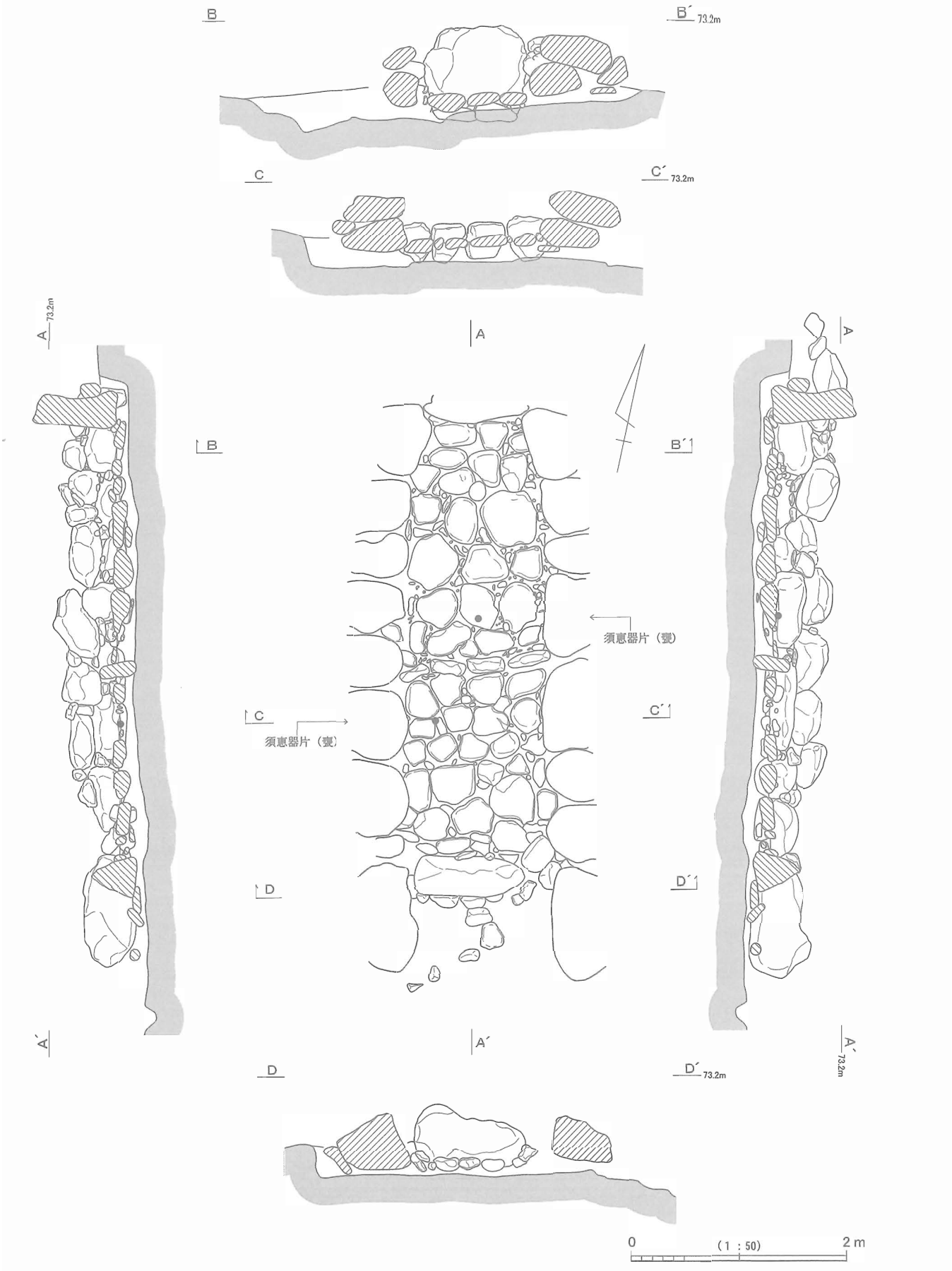
石室の構築　横穴式石室の構築方法は、左右両側壁ともに玄門と想定した一番南側の石材が大きく、また基底石（第37図）をみると、左側壁では南側から4番目、右側壁では南側から3番目の石材がやや大きく、長手面を内側に向けることからこの石材が石室構築に当たっての指標石である可能性が高い。



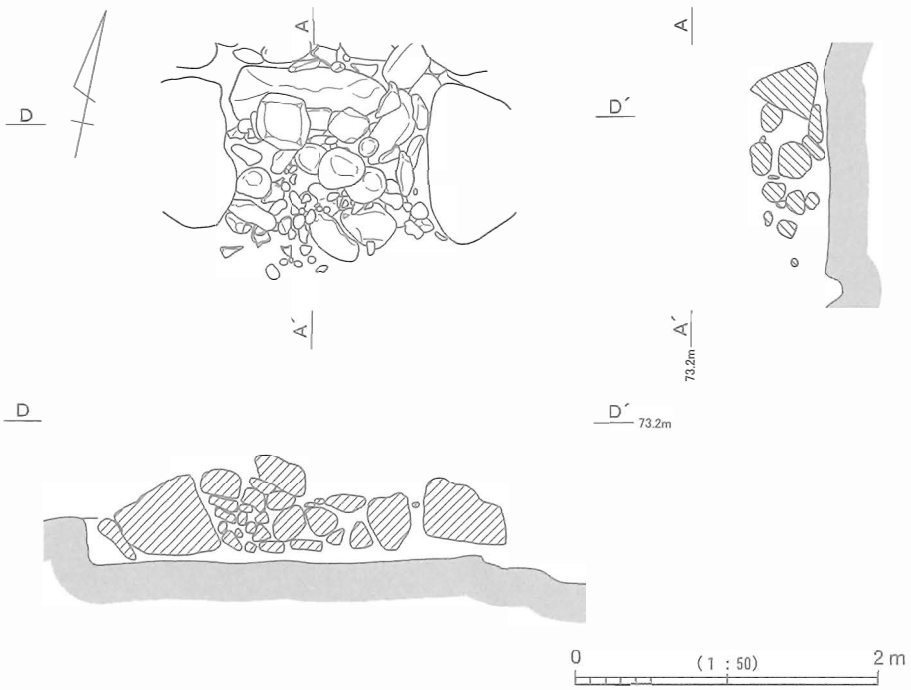
第34図　須津J-第118号墳　横穴式石室検出状況図

２段目以上は側壁の残存状況が良好ではないため不明確であるが、側壁が倒れ込んだと考えられる左側壁南側の基底石上の２石は大型であることから、少なくとも玄門側には大きい石材が積載されていた可能性が高い。また、右側壁２段目中央付近には、長手積する石材が基底石を設置する際の指標石と想定した石材の上に確認できることから、２段目以上も奥壁、中央、玄門側に指標石を設定して積み上げを行った可能性が高い。つまり、石室の構築に当たっては、奥壁、中央、玄門側に指標となる石材を設置し、その間を充填する方法で構築した可能性が高い。

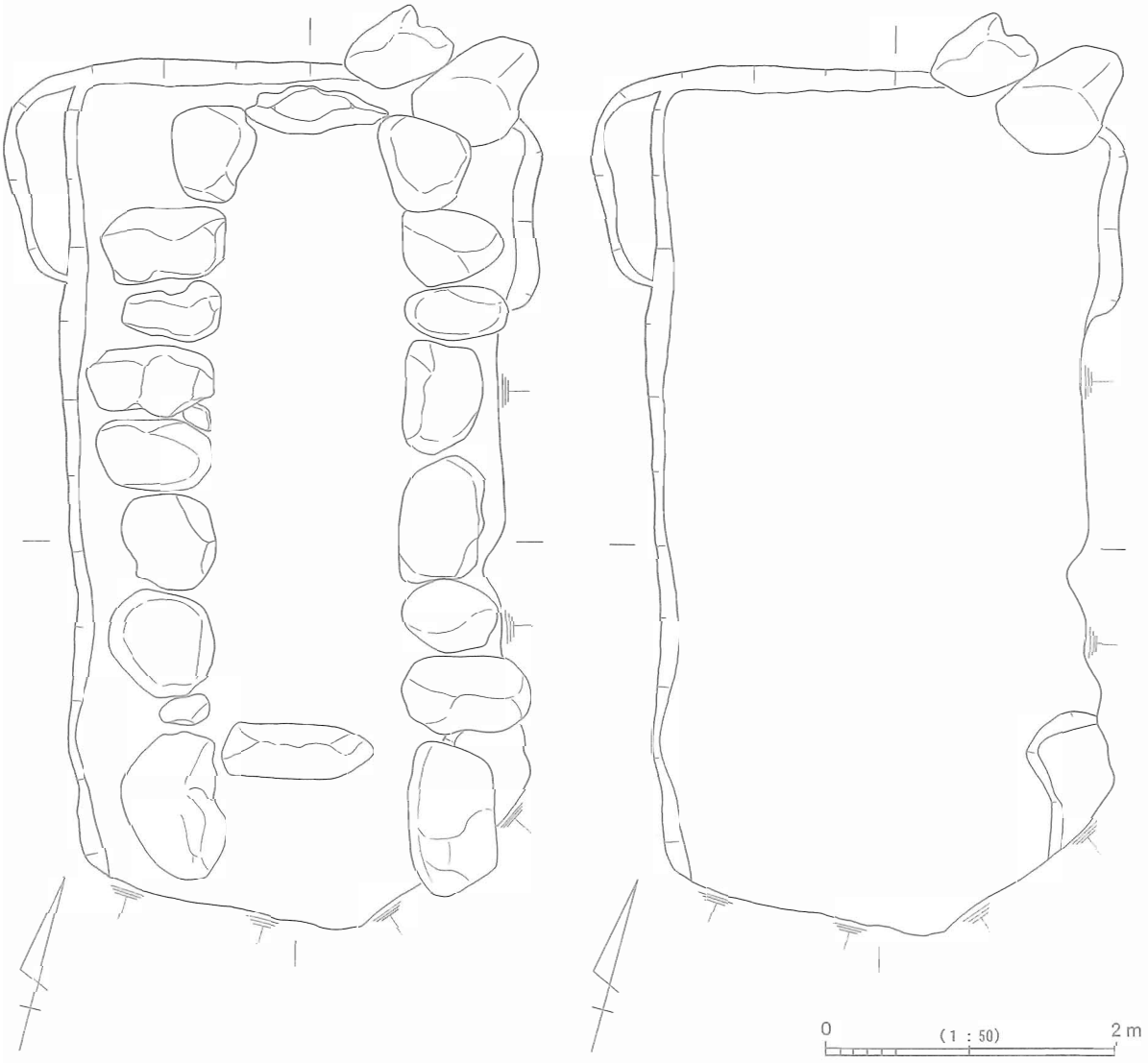
段構造（框石）　段構造は奥壁から約４ｍのところに長さ約１ｍ、幅0.4ｍの断面三角形の石材を墓壙



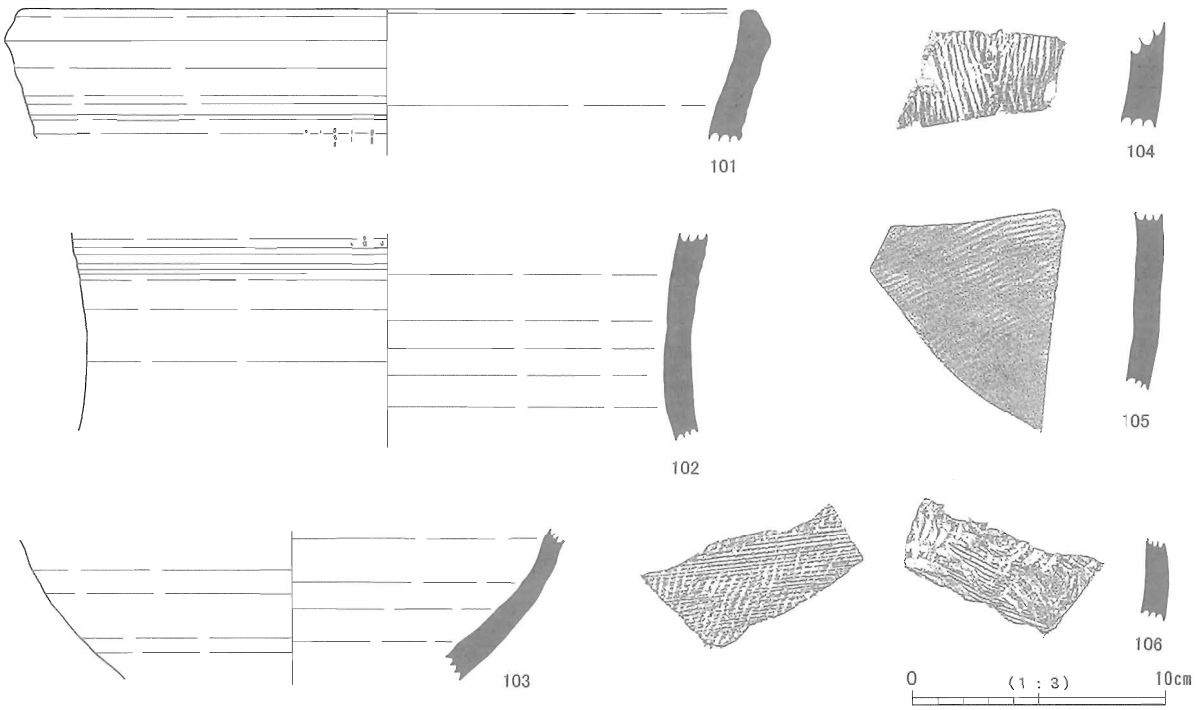
第35図　須津Ｊ-第118号墳　横穴式石室実測図



第36図　須津J-第118号墳　横穴式石室段構造（框石）実測図



第37図　須津Ｊ-第118号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図



第38図　須津Ｊ-第118号墳　出土土器実測図

床面上に置き、その石材と墓壙南側の部分に20～30㎝の石材を充填して構築した可能性が高い（第36図）。現状で段の高さは0.6mで、長さ約1.3m残存する。

床面　床面には敷石が敷設される。敷石は、奥壁から約2.2～2.3mの所に配置された仕切石を挟んで両側に設置される。使用される石材は、20～50㎝の平板な石材で、標高を揃えるように置かれている。玄室から屍床仕切石までの長さ、2.2～2.3mで、屍床仕切石から段までの間の長さが約1.7mである。屍床仕切石は、敷石と同じような薄い石材の小口を合わせるように、４枚立て並べている。屍床仕切石は、床面から15㎝高い。

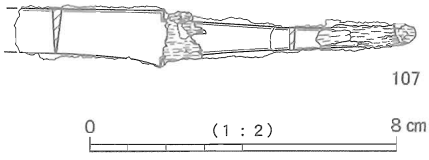
（４）遺物の出土状況

石室内から須恵器片、刀子が出土した（第35図）。石室は床面直上まで攪乱を受けている可能性が高く、特に須恵器に関しては本来この古墳に伴うものか明確ではない。

（５）出土遺物（第38・39図，第19・21表，図版25）

須恵器　101は甕口縁部で口縁端部は外傾する緩やかな段をもつ。頸部には櫛刺突文が確認できる。102は101と同一個体の可能性が高い甕頸部片である。104～106は甕片で、104・105は外面に平行タタキの痕跡が残存し、内面はナデ調整が行われる。106は外面平行タタキの後カキメ調整、内面には同心円の当て具痕跡が明瞭に残存する。103は湖西産壺・瓶類の底部片である。

鉄器　刀子（107）は、切先が欠損するもので、関は直角両関で、茎は茎尻に向かい先細る。茎には木質が残存することから木柄に納められた状態で副葬されたことがわかる。



第39図　須津Ｊ-第118号墳　横穴式石室出土刀子実測図

（６）小結

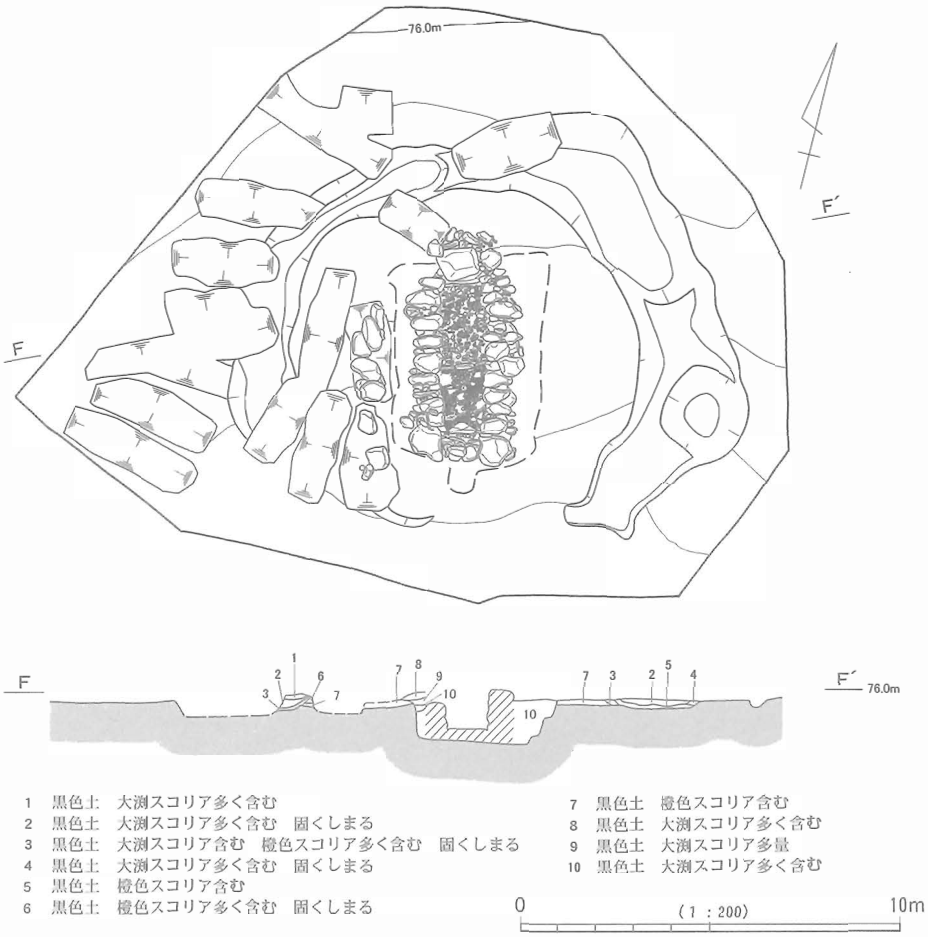
築造時期と追葬について　原位置を保持する遺物がなく、また時期を特定できる遺物が出土していないため不明である。古墳時代後期後半～終末期前半である可能性が高い。

３．須津J-第159号墳

（１）古墳の現状

須津J-第159号墳は茶畑や果樹園となっており、墳丘の高まりは一切確認できなかった。調査前に大型の石材が確認できたため、確認調査の対象として調査したところ古墳として確認できた。

古墳は標高77m付近に築造されている。J-第118号墳の北西約50mのところに位置する。



第40図　須津J-第159号墳　墳丘測量図

（２）墳丘の構造（第40図，図版６・26）

墳丘の構造　古墳は茶園となり、重機による攪乱が著しく行われていたため、北側から西側にかけては破壊されていたが、石室裏込めと墳丘の一部が残存していた。第40図土層断面図による６層が盛土、７層は旧表土と想定している。この盛土（６層）は確認された位置から、横穴式石室の裏込めから続く第一次墳丘ではなく、第二次墳丘と考える。

周溝　周溝は南側を除いて確認でき、古墳が不整形な円墳であることが判明する。古墳の規模は周溝内側で東西10m、南北9.5m以上であり、周溝外側上端間で東西約13.5m、南北11.0m以上である。

周溝出土土器（第48・49図）　周溝からは坏身（133）・𤭯（136）が出土した。

坏身（133）は短く立ち上がる口縁部で、たちあがりは受部よりもやや高い。𤭯（136）は口縁部片で、頸部から外反した後、口縁部で段をつけさらに外反するもので、口縁端部は水平近くまで外反する。口径12.0cmである。坏身・𤭯ともに湖西産の可能性が高い。

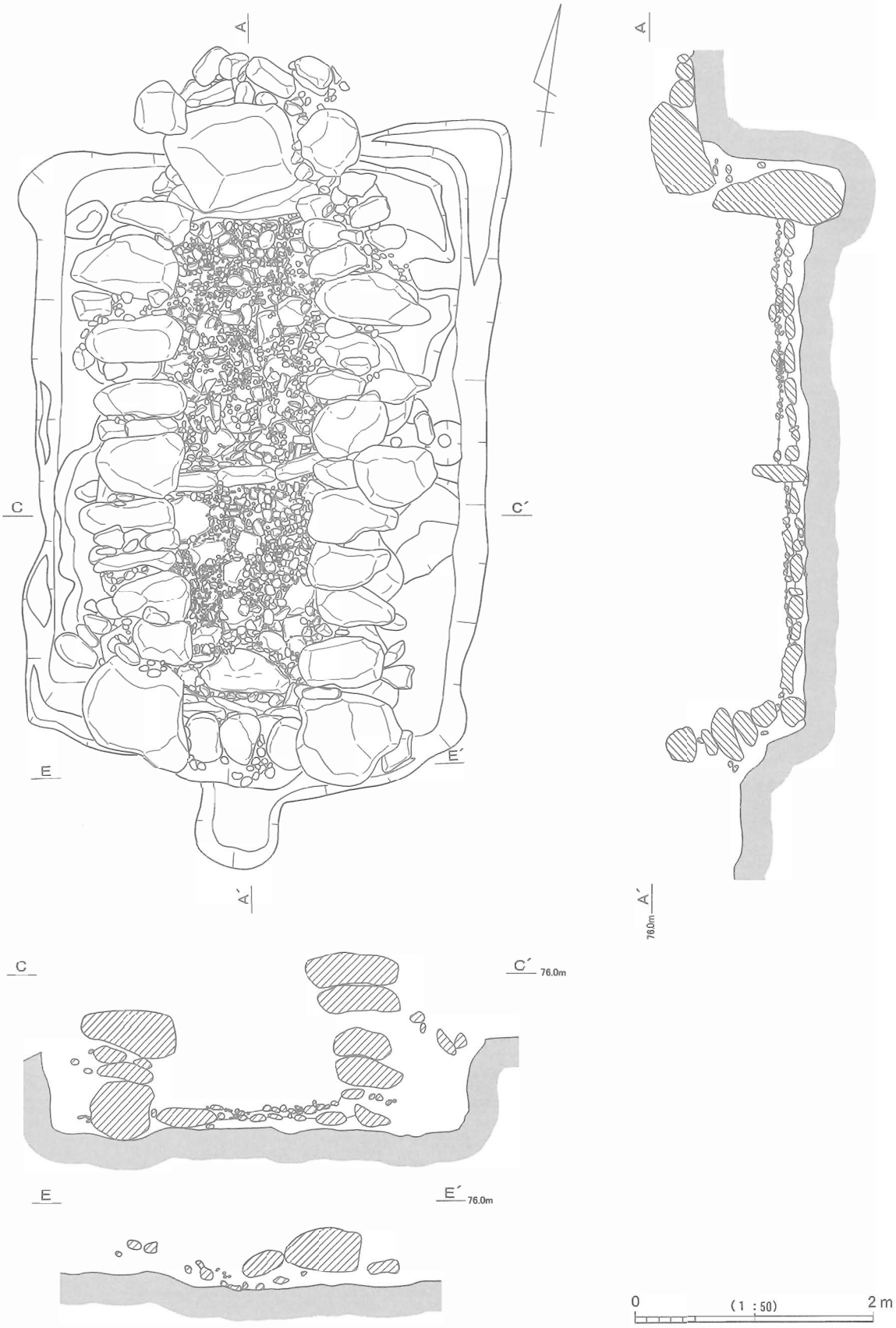
（３）埋葬施設の構造（第41～44図，第18表，図版27～32）

埋葬施設はほぼ南に向かって開口する段構造（框石）を有する無袖形横穴式石室である。

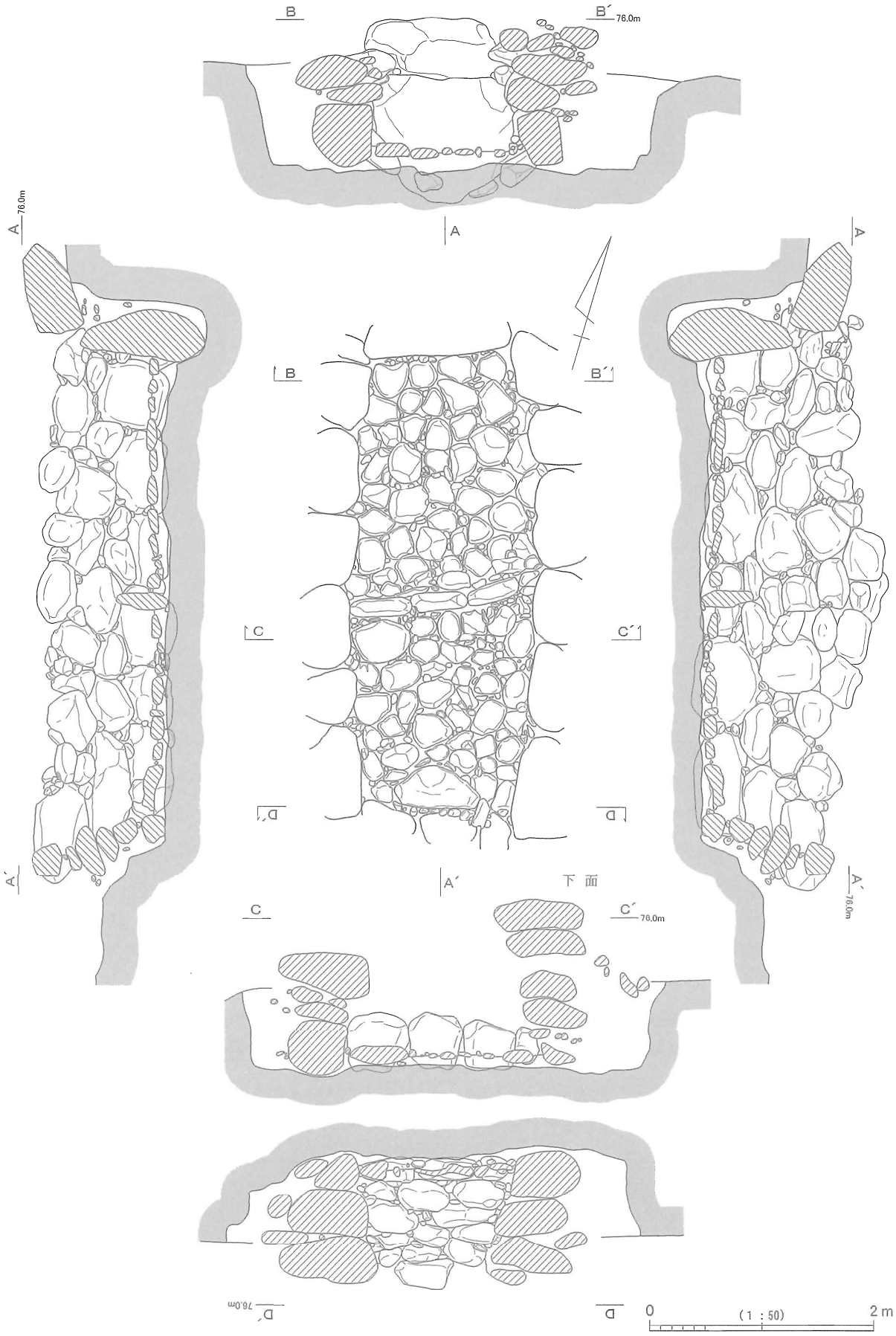
墓壙　墓壙は竪穴状に掘り込まれた長方形で、南側に墓道が続く。石室は玄室～段構造まで完全に墓壙内に収まる。墓壙は奥壁側で約0.9m、玄門側で0.5m掘り込まれている。

第18表　須津J-第159号墳　埋葬施設の規模

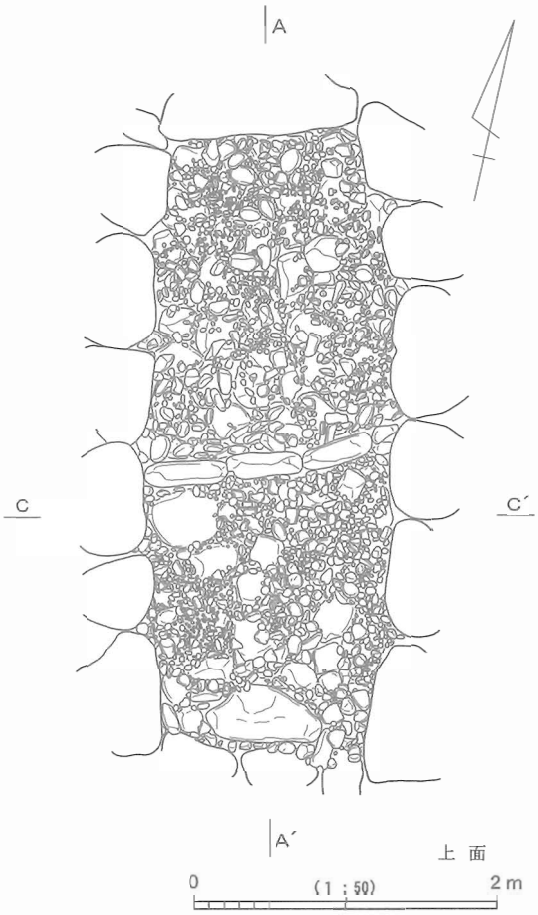
主軸方位	N-16°-W		
石室全長	4.75m		
玄室長	4.1m	玄室幅	1.6m
玄室奥壁幅	1.2m	玄室玄門側幅	1.3m
墓壙長	5.6m	墓壙幅	4.0m



第41図　須津J-第159号墳　横穴式石室検出状況



第42図　須津Ｊ-第159号墳　横穴式石室実測図①



第43図　須津Ｊ-第159号墳　横穴式石室実測図②

石室　石室は段構造無袖形横穴式石室（有段無袖形石室）であり、玄室平面は中央がやや外に膨らむ（胴の張る）長方形である。

奥壁・側壁　奥壁は大型の石材を鏡石として樹立する。横倒しになる石材が奥壁２段目とすれば各段１枚石で２段以上の奥壁であることが想定できる。この場合奥壁の高さは1.6m以上である。側壁の基底石は長手面を内側に向けて据えている。２段目以上は長手積するものもあるが小口積が基本である。なお、側壁の玄門側の石材には各段ともに大型の石材を設置しており、この石を石室南側の押さえとして各段の石材を積み重ねた可能性が高い。

石室の構築　横穴式石室の構築に際しては、玄門の３段はともに大きな石材を設置しており、この部分に大型の石材を設置し、奥壁との間に石材を充填した可能性が高い。また、基底石の大きさの相違は少ないが、右側壁では奥壁から２・４石目、左側壁では奥壁から３・５石目がやや大きい。側壁２段目では、１段目に大きい石材を据えた上位やその近くに３段に亘る石材ややや大型の石材を設置しているため、玄門とともに側壁内部に指標となる石材を据えて積み上げを行った可能性が高い。

段構造（框石）と閉塞石　石室の入口部分には墓壙の南壁に沿うように30㎝以下の石材を６段積み上げる。６段のうち５段目以上は墓壙南壁よりも高い位置にあり、また５・６石目が１～４石目と比較して、やや南側にずらして設置されていることから、４石目（0.8メートル）までが段構造（框石）で、上位の２石（0.8～1.1m）が閉塞石の可能性が高い。段構造は各段ともに複数の石材で構築されて、閉塞石も同様の石材を積み上げている。

なお、後述するが刀子片（206）が段構造の１石目と２石目の間から出土している。この解釈は非常に難しいが、石材の崩落による衝撃で飛び散った可能性と、追葬にあたり框石を一旦取り除き、石室の封鎖にあたり、積み直した可能性が考えられる。

さらに、墓壙の南側に接続する短い溝状遺構は墓道ではなく、石室構築に当たり、墓壙床面に降りるため、また石を墓壙内に入れやすくするため、石室構築の際に掘削された遺構の可能性がある。

床面　床面には全面的に敷石が設置されている。ほぼ中央に設置された屍床仕切石を挟んで南北に敷石が敷設されており、２面が確認できる。上面は15㎝以下の礫を敷き並べ、下面には20～30㎝の平板な石材を敷き並べている。

屍床仕切石は奥壁から２m付近に設置されており、板状の石材４枚を立てている。屍床仕切石の設置は墓壙床面に小土坑が掘削されていることから敷石敷設前に行われた可能性が高い。ただし、第44図では側壁の基底石の下までその小土坑が及んでいるような状態としているが、石室構築前に掘り込まれていたかどうかは明確ではない。この屍床仕切石を挟んで下面の設置される高さはほぼ水平であるが、上面は奥壁側がやや高い。

なお、図示していないが、図版36-3を見ると屍床仕切石から南側にやや大型の石材が散在しており、

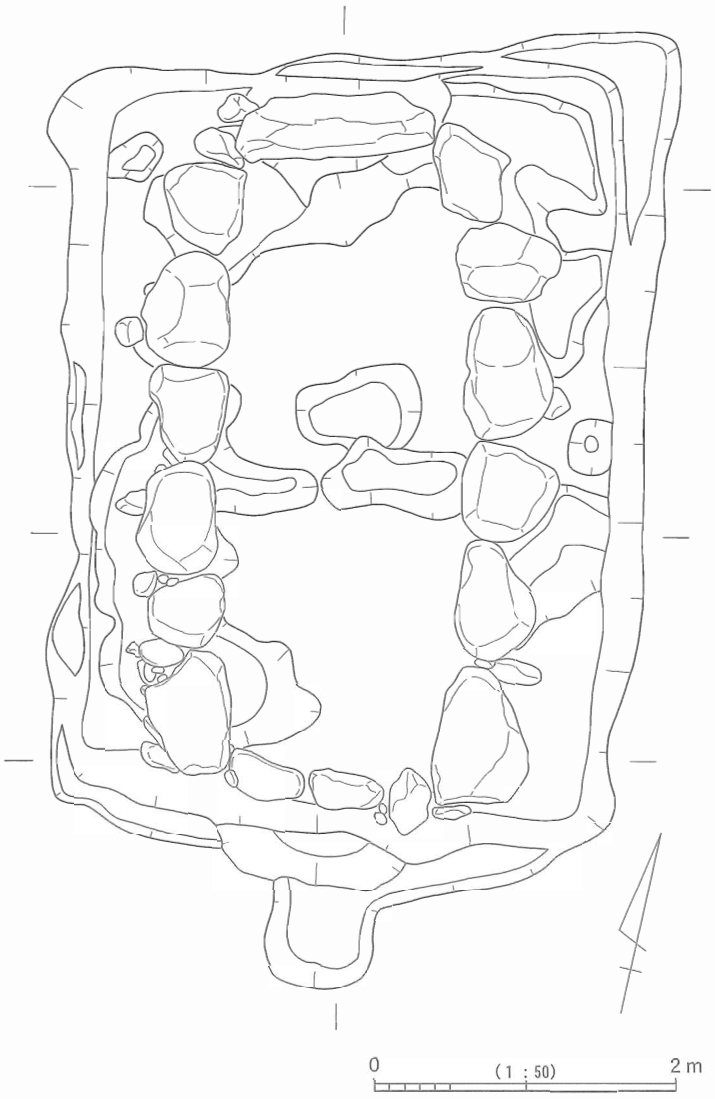
その横から須恵器が出土していること、さらにこの石材の下から人骨や遺物が出土していることから、上面設置後の埋葬に伴う棺台であった可能性もあることを明記しておきたい。

（４）遺物の出土状況（第45・46図，図版33～36）

上述したようにJ-第159号墳では床面が２面確認できる。遺物と人骨はすべて上面から出土しており、下面に埋葬が行われたという積極的な根拠はない。富士山麓、愛鷹山麓の横穴式石室では床面が複数面確認されることが多いが、石室構築当初の床面から遺物が出土しないこともあり、埋葬面の認定に当たっては慎重な検討を要する。

上面（屍床仕切石～奥壁側，石室北半）

玄室北西隅角付近で、鉄鏃、刀子、刀装具などが出土しているが散在した状況であり、二次的に移動された可能性が高い。その南、右側壁に沿って刀装具、大刀片が出土しているが、大刀（177～182）は大きく破壊されて小片となっている。この大刀の刀装具と推測する責金具や吊手孔環付足金物なども散在している。また、刀装具（196）は屍床仕切石の北側と南側で出土しており、この大刀は追葬に伴い破壊され、大きく移動されている可能性が高い。大刀片出土地点の南側では平瓶（138）と弓両頭金具５点（261・263～266）などが出土した。上面出土の弓両頭金具もう一点（262）も出土位置が特定できないが、この周辺で出土した可能性が高い。また、屍床仕切石のすぐ北側の左側壁側で鉄鏃多数（221など）が出土した。鉄鏃（235）は北東隅角部付近から単独で出土した。なお、鉄鏃は右側壁隅角部では尖根式が、屍床仕切石の北側では平根式が纏まって出土している。



第44図　須津Ｊ-第159号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図

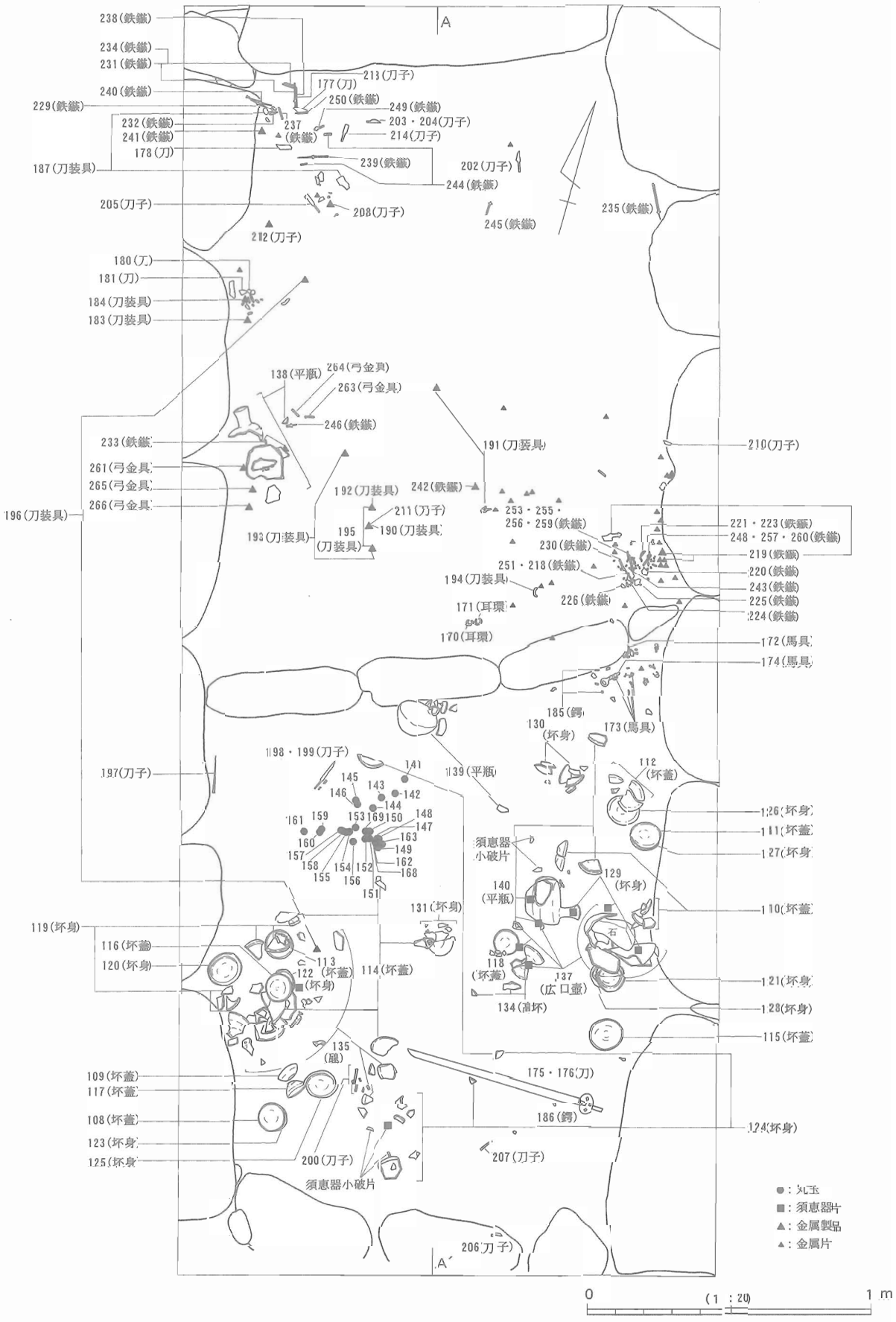
耳環は屍床仕切石の北側、玄室のほぼ中央で出土した。２点が近接して出土しており、遺体に装着された状態での原位置を保持していないことは明らかである。

上面（屍床仕切石～入口，石室南半）

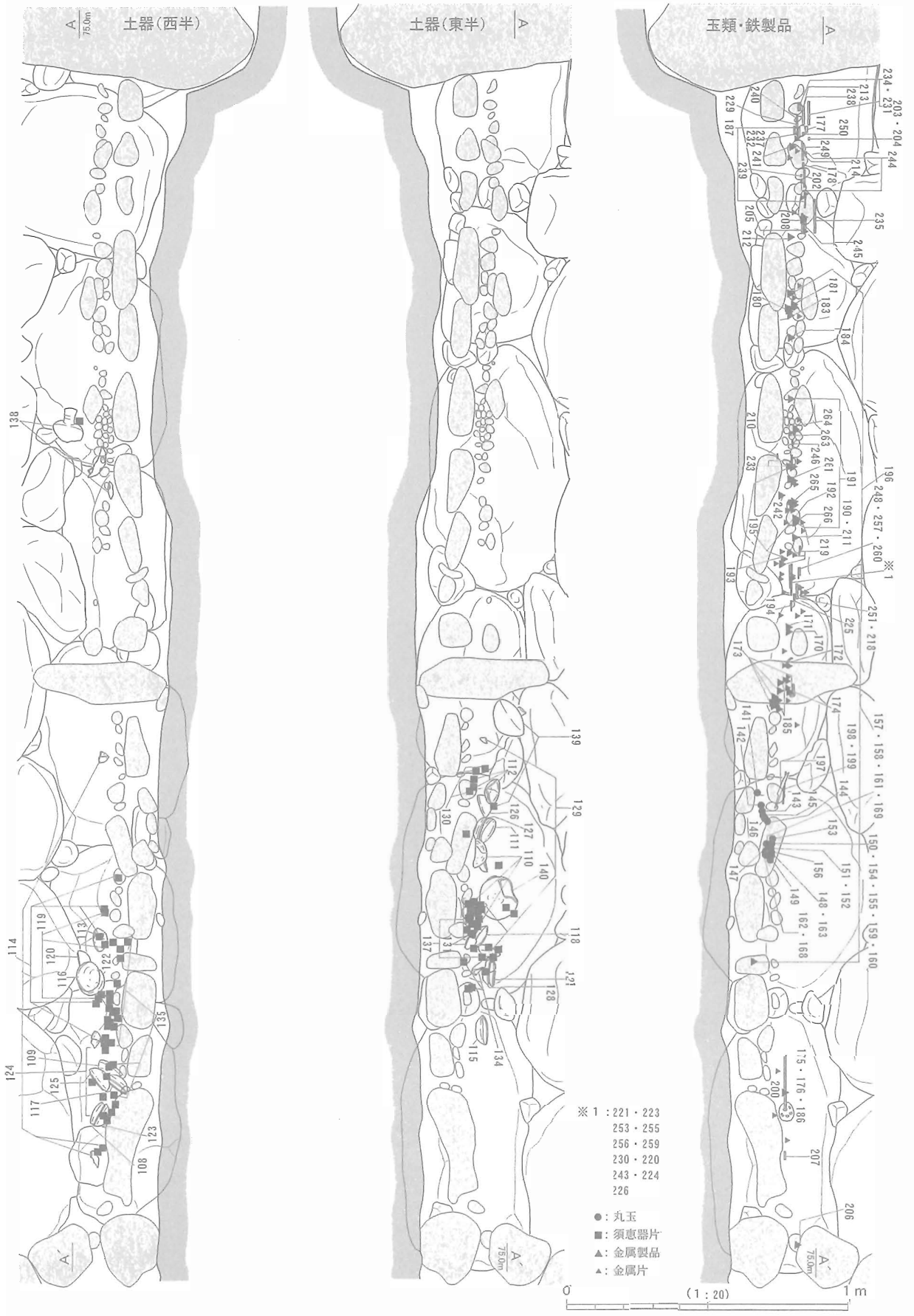
屍床仕切石～入口では全面的に遺物が出土しているが、人骨が埋葬された北西部分には玉類と刀子のみで、それを取り囲むように須恵器、大刀等が副葬されている。玉類はN-61の人骨に伴う可能性が高い。

北東隅で破片となった馬具（轡，172～174）や鍔（185）が、その南側で須恵器坏身、坏蓋、平瓶、高坏、広口壺が出土した。平瓶（140）は広口壺の破片部分からも出土しており、破壊された状態でこの位置に置かれた可能性が高い。

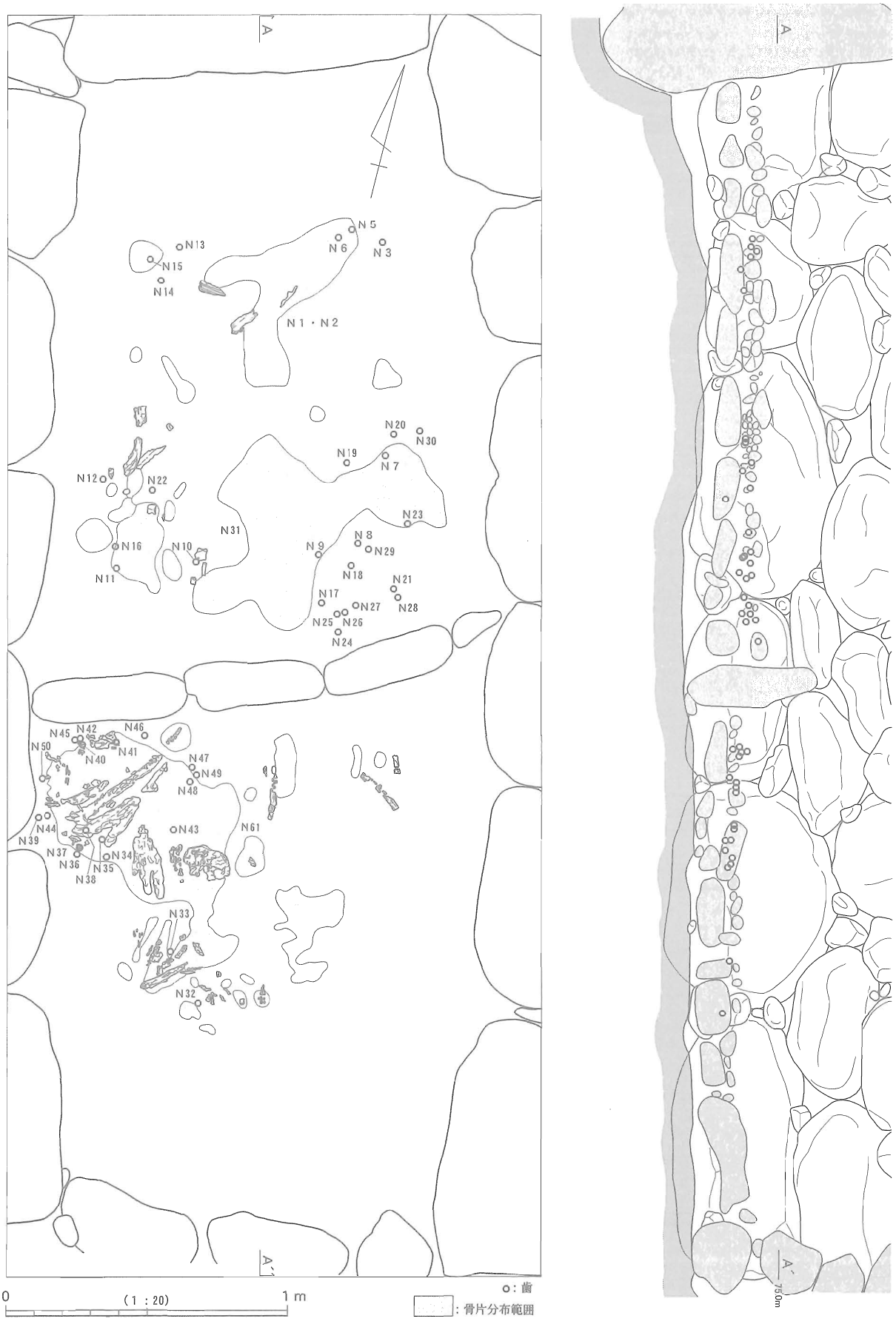
これらの須恵器のそのさらに南側で、大刀（175）が鍔（186）と鏃（176）が装着された状態で石室



第45図　須津J-第159号墳　横穴式石室遺物出土状況図①



第46図　須津J-第159号墳　横穴式石室遺物出土状況図②



第47図　須津J-第159号墳　横穴式石室人骨出土状況図

主軸に直交する方向で出土した。中央部で坏身（131）が出土し、玉類の南側では須恵器坏身、坏蓋、鬶が出土した。須恵器坏蓋（114）・鬶（135）は、完形品である116・122の下から破片となって出土しており、この位置に置かれた時には既に破砕していたことが判明する。

須恵器や大刀が破壊された状態で出土しており、この破壊が埋葬時に行われたのか、追葬に伴いそれ以前の遺物を破壊したのかは特定できない。

（５）人骨の出土状況（第47図，図版33・35）

人骨は上面のみ出土した。屍床仕切石～奥壁側（北半）、屍床仕切石～入口（南半）ともに出土しており、石室全体が埋葬空間として利用されている。

なお、人骨鑑定結果については、本章第６項で報告する。

上面（屍床仕切石～奥壁側，石室北半）　人骨は屍床仕切石の北側部分で大きなまとまりとしてN-1・N-2とN-31が出土した。歯は石室北半に散在する。歯が散在していること、まとまりで出土した人骨も頭蓋骨や長骨（大腿骨など）が近くから出土し、伸展状態の場合の原位置を留めないことから、石室北半に埋葬された遺体は、伸展状態ではなく集骨された状態であることがわかる。N-1・N-2付近とN-31付近の人骨は別個体のものと想定できるが、人骨鑑定ではそこまで特定できなかった。人骨が集骨された理由は、追葬に伴いかたづけ行為が行われた、別の場所で骨化されたものが石室に改葬された、の２者が想定できる。後述する石室南半に埋葬された人骨を含めて、伸展葬の人骨は確認できないこと、石室内は床面が良好に残存していることを考慮すると、J-第159号墳では埋葬時の原位置を留めているにもかかわらず伸展葬が確認できないことになり、伸展葬された人骨が追葬時のかたづけ行為により集骨されたと考えるよりも、別の場所で骨化されたものが石室内に改葬された可能性を想定しておくべきだろう。

上面（屍床仕切石～入口，石室南半）　人骨の残存状況は不良であるが、頭蓋骨と長骨が同じ位置（N-61）から出土しており、屍床仕切石の南西側に集骨された状態で埋葬されたことがわかる。歯の状況から複数個体の人骨が埋葬されている可能性もある。

（６）出土遺物（第48～52図，第19～21表，巻頭図版６，図版37～45）

石室内から、須恵器、玉類、耳環、馬具（環状鏡板付轡）、大刀（鉄装頭椎大刀か）、刀装具（責金具・吊手孔付足金物など）鉄鏃、刀子、弓両頭金具が出土した。副葬遺物の埋葬段階、時期区分については小結にて詳述するため、ここでは出土位置をまとめた上で、遺物の特徴を述べるに留める。

石室上面（屍床仕切石～奥壁，北半）

耳環(170・171)、大刀・刀装具(177・178・180・181・183・184・187・190～195)、刀子(201～205・208～214)、鉄鏃(218～226・228～235・237～246・248～251,253,255～257,259・260)、弓両頭金具(261～266)、須恵器(138)

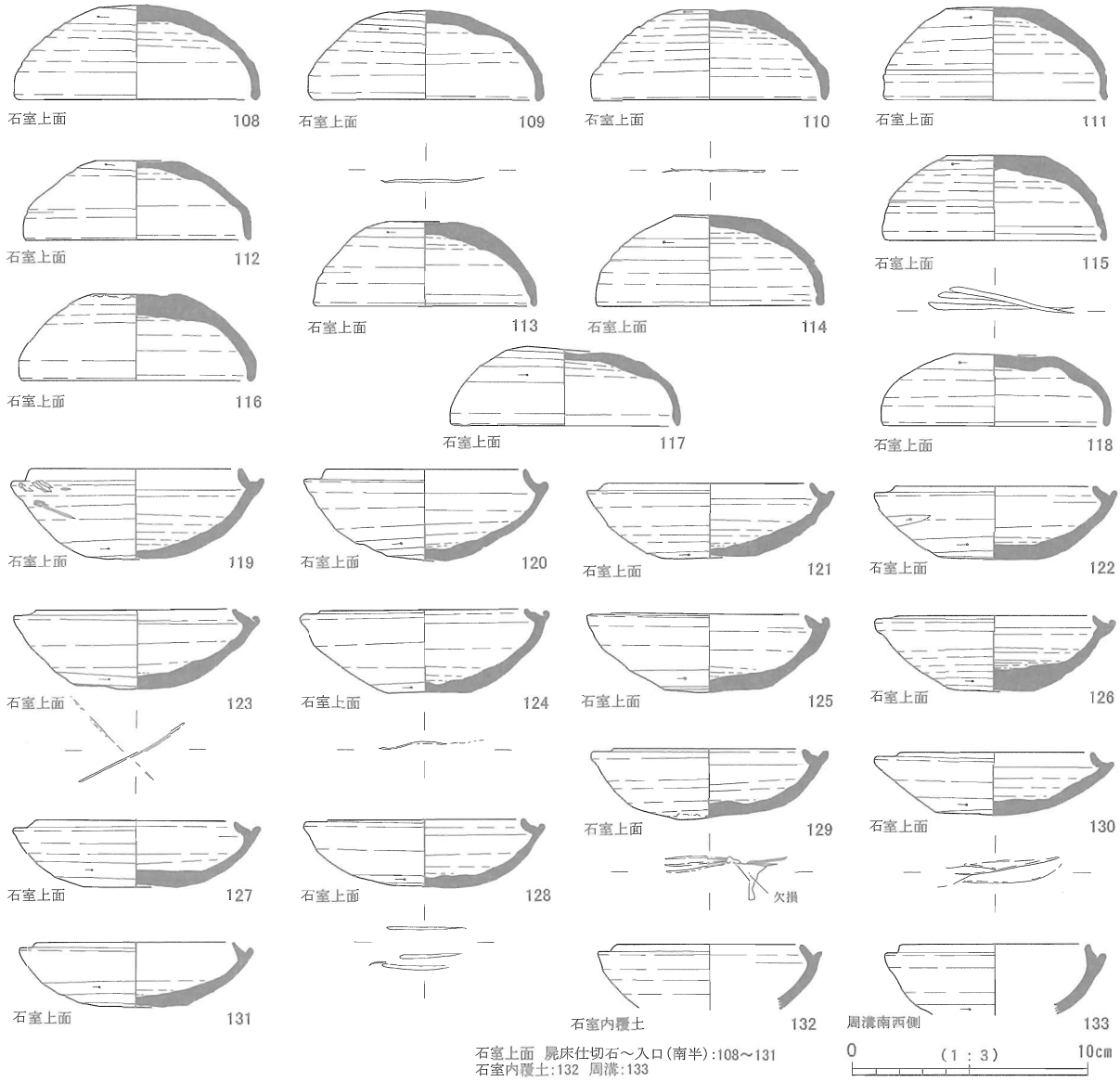
石室上面（屍床仕切石～入口，南半）

玉類(141～163・168・169)、馬具(172～174)、大刀・刀装具(175・176・185・186)、刀子(197～200・206・207)、須恵器(108～131・134・135・137・139・140)

石室上面　刀装具（196）

石室覆土　玉類（164～167）、大刀・刀装具（179・182・188・189）、刀子（216・217）、鉄鏃（227・236・247・252・254・258）、須恵器（132）

土器　須恵器坏蓋11点、坏身15点、高坏１点、鬶２点、広口壺１点、平瓶３点が出土した。



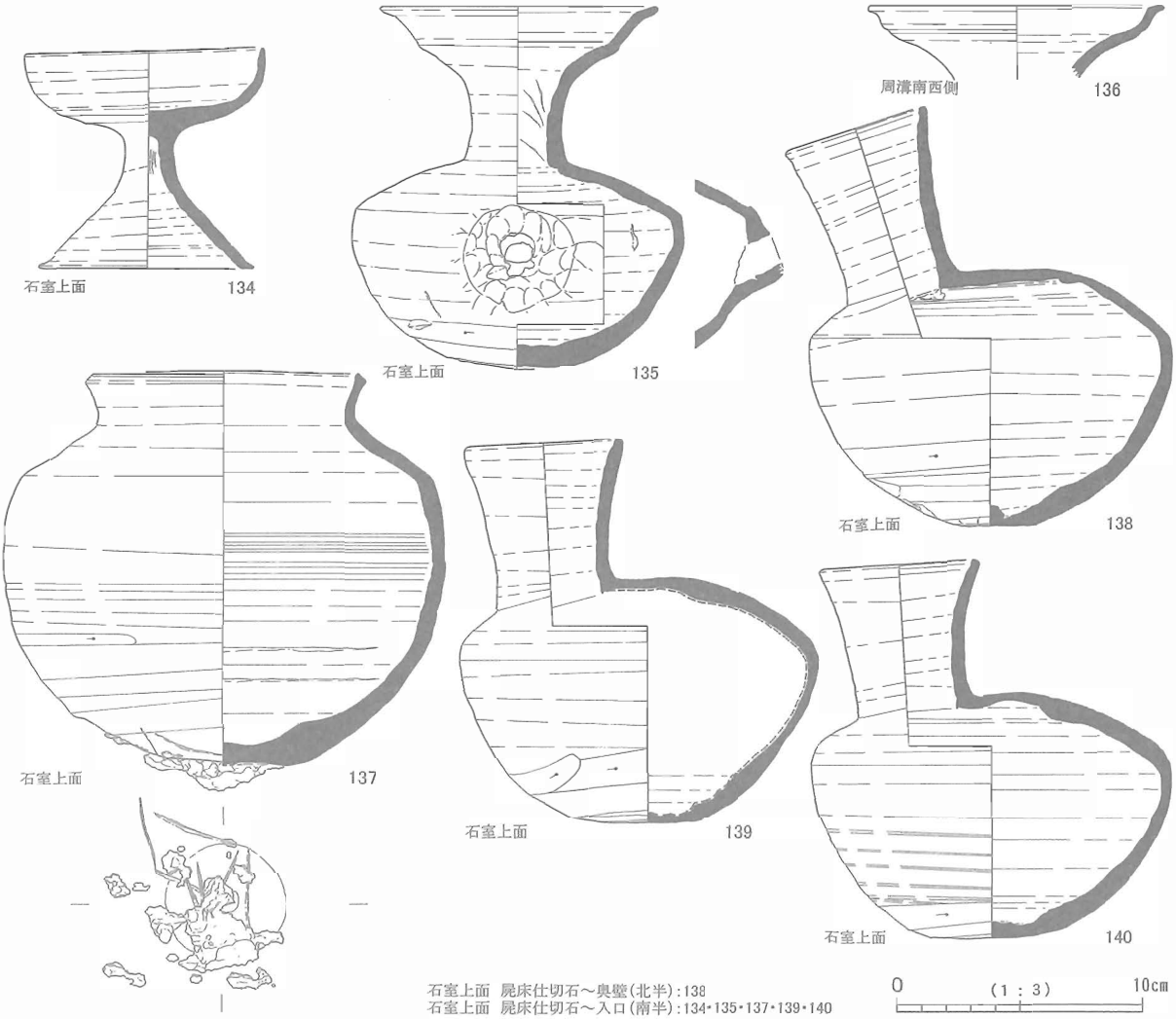
第48図　須津J-第159号墳　出土土器実測図①

須恵器坏蓋は、特徴から4種類に区分できる。坏蓋ａは半球形で、口縁と天井の境に稜や凹線がないもので、口縁部が内湾し、端部が丸く収められるもの（108～110）である。坏蓋ｂは凹線があり、口縁端部が外反するもの（111）である。坏蓋ｃは浅い凹線あるいは稜があるもので、口縁部に内傾する段を持つもの（112～115）である。坏蓋ｄは形態的には杯蓋ａと類似するが、天井が平らなもの（116～118）である。

坏身は、たちあがりの高さと、器高で4種類に区分することができる。坏身ａはたちあがり、器高が高いものである（119・120）。坏身ｂはたちあがりが低く、受部は外上方に向かうもの（121・122）。坏身ｃはたちあがりが短く、ほぼ受部と同じ高さで、受部端部が内湾するもの（123～126）。坏身ｄはたちあがりが低く、受部と同じ高さで、器高が低いものである（127～131）。この他、132は坏身ｂに分類できる可能性が高い。

なお、ヘラ記号からみると、115と129・130がほぼ同一、113・114と124が同じヘラ記号であることから、組合関係にある可能性が高い。また、坏蓋・坏身はすべて湖西産の可能性が高い。

高坏（134）は、無蓋短脚高坏である。坏部は埦形で、口縁部は内傾する面をもつ。脚部は接合部か



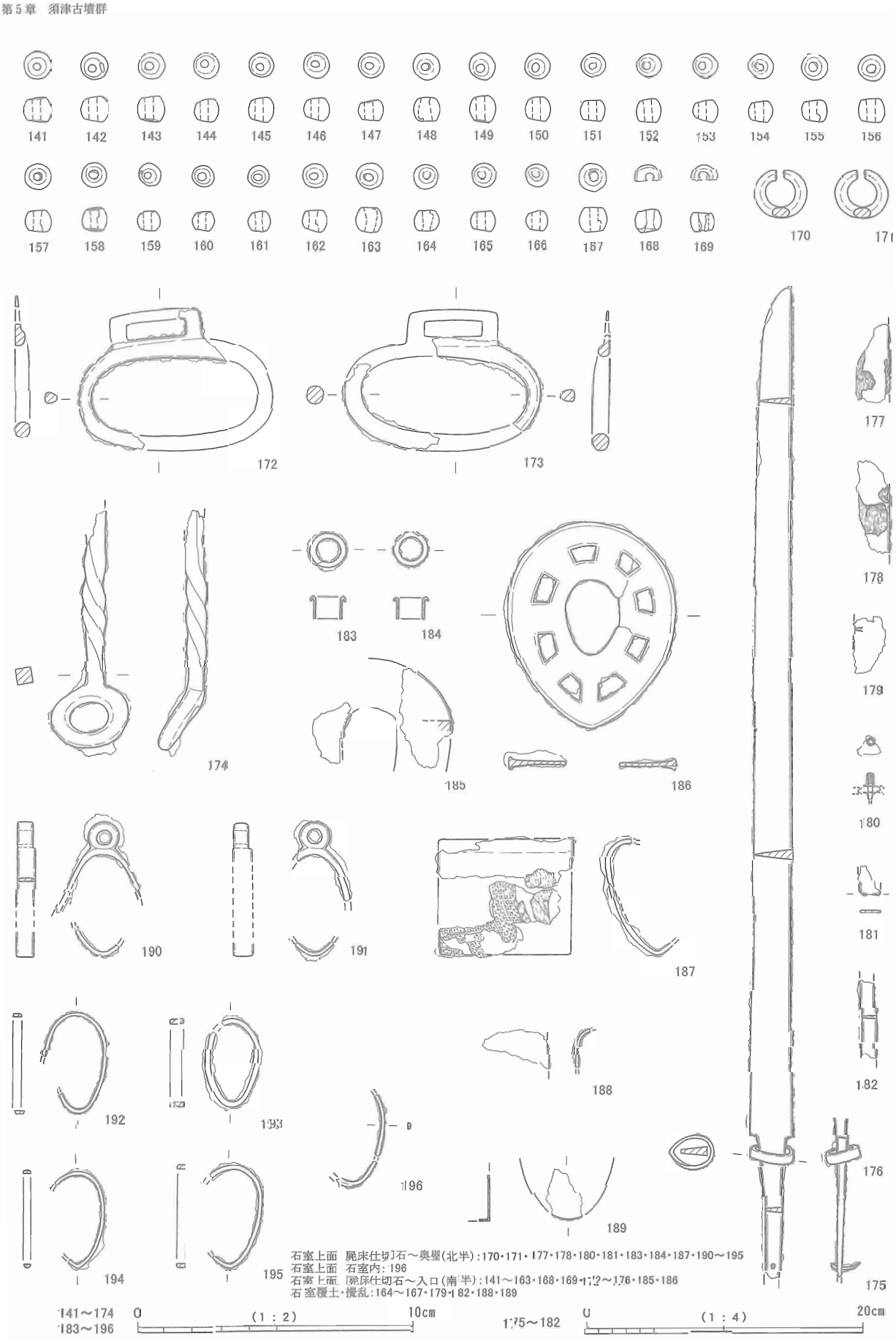
第49図　須津J-第159号墳　出土土器実測図②

ら垂直に下がった後、急激にハ字形に外反し、端部には面をもつ。自然釉は黒色を呈し、坏部内面および脚部内面に付着していることから、２回にわたり焼成されたことが判明する。また、器形や胎土、自然釉の特徴から湖西窯産ではない可能性が高い。口径9.6cm、器高8.7cmである。

瓶は１点出土している。135は、ほぼ完形に復原でき、頸部は細く直立して立ち上がった後急激に外反し、口縁部で段をつけさらに外反する。胴部は肩部に最大径をもつ扁平な球胴で、底部には回転ヘラ削りが施される。注口は接合された嘴口であり、口は外上方を向く。注口の周囲には特に文様はない。湖西産の可能性が高い。

広口壺（137）は胴上部と中央部がほぼ同じ最大径で、胴部は肩の張る球胴である。頸部はく字形で、口縁部は外傾する面をもつ。口径11.2cm、器高17.0cmである。底部には窯詰め際の安定を取るために設置された粘土が付着している。この付着物に遮られて見えにくいが、底部にはヘラ記号が刻まれている。このヘラ記号は坏蓋・坏身に施された「二」や「×」などとは異なり、図では縦・斜め方向４本の沈線とそれに直交する二本の沈線、その左側に斜め方向の沈線が施されている。湖西産の可能性が高い。

平瓶は３点（138～140）出土し、形態的には類似する。138が屍床仕切石より奥壁側、139と140が屍床仕切石の南側で出土した。胴部は胴上部に最大径があり、扁平な球胴である。138・139は手持ちの静止ヘラ削り、140は回転ヘラ削りが行われる。３点ともに頸部は直立に近いが逆ハ字形にたちあがり、口縁端部は内傾する段がある。平瓶３点は湖西産の可能性が高い。



第50図　須津J-第159号墳　横穴式石室出土玉類および金属製品実測図①

玉類　丸玉29点（141～169）が出土した。色調は黒褐色を呈するもので、材質は石材であるが、自然科学分析を行っていないことから、種別は特定できない。直径８～10㎜、全長（高さ）７～９㎜、穿孔部分の直径は2.5～4.0㎜である。

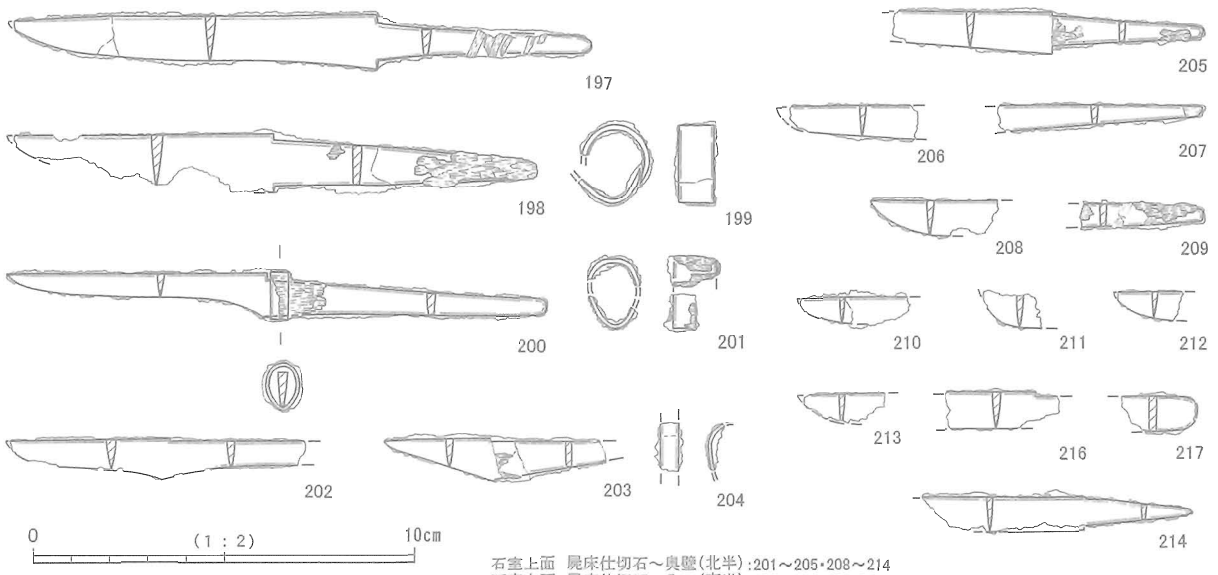
耳環　銅地金張の金環が２点（170・171）出土した。２点はほぼ同じ大きさ、断面楕円形であることから、同一被葬者に伴うものである可能性が高い。また、小口部分に皺が確認できることから銅地に金箔を巻き付けて製作したものであることが判明する。直径約1.8㎝（全長1.7㎝，幅1.9㎝）である。

馬具　鉄製環状鏡板付轡１組分（172～174）が出土している。大型矩形立聞環状鏡板付轡（172・173）で、銜は失われている。鏡板は部分的に欠損しているが、復原で環は楕円形で、その環に大型矩形立聞（回字形）が鍛接されるものである。環の断面は円形で、大型矩形立聞鍛接部分も円形である。法量は復原で、全高5.1～5.2㎝、環高3.8～4.1㎝、環幅7.0㎝、立聞幅3.3㎝、立聞高1.2～1.3㎝である。引手（174）は引手壺部分が残存しており、く字形の引手壺で、軸は一条線で捩りがある。174の図上部で捩りがなくなり直線的になることから、沼津市東原１号墳例（東海古墳文化研究会2006）のように引手の中央付近で捩り替えが行われた可能性もある。

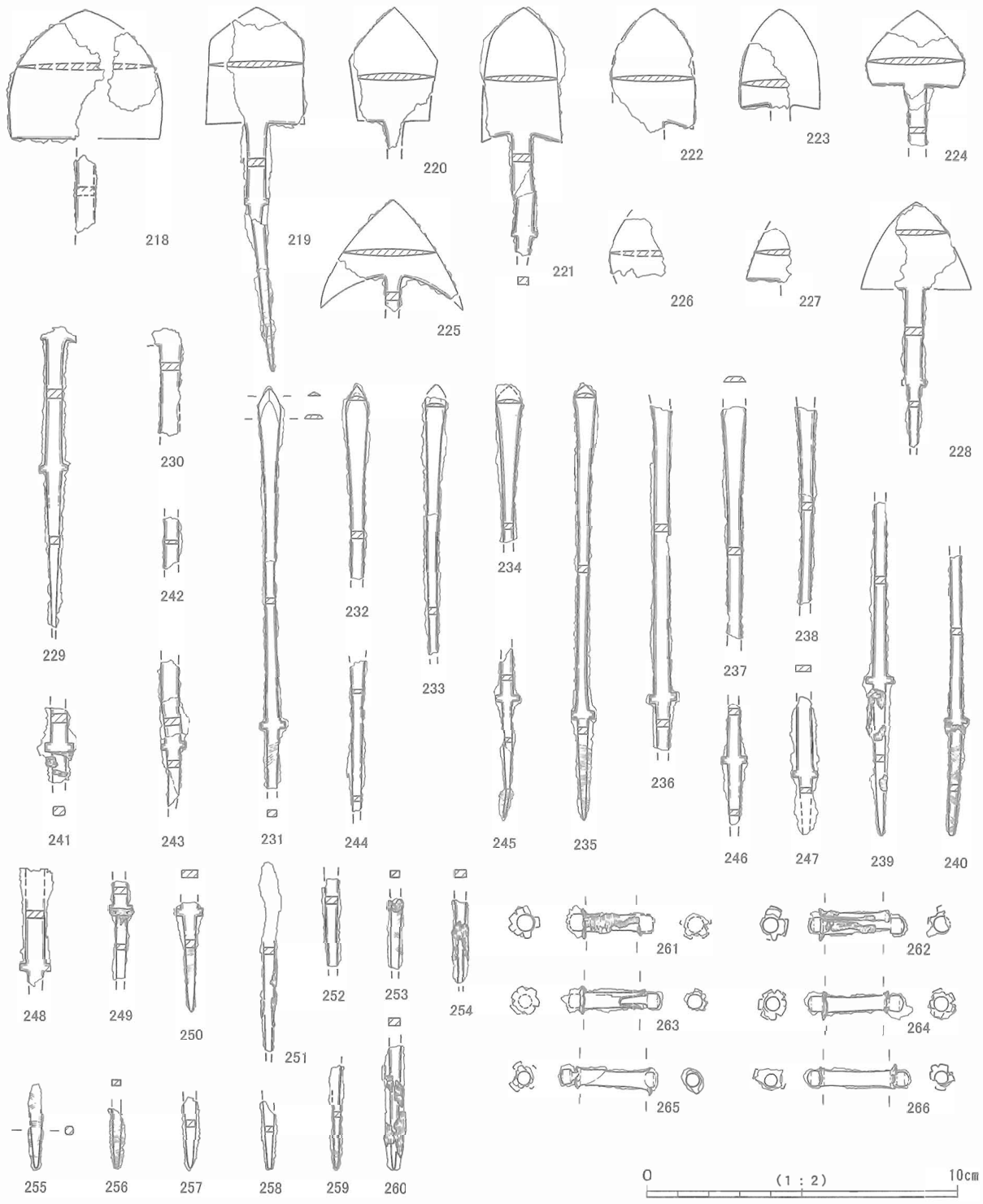
鉄器　大刀（175）は鍔（176）、鍔（186）が装着された状態で出土した。大刀は反りのない直刀で、茎尻が欠損する。関は直角均等両関で、茎は茎尻に向かい先細る。茎には目釘孔が１孔穿たれ、鉄製目釘が残存する。残存長71.4㎝、刀身長61.2㎝（復原刀身長61.5㎝）、幅3.1㎝、棟厚さ3.5㎜、茎残存長10.2㎝、最大幅2.0㎝である。目釘の残存長は2.2㎝であり、少なくとも木柄の厚さは２㎝以上あったと想定できる。鍔（186）は鉄製倒卵形八窓鍔である。透窓はほぼ均等に配置されるが、棟側の４孔が図面右側にずれている。内孔は倒卵形である。断面は縁がＴ字形であり薄手に仕上げられる。金銅装鍔を模倣した鍔といえる。長軸7.4㎝、短軸6.0㎝、内孔の長軸2.7㎝、短軸1.9㎝である。

177～182は大刀の破片で、177～179が刀身片、180～182が茎片である。180は鉄製目釘が残存する。181は茎尻で一文字尻である。

鍔（185）は鉄製無窓鍔である可能性が高い。平面形は倒卵形であったと想定できる。断面は細長い長方形であろうか。刀装具（183・184）は大刀柄頭の懸通孔に装着された鉄製鵐目金具である。この金具は２点ともに長方板の上部を折り曲げた後さらに筒形に成形したものであり、接着面は蝋付けされた可能性が高い。この金具の存在から倭系大刀（頭椎大刀の可能性が高い）が副葬された可能性が高い。



第51図　須津Ｊ-第159号墳　横穴式石室出土金属製品実測図②



石室上面　羨床仕切石～奥壁(北半)：218～226，228～235，237～246，248～251・253・255～257・259～266
石室覆土：227・236・247・252・254・258

第52図　須津Ｊ-第159号墳　横穴式石室出土金属製品実測図③

この金具の付近から大刀の茎尻と茎片が出土している。柄頭が確認できないことから、有機質の柄頭であった可能性がある。この大刀の刃部片が右側壁隅から出土しており、攪乱時にかなり破壊された可能性が高い。190・191は鉄製吊手孔付足金物、192～196の鉄製責金具もこの大刀に伴う可能性が高いが、

二足佩用であるとすれば数が多く、やや長さの短い193などが別の大刀に伴うものであろう。この他、キャップ状の鏃の可能性がある鉄製品（189）が出土した。

187は、鞘口金具の可能性が高い。鉄製の筒状で、断面倒卵形である。外面には布が付着している。188は鞘口金具、鞘尻金具の可能性がある鉄製筒状の金具である。

刀子は切先片で数えて11点出土している。197は先端が欠損する以外はほぼ完形であり、関は直角均等両関、茎は茎尻に向かい先細り、茎尻は丸く仕上げられる。茎には樹皮巻きが残る。刃部はやや内湾しており、研ぎ減りした可能性がある。198は切先と刃部が欠損するもので、茎に比して刃部が短い。関は直角均等両関で、茎は茎尻に向かい急激に幅を狭め、茎尻は丸い。茎には木質が残っており、木柄が装着されていたことがわかる。200は鉄製柄縁金具（鏃）が装着された刀子で、刃部は内湾しており、研ぎ減りした可能性が高い。関は刃部側が撫関、棟側が直角関で、茎は茎尻に向かい先細る。茎には木質が残存しており、木柄が装着されていたことがわかる。202の形状は200と同様であり、刃部が短い。茎には木質は遺存しない。203は小型の刀子で、刃部はふくらが枯れ、関から直線的に刃がつけられている。関は両関で刃部側が撫関で、棟側が直角関である。茎は茎尻に向かい急激に先細る。205は切先が欠損している。関は直角両関で、茎は茎尻に向かい急激に先細り、茎尻は丸い。茎には木質が残存しており、木柄に装着された状態で副葬されたことがわかる。206・208・210～213は切先片である。214は関が非常に浅い直角両関である可能性が高く、茎は短く急激に先細り、茎尻は尖る。216も直角両関である可能性が高い。207・209・217は茎片で、207は茎尻に向かって先細り、先端は斜めに仕上げられている。209・217も先細るもので、先端は丸い。207・209には木質が残存することから、木柄に装着された状態で副葬されたことがわかる。なお、これらの刀子は茎には木質が確認できるが、刃部に木質が確認できないことから、剥き身で副葬された可能性もある。

鉄鏃は平根式が11点（218～228）、尖根式８点（231～238）出土している。残りは頸部～茎片（229・230，239～260）である。茎関はすべて棘関である。

平根式は形状が異なるが、ふくらの張る三角形式（218）、五角形式（219・220）、腸抉長三角形式（221）、腸抉三角形式（222・223）、ふくらの枯れた三角形式（227・228）、腸抉が深い腸抉三角形式（225）、丸みを帯びた三角形式（224・226）に分類できる。ただし、平根式鉄鏃は腐食が進んでいることから、この中でいくつか（218・223・226・227）は鉄鏃ではないものを鉄鏃として報告している可能性もあることを明記しておきたい。

尖根式は長頸鏃で、尖根鏑箭式である。鏃身断面は片鎬造あるいは片丸造であるが、残存状況が良好な231では鏃身に鎬が確認できることから、本来は片鎬造であった可能性が高い。茎関が残存するものはすべて棘関である。残存状況の良好な231や235からみると、全長は14.0cm前後、鏃身長５㎜前後、頸部長10.5cm前後、茎長3.0cm前後である可能性が高い。

弓両頭金具が６点（261～266）出土した。筒状の金具に軸棒を通し、その軸棒の両側を円筒形にかしめたものである。筒部は鉄板を円形に折り曲げ、先端を花弁形に折り曲げたもので花弁は４～６弁である可能性が高い。全長2.7～3.3cm、筒の直径５㎜である。

（７）埋葬人骨について（第23表）

人骨鑑定報告（本節第６項）で詳述するため、ここでは要点のみ記載する。

人骨は、すべて上面から出土した。

屍床仕切石～奥壁（北半）　屍床仕切石～奥壁（北半）からは、長骨（大腿骨など）、頭蓋骨が砕片となって２箇所（N-1・２とN-31）で出土している。この人骨付近からは歯が多数出土しており、歯の咬耗度から壮年と考えられる。

屍床仕切石～入口（南半）　屍床仕切石～入口（南半）では、長骨や頭蓋骨が押し潰されたような状態で出土している（N-61）。その中に脛骨に仙骨が付着しているものがあり、集骨された状態で埋葬されていたことは明らかである。この集骨内で出土した下顎骨に釘植している歯からはこの人骨の死亡年齢は壮年と想定できる。

石室内　この他石室内からは60点以上の歯が出土しており、歯の特徴からは成人３～４人分が混在している可能性が高いことが推定できる。頭蓋骨が３箇所（N-1・２，N-31，N-61）で出土することも歯の鑑定結果を裏付けているといえよう。また、すべての人骨は被熱していない。

なお、J-第159号墳出土人骨は、壮年～熟年のもので、未熟者や老年のものは出土していない。残念ながら性別は不明である。

つまり、J-第159号墳の人骨は集骨された状態で出土し、埋葬されたのは成人３～４名であることが判明した。

（８）小結

築造時期　築造時期について、須恵器坏身（119・120）は口径が約９㎝であり、遠江Ⅳ期前半に位置づけることができる。八窓鍔（186）は遠江Ⅲ期後半ごろまでに主体的に流通すると考えられているが、遠江Ⅳ期以降も残存する可能性もある。この鍔以外に確実にⅢ期末葉以前に遡る遺物はない。

したがって、J-第159号墳の築造時期は遠江Ⅳ期前半の可能性が高いが、186のように遠江Ⅲ期末葉以前に遡る可能性がある遺物が存在することからⅢ期末葉以前に遡ることも考慮しておく必要がある。

追葬　須恵器坏身（121・122）は器高がやや低く、遠江Ⅳ期前半でも新しい時期、129～131はたちあがりと受部の高さがほぼ同様であることから、遠江Ⅳ期後半に位置づけることができる。したがって、築造時期と考えられる119・120などのほか、少なくとも２時期の遺物が確認でき、人骨の鑑定が３～４人の埋葬とするのと合致しており、少なくとも２回の追葬が行われた可能性が高い。

各時期の副葬遺物　須津J-第159号墳では遺物が多いため、出土位置ごとにまとめたものが第53図である。石室内に３～４人の埋葬が考えられることは須恵器が３時期分存在するのとほぼ合致する。また破壊が著しい大刀や鉄鏃などは石室北半に多く確認できる。

須恵器は屍床仕切石～入口（南半）にまとめられており、混在するような状況を示すことから出土位置により明確に区分することは困難である。型式学的に遠江Ⅳ期前半（２時期）、Ⅳ期後半に区分できるのみである。また、屍床仕切石より奥が埋葬場所として強く意識されていたと仮定すれば、そこにある金属製品は初葬時と早い段階の追葬に伴うものといえる。しかし、遠江Ⅳ期前半以前にさかのぼる可能性のある鍔付大刀（175）は入口付近で出土しており、移動されている可能性が高いため、金属製品についても出土位置から副葬時期を特定することはできない。

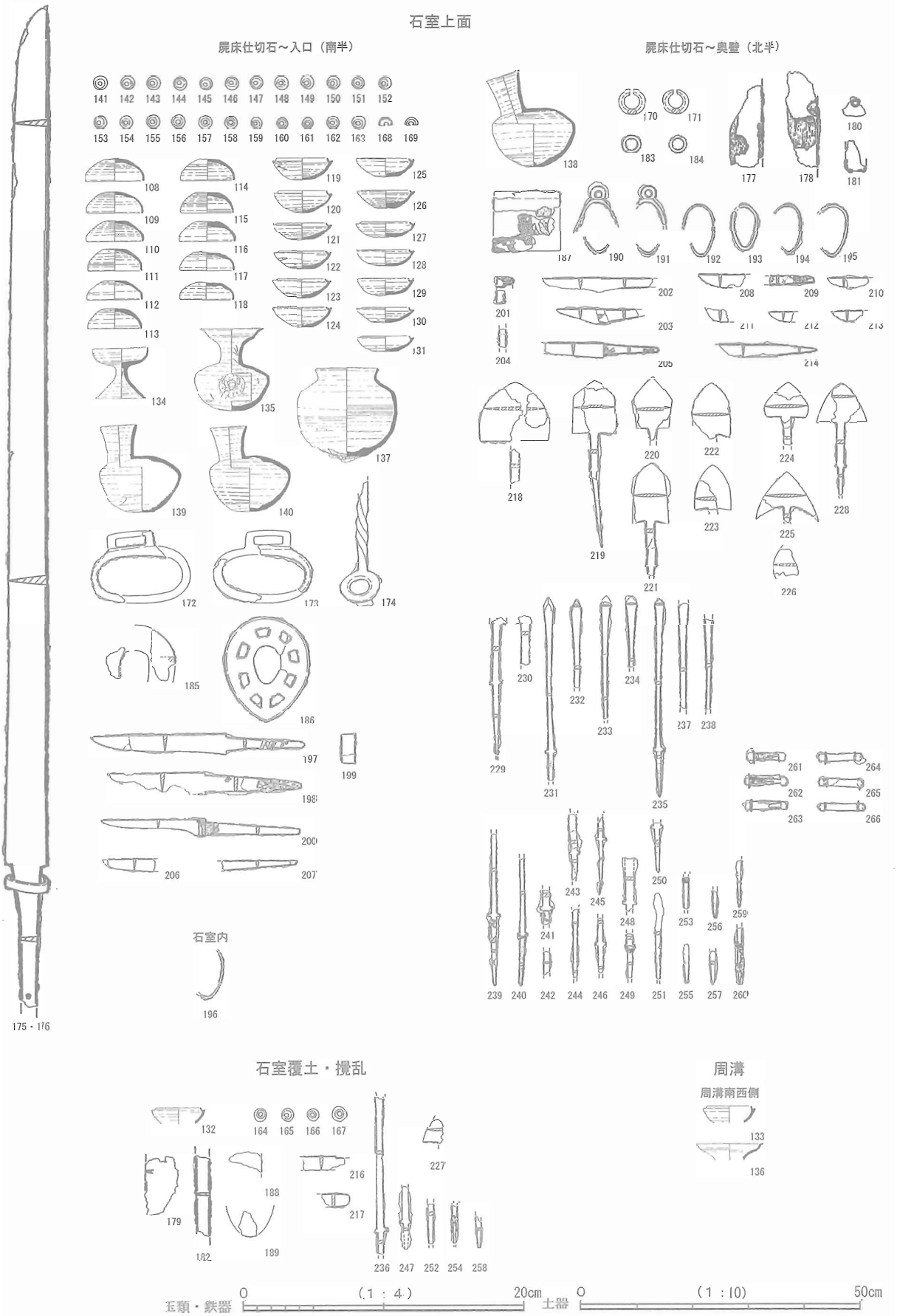
なお、屍床仕切石南側の玉類出土箇所と人骨出土箇所（N-61）は一致しており、この人骨に伴う可能性が高いが、どの段階の埋葬かは特定できない。

したがって、須恵器杯蓋・杯身以外は明確に時期区分することは現時点では困難であり、時期がある程度想定できる遺物のみまとめておきたい。須恵器では３時期が想定できるので、３人の埋葬の場合のそれぞれの遺物を記述する。

初葬時に伴う可能性が高い遺物　須恵器（108～110・119・120）、大刀（175）

追葬に伴うもの（１回目）　須恵器（111・117・118・121～123）

追葬に伴うもの（２回目）　須恵器（112～116・124～131）



第53図　須津Ｊ-第159号墳の埋葬と副葬品の関係

４．古墳に伴わない遺物

（１）縄文土器（第54図，第19表，図版45）

縄文土器のうち文様のある破片３点を図示した。267～269は、同一個体である可能性が高く、267は口縁部の破片で、外面には沈線による矢羽状の文様が描かれている。268・269は縦位の沈線で三角形を連続的に表現する。上記の特徴から、縄文時代前期後半の諸磯ｃ式土器の深鉢である可能性が高い。

（大谷）

（２）石器（第54図，第22表，図版45）

縄文時代の打製石斧１点（270）が出土した。

打製石斧　270は打製石斧の刃部である。全体的に細かな剥離が施され、精緻に製作された印象を受ける。縁辺に潰れは確認できない。上半部が折損しているため、全体の形状は不明だが、おそらく短冊形であると推測される。石材は頁岩である。（柴田）

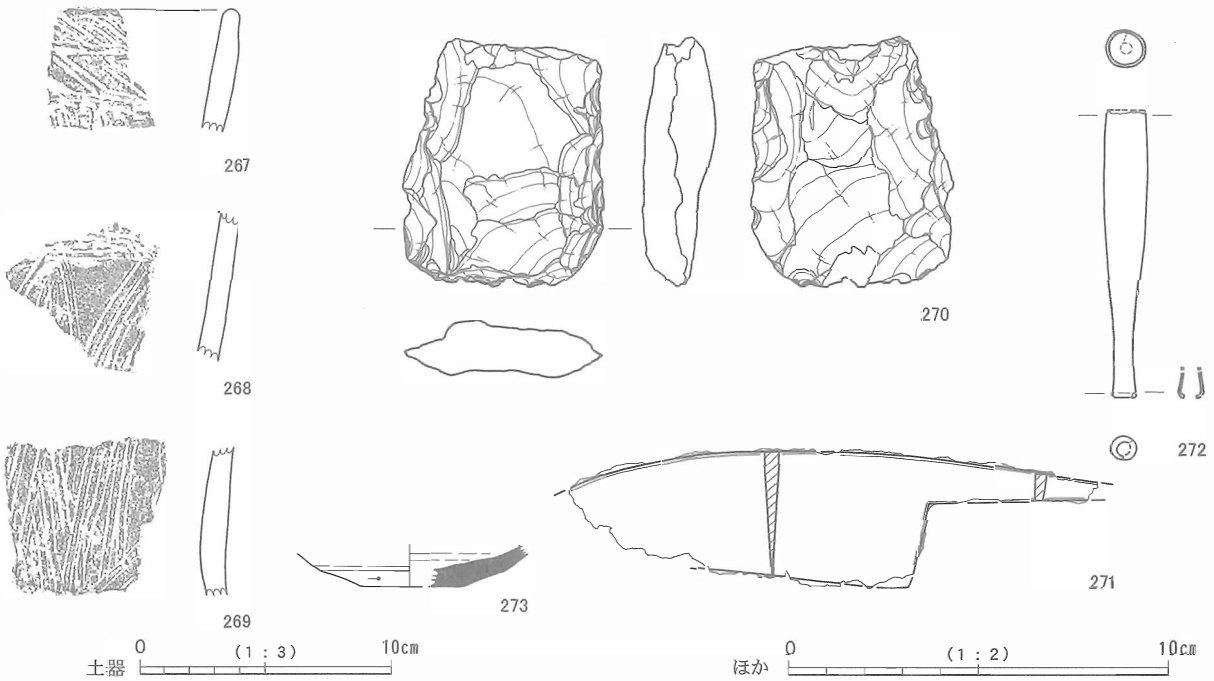
（３）須恵器（第54図，第19表）

須恵器１点（273）が１区の表土中から出土した。J-第６号墳かJ-第118号墳に伴う可能性が高い。273は坏身（あるいは坏蓋）の破片である。底部は平底に近く、ヘラ削りが行われている。（大谷）

（４）金属製品（第54図，第21表，図版45）

包丁　鉄製包丁（271）は棟側が刃先に向かい弧を描き、刃部は直線的に刃先に向かう。関はほぼ直角で、非常に深い。茎は最大幅が1.1cmと非常に細く、端部に向かって細くなり、残存部分で５㎜である。帰属時期は不明である。

煙管（吸口）　銅製で、銅板を折り曲げて形を整形し、蝋付けしたものである（272）。吸口側は端部を内側に折り返している。全長7.6cm、羅宇側直径1.1cm、吸口側直径６㎜である。帰属時期は不明であるが、江戸時代の可能性が高い。（大谷）



第54図　須津古墳群出土の古墳に伴わない遺物実測図

5．須津古墳群出土遺物観察表

（1）須津古墳群出土土器

第19表　須津古墳群　出土土器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
J-第6号墳	石槍覆土	29	16	1	土師器	高盤？	接合部～脚部	7	－	－	－	－	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	(脚付盤)赤彩
	石室上面			2	須恵器	坏蓋	全体	100	3.4	9.2	8.8	4.1	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y6/1)	
				3	須恵器	坏蓋	全体	100	3.3	8.8	8.4	3.4	灰(10Y6/1)	灰白(7.5Y7/1)	ヘラ記号
				4	須恵器	坏蓋	全体	100	3.2	8.8	8.5	3.8	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/1)	ヘラ記号
				5	須恵器	杯身	全体	100	3.1	9.0	7.3	3.4	灰(7.5Y6/1)	灰(10Y6/1)	ヘラ記号
				6	須恵器	坏身	全体	100	2.8	9.1	7.2	4.2	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	ヘラ記号
				7	須恵器	坏身	全体	100	3.1	9.3	7.4	3.8	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y5/1)	ヘラ記号
	周溝			8	須恵器	壺瓶類	胴部	10	－	－	－	－	灰黄(2.5Y6/2)	灰(5Y6/1)	
			17	9	須恵器	平瓶	口縁～胴部	20	－	(26.3)	(13.2)	－	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
				10	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰(N4/)	黄灰(2.5Y5/1)	
				11	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
	石槍覆土			12	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰(N5/)	黄灰(2.5Y5/1)	
				13	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
	周溝			14	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰(5Y4/1)	灰黄(2.5Y6/2)	
			17	15	須恵器	甕	口縁～胴部	7	－	(69.0)	(33.8)	－	灰黄(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/1)	
J-第118号墳	石室内覆土	38	25	101	須恵器	甕	口縁部	8	－	－	(30.0)	－	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	102と同一個体
				102	須恵器	甕	頸部	11	－	－	－	－	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	101と同一個体
	石室掻乱			103	須恵器	壺瓶類	胴部	12	－	－	－	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
	石室内覆土			104	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	黄灰(2.5Y6/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	
				105	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(10YR7/1)	
				106	須恵器	甕	胴部片	－	－	－	－	－	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	
J-第159号墳	石室上面	48	37	108	須恵器	坏蓋	全体	100	4.0	10.3	10.0	3.8	灰(7.5Y6/1)	灰白(5Y7/2)	
				109	須恵器	坏蓋	全体	99	3.8	9.9	9.5	3.2	灰(N5/)	灰(N6/)	
				110	須恵器	坏蓋	全体	100	3.8	10.1	9.7	3.1	灰白(10Y7/1)	灰(7.5Y6/1)	
				111	須恵器	坏蓋	全体	100	3.9	9.5	9.3	4.1	灰(7.5Y7/1)	灰(7.5Y6/1)	
				112	須恵器	坏蓋	全体	100	3.5	9.9	9.4	3.5	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
				113	須恵器	坏蓋	全体	100	3.5	9.5	9.3	3.2	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	ヘラ記号
				114	須恵器	坏蓋	全体	99	3.8	9.6	9.3	3.8	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	ヘラ記号
				115	須恵器	坏蓋	全体	99	3.6	9.4	9.5	4.2	灰白(5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/2)	
			38	116	須恵器	坏蓋	全体	100	3.7	10.0	9.6	3.6	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	
				117	須恵器	坏蓋	全体	99	3.3	9.7	9.5	3.7	灰(10Y5/1)	灰(5Y6/1)	
			37	118	須恵器	坏蓋	全体	100	3.1	9.7	9.4	4.3	灰(5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	ヘラ記号
			38	119	須恵器	坏身	全体	100	3.8	10.7	8.9	4.4	灰(5Y5/1)	オリーブ灰(5Y5/2)	
				120	須恵器	坏身	全体	100	3.8	9.9	8.5	2.6	灰(N5/)	灰(7.5Y5/1)	
				121	須恵器	坏身	全体	100	3.2	10.5	8.8	4.0	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	
				122	須恵器	坏身	全体	100	3.1	10.3	8.6	4.4	灰(N5/)	灰(N6/)	
				123	須恵器	坏身	全体	100	3.4	10.5	8.4	5.1	灰(5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	ヘラ記号
				124	須恵器	坏身	全体	98	3.5	10.6	8.7	3.5	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/1)	ヘラ記号
				125	須恵器	坏身	全体	100	3.4	10.2	8.2	4.1	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/1)	
				126	須恵器	坏身	全体	100	3.2	10.2	8.4	3.5	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	
			39	127	須恵器	坏身	全体	98	2.8	10.0	8.5	4.0	灰(5Y6/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	
				128	須恵器	坏身	全体	100	2.8	10.2	8.3	4.1	灰(N3/)	灰(7.5Y5/1)	ヘラ記号
				129	須恵器	坏身	全体	100	3.0	10.0	8.1	4.5	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	ヘラ記号
				130	須恵器	坏身	全体	98	2.7	10.1	8.3	4.8	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	ヘラ記号
				131	須恵器	坏身	全体	100	2.7	9.9	8.3	4.6	灰(7.5Y4/1)	オリーブ灰(2.5GY5/1)	
	石室内覆土			132	須恵器	坏身	口縁～底部	10	--	(9.5)	(7.9)	－	暗オリーブ灰(2.5GY4/1)	灰(N/5)	
	周溝			133	須恵器	坏身	口縁～底部	10	--	(9.4)	(8.0)	－	オリーブ黒(5Y3/1)	灰(5Y5/1)	
	石室上面	49		134	須恵器	高坏	全体	95	8.7	9.6	9.6	8.6	暗青灰(5PB4/1)	暗青灰(5PB4/1)	
			40	135	須恵器	甕	全体	95	14.7	13.4	11.3	－	灰(N5/)	灰(N5/)	
	周溝		39	136	須恵器	甕	口縁部	8	－	－	(12.0)	－	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	
	石室上面		40	137	須恵器	短頸壺	全体	100	17.0	17.6	11.2	－	灰白(N7/)	灰白(N7/)	ヘラ記号
				138	須恵器	平瓶	全体	100	17.0	14.5	6.1	－	灰白(N7/)	灰白(N7/)	
				139	須恵器	平瓶	全体	100	15.6	14.4	6.3	－	灰白(N7/)	灰白(N7/)	
				140	須恵器	平瓶	全体	100	15.3	14.6	6.5	－	灰白(N7/)	灰白(N7/)	
Tr.17	表土	54	45	267	縄文土器	鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	褐(5YR5/6)	明赤褐(7.5YR4/3)	諸磯式
				268	縄文土器	鉢類	胴部	－	－	－	－	－	橙(7.5Y6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	諸磯式
				269	縄文土器	鉢類	胴部	－	－	－	－	－	にぶい褐(7.5YR5/4)	明褐(7.5YR5/6)	諸磯式
1区	表土			273	須恵器	坏類	底部	20	－	－	－	－	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	

（　）は復原値

（２）須津古墳群出土玉類

第20表　須津古墳群　出土玉類観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	材質	直径(mm)	全長(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
J-第６号墳	石室上面	30	17	16	勾玉	「碧玉」		3.6	4.0	12.36	濃緑色	片側穿孔
				17	丸玉	不明	8.0	7.0	3.0	0.59	少し緑がかった黒	琥珀、埋木製か？
	石室覆土			18	丸玉	ガラス	8.0	7.0	2.0	0.66	紺色	
	石棺覆土			19	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.0	0.04	紺色	
	石室上面			20	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.0	0.05	紺色	
				21	小玉	ガラス	4.0	2.8	1.5	0.04	紺色	
				22	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.0	0.04	紺色	
				23	小玉	ガラス	4.0	2.5	4.0	0.04	紺色	
				24	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.0	0.05	紺色	
				25	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.0	0.05	紺色	
	石棺覆土			26	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.0	0.04	紺色	
	石室上面			27	小玉	ガラス	3.5	2.5	1.0	0.04	紺色	
				28	小玉	ガラス	3.8	3.0	1.0	0.05	紺色	
	石棺覆土			29	小玉	ガラス	3.5	3.0	1.0	0.04	紺色	
	石室上面			30	小玉	ガラス	5.2	4.0	2.0	0.2	黄緑色	
	石棺覆土			31	小玉	ガラス	4.5	2.5	(1.0)	0.03	紺色	
				32	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.2	0.02	紺色	
	石室覆土			33	小玉	ガラス	4.8	3.0	1.5	0.09	紺色	
				34	小玉	ガラス	4.2	3.2	1.0	0.08	紺色	
				35	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.0	0.03	紺色	
				36	小玉	ガラス	3.5	3.2	1.0	0.06	紺色	
				37	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.5	0.04	紺色	
				38	小玉	ガラス	4.0	2.3	1.0	0.04	紺色	
				39	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.2	0.05	紺色	
				40	小玉	ガラス	4.5	2.2	(1.0)	0.02	紺色	
				41	小玉	ガラス	4.0	2.0	1.5	0.04	紺色	
				42	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.5	0.05	紺色	
				43	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.0	0.05	紺色	
				44	小玉	ガラス	2.2	4.2	1.7	0.03	紺色	
				45	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.2	0.04	紺色	
				46	小玉	ガラス	3.8	2.0	1.0	0.03	紺色	
J-第159号墳	石室上面	50	41	141	丸玉	石製	10.0	9.0	2.5	1.07	黒褐色	片面穿孔か
				142	丸玉	石製	9.0	9.0	4.0	0.77	黒褐色	片面穿孔か
				143	丸玉	石製	9.5	9.0	3.2	1.00	黒褐色	片面穿孔か
				144	丸玉	石製	9.2	8.0	2.8	0.74	黒褐色	片面穿孔か
				145	丸玉	石製	9.0	9.0	3.0	0.60	黒褐色	片面穿孔か
				146	丸玉	石製	8.0	8.0	3.0	0.77	黒褐色	片面穿孔か
				147	丸玉	石製	9.0	7.5	3.2	0.60	黒褐色	片面穿孔か
				148	丸玉	石製	9.5	8.5	3.5	0.72	黒褐色	片面穿孔か
				149	丸玉	石製	9.5	9.5	3.0	0.85	黒褐色	片面穿孔か
				150	丸玉	石製	8.8	9.5	3.0	0.78	黒褐色	片面穿孔か
				151	丸玉	石製	9.0	7.5	3.0	0.77	黒褐色	片面穿孔か
				152	丸玉	石製	9.0	9.0	3.0	0.74	黒褐色	片面穿孔か
				153	丸玉	石製	9.0	8.0	3.0	0.74	黒褐色	片面穿孔か
				154	丸玉	石製	9.0	7.8	3.2	0.59	黒褐色	片面穿孔か
				155	丸玉	石製	9.0	8.0	3.0	0.65	黒褐色	片面穿孔か
				156	丸玉	石製	9.5	8.5	3.5	1.13	黒褐色	片面穿孔か
				157	丸玉	石製	8.0	8.0	2.7	0.72	黒褐色	片面穿孔か
				158	丸玉	石製	9.0	8.5	3.0	0.65	黒褐色	片面穿孔か
				159	丸玉	石製	9.0	7.0	2.5	0.38	黒褐色	片面穿孔か
				160	丸玉	石製	8.0	7.0	3.0	0.44	黒褐色	片面穿孔か
				161	丸玉	石製	9.1	7.2	2.5	0.46	黒褐色	片面穿孔か
				162	丸玉	石製	9.0	8.0	3.0	0.46	黒褐色	片面穿孔か
				163	丸玉	石製	9.3	9.0	3.5	0.71	黒褐色	片面穿孔か
	石室覆土			164	丸玉	石製	9.5	7.5	2.5	0.61	黒褐色	片面穿孔か
				165	丸玉	石製	8.7	7.2	2.5	0.69	黒褐色	片面穿孔か
				166	丸玉	石製	8.0	7.0	3.0	0.43	黒褐色	片面穿孔か
				167	丸玉	石製	10.0	9.0	2.5	0.73	黒褐色	片面穿孔か
	石室上面			168	丸玉	石製	9.5	8.5	3.0	0.50	黒褐色	片面穿孔か
				169	丸玉	石製	8.5	7.0	3.5	0.36	黒褐色	片面穿孔か

※１　ここで「碧玉」としたものは、自然科学分析を行っていないため種別を特定できないもので、碧玉、緑色凝灰岩、蛇紋岩等の可能性があるものである。
※２　ここで石製としたものは、自然科学分析を行っていないため種別を特定できないものである。

（３）須津古墳群出土金属製品

第21表　須津古墳群　出土金属製品観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	幅(cm)	鏃身長 刀身長(cm)	鏃身幅 刀身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	備考
J-第６号墳	石室上面	30	17	47	耳環		3.79	1.55	1.65	－	－	－	－	－	－	金環
			17・20	48	馬具	轡	172.96	－	－	－	－	－	－	－	－	(文章中)
				49	馬具	鉸具	27.58	5.8	4.5	－	－	－	－	－	－	
				50	馬具	鉸具	37.47	5.7	5.4	－	－	－	－	－	－	
	石室覆土・攪乱土		18・20	51	馬具	帯金具	8.11	3.2	2.3	－	－	－	－	－	－	
				52	馬具	帯金具	8.53	3.2	2.3	－	－	－	－	－	－	
				53	馬具	帯金具	36.5	1.5	2.3	－	－	－	－	－	－	
				54	不明	鋲	0.24	(1.5)	0.4	－	－	－	－	－	－	
				55	不明	帯金具か	12.60	(2.8)	1.95	－	－	－	－	－	－	
	石室上面	31		56	小刀	刀身～茎	140	(34.2)	2.2	26.8	2.2	－	－	(7.4)	2.0	鑢・無窓鐔(59)を伴う。
				57	大刀	刀身～茎	560	77.4	3.0	62.8	3.0	－	－	14.6	2.8	鑢を伴う。切羽(61)をともなう可能性が高い。
				58	刀装具	柄頭か鞘尻金具	18.41	3.7	2.5	－	－	－	－	－	－	
				59	刀装具	鐔	25.73	4.4	3.7	－	－	－	－	－	－	無窓鐔、刀(56)に伴う。
				60	刀装具か	鐔か	8.43	(3.3)	(4.6)	－	－	－	－	－	－	
				61	刀装具	切羽	19.96	5.2	4.2	－	－	－	－	－	－	
	石室覆土		18	62	刀装具	鑢	0.67	(1.2)	1.9	－	－	－	－	－	－	
	石室上面		18・20	63	刀子	刀身～茎	17.27	(13.3)	1.3	9.0	1.3	－	－	(4.3)	1.0	柄縁金具(鑢)を伴う。
				64	刀子	関～茎	3.61	(3.7)	1.2	(1.2)	1.2	－	－	(2.5)	1.0	
				65	刀子	刀身～茎	7.13	(12.6)	1.0	(8.1)	1.0	－	－	4.5	0.7	
	石室下面		19・21	66	鉄鏃	鏃身～茎	9.40	(13.4)	0.8	0.6	0.8	12.6	0.5	(0.8)	0.4	尖根鏃箭式
				67	鉄鏃	鏃身～茎	7.65	(13.9)	0.8	(0.5)	0.8	13.1	0.6	(0.3)	0.4	尖根鏃箭式
				68	鉄鏃	鏃身～頸部	9.23	(12.3)	0.7	0.4	0.7	(11.9)	0.4	－	－	尖根鏃箭式
				69	鉄鏃	鏃身～頸部	7.36	(12.0)	0.8	0.7	0.8	(11.3)	0.5	－	－	尖根鏃箭式
	石室上面			70	鉄鏃	鏃身～頸部	20.4	(2.9)	0.8	0.6	0.8	(2.3)	0.5	－	－	尖根鏃箭式
	石室下面			71	鉄鏃	鏃身～茎	12.38	(16.0)	0.6	2.9	0.6	9.5	0.5	(3.6)	0.3	尖根片刃箭式
				72	鉄鏃	鏃身～茎	9.40	(15.0)	0.6	3.7	0.6	9.0	0.5	(2.3)	0.4	尖根片刃箭式
				73	鉄鏃	鏃身～頸部	7.01	(8.9)	0.6	(2.9)	0.6	(6.0)	0.4	－	－	尖根片刃箭式
				74	鉄鏃	鏃身～頸部	5.78	(9.5)	0.6	3.7	0.6	(5.8)	0.4	－	－	尖根片刃箭式
				75	鉄鏃	鏃身～頸部	4.27	(6.1)	0.6	3.6	0.6	(2.5)	0.4	－	－	尖根片刃箭式
				76	鉄鏃	鏃身～頸部	2.99	(5.5)	0.6	3.3	0.6	(2.2)	0.4	－	－	尖根片刃箭式
				77	鉄鏃	鏃身	1.06	(2.6)	0.6	(2.6)	0.6	－	－	－	－	尖根片刃箭式
				78	鉄鏃	鏃身	0.67	(1.6)	0.7	(1.6)	0.7	－	－	－	－	尖根片刃箭式
				79	鉄鏃	頸部	4.27	(11.8)	0.7	－	－	(11.8)	0.7	－	－	
				80	鉄鏃	頸部～茎	6.88	(13.2)	0.5	－	－	(7.6)	0.5	5.1	0.4	
				81	鉄鏃	頸部～茎	9.53	(10.9)	0.5	－	－	(7.2)	0.5	(3.7)	0.4	
				82	鉄鏃	頸部～茎	6.33	(7.8)	0.4	－	－	(7.2)	0.4	(0.6)	0.4	
				83	鉄鏃	頸部～茎	12.92	(17.3)	0.5	－	－	(12.2)	0.5	5.1	0.4	
				84	鉄鏃	頸部～茎	9.08	(10.1)	0.5	－	－	(9.0)	0.5	(1.1)	0.4	
				85	鉄鏃	頸部～茎	7.27	(11.1)	0.4	－	－	(1.6)	0.4	9.5	0.5	
	石室覆土			86	鉄鏃	頸部	4.08	(5.3)	0.5	－	－	(5.3)	0.5	－	－	
				87	鉄鏃	頸部	3.54	(4.6)	0.5	－	－	(4.6)	0.5	－	－	
	石室下面			88	鉄鏃	頸部	3.88	(4.9)	0.5	－	－	(4.9)	0.5	－	－	
				89	鉄鏃	頸部	0.45	(1.3)	0.5	－	－	(1.3)	0.5	－	－	
	石室上面			90	鉄鏃	茎	3.49	(4.1)	0.4	－	－	－	－	(4.1)	0.4	
	石室下面			91	鉄鏃	茎	0.87	(1.4)	0.5	－	－	－	－	(1.4)	0.5	
				92	鉄鏃	茎	0.54	(1.5)	0.4	－	－	－	－	(1.5)	0.4	
	石室覆土			93	鉄鏃	茎	0.16	(1.5)	0.2	－	－	－	－	(1.5)	0.2	
	石室下面			94	鉄鏃	茎	3.69	(3.3)	0.4	－	－	－	－	(3.3)	0.4	
	石室覆土			95	鉄鏃	茎	3.93	(3.4)	0.4	－	－	－	－	(3.4)	0.4	
	石室下面			96	鉄鏃	茎	3.75	(3.8)	0.3	－	－	－	－	(3.8)	0.3	
				97	鉄鏃	茎	0.70	(3.5)	0.3	－	－	－	－	(3.5)	0.3	
	石室覆土			98	針	針孔～針身	0.10	(1.6)	0.1	－	－	－	－	－	－	
	石室上面		17・20	99	針	針孔～針身	0.16	(2.4)	0.1	－	－	－	－	－	－	
				100	針	針孔～針身	0.35	2.9	0.1	－	－	－	－	－	－	4本錆着。
						針孔～針身		2.9	0.1	－	－	－	－	－	－	
						針先		(1.3)	0.05	－	－	－	－	－	－	
						針先		(1.2)	0.05	－	－	－	－	－	－	
J-第118号墳	石室	39	25	107	刀子	刀身～茎	9.02	(10.6)	1.4	(4.0)	1.4	－	－	6.6	1.1	
J-第159号墳	石室上面	50	41	170	耳環		6.15	1.7	1.9	－	－	－	－	－	－	金環
				171	耳環		4.97	1.7	1.9	－	－	－	－	－	－	金環
			41・44	172	馬具	轡(環状鏡板)	9.74	(4.8)	(5.2)	－	－	－	－	－	－	同一個体の可能性が高い。(文章中)
				173	馬具	轡(環状鏡板)	9.67	(7.0)	(4.1)	－	－	－	－	－	－	
				174	馬具	轡(引手)	23.48	(8.5)	2.8	－	－	－	－	－	－	
			42・43・44	175	大刀	刀身～茎	600.00	(71.4)	3.1	(61.2)	3.1	－	－	(10.2)	2.0	鑢(176)・鐔(186)を伴う。鉄製目釘残存。
				176	刀装具	鑢		7.4	6.0	－	－	－	－	－	－	175に伴う。
			41	177	大刀	刀身	9.97	(5.8)	2.2	(5.8)	2.2	－	－	－	－	
				178	大刀	刀身	18.31	(6.9)	(2.1)	(6.9)	(2.1)	－	－	－	－	
	石室上面覆土			179	大刀	刀身	5.51	(4.2)	(2.2)	(4.2)	(2.2)	－	－	－	－	
	石室上面			180	大刀	茎	2.03	(2.4)	(1.4)	－	－	－	－	(2.4)	(1.4)	
				181	大刀	茎	1.48	(2.2)	1.4	－	－	－	－	(2.2)	1.4	

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	幅(cm)	鏃身長 刀身長(cm)	鏃身幅 刀身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	備考
J-第159号墳	石室覆土・攪乱	50	41	182	鉄刀か	茎？	6.12	(5.8)	1.0	－	－	－	－	－	－	
	石室上面		42・44	183	刀装具	鵐目金具	1.60	0.8	1.3	－	－	－	－	－	－	同一の鉄刀に伴う可能性が高い。
				184	刀装具	鵐目金具	0.95	0.8	1.3	－	－	－	－	－	－	
			42	185	刀装具	鍔	5.45	(3.5)	(3.0)	－	－	－	－	－	－	
			42・44	186	刀装具	鍔	34.10	7.4	6.0	－	－	－	－	－	－	刀(175)に伴う。
				187	刀装具	鞘口金具	14.53	4.8	(4.2)	－	－	－	－	－	－	
	石室覆土・攪乱			188	刀装具	鞘金具	1.40	(2.4)	(1.4)	－	－	－	－	－	－	
			42	189	刀装具？	縄？	0.65	(1.9)	(1.3)	－	－	－	－	－	－	
	石室上面		42・44	190	刀装具	吊手孔付足金物	6.19	(2.4)	(3.0)	－	－	－	－	－	－	
				191	刀装具	吊手孔付足金物	4.90	(4.3)	(2.0)	－	－	－	－	－	－	
			42	192	刀装具	責金具	1.42	3.6	(2.2)	－	－	－	－	－	－	
				193	刀装具	責金具	3.03	3.2	1.8	－	－	－	－	－	－	
				194	刀装具	責金具	1.28	3.5	(1.7)	－	－	－	－	－	－	
				195	刀装具	責金具	1.12	4.3	(1.8)	－	－	－	－	－	－	
				196	刀装具	責金具	0.84	(3.1)	(1.6)	－	－	－	－	－	－	
		51	41・44	197	刀子	刀身～茎	15.91	(15.0)	1.4	(9.4)	1.4	－	－	5.6	0.9	木柄刀子
				198	刀子	刀身～茎	19.46	(13.6)	1.5	(5.7)	1.5	－	－	7.8	1.2	木柄刀子
				199	刀子	柄縁装具	3.71	0.9	2.0	－	－	－	－	－	－	198に伴う。
				200	刀子	刀身～茎	13.23	14.1	1.1	6.8	1.1	－	－	7.3	0.9	木柄刀子。柄縁装具を伴う。
				201	刀子	柄縁装具	1.80	1.1	1.9	－	－	－	－	－	－	
				202	刀子	刀身～茎	6.92	(7.7)	1.1	(4.1)	1.1	－	－	3.6	0.9	
				203	刀子	刀身～茎	5.63	(5.7)	1.1	2.9	1.1	－	－	2.8	0.9	
				204	刀子	柄縁装具	0.41	0.5	(1.3)	－	－	－	－	－	－	203に伴う。
				205	刀子	刀身～茎	7.52	(8.0)	1.1	(4.2)	1.1	－	－	3.8	0.8	木柄刀子
				206	刀子	切先	1.75	(3.3)	0.9	(3.3)	0.9	－	－	－	－	
				207	刀子	茎	2.81	(5.3)	0.7			－	－	(5.3)	0.7	木柄刀子
				208	刀子	切先	1.91	(3.3)	0.9	(3.3)	(0.9)	－	－	－	－	
				209	刀子	茎	2.04	(3.2)	0.6	－	－	－	－	(3.2)	0.6	木柄刀子
				210	刀子	切先	1.35	(2.9)	0.7	(2.9)	(0.7)	－	－	－	－	
				211	刀子	切先	0.52	(1.5)	(0.8)	(1.5)	(0.8)	－	－	－	－	
				212	刀子	切先	0.50	(1.7)	0.7	(1.7)	(0.7)	－	－	－	－	
				213	刀子	切先	0.64	(2.1)	(0.8)	(2.1)	(0.8)	－	－			
				214	刀子	刀身～茎	4.00	(7.0)	0.9	(4.2)	0.9	－	－	2.8	0.8	木柄刀子
	石室覆土			216	刀子	刀身～関	2.30	(2.9)	1.0	(2.3)	1.0	－	－	0.6	(0.6)	
				217	刀子	茎	1.37	(1.9)	0.9	－	－	－	－	(1.9)	0.9	
	石室上面	52	43・45	218	鉄鏃	鏃身～頸部	10.55	(6.2)	(4.8)	(3.7)	(4.8)	(2.5)	0.6	－	－	平根三角形式
				219	鉄鏃	鏃身～茎	14.43	(11.5)	(2.4)	(3.4)	(2.4)	(2.7)	0.6	5.4	0.4	平根五角形式
				220	鉄鏃	鏃身～頸部	6.74	(4.6)	(2.7)	3.7	(2.7)	(0.9)	0.6	－	－	平根五角形式
				221	鉄鏃	鏃身～茎	12.77	(8.0)	(2.4)	(4.4)	(2.4)	3.4	0.6	(0.6)	0.4	平根腸抉長三角形式
				222	鉄鏃	鏃身～頸部	6.63	(4.0)	(2.6)	(3.8)	(2.6)	0.3	(0.6)	－	－	平根腸抉三角形式
				223	鉄鏃	鏃身～頸部	2.24	(2.0)	(1.5)	(2.0)	(1.6)	0.1	0.6	－	－	平根腸抉三角形式
				224	鉄鏃	鏃身	3.37	(3.6)	0.6	(1.6)	3.1	(2.0)	0.6	－	－	平根三角形式
				225	鉄鏃	鏃身～頸部	6.05	(3.6)	(3.7)	(3.2)	(3.7)	(1.1)	0.5	－	－	平根腸抉三角形式
				226	鉄鏃	鏃身	1.18	(1.9)	(1.8)	(1.9)	(1.8)	－	－	－	－	平根三角形式 別の金具の可能性もある。
	石室覆土			227	鉄鏃	鏃身	1.10	(1.7)	(1.4)	(1.7)	(1.1)	－	－	－	－	平根三角形式
	石室上面			228	鉄鏃	鏃身～茎	7.04	(7.8)	(2.0)	(2.7)	(2.0)	3.2	0.5	(1.9)	0.4	平根三角形式
				229	鉄鏃	鏃身～茎	9.73	(9.7)	(1.1)	(0.5)	(1.1)	4.3	0.6	(5.0)	0.5	平根式
				230	鉄鏃	鏃身～頸部	1.51	(3.5)	(0.9)	(0.6)	(0.9)	(2.9)	0.6	－	－	
				231	鉄鏃	鏃身～茎	6.33	(13.0)	0.7	0.5	0.7	10.6	0.6	(1.9)	0.3	尖根鏃箭式
				232	鉄鏃	鏃身～頸部	3.56	(6.3)	0.7	0.6	0.7	(5.7)	0.6	－	－	尖根鏃箭式
				233	鉄鏃	鏃身～頸部	3.99	(8.3)	(0.7)	(0.2)	(0.7)	(8.1)	0.6	－	－	尖根鏃箭式
				234	鉄鏃	鏃身～頸部	1.68	(5.1)	0.8	0.5	0.8	(4.6)	0.6	－	－	尖根鏃箭式
				235	鉄鏃	鏃身～頸部	6.37	14.0	0.7	0.4	0.7	10.5	0.5	3.1	0.3	尖根鏃箭式
	石室覆土			236	鉄鏃	頸部～茎	9.24	(11.1)	0.6	－	－	(1.4)	0.6	(1.5)	0.4	尖根鏃箭式？
	石室上面			237	鉄鏃	鏃身～頸部	4.46	(7.5)	0.6	(0.2)	(0.7)	(7.3)	0.6	－	－	尖根鏃箭式？
				238	鉄鏃	頸部	3.50	(6.3)	0.5	－	－	(6.3)	0.5	－	－	尖根鏃箭式？
				239	鉄鏃	頸部～茎	7.37	(10.8)	0.3	－	－	(5.9)	0.3	4.9	0.3	尖根式
				240	鉄鏃	頸部～茎	3.92	(9.1)	0.3	－	－	(5.4)	0.3	3.6	0.3	尖根式
				241	鉄鏃	頸部～茎	2.66	(2.4)	0.5	－	－	(1.4)	0.5	(1.0)	0.4	
				242	鉄鏃	頸部	0.37	(1.7)	0.4	－	－	(1.8)	0.4	－	－	
				243	鉄鏃	頸部～茎	3.12	(4.7)	0.5	－	－	(2.9)	0.5	(1.8)	0.4	
				244	鉄鏃	頸部(か茎)	1.78	(4.9)	0.4	－	－	(4.9)	0.4	－	－	
				245	鉄鏃	頸部～茎	1.55	(5.5)	0.4	－	－	(1.7)	0.4	3.8	0.3	
				246	鉄鏃	頸部～茎	2.27	(3.9)	0.4	－	－	(1.9)	0.4	(2.0)	0.3	
	石室覆土			247	鉄鏃	頸部～茎	4.52	(4.4)	0.5	－	－	(2.6)	0.5	(1.8)	0.4	
	石室上面			248	鉄鏃	頸部～茎	3.40	(3.8)	0.6	－	－	(3.3)	0.6	(0.5)	0.4	
				249	鉄鏃	頸部～茎	1.61	(3.2)	0.5	－	－	(1.1)	0.5	(2.1)	0.3	
				250	鉄鏃	頸部～茎	1.95	(3.5)	0.5	－	－	(0.5)	0.5	3.4	0.4	
				251	鉄鏃	茎	2.49	(6.1)	0.4	－	－	－	－	(6.1)	0.4	
	石室覆土			252	鉄鏃	茎	1.57	(2.8)	0.4	－	－	－	－	(2.8)	0.4	
	石室上面			253	鉄鏃	茎	0.91	(2.3)	0.3	－	－	－	－	(2.3)	0.3	
	石室覆土			254	鉄鏃	茎	1.39	(2.7)	0.3	－	－	－	－	(2.7)	0.3	
	石室上面			255	鉄鏃	茎	0.71	(2.7)	0.4	－	－	－	－	(2.7)	0.4	
				256	鉄鏃	茎	0.55	(1.9)	0.3	－	－	－	－	(1.9)	0.3	
				257	鉄鏃	茎	0.74	(2.3)	0.4	－	－	－	－	(2.3)	0.4	
	石室覆土			258	鉄鏃	茎	0.66	(2.2)	0.4	－	－	－	－	(2.2)	0.4	
	石室上面			259	鉄鏃	茎	0.26	(3.3)	0.3	－	－	－	－	(3.3)	0.3	
				260	鉄鏃	茎	2.33	(4.0)	0.4	－	－	－	－	(4.0)	0.4	

※218・223・226・227は鉄鏃ではないものを鉄鏃として報告している可能性もある。

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	幅(cm)	鏃身長 刀身長(cm)	鏃身幅 刀身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	備考
J-第159号墳	石室上面	52	43・44	261	弓金具	弓両頭金具	2.23	2.7	(1.0)	−	−	−	−	−	−	
				262	弓金具	弓両頭金具	2.49	3.1	(1.0)	−	−	−	−	−	−	
				263	弓金具	弓両頭金具	2.31	3.0	(0.9)	−	−	−	−	−	−	
				264	弓金具	弓両頭金具	2.56	3.1	(0.8)	−	−	−	−	−	−	
				265	弓金具	弓両頭金具	2.53	3.1	(0.7)	−	−	−	−	−	−	
				266	弓金具	弓両頭金具	2.57	3.3	(0.6)	−	−	−	−	−	−	
古墳外	表土	54	45	271	包丁	刃〜茎	43.81	(13.9)	(3.6)	(9.4)	(3.6)	−	−	(4.5)	1.2	
				272	煙管	吸口	6.36	7.6	1.1	−	−	−	−	−	−	銅製か真鍮製

※特に記載がないものは、鉄製である。　　( )は残存値

（4）須津古墳群出土石器

第22表　須津古墳群　出土石器観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
須津J-159号墳 確認トレンチ③表土	54	45	270	打製石斧	頁岩	6.55	5.35	1.85	(73.98)	あり	

( )は残存値

６．人骨鑑定について

片山　一道・大谷　宏治

（１）須津古墳群出土人骨鑑定について

人骨鑑定は発掘調査後、12年を隔てた平成22年５月に実施した。人骨鑑定は京都大学名誉教授　片山一道が行い、その鑑定に基づき報告書作成の担当者である大谷が執筆し、片山が文章の追加・校正を行った。

平成10・11年度発掘調査段階で人骨の残存状況は良好ではなく、当初から腐食が非常に進行していたこと、さらにそれから12年後の鑑定のため、一部鑑定不能となったものもある。

以下に、鑑定結果を報告する。

（２）須津J-第６号墳

須津J-第６号墳の横穴式石室の覆土・攪乱土から人の歯が６点以上出土した。

鑑定　１点（N-1）は、上顎右小臼歯の歯冠であり、第１小臼歯か第２小臼歯かは特定できない。咬耗は軽度である。１点（N-2）は、上顎右第２大臼歯の歯冠であり、カラベリー結節が認められる。咬耗は軽度である。１点（N-3）は、上顎右第１大臼歯の歯冠であり、咬耗は軽度であるが、N-1・２と比較するとやや強い。ただし、N-1・２と別人物の歯というわけではなく、同一人物である可能性が高い。１点（N-4）は下顎右大臼歯の歯冠であり、第１大臼歯か第２大臼歯かは特定できない。咬耗は軽度である。１点（N-6）は上顎左第２か第３大臼歯の歯冠であり、咬耗はほとんど認められない。

このほか、小臼歯を含む砕片（N-5）が確認できる。

評価　N-1～４の咬耗度などの特徴は同質性が高い。一方、N-6は第２大臼歯であるか、第３大臼歯であるかによって、推定死亡年齢は異なる。もし第３大臼歯なら壮年（20～40歳）と推定できるが、しかし第２大臼歯ならば、若年（10～20歳くらい）で死亡した可能性も捨てきれない。

したがって、歯の特徴からは残存する人骨（歯）は一人分か二人分の可能性があるが、N-1～N-6に重複する歯は見当たらず、歯の同質性が高いことから一人分である可能性が高い。

なお、性別は不明である。また、すべての歯は被熱していない。

（３）須津J-第159号墳

須津J-第159号墳の横穴式石室内で、石室北半（屍床仕切石～奥壁）、石室南半（屍床仕切石～入口部）の上面で人骨が出土した。

鑑定　石室奥側中央の上面では、長骨（大腿骨など）が10片程度、頭蓋骨が５片程度（N-1・２）出土した。石室内からの出土である点を重視すれば、人骨である可能性が高いが、確かに人骨であるとは断定できない。石室奥側の屍床仕切石近辺（N-31）で、頭蓋骨・四肢骨片の砕片が出土したが、こちらも砕片のために、確かに人骨であるとは断定できない。

奥側からは、歯が30本分以上出土した。N-10は上顎右第１大臼歯であり、咬耗は軽度である。死亡年齢は壮年と想定できる。N-31では頭蓋骨片などとともに上顎左中切歯、上顎左側切歯が出土している。両者ともシャベル状切歯である。前者の咬耗は軽度～中度、後者の咬耗は軽度であるが、同一個体の歯である可能性が高い。死亡年齢は壮年と想定できる。また、N-54は上顎左第１大臼歯で、咬耗は強度である。個体差があるため判断は難しいが、死亡年齢は壮年～熟年と想定できる。これ以外の歯は砕片であるが、大臼歯が多い印象を受ける。奥側から出土した歯は基本的に咬耗が軽度であり、死亡年齢は壮

第23表　須津古墳群　人骨鑑定結果

古墳名	番号	出土位置		部位	特徴	死亡年齢	備考
J-第６号墳	N-1	横穴式石室	覆土・撹乱土	上顎右小臼歯（第１か第２）	咬耗軽度。	壮年	同質性が高い。
	N-2			上顎右第２大臼歯	カラベリー結節ある。咬耗軽度。		
	N-3			上顎右第１大臼歯	咬耗軽度。		
	N-4			下顎右大臼歯（第１か第２）	咬耗軽度。		
	N-5			小臼歯を含む砕片	小片のため鑑定不能。	成人	
	N-6			上顎左大臼歯（第２か第３）	咬耗は非常に軽度。	若年～壮年	
	N-7		石棺内	人骨			
J-第159号墳	N-1・2	横穴式石室	上面（北半）	長骨片（大腿骨か）10片程度	人骨の可能性が高い。	成人	
				頭蓋骨５片ほど			
	N-3			歯冠片	※２		
	N-4			歯冠片	※２		
	N-5			歯冠片	※２		
	N-6			歯冠片	※２		
	N-7			下顎の小臼歯？	※２	成人	
	N-8			歯冠片	※２		
	N-9			歯冠片	※２		
	N-10			上顎右第１大臼歯	咬耗軽度。	壮年	
	N-11			歯冠片	※２		
	N-12			歯冠片	※２		
	N-13			歯冠片	※２		
	N-14			歯冠片	※２		
	N-15			歯冠片	※２		
	N-16			歯冠片	※２		
	N-17			歯冠片	※２		
	N-18			歯冠片	※２		
	N-19			歯冠片	※２		
	N-20			歯冠片	※２		
	N-21			歯冠片	※２		
	N-22			歯冠片	※２		
	N-23			歯冠片	※２		
	N-24			歯冠片	※２		
	N-25			歯冠片	※２		
	N-26			歯冠片	※２		
	N-27			歯冠片	※２		
	N-28			歯冠片	※２		
	N-29			大臼歯片？	※２	成人	
	N-30			歯冠片	※２		
	N-31			頭蓋骨片、四肢骨片			
				上顎左中切歯	咬耗軽度～中度。シャベル状。	壮年	同一人物の可能性が高い。
				上顎左側切歯	咬耗軽度。シャベル状。		
	N-32		上面（南半）	歯冠片	※２		
	N-33			上顎？右第３大臼歯	※２		
	N-34			歯冠片	※２		
	N-35			下顎大臼歯（第１か第２）			齲蝕の可能性のある孔あり。
	N-36			歯冠片	※２		
	N-37			歯冠片	※２		
	N-38			上顎第３大臼歯			
	N-39			歯冠片	※２		
	N-40			歯冠片	※２		
	N-41			小臼歯			
	N-42			歯冠片	※２		
	N-43			上顎中切歯（左か）	※２		
	N-44			下顎大臼歯？	※２		
	N-45			歯冠片	※２		
	N-46			歯冠片	※２		
	N-47			歯冠片	※２		
	N-48			歯冠片	※２		
	N-49			歯冠片	※２		
	N-50			歯冠片	※２		
	N-51			歯冠片	※２		
	N-52			歯冠片	※２		
	N-53		覆土	下顎第２大臼歯	咬耗軽度。	壮年	
	N-54		上面（北半）	上顎左第１大臼歯	咬耗強度。	壮年～熟年	
	N-55			歯冠片	※２		
	N-56		覆土	歯冠片	※２		
	N-57		上面（北半）	歯冠片	※２		
	N-58		上面（南半）	歯冠片	※２		
	N-59		上面（北半）	歯冠片	※２		
	N-60			上顎左第２大臼歯	咬耗軽度。	壮年	
	N-61		上面（南半）	下顎右側（第１～３大臼歯が釘植）	咬耗軽度。		
				上顎第３大臼歯？	－	成人	
				左脛骨、仙骨の破片	－		脛骨と仙骨が付着。
				長骨（前腕骨？）などの破片	－		
				上顎右大臼歯（第１か第２）	咬耗軽度。		

※１　出土位置　石室北半＝上面の屍床仕切石～奥壁、石室南半＝上面の屍床仕切石～入口

※２　永久歯のエナメル質片が多く残っているが、いずれも砕片化しているので、大部分のものは歯種の同定ができない。

年あたりと想定でき、N54もやや咬耗は進行しているが、壮年の個体のものであろう。

石室前側上面では、右側壁側から押し潰された状態で人骨が出土した（N-61）。この中には左脛骨に仙骨が付着しているものがある。この付着状態からみると伸展葬ではなく、集骨された状態で置かれていたと推察できるが、いわゆる「かたづけ行為」が行われ集骨されたのか、「改葬」であるかの判断は困難である。

また、N-61には長骨（前腕骨か）が確認できるが、それ以上の詳細は不明である。さらに下顎の右側が残存し、第1～3大臼歯が釘植している。これらの歯の咬耗は軽度であり、死亡年齢は壮年と推定できる。石室前側上面で出土した人骨遺残は、すべて歯の歯冠部分である。

N-33は右第3大臼歯で、上顎のものである可能性が高い。N-35は下顎の大臼歯である。N-38は上顎第3大臼歯である。N-29・38・41・43・44はいずれも歯のサイズが小さい印象を受ける。この歯の個体は小柄であった可能性がある。

評価　石室北半と石室南半で出土した歯は、同質性が弱い印象を受けるため、別個体の歯である可能性が高い。石室内から出土した歯は大臼歯が多く、少なくとも3～4個体分の歯が混在する可能性がある。

なお、それぞれの人骨の性別は不明である。死亡年齢は壮年～熟年と推測でき、未熟者や老年者の骨や歯はない。また、すべての骨や歯は被熱していない。

参考文献

参考文献は第9章末（153・154頁）に記載した。そちらを参照願いたい。

第６章　間門松沢第１号墳

第１節　間門松沢第１号墳の概要

１．間門松沢第１号墳について

間門松沢第１号墳は、鵜無ヶ淵・間門古墳群の包蔵地範囲に近接しており、広義には鵜無ヶ淵・間門古墳群に位置づけられるが、後述するように周知の鵜無ヶ淵・間門古墳群は、古墳時代後期～終末期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳の集合体として考えられている。したがって、静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議により、周知の鵜無ヶ淵・間門古墳群の範囲から外れること、古墳時代前～中期の古墳であることから、鵜無ヶ淵・間門古墳群とは独立して間門松沢第１号墳と命名された。

２．間門松沢第１号墳の位置（第55・56図）

立地　間門松沢第１号墳は、富士山麓の東端、赤淵川西岸の河岸段丘上に位置しており、周囲はやや広い平坦面となっている。この古墳が築造された場所は赤淵川に向かってやや張り出した地点に位置するが、その平坦地の縁辺部に築造されたわけではなく、丘陵縁辺部から30mほど丘陵側の平坦地に位置している。丘陵の縁辺部の標高は間門松沢第１号墳が築造された場所よりもやや高い。また、赤淵川へは急峻な崖となっており、赤淵川から直接的に古墳は視認できない可能性が高い。

歴史的環境　富士山・愛鷹山麓では、古墳時代前期から中期に位置づけられる古墳は少なく、富士市では東坂古墳、浅間古墳、天神塚古墳などが周知されているにすぎない（第７図）。さらに浅間古墳や東坂古墳は大規模、中規模の古墳であり、間門松沢第１号墳のような小規模な古墳が確認された意義は大きい。

これまで確認されている大・中規模の古墳と比較することで、間門松沢第１号墳の位置づけについて明らかにすることができるだろう。

第55図　鵜無ヶ淵・間門Ｅ古墳群、間門松沢第１号墳、不動棚遺跡の調査区の位置

第56図　間門松沢第１号墳の位置

第２節　調査の方法と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

間門松沢第１号墳の発掘調査は、確認調査として本発掘調査まで実施した。当研究所では、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝　　調査研究員　佐野暢彦（確認調査）　武田寛生（本発掘調査）

２．確認調査および本発掘調査の経過

確認調査　確認調査は、No.52地点確認調査（その１）として実施し、平成11年10月より準備を開始し、11月１日から古墳が所在する可能性が高い場所を中心に試掘坑を設定し、順次人力にて表土除去を行い、古墳の有無の確認を行った。作業が進むにつれ、周囲より小高い古墳と想定した小丘の中央部から鉄剣が出土し、古墳（間門松沢第１号墳）であることが判明した。鉄剣の周囲は墓壙が確認でき、石材を伴わないことから横穴式石室ではなく、木棺直葬の古墳であることも併せて判明した。また、周辺の精査を行うと、埋葬施設が３基並列していることも確認できた。一方、古墳の周囲には別の古墳は確認できない。したがって、本発掘調査対象地となる箇所は狭小であることが判明したことから、確認調査範囲を拡張し、本発掘調査を確認調査に継続して実施することとした。

写真19　表土除去作業

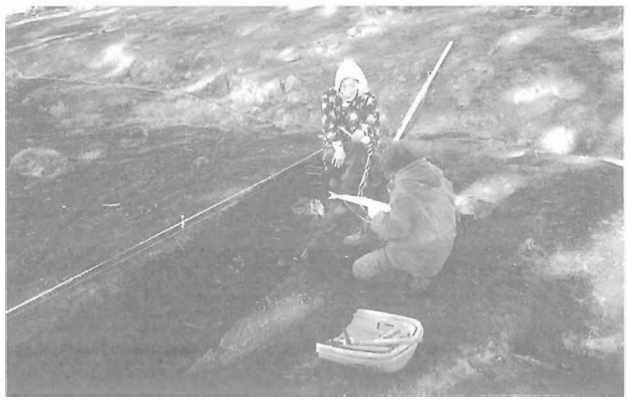


写真20　墳丘土層実測作業

本発掘調査　間門松沢第１号墳については、No.52地点確認調査（その１）を継続し、周辺の確認調査と併せて本発掘調査を実施した。本発掘調査は、平成12年１月11日より周溝確認のための試掘溝の設定を行い、人力にて表土の掘り下げを行い、古墳の形状の把握に努めた。調査が進むにつれて円墳ではなく、前方後円（方）墳の可能性も考えられたため慎重に精査を行ったが、周溝はこの段階では確認できなかった。一方、墳丘について盛土は確認できないものの、ある程度古墳の規模が判明したことから墳丘に十字の土層帯を残しながら全体の表土を掘り下げた。表土除去が終了した２月４日に埋葬施設の検出を行った。この段階で埋葬施設が３基並列していることを確認し、２月８日から埋葬施設の慎重に掘り下げて精査を行うとともに、墳丘の形状把握のため墳丘の周辺を精査し、周溝の把握に努めたが確認できなかった。２月９日に第３埋葬施設で鉄剣１点が出土した。順次必要な図面を作図し、写真撮影を行いながら埋葬施設を掘削し、２月21日に埋葬施設の調査を終了した。２月22・23日にラジコンヘリコプターで空中写真撮影・空中写真測量を行い、現地における本発掘調査を終了した。

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過は、第２章で記述しているためそちらを参照願いたい。

第３節　間門松沢第１号墳の調査成果

１．古墳の現況

間門松沢第１号墳は広義には鵜無ヶ淵・間門古墳群の範囲に位置するが、周囲に石材の露頭がなかったため、古墳とは認識されていなかった。第二東名建設事業の踏査時に平坦地に高さ２ｍほどの高まり

第57図　間門松沢第１号墳　墳丘測量図

が確認できたため、古墳の可能性を想定して確認調査を実施したところ、古墳であることが判明した。

古墳は赤淵川西岸の丘陵上の緩斜面、標高126m付近に築造されている。小丘状の高まりが確認でき、この高まりを古墳として利用している。古墳は、丘陵縁辺部から30mほど内側に立地しており、また東南方向には間門松沢第1号墳が利用する小丘と同程度の高さの小丘があり、赤淵川から古墳を臨もうとしてもほとんど見えなかったことが推測できる。このため古墳は赤淵川を意識した配置ではなく、一段下がる北西側を意識した古墳であった可能性が高い。

2．墳丘の構造（第57図，図版46・47）

墳丘は自然地形を利用したものであり、盛土は確認できない。周溝も確認できなかったことから古墳の形状および規模を確定することが困難であるが、楕円形墳、長方形墳などの可能性が想定でき、古墳の築造にあたり丘陵を最大限利用して周囲を削りだして築造したと仮定し、南東側の等高線の間隔が密になる126.4m付近を基底面とすれば、おおよそ長軸で25m程度の古墳とすることができよう。

また、墳丘北西側に等高線が方形に張り出す部分が確認でき、この地形が近年の耕作などにより改変されていないとすれば、古墳の築造に当たり削り出した可能性も想定すべきであろう。その場合は、上述したように東側あるいは東南方向からの眺望はよくないため、北西方向から古墳を望むことを意識した造りになっていた可能性が高く、方形の削り出しにより二段築成を意識していた可能性もある。その場合にはやや不整形な前方後円墳や前方後方墳に復原することも可能である。この復原案については本章第6項にて後述する。

3．埋葬施設の構造（第58・59図，第24表，図版47～50）

埋葬施設は、3基並列する木棺直葬である。中央を第1埋葬施設、西側を第2埋葬施設、東側を第3埋葬施設とする。

（1）第1埋葬施設

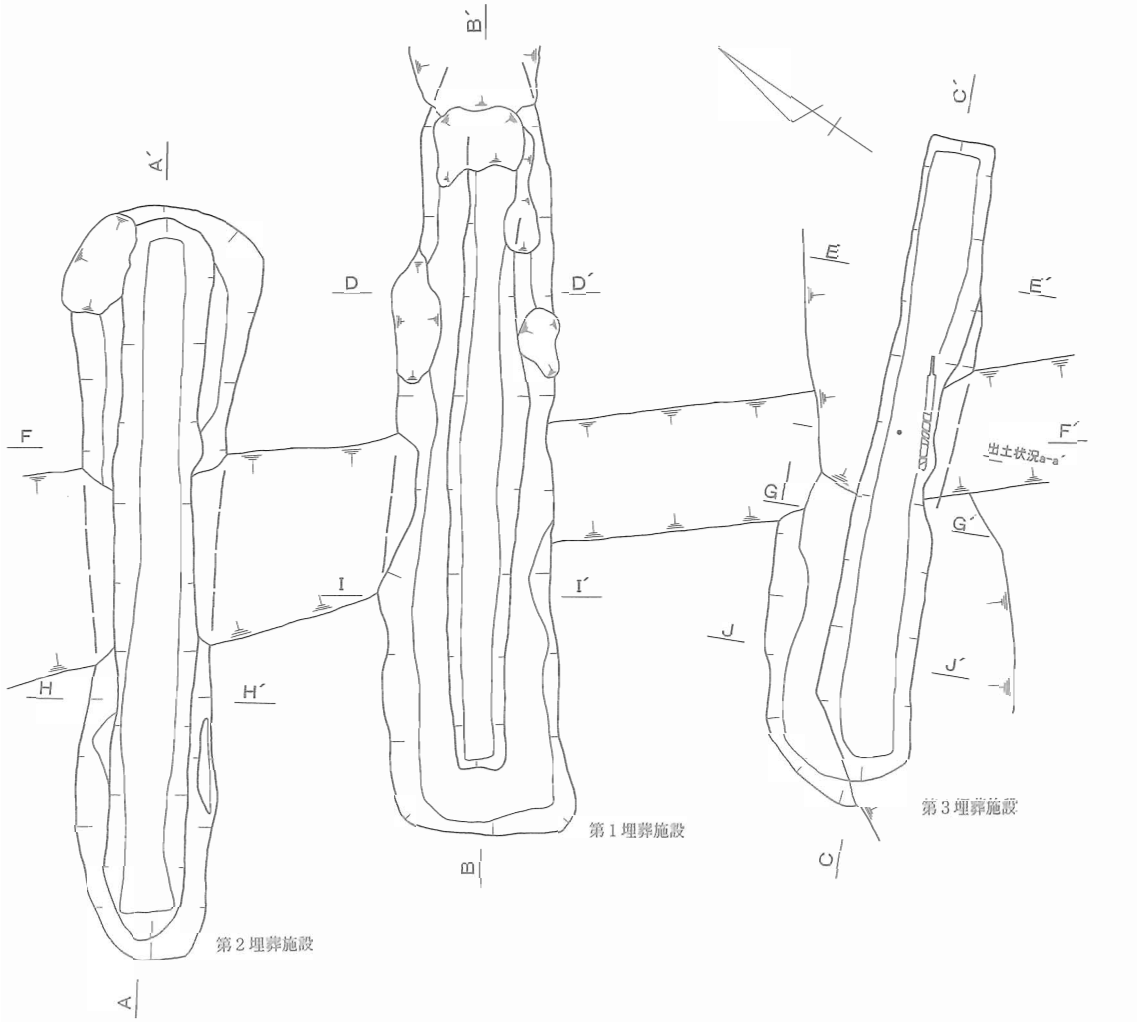
墓壙　墓壙の主軸はN-56°-Eで、隅丸長方形の二段墓壙である。まず上段を掘削した後、木棺を据えるために下段を掘削するものであり、上段と下段の間に平坦面が0.1～0.2mほど確認できる。上段は東側部分が攪乱されているため明確ではないが、おおよそ長辺（東西）4.8m前後、短辺1.15m、深さ0.25m、下段は長辺4.5m、短辺0.5m、深さ0.1mである。墓壙底面には暗黄褐色土が確認でき、木棺を安定させるために、棺底に設置した可能性が高い。

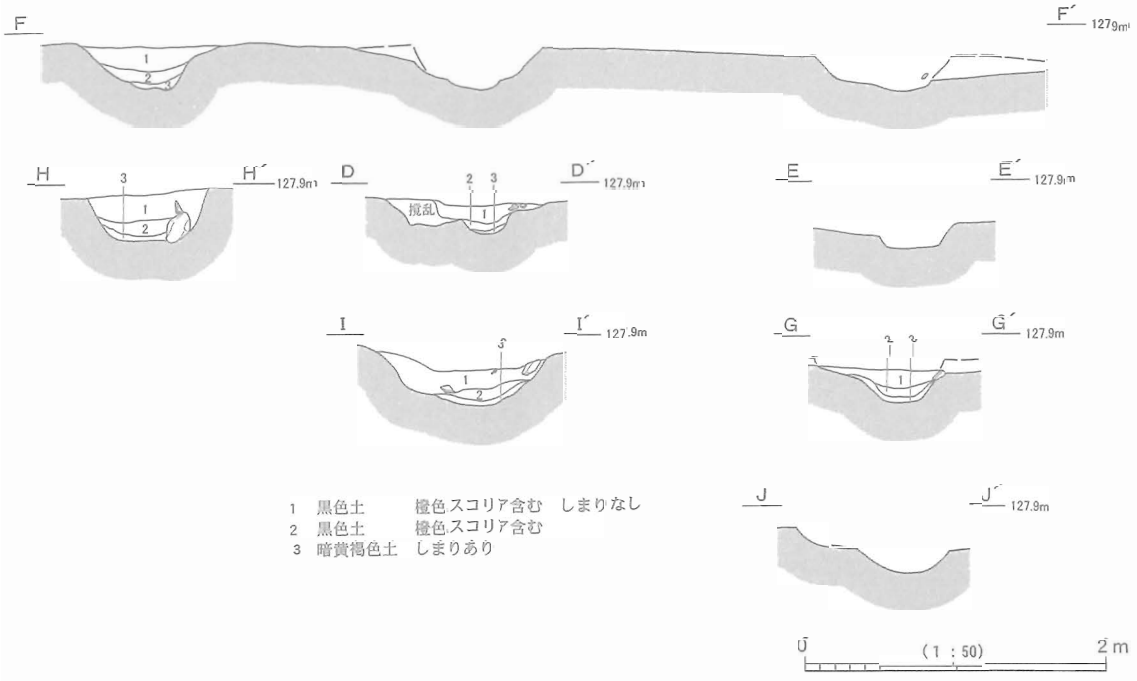
木棺　木棺はD-D′断面、I-I′断面では墓壙断面（3層）がU字形であることから、割竹形木棺であった可能性が高い。墓壙内に収まっていたとすれば、全長は4.5mより若干小さかった可能性が高い。

頭位　墓壙底面（縦断面）はほぼ水平であり、頭位は確定できないが、第3埋葬施設の鉄剣の切先が西側に向けられていることから第3埋葬施設は東頭位であると想定できることから推測すれば、第1埋葬施設も東頭位であった可能性が高い。

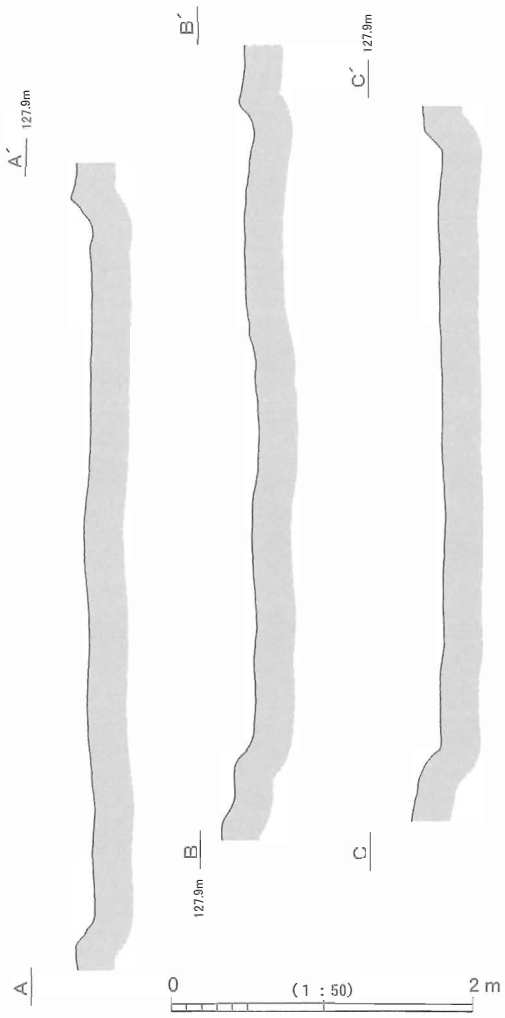
第24表　間門松沢第1号墳　埋葬施設の規模

第1埋葬施設			
主軸方位	N-56°-E		
墓壙長（上段）	4.8m前後	墓壙幅（上段）	1.15m
墓壙長（下段）	4.5m	墓壙幅（下段）	0.5m
第2埋葬施設			
主軸方位	N-58°-E		
墓壙長（上段）	4.9m	墓壙幅（上段）	1.1m
墓壙長（下段）	4.7m	墓壙幅（下段）	0.5m
第3埋葬施設			
主軸方位	N-66°-E		
墓壙長（上段）	4.5m前後	墓壙幅（上段）	1.05m以上
墓壙長（下段）	4.25m	墓壙幅（下段）	0.6m

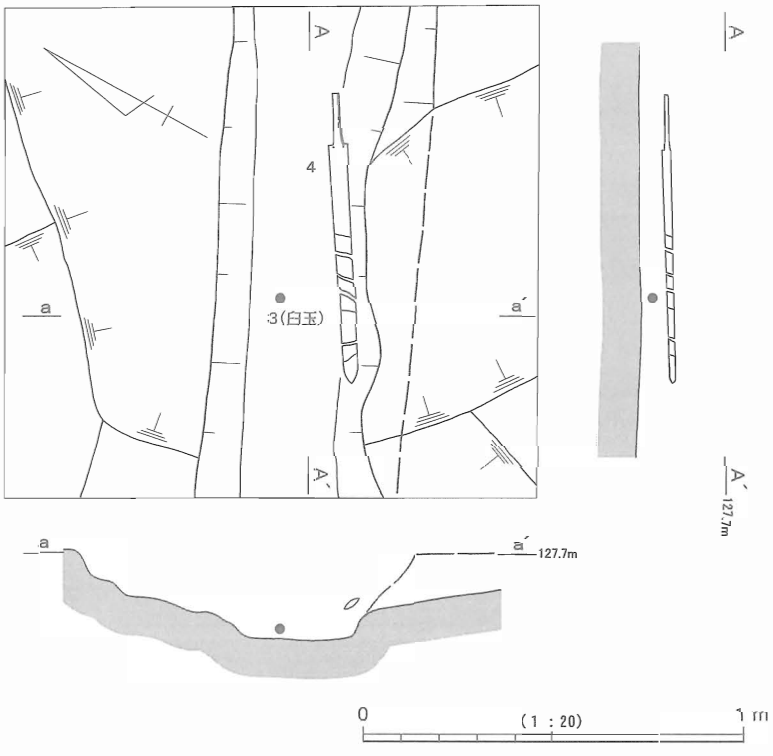




第58図　間門松沢第１号墳　埋葬施設実測図



第59図　間門松沢第1号墳　埋葬施設断面図



第60図　間門松沢第1号墳　第3埋葬施設遺物出土状況図

（2）第2埋葬施設

墓壙　墓壙の主軸はN-58°-Eで、逆長台形に近い隅丸長方形の二段墓壙である。第1埋葬施設と同様、まず上段を掘削した後、木棺を据えるために下段を掘削するものであり、上段と下段の間に平坦面が0.1～0.2mほど確認できる。上段は長辺（東西）4.9m、短辺1.1m、深さ0.25m、下段は長辺4.7m、短辺0.5m、深さ0.1mである。墓壙底面には暗黄褐色土があり、また下段（H-H´断面）では石材が据えられている。これらは木棺を安定させるために、棺底に設置した可能性が高い。

木棺　木棺はF-F´断面、H-H´断面では墓壙断面（3層）がU字形であることから、割竹形木棺であった可能性が高い。墓壙内に収まっていたとすれば、全長は最大で4.4m程度であった可能性が高い。

頭位　墓壙底面（縦断面）はほぼ水平であり、頭位は確定できないが、第1埋葬施設と同じ理由から、第2埋葬施設も東頭位であった可能性が高い。

（3）第3埋葬施設

墓壙　墓壙の主軸はN-66°-Eで、第1・2埋葬施設よりも主軸がやや南側に偏る。二段墓壙である。上部は攪乱が著しいが、残存する西側部分を参考にすると、隅丸長方形である可能性が高い。墓壙はまず上段を掘削した後、木棺を据えるために下段を掘削するものであり、上段と下段の間に平坦面が0.1～0.2mほど確認できる。上段は東側部分が攪乱されているため明確ではないが、おおよそ長辺（東西）4.5m前後、短辺1.05m以上、深さ0.25m、下段は長辺4.25m、短辺0.6m、深さ0.15mである。墓壙底面には暗黄褐色土が確認でき、木棺を安定させるために、棺底に設置した可能性が高い。

木棺　木棺は、J-J´断面とG-G´断面では墓壙断面（3層）がU字形であることから、割竹形木棺が使用された可能性が高

い。墓壙内に収まっていたとすれば、全長は4.25mより若干小さかった可能性が高い。

頭位　副葬された鉄剣の切先が西側に向けられていることから第３埋葬施設は東頭位であると想定できる。

４．遺物の出土状況（第60図，図版49・50）

第３埋葬施設のみ遺物が出土した。第３埋葬施設では、鉄剣（４）が棺中央から出土した。暗黄褐色土（図中では棺底より10cm浮いた状態で出土しているが、この10cmには棺と墓壙底の間に入れられた暗黄褐色土がある）上から出土しており、被葬者に添わせるように納められたものである。切先を南西方向に向けて置かれていた。また棺中央部棺底から臼玉１点（３）が出土した。なお、この他に臼玉２点（１・２）が埋葬施設の土砂の洗浄中に出土した。

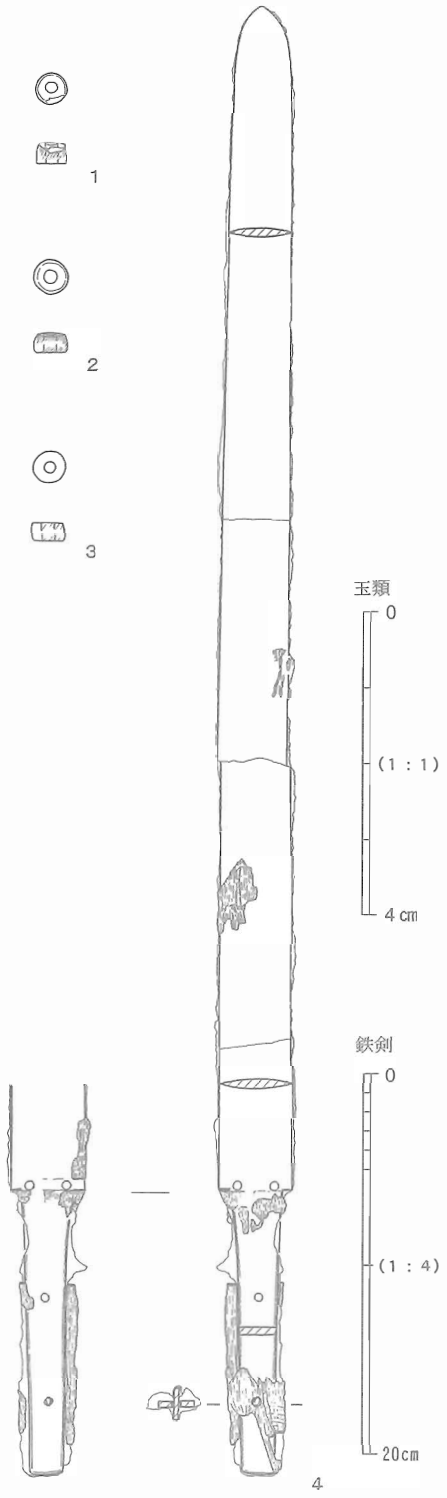
５．出土遺物（第61図，第25・26表，図版50）

第３埋葬施設から玉類、鉄剣が出土した。

玉類　臼玉３点（１～３）が出土した。３点ともに滑石製で、直径4.0～4.5㎜、全長（高さ）2.5～4.8㎜、青緑灰色である。

鉄剣　鉄剣（４）は関に双孔が穿たれたものである（刃関双孔）。剣身に鎬は確認できず、両丸造である。全長77.6cm、剣身長63.6cm、幅3.9cm、刃関双孔の直径５㎜である。剣身には木質が残存していることから木製鞘に収められた状態で副葬されたことがわかる。木質は関付近まで残存するが、刃関双孔部分には確認できないことから、この部分は鞘と柄装具との間の空白部分であった可能性がある。

関は直角均等両関で、茎は茎尻に向かいやや幅を狭めるもので、茎尻は一文字尻である。茎には目釘孔が２孔穿たれ、茎尻に近い目釘孔には、目釘が残存する。鉄製目釘のようになっているが茎の鉄成分が浸透することで無機質のようになっているだけで本来は木製であった可能性が高い。目釘は直径２㎜で、1.7cm残存していることから、少なくとも柄の厚さは1.7cm以上であったことが判明する。茎には柄が遺存している。木柄は関の部分で止っており、鞘同様刃関双孔の



第61図　間門松沢第１号墳
第３埋葬施設出土遺物実測図

第25表　間門松沢第１号墳　出土玉類観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	材質	直径(㎜)	全長(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	色調	備考
第３埋葬施設	61	50	1	臼玉	滑石	4.0	2.5	1.5	0.06	青緑灰	片面穿孔
			2	臼玉	滑石	4.5	4.8	1.8	0.08	青緑灰	片面穿孔
			3	臼玉	滑石	4.5	2.5	2.0	0.08	青緑灰	片面穿孔

第26表　間門松沢第１号墳　出土鉄剣観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	剣身長(cm)	剣身幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	備考
第３埋葬施設	61	50	4	鉄剣	完全	412.0	77.6	63.6	3.9	14.0	2.8	刃関双孔(直径５㎜)

部分までは及んでいない。木柄は、関に近い目釘孔付近で茎の両側に端面が確認できる。また、この木質はやや茎尻に近い部分では、別の木質が上に乗るような状況を示している。この解釈をすると、一木造りの柄に鉄剣の茎を差し込むために、柄の茎尻側、関側から穿孔を行うとともに、それだけでは柄の中央部分に穿孔することが困難であることから、両側面からも抉り、茎を差し込んだ後側面の孔は別の木材を充填し塞いだと考えることができる。残存する木柄で関近くの端面をもつ部分はその側面の抉りを埋めるための木材で、その上に被さっているように見えるのが木柄であることが想定できる（註1）。

6．小結

築造時期　時期を特定できる遺物がなく築造時期については不明確であるが、刃関双孔を有する鉄剣は短剣から長剣へ変化すると考えられており、本古墳例は長剣に当たるため比較的新しい時期に位置づけられる可能性が高く、神奈川県の吾妻坂古墳と法量や特徴が類似することから、古墳時代中期前半に位置づけられよう（註1）。

なお、当鉄剣の評価については第10章において詳述する。

墳丘の復原　間門松沢第1号墳は、上述したように単純な円墳ではなく、円墳、長方形墳、前方後円墳、前方後方墳の可能性があるため、第62図に復原案を4案示した。

古墳の築造にあたり丘陵を最大限利用して周囲を削り出して築造したと仮定した場合、第1復原案として楕円形墳で、南東側の等高線の間隔が密になる126.4m付近を基底面とすれば長径約25m、短径約15mとすることができる。第2復原案として、長方形墳で、同じく126.4m付近を基底面とすれば、長辺25m、短辺15mに復原できる。現状での高さはおおよそ約1.2mである。

第3・4復原案として、墳丘南西の石材のあたりで等高線が括れ、その南側はまたやや広がるような状況が確認できることから、この部分が古墳築造当時に成形されたものであるとすれば、方形を意識した造成と考えることができ、小規模な前方後円墳（第3復原案）、前方後方墳（第4復原案）の可能性を想定することもできる。この場合は、全長30m、後方部長20m、後方部幅15m、前方部長10m、前方部先端幅10mに復原できる、この方形張り出し部分が古墳時代に行われたという確証がないため、第1・2復原案と比較すると根拠が弱い。

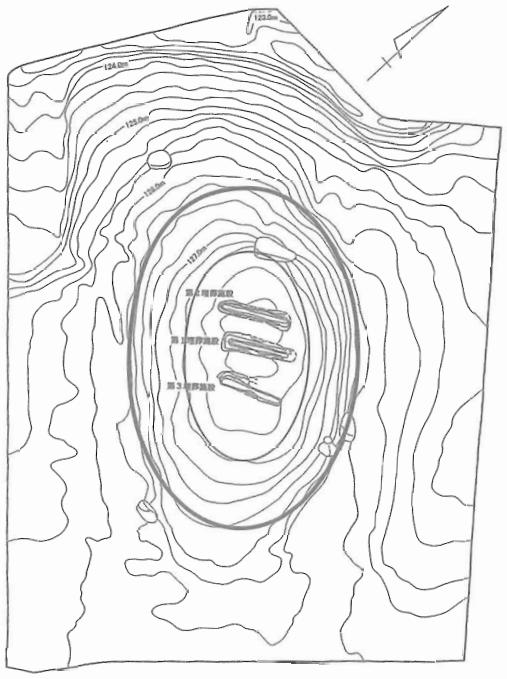
なお、上記第1～4案のどの場合であっても、上述したように赤淵川（東側あるいは東南方向）からの眺望はよくないため、北西方向から古墳を望むことを意識した築造位置になっていた可能性が高い。

註

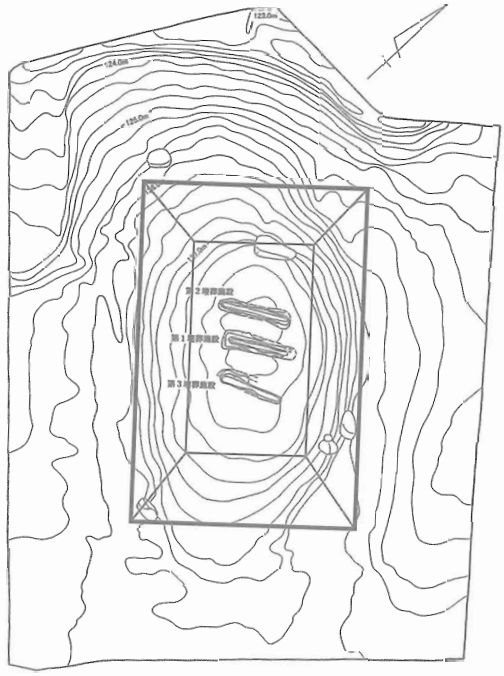
1　文化庁美術学芸課　豊島直博氏の御教授による。

参考文献

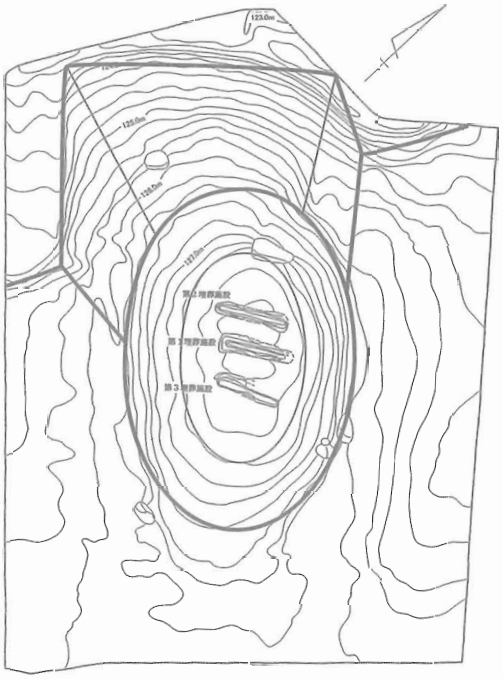
参考文献は第9章末（153・154頁）に記載した。そちらを参照願いたい。



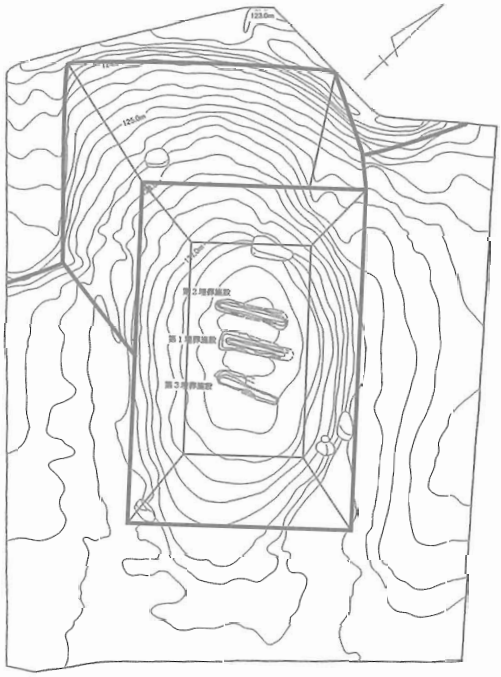
第1案



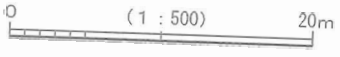
第2案



第3案



第4案



第62図　間門松沢第１号墳　墳丘復原図

第７章　鵜無ヶ淵・間門古墳群

第１節　鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要

１．鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要（第27表）

鵜無ヶ淵・間門古墳群（以下，間門古墳群）は、富士山の東南麓、赤淵川に沿った標高120m～210mの扇状地に位置する。間門古墳群は、富士山麓と愛鷹山麓の境界に当たる場所に立地し、富士山麓の最東端に築造された古墳群である。

間門古墳群は1988年の時点で間門E-第５号墳のほか計９基が確認されていた（富士市教委1988）。富士山麓、愛鷹山麓に形成された古墳群としては古墳の築造数は少なく、散在する程度である。築造数が少ない理由としては、周囲が丘陵と赤淵川で区画され、平坦地が少ないことや、富士山麓、愛鷹山麓の南側に広がる平地部分からは奥まった位置にあることなどが考えられる。

確認されていた９基の古墳はすべて横穴式石室を埋葬施設とする円墳と推測されるが、発掘調査を経ないまま消滅した古墳が多く、詳細は不明である。このうち間門E-第５号墳（間門大塚古墳）は直径15mほどの円墳であり、埋葬施設は全長7.2mの無袖形石室で、轡や鉄刀、鉄鏃、玉類などが出土したとされる。このほか、間門E-第３号墳（八ッ頭塚古墳）や間門E-第４号墳（物見塚古墳）は横穴式石室であったとされるが現在は消滅している。この２基の古墳からは大刀や須恵器などが出土したとされる。また、間門E-第２号墳は円墳で６m前後の横穴式石室を埋葬施設とする可能性が高い。このように古くから周知されていたものの、調査された事例がなく、様相は不明確であった。

このような状況の中、ここで報告する間門E-第６号墳（第63図）や上ノ山第１号墳で第二東名建設工事に先立ち調査が実施された。上ノ山第１号墳は、直径8.5m程度の円墳で、竪穴状の墓壙で段構造を有する無袖形石室であることが確認された（富士市教委2005）。遺物は刀子が出土した程度であったが、様相が不明であった間門古墳群において石室の内容が判明した点は重要である。

第27表　鵜無ヶ淵・間門古墳群の概要

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	規模	副葬品	文献	備考
間門E-第２号墳	円墳？	６？	横穴式石室？	－		富士市教委1988・2005	
間門E-第３号墳	不明	－	横穴式石室？	－	(伝) 大刀・須恵器		八ッ頭塚古墳
間門E-第４号墳	不明	－	横穴式石室？	－	(伝) 大刀・須恵器		物見塚古墳
間門E-第５号墳	円墳？	15？	無袖形石室	7.2	(伝) 大刀・馬具・鉄鏃・刀子・玉類・土器		間門大塚古墳
間門E-第６号墳	不明	－	無袖形石室	4.4+	馬具・鉄鏃・刀子・玉類・須恵器	本書	
間門E-第７号墳	不明	－	横穴式石室？	－	(伝) 大刀・玉類・須恵器	富士市教委1988・2005	石穴塚古墳
間門E-第８号墳	不明	－	横穴式石室？	－			
間門E-第９号墳	不明	－	横穴式石室？	－			
間門E-第61号墳	不明	－	横穴式石室？	－			
上ノ山第１号墳	円墳	8.5±	無袖形石室	3.4	刀子	富士市教委2005	

単位(m)

２．鵜無ヶ淵・間門古墳群の調査歴

鵜無ヶ淵・間門古墳群は、古くから周知されており、後藤守一氏をはじめとする旧吉原市教育委員会の1958年の調査段階で８基（間門E-第２～９号墳）が確認されていた（吉原市教委1958）。こののち富士市教育委員会の分布調査により1988年の時点で９基（間門E-第61号墳を追加）の古墳が確認されてい

第63図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳の位置

たが、本格的な調査が行われたことはなく、調査される前に破壊された古墳も多い。

本格的な調査は、広義の間門古墳群内（間門地区）では、前章で報告した第二東名高速道路建設に伴う間門松沢第1号墳の調査が第1次調査で、ここで報告する間門E-第6号墳の調査が第2次調査である(第63図)。また、第二東名建設事業に伴い富士市教育委員会により実施された上ノ山第1号墳の調査が平成15年5月1日～7月18日に実施された（第3次調査)。この調査報告は富士市教育委員会により既に刊行されている（富士市教委2005)。

第２節　調査の体制と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

間門E-第６号墳の発掘調査は、第二東名富士工区として調査体制を組み、実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝　　調査研究員　稲垣聖二・高野穂多果

２．確認調査および本発掘調査の経過

確認調査　確認調査は、No.52地点確認調査（その２）として平成12（2000）年９月18日から開始した。試掘溝を設定し、重機で表土除去を行った後、人力にて遺構の確認を行った。10月18日に試掘溝の掘削を終了し、確認調査を終了した。

試掘溝は35箇所設定したが、古墳が確認できたのは、当初から古墳の存在が確認されていた鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳のみであった。

本発掘調査　本発掘調査は、平成12年度にNo.52地点本調査Ⅰ期として確認調査（その２）に継続して実施した。平成12年10月16日から現地詰所の設置を開始し、10月18日から古墳の表土除去および石室・周溝などの検出を開始した。調査が進むにつれて、周溝が残存していないことが判明した。横穴式石室の検出が終了した10月28日から石室内部の掘削を開始した。石室の掘削が終了した段階で石室の実測・写真撮影を行い、石室内の調査が終了した11月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を実施した。撮影後、石室の実測図等を作成し、石室の構築方法を探るための石室解体を実施した。そして、11月20日にすべての作業を終了し、本発掘調査を終了した。

写真21　確認調査の様子

写真22　本発掘調査の石室精査作業

写真23　本発掘調査の石室解体作業

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過は、第２章にて詳述しているため参照願いたい。

第３節　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳の調査成果

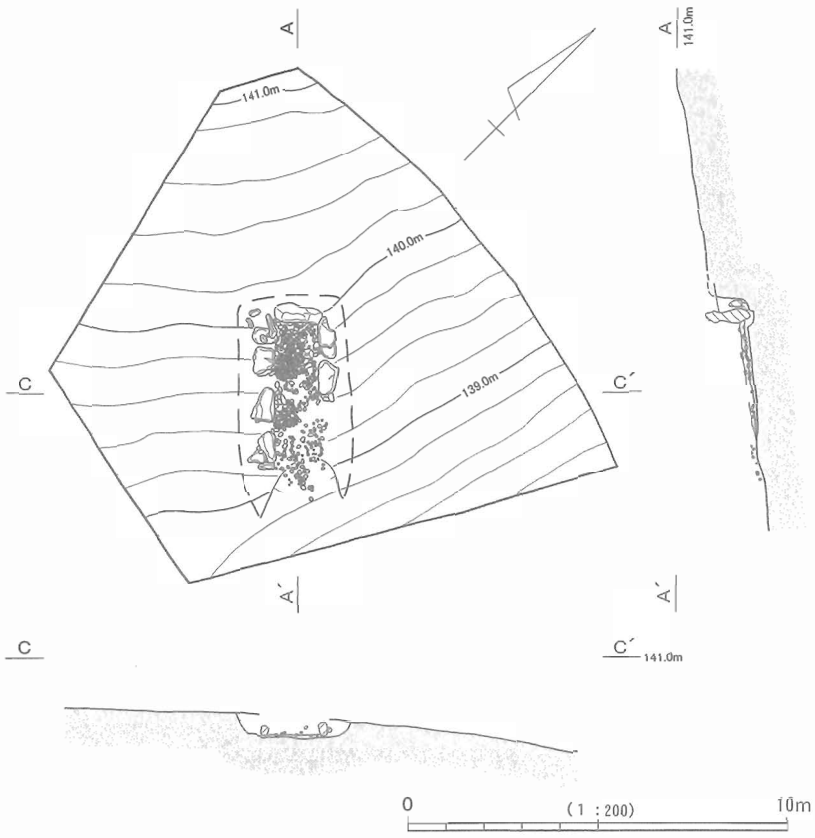
１．古墳の現況

富士市教育委員会の1988年段階での分布調査により古墳は、著しく破壊を受けた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが指摘されていた（富士市教委1988）。

第二東名高速道路建設対象地内の確認調査前の踏査時にも、当該箇所で大型の石材が確認できたことから、富士市教育委員会による踏査状況が追認できた。

したがって、残存状況を確認するため確認調査を行い、破壊が進んでいるが横穴式石室が残存することが確認できたため、本発掘調査を実施することとした。

古墳は、赤淵川西岸の丘陵の緩斜面に位置するが、上述した間門松沢第１号墳よりもさらに西側に位置しており、赤淵川からは直接古墳を望むことは不可能である。古墳は標高139～140m付近に築造されている。



第64図　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　周辺測量図

２．墳丘の構造（第64図）

周囲は大きく削平されていたため、墳丘および周溝は確認できなかった。

３．埋葬施設の構造（第65～67図，第28表，図版51）

埋葬施設は南東に向かって開口する横穴式石室である。

墓壙　墓壙は逆徳利形で、南側が窄まる形状である。南側が破壊されており、竪穴状であったか、コ字形に開放していたか不明である。南側は、やや深く掘り込まれ、それを埋めて敷石が設置されている。

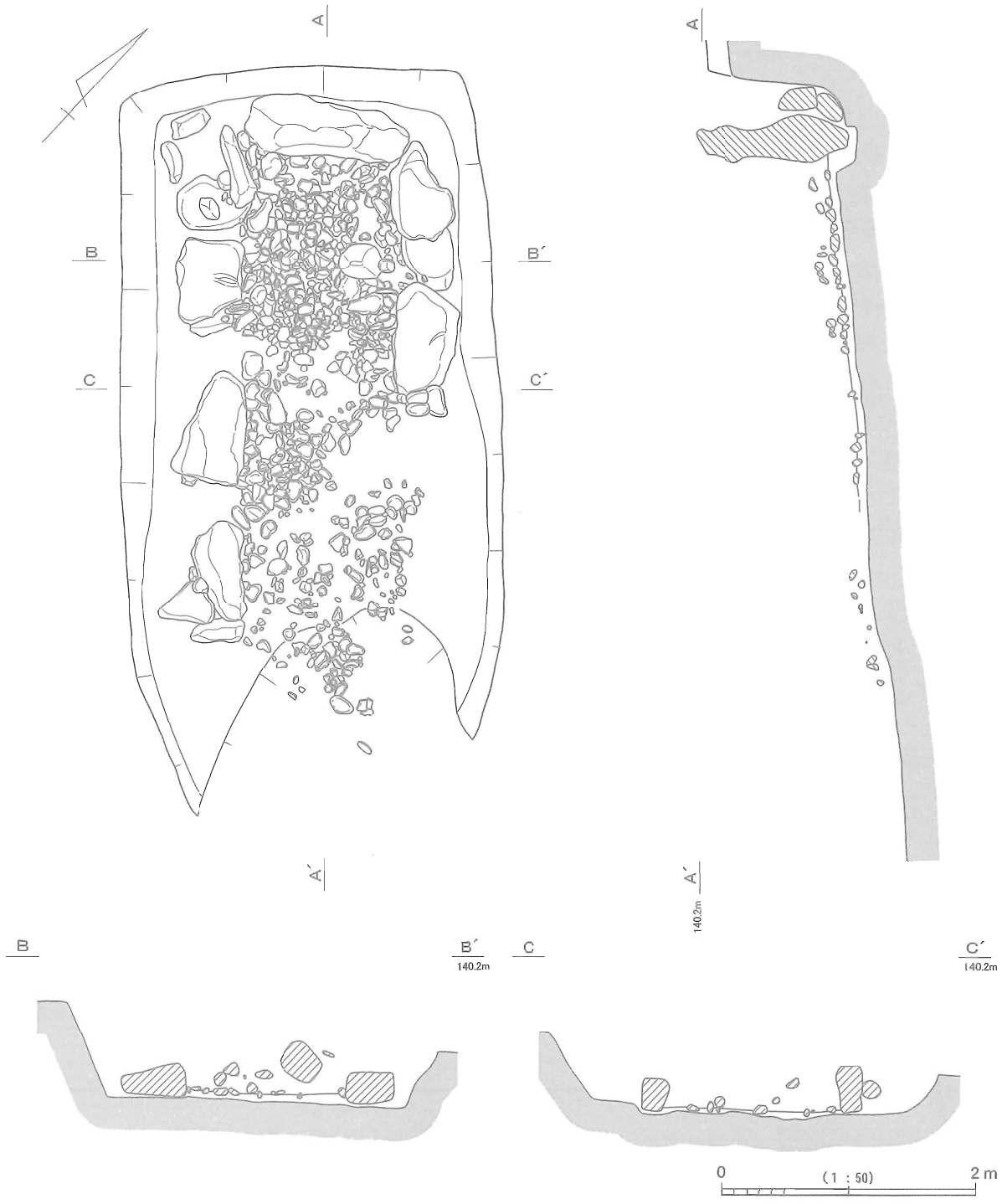
石室　石室は半地下式に築造された無袖形横穴式石室である可能性が高い。玄室平面形は長方形である。

奥壁は１段確認でき、板状の石材を鏡石として縦位に設置している。奥壁と裏込めの間には奥壁を安定させるために、礫を使った裏込めが確認できる。

側壁は基底石・２段目ともに残存する石材は長手を内側に向けて設置している。

第28表　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　埋葬施設の規模

主軸方位	N-45°-W		
石室全長	4.4m以上		
玄室長	4.4m以上	玄室幅	1.15m
玄室奥壁幅	1.1m	玄室玄門側幅	1.1m前後
墓壙長	5.8m以上	墓壙幅	3.0m

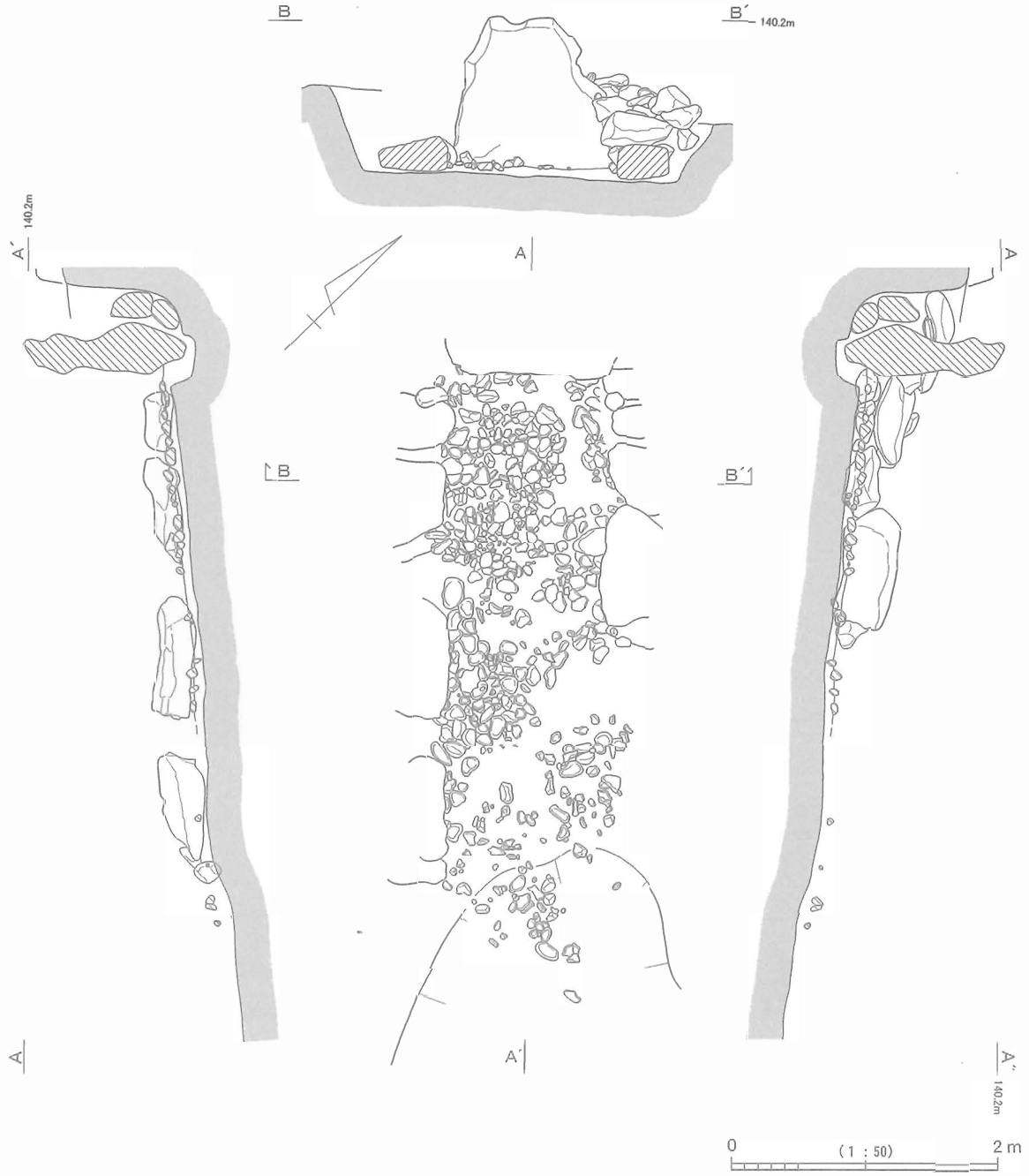


第65図　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　横穴式石室検出状況図

石室の構築　残存する石材が少ないため石室の構築方法については不明確であるが、右側壁で奥壁から３石目、左側壁で奥壁から４石目で基底石に大型の石材が確認できることから、この石材を指標石として側壁を積み上げた可能性が高い。

床面　床面には敷石が少なくとも１面確認できる。攪乱が著しく敷石が確認できない部分もあるが、本来は石室全体に敷設されていた可能性が高い。敷石は主に20cm以下で10cm前後の川原石を多く用いている。屍床仕切石は確認できない。

なお、第65図のA-A´断面をみると、この床面上５cm位高い位置に同じような大きさの礫が確認できる



第66図　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　横穴式石室実測図

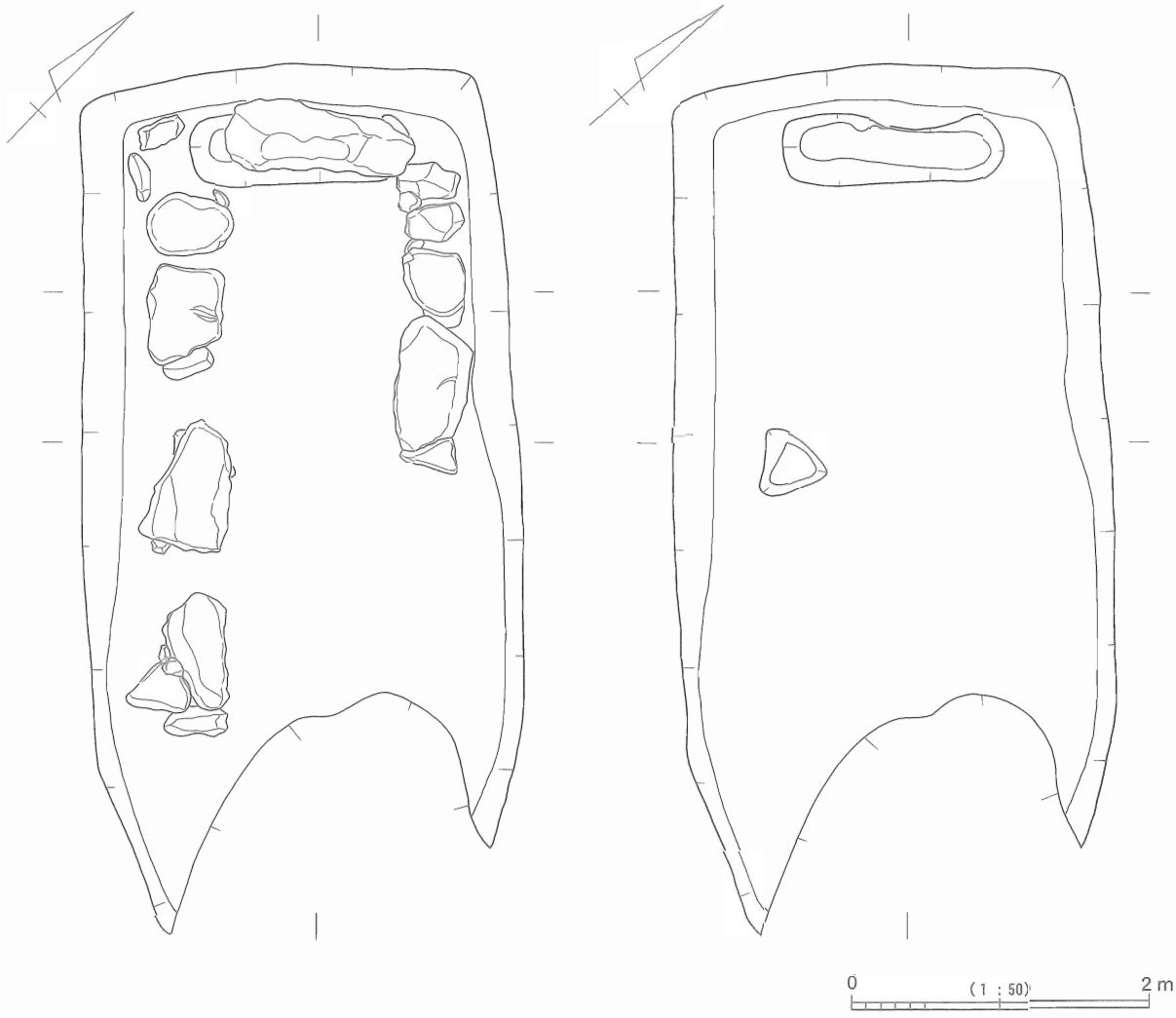
ことから、この面が床面（上面）であった可能性も排除できない。

４．遺物の出土状況（第68図，図版52）

石室の奥壁近くから鉄鏃（18）・(19)、刀片（14）が出土し、中央より奥壁側で、床面直上から玉類が散乱した状態で出土し、その近くから刀子（15）が、中央付近から刀子（16）が、中央やや南側右側壁側で轡（13）が出土した。このほか南側の床面から須恵器提瓶（１）が破砕した状態で出土した。

５．出土遺物（第69・70図，第29～31表，図版52・53図）

石室の破壊が著しく行われていたが、予想以上に遺物が出土した。出土した遺物は玉類、馬具、大刀、鉄鏃、刀子、須恵器である。



第67図　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　横穴式石室基底石および墓壙実測図

土器　須恵器提瓶（１）は、太い頸部から逆ハ字形に開き、口縁部がさらに外反し、口縁端部は段をもつ形状で、頸部には細かい丁寧なミガキ調整が施される。胴部は扁平な球胴で、平行タタキが行われた後、カキメ調整が施されている。産地の特定は難しい。

玉類　切子玉１点、管玉１点、ガラス丸玉９点が出土した。

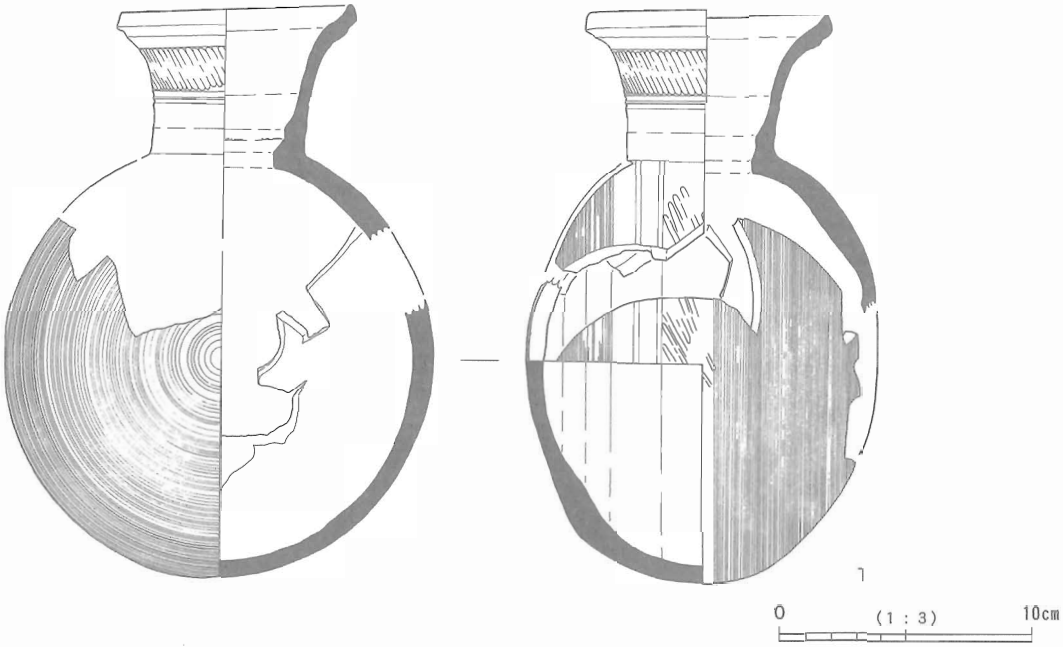
切子玉（２）は水晶製で、14面体である。穿孔は片面穿孔である。高さ2.35㎝である。

管玉（３）はいわゆる「碧玉」製で、穿孔は片面穿孔である。高さ2.75㎝、直径1.3㎝である。

ガラス丸玉（４～12）は直径7.0～9.5㎜、高さ4.5～6.5㎜、すべて濃紺色である。この丸玉を観察すると、孔部分以外に、孔に平行して玉を貫通する空洞部分が確認できる。この空洞は気泡が動いた痕跡と想定できることから、これらのガラス丸玉は引き延ばし技法により生産されたことが想定できる。

馬具　残存状況は良好ではないが、鉄製大型矩形立聞環状鏡板付轡１組（13）である。鏡板・引手・銜の接合方法は、銜先環に鏡板・引手を繋げる方式（銜介在型連結，大谷2006）である。鏡板は楕円形の環に大型矩形立聞（回字形）金具が鍛接されるもので、環の断面は方形、立聞は板状である。完存する鏡板の高さは9.2㎝、環幅９㎝、環の高さ7.2㎝、立聞幅4.3㎝、立聞高2.0㎝、立聞孔の長辺2.9㎝、短辺1.0㎝、環の厚さ７㎜、立聞の厚さ２㎜である。環が一部欠損する鏡板は鏡板の高さ、環の高さは不明であるが、環幅はおおよそ8.5㎝、立聞幅4.0㎝、立聞高2.1㎝、環の厚さ７㎜、立聞の厚さ２㎜である。銜は二連銜である。喞金（くくみがね）が小型の円形で、銜先環は喞金よりも大型である。喞金は図の左・右側

第68図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室遺物出土状況図



第69図　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　横穴式石室出土土器実測図

ともにC字形である。銜先環は丁寧に鍛接され円形である。捩りは確認できない。銜は長さ16.5cm前後に復原できる。引手は一条線引手で、引手壺はく字形に折れない直柄（13-6）である。引手は15cm以上である可能性が高い。引手の銜先環と連結する部分の環は、啣金と同様C字形に折り曲げたものを先端で繋ぎ合せたものである。

鉄器　鉄刀１点、鉄鏃３点以上、刀子２点、刀装具１点が出土した。

鉄刀（14）は切先破片で、ふくらの張る切先で、鎬は確認できない。残存幅2.3cmである。

鉄鏃（18～23）は、鏃身が３点（18～20）確認でき、少なくとも３点以上が副葬された。３点はすべて長頸鏃である。18は尖根柳葉式で、鏃身は片丸造りで、関は直角両関である。19・20は尖根片刃箭式で、19の関は直角片関である。鏃身がほぼ完存する19では切先から関まで刃が形成されている。

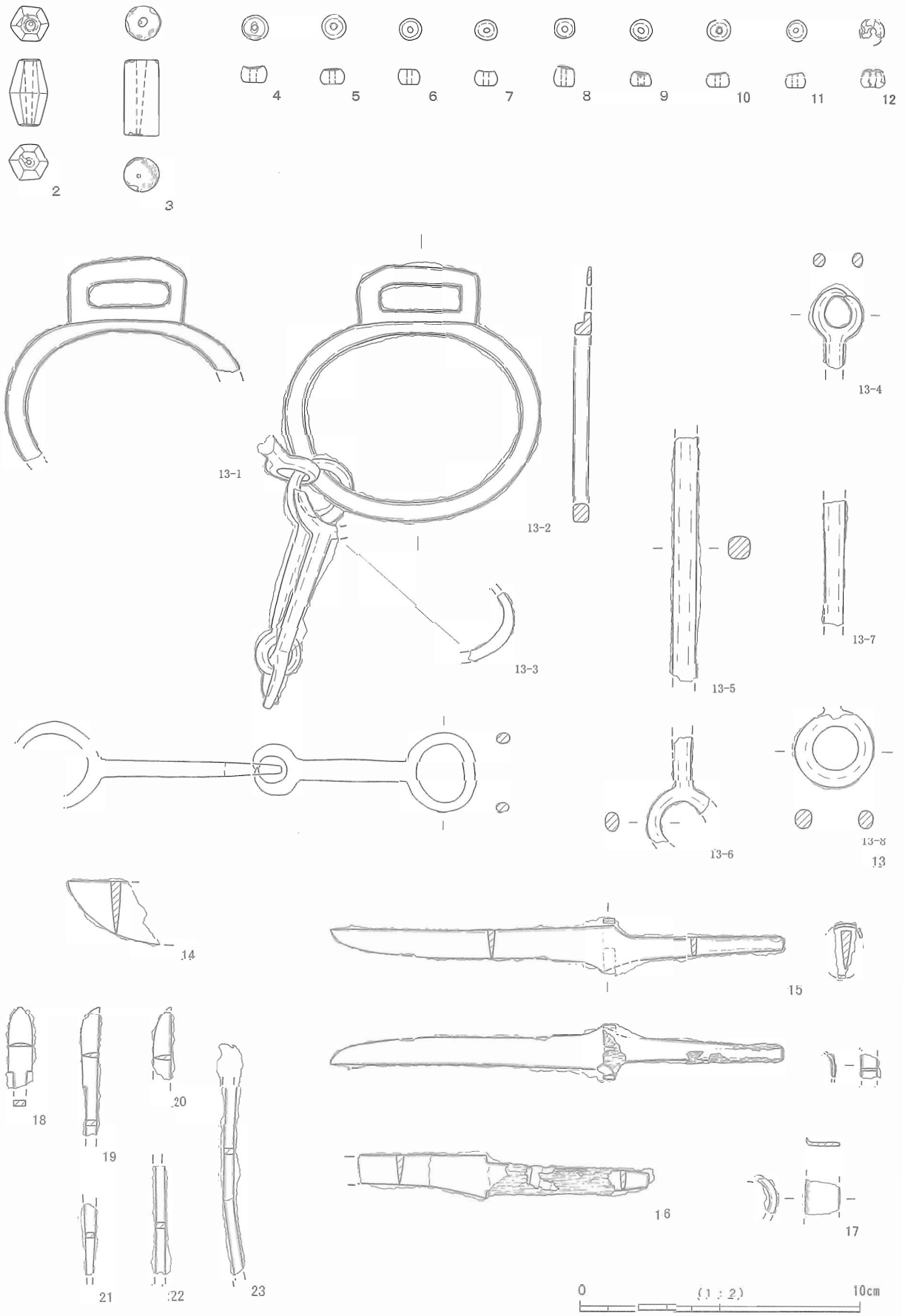
21は茎片、22・23は頸部片である。茎関は残存せず、不明である。

刀子は２点（15・16）出土した。刀子（15）は柄縁装具を装着する木柄刀子である。刃部は内湾しており、研ぎ減りの可能性がある。関は刃部側、棟側ともに撫関の両関で、茎は茎尻に向かいやや先細り、茎尻は一文字尻である。木柄には刃側５㎜まで嵌めこまれ、その部分に鉄製の柄縁金具が装着されている。この部分により木柄の断面は楕円形に近い倒卵形で、長軸1.7cmであることが判明する。刀子（16）は切先が欠損している。木柄刀子である。刃部は内湾しており研ぎ減りの可能性がある。関は直角両関で、茎は茎尻に向かい先細り、茎尻は一文字尻である。木柄は関で止まる。木柄は木質が残存し、その固定のために樹皮巻が残る。

６．小結

築造時期　須恵器提瓶（13）は、扁平な球胴であるが、胴部のふくらみ（図右側）が左右対称に近いこと、口縁端部に段があることから、遠江Ⅲ期後葉（TK209型式期）に位置づけられる可能性が高い。轡は法量９cmと大きいことから、TK43～TK209併行期に位置づけられる可能性が高い（岡安1984）。鉄鏃のうち尖根柳葉式はTK43～TK209型式期に盛行し、TK217期以降減少する。したがって、間門E-第６号墳はTK43～TK209型式期（後者の可能性がより高い）に築造された可能性が高いといえる。

追葬　遺物が少なく、時期差も確認できないことから追葬の有無については不明である。



第70図　鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳　横穴式石室出土玉類および鉄製品実測図

７．鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳出土遺物観察表

（１）鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳出土土器観察表

第29表　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　出土土器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
E-第６号墳	石室	69	52	1	須恵器	提瓶	口縁～胴部	80	22	16.8	9.4	7.5	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	

（２）鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳出土玉類観察表

第30表　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　出土玉類観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	材質	直径(mm)	全長(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
E-第６号墳	石室	70	52	2	切子玉	水晶	14.0	23.5	3.0/2.0	4.77	透明	片面穿孔
				3	管玉	「碧玉」	13.0	27.5	3.0/1.0	8.56	濃緑	片面穿孔
				4	丸玉	ガラス	9.5	5.5	2.0	0.59	濃紺	
				5	丸玉	ガラス	9.0	5.5	2.0	0.53	濃紺	
				6	丸玉	ガラス	8.0	5.5	2.0	0.49	濃紺	
				7	丸玉	ガラス	8.0	5.0	2.5	0.41	濃紺	
				8	丸玉	ガラス	7.0	6.5	2.0	0.46	濃紺	
				9	丸玉	ガラス	7.5	4.5	2.0	0.36	濃紺	
				10	丸玉	ガラス	8.0	4.5	2.0	0.41	濃紺	
				11	丸玉	ガラス	7.5	5.0	2.0	0.32	濃紺	
				12	丸玉	ガラス	9.0	5.8	2.0	0.37	濃紺	

※ここで「碧玉」としたものは、自然科学分析を行っていないため種別を特定できないもので、碧玉、緑色凝灰岩、蛇紋岩等の可能性があるものである。

（３）鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳出土鉄製品観察表

第31表　鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳　出土鉄製品観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	幅(cm)	鏃身長(cm)	鏃身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	茎長(cm)	茎部幅(cm)	備考
E-第６号墳	石室	70	53	13	馬具	轡	133.38	－	－	－	－	－	－	－	－	大型矩形立聞環状鏡板付轡(文章中)
				14	鉄刀	切先	4.09	(3.2)	(2.3)	(3.2)	(2.3)	－	－	－	－	
				15	刀子	刀身～茎	14.37	16.1	1.6	10	1.6	－	－	6.1	1.0	木柄刀子。柄縁装具あり。
				16	刀子	刀身～茎	15.30	(10.3)	1.5	(4.6)	1.5	－	－	5.7	1.0	木柄刀子
				17	刀装具	柄縁装具	1.16	1.2	(1.2)	－	－	－	－	－	－	
				18	鉄鏃	鏃身～頸部	1.68	(2.9)	0.8	2.3	0.8	(0.6)	0.4	－	－	尖根柳葉式
				19	鉄鏃	鏃身～頸部	2.02	(4.3)	0.6	(2.6)	0.6	(1.7)	0.4	－	－	尖根片刃箭式
				20	鉄鏃	鏃身	0.95	(2.4)	0.6	(2.4)	0.6	－	－	－	－	尖根片刃箭式
				21	鉄鏃	茎	0.96	(2.5)	0.4	－	－	－	－	(2.5)	0.4	
				22	鉄鏃	頸部	1.72	(3.8)	0.3	－	－	(3.8)	0.3	－	－	
				23	鉄鏃	頸部	4.73	(8.2)	0.3	－	－	(8.2)	0.3	－	－	

（　）は残存値

参考文献

参考文献は第９章末（153・154頁）に記載した。そちらを参照願いたい。

第８章　不動棚遺跡

第１節　不動棚遺跡の概要

１．不動棚遺跡の概要

不動棚（ふどうだな）遺跡では、これまでに第72図に示した完形に近い縄文土器が地元住民により採集されていたことから遺跡が存在することは想定されていた。しかし、これまでこの周辺で調査が行われたことがなく、遺跡がどこに所在しているのか不明確であった。

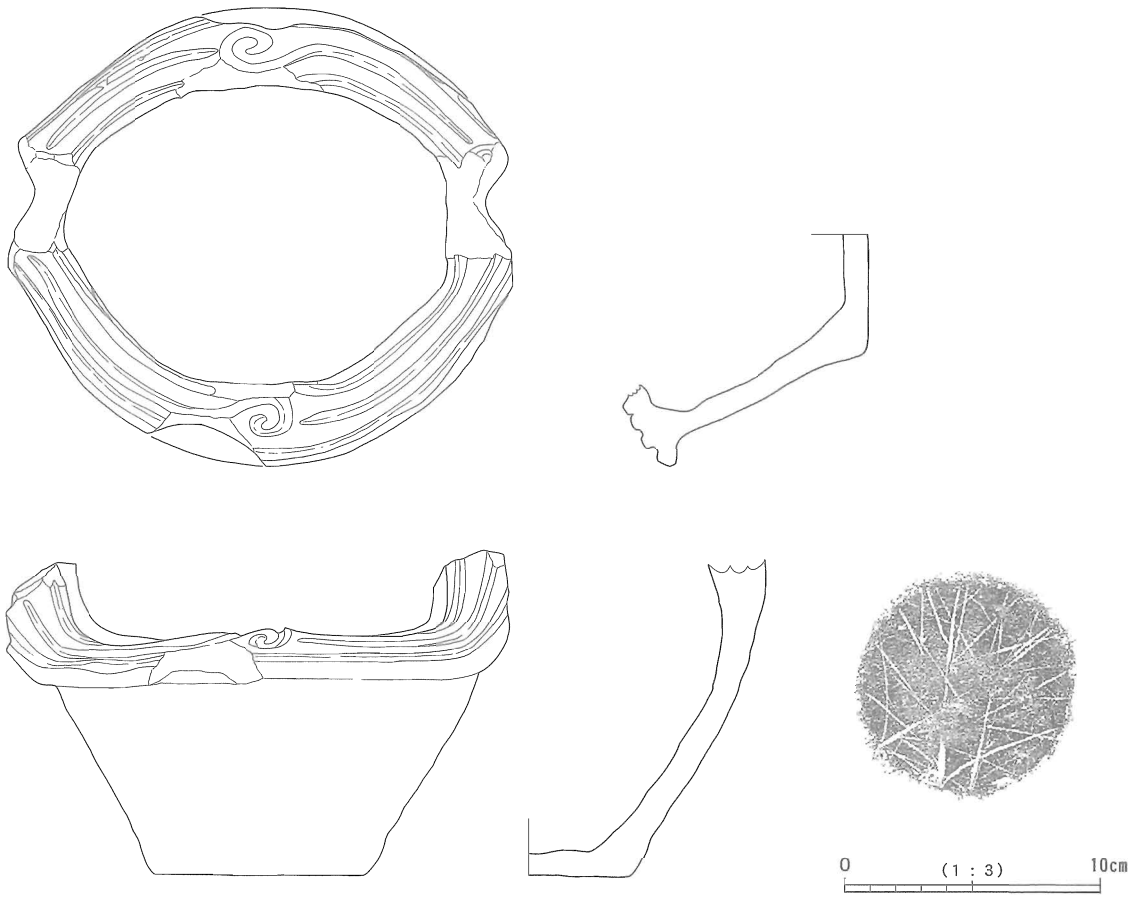
このような状況の中、不動棚遺跡は第二東名建設工事に伴い新たに発見された遺跡であり、今回の調査で、縄文時代の土器、石器、礫群（集石遺構）などが確認された。調査区内では竪穴建物などは確認できないが、周囲には集落が存在している可能性が高い。

不動棚遺跡は、赤淵川（あかぶちがわ）西岸の富士山麓の緩斜面上に立地している。遺跡の東側に赤淵川が南流し、遺跡の北側には鵜無ヶ淵（うないがふち）遺跡、峰山（みねやま）遺跡などの縄文時代の遺跡が周知されている。

２．不動棚遺跡の調査歴

間門地区に在住の方が、完形に近い縄文土器（第72図）を採集しており、遺跡である可能性が高いことは想定されていたが、上述したようにこれまで調査が行われたことはなかった。

第71図　不動棚遺跡の調査区の位置



第72図　不動棚遺跡で採取された縄文土器

今回の第二東名建設事業に伴う事前調査では、鵜無ヶ淵・間門古墳群の周知の範囲内にあたること、縄文土器が採集されていたことにより確認調査の対象地として選定し、確認調査を行ったところ、新たに発見した遺跡であり、今回が第１次調査となる（第71図）。確認調査後、富士市教育委員会、静岡県教育委員会文化課（当時）の協議により、「不動棚遺跡」として命名された。

不動棚遺跡で採集された縄文土器　第72図（図版56）には、間門地区の個人が所蔵する縄文土器把手付鉢を参考資料として図示した。底部は平底で、底部から外上方に立ちあがった後、口縁端部に板状の粘土を貼り付け文様を施している。底部には木葉痕が確認できるが、一枚ではなく２枚以上の木葉痕が確認できる。

上記の文様の特徴から、縄文時代中期の勝坂式土器の可能性が高い。

第２節　調査の体制と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

不動棚遺跡の発掘調査は、確認調査として本発掘調査まで実施した。当研究所では、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝　　調査研究員　三井文洋・高野穂多果

２．確認調査および本発掘調査の経過

調査は、No.52地点確認調査（その３）として本発掘調査まで、平成13年度に実施した。

確認調査　確認調査は、平成13年４月17日から試掘溝を設定し、重機による表土除去を開始した。重機にて表土除去を実施した後、人力にて遺構の有無の精査を行った。調査は５月16日まで継続的に実施し、計19箇所の試掘溝の調査を行った。

調査の結果、遺物がやや多く確認される範囲が確認できたことから、静岡県教育委員会、日本道路公団静岡建設局（当時）と協議し、その範囲を本発掘調査対象とし、確認調査に継続して実施することとした。

本発掘調査　確認調査が終了した５月18日から重機による表土除去を開始し、遺構の検出を行った。確認できた遺構から順次掘削し、遺物の出土状況図や遺構図の作成、写真撮影を行った。６月27日に作業を終了し、６月28・29日に片付けを行い、本発掘調査を終了した。

写真24　確認調査の様子

写真25　本発掘調査の表土除去作業

写真26　本発掘調査の遺構検出作業

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過は、第２章で記述しているためそちらを参照願いたい。

第３節　不動棚遺跡の調査成果

１．調査区の位置と概要（第55・56図）

富士市間門（まかど）地区に位置し、上述した間門松沢（まかどまつざわ）第１号墳の北約60mのところに位置する。調査区は確認調査で遺物が出土した場所で、攪乱が及んでいない箇所のみを調査対象とした。

今回の調査では主に縄文時代の遺構・遺物が確認できた。以下、詳細な報告に入る前に概要を記す。

竪穴建物などの遺構はほとんど確認できず、礫群１基、土坑３基が確認されただけであるが、土器と石器が集中する箇所が２箇所確認できた。

この他、間門E-第６号墳の表土やNo.52地点の確認調査において弥生土器、羽釜、中世から近世の陶器、銅銭３枚などが出土したが、遺構は確認できなかった。

２．基本土層（第73図）

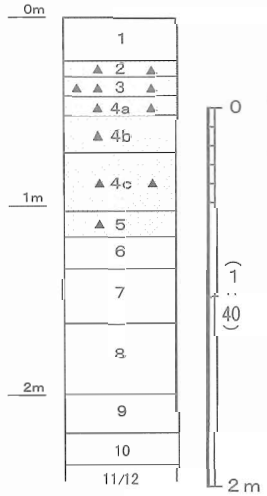
不動棚遺跡の基本土層は第73図に示したとおりである。

１層は表土で、２・３層が大渕スコリア層、４・５層が褐色スコリア層、６層が暗褐色土、８層が黄褐色土層で、９層が褐色土層である。

９層上面が遺構面にあたり、遺物は８層以上から遺物が出土するが、８層での遺物出土量が多い。

３．縄文時代の遺構

遺構は、調査区北東で、土坑３基と礫群１基が確認された。



1 表土
2 大渕スコリア層
径 0.5 ～2cm の発泡の進んだ大渕スコリアを少量に含む。
3 大渕スコリア層
径 0.5 ～2cm の発泡の進んだ大渕スコリアを多量に含む。
4 褐色スコリア層
径1～3mm の褐色スコリアを多く含む。
径1～2mm の褐灰色スコリアを多く含む。
径1～3mm の赤褐色スコリアを層の下位に少量含む。
白色パミスをごく少量含む。
径1～2mm の黄褐色スコリアをごく少量含む。
（4層が細分できる場合）
4a 褐色スコリア層
径 0.1 ～1cm の赤褐色スコリアを少量含む。
径1～3mm の褐色スコリアを少量含む。
径1～2mm の褐灰色スコリアを少量含む。
大渕スコリアをごく少量含む。
4b 褐色スコリア層
径 0.1 ～1cm の赤褐色スコリアを含む。
径1～3mm の褐色スコリアを含む。
径1～2mm の褐灰色スコリアを少量含む。
4c 褐色スコリア層
径1～2mm の黄褐色スコリアを下位に少量含む。
径1～3mm の赤褐色スコリアを多く含む。
径1～3mm の褐色スコリアを多く含む。
径1～2mm の褐灰色スコリアを多く含む。
白色パミスをごく少量含む。
5 褐色スコリア層
径 0.5 ～1mm の褐色スコリアを少量含む。
径1mm の赤褐色スコリアを少量含む。
白色パミスをごく少量含む。
6 暗褐色土層
径2～3mm の赤褐色スコリアを少量含む。
径 0.5 ～1mm の褐色スコリアをごく少量含む。
白色パミスをごく少量含む。
7 漸移層
径1～2mm の赤褐色スコリアを少量含む。
径1mm の橙色スコリアをごく少量含む。
径 0.5 ～1mm の小石をごく少量含む。
8 黄褐色土層
粘性強い、しまりあり。
径1～2mm の赤褐色スコリアをごく少量含む。
径 0.5 ～2cm の小石を少量含む。
9 褐色土層
粘性あり、しまり強い。
径 0.5 ～2mm の赤褐色スコリアを少量含む。
径 0.5 ～1mm の褐色スコリアをごく少量含む。
径 0.5mm の白色粒子を含む。
径 0.5mm 以下の黒色粒子をごく少量含む。
径 0.5mm の黄褐色スコリアをごく少量含む。
径3mm 以下のの小石をごく少量含む。
細かな多種のスコリアを含むとても固い層。
10 漸移層
9層と 11 層が混入している層。
11 砂礫層
スコリアが溶けたような粒子の細かい砂や
径1～3cm の礫を含む。
12 岩盤

第73図　不動棚遺跡　基本土層図（現地表面からの深さ）

（1）礫群（礫群01，第74・75図，図版56）

礫群01は調査区北東で確認されたもので、SK02・03と関連するものである。SK02・03の内部にも礫が確認でき、SK02・03の上位10cmまでに確認される。礫は被熱を受け赤変したものはない。15cm以下の円礫を用いている。

（2）土坑（SK01・02・03，第74・75図，図版56）

SK01は礫群01の西側で確認されたやや不整形な楕円形の土坑である。土坑内部には焼土が確認でき、炉の可能性が高い。南北約1.2m、東西約0.9m、深さ約0.15mである。

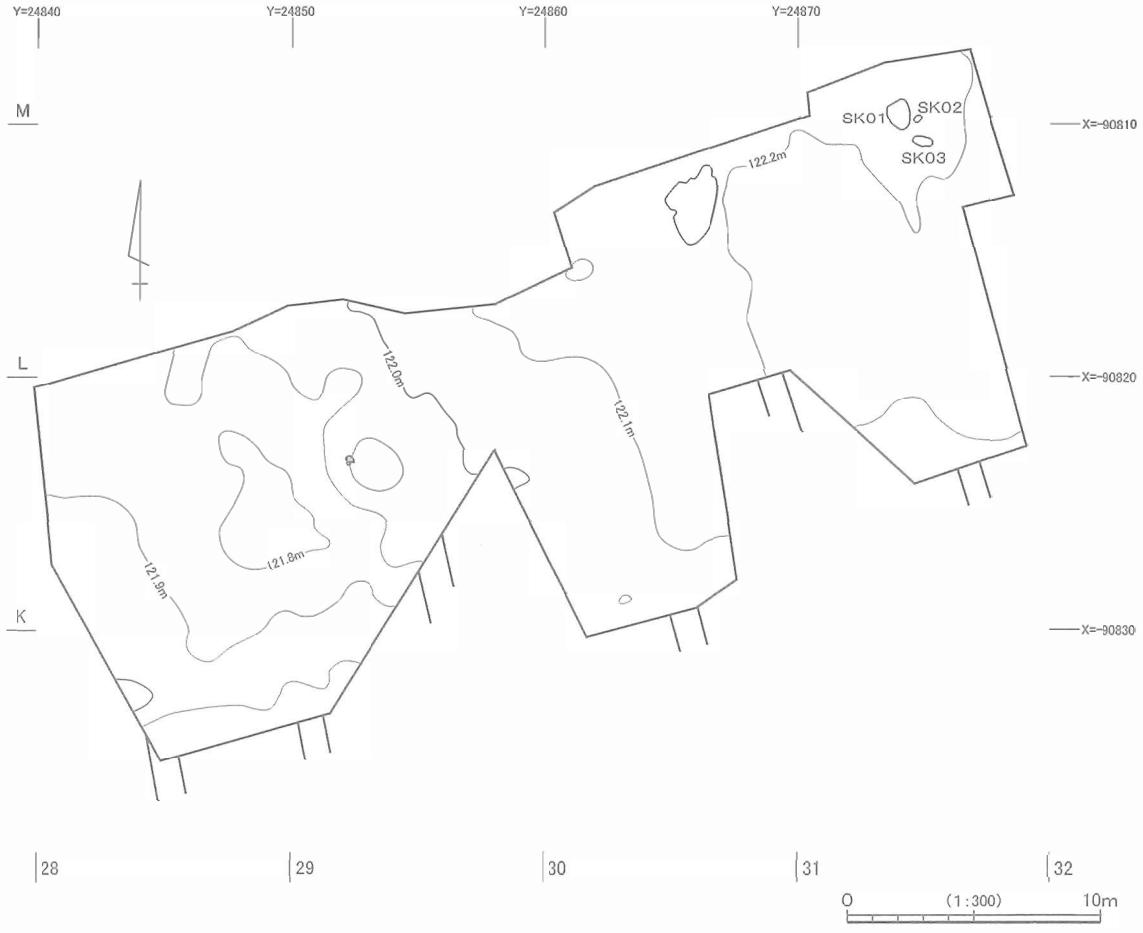
SK02は礫群01の下位で確認された不整形な楕円形の小土坑である。南北約0.3m、東西約0.3m、深さ約0.1mである。内部に礫群01を構成する礫が確認できる。

SK03は礫群01の下位、SK02の南側で確認された楕円形の土坑で、南北約0.4m、東西約0.8m、深さ約0.1mである。内部に礫群01を構成する礫が確認できる。

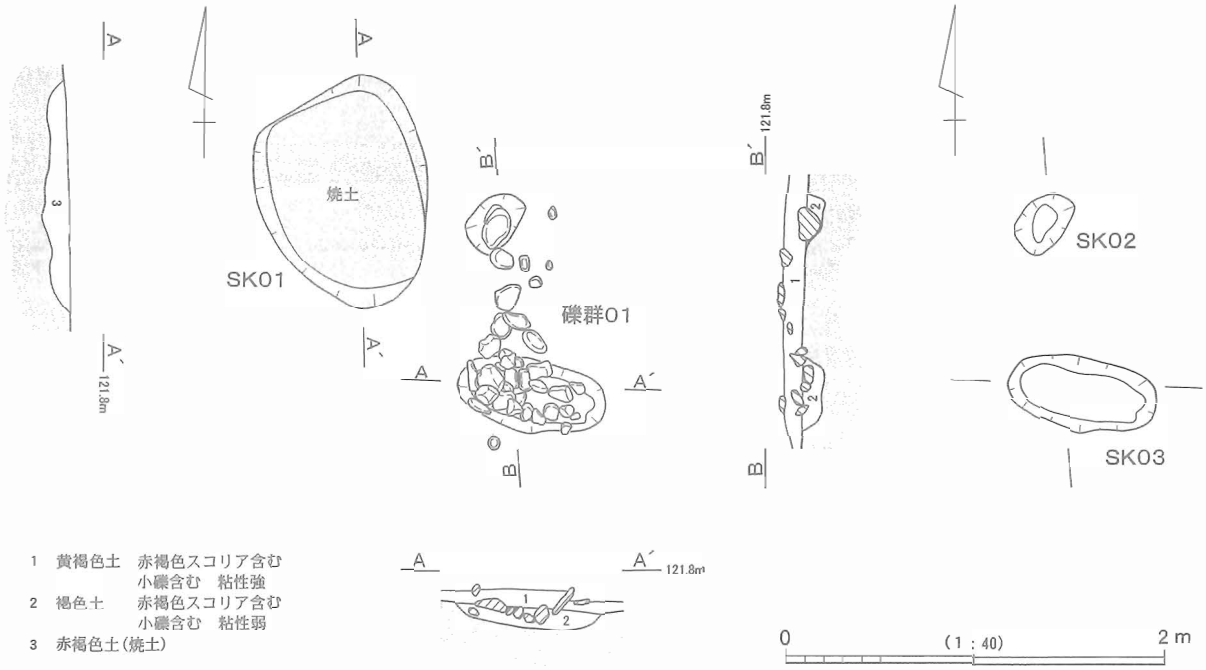
したがって、礫群01とSK02・03はほぼ同時期に位置づけられる遺構で、さらにSK01も近接することから、調査区北東側で確認された4基の遺構は同時期に使用された遺構である可能性が高い。

（3）土器・石器の出土状況（第76～80図，図版54・55）

土器片の出土状況を第76図上、第77・78図に、石器（剥片を含む）・礫の出土状況を第76図下、第79・80図に示した。



第74図　不動棚遺跡　調査区測量図



第75図　不動棚遺跡　遺構実測図

土器と石器は、調査区の全体で出土しているが、西側と東側に集中箇所が確認できる。中央部分は土器、石器ともに集中箇所は確認できず散在する。

土器の接合状況あるいは同一個体と推測される土器片の出土位置をみると調査区の東側で出土した土器片と西側で出土した土器片が接合する（同一個体と想定できる，13・14・17・27など）。つまり、調査区東側と西側で遺物の集中箇所が確認できるが、両者で接合関係にある遺物があることから、どちらかからの流れ込み、あるいはやや標高が高い調査区北側からの流れ込みの可能性がある。遺構は東側で礫群と土坑が確認できることから、東側から西側に向かって流れ込んだのであろうか。

４．縄文時代の遺物

縄文時代の縄文土器、石器、剥片、礫が多数出土した。

（１）縄文土器（第81～85図，第32表，図版56～59）

縄文土器は、調査区全体から破片が多数出土したが、全体的形状が復原できるもの、部位がわかるものや大型の破片のみを図示した。

Ⅰ群　縄文時代早期の押型文式土器（第81図１）

１は、口縁部片でほぼ直立して立ち上がる。外面の上部に山形の押型、その下位に横位の楕円形の押型を施す。

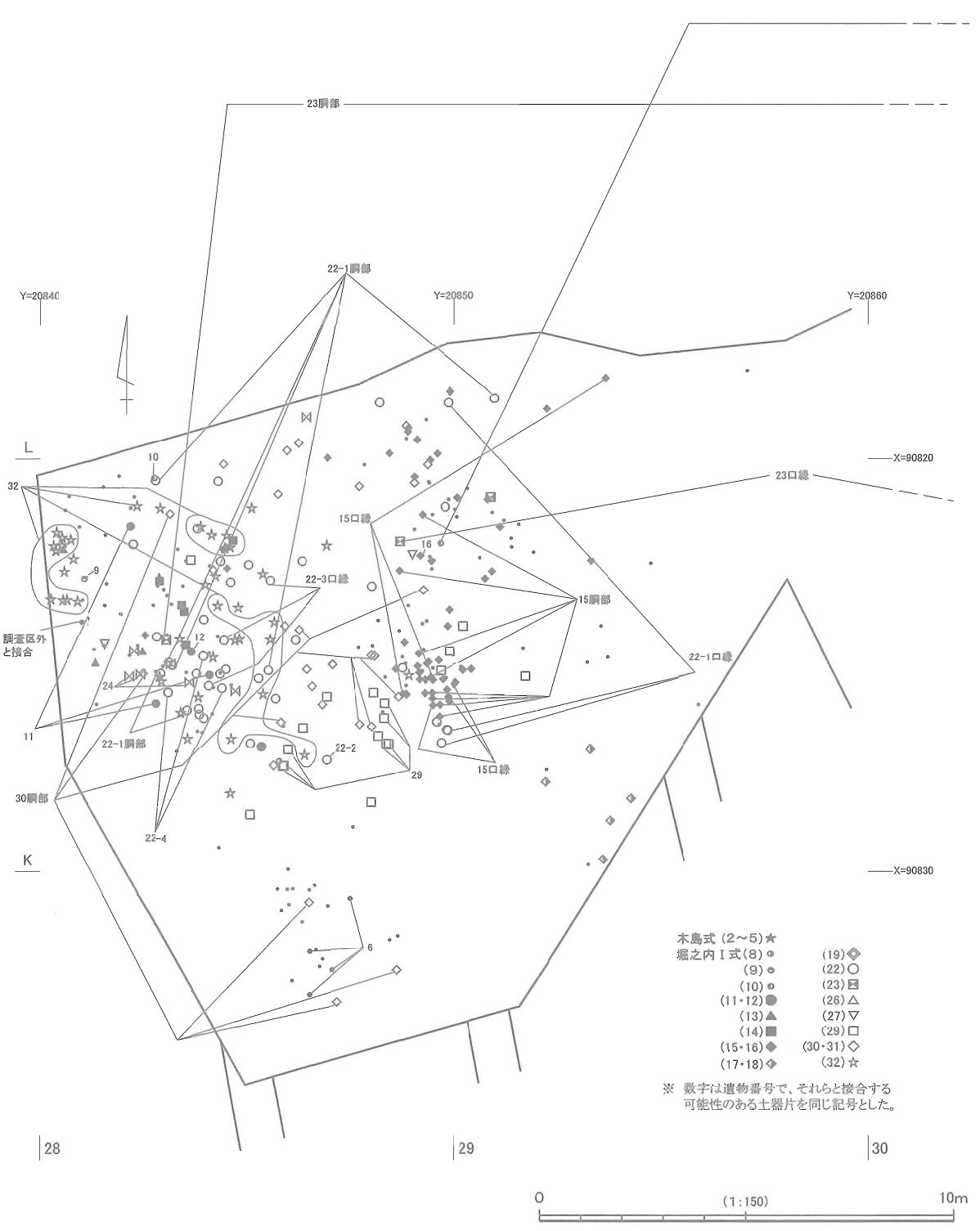
Ⅱ群　縄文時代前期の木島式土器（第81図２～５）

２～５は木島式に特徴的な非常に薄い器壁で、図示したのはすべて口縁部である。２・３は逆ハ字形に開く口縁部で、２・４は口縁端部を直立させ、３は逆ハ字形に開いたままの状態である。４は口縁部内面を外側に向かって押し出し、浮文のように見せている。５はほぼ直立する口縁部で外面に爪形文を施す。

Ⅲ群　縄文時代後期の堀之内式土器（第81図～85図の６～32）

６～21は粗製の土器である。13は平底の底部でそこから逆ハ字形に内湾しながら立ち上がるもので、口縁端部は丸く仕上げられる。外面には縄文を施すのみである。６は口縁部片で、やや内湾する。７～

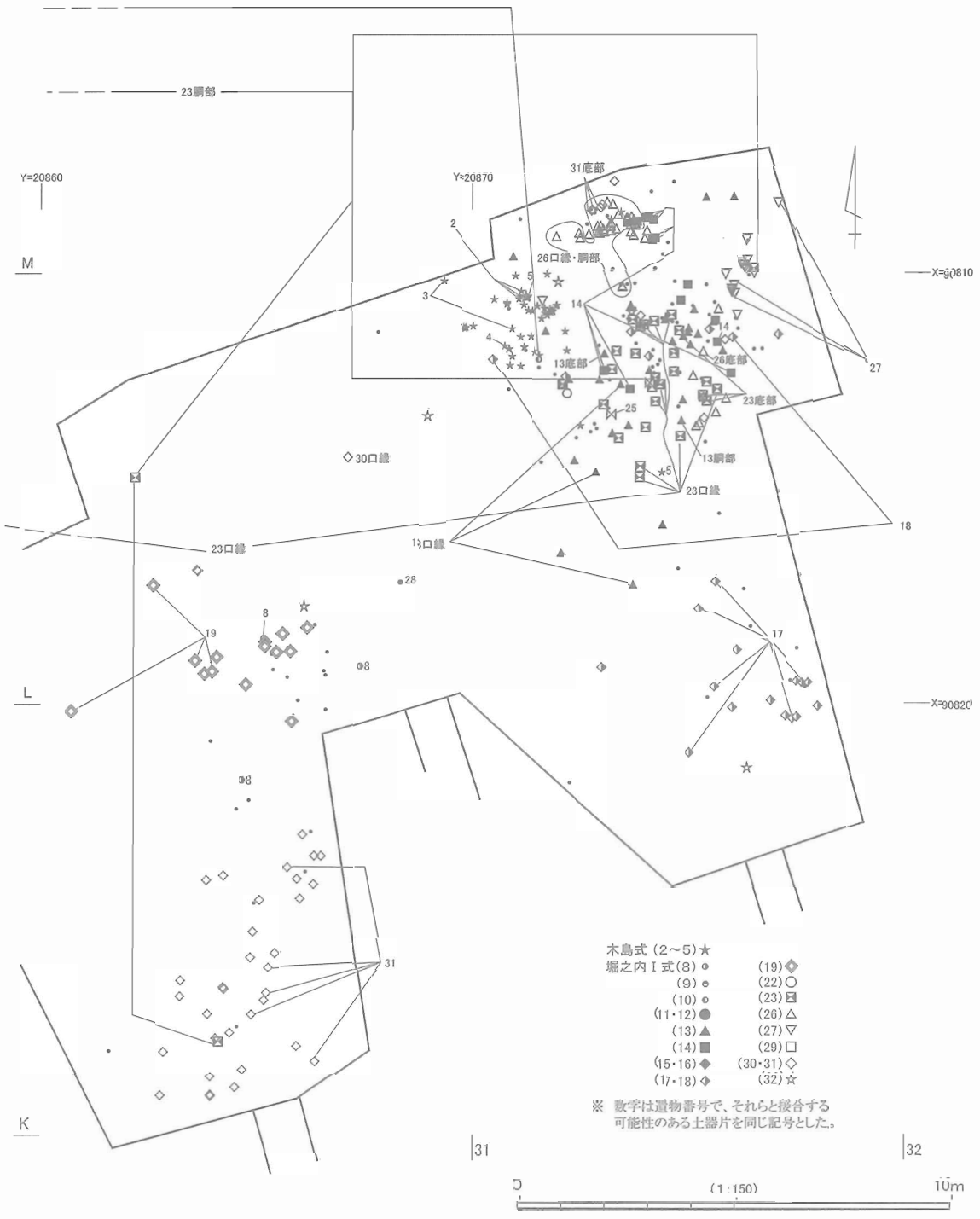
第76図　不動棚遺跡　遺物出土状況図



第77図　不動棚遺跡　土器出土状況詳細図①（西側）

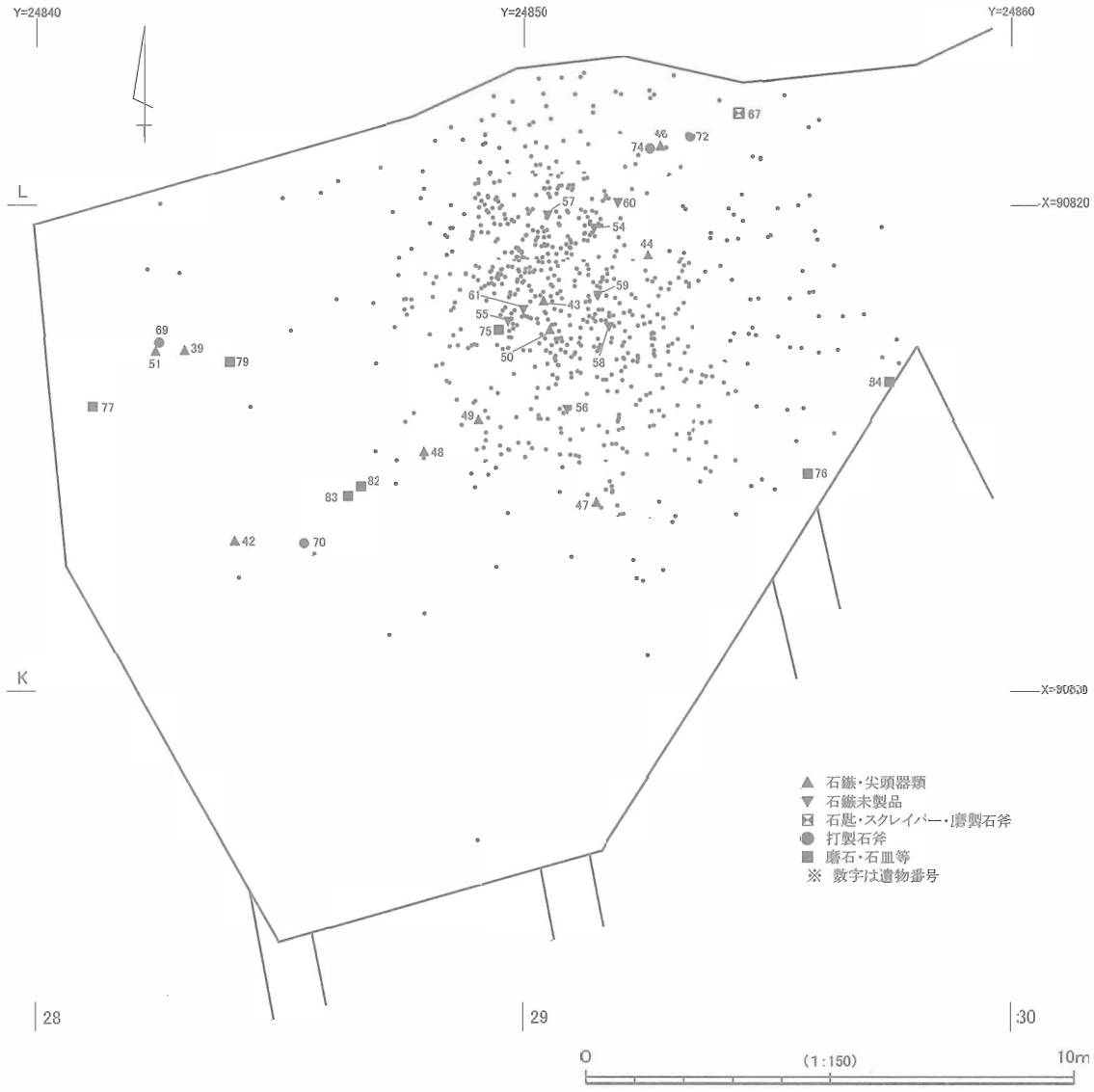
11は口縁部片で、７・８はやや外反する口縁で、端部は丸く仕上げられる。７は外面には横位の沈線、内面は横方向の何らかの調整が行われている。９の口縁端部も丸く仕上げられ、外面には沈線で横位、縦位の文様が施されている。本来は横位の沈線文と渦巻文の可能性がある。

10はやや内湾しながら立ち上がるもので、口縁端部は丸く仕上げられる。半截竹管状工具の腹を用いた横位の沈線（凹線）文、その下位には地文の縄文が施されている。11は、やや逆ハ字形に立ちあがる



第78図　不動棚遺跡　土器出土状況詳細図②（中央・東側）

口縁部で、口唇部は平坦に仕上げられている。外面には縄文を施す。12は11の胴部片の可能性が高く、外面に縄文が施される。14は逆ハ字形に開く胴部から口縁部の破片で、口縁部直下が強く撫でられて窄み、口唇部はやや外側につまみだされたような形状となる。口唇部外面には工具による刻みが行われている。外面には縄文が施されている。15は山形突起が4箇所にみられる波状口縁の深鉢で、胴部中央からやや逆ハ字形に開きながら立ち上がり、口縁部は内湾しながら立ち上がるものである。外面には縄文



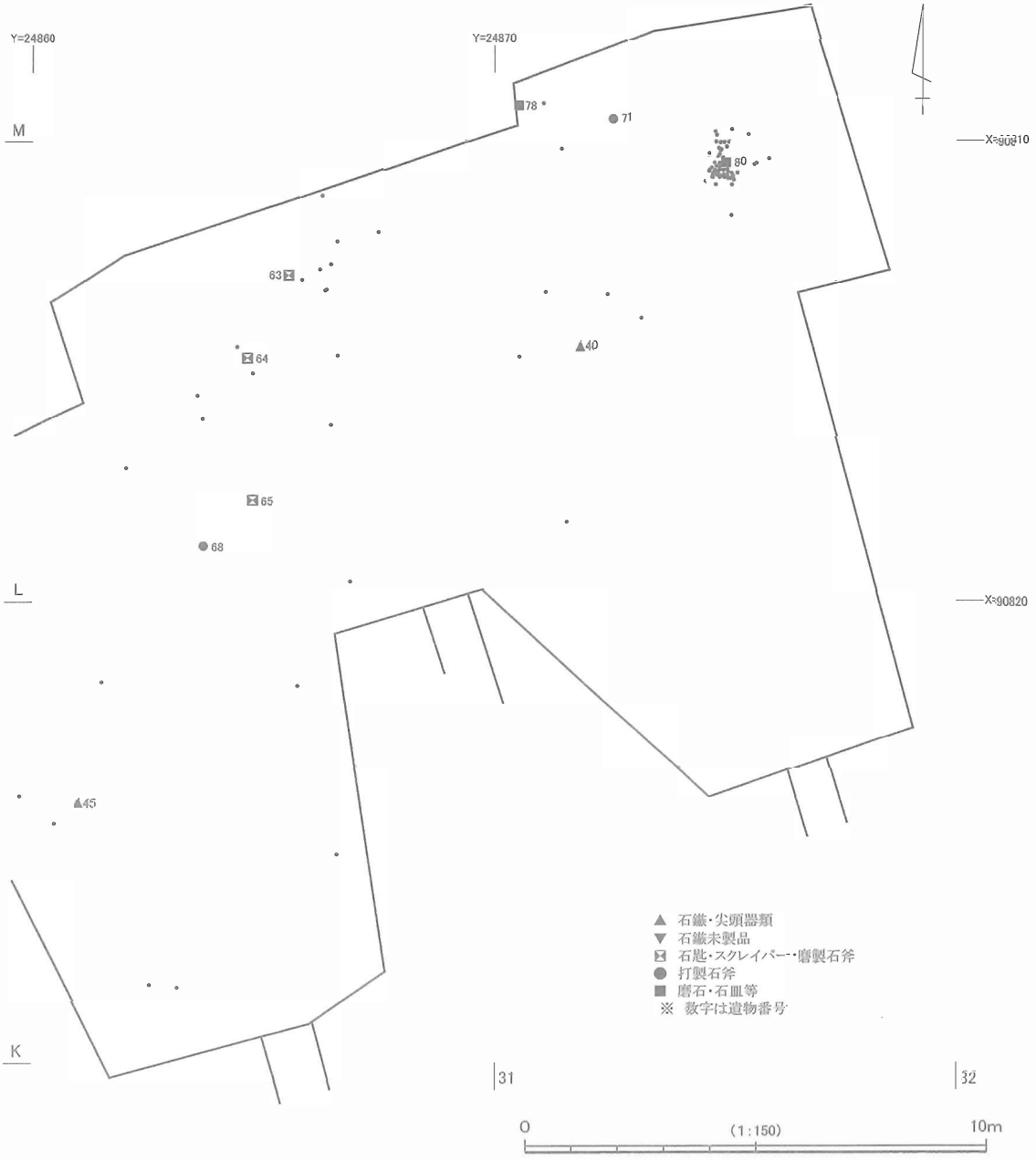
第79図　不動棚遺跡　石器出土状況詳細図①（西側）

が施されている。

16～18は胴部片で外面に縄文が施される。19は胴部の屈曲部片で、底部からほぼ直立して立ち上がった後、胴部中位でく字形に屈曲する。外面には縄文が施されている。20・21は深鉢の胴部片で、沈線文が施されている。

22～32は貼り付け文様や沈線文が施されたものである。

22は内湾しながら立ち上がる胴部からく字形に屈曲し、口縁端部は内側にく字形に屈曲する深鉢で、口縁部には山形突起、杯状突起が付加される。胴部は半截竹管状工具による螺旋文や横位の沈線文を施す。螺旋文の内部は縄文地文を残す。23は平底である。網代痕は確認できない。底部から逆ハ字形に開いた後、胴部下半で内側に屈曲し、ほぼ直立した後、口縁部がく字形に一旦屈曲し、さらに直立する口縁部で波状口縁である。胴部と口縁部の屈曲部分には粘土の貼り付けが行われ円形の刺突文が施されるとともに横位の平行沈線文が巡らされる。その沈線文の下位に渦巻文と斜位の沈線文が施される。渦巻



第80図　不動棚遺跡　石器出土状況詳細図②（中央・東側）

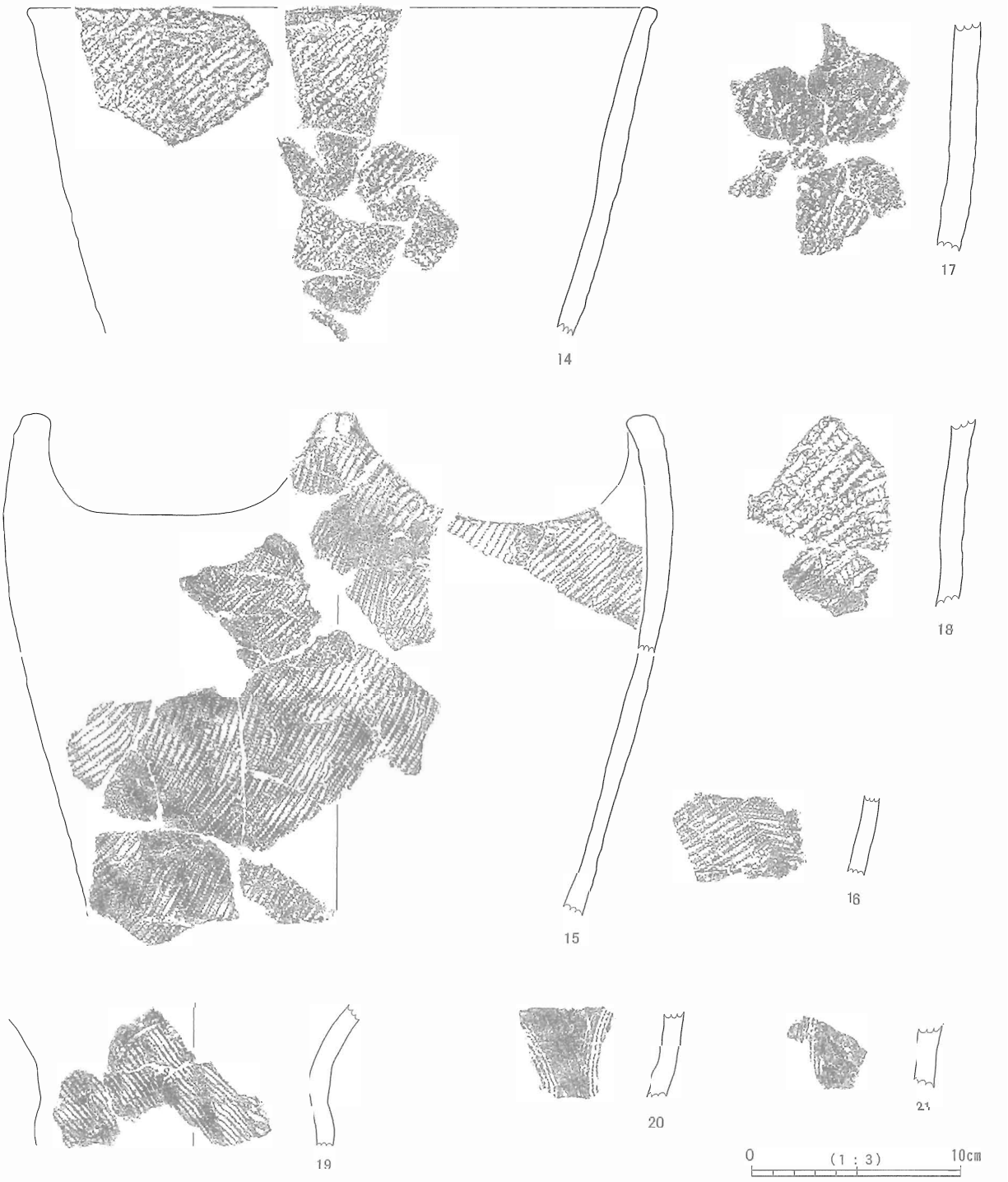
文の内部には縄文地文が残る。口縁部には螺旋状に粘土紐を巻き上げ、その外面に縦位の沈線文を施す部分と、透かし孔をもつ山形突起を貼り付ける部分がある。口縁部外面には沈線による細長い楕円形に囲まれた範囲に刺突が行われる部位と、両端に刺突が行われ、その間に沈線文を施す部分がある。

24・25は深鉢の胴部破片であり、沈線による螺旋文が施されている。螺旋文の内部には縄文地文が残る。

26は平底で網代痕は確認できない。底部から外反しながら立ち上がり、胴部中位で内湾し、胴部は球状を呈する。口縁部は胴部からく字形に急激に屈曲し外反しながら立ち上がる形態で、口縁部には杯状突起と山形突起が交互に都合４箇所貼り付けられる。突起からは渦巻文に向けて縦位に垂下文が一条隆起線により形成され、頸部には貼り付けによる突起が確認できる。頸部には横位の沈線文が巡らされ、その下位に渦巻文、斜位の沈線文を施す。

27は底部から外反しながら立ち上がった後、胴上部でやや内湾し、頸部で外側にく字形に屈曲した後、

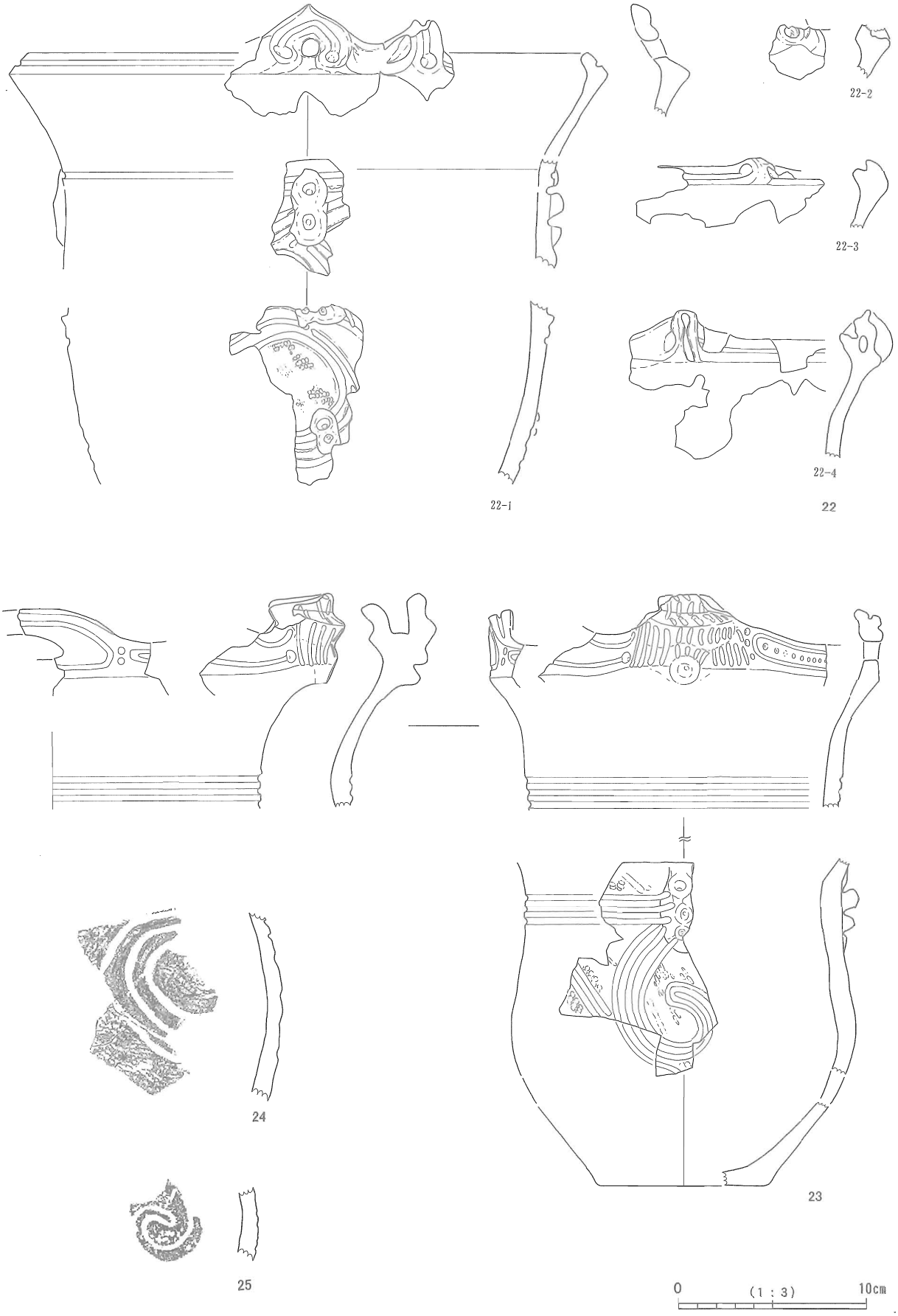
第81図　不動棚遺跡　出土土器実測図①



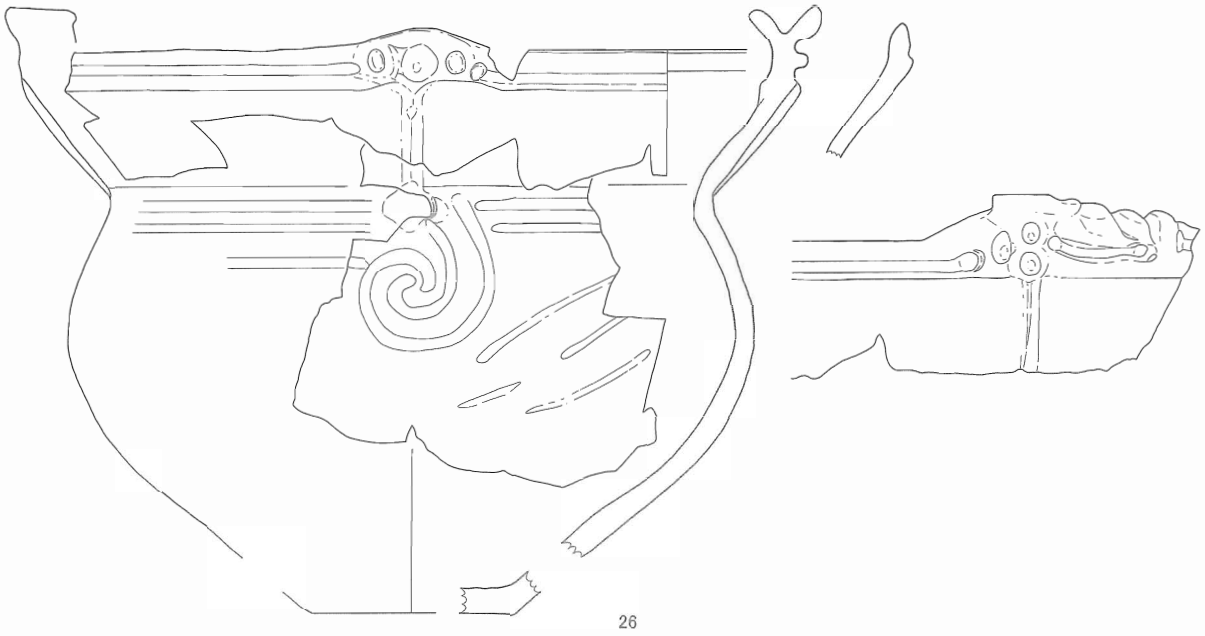
第82図　不動棚遺跡　出土土器実測図②

口縁部が内側に屈曲する形状を呈する。４箇所に突起を貼り付ける。頸部には渦巻文と横位の沈線文を施す。28は、接合関係は見られないが胎土が類似するため同一個体とした。口縁部は逆ハ字形に開き、口縁端部を内側に折り返す。口縁部には４箇所に貼り付け突起が確認できる。胴部には渦巻文が施される。

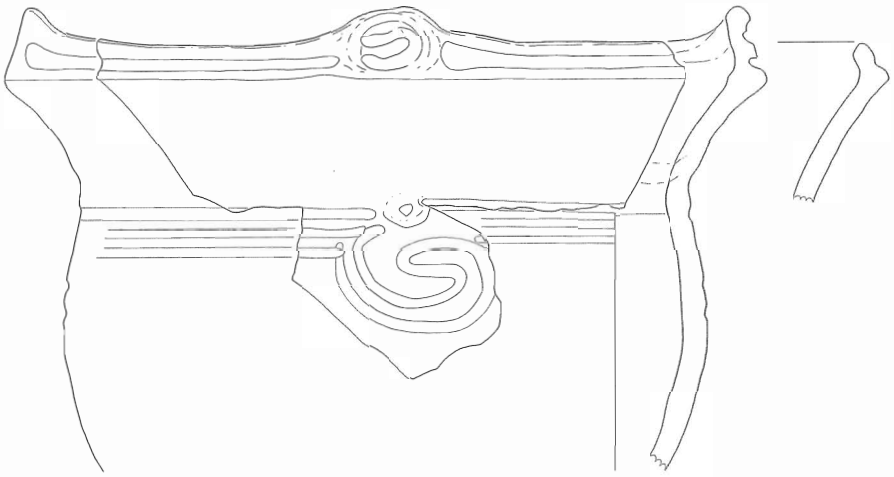
29は逆ハ字形に開く口縁部で、口縁端部はやや肥厚させている。４箇所に貼り付け突起が確認でき、渦巻状に粘土を貼り付け、その中心は貫通し、円孔となっている。30は球形の胴部から頸部でく字形に屈曲し、逆ハ字形に立ち上がる口縁部で、波状口縁である。頸部には横位の沈線文、胴部に渦巻文と横



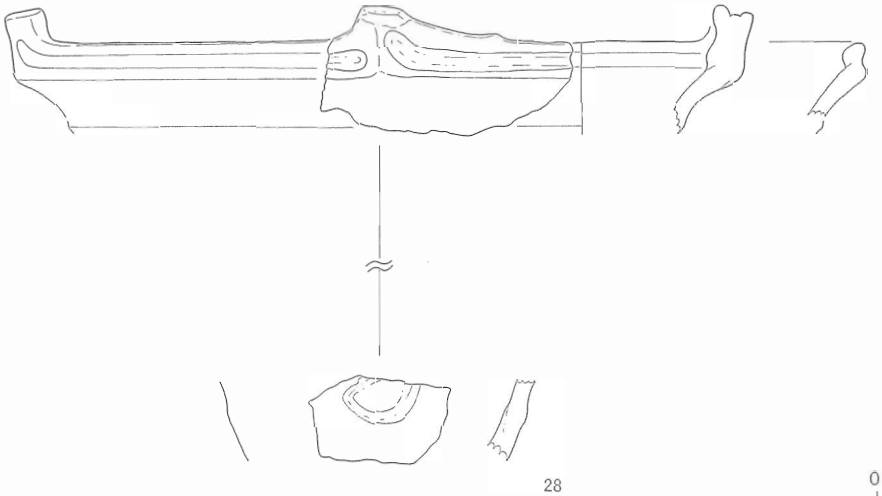
第83図　不動棚遺跡　出土土器実測図③



26



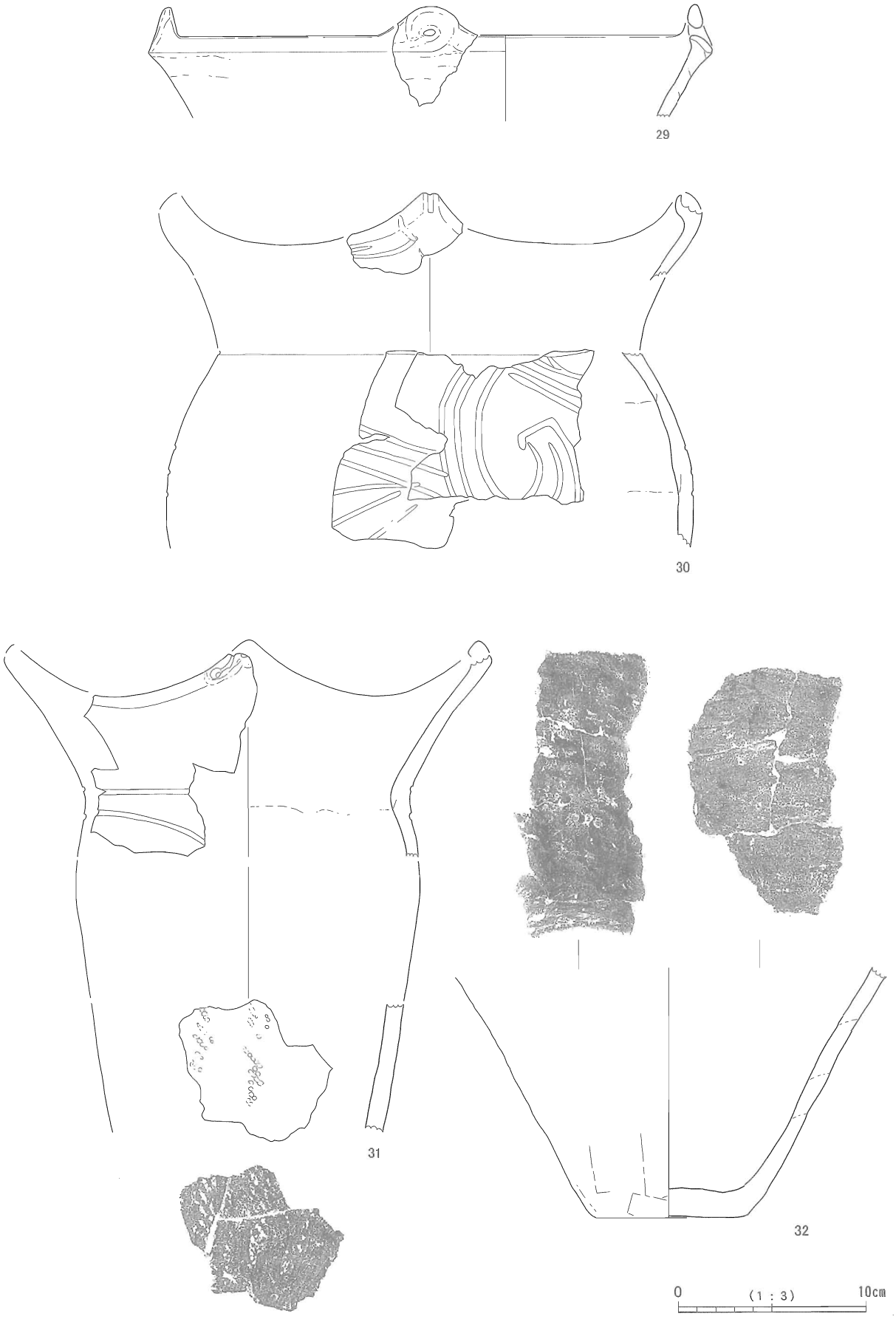
27



28

0　(1：3)　10cm

第84図　不動棚遺跡　出土土器実測図④



第85図　不動棚遺跡　出土土器実測図⑤

位の沈線文を施す。

31は筒状の胴部でやや外反しながら立ち上がった後、胴上部で一旦内湾し、頸部でく字形に強く外反して口縁に至り、口縁端部は内側に屈曲するものである。頸部に横位の沈線一条、斜位の沈線文が施され、胴部下半には縄文地文が残る。32は胴部～底部片で、外面は無紋である。底部は平底で網代痕は確認できない。底部から逆ハ字形に開き、26・27・30のように胴部が球胴に近い形状であると想定する。

（大谷）

（2）石器（第86～91図，第33表，図版60）

石鏃・石鏃未製品　19点図示した（33～51）。大半が脚部を有する資料であるが、そのなかでも足が長いもの（33～36）、足が短いもの（37・38・40・41）、足の付け根の肩が突き出しているもの（39・45・46）など、形状には複数のバリエーションが見られる。また、40は右側縁が加工によって抉れてしまっており、左右非対称な形状をしている。

47・48は平基である。47は裏面の加工が粗く、先端を尖らせようとしていることからドリルの可能性も考えられたが、基部に加工を施していることから石鏃と判断した。48は裏面の一部に素材剥片の面を残している。42～44は基部が折損しており、脚部が確認できない。

42・50は石鏃未製品である。37・49も裏面に未加工な面を大きく残しているが、形状が整っていると判断して、製品とした。42は左側縁が表裏とも、ほぼ未加工の状態で残っている。50は素材剥片の面がほとんど残るが、形状と加工によって縁辺を整えようとしていることから、石鏃未製品と判断した。

石材は46のみがホルンフェルスで、その他はすべて黒曜石である。黒曜石の原産地分析は行っていないが、信州産や神津島産が多く、それに伊豆・箱根産の黒曜石が若干伴うことが、肉眼鑑定から推定できる。

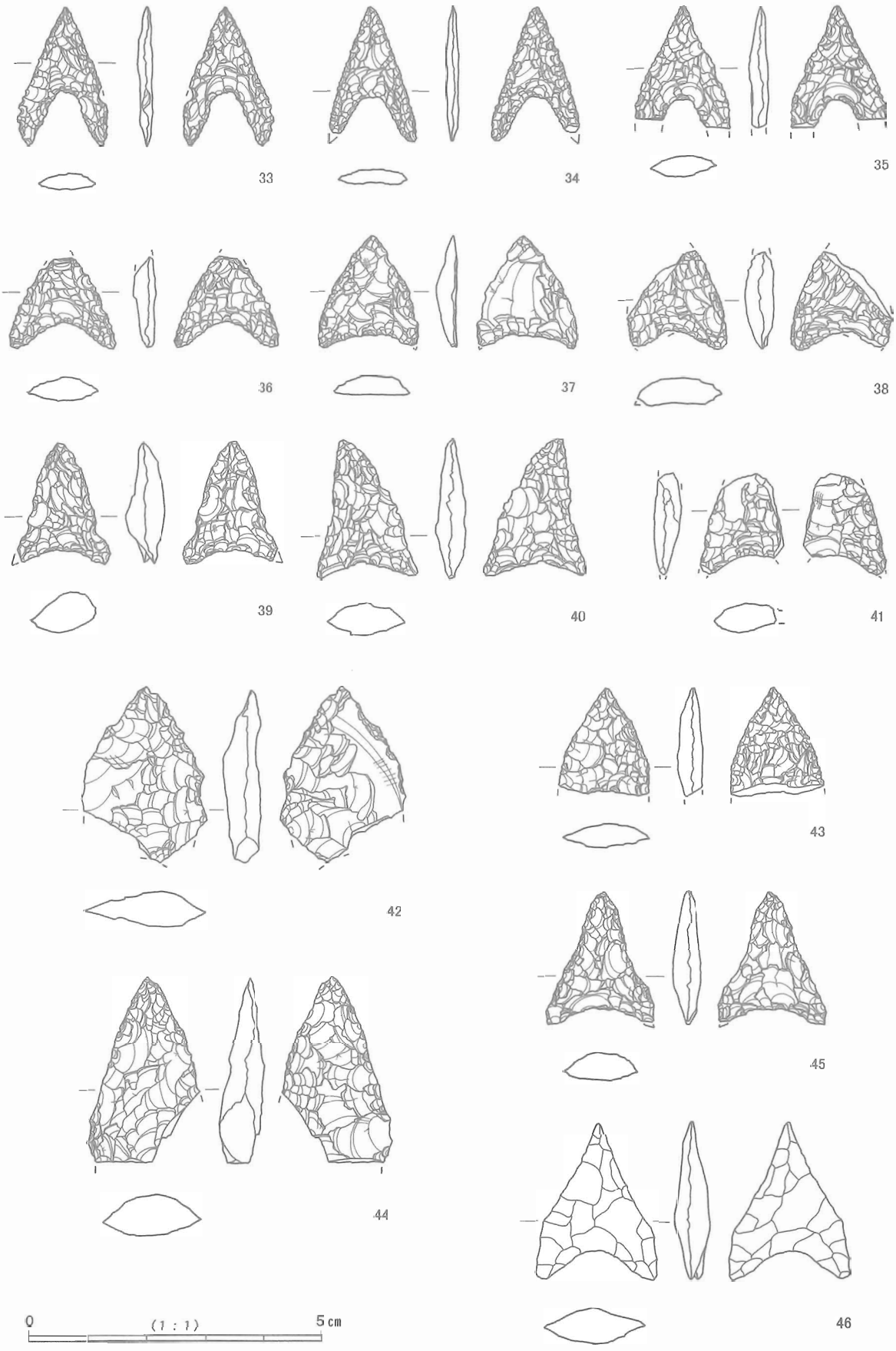
スクレイパー　3点（52～54）図示した。52はエンド・スクレイパーである。表面の下部に加工が確認される。同一箇所に裏面にも加工が確認できることから石鏃未製品である可能性も考えられるが、表面の加工は厚みがあるため刃部と判断し、スクレイパーに分類した。53は縦長剥片を素材としたラウンド・スクレイパーである。右側縁から下部を通って左側縁まで、ほぼ途切れることなく加工が確認できる。加工は素材剥片の背面から施されている。右側縁が細かな加工を一定の大きさで施しているのに対して、左側縁下部は比較的大きく加工を施している。54は平坦な縦長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。左側縁に細かな加工が確認できる。

石材は52、53が黒曜石、54が頁岩である。黒曜石は神津島産、もしくは信州産であることが、肉眼鑑定から推定される。

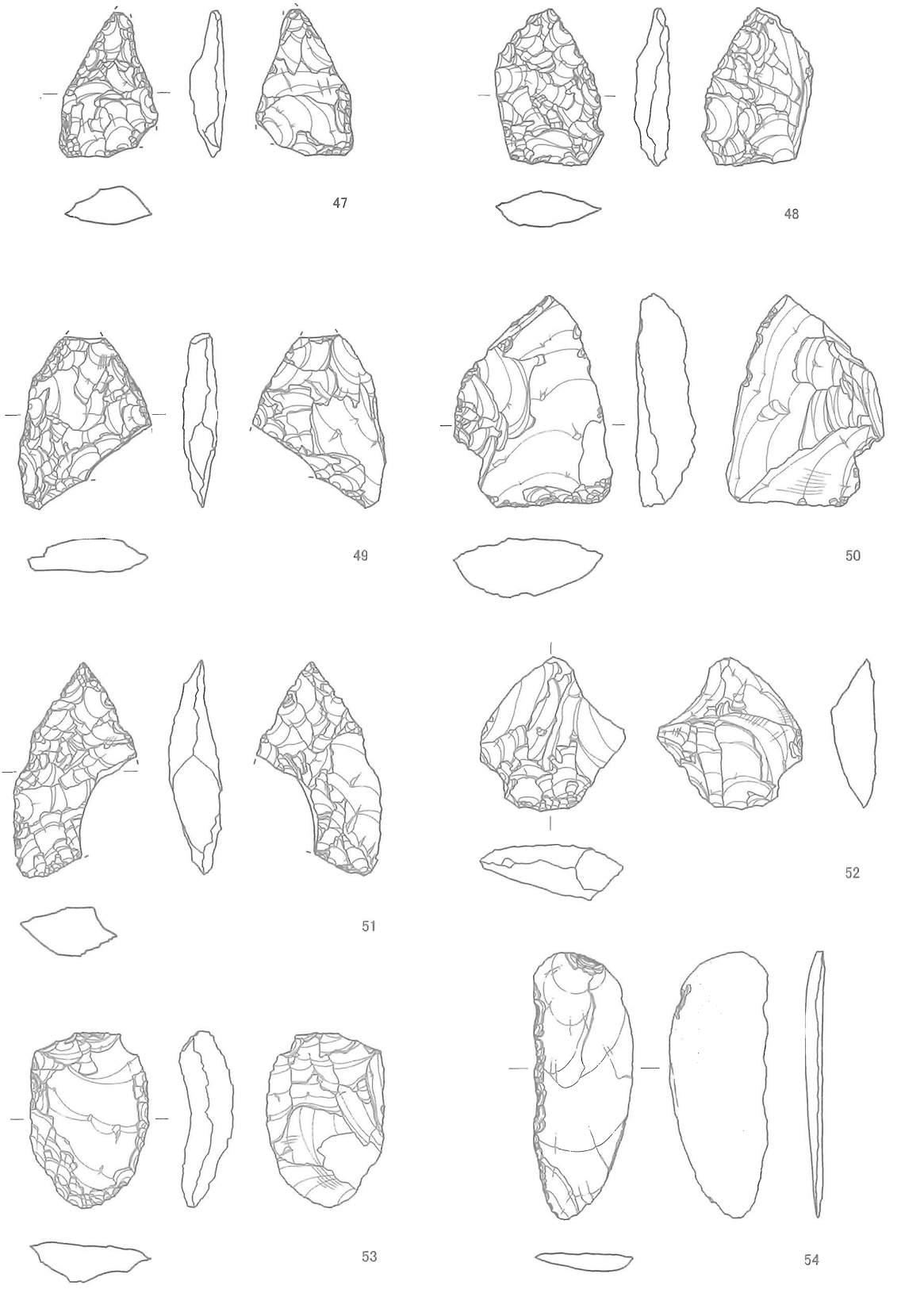
石匙　3点（55～57）図示した。55・56は横型、57は縦型の資料である。55は3点の中で唯一の完形品である。素材剥片の形状を残して縁辺に細かな加工を施している。つまみ部分は大きく剥離を行って作っている。また、つまみ部分は幅が広い。56は上部の大半が折損しており、つまみ部分は確認できない。下縁辺は表裏両面からしっかりと剥離を行っている。57も上部が折損しており、つまみ部分は確認できない。しかし、全体の形状から、小型の資料であることが推測される。

石材は56・57が黒曜石、55がホルンフェルスである。黒曜石は神津島産、もしくは信州産であることが、肉眼鑑定から推定される。

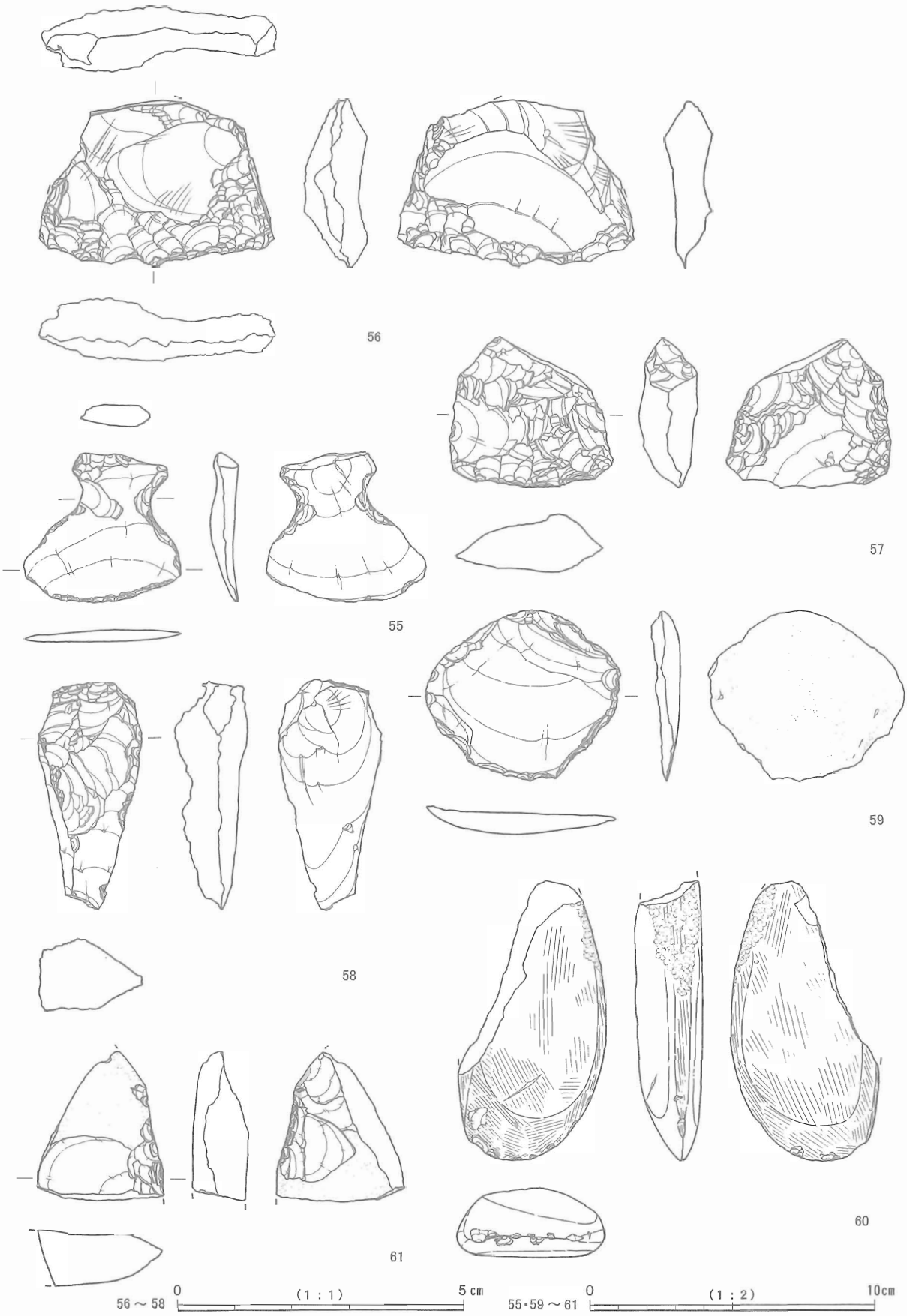
剥片　2点（58・59）図示した。58はやや歪んだ横長剥片である。背面には、左側面を打面に剥離した石核の作業面を大きく有している。また、剥片自体の厚みもあることから、石核の作業面から大きく剥離された作業面再生剥片の可能性も考えられる。右側縁の一部と左側縁に微細な剥離痕が確認される。石材は黒曜石であり、肉眼鑑定から神津島産であると推定される。



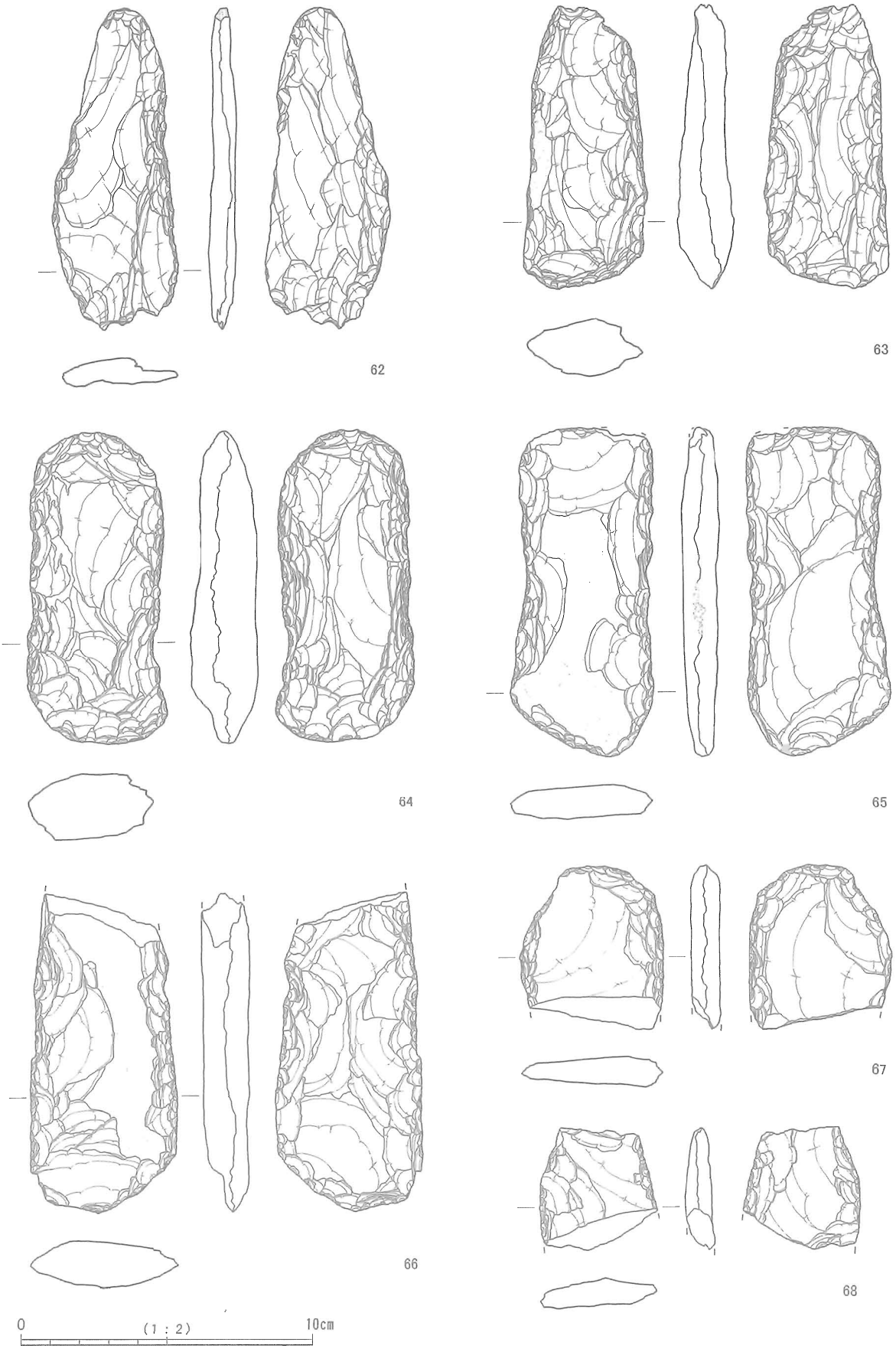
第86図　不動棚遺跡　出土石器実測図①



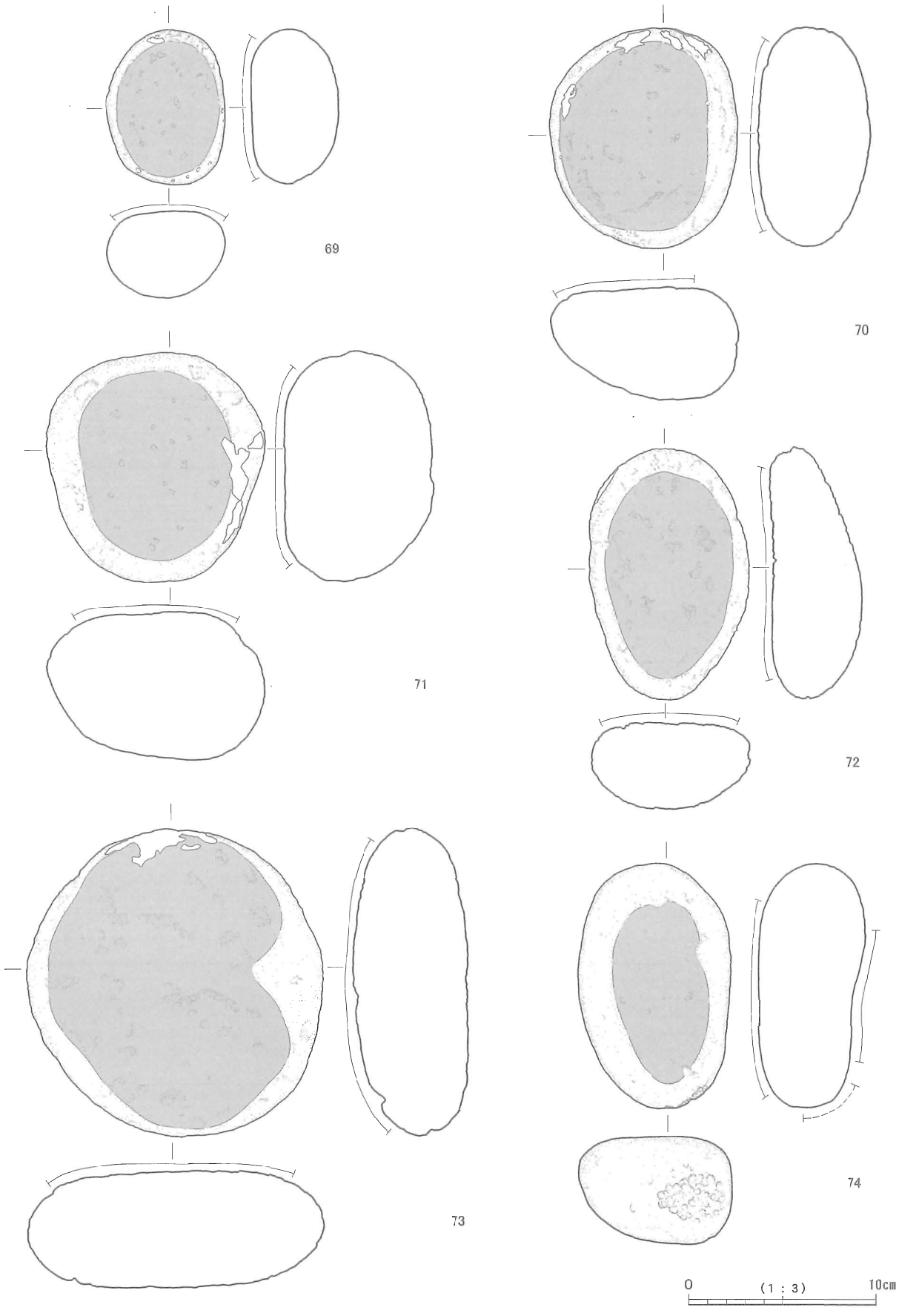
第87図　不動棚遺跡　出土石器実測図②



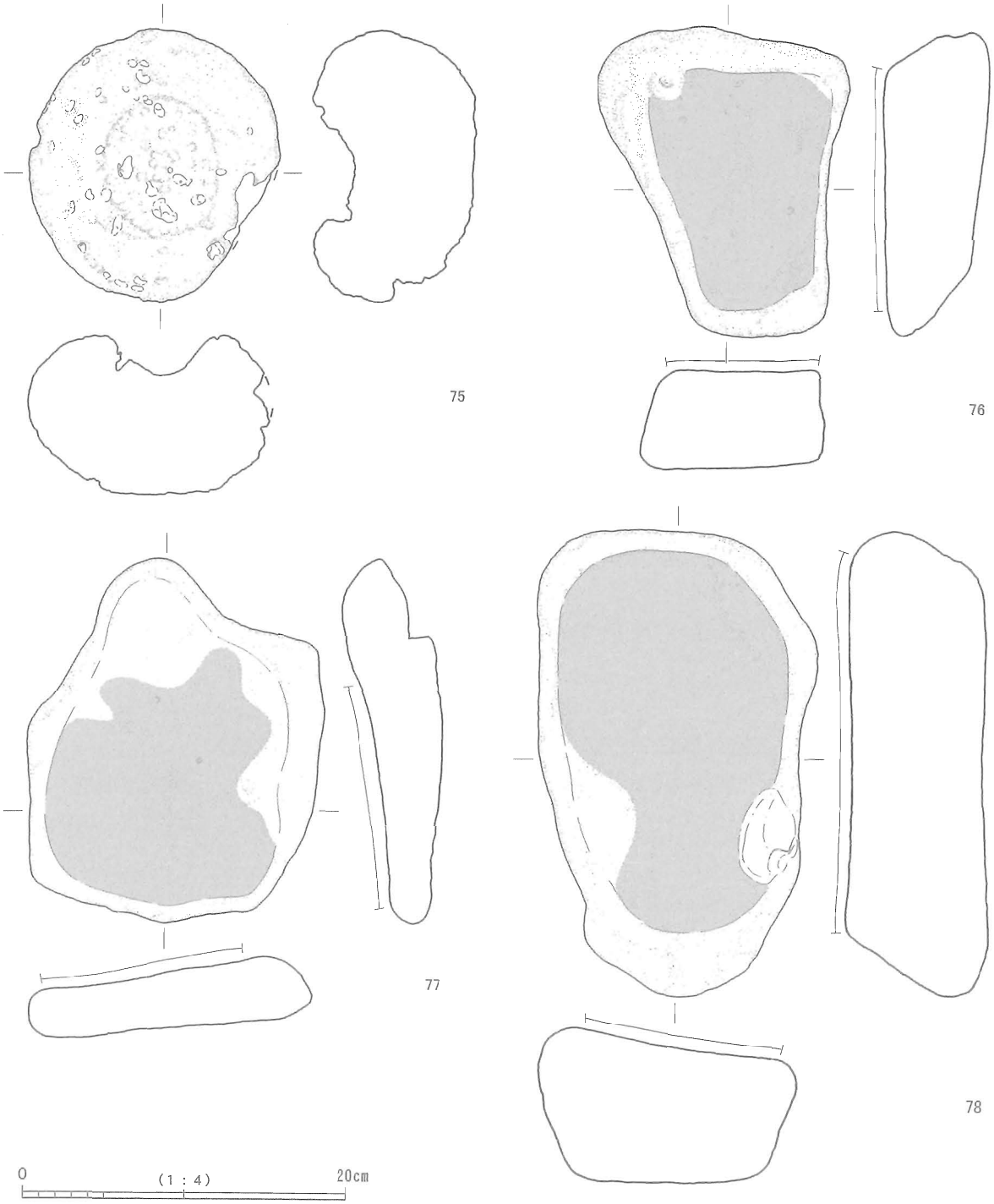
第88図　不動棚遺跡　出土石器実測図③



第89図　不動棚遺跡　出土石器実測図④



第90図　不動棚遺跡　出土石器実測図⑤



第91図　不動棚遺跡　出土石器実測図⑥

59は幅広な剥片である。石材が細粒砂岩であること、礫面を有していることから、打製石斧を製作する際に剥離された剥片であることが推測される。縁辺の一部に微細な剥離痕が確認される。

磨製石斧　１点（60）図示した。上半部は折損している。全体的にしっかりと研磨されており、光沢が確認できる。また、研磨の際に付いたと思われる擦痕が全面に確認され、縦方向のものが多い。刃部には使用時の衝撃痕と思われる剥離が複数確認できる。右側面上部には研磨された面を切るようにして、潰れた面が存在しており、着柄痕であると考えられる。石材は細粒凝灰岩である。

打製石斧　８点（61～68）図示した。折損して全体の形状が不明な61・67・68を除いて、全て短冊形

である。62・67・68を除いて、器体は厚みを持っている。61、63～67は着柄痕と思われる潰れが、縁辺に確認できる。64・65は着柄痕が特に明確である。

62は器体の上部がすぼまった形状をしており、やや撥形に近い形状をしている。また、他と比較して、器体が薄い。67・68は器体の厚さや幅から、同一個体である可能性も考えられる。61は他の資料と比べて厚みがあり、礫面を広く残していることから未製品の可能性も考えられるが、着柄痕が確認できるため、完成品と判断した。石材は頁岩2点、細粒砂岩5点である。

磨敲石・磨石　5点（69～72・74）図示した。71・74は磨敲石である。71は正面に平滑な面を有し、右上・右下・左下の各面に弱い敲打痕を有している。平滑な面には若干の擦痕も確認される。74は棒状に近い亜円礫の両端に敲打痕が確認できる。また、表裏両面には磨面が確認される。石材は輝石安山岩1点、玄武岩1点である。

69・70・72は磨石である。全て円礫を素材としており、69は球状に近い円礫の正面に弱い磨面が確認される。70・72は扁平な円礫の正面に磨面が確認される。72は磨面に使用による湾曲が確認できる。石材は輝石安山岩1点、多孔質安山岩1点、玄武岩1点である。

台石・石皿・凹石　5点（73・75～78）図示した。73は正面中央に弱い敲打の跡と、若干のへこみが確認された。磨敲石である可能性も考えられたが、大きさから台石とした。石材は輝石安山岩である。

76～78は石皿である。全て亜角礫を素材としており、正面に明確なへこみを持った使用面が確認される。石材は全て輝石安山岩である。

75は凹石である。正面中央に大きな凹みが確認できる。石材は多孔質玄武岩であり、元々の穴を利用して作られたと考えられる。（柴田）

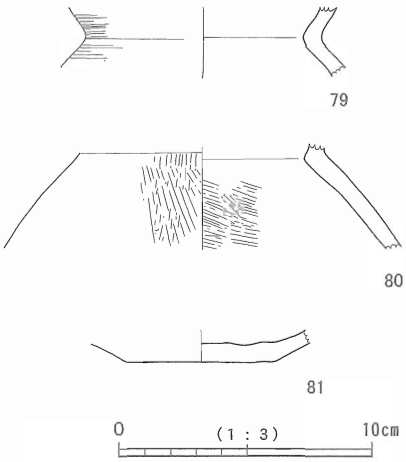
5．古墳時代以降の遺物（第92・93図，第32・34・35表，図版59，写真27）

不動棚遺跡（鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳の表土出土遺物を含む）の調査では、土師器、羽釜、陶器、銅銭、鉄砲玉が出土した。したがって、不動棚遺跡は、縄文時代だけではなく、古墳時代、中世の複合遺跡である可能性が高い。

土師器　土師器壺頸部片2点、壺底部片が1点出土している。81は平底で、外上方に向かって立ち上がる。

羽釜　2点（82・83）が出土した。羽釜は白色系の羽釜で、82の口縁部はほぼ水平の鍔から内上方に向かって立ち上がり、口縁端部内面は折り曲げられ突出する。83は、鍔部分の破片で82とやや異なり、直線的に外上方へ伸びる鍔である。

北村和宏氏の羽釜編年（北村1996）による、Ⅱ-2期、13世紀末～14世紀前半に位置づけられる可能性が高い。



第92図　不動棚遺跡　出土土器実測図（古墳時代）

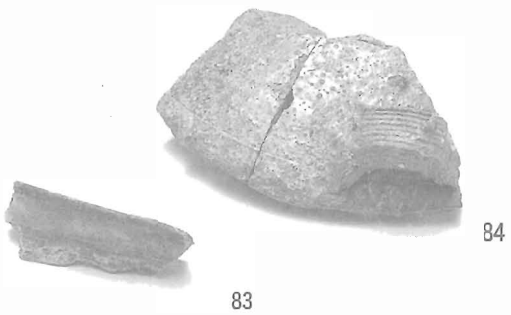
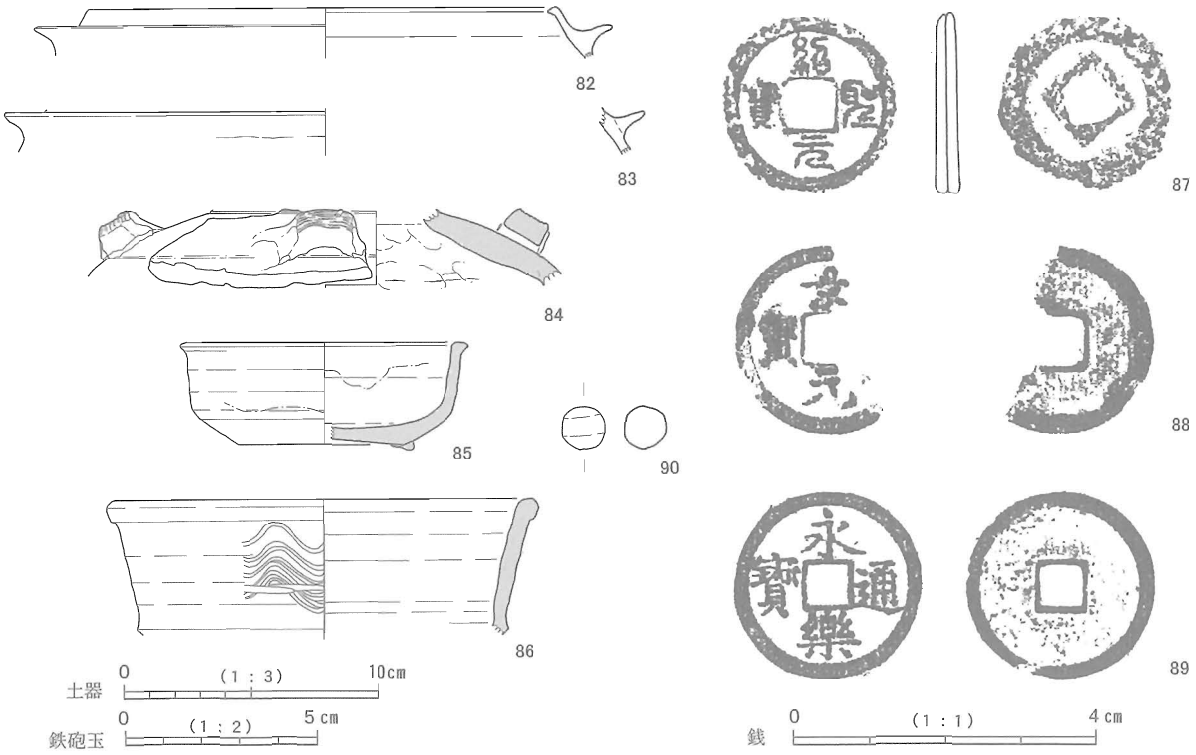


写真27　不動棚遺跡出土遺物



第93図　不動棚遺跡　出土遺物実測図（古代以降）

陶器　香炉、壺甕類、四耳壺が出土した。

香炉（85）は志戸呂産で、口縁端部は上面に水平な面をもち、外側に突出する。江戸時代前期（17世紀）に位置づけられる可能性が高い。

86は壺・甕類の口縁部の可能性が高い。口縁部外面には波状文が施されている。

四耳壺（84）は肩部の破片で耳が１つだけ残存する。詳細な時期は不明確であるが、常滑産である。

このほか図示していないが、不動棚遺跡の範囲内にある間門E-第６号墳の表土中から、中世～近世の常滑甕片22片、知多鉢片２片が出土している。常滑甕片は胎土の特徴などから２個体は存在している可能性がある。

銅銭　「紹聖元寶」（87）、「景□元寶」（88）、「永樂通寶」（89）が１点ずつ出土した。87は２枚重ねであり、もう１枚は錆着しているため不明である。88は「景徳元寶」の可能性が高い。

いずれも中国大陸からの輸入銭で「紹聖元寶」は宋銭で、1094年が初鋳年である。88は「景徳元寶」であれば、宋銭で、1004年が初鋳である。「永樂通寶」は明銭で、1403年が初鋳年である。

鉄砲玉　鉄砲玉（90）は鉛製で、直径約1.1cmである。赤淵川の対岸には後北条氏の「河東十二塁」と推測される（富士市教委1986）夷城跡があることから、それに関連する遺物である可能性が高い。

（大谷）

6．出土遺物観察表

（1）不動棚遺跡出土土器・陶器観察表

第32表　不動棚遺跡　出土土器・陶器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
間門地区出土		72		なし		吊り手土器	胴～底部	－	12.7	－	－	8.0	明赤褐(5YR5/6)	黒褐(10YR3/2)	個人蔵勝坂式
確認調査　Eブロック				1		鉢類	口縁部	－	－	－	(22.0)	－	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR5/2)	押型文
本調査	8層			2		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR6/4)	本島式
				3		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
				4		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
				5		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
			56	6		鉢類	口縁部	－	－	－	(24.0)	－	灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR5/2)	堀之内式
本調査・確認Tr.4	7・8層	81		7		鉢類	口縁部	－	－	(38.0)	(38.0)	－	明黄褐(10YR6/6)	橙(5YR6/6)	
本調査				8		鉢類	口縁部	－	－	(14.8)	(14.8)	－	黒褐(2.5Y3/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	
				9		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	
				10		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
				11		鉢類	口縁部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	
本調査・確認Tr.2・Tr.3				12		深鉢	胴部	－	－	－	－	－	明赤褐(2.5YR5/6)	橙(5YR6/8)	
本調査・確認Tr.8	8層		57	13		深鉢	口縁～底部	10	(39.3)	(30.5)	(31.8)	(8.6)	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	
		82		14		深鉢	口縁～胴部	10	－	(30.0)	(30.0)	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄(2.5YR6/2)	
本調査・確認Tr.2・Tr.3				15		深鉢	口縁～胴部	－	－	(31.8)	(30.5)	－	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	
本調査				16		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
本調査・確認Tr.8			57	17		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	
本調査				18		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
本調査・確認Tr.6				19		鉢類	頸～胴部	－	－	－	－	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
確認Tr.15	6層			20		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	
				21		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	
本調査・確認Tr.3・Tr.4	7・8層	83	58	22		深鉢	口縁～胴部	10	－	(32.0)	(29.8)	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	
本調査・確認Tr.8	8層			23		深鉢	口縁～胴部	15	－	(21.0)	(20.9)	9.2	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
本調査				24		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	
				25		鉢類	胴部	－	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
		84	59	26		浅鉢	口縁～底部	35	－	(32.0)	(32.0)	－	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
				27		鉢類	口縁～胴部	25	－	(30.0)	(28.6)	－	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
確認Tr.7			58	28		深鉢	口縁・胴部	15	－	(27.6)	(27.6)	(8.0)	橙(7.5YR6/6)	暗灰黄(2.5Y5/2)	
本調査		85		29		鉢類	口縁部	8	－	－	(28.6)	－	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
本調査・確認Tr.3	7・8層		59	30		深鉢	口縁～胴部	17	－	－	(28.9)	－	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	
本調査・確認Tr.10				31		深鉢	口縁～胴部	10	－	－	(26.0)	－	明赤褐(5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	
本調査・確認Tr.16	5層			32		深鉢	胴～底部	60	－	－	－	(8.4)	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
本調査	6層	92		79	土師器	壺	頸部	15	－	－	－	－	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	
表採				80		壺	頸～胴部	10	－	－	－	－	にぶい赤褐(5YR5/4)	赤褐(2.5YR4/6)	
本調査	4層			81		壺	底部	20	－	－	－	(5.8)	にぶい赤褐(5YR4/4)	にぶい赤褐(5YR4/4)	
間門E-第6号墳表土		93		82	羽釜		口縁部	10	－	－	(18.5)	－	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	
				83			鍔部	10	－	－	－	－	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/3)	
			59	84	常滑	四耳壺	肩部	20	－	－	－	－	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
間門松沢第1号墳付近表土				85	志戸呂	香炉	口縁～底部	20	－	－	(11.2)	(6.4)	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	
間門E-第6号墳表土			59	86	陶器	壺甕類	口縁部	10	－	－	(16.9)	－	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい赤褐(5YR4/4)	

（　）は復原値

（2）不動棚遺跡出土石器観察表

第33表　不動棚遺跡　出土石器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
Tr.4	8層	86	60	33	石鏃	黒曜石	2.4	1.55	0.28	(0.51)	あり	
本調査	8層			34	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.25	(0.39)	あり	
表採				35	石鏃	黒曜石	2.1	1.62	0.35	(0.73)	あり	
本調査	8層			36	石鏃	黒曜石	1.55	1.8	0.38	(0.66)	あり	
	10層			37	石鏃	黒曜石	1.9	1.7	0.35	(0.72)	あり	
	9層			38	石鏃	黒曜石	1.2	1.7	0.5	(1.05)	あり	
	7層			39	石鏃	黒曜石	2.07	1.6	0.65	(1.22)	あり	
	9層			40	石鏃	黒曜石	2.35	1.75	0.5	1.24	なし	
	10層			41	石鏃	黒曜石	1.65	1.4	0.5	(0.95)	あり	
	7層			42	石鏃未製品	黒曜石	3.0	2.1	0.65	(2.88)	あり	
本調査	9層			43	石鏃	黒曜石	1.85	1.55	0.4	(0.93)	あり	
				44	石鏃	黒曜石	3.2	1.9	7.5	(3.13)	あり	
				45	石鏃	黒曜石	2.3	1.85	0.45	(1.11)	あり	
Tr.17				46	石鏃	ホルンフェルス	2.7	2.05	0.6	2.04	なし	
Tr.12	8層	87		47	石鏃	黒曜石	2.4	1.6	0.6	(1.62)	あり	
本調査				48	石鏃	黒曜石	2.6	1.8	0.6	2.39	なし	
				49	石鏃	黒曜石	2.85	2.2	0.55	(2.88)	あり	
本調査	9層			50	石鏃未製品	黒曜石	3.5	2.6	1.0	7.40	なし	
				51	石鏃	黒曜石	3.6	2.1	0.8	(3.22)	あり	
本調査	8層			52	スクレイパー	黒曜石	2.55	2.4	0.73	3.33	なし	
	10層			53	スクレイパー	黒曜石	2.9	1.95	0.8	4.00	なし	
	8層			54	スクレイパー	頁岩	8.8	3.25	6.5	18.79	なし	
Tr		88		55	石匙	ホルンフェルス	5.2	5.55	1.0	21.07	なし	
Tr.11	15層			56	石匙	黒曜石	2.95	4.2	1.05	10.51	あり	
本調査	8層			57	石匙	黒曜石	2.6	2.88	1.0	6.65	あり	
				58	剥片	黒曜石	3.0	1.8	1.3	6.60	なし	
				59	剥片	細粒砂岩	6.0	6.9	1.0	37.39	なし	
	Eブロック			60	磨製石斧	細粒凝灰岩	9.8	5.2	2.4	(147.68)	あり	
本調査	8層			61	打製石斧	細粒砂岩	5.25	4.45	1.95	(46.76)	あり	
Tr.4		89		62	打製石斧	頁岩	11.1	4.3	0.95	41.54	なし	
				63	打製石斧	頁岩	9.8	4.3	2.0	87.79	なし	
	7層			64	打製石斧	細粒砂岩	10.8	4.8	2.25	149.38	なし	
	8層			65	打製石斧	細粒砂岩	11.3	4.9	1.3	(100.78)	あり	
本調査				66	打製石斧	細粒砂岩	10.9	5.0	1.6	(113.22)	あり	
Tr.6				67	打製石斧	細粒砂岩	5.6	4.9	1.05	(34.28)	あり	
本調査				68	打製石斧	細粒砂岩	4.2	4.0	1.05	(16.71)	あり	
		90		69	磨石	玄武岩	8.5	6.3	4.6	353.00	なし	
Tr.1	9層			70	磨石	輝石安山岩	11.65	10.00	5.90	964.00	なし	
本調査	8層			71	磨敲石	輝石安山岩	12.0	11.6	7.9	1670.00	なし	
				72	磨石	多孔質安山岩	13.35	8.4	4.7	594.00	なし	
				73	台石	輝石安山岩	16.2	15.7	6.1	2150.00	なし	
TP	9層			74	磨敲石	玄武岩	13.0	8.1	5.6	880.00	なし	
Tr.13	7層	91		75	凹石	多孔質玄武岩	17.0	15.6	11.1	(3020.00)	あり	
本調査	8層			76	石皿	輝石安山岩	19.2	15.7	6.2	2980.00	なし	
				77	石皿	輝石安山岩	22.7	18.4	6.3	3065.00	なし	
				78	石皿	輝石安山岩	29.0	17.5	9.5	8000.00	なし	

（ ）は残存値

（3）不動棚遺跡出土銅銭観察表

第34表　不動棚遺跡　出土銅銭観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	銭名	書体	国名	初鋳年	銭径(mm)	内径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
大溝スコリア	93	59	37	銅銭	紹聖元寶	篆書	宋	1094	23.3	18.5	6.3	5.63	2枚
				銅銭					23.3	16.6	6.7		
表土			38	銅銭	景口元寶	行書	宋？	1004？	25.2	20.3	6.3	1.42	景徳元寶か
			89	銅銭	永楽通寶	真書	明	1403	24.9	20.4	5.2	2.13	

（4）不動棚遺跡出土金属製品観察表

第35表　不動棚遺跡　出土鉄砲玉観察表

出土位置	挿図番号	図版番号	遺物番号	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	直径(mm)	備考
大溝スコリア	93	-	90	鉄砲玉	全体	8.04	11.4	鉛製

第4節　不動棚遺跡の評価

遺跡の性格　不動棚遺跡の今回の調査では、包含層からの遺物の出土であり、遺構との関係や遺跡の性格などについて明らかにすることは難しい。縄文土器にも完形に近く復原できる個体も多く、今回の調査地点よりも北側～西側にかけて集落が存在する可能性が高い。

第10章において古墳時代の道路（墓道）について検討するが、現在の県道元吉原・大淵・富士宮線が、古墳時代や戦国期にも主要道であったことを想定しており、不動棚遺跡の北部には峰山遺跡、鵜無ヶ淵遺跡が所在しており、縄文時代においても富士山麓に所在する遺跡を繋ぐ道が存在していた可能性がある。これらの遺跡の存続時期との関連で位置づけを行う必要があるだろう。（大谷）

縄文土器　縄文時代早期の押型文土器、木島式土器が出土している。その後、富士山麓・愛鷹山麓で縄文時代の遺跡が多く確認される前期、中期の土器が出土していない。調査区外では、中期の勝坂式と想定できる土器が出土しており、今後遺跡内で前期・中期の遺構や遺物が確認される可能性が高いが、時期ごとに中心となる地点が遺跡内でやや異なっていた可能性も想定しておくべきであろう。

また、富士山麓・愛鷹山麓（富士市側）で確認されることが少ない縄文時代後期の堀之内式土器が一括して出土している点は興味深い。（大谷）

石器　本遺跡で確認された縄文石器は全て包含層出土であり、時期が推定できるような検出例は確認できなかった。また、時期が特定できる資料も確認されなかったため、土器との対比も困難であった。出土した遺物が、一時期の一括資料であるかどうかについても不明である。

石材は石鏃、石匙に黒曜石が多く用いられており、在地の石材はあまり見られない。黒曜石は神津島産、もしくは信州産が多く用いられていることが、肉眼鑑定から推定される。石斧や礫石器は全て在地の石材が使用されており、付近の川原、もしくは礫層から採取してきたと考えられる。（柴田）

註

1　縄文土器については、沼津市教育委員会　池谷信之氏、小崎　晋氏、原田雄紀氏、当研究所　高橋　岳氏に御教授賜った。

参考文献

参考文献については、第9章末（153・154頁）に記載している。そちらを参照願いたい。

第９章　松坂遺跡

第１節　松坂遺跡の概要

１．松坂遺跡の概要

松坂（まつざか）遺跡は富士市神戸（ごうど）地区に位置する。第二東名建設事業に先立つ確認調査で新たに確認された遺跡である。今回の第二東名建設工事による確認調査箇所は攪乱が著しく、遺跡の広がりは未確定である。

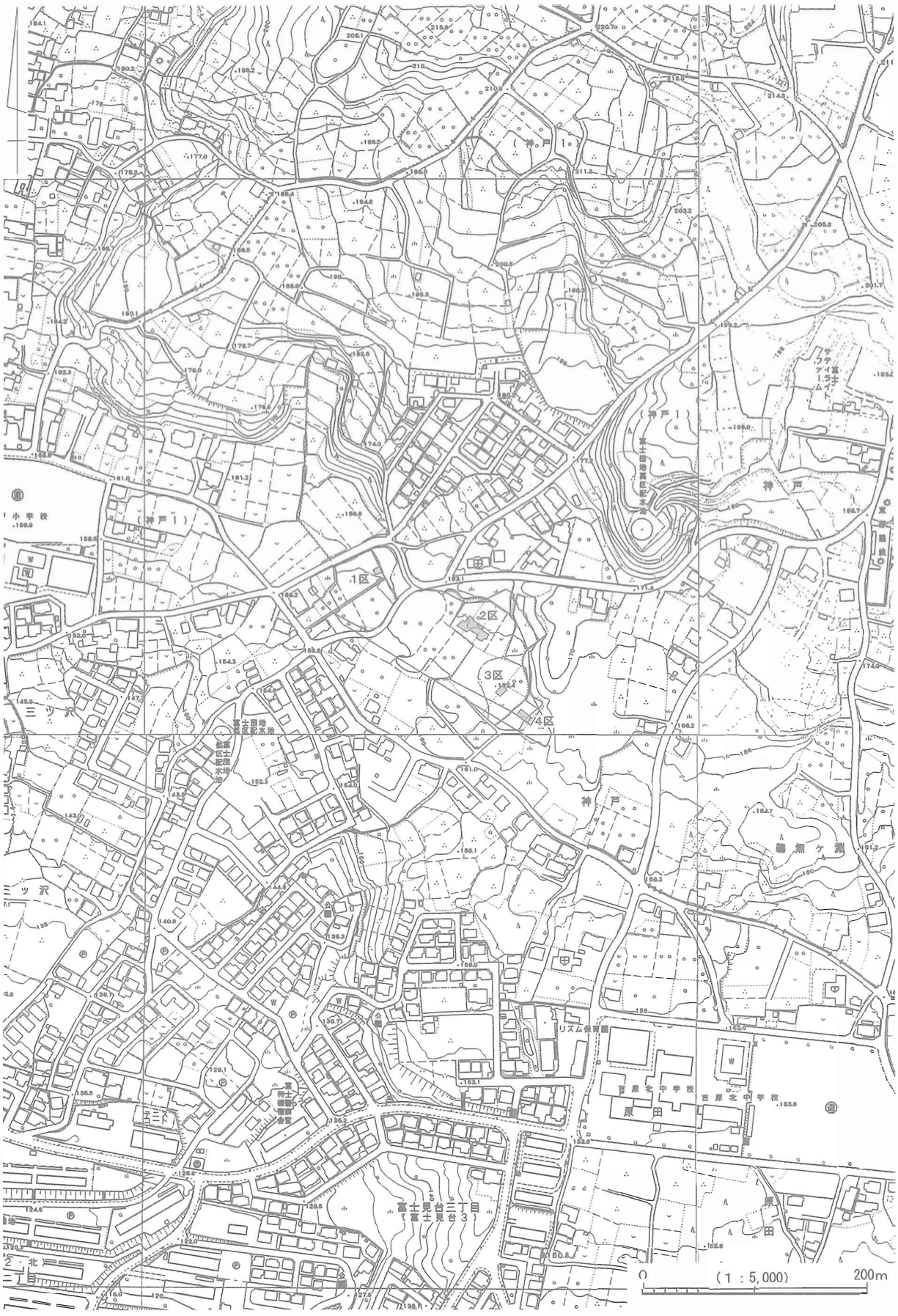
松坂遺跡は、赤淵川の西岸の富士山麓の緩斜面に位置する。東側には不動棚遺跡などが所在するが、それらよりも一段高い丘陵尾根上に立地している。

不動棚遺跡とは１㎞離れておらず、有機的な関係にあった可能性が高い

２．松坂遺跡の調査歴

松坂遺跡は、第二東名建設事業に先立つ確認調査により新たに発見された遺跡であり、静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議により命名された。

したがって、今回の調査が第１次調査である。



第94図　松坂遺跡の調査区の位置

第２節　調査の体制と経過

１．確認調査および本発掘調査の体制

松坂遺跡の発掘調査は、確認調査として本発掘調査まで実施した。当研究所では、第二東名富士工区として調査体制を組んで実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員　鈴木良孝　　調査研究員　三井文洋・高野穂多果

２．確認調査および本発掘調査の経過

調査は、No.53地点確認調査（その２）として本発掘調査まで、平成13年度に実施した。

確認調査　確認調査は、平成13年10月10日から現地詰所の設定を行うとともに試掘溝を設定し、10月12日から重機による表土除去を開始した。表土除去後、人力にて遺構の有無の精査を行った。調査は10月29日まで継続的に実施し、計29箇所の試掘溝の調査を行った。

調査の結果、遺物がやや多く確認される範囲が４箇所確認できたことから、静岡県教育委員会、日本道路公団静岡建設局（当時）と協議し、その範囲を本発掘調査対象とし、確認調査に継続して本発掘調査を実施することとした。

本発掘調査　本調査範囲が決定した10月29日から重機による表土除去を開始し、遺構の検出を行った。確認できた遺構から順次掘削した。調査が進むにつれて遺構は少数であるが、縄文土器などの遺物が複数出土したことから、遺物を残しながら調査を進めた。遺構の掘削が終了した段階で、遺物の出土状況図や遺構図の作成、写真撮影を行った。12月11日に作業を終了し、片付けを行い、本発掘調査を終了した。

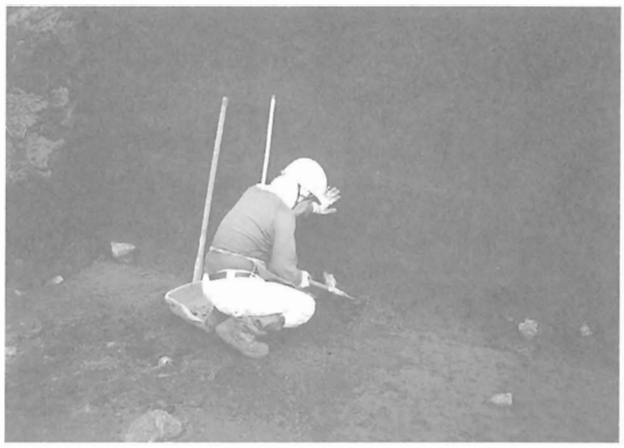


写真28　確認調査の様子

写真29　本発掘調査の包含層掘削作業

３．資料整理・報告書作成、保存処理の経過

資料整理・報告書作成、保存処理の経過は、第２章で記述しているためそちらを参照願いたい。

第３節　松坂遺跡の調査成果

１．調査区の位置と概要

調査区は、確認調査により遺構や遺物が確認された箇所のみを対象として４つの調査区を設定した（第94・96図）。

１区は、吉原小学校の東250m、標高160m付近に位置している。遺構面は157.8m付近である。後述する２区の位置が最も高く、そこから緩やかに下る緩斜面に位置する。

２区は、１区の東南東約100mの丘陵の緩斜面に位置し、南東から北西に向かって張り出す小尾根上に位置する。松坂遺跡の調査区のなかでは最高所に位置し、調査区北西側で標高約172m、最低所の南東側で標高約162mであり、遺構面は標高約170～159mである。

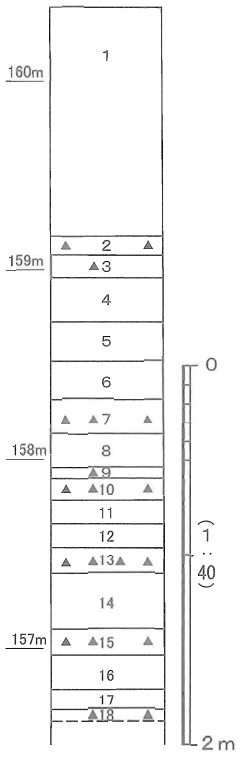
３区は、２区の南東60mの、標高約162mに位置し、２区から下る緩斜面に立地している。遺構面は標高約160mである。

４区は、３区の南東30mの標高約163m付近の丘陵尾根上に立地する。２区から３区へ向かって徐々に下った後、また別の尾根に至る緩斜面に位置する。

したがって、２区と４区の東側に小尾根があり、１・３区は小谷、４区はその斜面に位置するといえようか。また、今後の調査を俟って１～４区までを同一の松坂遺跡としてよいか、あるいは別遺跡として区分したほうがよいか、再検討する必要がある。

２．基本土層

松坂遺跡の基本土層は第95図に示したとおりである。



1 表土

2 大渕スコリア層
径1～2mmの赤褐色スコリアを多く含む。
径5～10mmの赤褐色スコリア（発泡が進んでいる）を大量に含む。

3 大渕スコリア層
径1～2mmの赤褐色スコリアを全体的に含む。
径5mm前後のの赤褐色スコリア（発泡が進んでいる）を大量に含む。

4 褐色スコリア層
径1～5mmの赤褐色スコリアを少なく含む。
径2～3mmの暗褐色スコリアをわずかに含む。

5 褐色スコリア層
径1～5mmの赤褐色スコリアを全体的に少なく含む。

6 褐色スコリア層
径1～10mmの赤褐色スコリアを少なく含む。
径2～3mmの黄褐色スコリアをまばらに含む。

7 褐色スコリア層
径1～10mmの赤褐色スコリアを多く含む。
径2～3mmの暗褐色スコリアを少なく含む。
径2～3mmの黄褐色スコリアを少なく含む。

8 褐色スコリア層
径1～10mmの赤褐色スコリアを全体的に少なく含む。
径2～3mmの黄褐色スコリアをまばらに含む。

9 褐色スコリア層
径2～5mmの赤褐色スコリアを全体的に含む。
径1～3mmの黄褐色スコリアをわずかに含む。

10 褐色スコリア層
径2～5mmの赤褐色スコリアを多く含む。
径1～3mmの黄褐色スコリアを少なく含む。

11 褐色スコリア層
径2～5mmの赤褐色スコリアを少なく含む。
径1～3mmの黄褐色スコリアをわずかに含む。

12 褐色スコリア層
径1mm以下の赤褐色スコリアをまばらに含む。
径2～3mmの赤褐色スコリアをわずかに含む。

13 褐色スコリア層
径1mm以下の赤褐色スコリアを極多に含む。
径2～3mmの赤褐色スコリアをわずかに含む。

14 黒色土層
径1～3mmの赤褐色スコリアをわずかに含む。
径1cmの小石をわずかに含む。
径1mm前後の黄褐色スコリアをわずかに含む。
所々集中してスコリアが混入している。

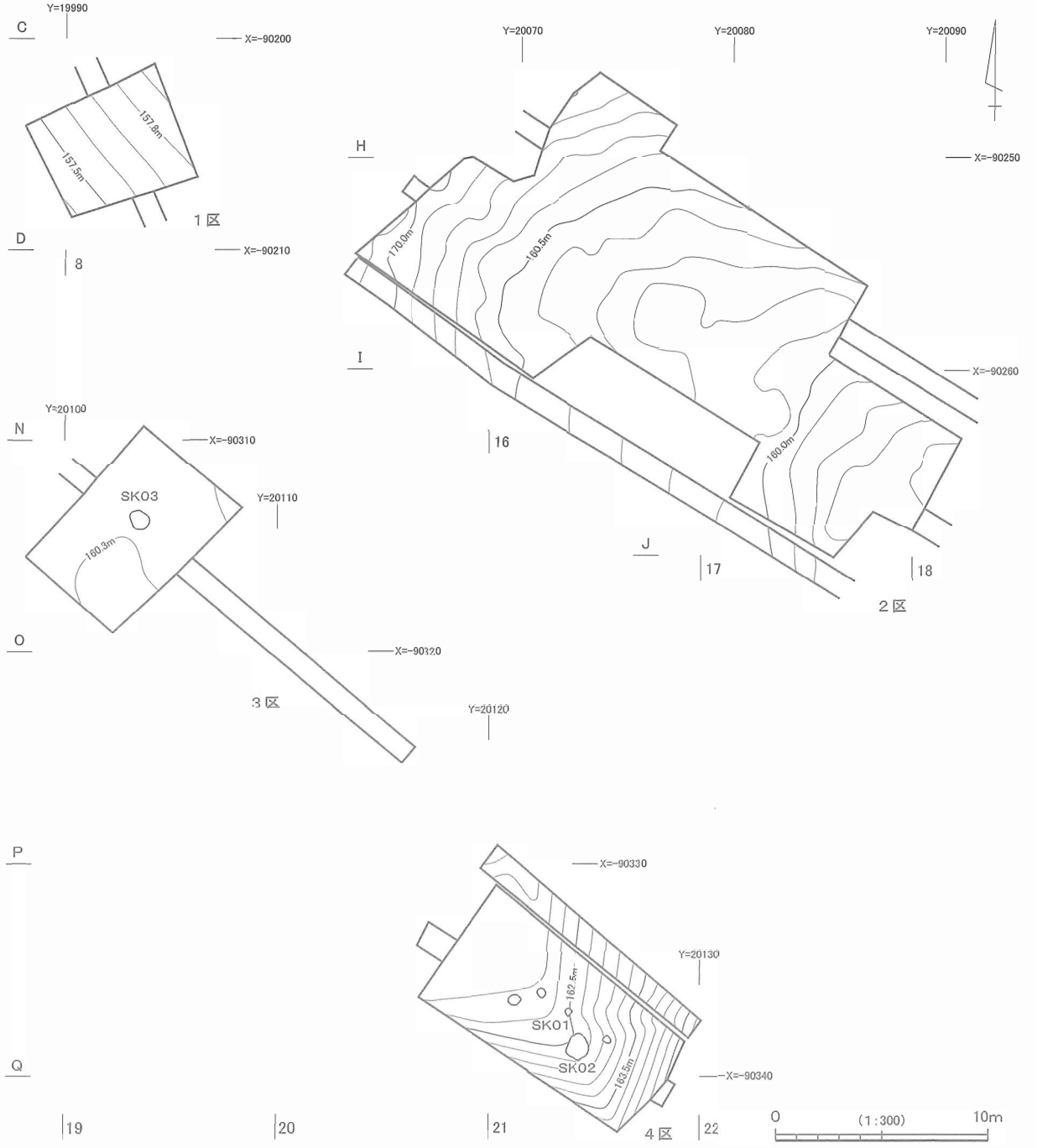
15 黒色土層
径1～3mmの赤褐色スコリアをわずかに含む。
径1cmの小石をわずかに含む。
径1mm前後の黄褐色スコリアをわずかに含む。

16 黒色土層
スコリアをほとんど含まない。

17 漸移層
径2～5mmの赤褐色スコリアを全体的に含む。
径2～3mmの黄褐色スコリアを少なく含む。

18 黄褐色土層
径1～3mmの赤褐色スコリアを全体的に含む。
径5mm前後の赤褐色スコリアをまばらに含む。
径1cmの小石をわずかに含む。

第95図　松坂遺跡　基本土層図



第96図　松坂遺跡　調査区配置図および調査区全体図

Ⅰ層が表土で、耕作が行われている。２・３層が大渕スコリア層、４～13層が褐色スコリア層、14～16層が黒色土層で、18層が黄褐色土層、17層が18層から16層への漸移層である。

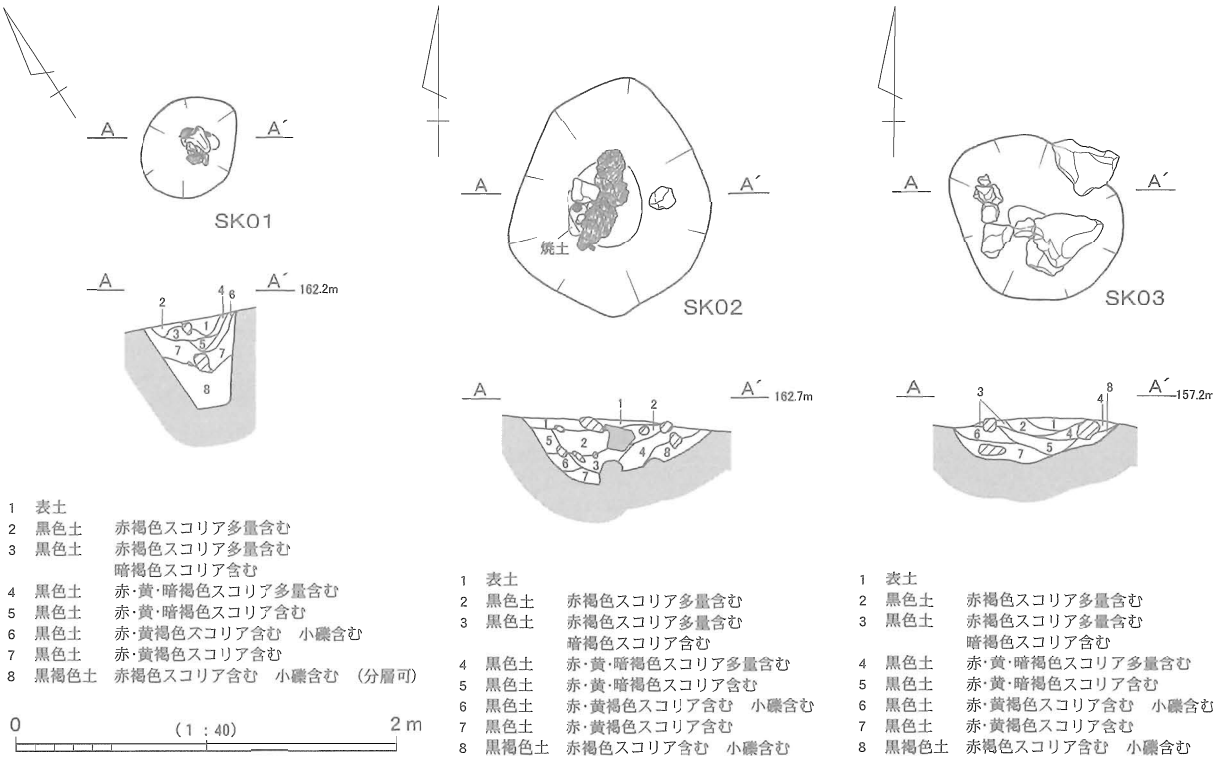
遺物は８層を中心に出土している。

３．縄文時代の遺構

（１）土坑（SK01～03，第97図，図版62）

今回の調査では、遺構としては土坑が３基確認された。

SK01は、４区に位置する。やや扁平な円形の掘方で、大きさは約0.5×0.5mで、検出面から約50cm掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。底面より20cmほど上から被熱を受けた礫が出土した。



第97図　松坂遺跡　遺構実測図

SK02は、４区に位置する。不整形な土坑で、大きさは約1.25×1.05mで、検出面から約35cm掘り込まれている。断面形態は楕形である。内部からは焼土とともに炭化物が出土した。

SK03は、３区に位置する。やや不整形な円形の土坑で、大きさは約0.85×0.9mで、検出面から約25cm掘り込んでいる。内部からは自然礫が出土した。

４．縄文時代の遺物の出土状況（第98～100図，図版61・62）

松坂遺跡では縄文時代の遺物が多数出土しているが、遺構に伴うものはなく、包含層からの出土のみである。第98図には調査区全体の遺物出土状況を石器と土器に区分して示すとともに、第99図に２区の土器と石器の出土状態の詳細図を、第100図に１・３・４区の土器と石器の出土状況の詳細図を示した。

２区　２区では、斜面上位に当たる西側と斜面下位に当たる東側でまとまって出土している。最も多く出土している堀之内式土器は調査区全体的に出土しているが、接合関係は斜面上位に当たる西側で接合関係と、斜面下位に当たる東側部分でのみ確認できる。

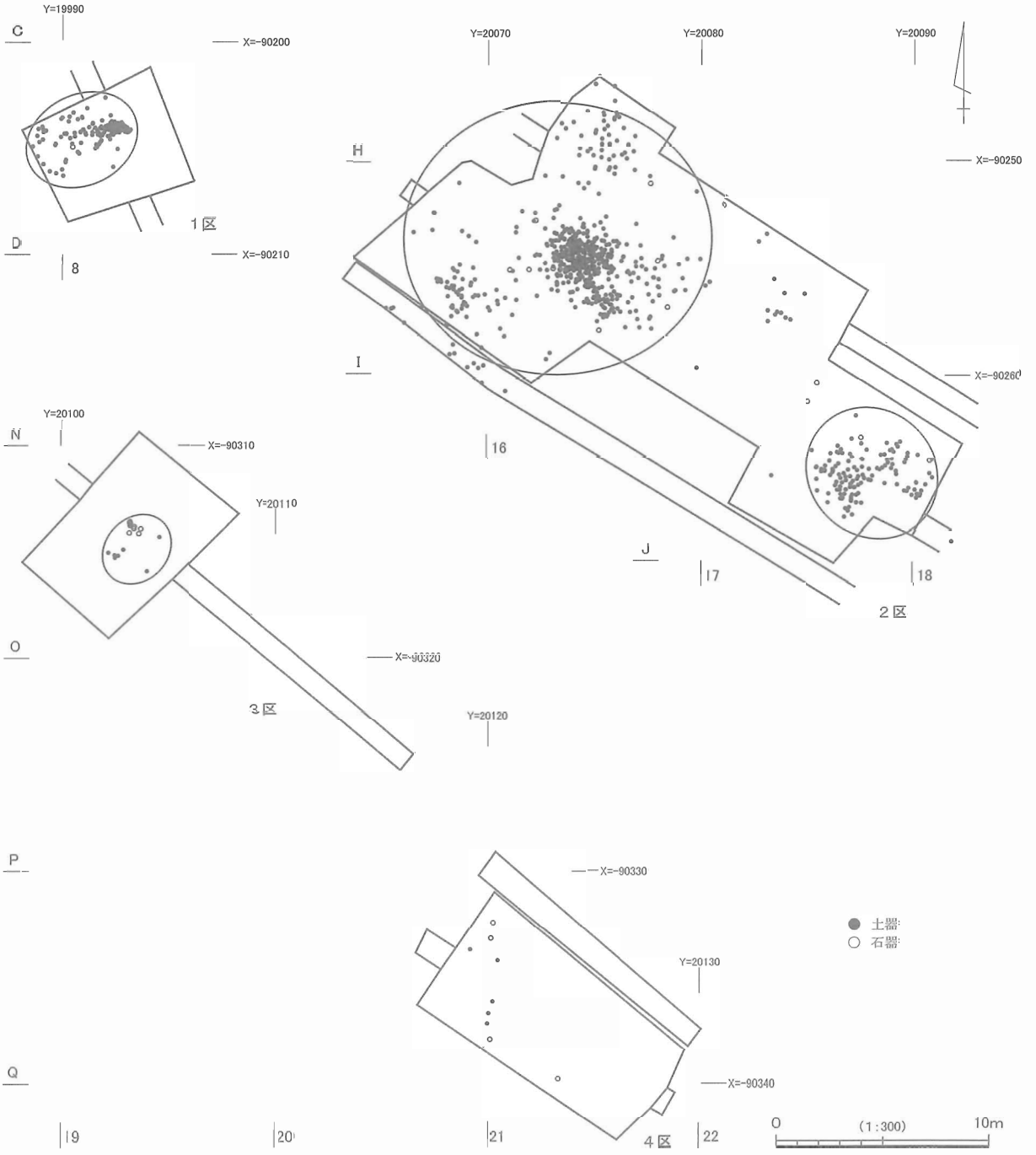
一方、出土量が少ない諸磯式土器は西側・東側で出土している。加曽利Ｂ式土器は２区からは出土していない。

１区　１区では、堀之内式土器と打製石斧のみ出土している。18と同一個体と考えられる破片のほかに、２～６と類似する胎土をもつ土器が出土している。

３区　３区では、堀之内土器（第101・102図４・16）と加曽利Ｂ式土器（第102図14）が出土した。

４区　４区では、諸磯式土器（第102図９～11）と、石鏃（25）、打製石斧（32・34）が出土した。９～11は接合関係にないが、同一個体の可能性が高い。

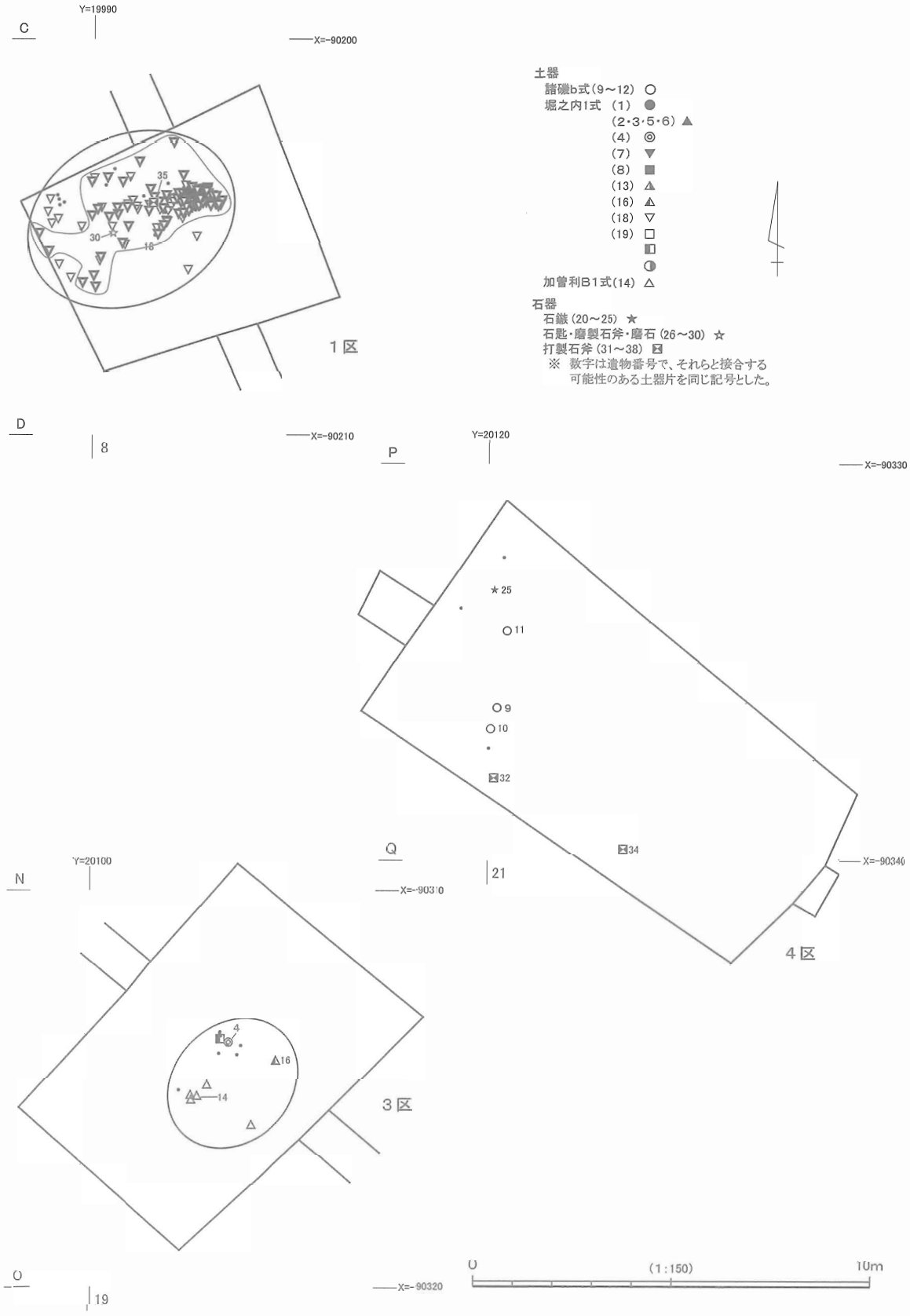
遺物の出土状況からみると、尾根上に近い、２・４区での出土が多く、縄文土器も完形に近く復原できる個体も多いことから、１・２区近くの尾根上に集落が存在する可能性が高い。一方で１・３区は谷



第98図　松坂遺跡　遺物出土状況図

部に当たることから、流れ込みの可能性が高く、その近くの尾根上に集落などがあり、そこから流れ込んだと考えるのが妥当であろう。　(大谷)

第99図　松坂遺跡　遺物出土状況詳細図①（２区）



第100図　松坂遺跡　遺物出土状況詳細図②（1・3・4区）

5．縄文時代の遺物

（1）縄文土器（第101・102図，第36表，図版63・64）

縄文土器は18点を図示した。

Ⅰ群　縄文時代前期後半の諸磯b式土器（9～12）

9は口縁部片で、逆ハ字形に開いた後、口縁端部を直立させるものである。口縁部外面には斜位の沈線文、その上位には横位の沈線文が巡らされる。10～12は胴部破片で、10は横位の沈線文、11は破片の下部と上部に斜位の沈線文、その間に横位の沈線文が施される。11は矢羽状の文様と想定する。12は縦位の沈線文である。

Ⅱ群　縄文時代後期の堀之内1式土器（1～8・13・15～19）

1は平底の深鉢で、網代痕が明瞭に残る。底部からハ字形に開いた後、内湾しながら口縁部に至るもので口縁端部は丸く収められる。外面に縄文が施されている。2～6は胴部片で、1と同様、外面に縄文が施されている。7・8は底部片で、両者ともに網代痕が残る。1のような器形であった可能性が高い。13は深鉢の口縁部破片である。逆ハ字形に開く口縁部で、口縁端部は直立する。山形突起が貼り付けられ、渦巻状の文様が施される。16・17は胴部片で、15は頸部片である。沈線文、縄文が施される。19は底部片である。

18は底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲し直立した後やや外反して立ちあがる深鉢で、口縁端部は丸く仕上げられる。頸部に横位の沈線文、それ以下に退化した渦巻文や縦位の沈線文を施す。

19は深鉢の底部片である。外面は無文である。

Ⅲ群　縄文時代後期の加曽利B1式土器（14）

口縁部片で、やや内湾しながら立ち上がる口縁部で、口唇部には沈線が一条巡らされ、外傾する段になっている。口縁部外面には5状の横位の沈線文を巡らせ、その間には細かい沈線文が施されている。非常に精緻な胎土を用いたものであり、内外面ともに文様が施されない場所は丁寧なミガキ調整が行われている。（大谷）

（2）石器（第103～105図，第37表，図版64）

石鏃　6点（20～25）出土している。全て脚部を持った石鏃である。ただし、22と25は脚部を折損している。20・21・23は脚部の付け根がU字状を呈している。その中でも20・21は器体と比較して脚部が長い。22と25は平基に近く、直線状に近い基部にわずかに脚部が確認できる。全体的にある程度の厚さを有しており、21のような平坦な資料は少ない。石材は全て黒曜石であり、肉眼鑑定から信州系、もしくは神津島産の黒曜石であると推定される。

石匙　3点（26～28）出土している。27は縦長の石匙、26・28は横長の石匙である。27は縦長剥片を26・28は横長剥片をそれぞれ素材としている。27は打面が礫面であり、26は背面が礫面である。3点ともつまみの部分は入念な加工を施して形を作っているが、下側縁の刃部は未加工、もしくは未加工に近い貧弱な加工である。3点全てにそうした特徴を有するため、未製品ではなく未加工状態、もしくは少ない加工で完成品であると推定される。石材は全てホルンフェルスである。

打製石斧　8点（31～38）出土している。全て平坦な剥片を素材としており、縦長剥片（32・36）と横長剥片（31）の両方が素材として用いられている。大きさは10cm以下が大半だが、中には37や38のように17cmを超える大型の資料も見られる。加工は全周に施されているが、器体の中央まで入り込んでいない。そのため、多くの資料に礫面が残されている（31・33・34・37・38）。また、32を除く全てに着柄痕が確認でき、柄に付けて使用されたことが推定される。さらに、刃部には使用によると考えられる

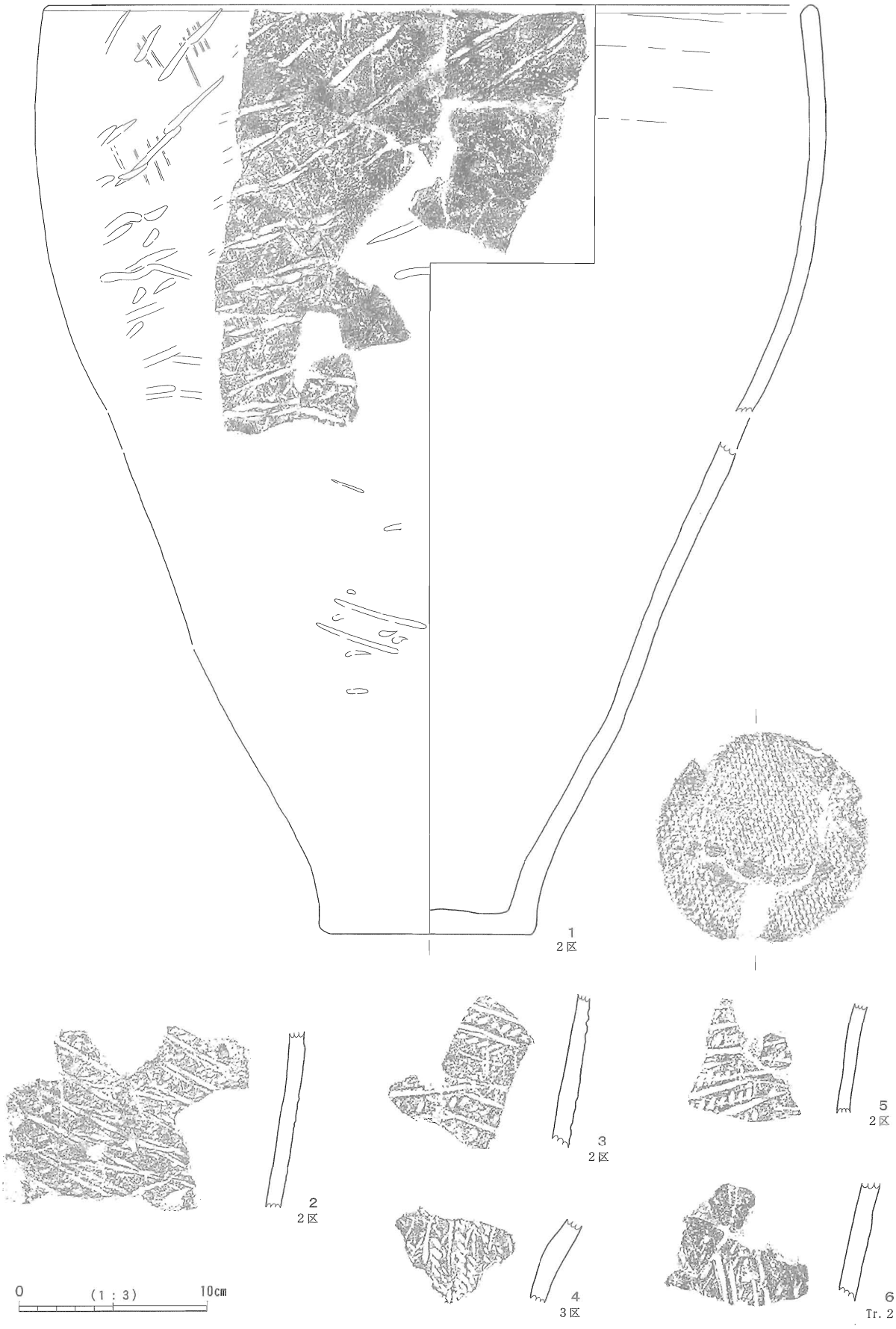
潰れが確認できる。36と37には潰れは確認できないが、この２点はおそらく使用時の衝撃によって刃部が失われており、全ての資料が使用されていたと推定される。

平面形状から短冊形（33～36）と撥形（31・32・37・38）の二種類に分類可能である。短冊形は両側縁が平行になっており、刃部が丸みを帯びている。撥形は両側縁が刃部に近づくにつれて広がっていく。また、刃部は短冊形に比べて直線に近くなっている。石材は頁岩１点、細粒砂岩６点、中粒砂岩１点である。

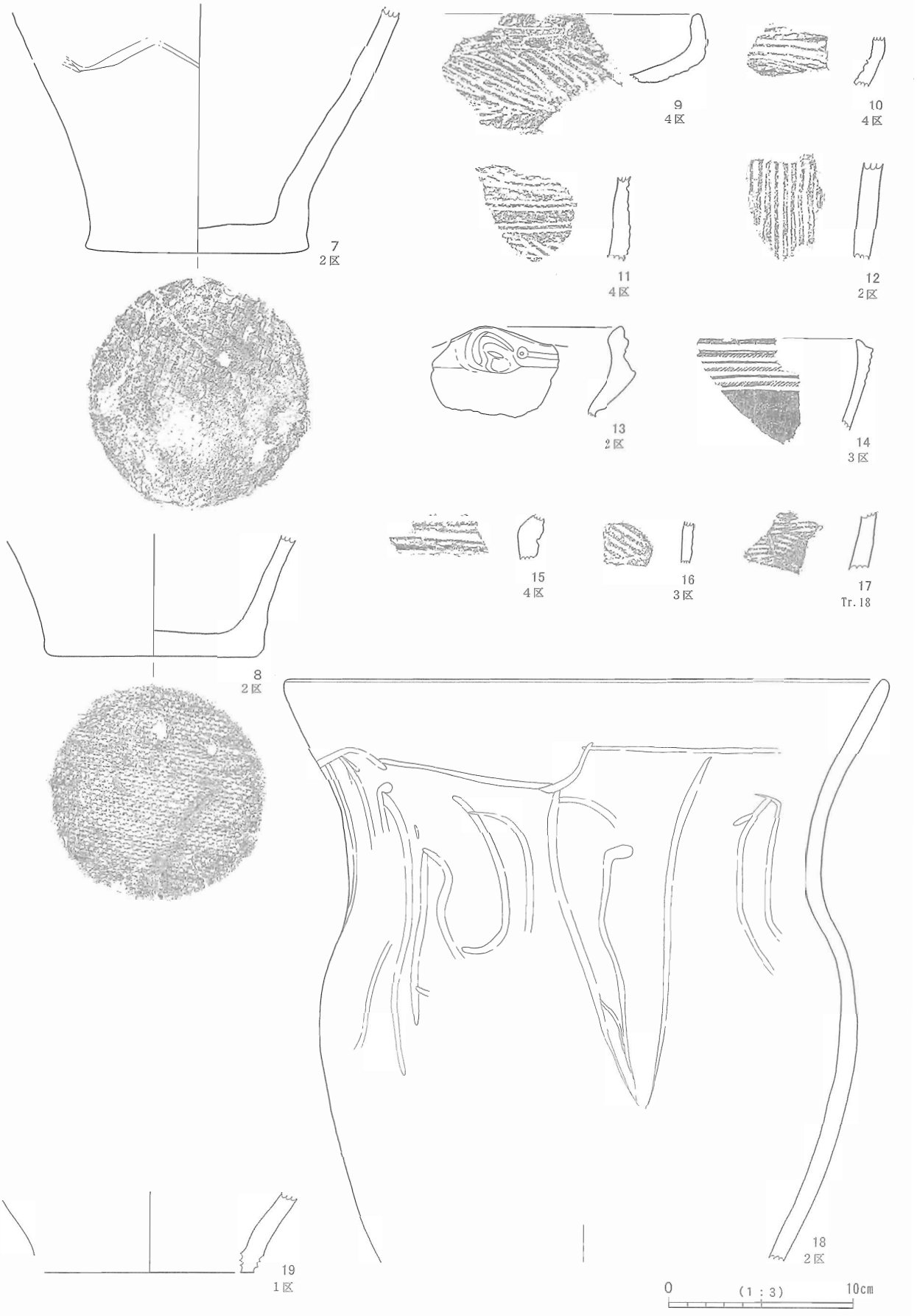
磨製石斧　１点（29）出土している。形状から、小型の定角式磨製石斧の一部であることが推定できるが、折損のため全体の形状は不明である。刃部のある下部が鋭利であるのに対して、側縁部は面状に研磨を施している。刃部を中心に研磨の際についたと考えられる線状痕が多く確認できる。線状痕の方向は刃部付近では一定方向であるが、それ以外は複数の方向を向いている。

石材は蛇紋岩である。全体的に濃い緑色をしており、所々に黒色の線がマーブル状に入っている。割れ面は片理が顕著ではなく、弱い光沢を持っている。遺物の重量は15.09g、体積に相当する水の重さ5.46g、そこから導き出される比重値は2.76であった。

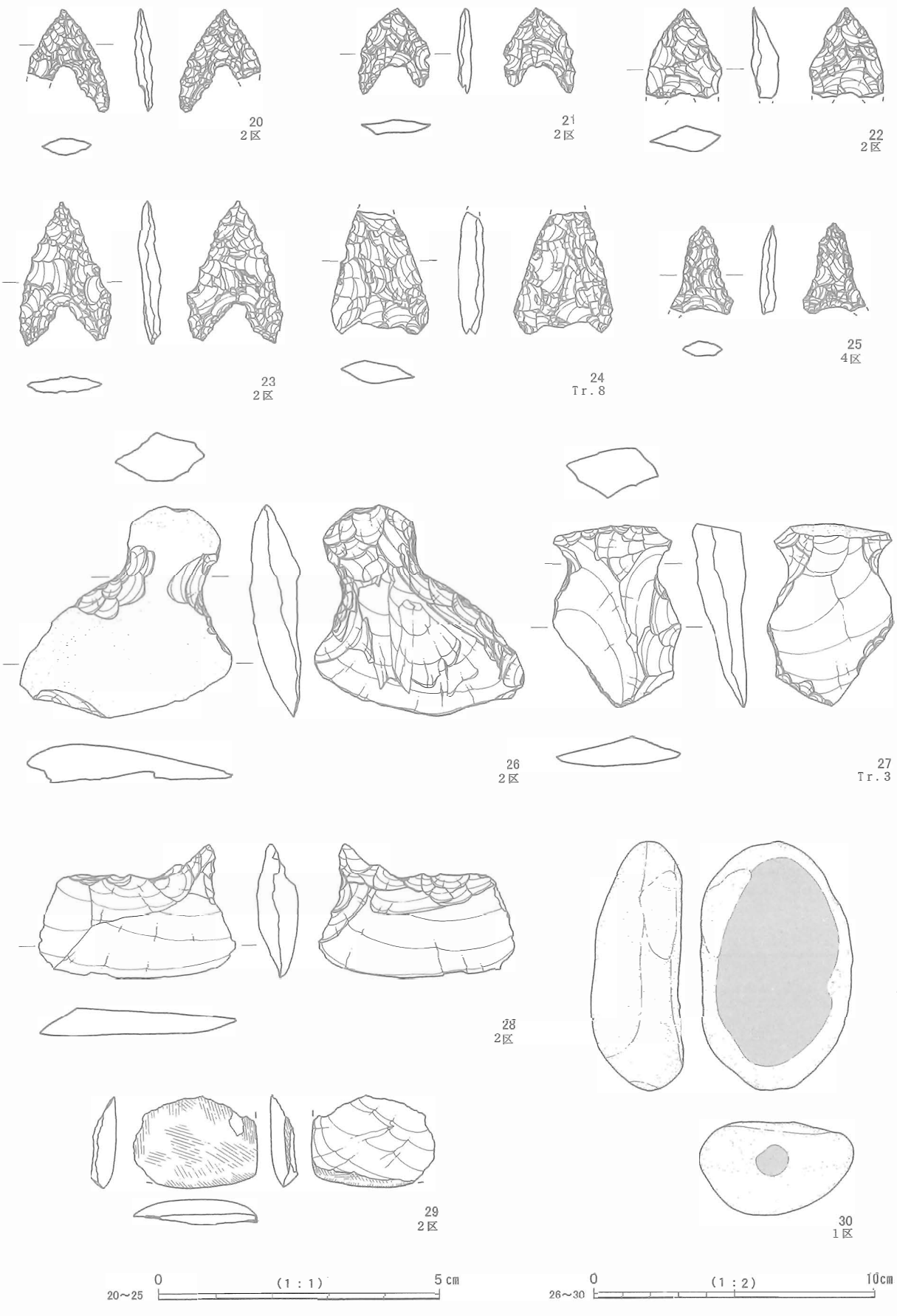
磨石　１点（30）出土している。平面形状が楕円形をした円礫を素材としている。下端部と裏面に磨り面を有している。下端部の磨り面は狭いが、平滑になっている。弱く被熱しており所々にスス状の黒色付着物が確認できるが、風化は激しくない。石材は輝石安山岩を使用している。　（柴田）



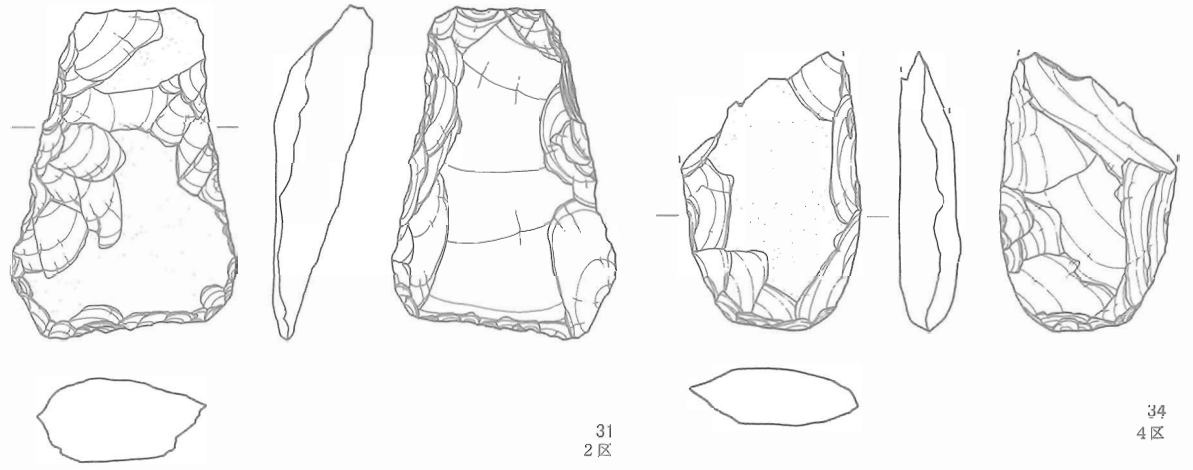
第101図　松坂遺跡　出土土器実測図①



第102図　松坂遺跡　出土土器実測図②

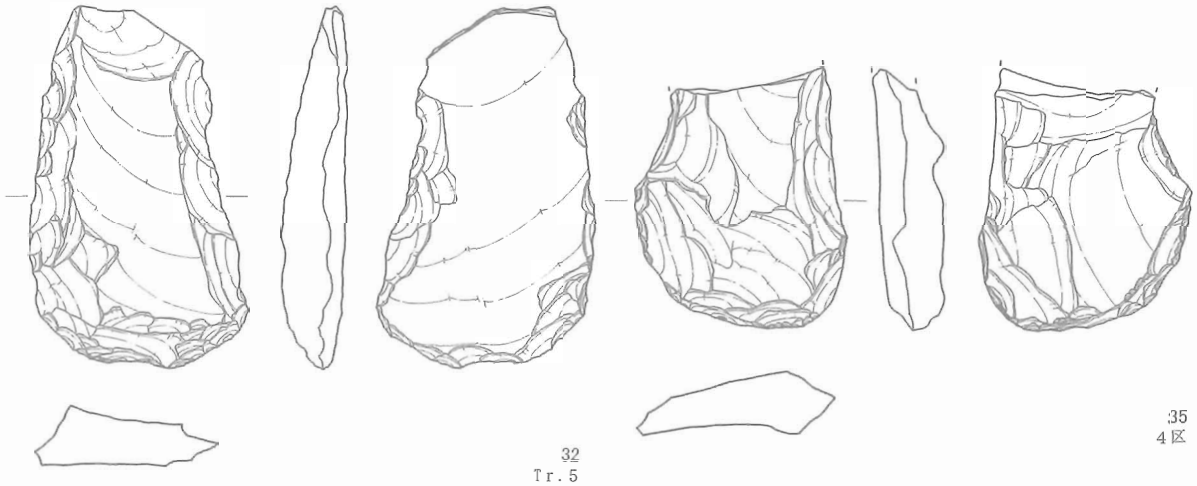


第103図　松坂遺跡　出土石器実測図①



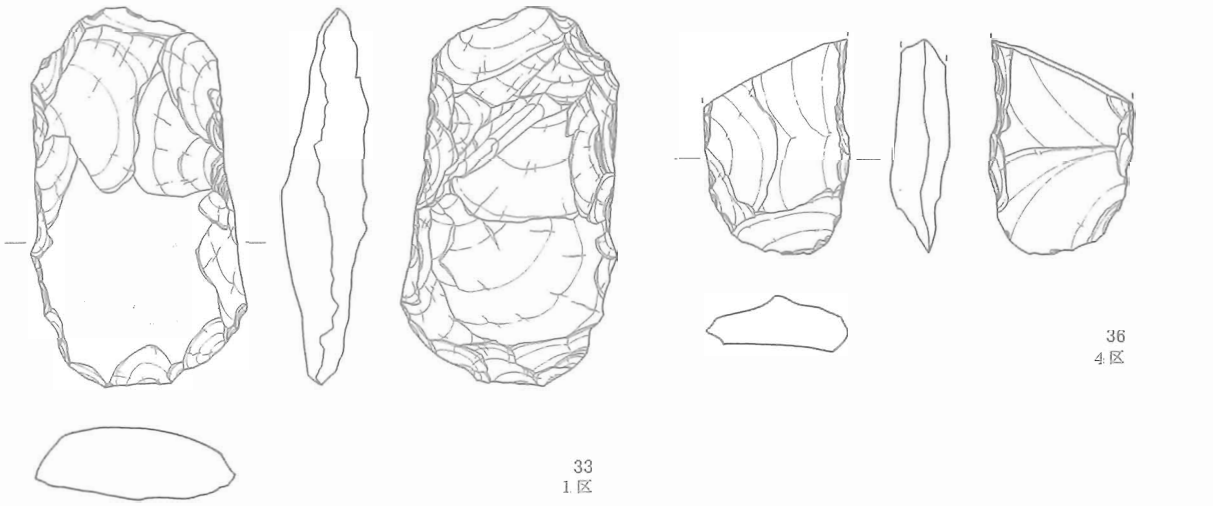
31
2区

34
4区



32
Tr.5

35
4区

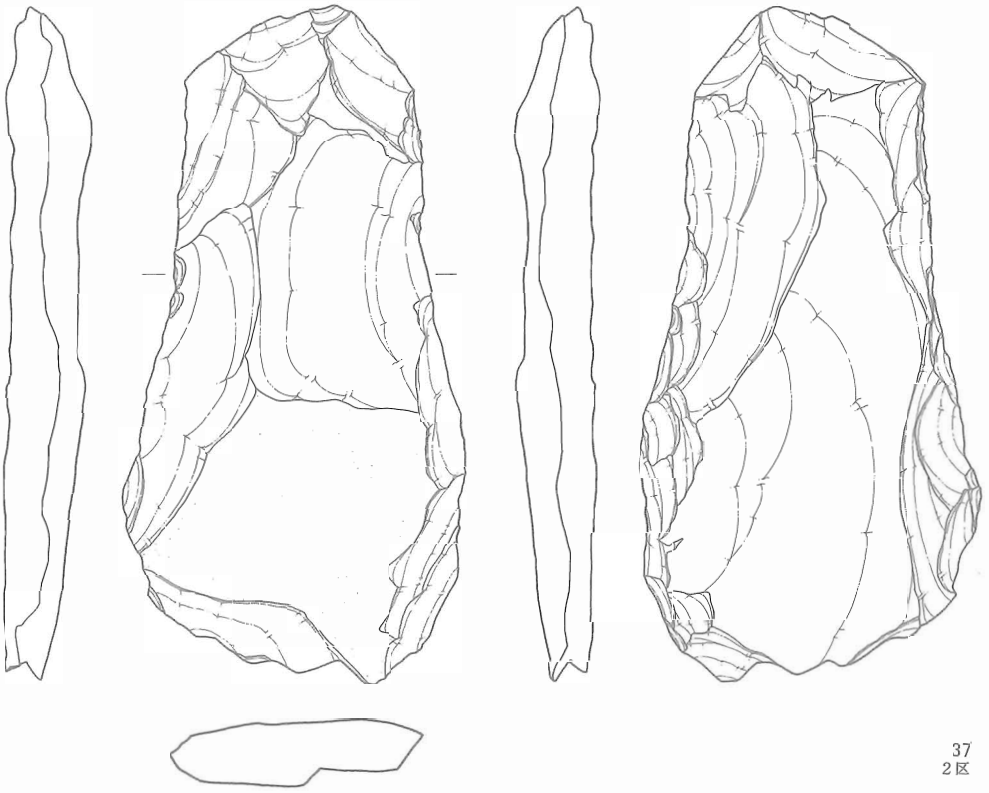


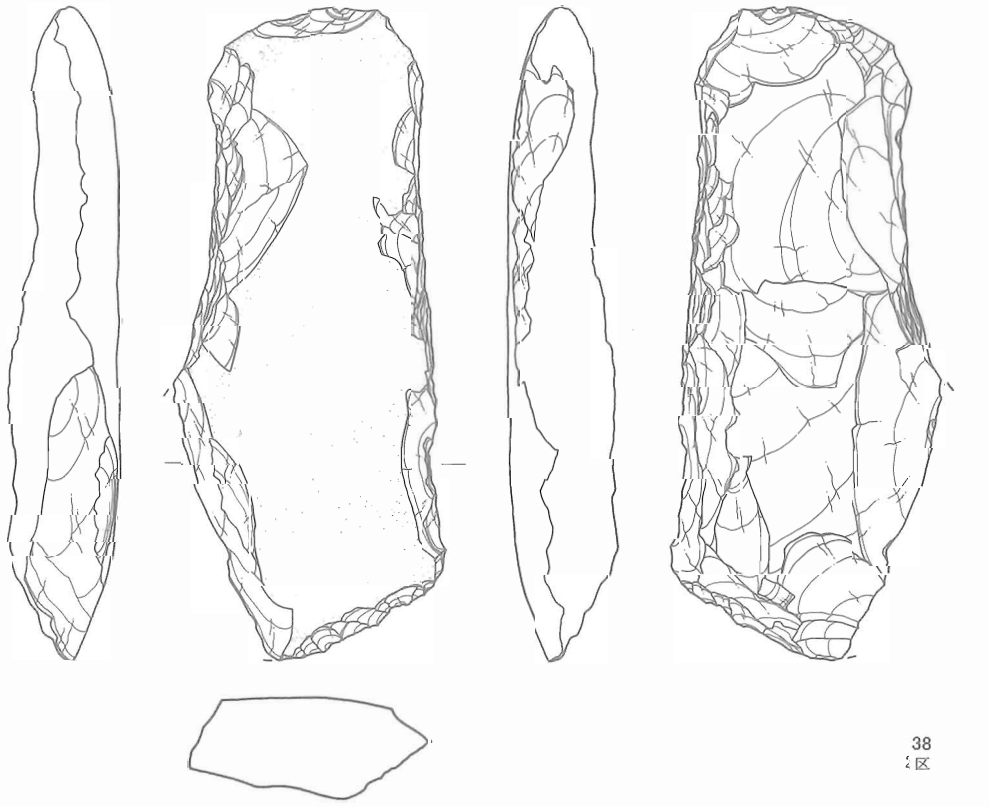
33
1区

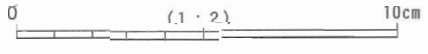
36
4区

0　(1：2)　10cm

第104図　松坂遺跡　出土石器実測図②







第105図　松坂遺跡　出土石器実測図③

6．出土遺物観察表

（1）松坂遺跡出土土器観察表

第36表　松坂遺跡　出土土器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物	種別	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
2区	5層	101	63	1	縄文土器	深鉢	口縁～底部	60	－	(44.7)	(44.7)	11.3	褐(7.5YR4/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	堀之内式
				2		鉢類	胴部	10	－	－	－	－	黄灰(2.5YR5/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
				3		鉢類	胴部	7	－	－	－	－	暗灰黄(2.5Y5/2)	浅黄(2.5Y7/3)	
3区	6層			4		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	橙(7.5YR6/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
2区				5		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	褐灰(10YR4/1)	暗灰黄(2.5YR5/2)	
Tr.2	5層			6		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
2区	6層	102		7		深鉢	底部	40	－	－	－	12.0	橙(7.5YR6/6)	橙(10YR4/1)	
				8		深鉢	底部	15	－	－	－	11.6	にぶい橙(7.5YR6/4)	灰黄褐(10YR4/2)	
4区			64	9		鉢類	口縁部	7	－	－	－	－	褐(7.5YR4/4)	黒褐(5YR3/1)	諸磯式
	6層			10		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	
				11		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	にぶい赤褐(5YR4/4)	黒褐(10YR3/2)	
2区	5層			12		鉢類	胴部	5	－	－	－	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
	6層			13		鉢類	口縁部	7	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR5/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堀之内式
3区				14		鉢類	口縁部	5	－	－	－	－	灰褐(7.5YR5/2)	にぶい褐(7.5Y5/4)	加曽利B式
4区				15		鉢類	頸部	3	－	－	－	－	灰褐(7.5YR5/2)	にぶい褐(7.5Y5/4)	堀之内式
3区	5層			16		鉢類	胴部	3	－	－	－	－	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
Tr.13	6層			17		鉢類	胴部	3	－	－	－	－	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	
1区				18		深鉢	口縁～胴部	90	－	28.6	32.3	－	にぶい黄褐(10YR5/4)	橙(5YR6/6)	
2区	5層			19		鉢類	底部	5	－	－	－	(11.2)	褐灰(10YR4/1)	にぶい黄橙(10YR7/3)	

（　）は復原値

（2）松坂遺跡出土石器観察表

第37表　松坂遺跡　出土石器観察表

出土位置		挿図番号	図版番号	遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
2区	5層	103	64	20	石鏃	黒曜石	1.82	1.44	0.32	(0.38)	あり	
	6層			21	石鏃	黒曜石	1.50	1.27	0.26	0.35	なし	
	5層			22	石鏃	黒曜石	1.59	1.35	0.52	(0.75)	あり	
	4層			23	石鏃	黒曜石	2.51	1.68	0.42	1.07	なし	
Tr.3	6層			24	石鏃	黒曜石	2.18	1.73	0.48	(1.50)	あり	
4区				25	石鏃	黒曜石	1.54	1.16	0.29	(0.27)	あり	
2区	5層			26	石匙	ホルンフェルス	7.57	7.47	1.86	79.02	なし	
Tr.3	7層			27	石匙	ホルンフェルス	4.80	6.98	1.46	40.60	なし	
2区	6層			28	石匙	ホルンフェルス	6.53	4.51	1.90	38.27	なし	
	5層			29	磨製石斧	蛇紋岩	3.27	4.38	0.91	(15.09)	あり	
1区	6層	104	64	30	磨石	輝石安山岩	8.90	5.42	3.31	200.87	なし	
2区				31	打製石斧	細粒砂岩	8.69	5.94	2.63	116.05	なし	
4区				32	打製石斧	細粒砂岩	9.52	5.76	1.69	97.70	なし	
Tr.3				33	打製石斧	細粒砂岩	10.02	5.71	2.23	128.72	なし	
4区				34	打製石斧	細粒砂岩	7.36	4.70	1.62	(68.20)	あり	
1区				35	打製石斧	細粒砂岩	6.89	5.60	1.91	(69.41)	あり	
4区				36	打製石斧	中粒砂岩	5.61	3.81	1.60	(37.85)	あり	
2区	5層	105		37	打製石斧	細粒砂岩	17.71	9.08	2.21	400.00	なし	
				38	打製石斧	頁岩	17.24	7.29	2.89	(397.00)	あり	

（　）は残存値

第4節　松坂遺跡の評価

遺跡の性格　松坂遺跡は、広範囲に亘っており、一つの遺跡かどうか今後再検討する必要があるが、調査区全体で、縄文時代後期の堀之内式土器が出土しており、それぞれの地点ごとに別々の遺跡であったとしても、後期には関連性の強い松坂遺跡群であった可能性が高い。また、尾根の下位に当たる前述した不動棚遺跡も同時期の遺物が出土しており、不動棚遺跡を含めて松坂・不動棚遺跡群として検討しておく必要があるだろう。

土器や石器は遺構に伴わず、また明確な竪穴建物などの遺構もないことから、遺跡の周辺部に当たる可能性が高く、各調査区の近在の富士山麓の尾根の上部の平坦面に、集落が存在する可能性が高いと想定する。（大谷）

縄文土器　縄文時代前期の諸磯式土器、後期の堀之内式土器、同じく加曽利B式土器が出土している。前述した不動棚遺跡同様、富士山麓や富士市域の愛鷹山麓で確認されることが少ない堀之内式が出土した点に注目できるほか、後期の加曽利B式の精製土器が出土している点が興味深い。

富士山麓、愛鷹山麓の後期から晩期にかけて検討する上で重要な遺跡となるであろう。（大谷）

石器　本遺跡で確認された縄文石器はすべて包含層出土であり、遺構などの時期が推定できるような検出は確認できなかった。また、資料の絶対数が少なく、時期が特定できる資料も確認されなかったため、時期の特定は困難であった。しかし、石鏃は全て無茎であり後期以前の資料であることが推定される。土器の様相は後期初頭の資料が中心であるが前期の資料も出土しており、その推定結果と矛盾しない。

石材は石鏃と磨製石斧以外は全て在地の石材が使用されており、付近の川原、もしくは礫層から採取してきたと考えられる。石鏃はすべて信州系、もしくは神津島産の黒曜石が使用されており、伊豆箱根系の黒曜石や在地の石材は使用されていない。

また、磨製石斧の石材は肉眼鑑定と比重値（柴田2007を参照）から蛇紋岩と判断したが、近年では「磨製石斧には蛇紋岩は原則として使われない（柴田2007）」と指摘されている。関東地方と愛鷹山麓に差異のある可能性もあるが、今後、石斧に使用される石材に関して検証が必要となる。（柴田）

註

1　縄文土器については、沼津市教育委員会　池谷信之氏、小崎　晋氏、原田雄紀氏、当研究所　高橋　岳氏に御教授賜った。

参考文献

参考文献は、次頁に記載した。

参　考　文　献

(第１～９章)

【報告書等】

かながわ考古学財団　2007『上依知上谷戸遺跡』

静岡県教育委員会　1965『東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会・日本国有鉄道

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001『富士川ＳＡ関連遺跡群』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『田頭山古墳群』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009『矢川上Ｃ遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010a『秋葉林遺跡Ⅱ』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010b『天ケ沢東遺跡・古木戸Ａ遺跡・古木戸Ｂ遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010c『富士山・愛鷹山麓の遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010d『的場遺跡・的場古墳群』

長泉町教育委員会　1974『上出口古墳』

沼津市教育委員会　1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』

沼津市教育委員会　1994a『大谷津遺跡・井出丸山古墳発掘調査報告書』

沼津市教育委員会　1994b『埋蔵文化財発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書第58集)

沼津市教育委員会　2005『神明塚古墳（第２次）発掘調査報告書』

沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』

富士市教育委員会　1976『中里大久保団地古墳』

富士市教育委員会　1983『三新田遺跡』

富士市教育委員会　1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編)』

富士市教育委員会　1987a『船津寺ノ上古墳』

富士市教育委員会　1987b『富士市指定史跡実円寺西古墳保存修理工事報告書』

富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編)』

富士市教育委員会　1991a『宇東川遺跡ＡＢＣ地区発掘調査概報』

富士市教育委員会　1991b『舟久保遺跡高山地区－高山１号墳発掘調査報告書』

富士市教育委員会　1991c『船津L-第62号墳発掘調査概要』

富士市教育委員会　1995a『沢東Ａ遺跡』

富士市教育委員会　1995b『花川戸第１号墳』

富士市教育委員会　1998a『沢東Ｂ遺跡』

富士市教育委員会　1998b『下前原遺跡・富士岡Ｆ－第22号墳』

富士市教育委員会　1999『船津古墳群』

富士市教育委員会　2001a『宇東川遺跡Ｌ地区』

富士市教育委員会　2001b『東平遺跡』

富士市教育委員会　2002『中吉原宿遺跡』

富士市教育委員会　2003『花川戸第２・３号墳発掘調査報告書』

富士市教育委員会　2005『上ノ山第１号墳』

富士市教育委員会　2008『祢宜ノ前遺跡』

富士市教育委員会　2009『宮添遺跡Ⅱ』

富士市教育委員会　2010a『宮添遺跡Ⅲ』

富士市教育委員会　2010b『東平遺跡第15地区』

吉原市教育委員会　1958『吉原市の古墳』

【論文】

麻生　優・白石浩之　1986『縄文土器の知識Ⅰ』　東京美術
井鍋誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
大谷宏治　2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』10号　静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』　東海古墳文化研究会
大谷宏治　2008「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号　静岡県考古学会
大谷宏治　2010「副葬品からみた無袖石室の位相」『東日本の無袖石室』　雄山閣
岡安光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
岡安光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』２号　古墳文化研究会
岡安光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71巻４号　日本考古学会
菊池吉修　2008「駿河における無袖式石室」『東国に伝う横穴式石室』　静岡県考古学会
菊池吉修　2010「各地の様相　駿河」『東日本の無袖石室』　雄山閣
北村和宏　1996「尾張の羽釜」『鍋と甕　そのデザイン』　東海考古学フォーラム
木ノ内義昭　1998「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義」『静岡の考古学』　植松章八先生還暦記念論集刊行会
小林達雄編　1988a『縄文土器大観２』　小学館
小林達雄編　1988b『縄文土器大観３』　小学館
小林達雄編　1989a『縄文土器大観Ⅰ』　小学館
小林達雄編　1989b『縄文土器大観４』　小学館
小林達雄編　2008『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
静岡県考古学会　2003『静岡県の横穴式石室』
静岡大学人文学部考古学研究室　1998「国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』　静岡県教育委員会
柴田　徹　2007「比重から見た磨製石斧の石材」『松戸市立博物館紀要』14号　松戸市立博物館
志村　博　1981「終末期の竪穴状石室について」『東富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』
志村　博　1987「後期古墳に於ける特異な石室構造について－富士市域を中心として」『静岡県博物館協会研究紀要』11　静岡県博物館協会
鈴木一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』　三河古墳研究会
鈴木一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』　静岡県考古学会
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』　雄山閣
鈴木敏則　2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　補遺・論考編』　東海土器研究会
鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会
東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』
藤村東男　1984『縄文土器の知識Ⅱ』　東京美術
藤沢良祐　1995「古瀬戸」『概説中世の土器・陶器』　真陽社
藤澤良祐　2005「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』　2005菊川シンポジウム実行委員会
向坂鋼二　1992「縄文土器の編年」『静岡県史』３　考古３　静岡県

第10章　富士山・愛鷹山麓の古墳群について

第１節　古墳時代中期の古墳について

１．東駿河における間門松沢第１号墳の位置

（１）間門松沢第１号墳の特徴と編年的位置

特徴　まず、間門松沢第１号墳の特徴について確認しておきたい。

間門松沢第１号墳は、標高126m、富士山麓の丘陵先端から３㎞、同一丘陵の南側にある東坂古墳から２㎞とかなり奥まった位置に所在する。古墳は赤淵川西岸の富士山麓の緩斜面の辺縁部の溶岩ドームを利用した古墳で、墳形は楕円形墳、長方形墳の可能性が高く、この場合は長軸（辺）が20～25mであった可能性が高い。また、古墳の北側の方形の張り出した地形が古墳築造に伴い造り出されたとすれば、前方後円墳や前方後方墳を意識した可能性もある。この場合は全長30m程度の墳丘規模に復原できる。

埋葬施設は墳頂部に木棺直葬３基が並列して築造されている。主軸はいずれも東西方向をとり、二段墓壙に細長い割竹形木棺を納めた可能性が高い。この３基の埋葬施設のうち第３埋葬施設から鉄剣１点と臼玉３点が出土したのみで、副葬遺物は非常に少ない。

編年的位置　遺物が非常に少なく、編年的な位置づけを決定するのは難しいが、第３埋葬施設から出土した刃関双孔をもつ鉄剣と同様の特徴を有する神奈川県吾妻坂古墳や石川県下開発茶臼山９号墳例から古墳時代中期前半（前葉～中葉前半）に位置づけられる可能性が高い（次項の杉山和徳氏の論参照）。

この第３埋葬施設は、３基の埋葬施設のうち最も南側に位置していることから、中央の第１埋葬施設が古墳築造当初の埋葬施設であるとすれば、第３埋葬施設から想定される時期よりも古墳の築造時期は若干遡る可能性がある。

（２）東駿河地域の古墳との対比からみた間門松沢第１号墳（第38表）

墳形と規模　東駿河地域では、大型古墳に前方後円墳、前方後方墳が多く、円墳は伊勢塚古墳の54mを例外として40m以下の中小規模である。間門松沢第１号墳は、墳形が不明確であるが、楕円形墳である場合は20～25m程であり、東駿河地域の傾向と合致する。

墳形からみた位置づけ　東駿河地域における大・中規模の古墳のうち、弥生時代末の丸ヶ谷戸墳丘墓は前方後方形で、辻畑古墳、浅間古墳は前方後方墳で、前期までに採用される墳形である。一方、神明塚古墳、長塚古墳、東坂古墳などが前方後円墳で、中期前半を除いて前期から後期前半まで築造される。間門松沢第１号墳と同時期の中期前半の古墳は様相が不明確な

第38表　東駿河地域の主要古墳の概要

古墳名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	主軸方位	主な副葬品
向山16号墳	三島市	前方後円	70	竪穴式石槨	－	(未調査)
向山３号墳	三島市	前方後円	25.4	(未調査)	－	(未調査)
辻畑古墳	沼津市	前方後方	70	木棺直葬？	東西	鏡・鉄剣・鉄槍・鉄鏃
長塚古墳	沼津市	前方後円	54	石棺直葬？	－	鉾
子ノ神古墳	沼津市	前方後円	64	(未調査)	－	(未調査)
神明塚古墳	沼津市	前方後円	54	礫槨？	南北？	(詳細不明)
山ノ神古墳	富士市	前方後円	41.5	(未調査)	－	(未調査)
庚申塚古墳	富士市	双方中方	40	(未調査)	－	(未調査)
ふくべ塚古墳	富士市	前方後円？	60？	竪穴系？	－	鏡・勾玉・大刀
薬師塚古墳	富士市	円	24	粘土床	東西	剣・斧・刀子・玉類
浅間古墳	富士市	前方後方	90	(未調査)	－	(未調査)
琴平古墳	富士市	円	30	(未調査)	－	(未調査)
天神塚古墳	富士市	前方後円	51.5	(未調査)	－	(未調査)
東坂古墳	富士市	前方後円	60	粘土床	南北	鏡・琴柱形石製品・石釧・玉類・鉄剣・大刀
間門松沢第１号墳	富士市	楕円?長方?	25?	木棺直葬	東西	鉄剣・玉類
伊勢塚古墳	富士市	円	54	竪穴系？	－	(未調査)
丸ヶ谷戸墳丘墓	富士宮市	前方後方	26.2	不明	－	－

※埋葬施設　竪穴系＝竪穴系埋葬施設と想定されているもの　　単位(m)

ふくべ塚古墳を除いて円墳である。同時期の古墳に円墳が多いこと、前方後円墳の築造が停滞する時期であるとすれば、間門松沢第１号墳は円墳（楕円形墳）である可能性が最も高い。一方で、前方後円墳や前方後方墳を意識した古墳であるとすれば、東駿河地域の中では前方後円墳や前方後方墳が築造されない時期にあたり、特に前方後円墳を意識した古墳であるとすれば、畿内王権と新たな関係を取り結んだ新興の首長であった可能性も高い。

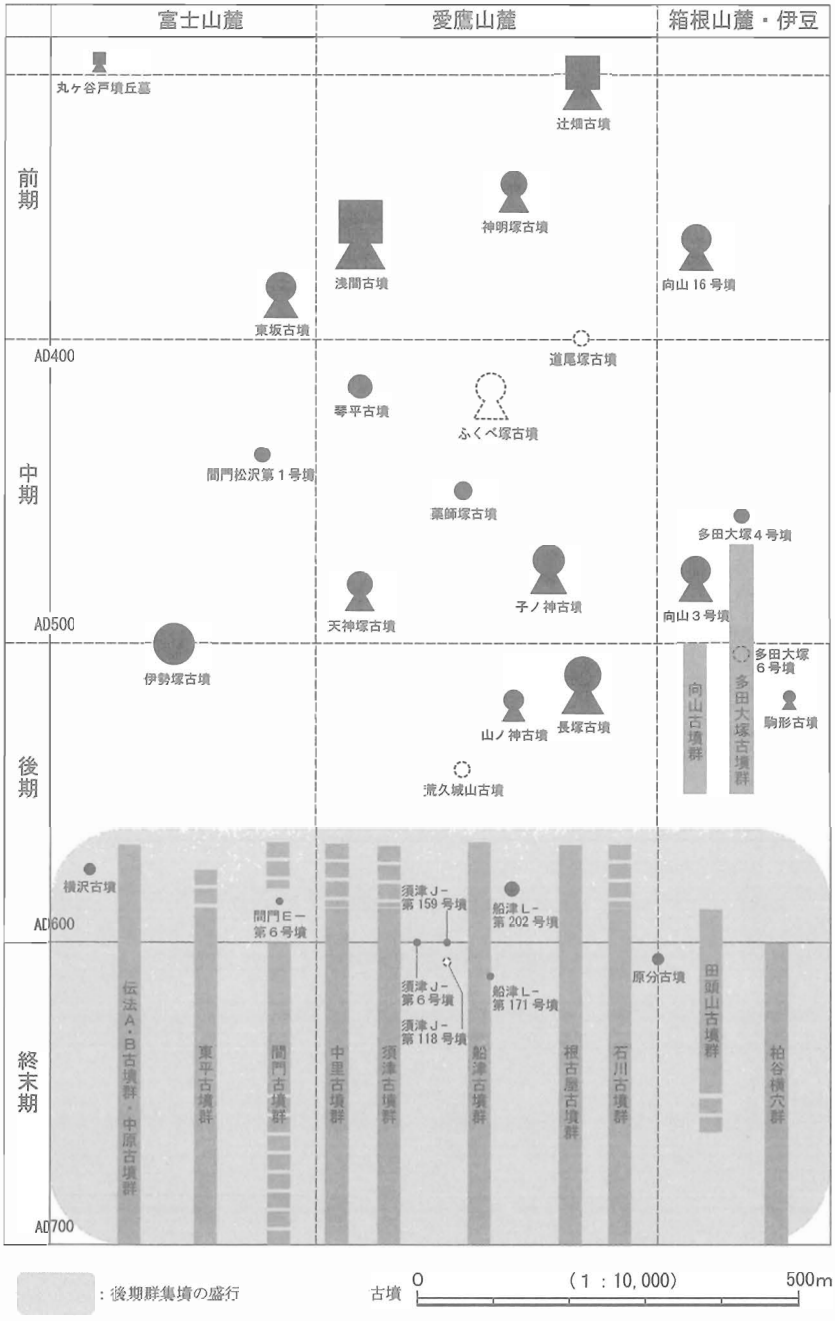
埋葬施設　東駿河地域における古墳の埋葬施設が明確なものは少ない。竪穴式石槨は向山16号墳のみで、礫槨や礫床の可能性のある神明塚古墳、粘土槨の可能性が高い東坂古墳、薬師塚古墳は粘土床、辻畑古墳は木棺直葬あるいは全く別の木槨のような埋葬施設、間門松沢第１号墳は木棺直葬である。調査事例が少ないため地域的な特徴は抽出できないが、大型古墳の埋葬施設が中規模の古墳よりも大型で豪華であることは間違いない。

間門松沢第１号墳のように幅が狭い墓壙に長い割竹形木棺を入れる特徴は遠江・駿河の中小規模の古墳で多く確認されるものであり、その傾向と合致している。

埋葬施設の頭位　間門松沢第１号墳は、３基の埋葬施設が東西に主軸を向ける。東駿河において埋葬施設まで調査された事例が少ないが、埋葬施設が調査された沼津市辻畑古墳は東西主軸、神明塚古墳は東北-南西主軸、東坂古墳は南北主軸、薬師塚古墳は東西主軸、長塚古墳は箱形石棺直葬の可能性が高いが主軸は不明である。

前方後円墳である東坂古墳は南北主軸であり、前方後方墳の辻畑古墳、30m以下の古墳である薬師塚古墳、間門松沢第１号墳は東西主軸である。東駿河地域では伝統的に東西主軸であった可能性があり、大型の前方後円墳は南北主軸であった可能性がある。

埋葬施設と墳形に対応関係がある可能性があり、注目できる。



第106図　東駿河地域における古墳の変遷

（3）東駿河地区の古墳築造の動向からみた間門松沢第1号墳の意義（第106・107図）

ここでは、東駿河地域の古墳の動向からみた場合の、間門松沢第1号墳の意義について考えたい。

東駿河地域では、古墳時代前期～中期に築造された古墳は少ない。近年、箱根山麓の伊豆地域に当たる三島市向山16号墳や、愛鷹山麓の沼津市辻畑古墳が発見されたことで、古墳時代前期に遡る古墳が増加しつつあるが、その数は遠江や駿河中央部（静岡清水平野）と比較した場合少ない。

東駿河地域の大型古墳の動向を分析した滝沢誠氏は、当地域の古墳の動向を3段階に区分した。第1段階を愛鷹山麓西部と千本洲浜に大型古墳が造営される段階で、前期中葉から末葉、第2段階を前方後円墳の造営が途絶もしくは限定的になる段階で中期前半、第3段階を再び東駿河前域で前方後円墳を中心として大型古墳が築造される段階で、中期後半～後期とした（滝沢2005a，註1）。

間門松沢第1号墳は、古墳時代中期前半に位置づけられる可能性が高く、この時期は滝沢氏の2段階で東駿河地域において前方後円墳の築造が停滞あるいは途絶する時期に当たる。この時期は遠江・駿河を通してみても、前方後円墳の築造数は非常に少なく（中嶋1995）、畿内王権の政治変動に伴う、列島規模での前方後円墳の築造の減少があった（滝沢2005a，中嶋1995）。遠江の大・中規模の古墳のあり方を検討した中嶋郁夫氏は、この時期に畿内王権による築造の規制があったと想定している。

一方で、古墳時代中期後半になると、富士市天神塚古墳、沼津市子ノ神古墳が、後期になると沼津市長塚古墳、山ノ神古墳、三島市向山3号墳などの前方後円墳が築造され、古墳の築造数も増加する。

このように間門松沢第1号墳は前方後円（方）墳の造営が停滞する時期に築造された古墳といえ、古墳造営のあり方、社会のあり方を探る上で非常に重要な古墳であるといえる。

このような東駿河地域における前方後円墳が築造されない時期に、小規模でありながら古墳が築造された意味は大きい。同時期に中里古墳群で琴平古墳、船津古墳群で薬子塚古墳、ふくべ塚古墳（註2）が築造されたと想定でき、間門松沢第1号墳を含めて、それまでに大型前方後円墳が築造されていた箇所とは異なる場所に築造されている。したがって、前期の大型古墳とは直接的に系譜関係のない集団が新たに古墳を築造した可能性が高い。古墳の造営は畿内王権との関係の強弱により行われたと想定できることから、前期に築造された古墳とは異なる集団が、新たな関係を畿内王権と取り結んで築造した可能性が高いだろう。

同時期に営まれた集落の動向が不明確であることから、社会全体の動向の中での位置づけは今後の発掘調査の進展を俟たなければならないが、間門松沢第1号墳が、大規模古墳の築造が停滞する中期前半に、それまでに古墳が築造されなかった地域に、それも富士山麓のかなり奥まった地域に築造されたことは、富士山麓の開発を想定できるとともに、東駿河社会における政治的な変化を如実に表す指標となろう。

註

1　遠江の大・中型古墳の動向を中心に検討した中嶋郁夫氏も、滝沢氏と同様の画期を認めている（中嶋1995）。

2　ふくべ塚古墳については未調査のため詳細不明である。前方後円墳の可能性も想定されているが、否定的な見解もある（滝沢2005a）。また、本墳から出土したとされる鏡などにより古墳時代中期前半の古墳と考えられる（滝沢2005a）。

参考文献

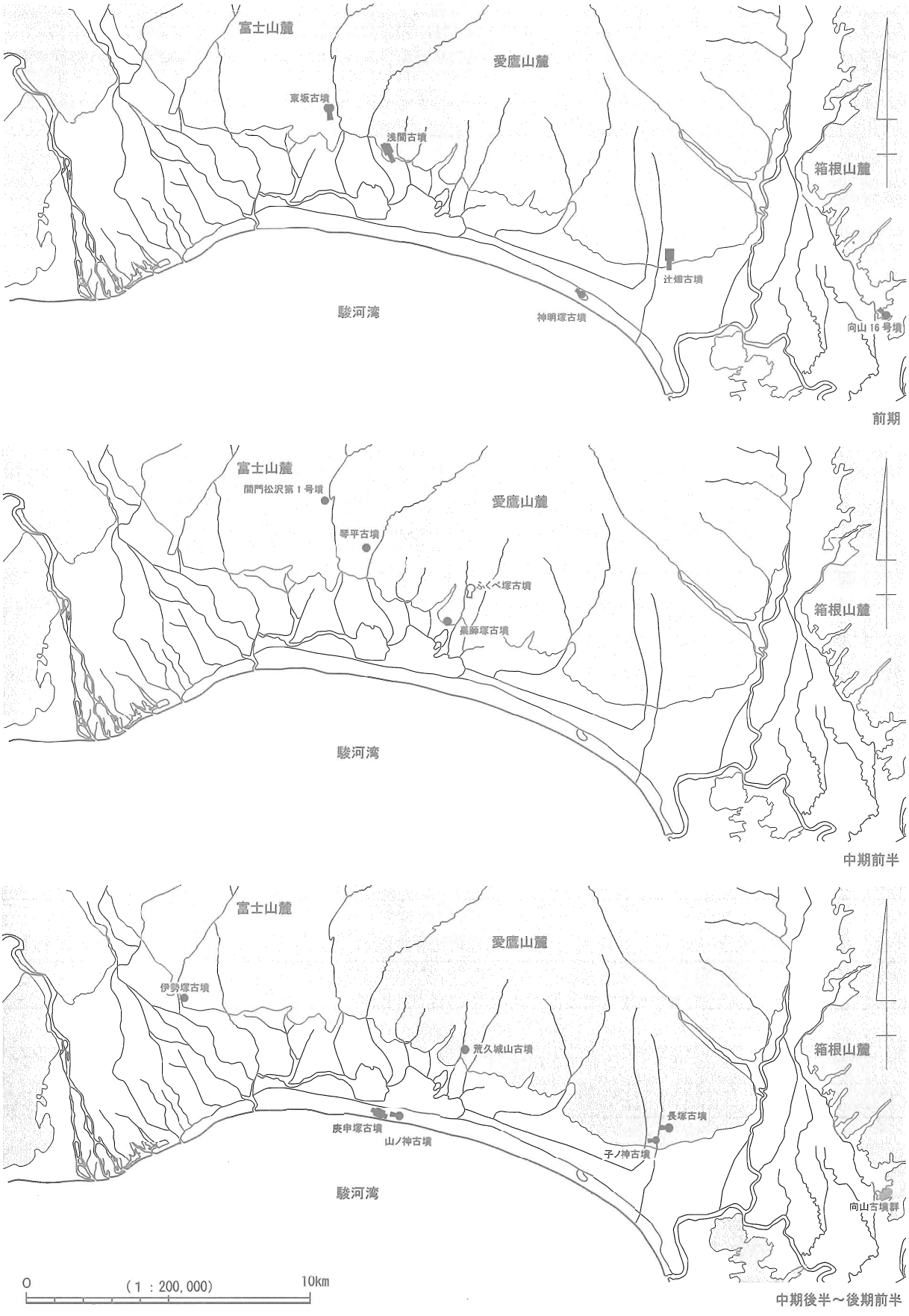
静岡県教育委員会　2000『静岡県の前方後円墳』

静岡県考古学会　2002『古墳時代中期の大型墳と小型墳』

滝沢　誠　2005a「神明塚古墳と周辺の大型古墳」『神明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』沼津市教育委員会

滝沢　誠　2005b「第4章　政治的社会の発達　第1節　浮島沼周辺の首長たち」『沼津市史』通史編　原始・古代・中世

中嶋郁夫　1995「静岡県内の古墳の動向」『古墳時代の集落』（収録集）　静岡県考古学会



第107図　東駿河地域における主要古墳の時期的分布（古墳時代初頭～後期前半）

2．間門松沢第1号墳出土刃関双孔鉄剣について

（1）はじめに

間門松沢第1号墳第3埋葬施設から出土した鉄剣は、刃関部に双孔を穿つ特徴的な目釘孔をもつ。刃関双孔をもつ鉄剣は、弥生時代後期を中心に方形周溝墓や礫床墓、甕棺墓といった墓域から数多く出土しているが、古墳時代にまで時期が下るものは極端に少なくなる。さらに、古墳時代中期以降の出土例となると、管見に触れる限り、神奈川県厚木市の吾妻坂古墳出土例（西川編2004）、石川県能美市の下開発茶臼山9号墳出土例（三浦編2004）以外に類例を見出すことができない。

前期古墳から出土する刃関双孔鉄剣の中には、装具への固定に際して目釘孔を使用しないヤリ（註1）に転用される資料が含まれている。これらの剣は刃関双孔をもちながらも、把装具への装着に際して、目釘を用いた固定がなされなかった事例である。豊島直博氏は、古墳時代の刃関双孔をもつヤリに関して、弥生時代から長く使われ続けた伝世品である可能性を指摘している（豊島2008b）。古墳時代の刃関双孔鉄剣の出土事例が少ないため、その意義については評価が難しい。今後の類例の増加を俟ちたいところであるが、ここでは豊島氏の論考に導かれ、弥生時代以来の伝世品である刃関双孔鉄剣が古墳時代にも残存するという観点から、若干の検討を試みたい。

（2）刃関双孔鉄剣の類例（第108図，第39表）

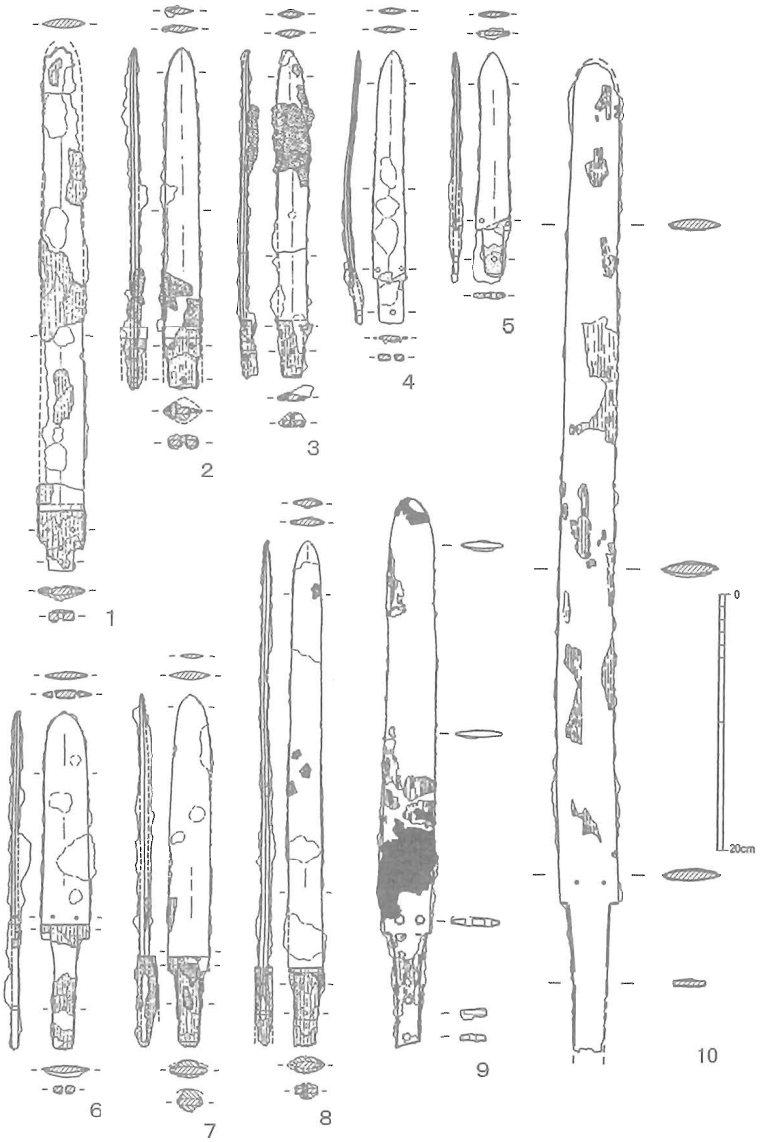
①弥生時代の刃関双孔鉄剣

弥生時代の刃関双孔鉄剣は管見に触れる限り、全国54遺跡より87点が出土している（註2）。弥生時代後期のものがほとんどであるが、福岡県福岡市の吉武遺跡群出土例（力武・横山編1996）のように、北部九州では弥生時代中期にまで遡る資料も数多く認められる。また、東日本においても弥生時代中期後葉に比定される資料として、神奈川県秦野市の砂田台遺跡では住居址より刃関双孔鉄剣を分割再加工した鉄斧や刀子が出土している（宍戸ほか編1989・1991）ほか、長野県佐久市の五里田遺跡でもやはり住居址から刃関双孔鉄剣が出土している（三石編1999）。日本列島に鉄剣が出現し始めた弥生時代中期には、既に刃関双孔鉄剣は存在していたと言えよう。

第39表　刃関双孔鉄剣出土地一覧表

遺跡名	所在地	備考	遺跡名	所在地	備考
新保田中村前遺跡	群馬県		高畠遺跡	福岡県	
石墨遺跡			立岩遺跡		
有馬遺跡		3点出土	袈・西小田遺跡群		
井沼方遺跡	埼玉県		門田遺跡		2点出土
観音寺遺跡			須玖岡本遺跡		2点出土
田端西台通遺跡	東京都		汐井掛遺跡		
丸山東遺跡			安徳台遺跡群		
王子ノ台遺跡	神奈川県		東小田峯遺跡		2点出土
真田・北金目遺跡群			徳永川ノ上遺跡		
砂田台遺跡		再加工品・3点出土	中原遺跡	佐賀県	3点出土
草刈遺跡	千葉県	2点出土	みやこ遺跡		
頭無A遺跡	山梨県		横田遺跡		
篠ノ井遺跡群	長野県		シゲノダン遺跡	長崎県	
浅川扇状地遺跡群			経隈遺跡		
五里田遺跡			西弥護免遺跡	熊本県	
西一里塚遺跡			下山西遺跡		
根塚遺跡		3点出土	池田・古園遺跡		
古津八幡山遺跡	新潟県		都野原田遺跡	大分県	2点出土
原新田遺跡	静岡県		小城原遺跡		2点出土
文殊堂遺跡		2点出土	川部遺跡		
近岡遺跡	石川県		川床遺跡	宮崎県	2点出土
小羽山30号墓	福井県		南擂ヶ浜遺跡	鹿児島県	
伊瀬栗地遺跡	岐阜県		古墳名	所在地	備考
古天王5号墓	京都府	2点出土	新羽南古墳	神奈川県	前期古墳
大風呂南1号墓		2点出土	吾妻坂古墳		中期古墳
大竹西遺跡	大阪府		間門松沢第1号墳	静岡県	中期古墳
妙楽寺遺跡	兵庫県	4点出土	下開発茶臼山9号墳	石川県	中期古墳
半田山1号墓			北谷1号墳	京都府	前期古墳
梨ヶ谷遺跡	広島県		西求女塚古墳	兵庫県	前期古墳
南庄遺跡	徳島県		メスリ山古墳	奈良県	前期古墳・3点出土
吉武遺跡群	福岡県	3点出土	向野田古墳	熊本県	前期古墳
東入部遺跡群			免ヶ平古墳	大分県	前期古墳

弥生時代の鉄剣の把の研究をおこなった豊島直博氏の分類（豊島2004）に従えば、弥生時代の刃関双孔鉄剣の内、茎部に有機質の付着が確認できるもののほとんどには、二枚合わせ式や一木造り式、鹿角Y字式といった木製把や鹿角製把が装着されていた痕跡が認められる。一方で、ヤリとされる四枚合わせ式に該当するものは皆無である。



1．大風呂南1号　2．門田　3．妙楽寺　4．古津八幡山　5．有馬（1～5．弥生）
6．北谷1号　7．免ヶ平　8．向野田　9．吾妻坂　10．下開発茶臼山（6～10．古墳）

第108図　刃関双孔鉄剣の諸例

刃関双孔は、双孔が剣身に直交し水平に並列するものや、剣身に斜行するもの、並列の双孔が縦2段に並ぶものと目釘孔の並び方に差異を見出すことができる。野島永氏は目釘孔の並び方から、刃関双孔鉄剣を並列双孔・斜行双孔・並列四孔に分けて検討を進めた（野島・高野2002）。なお、刃関双孔鉄剣の中には、野島氏の3つの分類に当てはまらない事例も存在する。千葉県市原市の草刈遺跡K区248号土壙墓出土例（小林・麻生編2007）は刃関部に不揃いに4孔が並び、茎部にも不揃いな双孔が並ぶなど、計6孔の目釘孔が穿たれる。静岡県周智郡森町の文殊堂遺跡土坑墓SF23出土例（田村編2006）は刃関部付近片側に単孔があり、茎部に双孔と茎尻に単孔が存在するなど、計4孔の目釘孔が穿たれる。石川県金沢市の近岡遺跡大溝出土例（栃木編1986）も刃関部に不揃いな3孔が穿たれる。並列四孔とされるものの中にも、目釘孔が並列するとは言い難い事例も含まれている。刃関部に2孔以上の目釘孔が穿たれる事例に関しては、装具の付け替えの際などに、把の形態に合わせて目釘孔を改めて穿孔し直したものが含まれている可能性がある。

②古墳時代の刃関双孔鉄剣

古墳時代の刃関双孔鉄剣は、現在のところ9古墳より11点の出土を確認するのみである。内訳は、前期古墳出土のものが8点で中期古墳出土のものが間門松沢第1号墳出土例も含めて3点である。前期古墳出土の8点は全て豊島氏の把の分類で言うところの、四枚合わせ式糸巻頂点型あるいは直線型に該当し、ヤリに転用された資料の可能性が高い。弥生時代の刃関双孔鉄剣には、四枚合わせ式が認められない点を鑑みると、把の痕跡から見た限り、弥生時代の刃関双孔鉄剣と古墳時代前期の刃関双孔鉄剣との差異が非常に際立つ。

刃関双孔は、ほとんどが並列双孔に近いもので、極端に斜行するものや、並列四孔になるものは認められない。また、鉄剣の茎部が押し並べて長いため、茎部に縦に2孔が穿たれる例が多いことが、弥生時代の刃関双孔鉄剣と比較した際の特徴と言える。

（３）弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣の比較

弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣を比較すると、前述の通り、主に茎部長や把の痕跡といった茎部の形態に差異を見出すことができる。茎部長に関しては、弥生時代の刃関双孔鉄剣が３～5㎝の短茎剣が多いのに対して、古墳時代のものは6㎝を超える長茎剣が多い。把に関しては、弥生時代の刃関双孔鉄剣が一木造りの木製把や鹿角製把が装着されることが多いのに対し、古墳時代のものはヤリとされる四枚合わせ式把が多い。一方、身部長の長短で言えば、弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣の間にはそれほど大きな違いを見出すことはできない。

これらのことから刃関双孔鉄剣は、弥生時代に剣として使用されていたものの一部が、古墳時代に入ると装具が付け替えられ、ヤリに転用されたと仮定することができる。しかし、疑問点として古墳時代の刃関双孔鉄剣に長茎剣が多い点があげられる。長茎剣の茎部を裁断して短茎剣に転用することは可能だが（註３）、その逆は困難である。長茎剣における刃関双孔の意義を検討する必要があろうか。

（４）古墳時代前期と中期の刃関双孔鉄剣の比較

古墳時代の刃関双孔鉄剣の内、吾妻坂古墳出土例と下開発茶臼山９号墳出土例は、古墳から出土した他の副葬品の年代観などから、５世紀代の資料に位置付けられる。間門松沢第１号墳出土例の時期的な位置付けは難しいが、鞘受部をもつなど、茎部に遺存する把の痕跡からは古墳時代中期に相当する資料と考えられる（註４）。それ以外の８点の資料は古墳時代前期前半頃に比定される。古墳時代中期の３点の資料には、把縁付近への糸巻きの痕跡や四枚合わせ把の痕跡は認めらない。茎部が長く、剣身部にも木製鞘の一部が遺存していることから、茎部を鉄芯として把が装着され、鞘に収められた状態で副葬されたことが推定される。剣としての威容を保って副葬されている点、ヤリに転用された古墳時代前期の刃関双孔鉄剣とは、明らかに扱われ方が異なっていたことが指摘できる。

古墳時代前期には、弥生時代から使用されていた刃関双孔鉄剣は他の雑多な剣とともにヤリに転用され流通していた。しかし、古墳時代中期には「弥生時代以来」という伝世品としての付加価値が付帯され、再び剣として副葬された。この場合、使用されなくなった刃関双孔には、単なる目釘孔の痕跡器官としてではなく、「弥生時代伝来の品」を示す役割をも与えられていたことになろうか。比較対象が少なく憶測の域を出ないため、今後の類例の増加により、さらなる検討が必要とされるだろう。

（５）おわりに

弥生時代以来の伝世品である刃関双孔鉄剣が古墳時代にも残存することを前提に、弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣、古墳時代前期と中期の刃関双孔鉄剣の比較検討をそれぞれおこなった。古墳時代の刃関双孔鉄剣の類例は少なく、十分な検討を進めることはできなかった。今後の古墳出土資料の蓄積が望まれるところであるが、そんな中にあって、間門松沢第１号墳出土例は、古墳時代における刃関双孔鉄剣の性格を考えるうえで、貴重な一例になると言えよう。

註

1　「槍」という字は茎式のヤリ以外に、袋部をもつホコを表現する際にも用いられることがある。混乱を避けるために茎式のものを「ヤリ」と表現する提案（菅谷1975・寺沢1990）に従うこととする。

2　京都府京丹後市の浅後谷南遺跡墳墓第２主体部出土例（伊野・竹原・河野1998）や長崎県佐世保市の門前遺跡１号箱式石棺墓出土例（副島ほか編2006）、大分県日田市の草場第２遺跡99号土壙墓出土例（高橋編1989）は、茎部の両端に目釘を差し込み、剣身と把を固定することで、刃関双孔と同様の役割を果たしている事例であるが、剣本体に刃関双孔が穿たれていないため、検討の対象から外した。一方、静岡県掛川市の原新田遺跡１号方形周溝墓主体部出土例（平野1987）や長崎県対馬市のシゲノダン遺跡石蓋土壙出土例（小田ほか編1974）、大分県竹田市の小城原遺跡４号墓出土例（宮内編2002）や宮崎県児湯郡新富町の川

床遺跡B区13号墓出土例（有田ほか編1986）は、茎部に双孔が穿たれ、正確には刃関双孔とは言い難い。ただし、3例ともほぼ無関で、身部と茎部の境界が曖昧であることから、刃関双孔同様の役割を果たした目釘孔と考え、検討の対象に加えた。

3　刃関双孔鉄剣の中にも、目釘孔を利用して茎部を裁断した痕跡が認められるものが存在する（上田編1998）。

4　豊島直博氏の御教示による。豊島氏による古墳時代の把の分類（豊島2008a）で言うC類あるいはD類に該当すると考えられる。

引用文献

有田辰美ほか編　1986『川床遺跡』新富町文化財調査報告書第5集　新富町教育委員会

伊野近富・竹原一彦・河野一隆　1998「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府遺跡調査概報』第84冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

上田　真編　1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書34　（財）長野県埋蔵文化財センター

小田富士雄ほか編　1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集　長崎県教育委員会

小林清隆・麻生正信編　2007『千原台ニュータウン』XVII　千葉県教育振興財団調査報告第565集　（財）千葉県教育振興財団・都市再生機構

宍戸信悟ほか編　1989・1991『砂田台遺跡』Ⅰ・Ⅱ　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20　神奈川県立埋蔵文化財センター

菅谷文則　1975「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集』　吉川弘文館

副島和明ほか編　2006『門前遺跡』Ⅱ　長崎県文化財調査報告書第190集　長崎県教育委員会

高橋　徹編　1989『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　大分県教育委員会

田村隆太郎編　2006『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

寺沢知子　1990「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊　同志社大学文学部文化学科

栃木英道編　1986『近岡遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

豊島直博　2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号　日本考古学会

豊島直博　2008a「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』　同成社

豊島直博　2008b「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第22号　群馬考古学研究会

西川修一編　2004『吾妻坂古墳―出土資料調査報告―』　厚木市教育委員会

野島　永・高野陽子　2002「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（3）」『京都府埋蔵文化財情報』第83号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

平野吾郎　1987「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要』Ⅱ　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

三浦俊明編　2004『下開発茶臼山古墳群Ⅱ―第3次発掘調査報告書―』　辰口町教育委員会

三石宗一編　1999『鳴沢遺跡群 五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集　佐久市教育委員会

宮内克己編　2002『小城原遺跡・中原遺跡』大分県文化財調査報告書第125集・久住町文化財調査報告書第9集　大分県教育委員会・久住町教育委員会

力武卓治・横山邦継編　1996『吉武遺跡群』Ⅷ　福岡市埋蔵文化財調査報告第461集　福岡市教育委員会

第２節　古墳時代後期～終末期の古墳について

１．船津古墳群、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門古墳群における墓道の復原

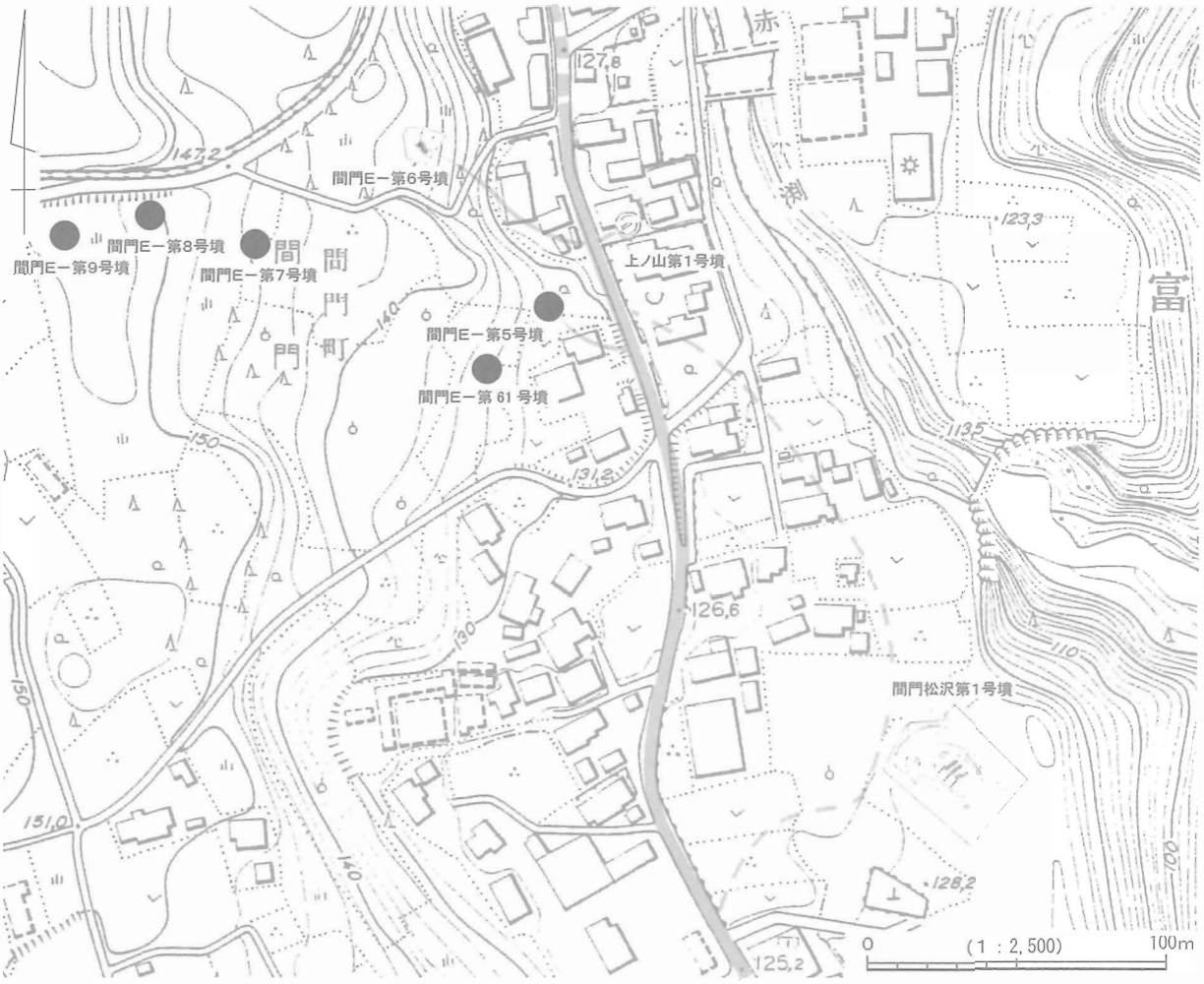
（１）墓道の復原について

第二東名高速道路に伴う発掘調査により、３古墳群で５基の横穴式石室を発掘調査した。これらと既往調査の古墳の開口方位や墓道の方向を勘案し、それぞれの古墳へ至る墓道（幹道）について復原したい。復原に当たっては、墓道が存在するものは墓道の方向を意識していたものと想定し、墓道が確認できないものは開口方向を意識していたものと考え、それらが収斂する場所を古墳へ至る道と考えた。

（２）鵜無ヶ淵・間門古墳群の墓道について（第109図）

鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳（以下，間門E-第６号墳）は富士山南麓と愛鷹山南西麓の間を流れる赤淵川の西岸、富士山南麓に位置する。間門古墳群は、上ノ山第１号墳を含めて９基の古墳が確認され、時期の異なる間門松沢第１号墳が近在する。

さて、上ノ山第１号墳の調査報告のなかで、報告者の前田勝己氏はその開口方向が斜面上位側に向いて、異質である点を指摘し、斜面下位に向かない点に疑問を抱いている（富士市教委2005）。この疑問点については間門松沢第１号墳の立地状況、間門E-第６号墳の開口方位を合わせて考えることで、解決



第109図　鵜無ヶ淵・間門古墳群における想定される古墳へ至る道

の糸口がある。

第６章で、間門松沢第１号墳の立地状況からみると、古墳の南側、東側に古墳と同程度の高さをもつ自然の高まりがあり、その丘陵に遮られて東の赤淵川や南側からは、本墳はほとんど見えないと考えた。一方で、古墳の北側から北西側は一段低くなっており、さらに古墳の北側部分を方形に張り出すように地形を成形していた可能性を想定できることから、一段下がる北側～北西側を意識した古墳であることを推定した。

つづいて、間門E-第６号墳の開口方位は通常の古墳のように、等高線にほぼ直交する方向に墓壙を掘削し、斜面下位の南東に向かって開口する。したがって、古墳へは斜面下位から登っていた、またその方向へ意識が向いていたと考えられる。さらに本墳の南東にある間門E-第５号墳は露出した石室から南東方向へ向けて開口していることが想定されている（富士市教委1988）。

この４者の墓道や意識する方向を結ぶと、間門松沢第１号墳の西側から北西を通り、間門E-第５・６号墳と上ノ山第１号墳の間、河岸段丘の平坦面を通る道の存在が想定できる（第109図）。つまり、上ノ山第１号墳はこの道を意識して墓道を伸ばしていたのである。現在ここには県道元吉原大淵富士宮線が敷設されており、その道路とほぼ一致することから、古墳時代から現代まで赤淵川西岸を南北に繋ぐ道路として機能していたと考える。さらに、この道を南下すると、古墳時代後期～終末期の富士岡古墳群、南西に向かえば古墳時代前期の東坂古墳が位置しており、重要な交通路であった可能性が高い。

（３）須津古墳群の墓道について（第110図）

須津古墳群では、これまでに大塚団地第１・２（須津J-第139・140）号墳およびJ-第６・118・159号墳が調査され、J-10号墳（千人塚古墳）の主軸方位などが判明している。

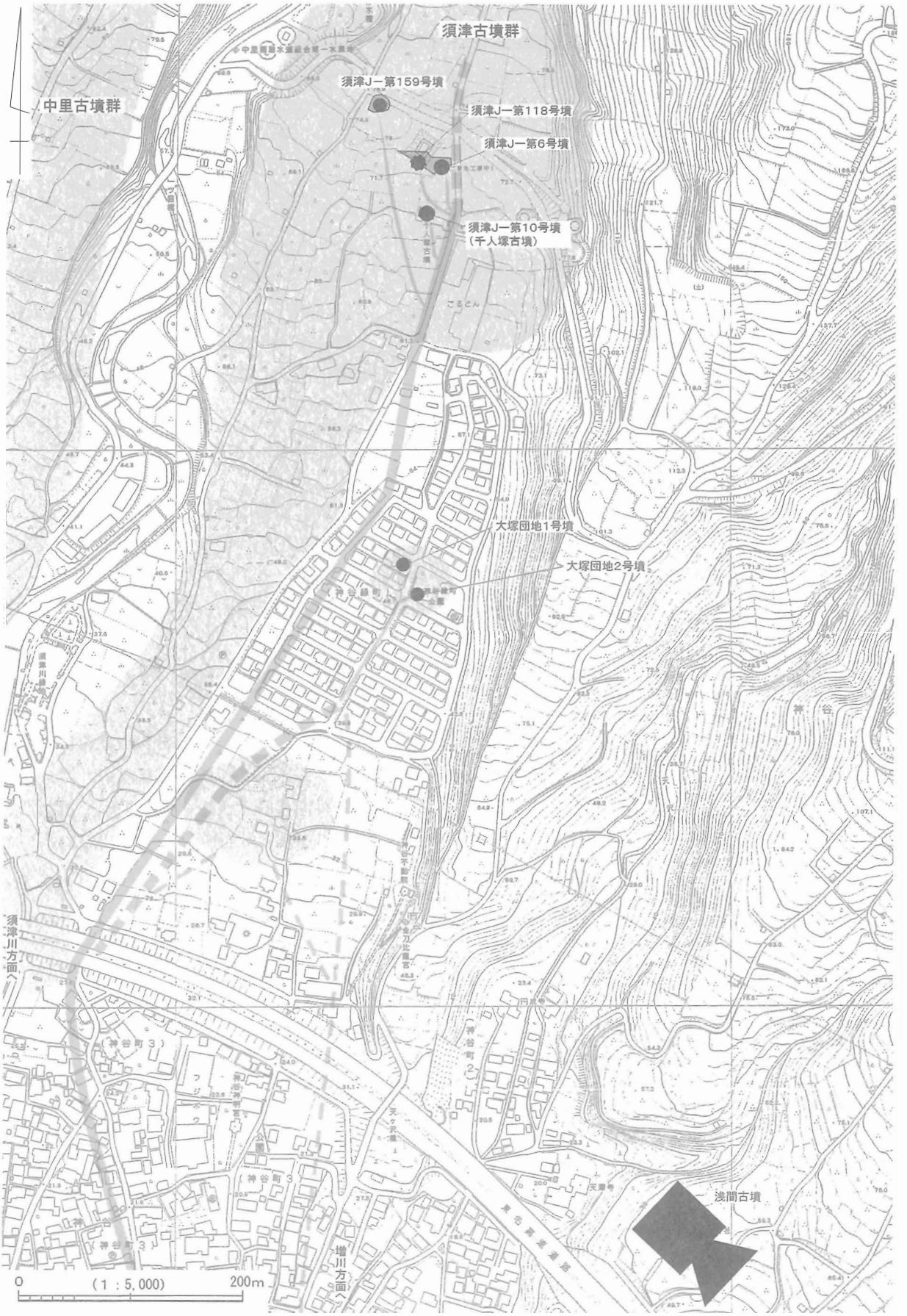
須津J-第６・118号墳の墓道はほぼ南に向かっていたと考えられることから、須津川を意識せず、古墳群の東側の尾根縁辺部や現在埋没谷となっている東側を意識していた可能性が高い。また、J-第159号墳の築造箇所は須津川に面する尾根縁辺部から50mの位置にあるにもかかわらず、石室はや南南東方向に開口している。浜松市半田山古墳群（浜松市教委1988）のように、墓道が急激にＬ字形に折れて須津川方向に向かっていた可能性も完全に排除できないが、開口方向に意識が向いていたとする方が妥当であろう。また、須津J-第10号墳（千人塚古墳）は、ほぼ南を向いていると想定できる。

この４古墳の開口方位や須津古墳群の立地状況を考慮すると、須津川方向ではなく古墳群が築造された尾根の東側の浅い谷を意識していたと考えることができ、そこに古墳へ至る道が存在したと考える。

一方、これらよりもやや南にある大塚団地第１・２号墳は近接する古墳であるが開口方位が第１号墳は南方向、第２号墳は南西方向に向いており、第１号墳から南に延びる墓道に第２号墳の墓道が接続する状況が確認できる。また、大塚団地第１・２号墳の南にはいくつかの古墳が存在しているが、大塚団地１・２号墳の報告時の旧地図（富士市教委1976）での谷地形をみると須津川が東名高速を通るあたりに向かい浅い谷があることからその谷方向に向かい墓道が伸び、それに今回調査した古墳から想定される墓道が合流していたと想定する。また、この合流地点より南側で須津川は大きく東側に流れを変えることから、それに沿って道（墓道）は東側に向かっていたと考えられる。

この際問題となるのが、古墳時代前期に築造された浅間古墳との関係である。第３章や本章第１節で上述したように東駿河地域において首長墓が継続的に築造された地域はなく、浅間古墳周辺でも同様の状況にあるため、浅間古墳と須津古墳群の直接的な系譜を導くことはできないが、古墳群の占地にあたり、浅間古墳との擬制的な関係を意識していた可能性を想定しておく必要があろう（註１）。

なお、ここで推測した道と現代の須津古墳群の中央を貫く道はほぼ一致しており、間門古墳群同様、この道が古墳時代まで遡る可能性が高いことが想定できる。



第110図　須津古墳群における想定される古墳へ至る道

（4）船津古墳群における墓道について（第111図）

船津古墳群は富士市の古墳群の中では調査された古墳数が多く、今回調査した第171号墳のほか、第62号墳、第202号墳、第206～217号墳が調査されている。このうち横穴式石室を埋葬施設とする第62号墳、第208～216号墳は春山川方向ではなく、南～東側の浅い谷地形に向けて墓道を伸ばす。一方、第171号墳は、南西側に向かい開口しており、西側にある谷地形に向かって墓道を伸ばしていたと考えられる。

第171号墳と第62、208～216号墳の間にも多くの古墳が築造されており、今後それらの調査を俟って再検討する必要があるが、現状で第111図のように一段高い尾根の下にある谷地形を登る道の存在が想定できる。さらに、第111図ではこれより南側は図示していないが、この地図のやや南の尾根先端部に存在する第202号墳は西側に向かって開口する。ここで想定した道が南下し、第202号墳が所在する尾根の裾を通過していたため、それを意識した開口方位であったと想定できる（註２）。

なお、この墓道は現在の第73号墳（稲荷塚古墳）の南側を通過し北上する道路とほぼ一致しており、この道路も古墳時代まで遡る可能性が想定できる。

（5）墓道について

今回調査した３古墳群５基の古墳と既往調査の古墳の墓道や開口方位を合わせて考えた場合、それぞれの古墳群近くを赤淵川、須津川、春山川が流れるが、各河川の河岸段丘の縁辺を道が通っていたわけではなく、河川に面していない尾根の縁辺部や谷筋を道として利用し、そこから各古墳へ向かって墓道を伸ばしていた可能性が高いと考えることができる。また、これらの道を南にいけば、浮島沼や低地部に至る。つまり、富士山・愛鷹山南麓には何本もの河川が尾根の合間を縫って南流するが、これらの河岸段丘縁辺部をさけた尾根緩斜面や谷筋に道が形成され、浮島沼から富士山・愛鷹山の尾根の合間を北上する道が想定でき、その道を利用（意識）して古墳が築造されたと考える。

なお、今回の分析からは、ここで導き出した道（墓道）は少なくとも鵜無ヶ淵・間門古墳群、須津古墳群、船津古墳群では古墳時代まで遡る可能性が高いことが判明するが、ここで推測する道とほぼ平行する形で、現在もそれぞれに主要道路が敷設されている。つまり、現在の尾根裾を通る主要な道路は、古墳時代から既に存在していたことが想定できる。このことから推定すれば富士山・愛鷹山麓の古くからある南北方向の道路で、その道路沿いに古墳が築造されている道路については、古墳時代まで遡る道であることが推測できる。

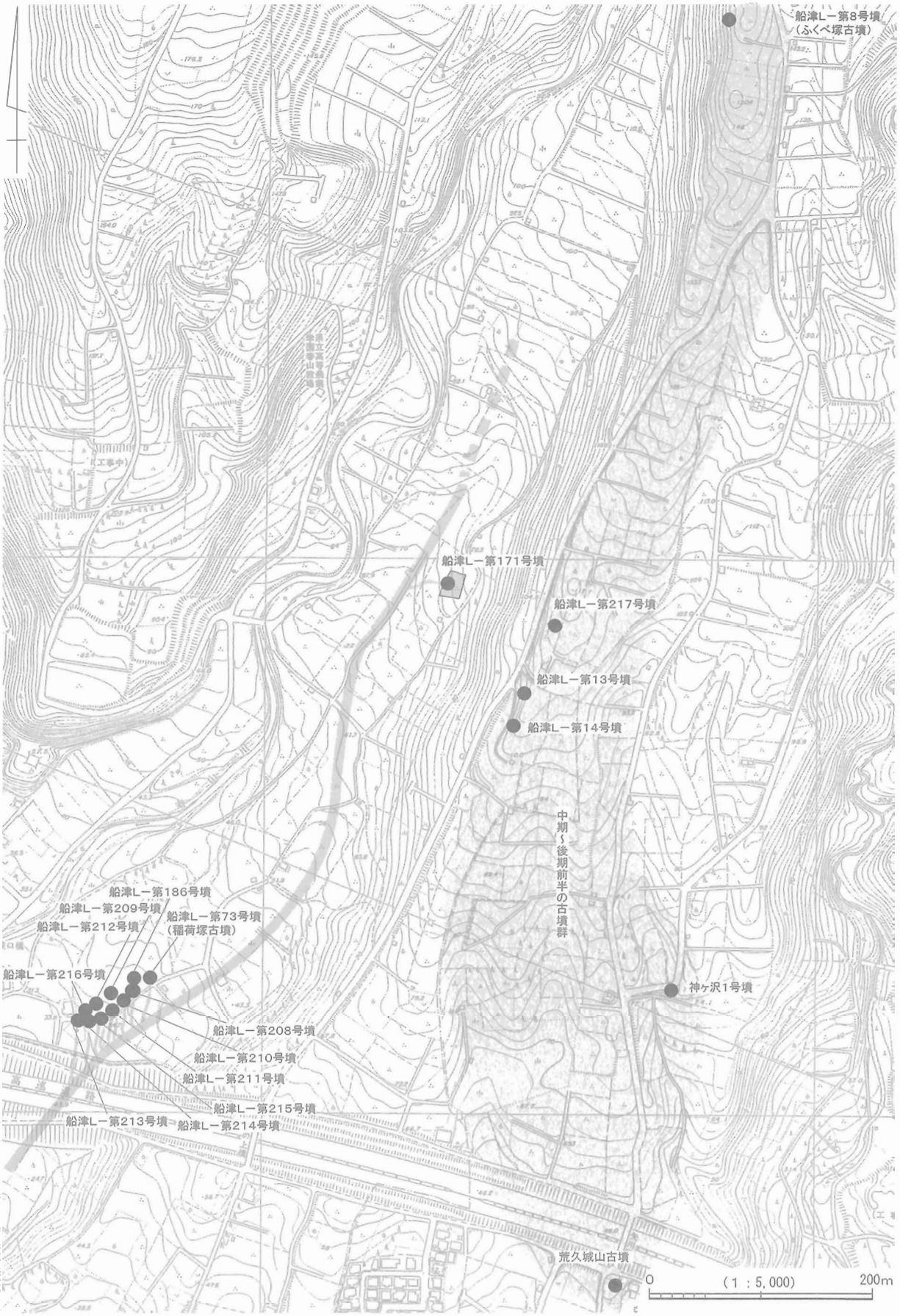
註

1　一方で、中里古墳群は一段高い尾根上に琴平古墳が築造され、後期の古墳も築造されている。古墳が密集する地域も須津川からはやや離れた箇所に存在しており、須津川に平行する方向に道が存在した可能性が高いが、狭義の須津古墳群とは別方向を意識していたと考えられ、広義に須津古墳群をまとめるのは適切ではない。今後、調査や詳細な検討を行った上で古墳群の再認定を行うべきであろう。

2　船津古墳群のうち、埋葬施設が横穴式石室ではないと想定される、ふくべ塚古墳、船津L-第13・14号墳、L-第217号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が立地する場所よりも一段高い尾根上に築造されている。このうちふくべ塚古墳は中期古墳であると考えられていることから、一段高い位置には横穴式石室が導入される以前の中期から後期前半の古墳が築造されていた可能性が高い。船津古墳群においても横穴式石室を埋葬施設とする古墳と、竪穴系埋葬施設の可能性が高い古墳を築造場所が異なるにもかかわらず、同一古墳群として一括しており、古墳群の単位群の認定については再検討すべきであろう。

参考文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009『矢川上Ｃ遺跡』
浜松市教育委員会　1988『半田山古墳群』
富士市教育委員会　1976『中里大塚団地古墳』
富士市教育委員会　1988『富士市の文化財（古墳編）』
富士市教育委員会　1991『船津L-第62号墳発掘調査概報』
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
富士市教育委員会　2005『上ノ山第１号墳』



第111図　船津古墳群における想定される古墳へ至る道

2．富士山・愛鷹山麓における横穴式石室の位置づけ

ここでは、船津L-第171号墳、須津J-第６・118・159号墳、鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳の横穴式石室について、残存状況の良好であった須津J-第６・159号墳を中心に富士山・愛鷹山麓の横穴式石室との比較検討からその位置づけを考えておきたい。

（１）造付箱形石棺と屍床仕切石について（第112図）

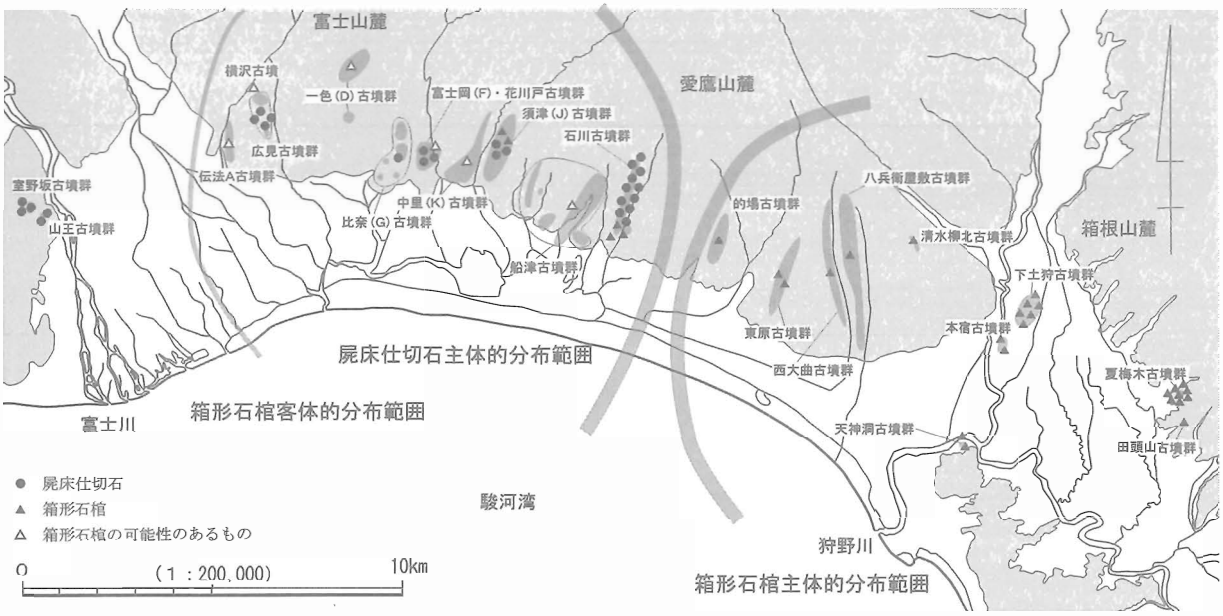
東駿河地域を特徴づけるものに無袖形横穴式石室とともに、石室内に設けられた造付の組合式箱形石棺と床面を仕切る屍床仕切石の存在がある（菊池2005）。以下、その分布の傾向から、今回調査した５基の古墳の位置づけをみておきたい。

箱形石棺の採用　箱形石棺を採用する地域は東駿河地域でも黄瀬川流域や愛鷹山東南麓などの東の地域に多く、現状で愛鷹山西南麓の群集墳での採用は少なく、富士山麓の古墳ではほとんど確認されないようである（註１，井鍋2003・2004・2005）。

屍床仕切石の採用　石室床面を区切る屍床仕切石は、富士山麓、愛鷹山西南麓に多いが、箱形石棺が多い箱根山西麓や愛鷹山東南麓にはほとんど存在しないといえる。また、屍床仕切石を採用した古墳と箱形石棺の両方を採用した古墳は、須津J-第139（大塚団地第１）号墳のみであり（註２）、箱形石棺の採用と屍床仕切石の採用は排他的であった可能性が高い。

箱形石棺と屍床仕切石の分布からみた地域色　屍床仕切石、箱形石棺の分布から東駿河地域をみると、①箱形石棺が多く、一部に刳抜式石棺が用いられ、屍床仕切石の採用がほとんど確認できない、箱根山西麓、愛鷹山東南麓地域、②箱形石棺と屍床仕切石の両者が採用される愛鷹山西南麓、③屍床仕切石が採用され、箱形石棺が用いられることは稀な富士山南麓～富士川西岸の３地域に大きく区分できる可能性が高い。②と③の地域区分が難しいが、沼津市石川古墳群（沼津市教委2006）で箱形石棺と屍床仕切石が混在すること、その西側の船津古墳群以西では箱形石棺が少なくなることを考慮すると、この石川古墳群とその東の東原古墳群・的場古墳群あたりで区分できる可能性が高い。

今回調査した５基の古墳は、箱形石棺が須津J-第６号墳、屍床仕切石が須津J-第118・159号墳、両者ともに確認されない船津L-第171号墳、間門E-第６号墳である。須津古墳群、船津古墳群は上記の②の地域、間門古墳群は上記③の地域にあたり、地域的特徴を反映しているといえる。



第112図　箱形石棺と屍床仕切石の分布

須津J-第６号墳の箱形石棺　須津J-第６号墳の箱形石棺は、井鍋誉之氏分類の配置ａ類であり、東駿河で最も多い配置方法を採用している。板石の組合せ方式は、縦継方式である。縦継方式は６世紀末以降東駿河地域で一般的に確認される方法である（井鍋2004）。

なお、須津J-第６号墳をはじめ東駿河地域の箱形石棺は蓋石を伴う「閉じられた」石棺である。東駿河の石室の系譜関係が想定される九州は「開らかれた」棺であり、箱形石棺からみると九州とは系譜関係が異なると考える。箱形石棺で「閉じられた棺」（かつ無袖形石室である）は、寺口忍海古墳群（H14号墳など，橿考研1988）や寺口千塚古墳群（14号墳，橿考研1990）などで確認できることから、これらの古墳群とは石室形態（井鍋2003，鈴木2003・2010）だけではなく、棺の取り扱い方も共通している。

須津J-第６号墳とJ-第118号墳からみた須津古墳群の古墳築造集団　J-第６号墳とJ-第118号墳は隣接する古墳であるが、前者は箱形石棺、後者は屍床仕切石を採用する。これらは特徴的な分布を示す内部施設であることから、石室構築にあたっての交流関係や系譜の違いを示している可能性が高い。古墳時代後期後半以降の隣接する古墳は同一集団による累代的な築造と考えられがちであるが、この２基は内部施設の相違からみれば、隣接しながらも同一古墳築造集団の累代的な築造ではなく、別の（性格を異にする）古墳築造集団により築造された古墳が隣接している可能性を想定しておく必要があろう。

（２）石室について（第113図）

各古墳の時期　今回調査した３古墳群５基の古墳は、船津L-第171号墳が遠江Ⅳ期前半、間門E-第６号墳が遠江Ⅲ期後葉、須津J-第６・159号墳ともに遠江Ⅲ期後葉に遡る可能性があるもののⅣ期前半の築造である可能性が高い。J-第118号墳もⅣ期前半の可能性が高い。

石室に共通する特徴　奥壁に１枚の鏡石を設置する点が共通し、これは東駿河地域の一般的傾向に合致する。また、側壁には幅１ｍ程度のやや大型の石材を用いる部分もあるが、基底石に２段目以上の石材よりも大きい石材を使用することはなく、各段に同様の大きさの石材が使用されている点も共通する。これは今回調査した５基だけではなく、富士山、愛鷹山西南麓の古墳群の一般的な特徴といえよう。

相違する特徴　一方、相違する点も確認できる。須津古墳群では３基の古墳で段構造が確認できるが、段構造部分に相違がある。東駿河地域の段構造部分の特徴については木ノ内義昭氏（木ノ内1998）が分類を行っているが、詳細に分類するとやや異なるためここでは個別にみておきたい。

須津J-第６号墳の段構造　６号墳の墓壙からやや離して複数の礫を置き、１～数段積み上げる方法は、東駿河地域の段構造では最も一般的な構造で、沼津市秋葉林１号墳や石川古墳群など、箱根山西麓を除く、富士山・愛鷹山麓で確認されている。この地域で最も採用された構築方法である。

須津J-第118号墳の段構造　118号墳は石室開口部に石室幅と同幅程度の大型の石材を、石の長軸を石室の主軸に直交させて据え框石としているが、このような段構造（框石）は富士市船津L-第209・213号墳、富士市横沢古墳、沼津市的場古墳で確認できる構造で、J-第６号墳のような段構造よりも少ないが、富士山麓・愛鷹山麓で広域的に確認できる構築方法である。

須津J-第159号墳の段構造　墓壙を竪穴状に深く掘り込み、その墓壙際に礫を積み上げる構造は、富士市中原第４号墳、片倉１号墳などで確認できる構造である。この方法については、木ノ内氏によれば富士川西岸の山王古墳群や妙見古墳群など比較的築造時期が新しい古墳群に多くみられる傾向にある（木ノ内1998）。この構造も東駿河地域で広域的に確認できる。

段構造の採用　このように一言で段構造といっても木ノ内氏の分類にあるように、いくつかの種類に区分することができる。こうした段構造（框石）の採用については、上記したように同一群集墳内でも異なる一方で、異なる群集墳に所在する古墳と共通することから、石室構築にあたって東駿河地域内で頻繁な情報交換・共有が行われた可能性が高い。

（3）須津J-第6号墳と須津J-第159号墳の差異からみた東駿河地域の無袖形石室

須津J-第6号墳とJ-第159号墳は同一古墳群にあって近接する古墳で石室に使用される石材や石室の形状などに共通性があるが、墓壙の形状、段構造の造りが大きく異なる（第40表）。また、この両者は後述するように鉄鏃の平根式の採用にも違いがあり、J-第6号墳が尖根式のみ、J-第159号墳は尖根式と平根式の両者を副葬している。上述したようにJ-第6号墳の箱形石棺は愛鷹山東南麓以東との関係が想定できる一方で、J-第159号墳の屍床仕切石は愛鷹山西南麓の特徴的な構造である。同一古墳群にあっても、このように石室の造り、副葬品が異なる点は、両者は交流範囲や性格が異なる集団により築造された古墳であったと考えることができる。

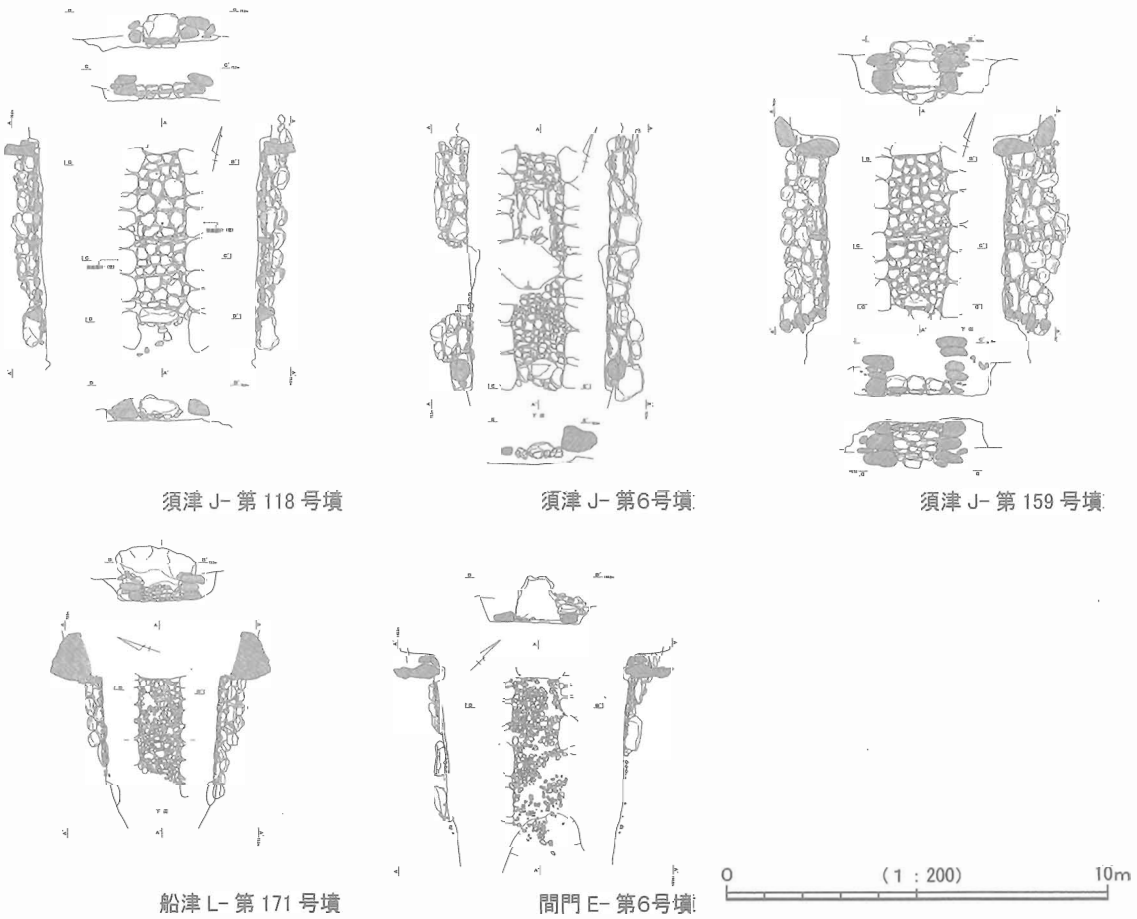
第40表　須津J-第6号墳とJ-第159号墳の比較

項目	須津J-第6号墳	須津J-第159号墳
埋葬施設	無袖形石室	無袖形石室
段構造	あり？	あり
段の高さ	0.4m	0.8m前後
墓壙	竪穴状	深い竪穴状
箱形石棺の有無	あり	なし
屍床仕切石の有無	なし	あり
鉄鏃	尖根式のみ	平根式＋尖根式
馬具	大型矩形円環轡	大型矩形円環轡
特徴的な副葬品	鉄	刀子が多い

（4）東駿河地域の古墳時代後期～終末期の墓制の展開

東駿河地域は、横穴式石室はすべて無袖形石室という全国的にみても非常に地域色の強い地域といえる。こうした類似性が高い東駿河地域は横穴式石室の構造分析からは、富士川西岸～富士山麓、愛鷹山西南麓、富士山東南麓～箱根山西麓の3小地域に区分できる（井鍋2003）。この区分は今回の調査した古墳の分析から導き出した箱形石棺や屍床仕切石の採用状況からも追認できる。

一方、それぞれの小地域内にある古墳すべてが同一構造というわけではない。須津J-第6・118・159



第113図　今回調査した横穴式石室の比較図

号墳の調査結果と既往調査の成果を勘案すると、箱形石棺や屍床仕切石の情報、段構造の構築方法など、①同一古墳群内の隣接する古墳間でも相違が確認できる、一方、②別地域・古墳群にある古墳の構造と共通することが確認できる。

つまり、①からは同一古墳群にあっても情報を共有せず、異なる石室構造を築く集団があり、また須津J-第６・118号墳の比較とも併せて考えると、別の集団により築造された古墳が隣接していることが判明する。また②からは、石室は古墳築造集団それぞれが全く独自に構築していたわけではなく、東駿河地域の中で情報共有を行う集団があったことが判明する。①・②から石室構築に当たっての情報共有や同一の性格を有する集団は近接する古墳間である場合もあれば、別の古墳群の古墳築造集団の場合もあったことが想定できる。

東駿河地域は同一古墳群に所在しながら隣接古墳間で石室の構造が異なる点は古墳群を築造した集団内で石室構築に当たっての規制の弱さを示していると考えられる。一方で他の古墳群や別の小地域の古墳との共通する方法を採用する点は東駿河内部で交流が活発に行われていた証拠となる。

さらに、石室情報の共有が同じような性格をもつ集団により共有されたとする仮定が正しければ、須津古墳群のように同一古墳群を構成する集団内に複数の性格（職掌など）を有する集団が含まれていたといえるとともに、同一の性格を有する集団が東駿河地域内に散在していたとも考えられよう。

註

1　確実に箱形石棺が確認されているのは須津J-第６・139号墳で、それよりも西側の東駿河地域では、伝法A-第２号墳や中里K-80号墳など数基で想定されるにすぎない。

2　報告書（富士市教委1976）の第５・６図をみると奥壁側に設置した箱形石棺の蓋石と同じ高さで箱形石棺の南側に板石の断面が確認できる。この石材が、蓋の一部だとすれば、屍床仕切石とされる部分と箱形石棺の間にも蓋石が存在したことになり、この部分に奥壁側の箱形石棺と直交する箱形石棺が存在した可能性もある。

また、沼津市石川23号墳（沼津市教委2006）に板石を用いた屍床仕切石の奥壁側に板石が３枚確認されており、この古墳も屍床仕切石と箱形石棺が組合わされている可能性がある。

参考文献

井鍋誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
井鍋誉之　2004「まとめ」『田頭山古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鍋誉之　2005「組合式箱形石棺をもつ横穴式石室」『研究紀要』11　静岡県埋蔵文化財調査研究所
植松章八　1976「組合せ式箱形石棺について」『中里大塚団地古墳』 富士市教育委員会
橿原考古学研究所　1988『寺口忍海古墳群』
橿原考古学研究所　1990『寺口千塚古墳群』
菊池吉修　2005「山麓の古墳と海辺の古墳」『沼津市史』通史編上巻　沼津市
菊池吉修　2008「駿河における無袖式石室」『東国に伝う横穴式石室』 静岡県考古学会
菊池吉修　2010「駿河」『東日本の横穴式石室』 雄山閣
木ノ内義昭　1998「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義」『静岡の考古学』『静岡の考古学』編集委員会
静岡県考古学会　2003『静岡県の横穴式石室』
志村　博　1981「終末期の竪穴状石室について」『東富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』
志村　博　1987「後期古墳に於ける特異な石室構造について－富士市域を中心として」『静岡県博物館協会研究紀要』11　静岡県博物館協会
鈴木一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』 三河古墳研究会
鈴木一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』 雄山閣
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
富士市教育委員会　1976『中里大塚団地古墳』

3．須津J-第６号墳出土の鉄針について

（1）針について

分析対象としての針　須津J-第６号墳から鉄針が最少４本（最多で６本）出土した。金属製針は全国的にも古墳から出土することが少なく、形態が単純であるため研究の対象ともなりにくいことから集成も行われておらず、針副葬の意味を考える上で現状では情報が欠如していると言わざるを得ない。ここでは、本墳の評価を行う上で欠かすことができない針の集成を行った上で若干の検討を加えたい。

針の認定　金属製の細長い棒状で、先端が尖るものを「針状金属製品」とし、そのうち針孔が確認されるものを「針」とする。針孔は非常に小さく、錆化が進行した場合確認できなくなることが想定されるため、奈良文化財研究所遺跡データベース（註１）などを参考に、「針状金属製品」を集成・提示する（第41表，註２）。

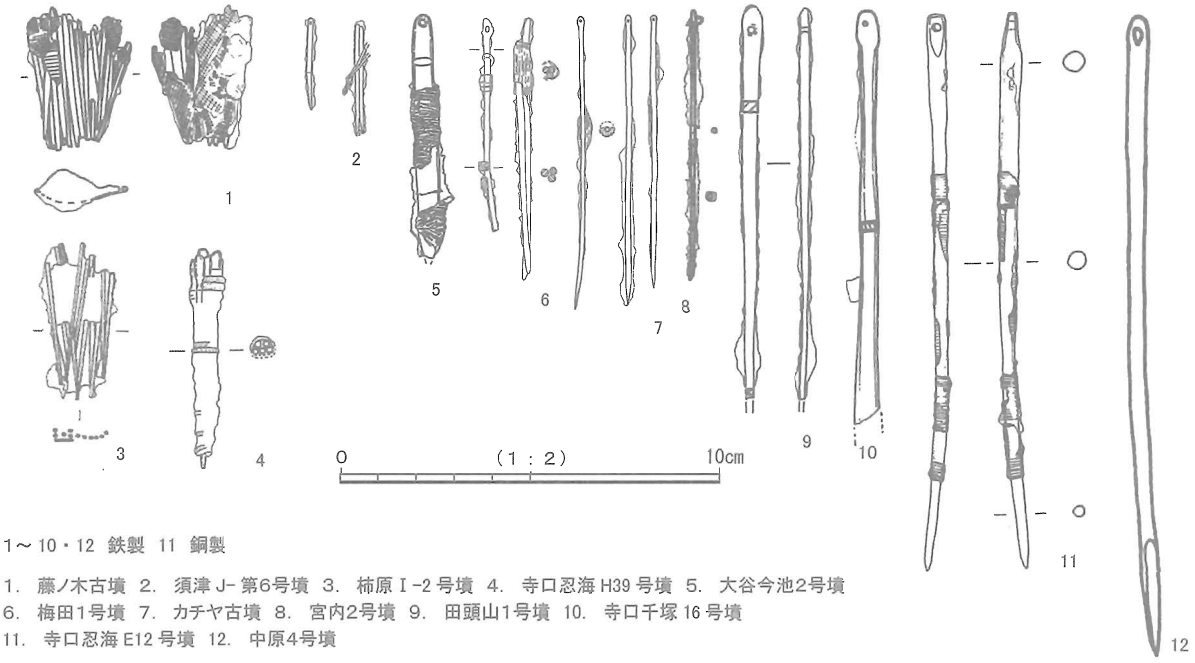
（2）針出土古墳の分布

針あるいは針の可能性のある「針状金属製品」（註３）については、現状で第41表に示したように約100遺跡が確認できる。この他に集落などから多数が出土していると想定できる。針状金属製品は、北

第41表　針状金属製品出土遺跡・古墳一覧表（古墳時代）

No	遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	針孔
1	森北１号墳	福島県会津坂下町	後方	41.4	木棺直葬	未
2	廓内横穴墓群	福島県白河市	－	－	横穴墓	未
3	中島笹塚１号墳	栃木県宇都宮市	円	17.8	不明	▲
4	前橋天神山古墳	群馬県前橋市	後円	129	粘土槨	未
5	城山１号墳	千葉県香取市	後円	68	横穴式石室	未
6	山王山古墳	千葉県市原市	後円	69	粘土槨	×
7	水神山古墳	千葉県我孫子市	後円	69	粘土槨	未
8	上出島２号墳	千葉県坂東市	後円	56	粘土槨	未
9	原１号墳	茨城県稲敷市	後円	29.5	木棺直葬	未
10	西山９号墳	石川県能美市	古墳	－	横穴式石室	×
11	田頭山１号墳	静岡県三島市	円	10.8	横穴式石室	◎
12	須津J６号墳	静岡県富士市	円	10	横穴式石室	◎
13	中原４号墳	静岡県富士市	円	11	横穴式石室	◎
14	岩田山21号墳	静岡県藤枝市	円	－	木棺直葬	未
15	春林院古墳	静岡県掛川市	円	30	粘土槨	×
16	東之宮古墳	愛知県犬山市	後方	72	竪穴式石室	×
17	船来山古墳群	岐阜県本巣市	円	－	－	未
18	昼飯大塚古墳	岐阜県大垣市	後円	150	竪穴式石室	×
19	龍門寺１号古墳	岐阜県岐阜市	円	10.7	竪穴式石室	×
20	石山古墳東槨	三重県伊賀市	後円	120	粘土槨	未
21	雪野山古墳	滋賀県東近江市	後円	70	竪穴式石室	×
22	湧出山Ｃ古墳	滋賀県高月町	長方	16	木棺直葬	未
23	芝ヶ原11号墳	京都府城陽市	後円	56.4	粘土槨	未
24	西山１号墳	京都府城陽市	後方	80	粘土槨	未
25	寺戸大塚古墳	京都府向日市	後円	95	竪穴式石室	×
26	井ノ内稲荷塚古墳	京都府向日市	後円	46	横穴式石室	×
27	里ヶ谷３号横穴	京都府京丹後市	－	－	横穴墓	×
28	園部垣内古墳	京都府南丹市	後円	82	木棺直葬	未
29	平山古墳	京都府南丹市	円	17	木棺直葬	×
30	瓦谷１号墳	京都府木津川市	後円	51	粘土槨	×
31	入谷西D1号墳	京都府与謝野町	方	－	竪穴式石室	未
32	上人ヶ平16号墳	京都府木津川市	方	－	礫敷	未
33	寺口千塚16号墳	奈良県葛城市	楕円	18	横穴式石室	◎
34	寺口忍海Ｅ12号墳	奈良県葛城市	円	11	横穴式石室	◎
35	寺口忍海H34号墳	奈良県葛城市	円	15	横穴式石室	▲
36	寺口忍海H39号墳	奈良県葛城市	－	－	横穴式石室	▲
37	桜井茶臼山古墳	奈良県桜井市	後円	207	竪穴式石室	未
38	藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	円	48	横穴式石室	◎
39	ベンショ塚古墳	奈良県奈良市	後円	70	粘土槨	未
40	双築古墳	奈良県桜井市	円	30	粘土槨	未
41	大谷今池２号墳	奈良県大和高田市	円	24	木棺直葬	◎
42	火野谷山第２号墳	奈良県葛城市	円	14	木棺直葬	未
43	大和二塚古墳	奈良県葛城市	後円	60	横穴式石室	×
44	奥ノ芝第２号墳	奈良県宇陀市	古墳	－	横穴式石室	×
45	見田大沢１号墳	奈良県宇陀市	後円	22	木棺直葬	×
46	後出６号墳	奈良県宇陀市	円	10	木棺直葬	▲
47	北原西１号墳	奈良県宇陀市	後方	31.5	木棺直葬	×
48	タニグチ１号墳	奈良県高取町	円	20	粘土槨	×
49	タニグチ３号墳	奈良県高取町	円	12	木棺直葬	×
50	風吹山古墳	大阪府岸和田市	帆立	71	粘土槨	×
51	心合寺山古墳	大阪府八尾市	後円	130	粘土槨	未
52	カチヤ古墳	兵庫県豊岡市	円	19	木棺直葬？	◎
53	中ノ郷・深谷１号墳	兵庫県豊岡市	方	21	木棺直葬？	×
54	茶すり山古墳	兵庫県朝来市	円	36	粘土槨	未
55	梅田１号墳	兵庫県朝来市	円	28	木棺直葬	◎
56	梅田３号墳	兵庫県朝来市	円	10	木棺直葬	×
57	若水古墳群	兵庫県朝来市	古墳	－	－	未
58	大寺山古墳群	兵庫県香美町	古墳	－	－	未
59	崎山14号墳	和歌山県印南町	円	14	－	未
60	宮内２号墳	鳥取県湯梨浜町	後円	23	箱形石棺	▲
61	古郡家１号墳	鳥取県鳥取市	後円	90	粘土槨	未
62	桂見２号墳	鳥取県鳥取市	方	28	木棺直葬	未
63	糸谷３号墳	鳥取県鳥取市	古墳	－	石棺	未
64	浜坂横穴墓群	鳥取県鳥取市	－	－	横穴墓	未
65	日下古墳群	鳥取県米子市	円	－	－	未
66	上島古墳	島根県出雲市	円	15	竪穴式石室	未
67	小丸子山横穴墓	島根県安来市	－	－	横穴墓	未
68	松本１号墳	島根県雲南市	後方	50	粘土槨	未
69	神原神社古墳	島根県雲南市	方	29	竪穴式石室	×
70	七つグロ古墳	岡山県岡山市	後方	45.1	竪穴式石室	未
71	金蔵山古墳	岡山県岡山市	後円	165	竪穴式石室	×
72	月の輪古墳	岡山県美咲町	円	50	粘土槨	未
73	井尻野１号墳	岡山県総社市	方	25	箱形石棺	未
74	西山26号墳	岡山県総社市	方	20	粘土槨	▲
75	山の神古墳	広島県福山市	円	14	横穴式石室	未
76	山ノ神第１号墳	広島県府中市	円	12	箱形石棺	未
77	赤妻古墳	山口県山口市	後円	40+	舟形石棺	×
78	畠田遺跡	山口県山口市	－	－	－	未
79	国森古墳	山口県田布施町	方	40	箱形木棺直葬	未
80	糠塚横穴群	山口県長門市	－	－	横穴墓	未
81	雉之尾１号墳	愛媛県今治市	後方	30.5	箱形木棺	未
82	若草町遺跡４号墳	愛媛県松山市	円	7±	横穴式石室	▲
83	老司古墳	福岡県福岡市	後円	75	横穴式石室	×
84	鋤崎古墳	福岡県福岡市	後円	62	横穴式石室	▲
85	神領２号墳	福岡県宇美町	円	30	粘土槨	未
86	欠塚古墳	福岡県筑後市	後円	45	横穴式石室	未
87	沖ノ島19号遺跡	福岡県宗像市	－	－	祭祀遺跡	未
88	蒿蒲浦１号墳	福岡県太宰府市	円？	－	粘土槨	未
89	柿原Ｉ２号墳	福岡県甘木市	円	16	横穴式石室	▲
90	萱葉古墳群１号墳	福岡県志免町	円	20	木棺直葬	未
91	七夕池古墳	糟屋郡志免町	円	－	竪穴式石室	▲
92	惣社古墳	福岡県みやこ町	円	28	箱形石棺	未
93	熊本山古墳	佐賀県佐賀市	円	－	舟形石棺	▲
94	市ノ瀬10号 地下式横穴墓	宮崎県国富町	－	－	地下式横穴墓	未

※１　墳形　後円＝前方後円墳　後方＝前方後方墳　長方＝長方形墳　楕円=楕円形墳　円＝円墳　方＝方墳　帆立＝帆立貝形古墳　古墳＝墳形不明　「－」＝横穴墓
※２　針孔　◎＝針孔あり　▲＝針孔は報告されないが出土状況から針の可能性が高いもの　×＝報告書では記載なし　未＝未確認



1～10・12　鉄製　11　銅製

1．藤ノ木古墳　2．須津J-第6号墳　3．柿原Ⅰ-2号墳　4．寺口忍海H39号墳　5．大谷今池2号墳
6．梅田1号墳　7．カヂヤ古墳　8．宮内2号墳　9．田頭山1号墳　10．寺口千塚16号墳
11．寺口忍海E12号墳　12．中原4号墳

第114図　古墳出土の針（一部針と想定するものを含む）

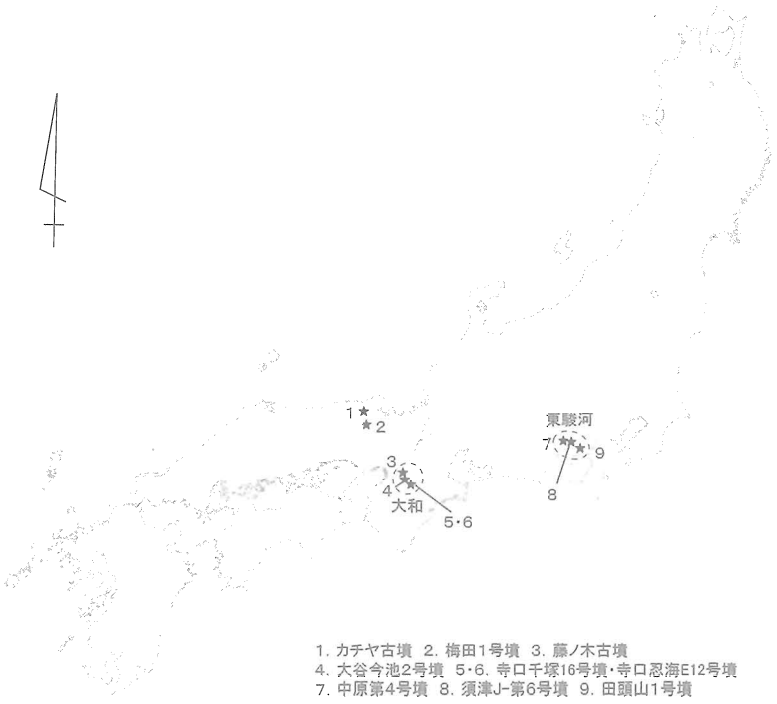
は福島の森北１号墳から南は宮崎の市ノ瀬10号地下式横穴墓まで全国的に確認されている。同一地域に集中することは少なく、奈良の葛城市周辺と宇陀市周辺、東駿河地域など数地域である。

このうち針孔が確認されたものは、須津J-第６号墳、三島市田頭山１号墳（静岡埋文研2004）、富士市中原第４号墳（前田2008）、奈良県寺口忍海E12号墳（橿考研1988）、同寺口千塚16号墳（橿考研1991）、同藤ノ木古墳（橿考研1990）など約10例に過ぎない（第41表，第114図）。この中では、東駿河にほぼ同時期に３古墳が集中することは、奈良県葛城市の寺口千塚古墳群、寺口忍海古墳群など葛城に集中することと同様、特筆すべきであろう。

（３）金属製針の分類

針は用途により長さや断面形状が異なることが想定されるため、それが分類において重要な要素となる。現代では大きさや形状により布用、皮革用、網用などに分類されているが、この分類を古墳時代に援用できるかどうか現状では判断できないため、ここでは分類を行うにとどめ、現代の針の分類との比較は行わない。

長さ　金属製針をまず長さにより分類する。現在では一寸針など尺度に合わせて針の長さが決まっているが、針は非常に細



1．カヂヤ古墳　2．梅田1号墳　3．藤ノ木古墳
4．大谷今池2号墳　5・6．寺口千塚16号墳・寺口忍海E12号墳
7．中原第4号墳　8．須津J-第6号墳　9．田頭山1号墳

第115図　針出土古墳分布図（針状金属製品出土古墳は除く）

く先端まで確実に残存するものが少ないため、おおよその分類に留めたい。金属製針は須津J-第６号墳のように５㎝未満のもの（ａ類）、梅田１号墳のように５㎝以上10㎝未満のもの（ｂ類）、田頭山１号墳や中原第４号墳のように10㎝以上20㎝未満のもの（ｃ類）、正倉院南倉収蔵品のように20㎝を超えるもの（ｄ類）がある（註４）。

断面　針の横断面は須津J-第６号墳のように円形のもの（Ｘ類）だけではなく、田頭山１号墳のように方形のもの（Ｙ類）、奈良県大谷今池２号墳のようにやや幅広い杏仁形のもの（Ｚ類）がある（註５）。

材質　針の材質は鉄製、銅製が確認される。なお、正倉院には銀製針も所蔵されており、古墳時代にも銀製の針が存在する可能性がある。この他に骨製や木製針が存在するが、今回は取り扱わない。

須津J-第６号墳の針　須津J-第６号墳出土針は、上記の長さａ類、断面Ｘ類、材質は鉄製であり、藤ノ木古墳の針と類似する。また、副葬段階で複数が束ねられた状態である点も類似している。この他、寺口忍海H39号墳や福岡県柿原Ⅰ-2号墳の針状鉄製品も束ねられた状態で長さも同程度である。須津J-第６号墳例のような大きさ・所有形態は古墳時代後期～終末期には全国的に一般的な針の形態であった可能性が高い。

（４）金属製針の変遷

日本列島での金属製針の初現は、弥生時代まで遡る可能性が高い。筆者が確認できたものは現状で古墳時代前期までは確実に遡る。確実に針と断定できるものでは、前期後半～中期初頭の兵庫県カチヤ古墳（ｂ類）があり、兵庫県梅田１号墳（ｂ類）が中期前半に位置づけられる。前期古墳で、針状金属製品が多いことから、今後の調査で針孔が確認され、確実に針と特定できるものが確認される可能性が高い。したがって、前期末～中期前半には少なくともｂ類は存在し、後期以降はａ～ｃ類が存在し、奈良時代には正倉院例からは20㎝を超えるｄ類も存在していた可能性が高い。

また、古墳時代後期以降は少なくとも複数種類の針が存在することから、後期には用途別にさまざまな大きさの針が使用されていた可能性が高い。

（５）針の保有方法

針は細くそのままで保持することは危険である。古墳からの出土状況をみると、梅田１号墳（兵庫県教委2002）、カチヤ古墳（兵庫県教委1983）など多くが木・竹製容器（針筒）に入れられた状態であり、さらにその容器を布などに包んで副葬していたことがわかる（菱田2002）。また、柿原Ⅰ-2号墳出土例が針だとすれば、11本纏まったものに薄い板状のものが付着することから木箱（針箱）に入れて副葬されたと報告される（福岡県教委1986）。このように針筒や針箱に納めて副葬されたものが多い。

一方、寺口忍海H39号墳（橿考研1988）では、針状鉄製品（針の可能性が高い）を紐で巻きつけて副葬しており、針筒には入れられていない。針束を縛って所持・副葬することもあった。

須津J-第６号墳出土の針は布・木材の痕跡の両者が確認できないことから断定できないが、須津J-第６号墳出土刀子などには木質が残存しているが、針にはそれが確認できないことから、針筒には入れられず寺口忍海H39号墳の針状鉄製品のように紐を巻きつけて(布袋に入れて)副葬していた可能性がある。

（６）針の意義

①針と被葬者の性別

古墳被葬者と針の関係　上述した針を副葬する古墳で、人骨が残存し性別が明確なのは、奈良県藤ノ木古墳と兵庫県カチヤ古墳である。人骨鑑定の結果、前者は男性、後者は女性であることが判明している。このほか人骨が出土し性別まで判明していることはほとんどなく、現状ではどちらの性別に対して

の副葬が多いのか述べることはできない。針が副葬された被葬者に女性、男性のどちらが多いかについて、今後類例が増加するのを俟って検討する必要がある。

『万葉集』にみる針保有者　『万葉集』には、防人として旅立つ橘樹郡の上丁物部真根が詠んだ歌に対する妻椋椅部弟女の反歌「草枕　旅の丸寝の　紐絶えば　我が手と付けろ　これの針もし」(4420) がある。これは、防人として旅立つ夫が旅路にあたり針を保持して出かけたこと、穴があいた場合には自ら補修したことがわかる。

また、大伴宿祢池主と下吏のやり取りの歌、「草枕旅の翁と思ほして針ぞ賜へる縫はむ物もが」(4128)、「針袋取り上げ前に置き返さへばおのともおのや裏も継ぎたり」(4129)、「針袋帯び続けながら里ごとに照らさひ歩けど人もとがめず」(4130) などからも男性が旅路に際し針を携帯し、男性も針を使用していたことがわかる。藤ノ木古墳の被葬者が実際に針仕事をしたかどうかは明確ではないが、男性にも副葬されていることから、『万葉集』の記事は古墳時代にも遡らせて考えることができるだろう。

針と性別　針が副葬された古墳被葬者と、文献から想定される針保有者を分析すると、針は必ずしも女性のみが保有するものではなく、文献、出土例の双方から男性も保有・使用していたことが判明する。つまり針の副葬＝女性の被葬者とするのは早計であろう。

須津J-第6号墳と性別　須津J-第6号墳からは、人骨が出土し、一人以上の成人が埋葬されていた可能性が高いが、残念ながら性別は特定できない。

②針保有の意義

ここでは現状で、針から想定できる被葬者像について考えられるイメージを挙げて今後の検討に当たっての基礎資料としたい。

裁縫技術との関係　正倉院御物（南倉）の針は、「七孔針」と称され、乞巧奠（七夕）の際に裁縫技術の向上を願う儀式に使用されたと考えられている。つまり、針副葬の意義は、裁縫・服飾生産に関わる技能保持集団やそれを管掌していた集団を表徴するものであろう。

また、東駿河地域の横穴式石室とその副葬品を検討した鈴木一有氏は、奈良県葛城地域の石室と東駿河地域の石室の共通性とともに、この地域の寺口忍海古墳群や寺口千塚古墳群で針が出土していることとの関連性も指摘し、東駿河地域にはこれまで注目されていた鍛冶技術、馬匹生産だけではなく裁縫技術を含めた手工業生産に長けた集団があったことを想定している（鈴木2010)。

したがって、鈴木氏が指摘するように針副葬が表徴する被葬者像は、針を用いた手工業（裁縫）生産に携わった、あるいは管掌した人物（集団）であることが想定できる。

鉄器生産との関係　富士市中原第4号墳では鍛冶具とともに出土しており、自ら生産したものを副葬した可能性もあり、鍛冶工具などとともに出土した場合は鍛冶生産との関連も想定できる。

玉造との関係　丸玉・小玉などの玉類を紐・糸を通して一連の首飾りや足飾りなどとして製品化していく上で、糸通しとして利用されていたことも想定できる。この場合は、副葬された古墳の近くで玉造の工房などが確認されていることが条件となろう。また、b類以上の長い針で行っていたとは考えにくいため、a類であることも条件となろう。

旅支度　上記した『万葉集』にあるように、針は遠出の旅と関係し、男性でも破けた布を縫っていた可能性が高い。遠出の旅を長距離の移動とすれば、交易等の長距離の輸送などを象徴する可能性も考えられるだろう。

さらに戦国時代には武士が携行し、足にできた水豆の水を抜くのに使用したという。藤ノ木古墳などでは男性に副葬されていたこと、須津J-第6号墳のように針以外では手工業生産に携わっていたことを示す副葬品がないことなどから、服飾生産を管掌するだけではなく、長距離輸送や軍事的な遠征の象徴

であった可能性も考慮しておくべきかもしれない。

（7）須津J-第6号墳出土針から想定される被葬者像

以上、簡単ではあるが、針状金属製品出土古墳・遺跡の一覧表を示し、針の分類をおこなった上で針の分布傾向や針の保有状況、文献等から想定される針保有の意義について考えた。

須津J-第6号墳では、少なくとも4本のａ類の針が纏まって出土した。一人以上の埋葬があった可能性が高いが、女性が埋葬された確証はない。今後さらなる針出土古墳の分析を進めなければ、早計結論は出せないが、須津J-第6号墳の被葬者像はまず第1には服飾裁縫の手工業生産を実際に行っていたあるいはそれを管掌した集団が築造した古墳の可能性を想定できる。

一方で、想像を逞しくすれば、旅路で針の携帯が想定できることから、針が交易や軍事的な役割を担っていた集団に象徴的に副葬された可能性も想定でき、それを頭の片隅に留めておく必要があろう。

（8）針出土古墳から見た東駿河

繰り返しになるが、東駿河地域では須津J-第6号墳、田頭山1号墳、中原第4号墳の3基で針が確認されている。東駿河といっても30㎞はなれた箇所に散在しており、局所的に集中するわけではないが、裁縫技術と深くかかわりがある可能性が高い針が複数の古墳から出土する点は、裁縫技術を有する集団が複数地域に存在し、活動を行っていた可能性が高いことがわかる。想像の域を出ないが、針の副葬が、自らの職掌や地位を表示するものであると仮定すれば、一般的な服飾裁縫技術ではなく、やや特殊な裁縫技術をもつ手工業技術者集団を表示している可能性も高い。

註

1　奈良文化財研究所遺跡データベース（奈文研ＨＰ　公開データベース・遺跡データベース）
　アドレス　http://www.nabunken.gp.jp/database/index.html
2　なお、「針状金属製品」として集成したもののなかに、玉類などを穿孔するための錐が存在する可能性が高い。錐は弥生時代中期から存在しており、形状も類似することから厳密に区分することは難しい。今回は、先端が尖る細身の金属製品を集成する。
3　針状鉄製品のうち、副葬位置や方法により、針状金属製品の近在に農工具や鉄鏃がなく束ねられた状態で副葬されたもの、あるいは容器に数本が納められた状態で副葬されたと想定されるものについては針孔がなくとも針と認定できる可能性が高い。
4　正倉院南倉には儀式用の銀・銅・鉄製針が7本納められており、30㎝の大型のものが存在する。古墳時代のものでは確実に20㎝を超えるものが確認できないが、この事例から20㎝を超えるものが存在する可能性を想定して、ｄ類20㎝以上を設ける。
5　この他、先端が三角形のものが想定できる。先端三角形の針は現代では「三角針」と呼ばれ、皮革製品に用いられる針である。古墳時代中期以降馬具生産には皮革用の針が必要だったと考えられることから、今後は針の先端の形状を十分観察する必要がある。

参考文献

橿原考古学研究所　1988『寺口忍海古墳群』
橿原考古学研究所　1990『斑鳩藤ノ木古墳　第一次発掘調査報告書』
橿原考古学研究所　1991『寺口千塚古墳群』
橿原考古学研究所　2003『大谷今池古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『田頭山古墳群』
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖横穴式石室』　雄山閣
鳥取県教育文化財団　1996『宮内第1遺跡　宮内第4遺跡　宮内第5遺跡　宮内2・63～65号墳』
福岡県教育委員会　1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』6　上巻
菱田淳子　2002「1号墳」『梅田古墳群Ⅰ』兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会　1983『半坂峠古墳群・辻遺跡』
兵庫県教育委員会　2002『梅田古墳群Ⅰ』
前田勝己　2008「中原第4号墳」『東国に伝う横穴式石室』　静岡県考古学会
渡辺貞之　1979「針」『世界考古学辞典』

図の出典

第114図　中原第4号墳（前田2007）、田頭山1号墳（静文研2004）、寺口忍海E12・H39号墳（橿考研1988）、寺口千塚16号墳（橿考研1991）、藤ノ木古墳（橿考研1990）、大谷今池2号墳（橿考研2003）、梅田1号墳（兵庫県教委2002）、カチヤ古墳（兵庫県教委1983）、宮内2号墳（鳥取県1996）

４．船津古墳群、須津古墳群、鵜無ヶ淵・間門古墳群の馬具と武器について

（１）馬具

今回報告した５基の後期～終末期の古墳および『富士山・愛鷹山麓の遺跡』（静岡埋文研2010）で報告した平椎第２号墳の６基中４基から馬具が出土した。平椎第２号墳は鐙金具であるが、須津J-第６・159号墳、間門E-第６号墳は、いずれも鉄製轡で、それも大型矩形立聞をもつ環状鏡板付轡（以下，円環轡）である。

東駿河地域に限らず、東日本には大型矩形立聞円環轡と鉸具造立聞円環轡が多く確認される。この両形式は規格性が高いと考えられていること（岡安1985）、板状の矩形立聞や鉸具を環に鍛接する技術が必要であることから畿内王権により生産・技術管理され、地方に配布された轡であると考えられている（尾上1998，栗林2005）。

この２種の轡が、東駿河地域には今回出土した３事例を含めて、大型矩形立聞12例、鉸具造立聞９例出土しており、東駿河地域で出土した円環轡24例中21例（約９割）がこの２種類で占められる。これは東海地方の中でも非常に多く、東遠江地域とほぼ同数が副葬されている（大谷2006）。調査された古墳数からすれば非常に多くの古墳に馬具が副葬されていることが予想でき、この出土馬具数量とのちに牧が設置されること、東駿河地域に「金刺舎人」や「他田舎人」という中央に出仕し王宮の周囲を警護したと想定される舎人が存在したと想定されることから、岡安光彦氏は駿河地域に騎馬軍団「東国舎人騎兵」が存在したことを想定している（岡安1986）。

東駿河地域は上述したように古墳時代後期前半までの古墳は多くはないが、後期後半、それも後期末（遠江Ⅲ期後葉）に近い時期から急激に古墳築造数が増加する。後期前半までは荒久城山古墳のｆ字形鏡板付轡だけであったが、古墳の急増に伴って後期後半以降中原第４号墳などでの副葬を皮切りに馬具副葬数も急増し、軍事色を強めている。また、花川戸第１号墳と横沢古墳で馬骨が出土した点から馬匹生産を行っていたことも想定されている（鈴木2003・2010）。

このように畿内王権と関係する馬具が多くの古墳から出土している点、馬匹生産が行なわれた可能性が高い点は、岡安氏が想定するような軍事的な集団が存在した可能性を想定しておく必要があるとともに、畿内王権との軍事的な深い関係があったと推測できる。

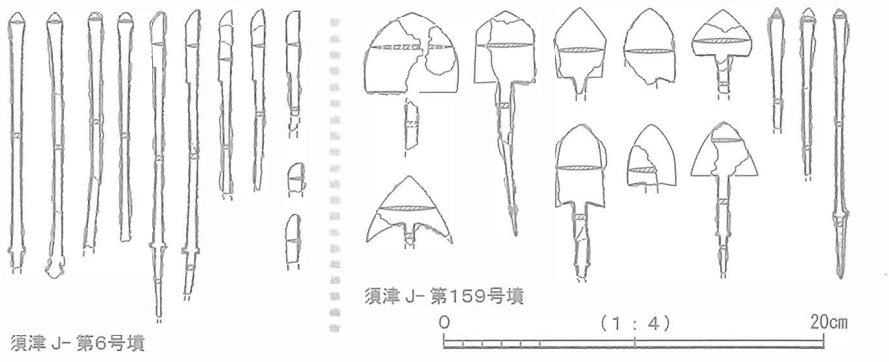
（２）鉄鏃

尖根式鉄鏃と平根式鉄鏃の保有の差異　－保有形態における須津J-第６号墳と第159号墳について－

須津古墳群では、J-第６号墳・159号墳で鉄鏃が出土しているが、前者は平根式を含まず尖根式のみ、一方後者は平根式・尖根式を保有するという、鉄鏃の保有形態の差異が確認できる。両者は前者の石室規模が6.5m以上、後者が4.75mと石室に２m近くの差があるが、副葬されている遺物はほとんど変わらないことから階層的にはそれほど大きな差はなく、また時期的にも大きな隔たりはない。

では、副葬された鏃の種類の違いが何故あらわれてくるのか。

東駿河の古墳での副葬のあり方にも両者が確認できる。平根式・尖根式の両方



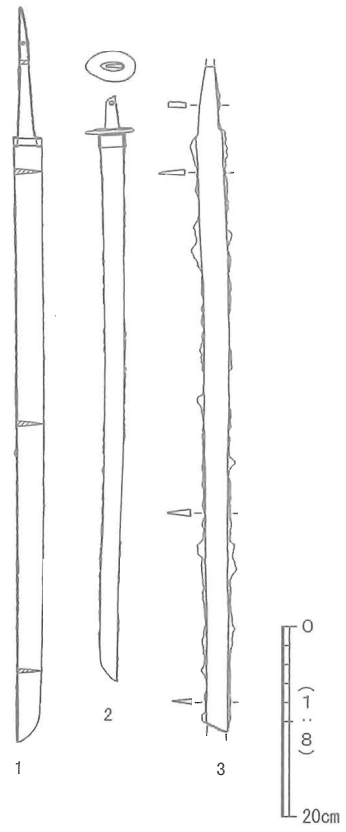
第116図　須津J-第６・159号墳副葬鉄鏃の相違

を副葬する古墳が多いが、沼津市東原１・２・５号墳、清水柳北１・２号墳などでは尖根式のみを多量に副葬している。今後詳細な検討を加えなければならないが、箱形石棺を採用する古墳に尖根式鉄鏃のみを副葬する古墳が目立つため、関連性に注目すべきである。箱形石棺を採用する集団の中で平根鏃を用いない規範のようなものが共有されていたのだろうか。箱形石棺と屍床仕切石、墓壙の形状の差異が確認できる両古墳が鉄鏃の保有状況まで異なる点は、繰り返しになるが単に石室構造の違いだけではなく、古墳築造者集団の性格差があったことを想定しておくべきだろう。

特殊な五角形鏃について　須津J-第159号墳から、五角形鏃で、鏃身の幅よりも鏃身関幅の狭い五角形鏃が出土している。通常五角形鏃は鏃身関部分が最も広いか、鏃身幅と関幅が同程度のものが多い中で、特殊な形態である。五角形鏃自体は東日本、特に遠江・信濃以東～関東に多くみられるものであるが、こうした幅が狭いものは東駿河でもいくつかしか確認できないものである。事例を挙げれば沼津市石川119号墳、伊豆の国市平石４号墳（静岡埋文研2003）など数例が確認できるだけである。類例が少ないが、こうした特徴的な鉄鏃が存在する点は、地域内部で鉄鏃生産が行われていた証拠ともなろう。

五角形鏃の副葬　東駿河の平根五角形鏃出土古墳を分析した菊池吉修氏によれば、本形式を保有する古墳は階層的に上位の古墳が多いとされている（菊池2008）。須津J-第159号墳では鉄製馬具が出土し、鉄装倭系大刀（頭椎大刀か）を副葬していたことから、菊池氏の想定通り、やや階層的には上位にある古墳といえる。

片刃箭式鉄鏃　今回調査した古墳は、古墳時代後期に遡る可能性が高い古墳は柳葉式と片刃箭式、やや新しい古墳は鏨箭式と片刃箭式の組み合わせが確認できる。片刃箭式鉄鏃は、鏃身が長く、直角関であるものが多い点で注目できる。片刃箭式鉄鏃は６世紀末以降、関が失われる、あるいは撫関となって関があいまいになる方向へと変化していく中で、６世紀末以降でも須津J-第６・159号墳のように鏃身が長く、直角関である形状を保持し続けている点は、東駿河地域の特徴であり、継続的に地域内部で鉄鏃生産を続けている証拠にもなろう。



1. 須津 J- 第6号墳
2. 船津 L- 第 210 号墳
3. 石川28号墳

第117図　茎が非常に細い大刀

（３）大刀

大刀からみた東駿河での大刀生産の可能性　須津J-第６号墳から出土した大刀（57）の茎は非常に細いうえ、先端が尖るという特徴を有する。東駿河地域で出土する大刀の中でもこのように細いものは少ない。同じように茎が細いもの（想定される）に、沼津市石川28号墳出土大刀が挙げられる（第117図）。こうした茎が非常に細い大刀は、全国的な大刀の集成・分類を行った臼杵勲氏の大刀茎の分類（臼杵1984）の中には確認できず、特殊な茎を有する大刀といえる。このような特異な特徴をもつ大刀については地方生産が想定できる可能性がある。

これに関連して、静岡県内出土の大刀に伴う鉄製鍔の分析を行った西澤正晴氏は、無窓鍔の一部に在地生産の可能性を推測しているが、氏が在地生産の可能性があるとした鍔が東駿河地域でも船津L-第210号墳（註１，第117図）などで数例出土している（西澤2002）。

なお、船津L-第209号墳では短い鏃身の無茎五角形鏃が出土しており、これは他地域では見出すことができない特徴的な鉄鏃である

ことから東駿河地域での生産を想定した（大谷2004）。東駿河地域では大刀鍔と鉄鏃は在地生産された可能性が高い。

したがって、今後さらに詳細な分析を行わなければ早計に結論は出せないが、須津J-第６号墳例や石川28号墳例の茎が非常に細い大刀や船津L-第210号墳の無窓鍔の事例から、東駿河地域で鉄鏃だけでなく大刀の生産を行った可能性も考慮しておく必要がある。

（４）刀子

須津J-第159号墳からは、切先で数えて11点（関・茎尻で数えて８本）もの刀子が出土した。埋葬人数は３～４人と想定されることから一人に対して１本以上の刀子が副葬されていることになる。刀子のほかには農工具は出土していないため、工具としての扱いなのか武器としての扱いなのか明確ではなく、刀子の用途やその意義については特定できないが、１古墳から多量の刀子が出土している点は注目しておく必要がある。

註

1　船津L-第210号墳から出土したこの無窓鍔付大刀の茎も茎尻が非常に先細る可能性が高いものであり、鍔と大刀がこの東駿河地域で生産されていた可能性がある。

参考文献

井鍋誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
臼杵　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
大谷宏治　2004「東と西の挟間」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論集』
大谷宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
大谷宏治　2010「副葬遺物からみた無袖石室の位相」『東日本の無袖石室』雄山閣
岡安光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
岡安光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』２号　古墳文化研究会
岡安光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71巻４号　日本考古学会
尾上元規　1998「古墳時代鉄器の地域性と生産」『村方鍛冶と専業集団』鉄器文化研究集会
橿原考古学研究所・新庄町教育委員会　1988『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会
菊池吉修　2008「原分古墳出土の鉄鏃について」『原分古墳』
栗林誠治　2005「偏在分布馬具に関する一考察」『真朱』５　徳島県埋蔵文化財センター
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003『研究紀要』10号
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『富士山・愛鷹山麓の遺跡』
鈴木一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』雄山閣
東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』
豊島直博　2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』48巻２号　考古学研究会
西澤正晴　2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『研究紀要』９号　静岡県埋蔵文化財調査研究所
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
宮代栄一　1998「古墳文化における地域性」『駿台史学』102号　駿台史学会

図の出典

第117図　２（富士市教委1999）　３（沼津市教委2006）

第11章　結語

最後に、本書で報告した6遺跡の調査成果を簡略にまとめて、結語としたい。

1．船津L-第171号墳

船津L-第171号墳は、愛鷹山南麓の丘陵、春山川東岸の緩斜面に築造された、約10mの円墳である。埋葬施設は南西に向かって開口する無袖形横穴式石室で、石室の残存長は3.2mである。床面は2面確認できる。副葬品は鉄鏃と刀子が出土した。遺物が少なく時期を特定することは困難であるが、副葬された鉄鏃から判断して7世紀前半に築造された可能性が高い。

また、古墳に伴わない古代以降の遺物からみると、中世の遺跡（経塚や墳墓）が近在に所在する（した）可能性が高いことも判明した。

2．須津古墳群

須津古墳群では、須津J-第6・118・159号墳を調査した。

須津J-第6号墳　須津川東岸の愛鷹山麓の丘陵緩斜面に築造された、約13mの円墳である。埋葬施設はほぼ南に向かって開口する無袖形横穴式石室で、開口部に段構造を有する。石室残存長は6.5mであった。床面は2面確認でき、出土した人骨からは1人以上の埋葬があったことがわかった。副葬品は、鉄製馬具のほか、玉類、耳環、大刀、鉄鏃、針、須恵器が出土した。6世紀末まで遡る可能性もあるが、7世紀前半に築造され、7世紀後半まで追葬が行われた可能性が高い。針の出土から裁縫技術に通じた被葬者像を描くことができる。

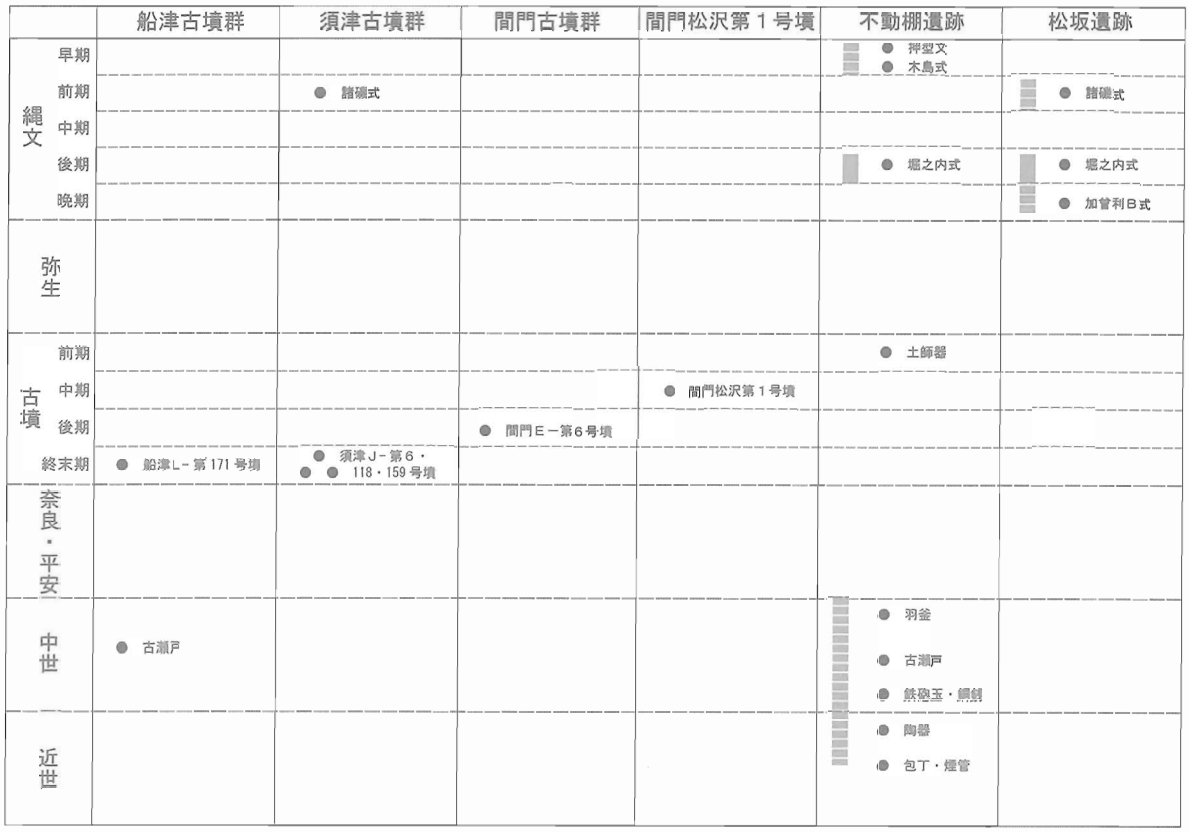
須津J-第118号墳　J-第6号墳のすぐ西側に築造された古墳であるが、墳丘および周溝は破壊されているため、古墳の規模は不明である。埋葬施設は、ほぼ南に向かって開口する無袖形横穴式石室で、開口部に段構造をもつ可能性が高い。石室残存長は5.3mである。床面は1面が確認でき、刀子が出土した。遺物が少ないため築造時期を特定できないが、7世紀前半以降に築造された可能性が高い。

被葬者の性格を想定するのは難しいが、第10章第2節で検討したように、J-第6号墳とは横穴式石室内部の構造が異なることから、交流範囲や性格が異なる集団であった可能性が高い。

須津J-第159号墳　J-第118号墳から北西50mのところに築造された、約10mの円墳である。埋葬施設は、ほぼ南に向かって開口する、無袖形横穴式石室で開口部に段構造をもつ。石室全長は4.75mで、床面は2面確認できる。上面から遺物・人骨が出土している。人骨は少なくとも3～4人分が確認できる。副葬品は、鉄製馬具のほか、玉類、耳環、大刀、鉄鏃、刀子、弓両頭金具、須恵器が出土した。これらの遺物からは6世紀末葉に遡る可能性があるが、7世紀前半に築造された可能性が高く、7世紀後半まで追葬が行われた。

3．間門松沢第1号墳

間門松沢第1号墳は、富士山南麓の、赤淵川西岸の丘陵上に位置する古墳である。墳丘に溶岩ドームを利用している。盛土が失われていることから古墳の墳形や規模について不明確であるが、利用された溶岩ドームにより、長方形墳あるいは楕円形墳であった可能性が高い。この場合は長軸20～25mの古墳であったと考えられる。埋葬施設は、墳頂部で3基確認され、すべて木棺直葬であった。3基ともに二段の掘り込みをもつ墓壙で、下段に木棺を設置している。墓壙は細長い特徴を有し、墓壙底の形状からは割竹形木棺が埋葬された可能性が高い。副葬品は第3埋葬施設から滑石製臼玉3点、鉄剣1点が出土



第118図　船津古墳群、須津古墳群ほか今回調査した６遺跡の時期的位置

した。鉄剣は剣身に刃関双孔を穿つ珍しいものであった。

出土した鉄剣から、古墳時代中期前半に位置づけられる可能性が高い。東駿河では古墳の築造が停滞する時期であり、その中で小規模ながらも古墳が築造されたことがわかった点が重要である。被葬者としては古墳時代中期後半に畿内王権と新たに関係を取り結んだ新興の小首長像を思い描くことができる。

4．鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳

鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳は、間門松沢第１号墳北西の富士山麓の丘陵緩斜面に位置する。古墳の周囲の改変が著しく、墳丘・周溝ともに失われ墳形は不明であった。埋葬施設は無袖形横穴式石室で、残存長4.4mである。石室は大きく破壊されていたが、鉄製馬具をはじめとして玉類、鉄鏃が出土した。築造時期については副葬された鉄製馬具からみると６世紀後半まで遡る可能性が高い。

副葬遺物が少ないため、被葬者の性格を考えることは難しいが、馬具を副葬していることから階層的にやや上位であり、軍事的な性格を有する被葬者集団であった可能性を想定しておこう。

5．不動棚遺跡

不動棚遺跡は赤淵川西岸の、丘陵緩斜面に位置する縄文時代、古墳時代前半、中世以降の複合遺跡である。遺構は礫群や土坑のみであったが、遺物は縄文土器・石器が出土した。

縄文土器は、早期の押型文、木島式土器のほかに、後期の堀之内式土器が多く出土した点が注目できる。富士市内では縄文時代後期の遺跡が少なく、様相が不明確であったが、多くの土器が出土したことで、間門地区に縄文時代の集落が所在する可能性が高まった。

6．松坂遺跡

松坂遺跡は、赤淵川西岸の富士山麓の、不動棚遺跡の所在箇所よりも一段高い尾根の緩斜面や谷部に位置している。確認調査で遺物が多く出土した4箇所を調査し、不動棚遺跡と同様、縄文時代後期の堀之内式土器が多く出土した。両遺跡で同時期の堀之内式土器が出土していることは、この間門地区、神戸地区に大規模な縄文時代後期の集落遺跡が所在する可能性が高いことが判明した。

以上、それぞれの遺跡で、さまざまな知見を得るとともに、今後、富士市の地域史を再構築していく上で重要な資料を提供することとなったと考える。

【　謝　　辞　】

現地における確認調査・本発掘調査および資料整理にあたり、中日本高速道路株式会社、富士市教育委員会、富士市立博物館、地元自治会に大変お世話になりました。

また、伊藤通玄先生に石材鑑定、片山一道先生に人骨鑑定の指導を賜り、豊島直博氏に間門松沢第1号墳出土鉄剣の位置づけについて指導を賜りました。さらに、縄文土器の全般的な位置づけについて池谷信之氏、小崎　晋氏、原田雄紀氏、古墳の位置づけについて菊池吉修氏、鈴木一有氏、土生田純之氏に御教授賜りました。深謝します。

さらに、下記の個人・機関にお世話になりました。明記して御礼申し上げます。

石川武男　植松章八　木ノ内義昭　笹原千賀子　佐藤祐樹　佐野五十三　志村　博　白澤　崇
鈴木良孝　高尾好之　高野穂多果　藤村　翔　鶴田晴徳　中嶋郁夫　前嶋秀張　前田勝己　松井一明
向坂鋼二　望月由佳子　山本恵一　渡井英誉
沼津市教育委員会　沼津市埋蔵文化財センター

写真図版

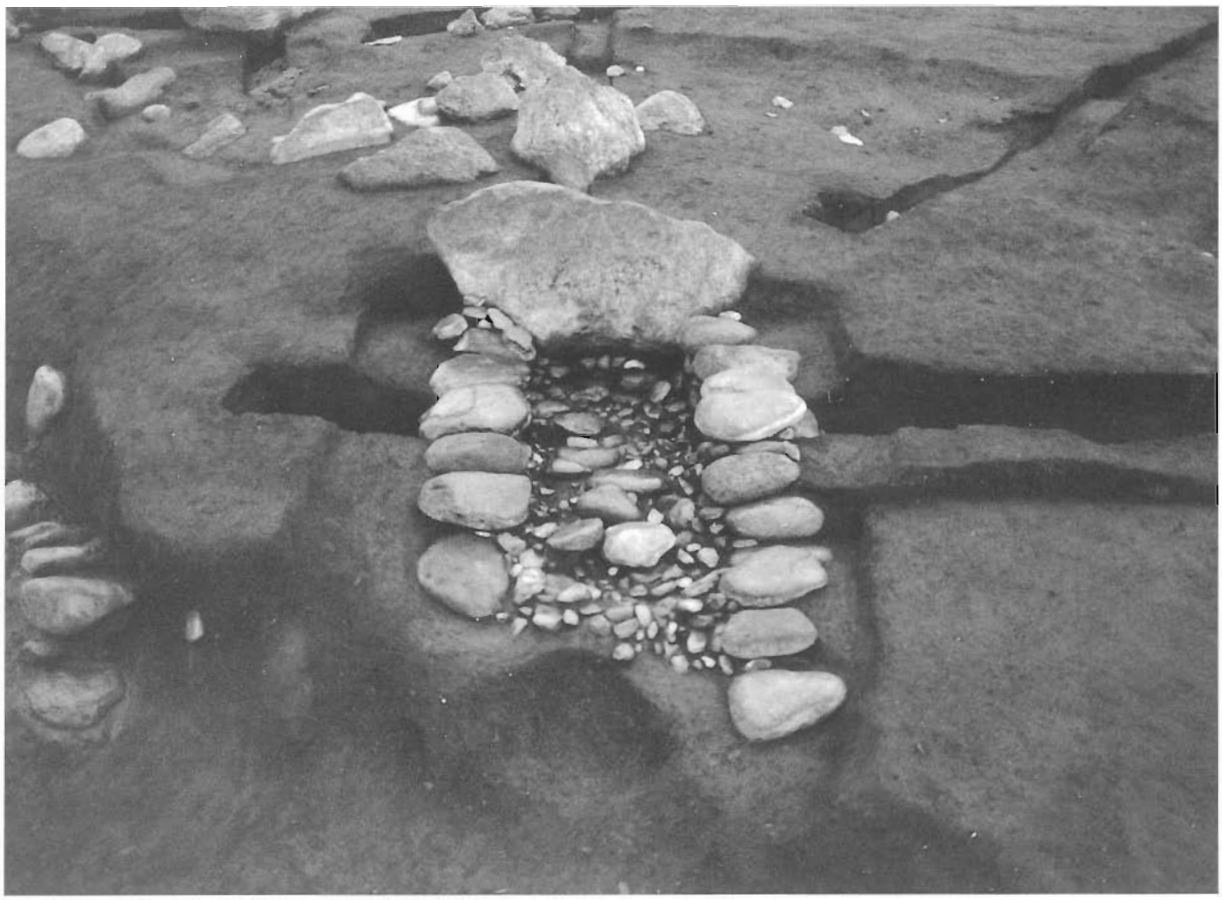
船津古墳群　図版1

1．L-第171号墳　全景（南から）

2．L-第171号墳　全景（西から）

図版２　船津古墳群

１．L-第171号墳　全景（西から）

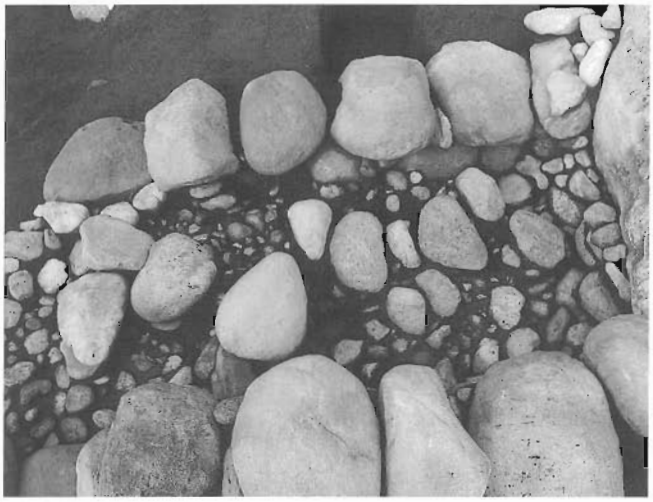


２．L-第171号墳　石室上面検出状況（西から）

１．L-第171号墳　石室下面検出状況（西から）

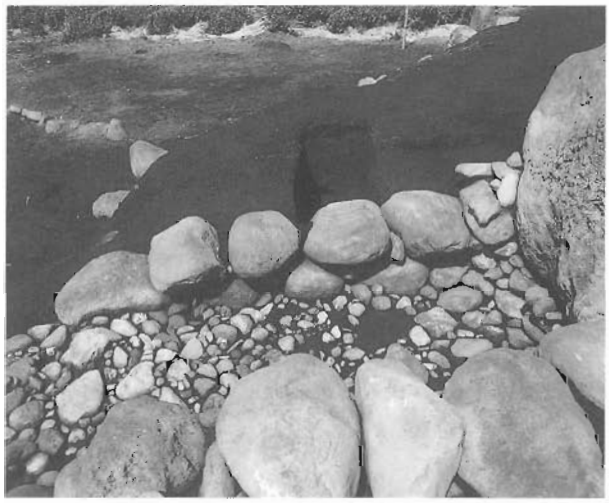
２．L-第171号墳　石室基底石（西から）

図版４　船津古墳群



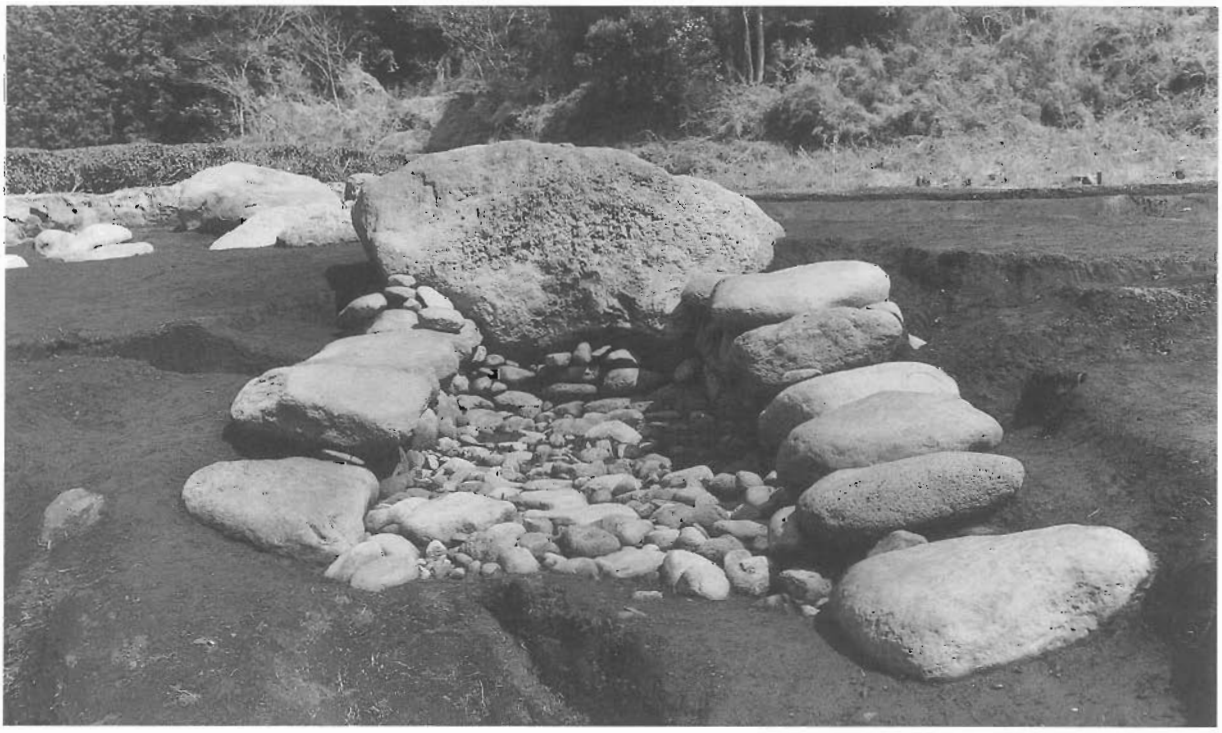
1．L-第171号墳　石室上面（南から）

2．L-第171号墳　石室上面（西から）

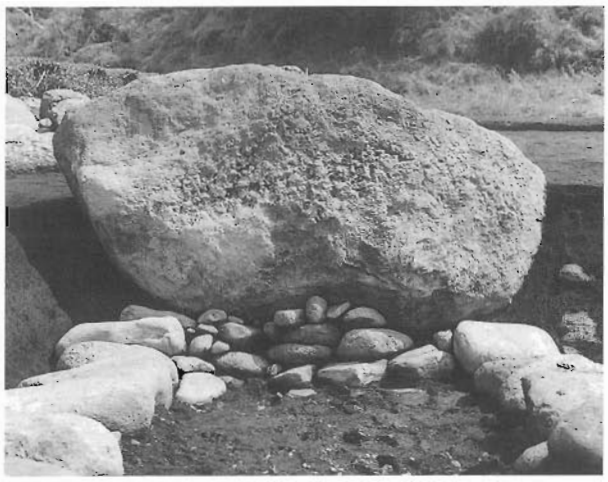


3．L-第171号墳　石室北側壁（南から）

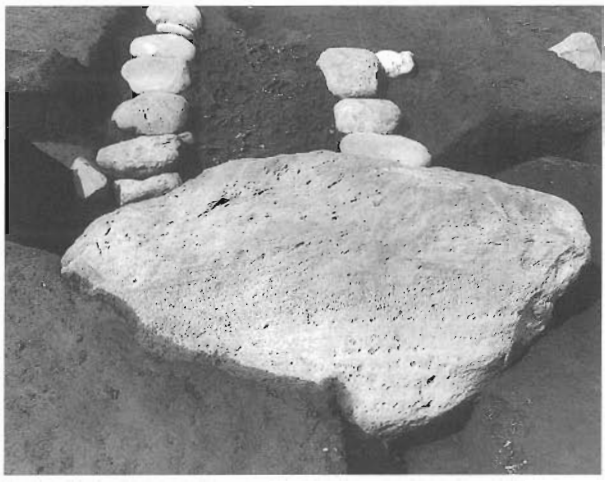
4．L-第171号墳　石室南側壁（北から）



5．L-第171号墳　石室下面検出状況（西から）



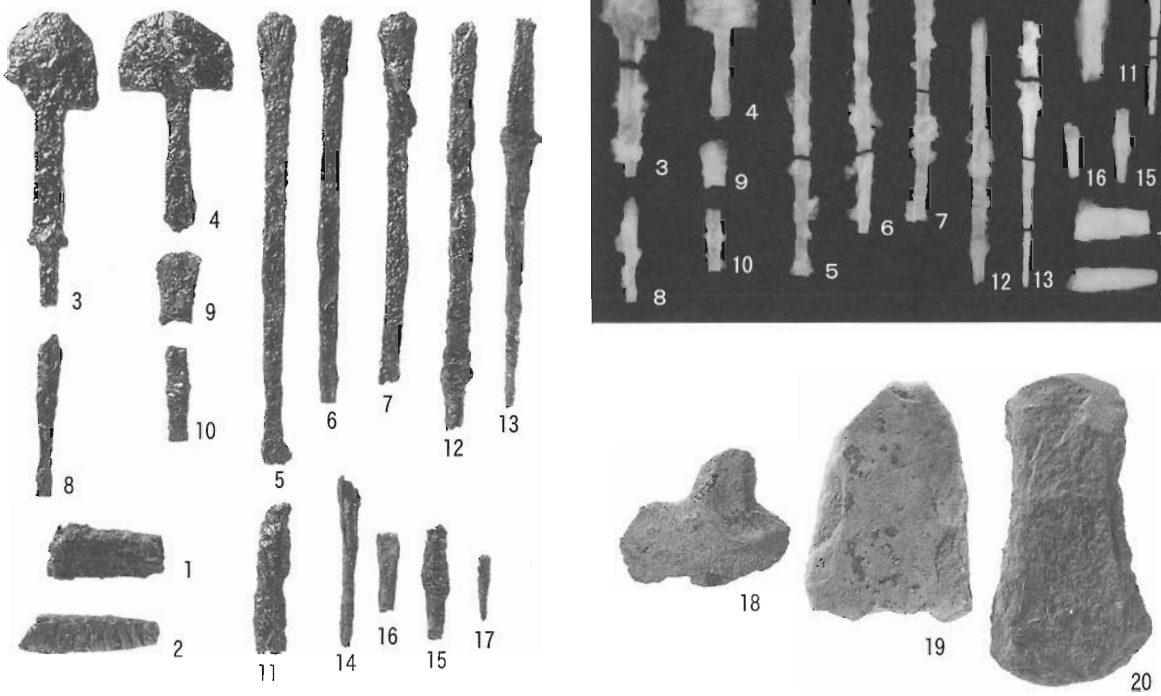
１．L-第171号墳　石室奥壁（西から）



２．L-第171号墳　石室奥壁の裏側（東から）

３．L-第171号墳　石室奥壁の北側下部（南西から）

４．L-第171号墳　鉄製品出土状況（北西から）



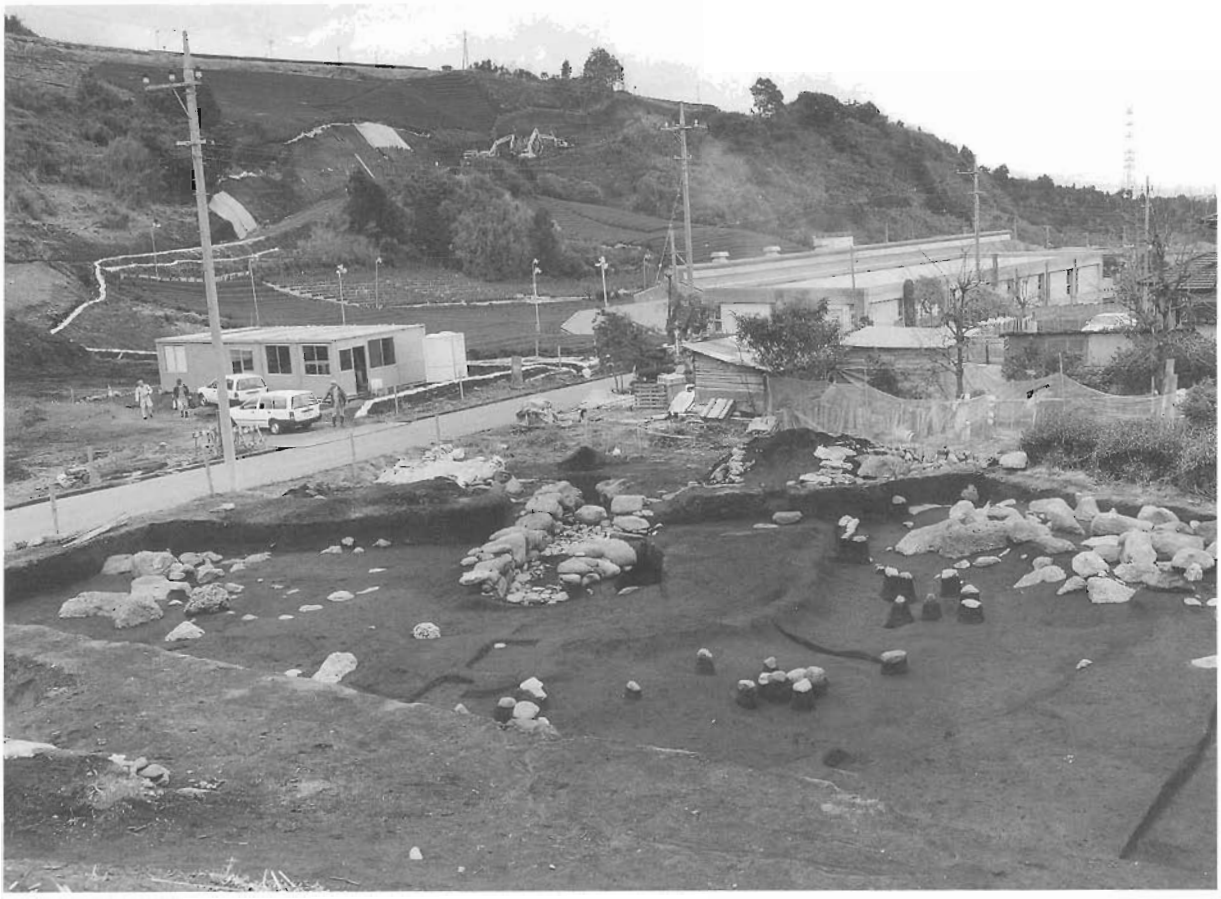
５．L-第171号墳および周辺の出土遺物

図版６　須津古墳群

１．北からの遠景（１区：J-第６・118号墳）

２．北東からの遠景（２区：J-第159号墳）

１．１区全景（西から）

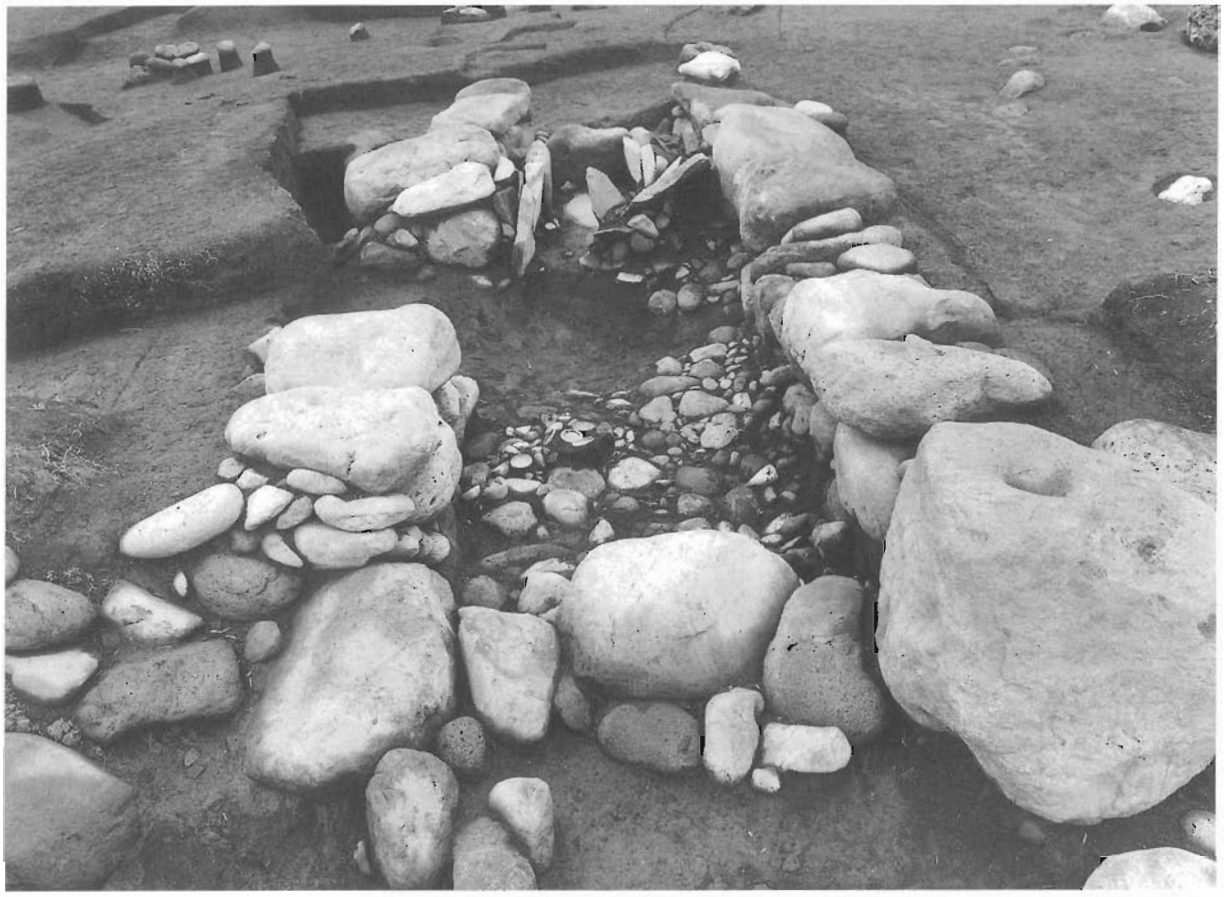


２．J-第６号墳（北から）

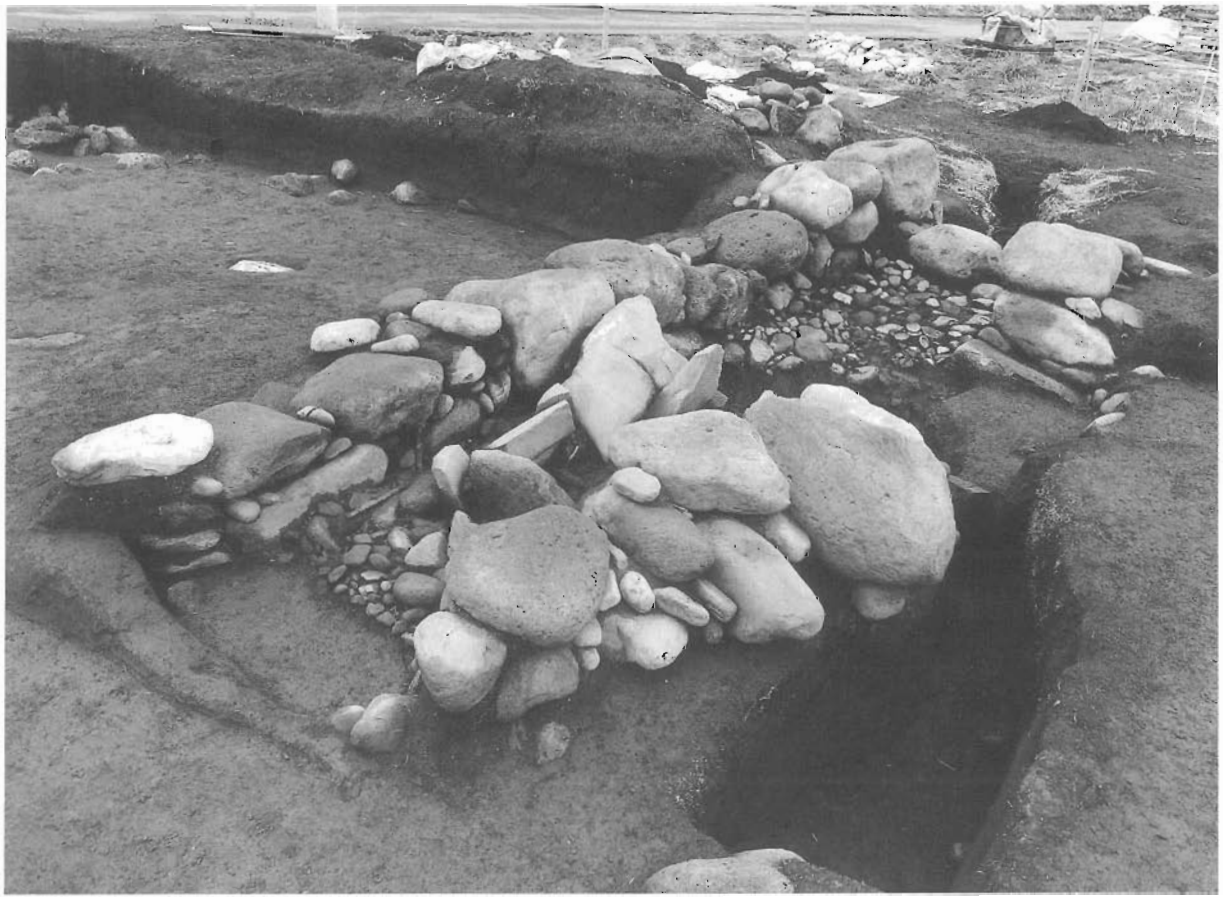
図版８　須津古墳群

1．J-第６号墳　石室検出状況（南から）

2．J-第６号墳　石室上面検出状況（南から）

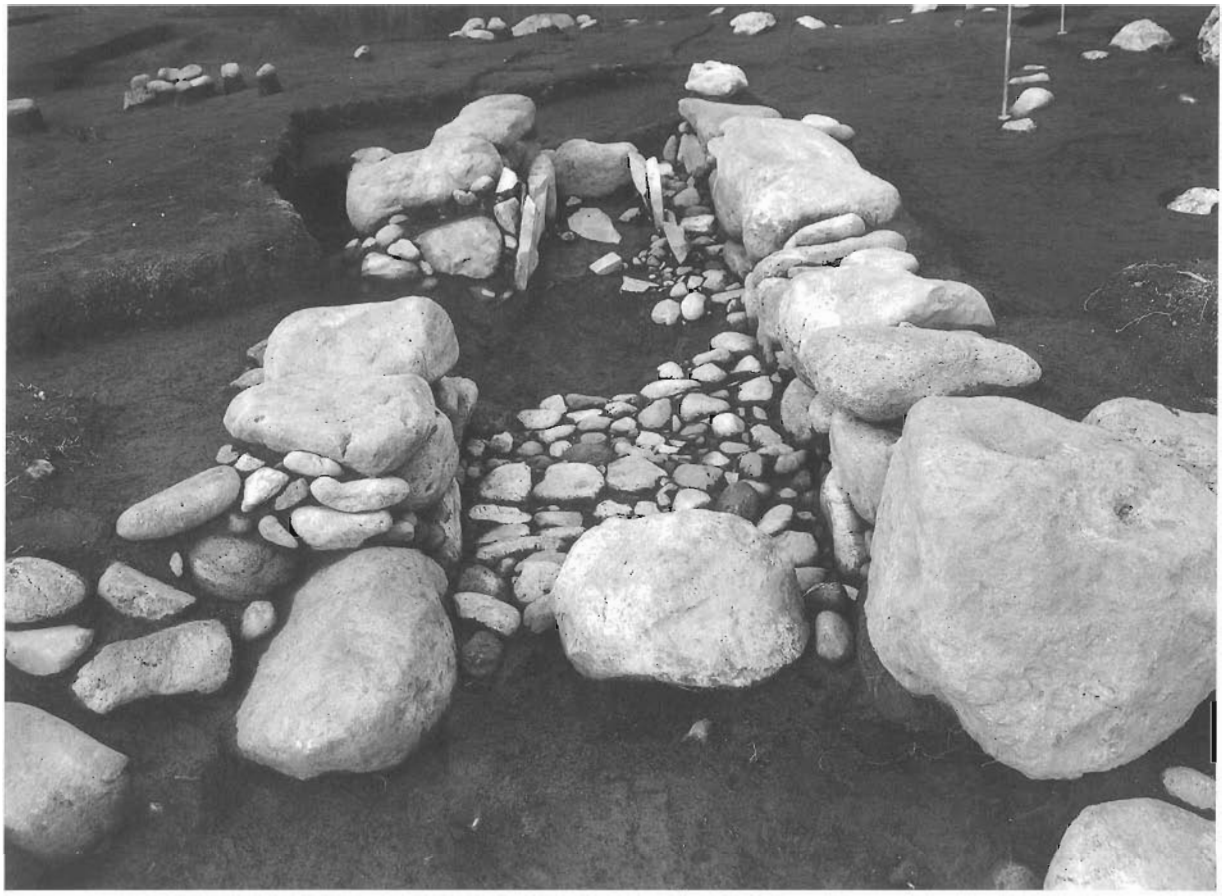


1．J-第６号墳　石室上面検出状況（南から）



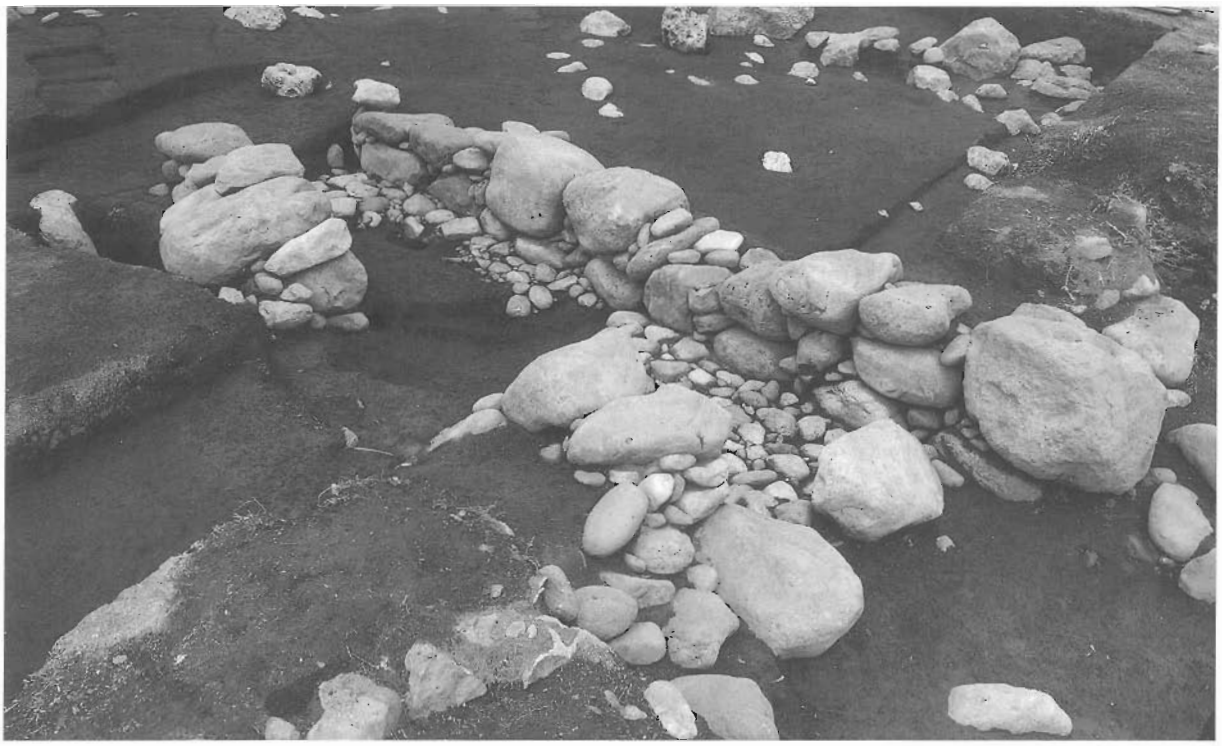
2．J-第６号墳　石室上面検出状況（北西から）

図版10　須津古墳群

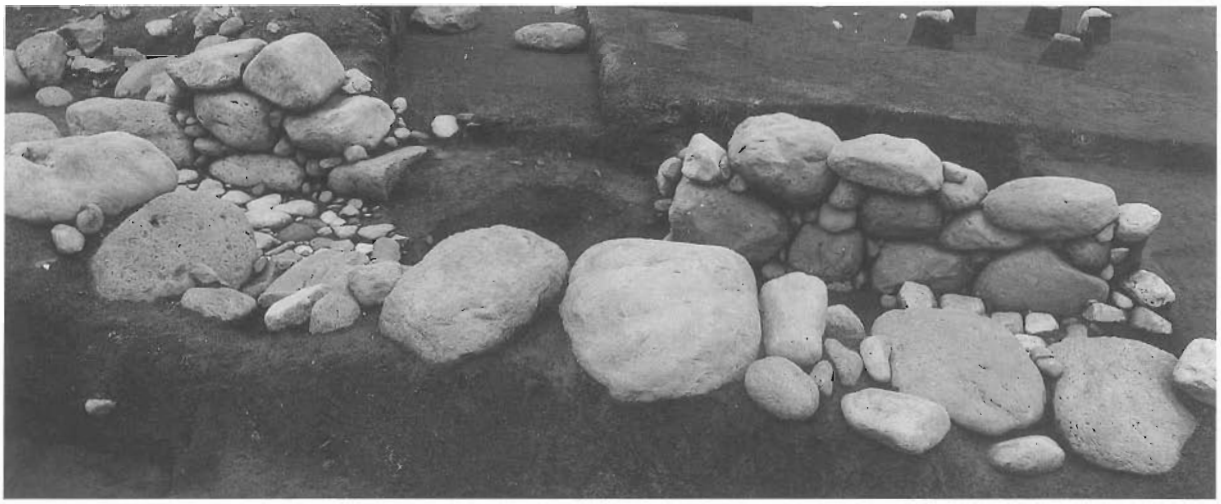


1．J-第６号墳　石室下面検出状況（南から）

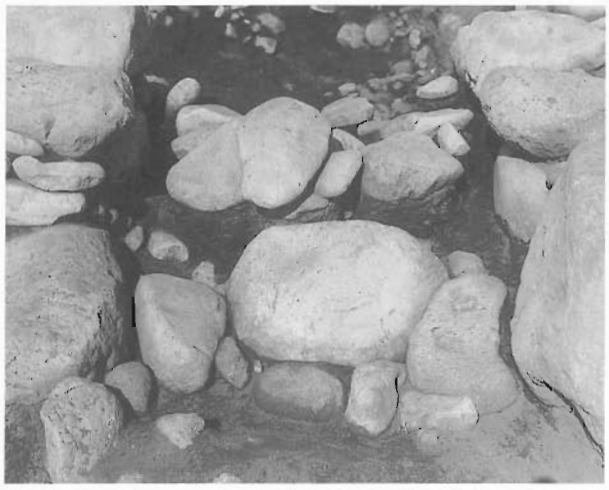
2．J-第６号墳　石室下面検出状況（北西から）



1．J-第6号墳　石室東側壁（南西から）



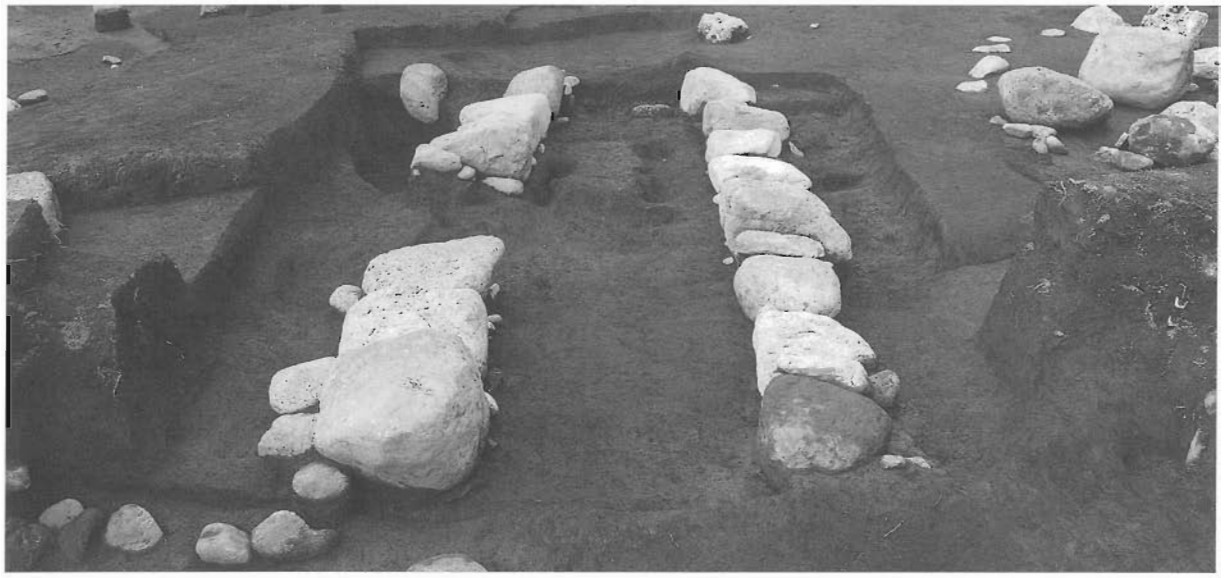
2．J-第6号墳　石室西側壁（東から）



3．J-第6号墳　石室段構造（框石）残存状況（南から）

4．J-第6号墳　石室段構造（框石）残存状況（東から）

図版12　須津古墳群



1．J-第６号墳　石室基底石（南から）

2．J-第６号墳　石棺検出状況（東から）

3．J-第６号墳　石棺検出状況（南から）

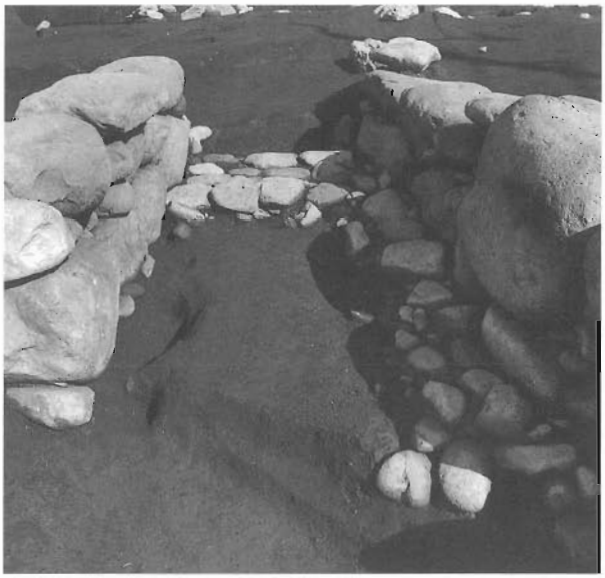
4．J-第６号墳　石棺完掘状況（東から）

5．J-第６号墳　石棺完掘状況（南から）

1．J-第6号墳　石棺残存状況（北から）

2．J-第6号墳　石棺周囲北側上面（北から）

3．J-第6号墳　石棺周囲北側下面（北から）



4．J-第6号墳　石棺周囲北側下面（南から）

5．J-第6号墳　石室南半下面（東から）

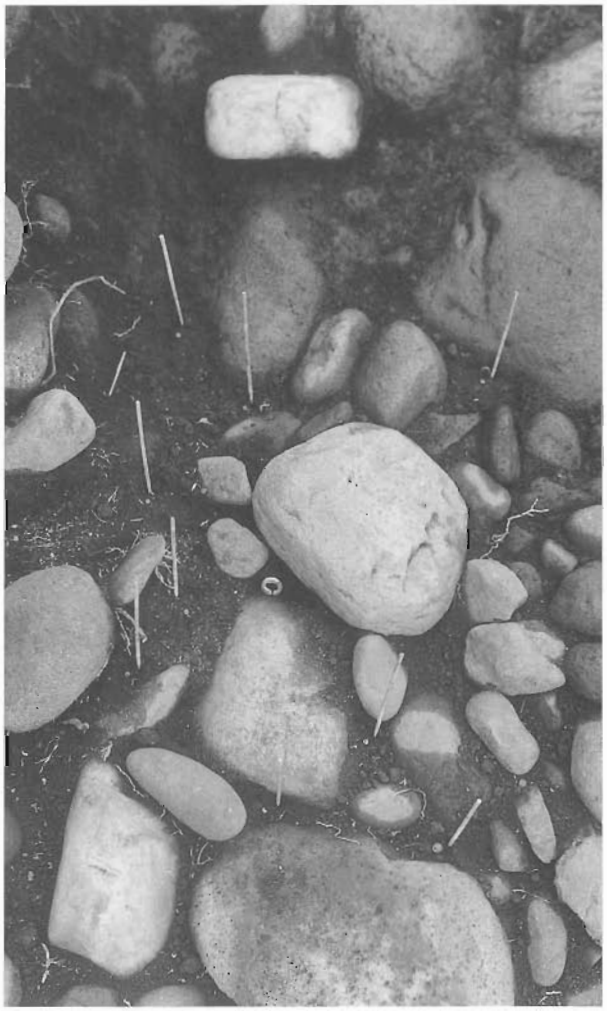
6．J-第6号墳　石室北半下面（東から）

図版14　須津古墳群

1．J-第６号墳　石室南半遺物出土状況（北西から）

2．J-第６号墳　石棺内人骨出土状況（南西から）

3．J-第６号墳　石室南西部勾玉出土状況（東から）



4．J-第６号墳　石室南東部玉類等出土状況（北から）

1．J-第6号墳　石室北東部鉄刀等出土状況（西から）

2．J-第6号墳　石室北西部鉄鏃出土状況（東から）

3．J-第6号墳　石室北東部刀子等出土状況（西から）

4．J-第6号墳　石室南東部轡出土状況（南東から）

5．J-第6号墳　石室南東部鉸具出土状況（北から）

図版16　須津古墳群

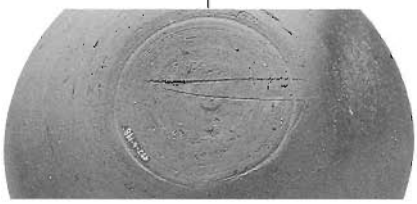
1

2

3

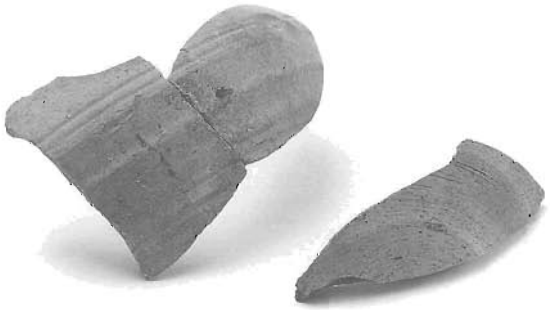
4

5



6

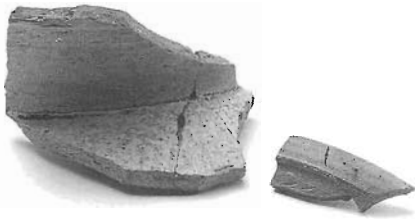
7



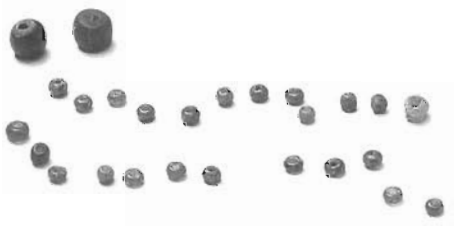
8

J-第 6 号墳出土遺物①

15



15



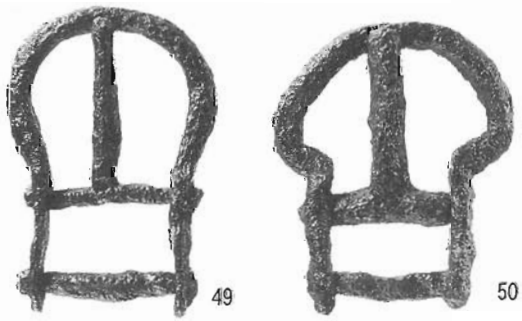
17～46

9

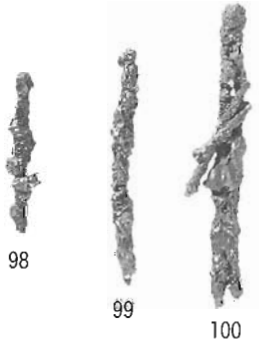
48

16

47



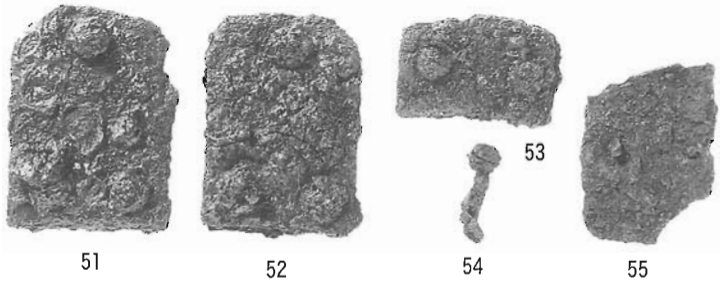
49　50

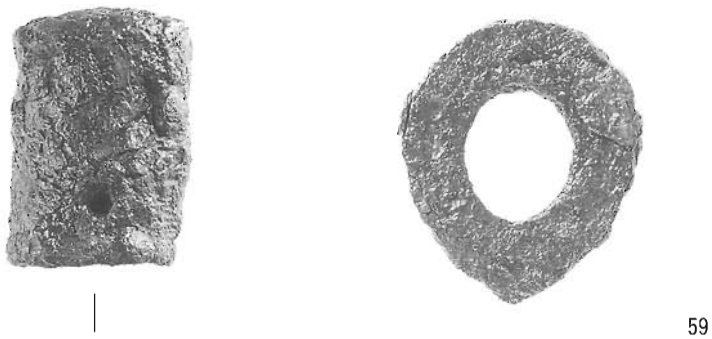


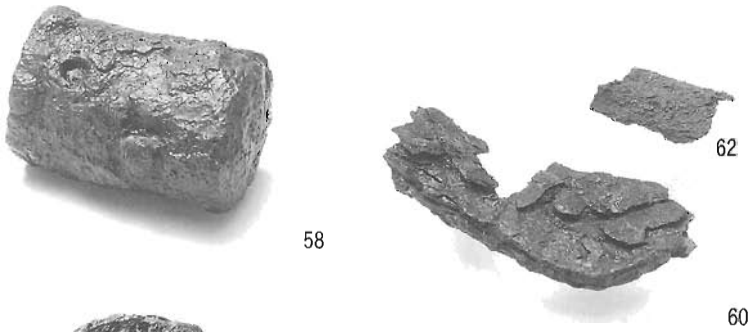
98　99　100

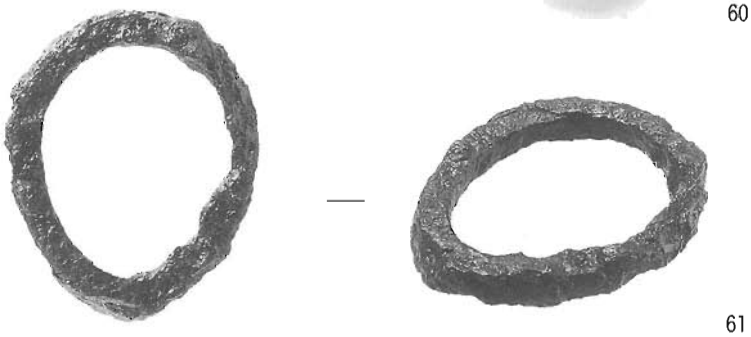
J-第 6 号墳出土遺物②

図版18　須津古墳群







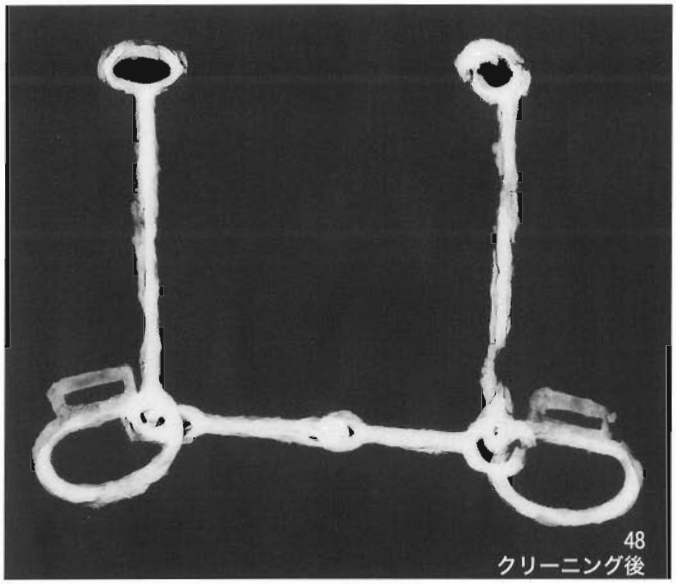


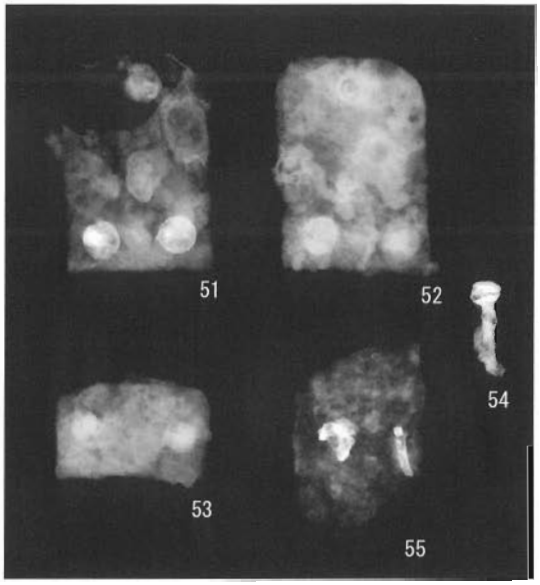
J-第 6 号墳出土遺物③

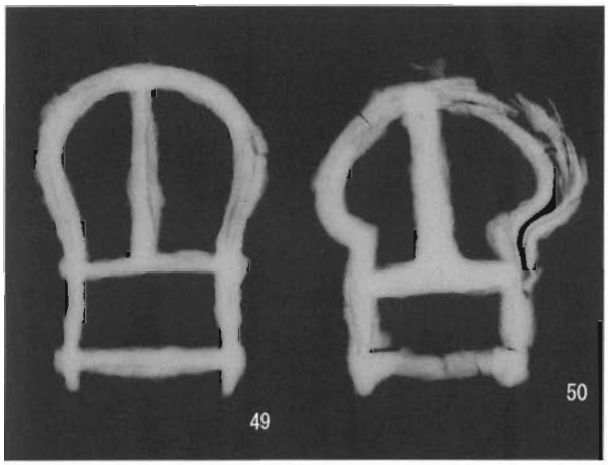
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

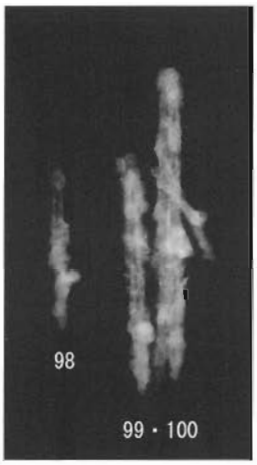
J-第6号墳出土遺物④

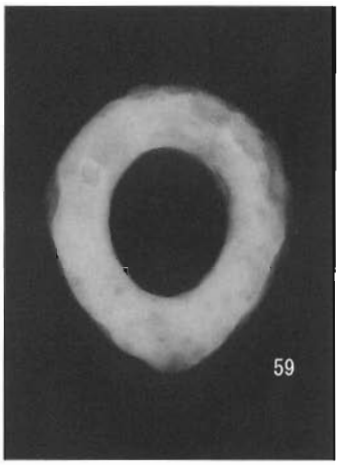
図版20　須津古墳群

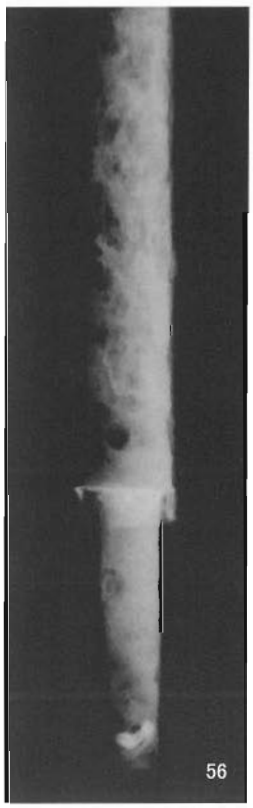


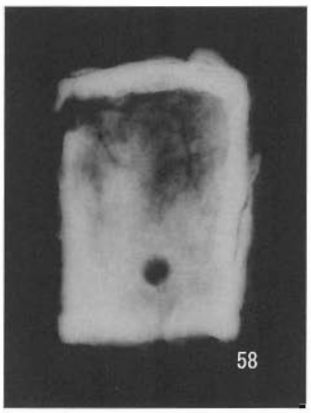


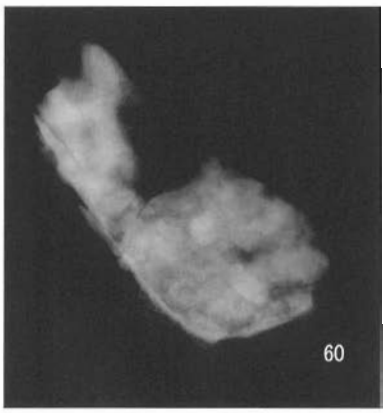


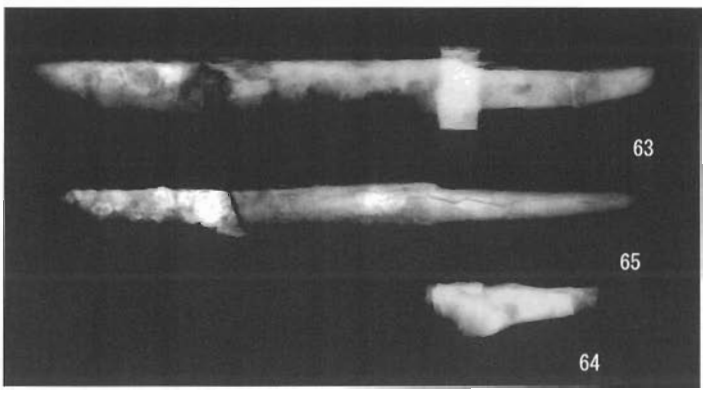




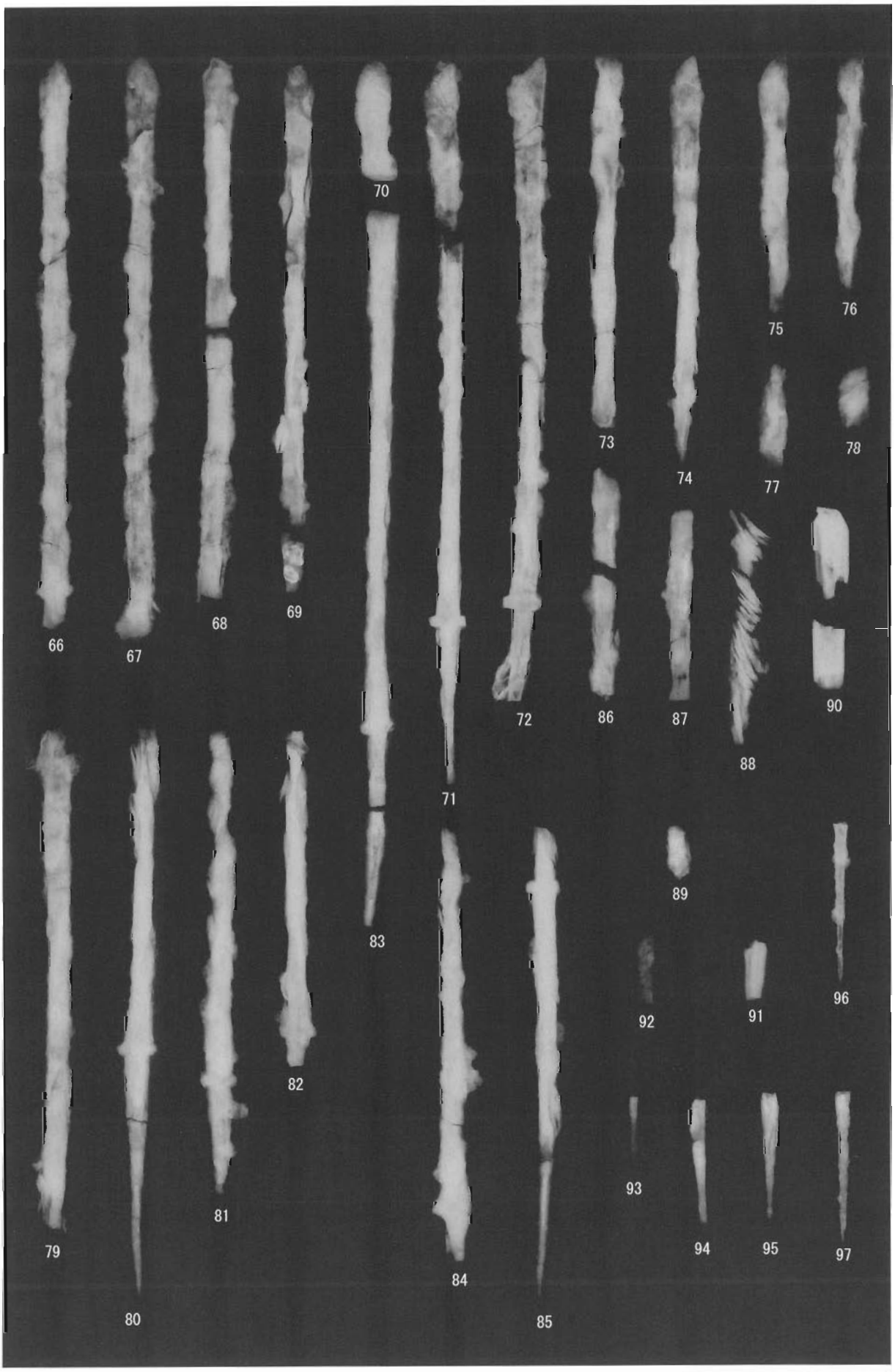








J-第6号墳出土遺物⑤


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

J-第 6 号墳出土遺物⑥

図版22　須津古墳群

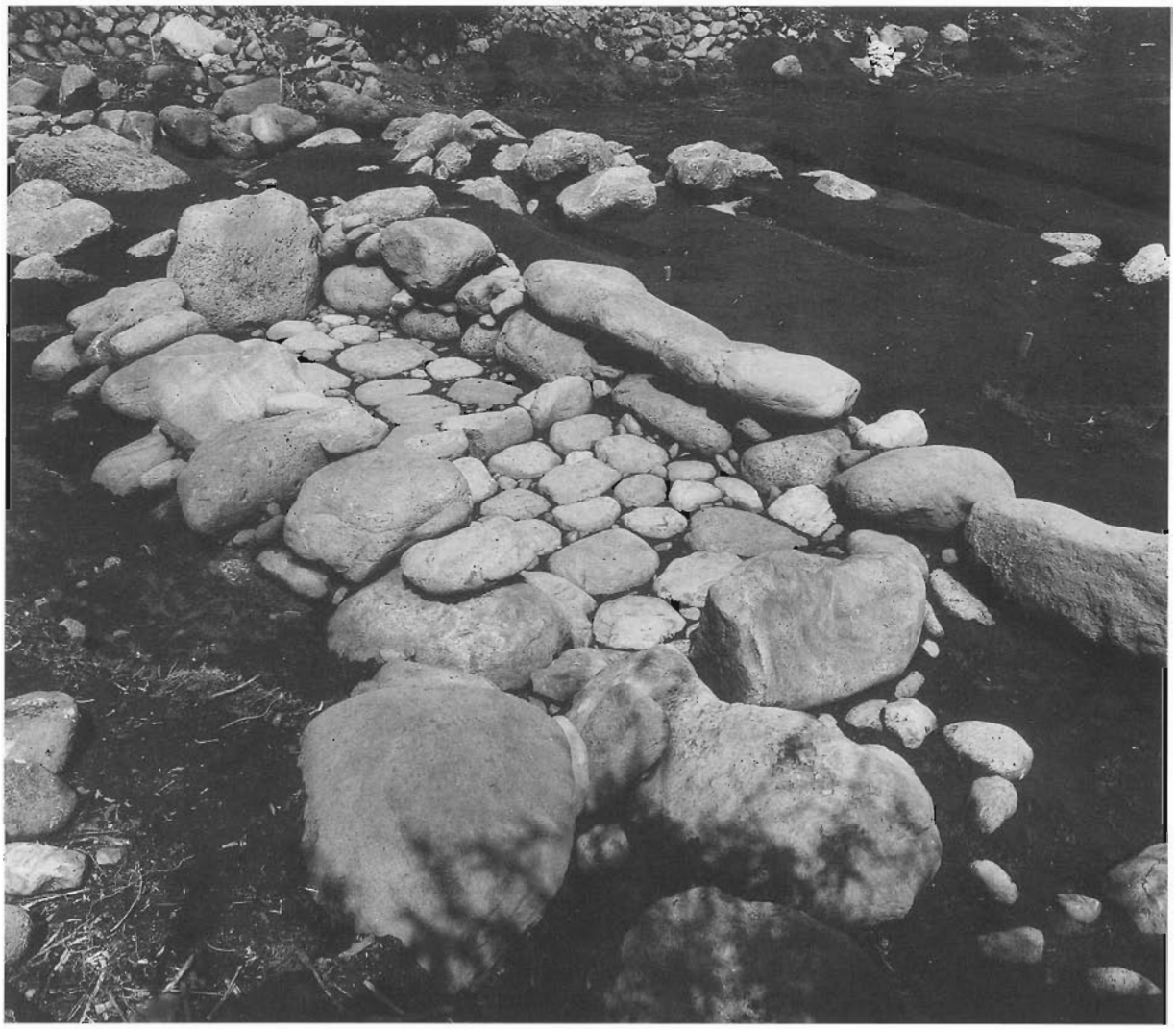
1．J-第118号墳（南から）

2．J-第118号墳　石室検出状況（北から）

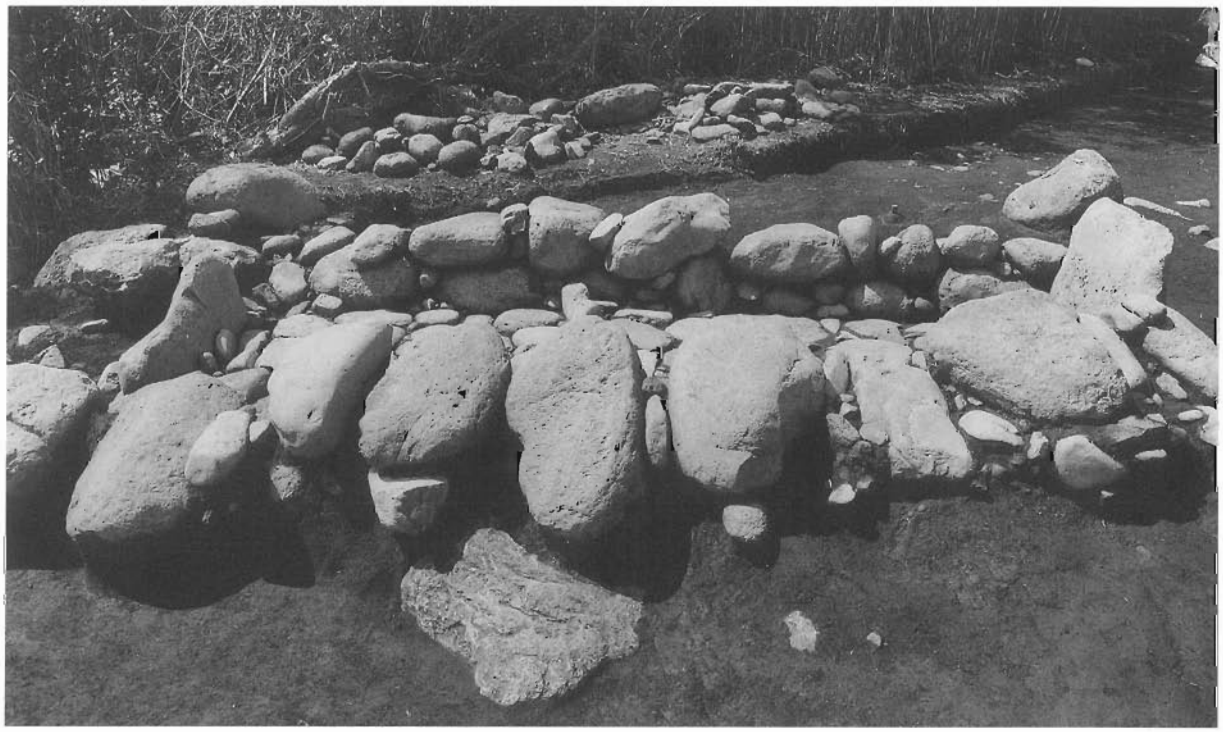
1．J-第118号墳　石室完掘状況（南から）

2．J-第118号墳　石室完掘状況（北から）

図版24　須津古墳群



1．J-第118号墳　石室段構造（框石）除去後開口部の状況（南西から）



2．J-第118号墳　石室西側壁（東から）

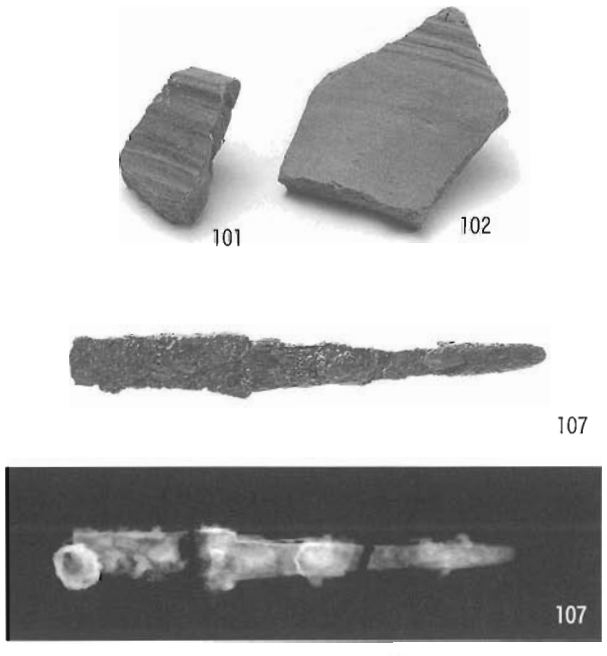
1．J-第118号墳　石室段構造（框石）残存状況（北から）

2．J-第118号墳　石室段構造（框石）残存状況（北西から）

3．J-第118号墳　石室南半床面（東から）

4．J-第118号墳　石室北半床面（東から）

5．J-第118号墳　石室基底石（南から）

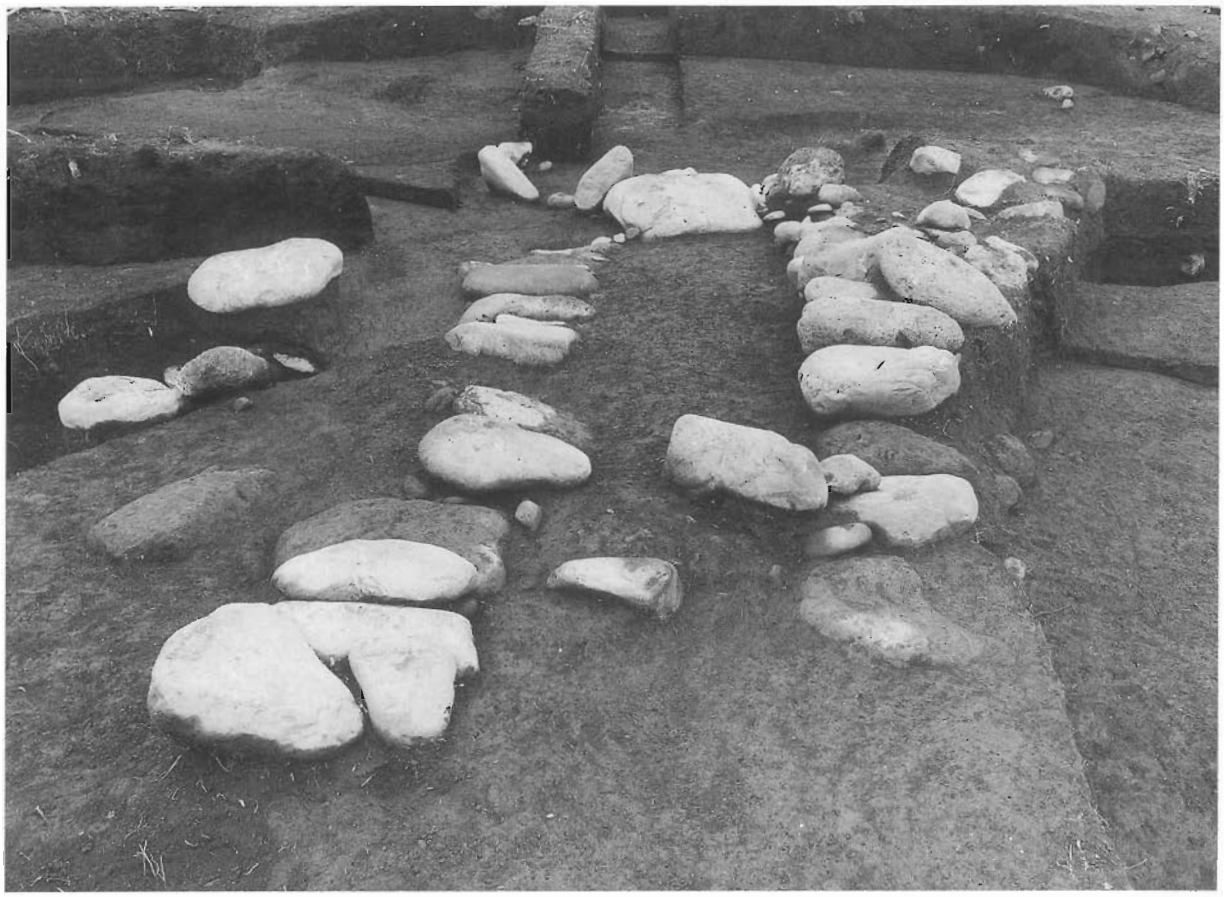


6．J-第118号墳出土遺物

図版26　須津古墳群

1．2区全景（北から）

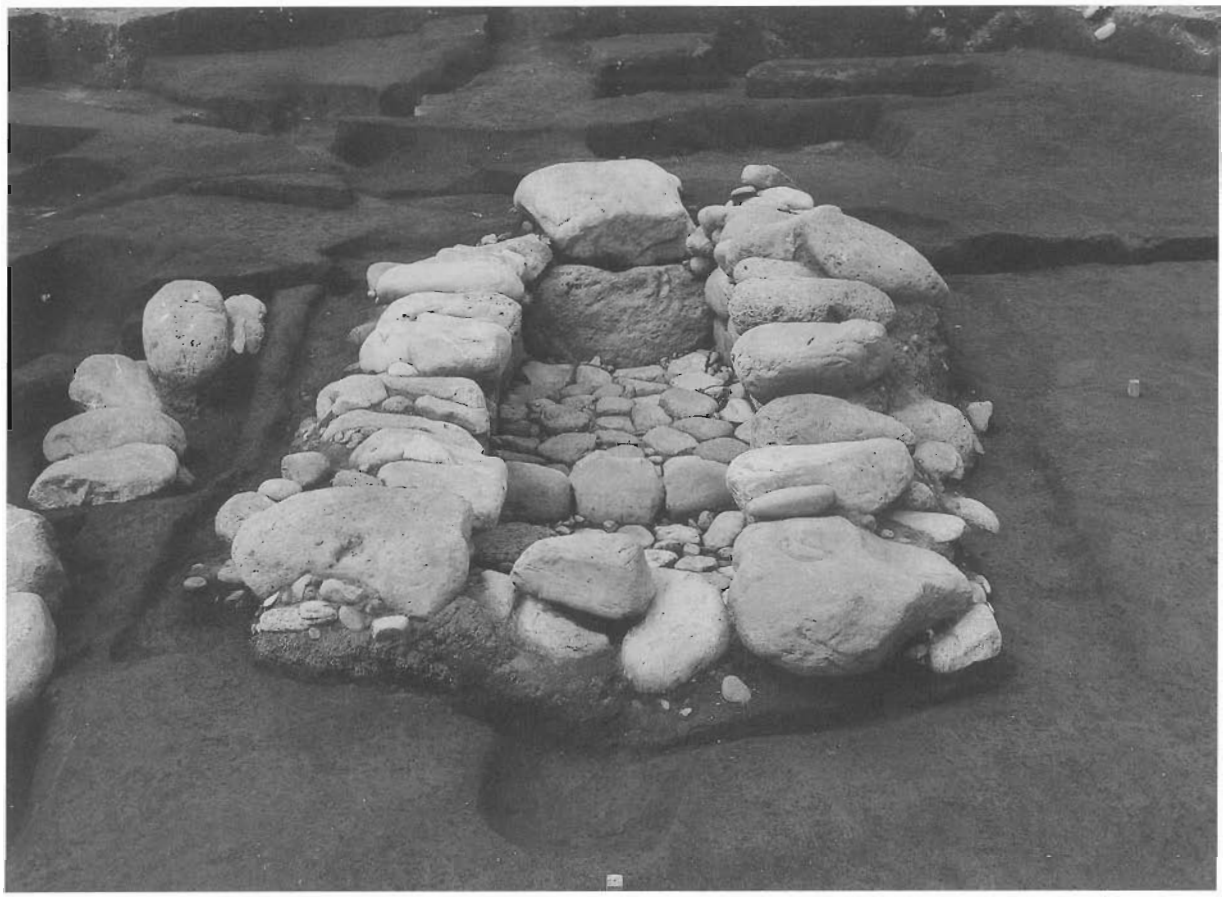
2．J-第159号墳（南から）



1．J-第159号墳　石室検出状況（南から）

2．J-第159号墳　石室上面検出状況（南から）

図版28　須津古墳群



1．J-第159号墳　石室下面検出状況（南から）

2．J-第159号墳　石室下面検出状況（北から）

1．J-第159号墳　石室東側壁（南西から）

2．J-第159号墳　石室西側壁（南東から）

図版30　須津古墳群

1．J-第159号墳　石室下面と基底石（南から）

2．J-第159号墳　石室基底石（南から）

1．J-第159号墳　石室墓壙（北から）

2．J-第159号墳　石室屍床仕切石（西から）

3．J-第159号墳　石室奥壁（南から）

4．J-第159号墳　石室奥壁の裏込め①（北から）

5．J-第159号墳　石室奥壁の裏込め②（東から）

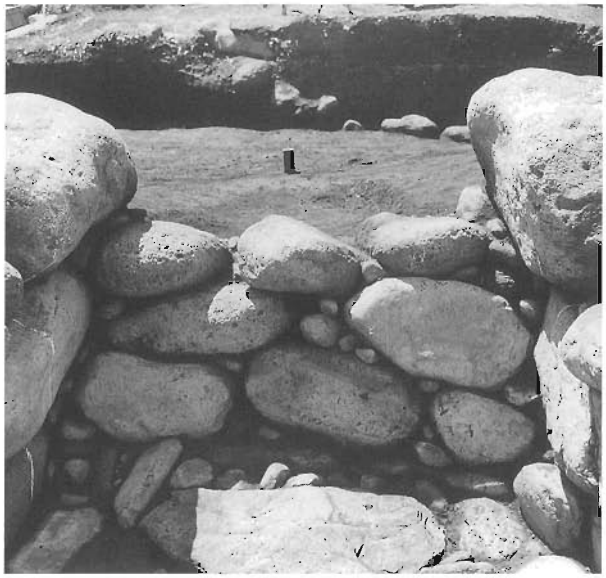
6．J-第159号墳　石室奥壁下部（西から）

図版32　須津古墳群

1．J-第159号墳　石室段構造（框石）と閉塞石（北から）

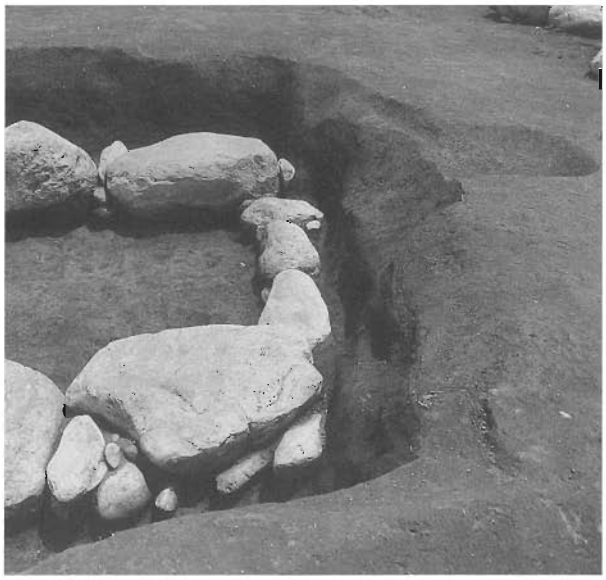
2．J-第159号墳　石室段構造（框石）と閉塞石（東から）

3．J-第159号墳　石室段構造（框石）の上部裏込め（東から）



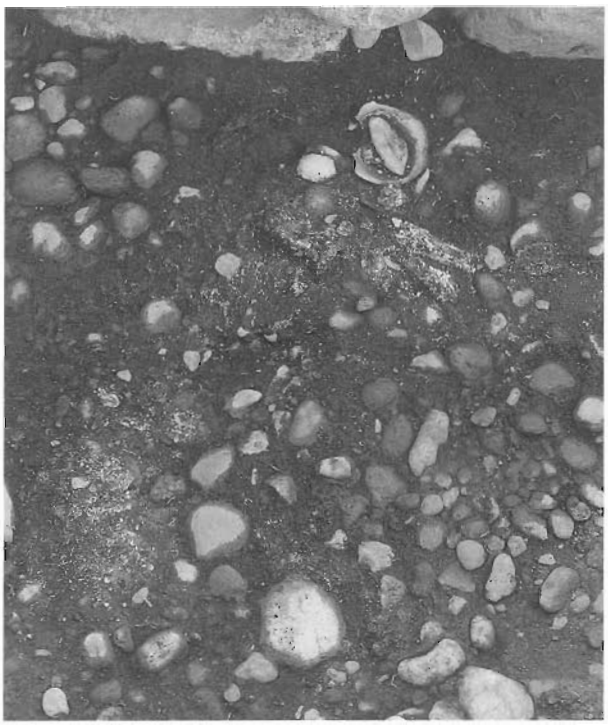
4．J-第159号墳　石室段構造（框石）残存状況（北から）

5．J-第159号墳　石室段構造（框石）下部の上面と墓道（南から）

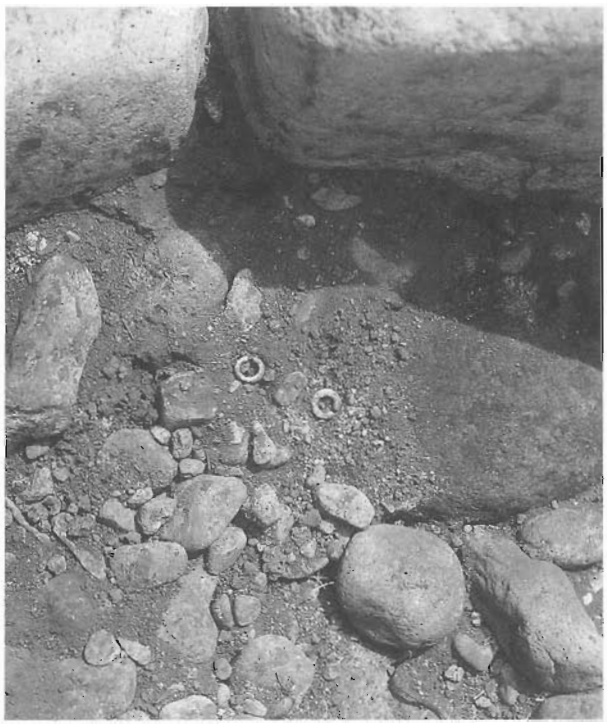


6．J-第159号墳　石室段構造（框石）の基底石・墓壙と墓道（西から）

1．J-第159号墳　石室北半人骨等出土状況（南から）



2．J-第159号墳　石室北半南西部人骨等出土状況（東から）



3．J-第159号墳　石室北半南縁部耳環出土状況（北から）

図版34　須津古墳群

1．J-第159号墳　石室奥壁・屍床仕切石と南半人骨および遺物出土状況（南から）

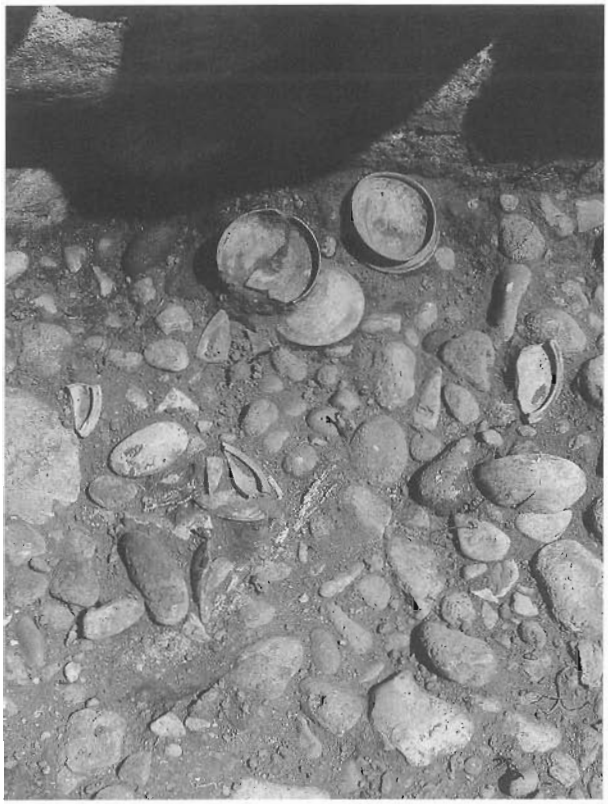
2．J-第159号墳　石室北半北西部土器出土状況（北から）

3．J-第159号墳　石室南半北西部玉類・刀子出土状況（北から）

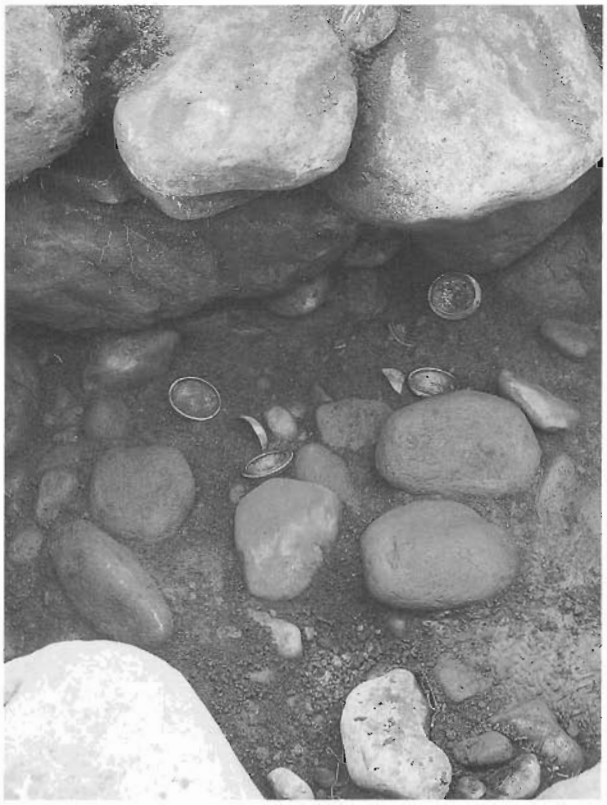
1．J-第159号墳　石室南半北西部人骨出土状況（南から）

2．J-第159号墳　石室南半東部副葬品出土状況（西から）

図版36　須津古墳群



1．J-第159号墳　石室南半北東部土器出土状況（西から）



2．J-第159号墳　石室南半南西部土器出土状況（東から）

3．J-第159号墳　石室内副葬品出土状況（南から）

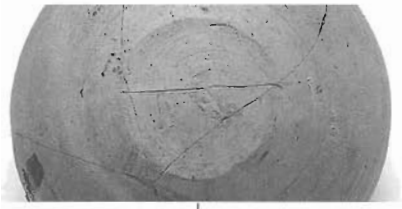
108

109

110

111

112



113

114

115

118

J-第159号墳出土遺物①

図版38　須津古墳群

116

117

119

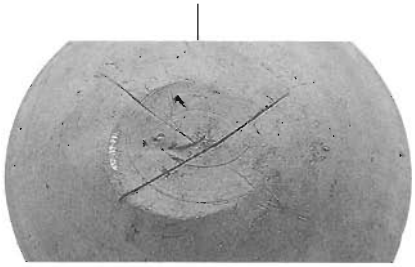
120

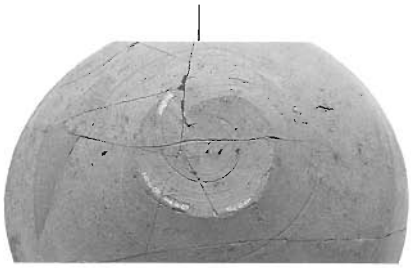
121

122

123

124





125

126

J-第159号墳出土遺物②

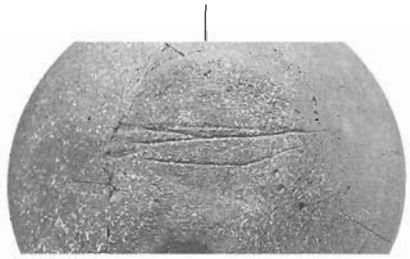
127

128

129

130

131



132

133

134

136

J-第159号墳出土遺物③

図版40　須津古墳群

135

137

140

139

138

J-第159号墳出土遺物④

141～169

170　171

174

172

173

197

205

198

206　207

200

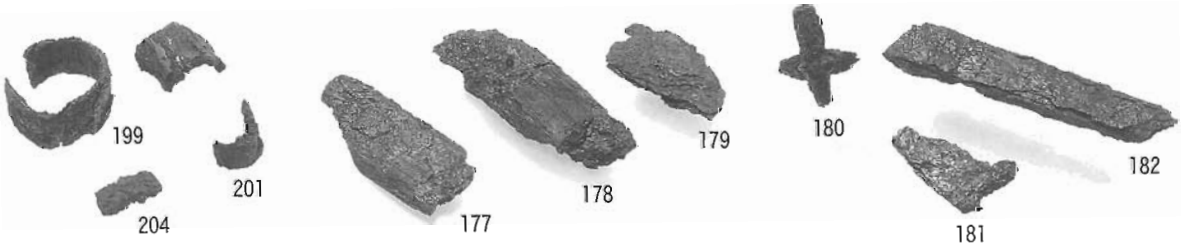
208　209

202

203

210　214

211　212　216　213　214　217



199　201　204　177　178　179　180　182　181

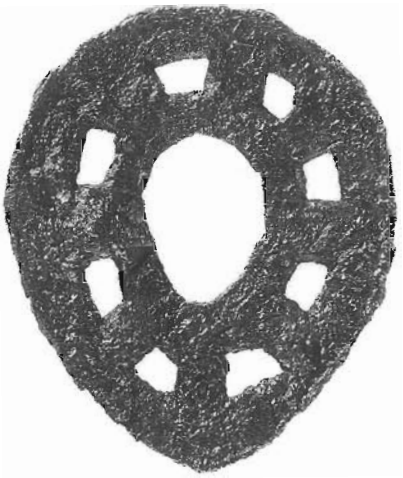
J-第159号墳出土遺物⑤

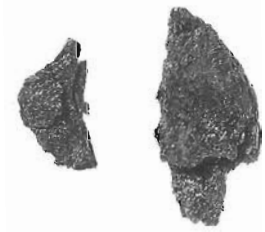
214の２つは接合する。

図版42　須津古墳群

183

184


186


185

190

191

187

192

196

186

189

193

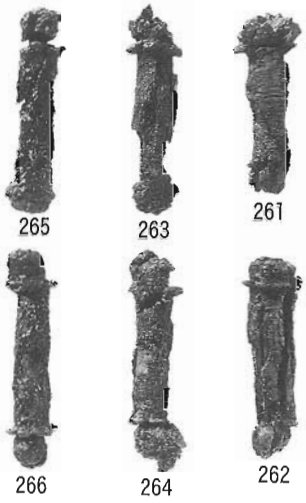
194

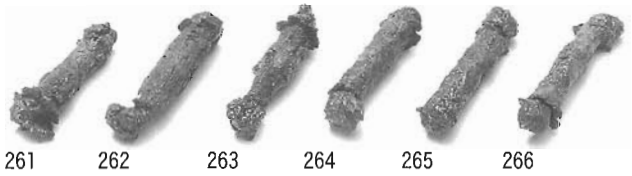
195

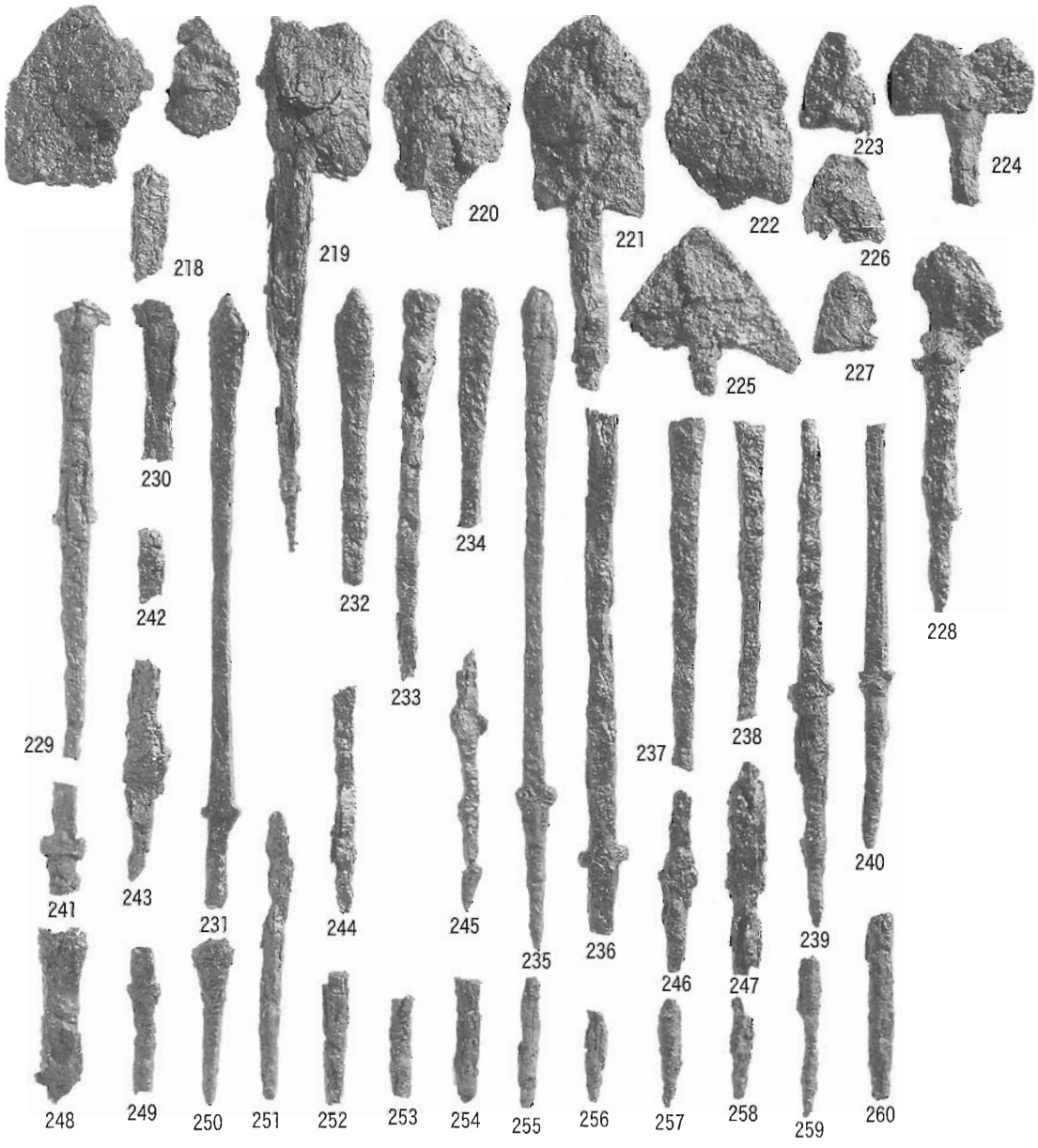
175

J-第159号墳出土遺物⑥

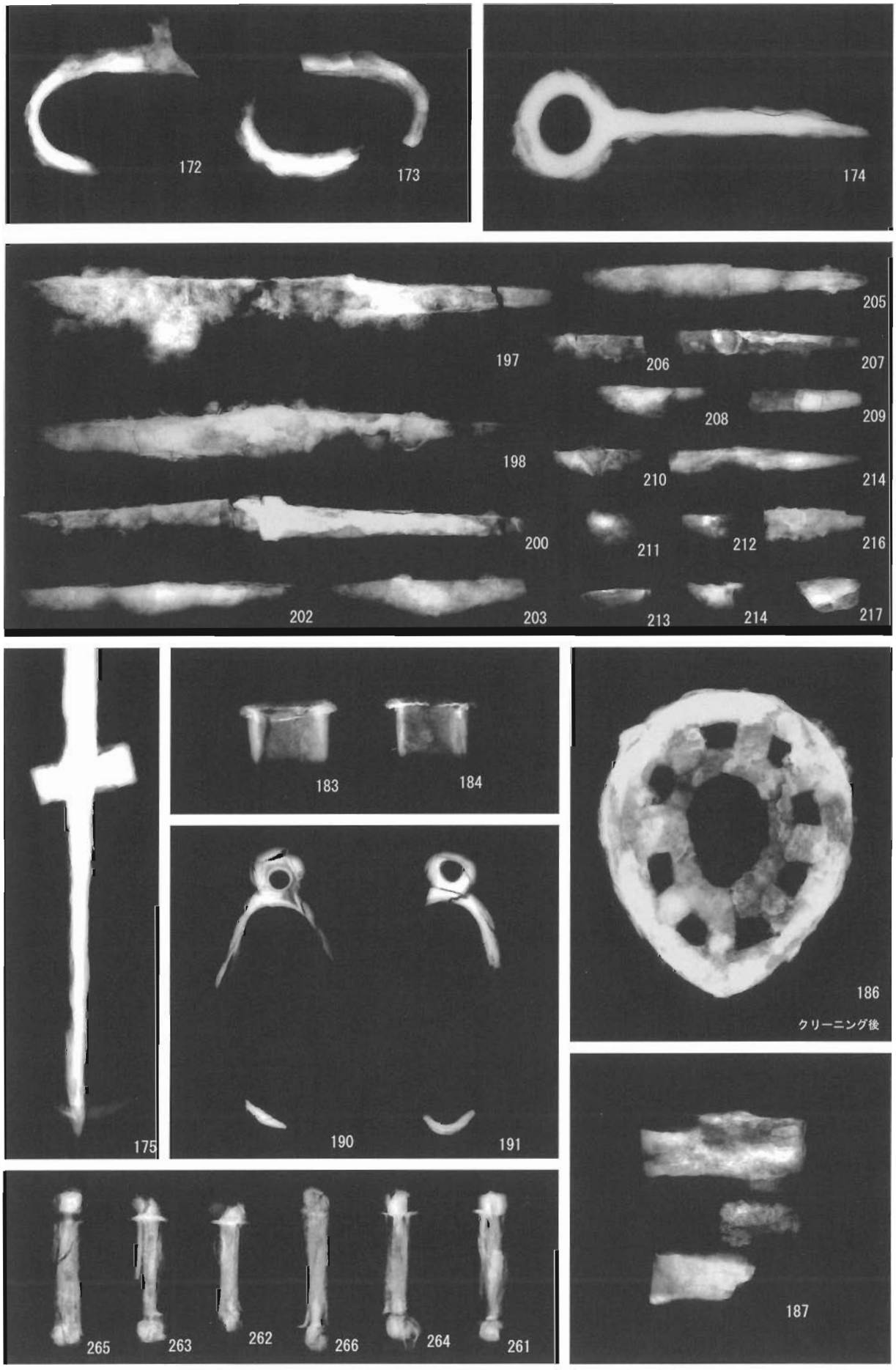
175・176


265
263
261
266
264
262

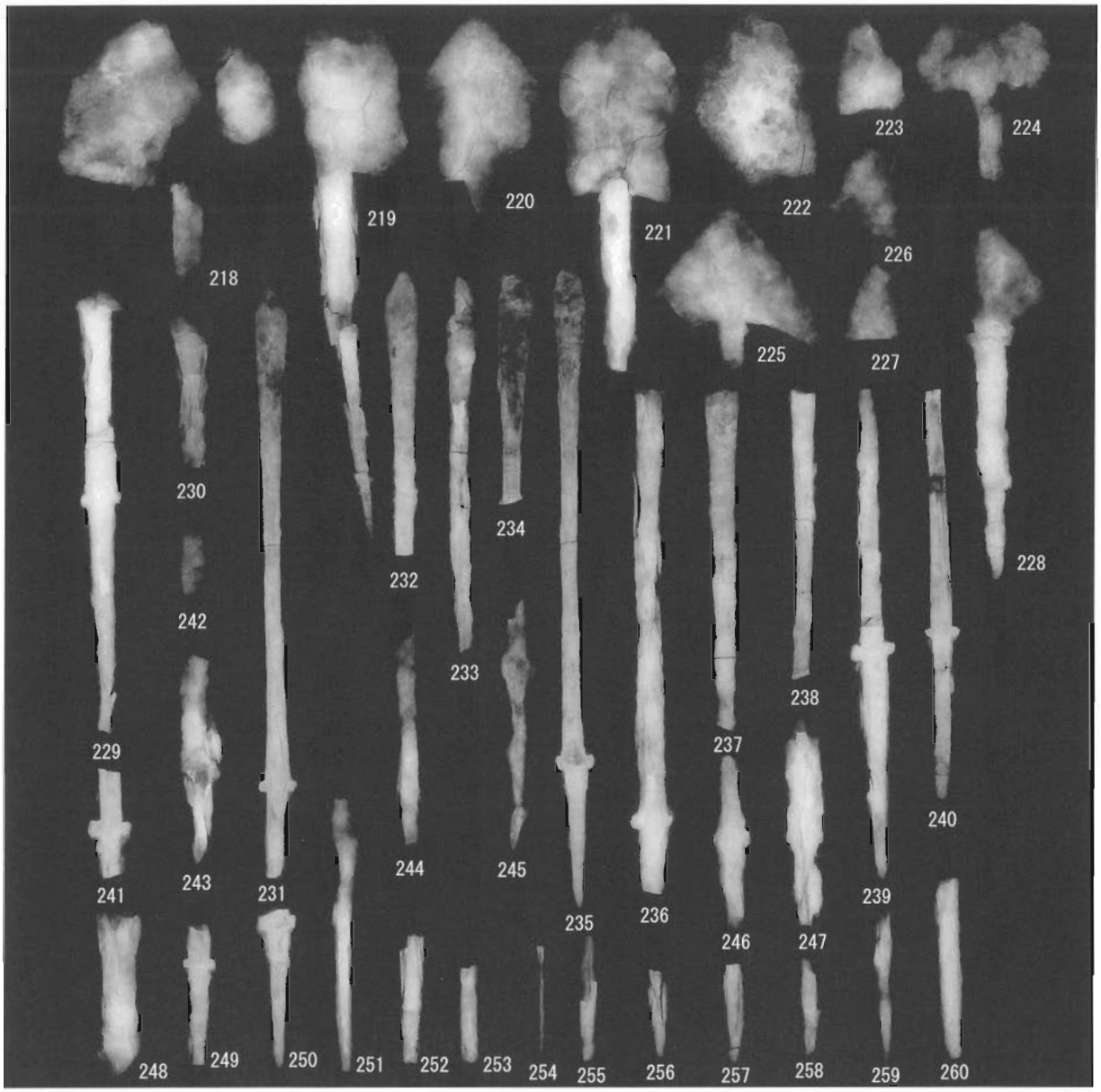

261
262
263
264
265
266


218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260

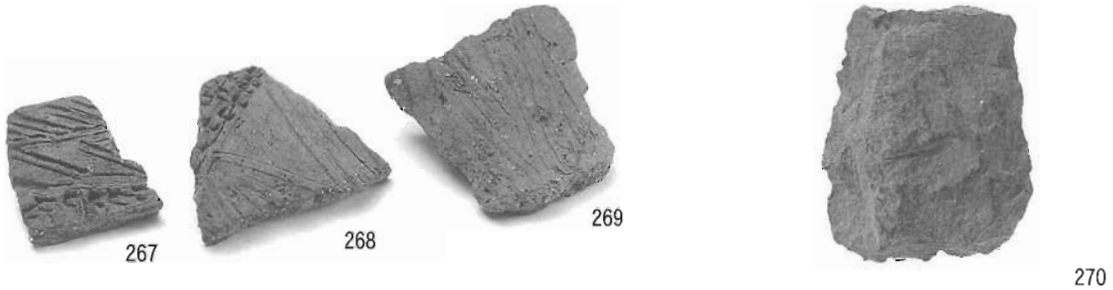
図版44　須津古墳群

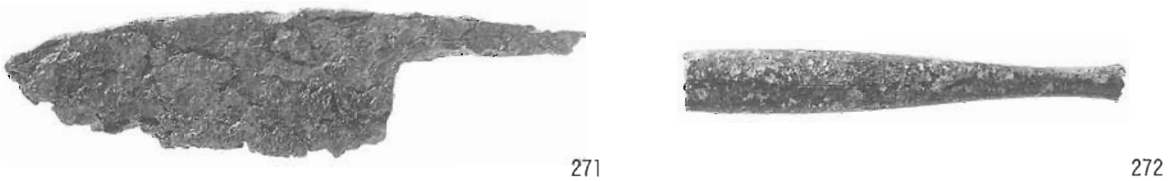


J-第159号墳出土遺物⑧



1．J-第159号墳出土遺物⑨

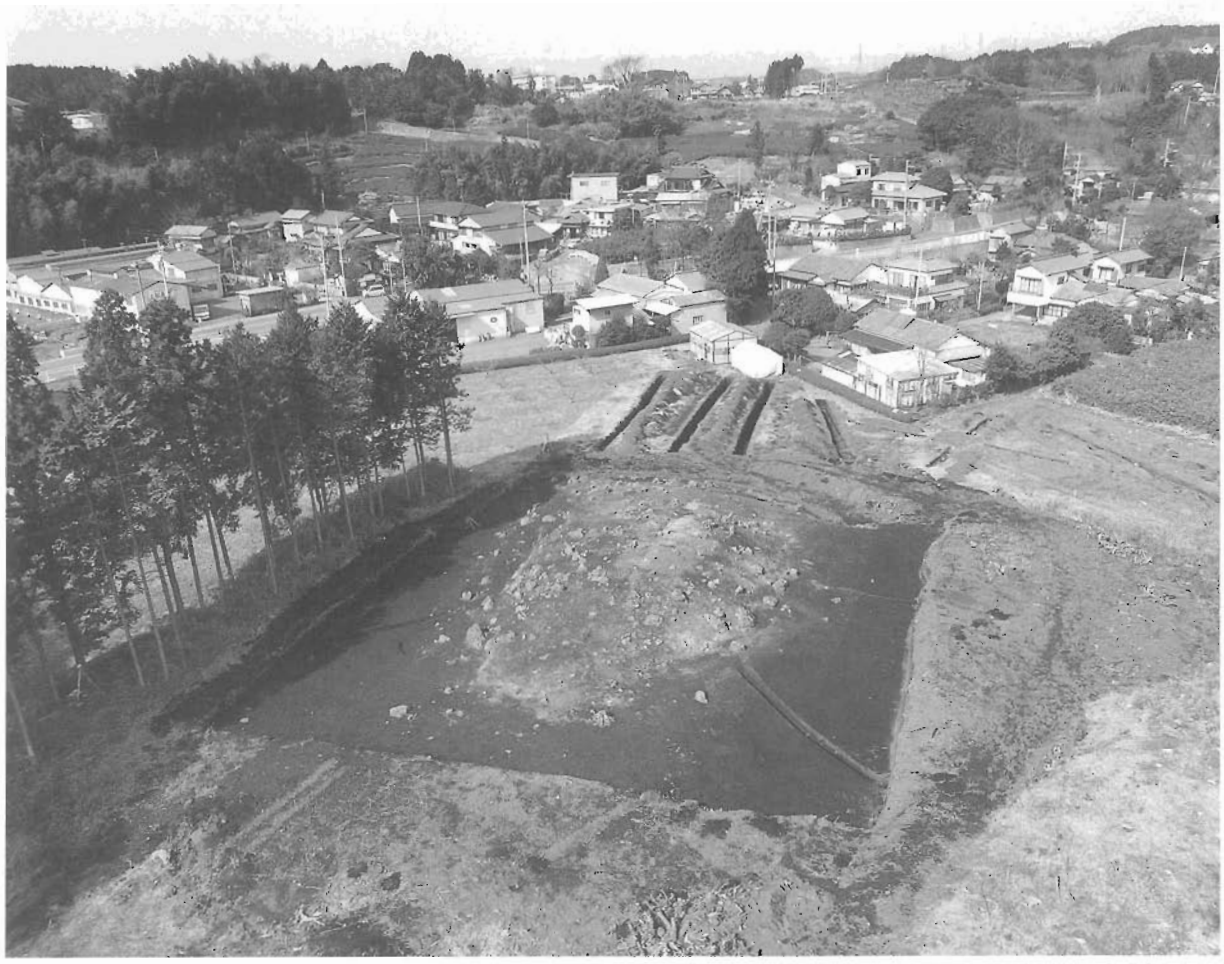




2．古墳以外の出土遺物

図版46　間門松沢第１号墳

１．調査前の古墳（北西から）



２．墳丘検出状況（調査区全景）（南東から）

１．墳丘検出状況（東から）

２．第１～３埋葬施設（北東から）

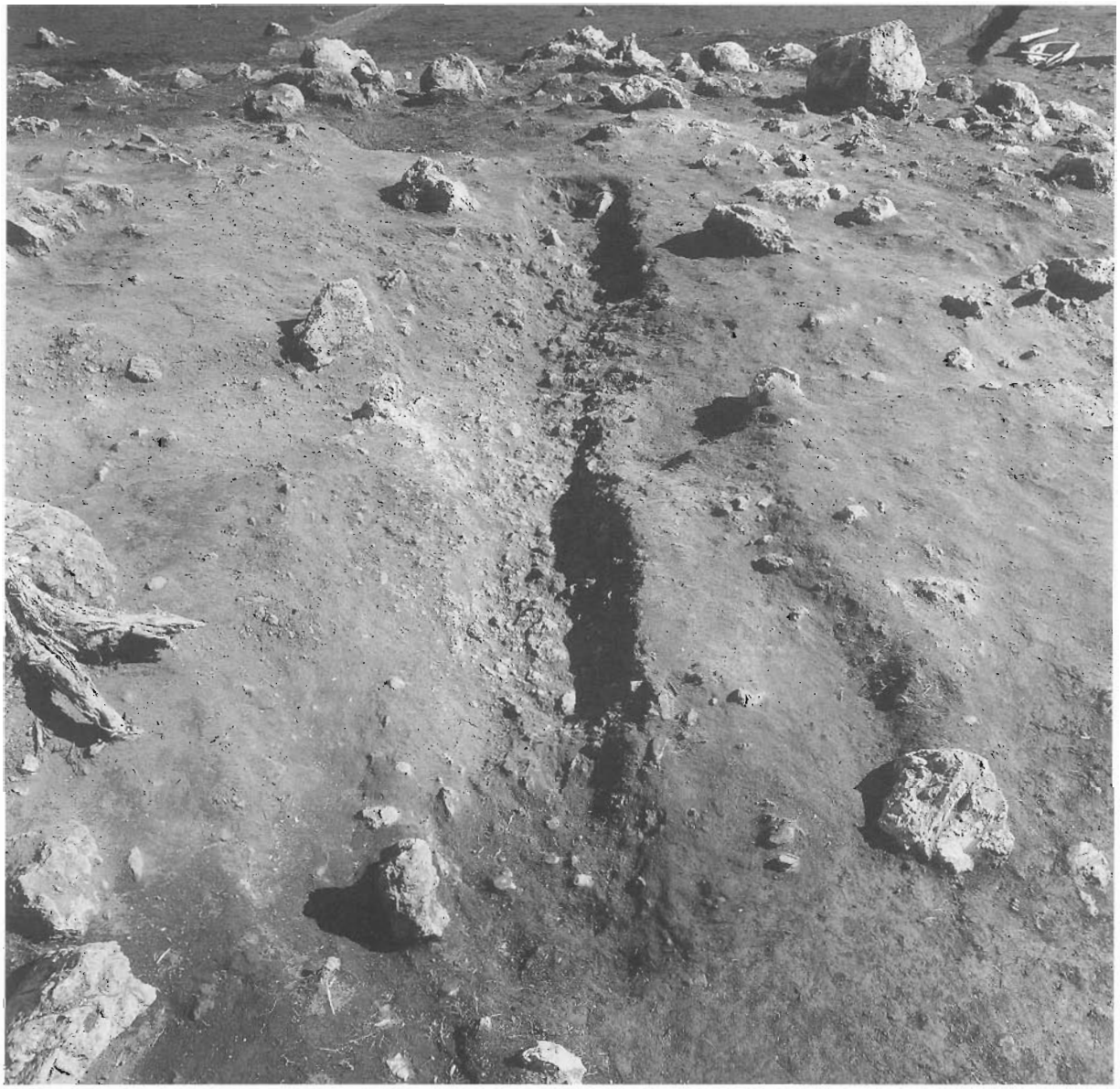
図版48　間門松沢第１号墳

１．第１埋葬施設（南西から）

２．第１埋葬施設の断面土層（南西から）

３．第２埋葬施設（南西から）

４．第２埋葬施設（北東から）



１．第３埋葬施設（南西から）

２．第３埋葬施設（東から）

３．第３埋葬施設　鉄剣・臼玉出土状況（北西から）

図版50　間門松沢第１号墳

１．第３埋葬施設（南西から）

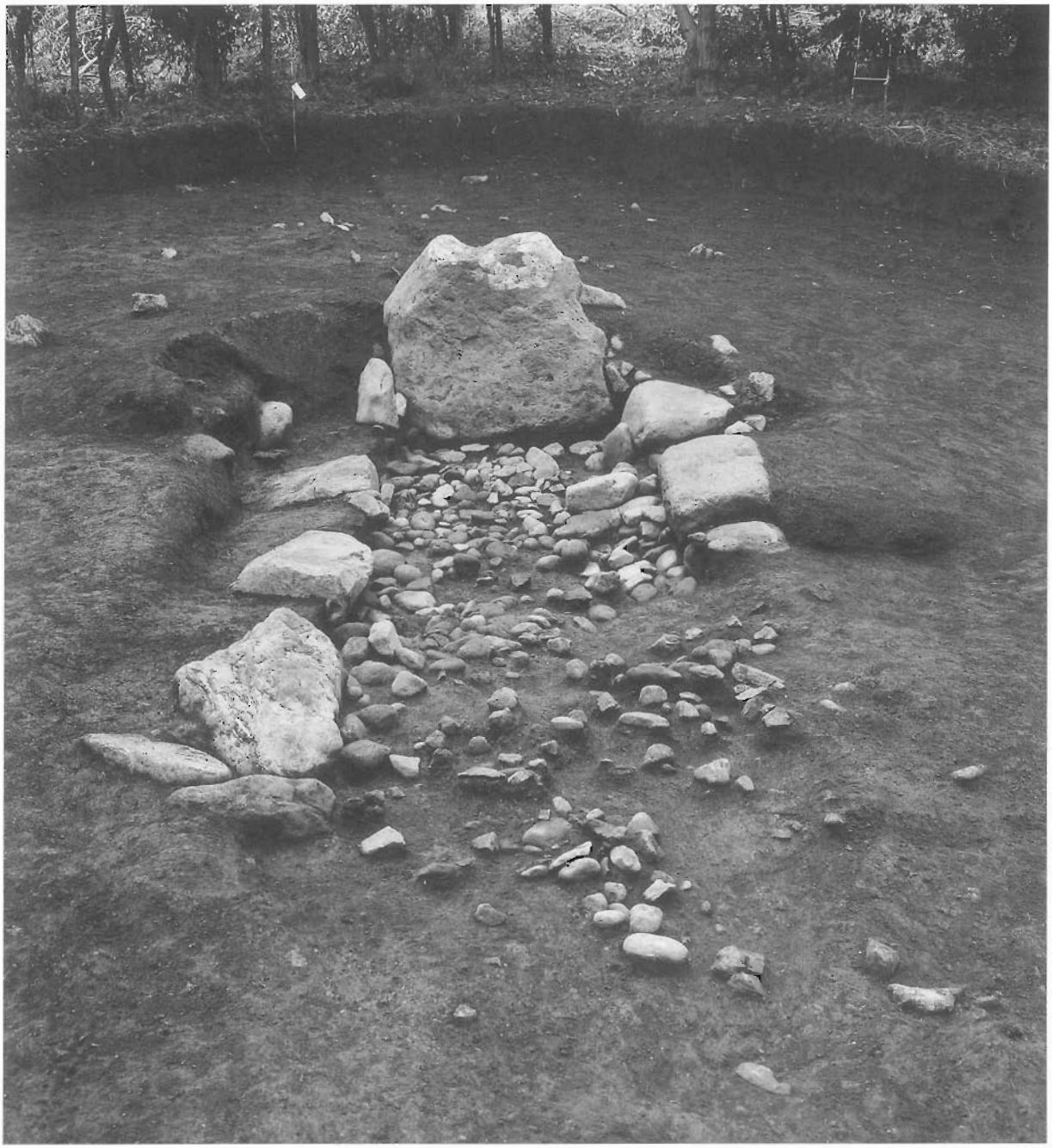
1～3

4

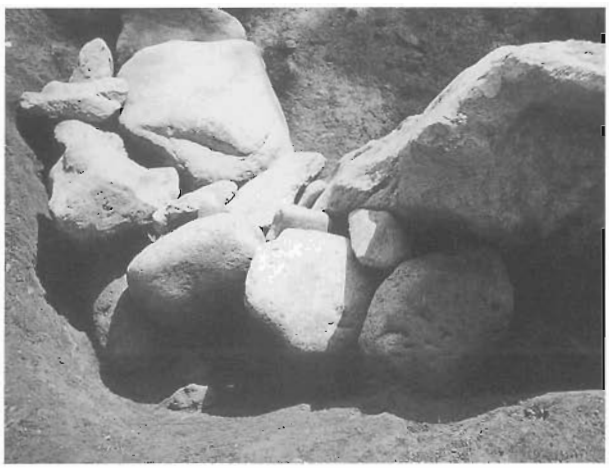
4

4

２．出土遺物



1．E-第６号墳　石室検出状況（南東から）



2．E-第６号墳　石室北隅の裏込め（北西から）

3．E-第６号墳　石室北隅の裏込め
（上部石材除去後，北東から）

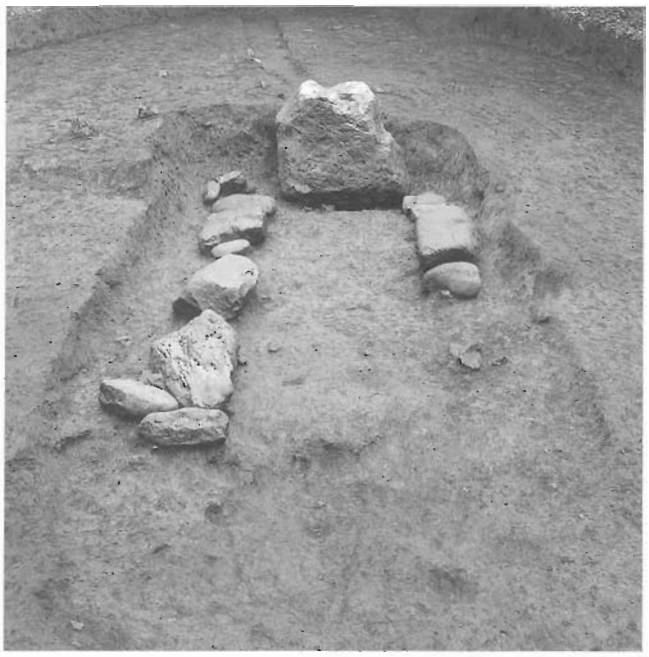
図版52　鵜無ヶ淵・間門古墳群

1．E-第6号墳　石室内遺物出土状況（南東から）

1

2．E-第6号墳　石室基底石および裏込め残存状況（南東から）

1



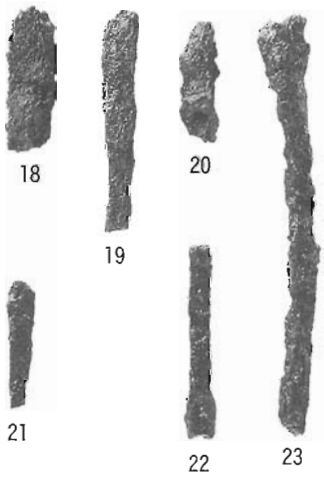
3．E-第6号墳　石室基底石（南東から）

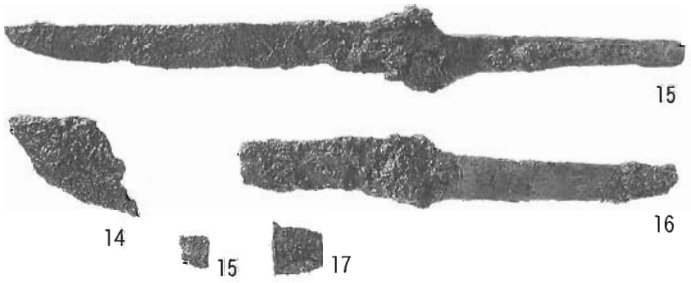
2

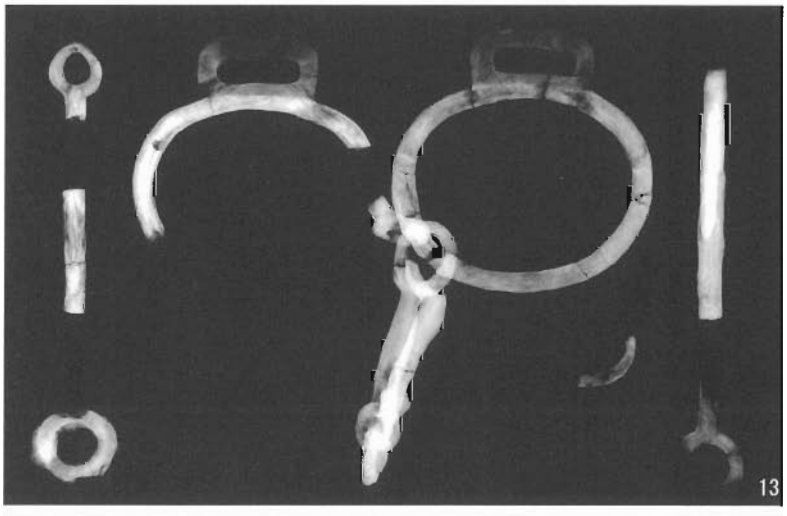
3

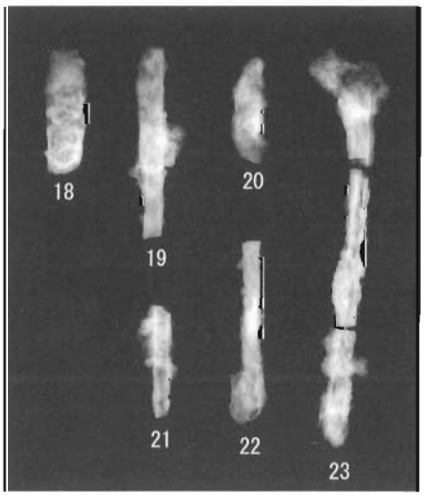
4～12

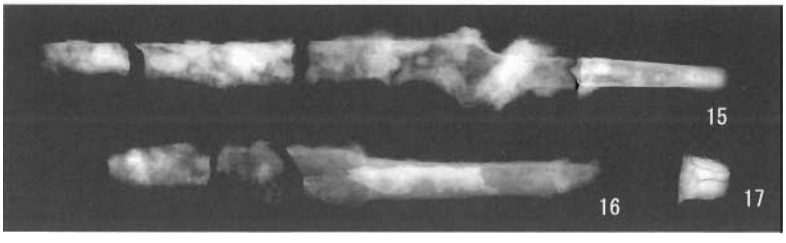
4．E-第6号墳出土遺物①





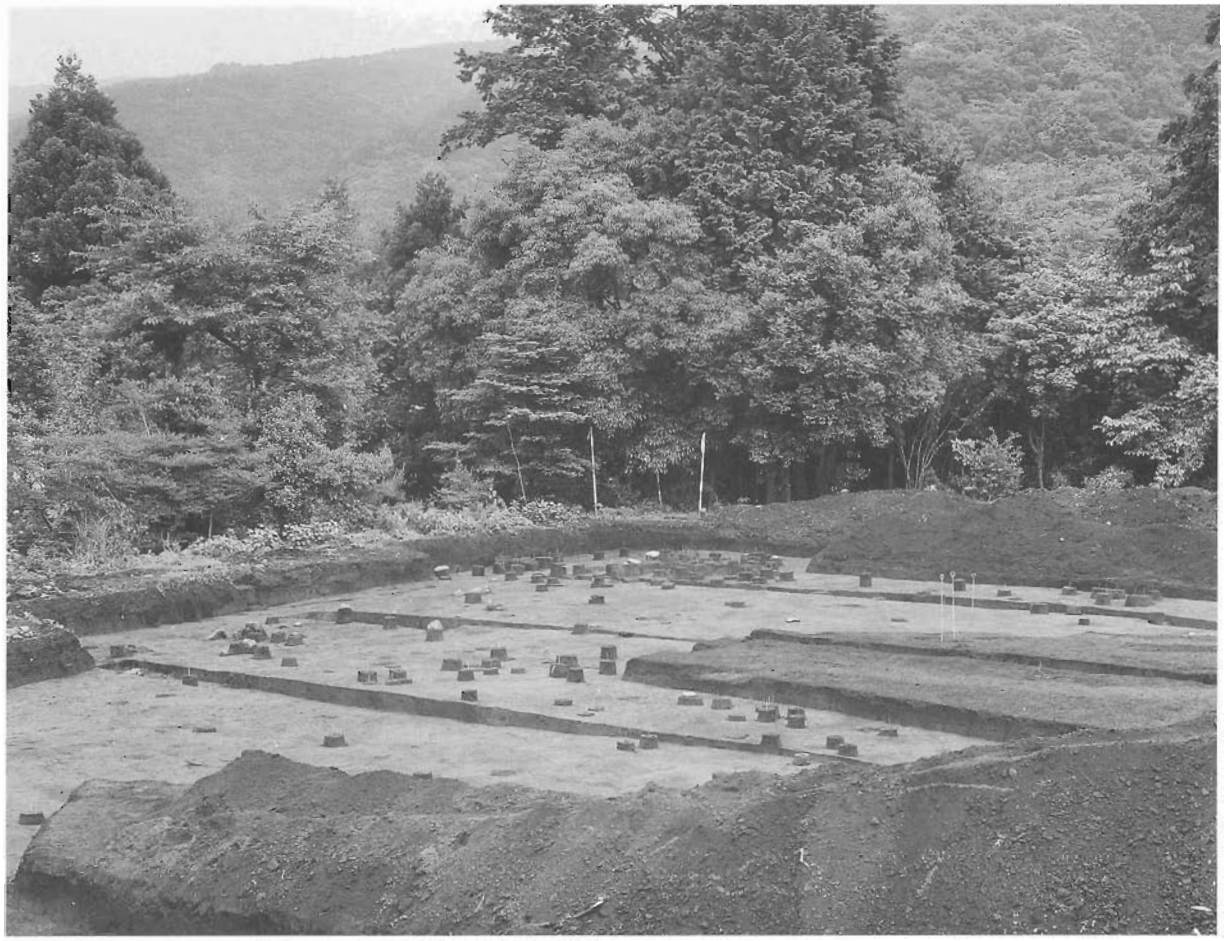






E-第6号墳出土遺物②

図版54　不動棚遺跡



1．調査区東半部（南西から）

2．調査区西半部（南から）

1．調査区西部（K28・29グリッド付近）遺物集中（南から）

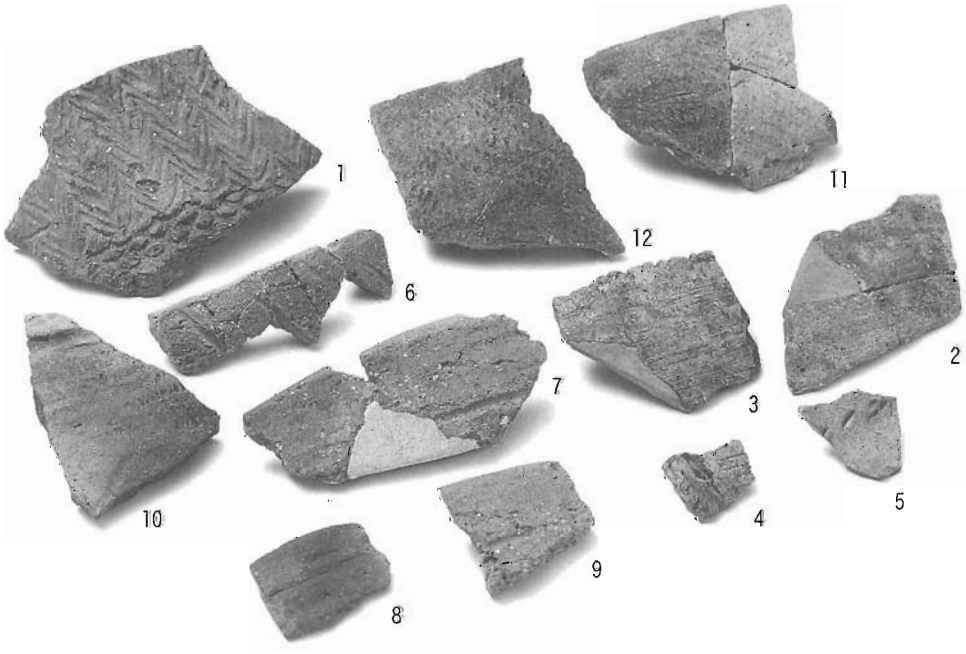
2．調査区東部（L31グリッド付近）遺物集中（南東から）

図版56　不動棚遺跡

1．礫群01（南から）

2．SK02・03（南から）

3．調査以前の発見遺物（個人所蔵）

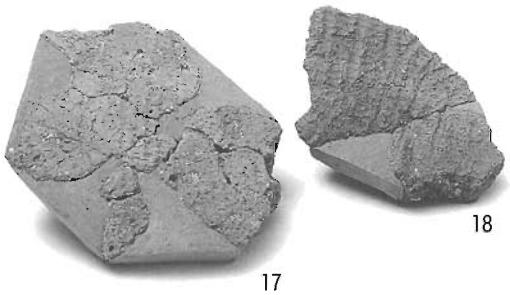


4．出土遺物①（縄文土器）

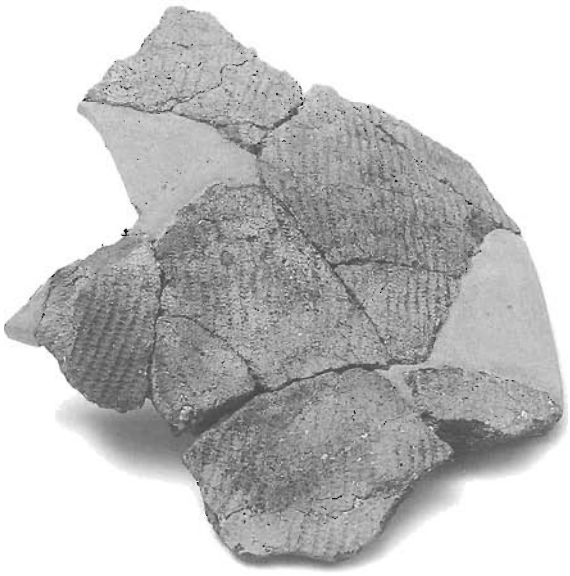
14

13

15



17　18



15

19

20　21

出土遺物②（縄文土器）

図版58　不動棚遺跡

22

24

25

28

23

29

23

23

出土遺物③（縄文土器）

26

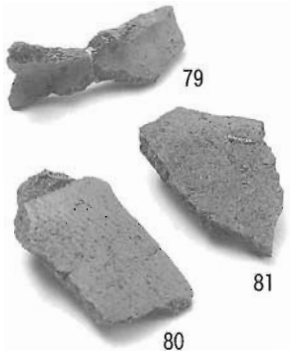
26

26

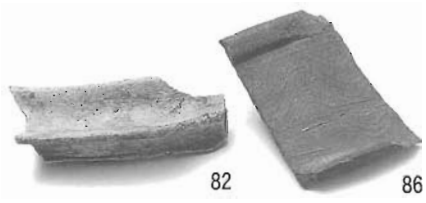
31

30

32


79
81
80

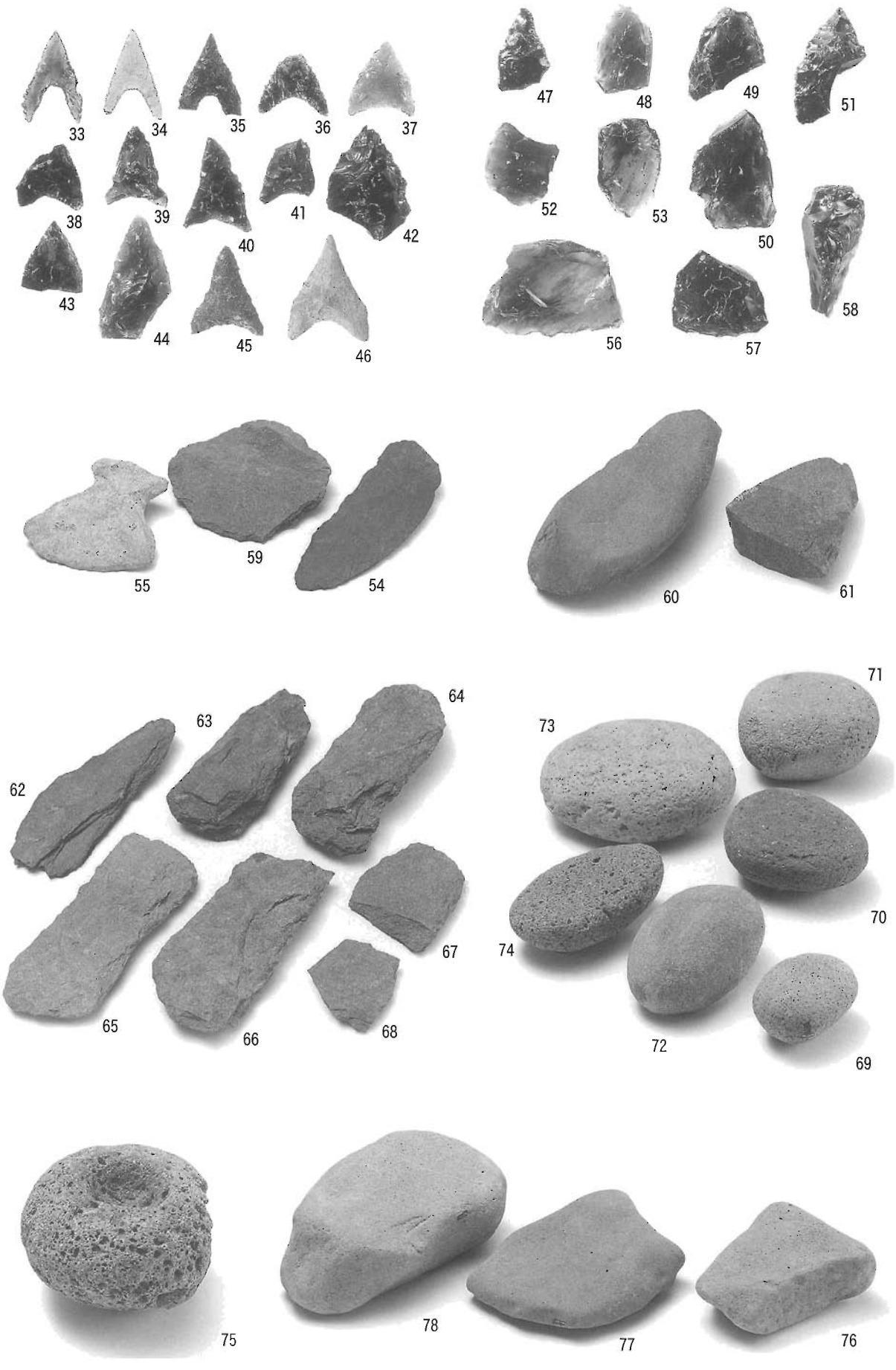
27


82
86

87
88
89

出土遺物④（縄文土器，古墳時代以降の遺物）

図版60　不動棚遺跡



出土遺物⑤（石器）

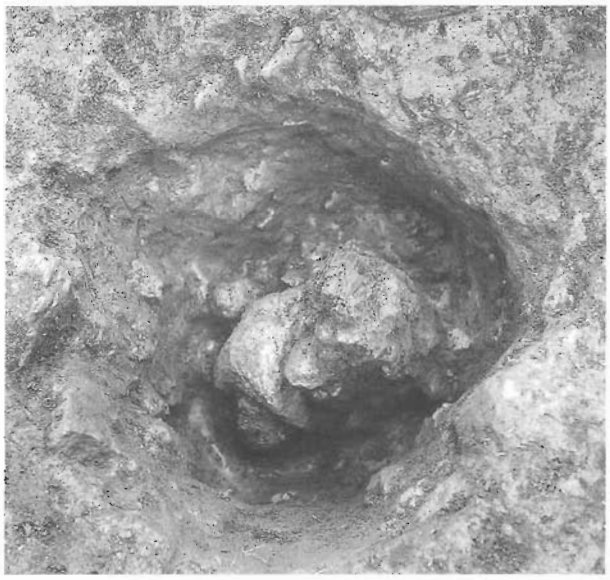
1．2区北西半部（南東から）

2．2区北西部（北東から）

図版62　松坂遺跡

1．縄文土器出土状況（遺物番号１の下半）

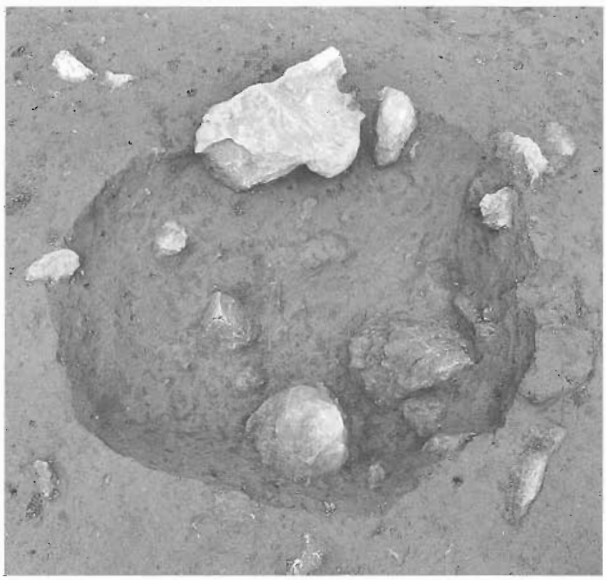
2．縄文土器出土状況（遺物番号８）



3．SK01炭化材検出状況（北から）

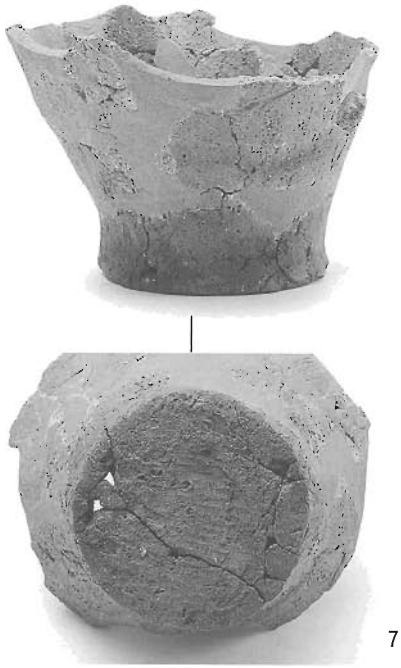
4．SK01（北から）

5．SK02炭化材・焼土検出状況（南から）



6．SK03（南から）

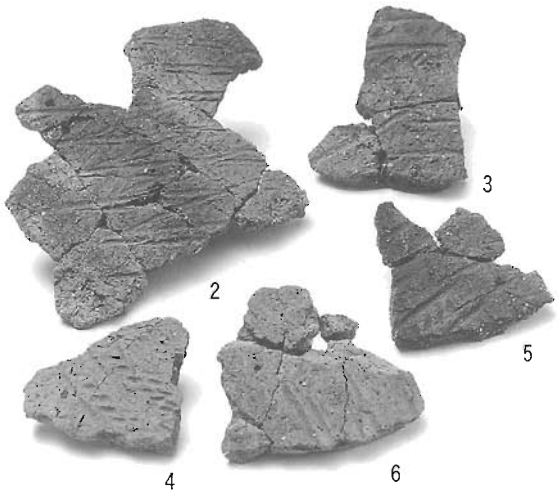
1



7

8

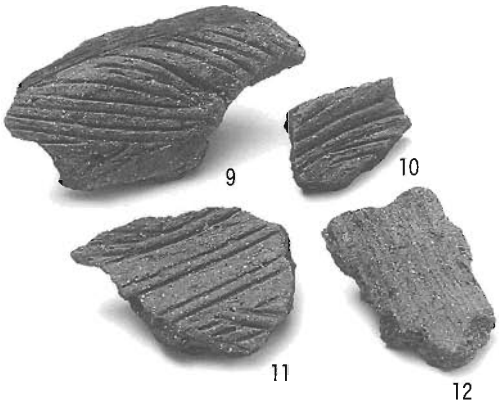
1

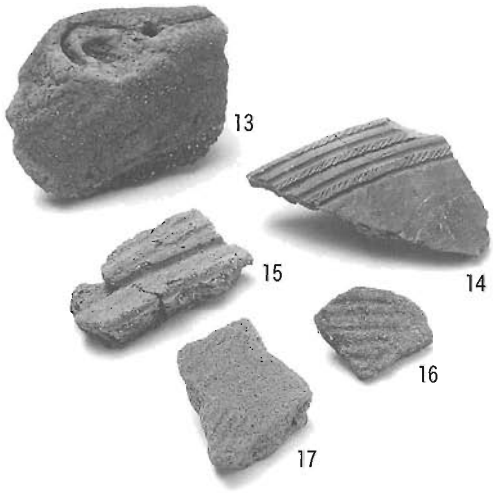


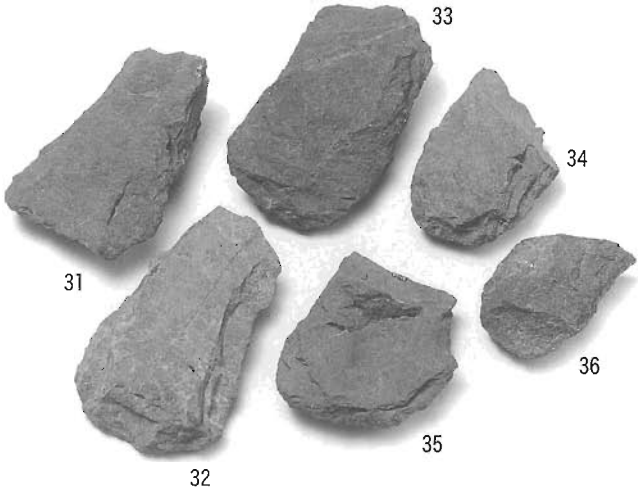
2 3 4 5 6

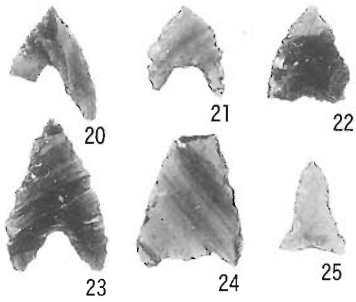
出土遺物①（縄文土器）

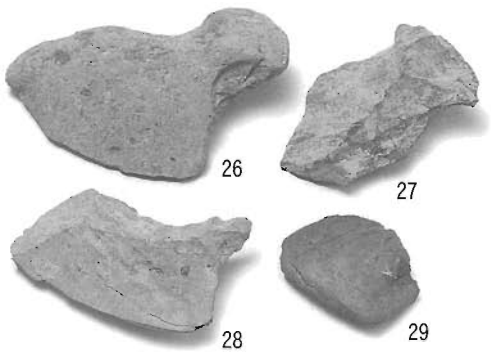
図版64　松坂遺跡

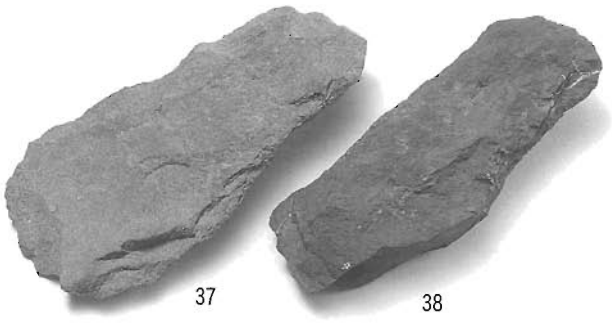












出土遺物②（縄文土器，石器）

報告書抄録

ふりがな	ふじさん・あしたかさんろくのこふんぐん
書名	富士山・愛鷹山麓の古墳群
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	富士市－4
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第231集
編著者名	大谷宏治・田村隆太郎（編集）　大谷宏治・柴田亮平・杉山和徳・片山一道（執筆）
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL　054-262-4261（代）
発行年月日	2010年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 （世界測地系）		発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
船津L-第171号墳	静岡県富士市船津字矢川上582	22210	43	35°09′35″	138°46′24″	19990216～19990331	300㎡	記録保存（第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査）
須津古墳群	同上 神谷字大塚 865-4・866ほか		35	35°10′22～24″	138°44′35～38″	19990201～19990502	900㎡	
間門松沢第1号墳	同上 間門字松沢 89-2・90ほか			35°11′01″	138°43′36″	20000111～20000223	1200㎡	
鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳	同上 間門字不動棚 203-6・203-17		28	35°11′06″	138°43′27″	20011016～20011120	256㎡	
不動棚遺跡	同上 間門字不動棚 95-1・9-1			35°11′03″	138°43′33″	20010417～20010629	510㎡	
松坂遺跡	同上 神戸字松坂 601-1・695ほか			35°11′19～23″	138°43′33″	20011010～20011211	410㎡	

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船津L-第171号墳	古墳	古墳終末期	横穴式石室をもつ古墳1基	鉄鏃・刀子	7世紀前半～中頃の横穴式石室をもつ古墳。無袖形石室である可能性が高い。
	散布地	縄文・古代・中世	なし	縄文土器・石器（石鏃・打製石斧）・駿東型甕・古瀬戸	縄文土器・石器は丘陵上の矢川上C遺跡と関連する遺物である。古瀬戸は瓶類の脚部片である。
須津古墳群	古墳	古墳後期～終末期	横穴式石室をもつ古墳3基	馬具（鉄製環状鏡板付轡・帯金具）・鉄刀・鉄鏃・弓両頭金具・刀装具・針・玉類（勾玉・管玉・丸玉・小玉）・耳環・須恵器	6世紀末～7世紀後半の段構造を有する無袖形横穴式石室。 J-第6号墳は箱形石棺を内蔵し、馬具・大刀・鉄鏃・須恵器のほか全国的に出土が少ない鉄針が出土した。J-第118号墳からは刀子・須恵器が出土した。J-第159号墳は深い墓壙をもつ横穴式石室で、開口部に礫積みの段構造を有し、馬具・大刀・鉄鏃など豊富な遺物が出土した。
	散布地	縄文・古墳・近世	なし	縄文土器・石器・須恵器・煙管・包丁	縄文土器は前期の諸磯式土器。

次頁へ続く。

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
間門松沢第１号墳	古墳	古墳中期前半	木棺直葬３基をもつ古墳１基	鉄剣・臼玉	溶岩ドームを利用した古墳で、楕円形墳あるいは長方形墳の可能性が高い。この場合は長辺（軸）が20～25m程度と想定できる。 木棺直葬が３基並列する。第３埋葬施設のみ遺物が出土した。鉄剣は刃関双孔を穿つ鉄剣（長剣）である。
鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室をもつ古墳１基	馬具（環状鏡板付轡）・鉄鏃・刀子・玉類（管玉・切子玉・丸玉）・須恵器	６世紀後半に築造された無袖形横穴式石室。大型矩形立聞環状鏡板付轡が出土。
不動棚遺跡	散布地	縄文、古墳～江戸	土坑・礫群	縄文土器・石器（石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨敲石）・土師器・常滑・志戸呂・羽釜・銅銭・鉄砲玉	縄文時代早期の押型文、木島式、縄文時代後期の堀之内式が出土。 中世の常滑四耳壺や羽釜、銅銭などとともに、中世の夷城をめぐる攻防で使用されたと想定される鉄砲玉などが出土。
松坂遺跡	散布地	縄文	土坑	縄文土器・石器（石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧）	縄文時代前期の諸磯式、後期の堀之内式、後期の加曽利Ｂ式土器が出土。
要　約	間門松沢第１号墳は、古墳時代前期末～中期前半の古墳の可能性が高い。自然地形を利用して築造した古墳で、長方形墳か楕円形墳の可能性が高いが、前方後円（方）墳の可能性も残る。墳頂に木棺直葬を３基並列させており、このうち第３埋葬施設から滑石製臼玉とともに刃関双孔を有する鉄剣が出土した。 船津L-第171号墳、須津J-第５・118・159号墳、鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳は東駿河に特徴的な無袖形石室を埋葬施設とする古墳で、須津J-第６・118・159号墳は段構造を有する横穴式石室（あるいはその可能性が高い）である。５基すべてが小規模の古墳であるが、鉄製馬具が３基で確認され、鉄鏃も多く出土する点や、針が副葬されることなど注目すべき特徴である。 不動棚遺跡、松坂遺跡は近接する遺跡で、両者とも今回の調査で新たに発見された縄文時代の遺跡である。遺構は土坑や礫群のみであったが、富士山麓では様相が不明確である縄文時代後期の遺跡であることが判明した点は重要である。両遺跡ともに多くが堀之内式土器であるが、松坂遺跡では加曽利Ｂ式の精製土器が出土するなど、注目すべき遺物が出土した。				

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集

富士山・愛鷹山麓の古墳群

第二東名No.39・45・52・53地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市－４

平成22年11月30日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL（054）262-4261（代）
FAX（054）262-4266

印　刷　所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL（0548）32-0851（代）